鳥取県文化財調査報告書　20

一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県鳥取市

松原古墳群Ⅱ
松原小奥遺跡

２０１０

鳥取県教育委員会

鳥取県文化財調査報告書　20

一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県鳥取市

松原古墳群Ⅱ
松原小奥遺跡

２０１０

鳥取県教育委員会

1　調査前調査地全景（南西から）

2　調査後調査地全景（北東から）

巻頭図版２

１　11・33 号墳　検出状況（南から）

２　南北尾根　完掘状況（南から）

1　33 号墳　埋葬施設 1（西から）

2　34 号墳　埋葬施設（南西から）

巻頭図版４

１号横穴墓（南西から）

1　1号横穴墓　遺物出土状況（北から）

2　1号横穴墓　出土遺物

巻頭図版６

1　11 号墳　墳丘断面（南東から）

2　11 号墳　墳丘断面（南西から）

3　26 号墳　墳丘断面（南東から）

4　26 号墳　墳丘断面（南西から）

1　15 号墳　墳丘断面（南から）

2　15 号墳　周溝内遺物出土状況（南から）

巻頭図版８

1　16 号墳　東側周溝内遺物出土状況（南から）

2　15 号墳　出土遺物

3　16 号墳　出土遺物

序

山陰自動車道は鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする、延長約 380 キロメートルの高速道路であり、国土交通省により整備が進められているところです。

鳥取県内の事業区間である「鳥取西道路」は、鳥取市本高から同市青谷町青谷を結ぶ延長 19.3 キロメートルの区間であり、その改築事業に伴う事前の発掘調査を平成 20 年度から当教育委員会が実施しています。平成 21 年度からは、財団法人鳥取県教育文化財団に現地での発掘作業や出土遺物等の整理作業、報告書作成を委託して調査を進めてきました。

このうち松原古墳群・松原小奥遺跡では、古墳時代前期から終末期にかけての古墳群や横穴墓、中世から近世かけての墓地などを発掘し、土器・陶磁器類や鉄製品など多彩な遺物が出土しました。本書はその発掘調査成果をまとめたもので、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

また、発掘調査成果は現地説明会のみならず、地元公民館や学校での講演会ならびに展示会の開催を通し、地元を中心として多くの方々に紹介してきました。このような取り組みは、先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することとして、現在に生きる私たちの重要な責務と考えております。

本書をまとめるに当たり、国土交通省鳥取河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御助言、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成 22 年 9 月

鳥取県教育委員会

教育長　　横　濵　純　一

例　　言

1　本書は、一般国道９号（鳥取西道路）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受け、平成 21 年度に実施した松原古墳群、松原小奥遺跡の発掘調査報告書である。

2　松原古墳群、松原小奥遺跡の所在地は、鳥取市松原字小奥、田ノモである。調査面積は松原古墳群 2,820 ㎡、松原小奥遺跡 1,100 ㎡である。
現地調査は平成 21 年６月に表土掘削に着手し、平成 21 年 12 月に終了した。遺物整理は、現地終了後引き続き３月末日まで行った。

3　本調査の略号は「松原古墳群 09」「松原小奥遺跡 09」である。

4　調査は財団法人鳥取県教育文化財団の中森、田中、後川が担当し、株式会社アコードの支援を受けて行った。なお、株式会社アコードの現場代理人は中本成一郎、支援調査員は島軒　満、西村匡広、松田重治（平成 21 年９月まで）、中村　毅（平成 21 年 10 月から）である。

5　遺跡の図面作成は、原則として株式会社アコードが担当し、財団法人鳥取県教育文化財団が補佐した。

6　遺跡の写真撮影は、株式会社アコードと財団法人鳥取県教育文化財団が行った。

7　遺物実測及び浄書は、財団法人鳥取県教育文化財団文化財主事と整理作業員が行った。

8　遺物の写真撮影は財団法人鳥取県教育文化財団の文化財主事が行った。

9　本書の執筆は、財団法人鳥取県教育文化財団の発掘調査監理者である中森、田中、後川で分担し、中森、後川が編集した。

10　本調査に係る図面、写真や出土した遺物については、鳥取県埋蔵文化財センターで保管しており、広く利用されることを希望する。

11　当遺跡から出土した人骨については、取り上げから整理、報告（本書第Ⅵ章第３節）までを鳥取大学医学部　井上貴央教授にお願いした。

12　松原小奥遺跡の近世墓内出土土壌の分析については株式会社古環境研究所に依頼した。

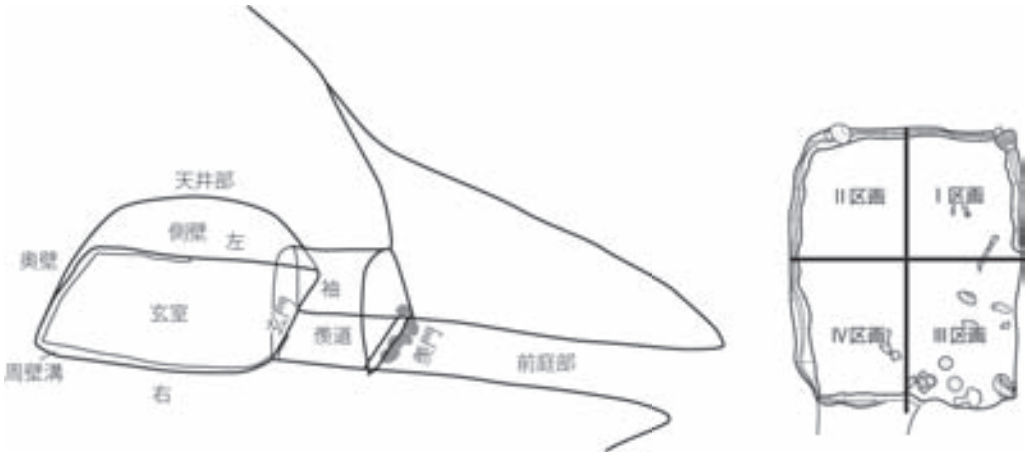
13　鉄製品のレントゲン写真については鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得た。

14　現地調査及び報告書の作成に当たっては、下記の方々、機関から御指導、御助言、御支援いただいた。記して感謝いたします（順不同、敬称略）。

赤木三郎（鳥取大学名誉教授）、伊藤康晴（鳥取市歴史博物館）、市本芳三（大阪府立近つ飛鳥博物館）、井上貴央、江田真毅、岡田美里、藤井理恵（以上鳥取大学医学部）、加川　崇（鳥取市教育委員会）、佐伯純也（米子市教育文化事業団）、田中照久（福井県陶芸館）、高田健一（鳥取大学地域学部）、谷口恭子、山田真宏（鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財センター）、西尾克己（島根県古代文化センター）、東方仁史（鳥取県立博物館）、日野　宏（天理大学附属天理参考館）星見清晴（湖山地区公民館）、森村健一（堺市泉北すえむら資料館）、山根政義（前松原地区長）
松原地区、湖南地区公民館、湖南地区公民館大郷分館、湖南学園

凡　　例

1．本遺跡および本書では、国土座標第Ⅴ系により地区割り設定を行っている。
　平面図では方位が座標北を示し、図中にはＸとＹ座標軸がｍ単位で表記される。
2．標高は、海抜標高で示した。
3．本報告書に使用した地図は国土地理院発行地形図（1/25,000）、鳥取市作成都市計画図（1/5,000）を縮小、加筆して使用した。
4．古墳番号は鳥取市の遺跡台帳を踏襲する。
　埋葬施設の番号については、前後関係や位置を勘案して付加した。
　古墳以外の遺構については番号を連番とし、その後に種別を付記した。
5．本書で使用した土壌色は、小山正忠、竹原秀雄編著 2008 年『新版標準土色帖』を使用して命名した。
6．遺構平面図についての縮尺は統一していない。このなかで松原小奥遺跡検出の中近世墓については、人骨等遺物の出土状況を 1/20、遺物等が出土していない遺構は 1/30 を基本としている。
7．遺跡の略称は次のとおりとした。
　松原古墳群　「松古」　　松原小奥遺跡　「松小」
8．遺物には、すべて遺跡略称及び取上番号を記載している。
9．遺物は松原古墳群、松原小奥遺跡のそれぞれで通し番号を付し、挿図と写真図版に共通する。
　縮尺は土器、埴輪等は１/４、中世以降の土器、陶磁器は１/３、木、金属製品は１/２、玉類は１/１で示した。
　土器の断面については、土器、陶磁器、土師器は白塗り、須恵器は黒塗りとした。また、赤彩の範囲は薄い網掛けで表現した。
10. 本書の中で、研究の現状から勘案して不適当な表現がみられた場合はすべて報告者の責に帰するが、他意のあるものではない点御容赦願いたい。
11. 横穴墓の各部名称は左下図のとおりとする。玄室内の調査は玄室を四分割し、右下図のとおり行なった。



目　次

序
例言・凡例
目次・挿図目次・表目次・図版目次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過
第１節　調査に至る経緯……（中森）・１
第２節　調査の経過……（中森）・２
第３節　調査体制……（中森）・９

第Ⅱ章　位置と環境
第１節　位置と地理的環境……（後川）・10
第２節　歴史的環境……（田中）・11

第Ⅲ章　調査の方法
第１節　現地調査……（中森）・15
第２節　整理作業……（中森）・18

第Ⅳ章　松原古墳群の調査
第１節　遺跡の概要と基本層序……（後川）・19
１）　遺跡の立地と既往調査 …… 19
２）　平成 21 年度調査の概要 …… 21
３）　調査地内の基本層序 …… 21
第２節　古墳時代以前の調査……（後川）・24
１）　概要 …… 24
２）　検出した遺構 …… 26
第３節　古墳時代の調査……（後川）・30
１）　古墳、横穴墓の立地と構成 …… 30
２）　南北尾根の調査 …… 30
３）　東西尾根の調査 …… 51
４）　南西斜面の調査 …… 58
第４節　中世以降の調査……（後川）・76
１）　概要 …… 76
２）　第１-２面 …… 76
３）　第１-１面 …… 81

第Ⅴ章　松原小奥遺跡の発掘調査

第１節　遺跡の概要……（田中）・ 89
１）　遺跡の立地と概要 …… 89
２）　調査地内の基本層序 …… 90
第２節　古墳時代の調査
１）　概要 ……（田中）・ 93
２）　古墳の調査 ……（田中、後川）・ 94
３）　遺構外出土遺物 ……（田中）・106
第３節　中世以降の調査
１）　概要 ……（中森）・109
２）　調査の方法 ……（中森）・112
３）　Ⅰ期の調査 ……（中森）・112
４）　Ⅱ期の調査 ……（中森）・120
５）　時期不明遺構の調査 ……（中森、田中）・162

第Ⅵ章　総　括

第１節　松原古墳群の形成過程……（後川）・204
第２節　松原小奥遺跡における円筒埴輪の様相……（田中）・221
第３節　松原小奥遺跡、松原１号横穴墓から出土した人骨について
……井上貴央、江田真毅、藤井理恵・231
第４節　松原小奥遺跡中近世墓の様相とその位置づけ……（中森）・268

第Ⅶ章　結　語

……（中森、田中、後川）・280

挿図目次

図 1　鳥取西道路路線図と調査地の関係…… 1
図 2　調査地詳細位置…… 3
図 3　調査地位置…… 3
図 4　松原 35 号墳養生範囲…… 5
図 5　現地説明会資料…… 7
図 6　遺跡周辺地形…… 10
図 7　周辺の遺跡…… 12
図 8　調査区割り模式…… 15
図 9　松原古墳群分布…… 19
図 10　調査前地形測量平面…… 20
図 11　トレンチ配置…… 21
図 12　6 トレンチ断面…… 22
図 13　19・21 トレンチ断面…… 23
図 14　第 3 面平面…… 25
図 15　第 3 面 11 号墳周辺部平面…… 26
図 16　65 土坑平、断面…… 27
図 17　第 3 面溝、ピット断面…… 28
図 18　64 ピット、65 土坑出土遺物…… 29
図 19　古墳、横穴墓平面…… 31・32
図 20　33 号墳平面…… 33
図 21　33 号墳断面…… 34
図 22　33 号墳埋葬施設 1 平、断、立面…… 35
図 23　33 号墳埋葬施設 1 出土遺物…… 36
図 24　33 号墳埋葬施設 2 平、断、立面…… 37
図 25　33 号墳埋葬施設 2 出土遺物…… 37
図 26　34 号墳平面…… 38
図 27　34 号墳断面…… 39
図 28　34 号墳埋葬施設平、断、立面…… 40
図 29　34 号墳遺物出土状況平面、出土遺物…… 41
図 30　34 号墳墳丘盛土範囲平面…… 41
図 31　35 号墳平面…… 42
図 32　35 号墳断面…… 43
図 33　35 号墳周溝内遺物出土状況および出土遺物…… 44
図 34　11 号墳平面…… 45
図 35　11 号墳断面…… 46
図 36　11 号墳墳丘断面…… 47
図 37　11 号墳一次、二次墳丘盛土平、断面…… 48
図 38　11 号墳埋葬施設平、断、立面…… 49
図 39　11 号墳埋葬施設出土遺物…… 50
図 40　26 号墳平面…… 51
図 41　26 号墳断面…… 52
図 42　26 号墳墳丘断面…… 53
図 43　26 号墳一次、二次墳丘盛土平、断面…… 54
図 44　26 号墳埋葬施設平、断、立面…… 55
図 45　26 号墳出土遺物…… 55
図 46　34・36 段平面、38 号墳平、断面…… 57
図 47　34・36 段断面…… 58
図 48　1 号横穴墓、99 墳丘平面…… 59
図 49　1 号横穴墓平、断面…… 60
図 50　1 号横穴墓玄室～前庭部断面…… 61
図 51　1 号横穴墓玄室断面（南北）…… 62
図 52　1 号横穴墓玄室～羨道平、
立面（機能廃絶面）…… 63・64
図 53　1 号横穴墓の加工痕拓本…… 66
図 54　1 号横穴墓玄室～羨道平、立面（加工面）…… 67・68
図 55　1 号横穴墓の加工方向模式…… 69
図 56　1 号横穴墓出土遺物…… 70
図 57　99 墳丘断面…… 71
図 58　99 墳丘出土遺物…… 72
図 59　100 平坦部断面…… 73
図 60　100 平坦部周辺ピット断面…… 74
図 61　100 平坦部周辺 1 - 1 、 2 - 1 層出土遺物…… 74
図 62　第 2 - 1 面平面…… 75
図 63　第 1 - 2 面平面…… 77
図 64　第 1 - 2 面平面（南北尾根）…… 78
図 65　第 1 - 2 面 17 平坦部、 8 溝断面…… 79
図 66　第 1 - 2 面道断面…… 80
図 67　第 1 - 2 面 7 ・13 土坑平、断面…… 81
図 68　1 - 1 、 1 - 2 層出土遺物…… 81
図 69　第 1 - 1 面平面…… 82
図 70　第 1 - 1 面平面（南北尾根）…… 83
図 71　第 1 - 1 面 1 ・ 2 道、10・12 トレンチ断面…… 84
図 72　表土出土遺物…… 85
図 73　調査前地形測量平面…… 89
図 74　土層断面…… 91・92
図 75　古墳配置…… 93
図 76　15 号墳平、断面…… 95
図 77　15 号墳周溝内遺物出土状況…… 96
図 78　15 号墳出土遺物…… 96
図 79　36 号墳平、断面…… 97
図 80　36 号墳断面…… 98
図 81　36 号墳周溝内遺物出土状況…… 99

図 82　36 号墳出土遺物……100
図 83　37 号墳平、断面……101
図 84　16 号墳平、断面、および周溝内
　　遺物出土状況……103
図 85　16 号墳出土遺物……104
図 86　遺構外出土遺物（土器、埴輪）……105
図 87　遺構外出土遺物（石器）……106
図 88　Ⅲ期遺構配置……110
図 89　Ⅰ期遺構配置……111
図 90　49 墓、80 墳丘平、断面……113
図 91　49 墓および出土遺物……114
図 92　72・73 墓および出土遺物……116
図 93　184・225・230 墓および 184 墓出土遺物…117
図 94　191・192 道平、断面……118
図 95　Ⅰ期遺構外出土遺物（中世陶磁器、銭貨）……119
図 96　Ⅰ期遺構外出土遺物（石造物）……119
図 97　Ⅰ期遺構外出土遺物
　　（近世国産陶磁器、土師器）……120
図 98　Ⅱ期遺構配置 1……121
図 99　Ⅱ期遺構配置 2……122
図 100　9・131 墓……123
図 101　16 墓および出土遺物……124
図 102　14・166 墓および出土遺物……125
図 103　43・48 墓および 43 墓出土遺物……127
図 104　33・34・45 墓および出土遺物……129
図 105　6・40 墓および 40 墓出土遺物……130
図 106　42 墓および出土遺物……131
図 107　29 墓および出土遺物……132
図 108　22・32 墓および出土遺物……133
図 109　35・38・39 墓および 38 墓出土遺物……134
図 110　21・190 墓……135
図 111　190 墓出土遺物……136
図 112　41・114 墓および出土遺物……137
図 113　10・15 墓および 15 墓出土遺物……138
図 114　10 墓出土遺物……139
図 115　101 墓および出土遺物……140
図 116　140・181・188 墓および 181 墓出土遺物……141
図 117　54・193 墓……142
図 118　75・106 墓……143
図 119　76・105 墓および出土遺物……144
図 120　64・187 墓および出土遺物……145
図 121　92 墓および出土遺物……146
図 122　128・177・178・185・194 墓……147
図 123　138・173・174・180・226・227 墓および
　　180 墓出土遺物……149
図 124　82・95・130 墓および出土遺物……150
図 125　57 墓および出土遺物……151
図 126　157・179・201 墓および出土遺物……153
図 127　96・98・126・229・232 ～ 234 墓および
　　96 墓出土遺物……154
図 128　51・66・196 墓および 66 墓出土遺物……155
図 129　61・67・70・71・168 墓……156
図 130　61・70・171・182 墓出土遺物……158
図 131　147・171・182・183・199 墓……159
図 132　Ⅱ期遺構外出土遺物 1……160
図 133　Ⅱ期遺構外出土遺物 2……161
図 134　時期不明遺構配置 1……163
図 135　時期不明遺構配置 2……164
図 136　12・117・164・165 墓……165
図 137　8・11・18・116・222 墓……166
図 138　4・5・24 墓……167
図 139　26・221 墓および出土遺物……169
図 140　7・27・78 墓……170
図 141　37・135 墓および 135 墓出土遺物……171
図 142　46・89・132 墓……173
図 143　47 墓および出土遺物……174
図 144　30・31・84・155・209・223・224 墓……175
図 145　25・100 墓および 25 墓出土遺物……176
図 146　102・125 墓……177
図 147　74・81 墓……178
図 148　53・186 墓……179
図 149　60・62・86・141・143 墓……180
図 150　160 ～ 162・172 墓……182
図 151　124・142 墓……183
図 152　127・136・137・156・198・202 墓……184
図 153　134・148・154・158・197・213・
　　228 墓……185
図 154　50・97・159・231 墓……186
図 155　68・88・93・94・99 墓……188
図 156　55・56・107・112・208・214・215 墓…190
図 157　63・145・146・163・207・
　　235 ～ 238 墓……191
図 158　169・170・204・205・212・
　　240 墓、206 ピット……192
図 159　平坦部 1 および 118・120・121 土坑……194
図 160　平坦部 2 および 217・218 土坑……195
図 161　150・151 道……196
図 162　平成 20・21 年度調査松原古墳群平面……204

図 163　松原古墳群の立地する地質と地形……206
図 164　松原古墳群の変遷……208
図 165　尾根稜線と傾斜区分……208
図 166　松原古墳群墳丘断面……209
図 167　21・27 号墳墳丘拡張平面……210
図 168　墳丘拡張の古墳平面……211
図 169　湖山池周辺の墳墓、古墳群平面……216
図 170　湖山池周辺の墳墓、古墳群築造模式……217
図 171　円筒埴輪属性分類模式……221
図 172　鳥取平野の古墳時代後期円筒埴輪出土古墳…225
図 173　鳥取平野の古墳時代後期円筒埴輪……227
図 174　半仰臥屈位の模式図（側面観）……231
図 175　仰臥立膝位の模式図（側面観）……231
図 176　半腹臥正座位の模式図（側面観）……231
図 177　立膝座位の模式図（側面観）……232
図 178　松原小奥遺跡近世墓の埋葬方位……267

本文写真目次

写真 1　現地説明会風景……　8
写真 2　現地説明会風景……　8
写真 3　発掘調査作業風景……　17
写真 4　測量作業風景……　17
写真 5　整理作業風景……　18
写真 6　遺物写真撮影風景……　18
写真 7　1 号横穴墓の加工痕……　66
写真 8　16 墓甕（71）検出状況……124
写真 9　75 墓人骨等出土状況（北西から）……143
写真 10　人骨取上げ作業風景……158
写真 11　突帯貼付後のタテハケ（6 突帯下側）……223
写真 12　突帯貼付後のタテハケ（6 突帯上側）……223
写真 13　突帯貼付後のタテハケ（8 突帯下側）……223
写真 14　底部側からのハケ調整（16）……223

表　目　次

表 1　遺物観察表（土器）……　86
表 2　遺物観察表（鉄製品）……　87
表 3　遺物観察表（石製品ほか）……　87
表 4　松原古墳群古墳、横穴墓一覧……　88
表 5　遺物観察表（古墳時代土器、埴輪）……107・108
表 6　遺物観察表（石器）……108
表 7　遺物観察表（土器、陶磁器）……198
表 8　遺物観察表（金属、木、石製品）……201
表 9　松原古墳群変遷……207
表 10　鳥取平野の古墳時代後期円筒埴輪比較……228
表 11　松原小奥遺跡中近世墓墓壙変遷……271
表 12　湖山池周辺中世墳墓、周溝墓一覧……273
表 13　松原小奥遺跡中近世墓属性……277 ～ 279

図版目次

巻頭図版 1　1　調査前調査地全景（南西から）
　　2　調査後調査地全景（北東から）
巻頭図版 2　1　11・33 号墳検出状況（南から）
　　2　南北尾根完掘状況（南から）
巻頭図版 3　1　33 号墳埋葬施設 1（西から）
　　2　34 号墳埋葬施設（南西から）
巻頭図版 4　　1 号横穴墓（南西から）
巻頭図版 5　1　1 号横穴墓遺物出土状況（北から）
　　2　1 号横穴墓出土遺物
巻頭図版 6　1　11 号墳墳丘断面（南東から）
　　2　11 号墳墳丘断面（南西から）
　　3　26 号墳墳丘断面（南東から）
　　4　26 号墳墳丘断面（南西から）
巻頭図版 7　1　15 号墳墳丘断面（南から）
　　2　15 号墳周溝内遺物出土状況（南から）
巻頭図版 8　1　16 号墳東側周溝内遺物出土状況(南から)
　　2　15 号墳出土遺物
　　3　16 号墳出土遺物

図版１　1　調査前調査地全景（西から）
2　調査前調査地全景（南西から）
図版２　1　南北尾根第３面全景（北から）
2　東西尾根第３面全景（西から）
図版３　1　11 号墳調査前状況（南から）
2　26 号墳調査前状況（南東から）
図版４　1　第３面 11 号墳周辺部検出状況（南東から）
2　65 土坑遺物出土状況（北東から）
3　64 ピット、65 土坑出土被熱粘土塊
図版５　1　33 号墳検出状況（南西から）
2　33 号墳南側周溝断面（南西から）
図版６　1　33 号墳埋葬施設１検出状況（北西から）
2　33 号墳埋葬施設１断面（西から）
3　33 号墳埋葬施設１完掘状況（西から）
4　33 号墳埋葬施設１出土遺物
図版７　1　33 号墳埋葬施設２検出状況（南西から）
2　33 号墳埋葬施設２断面（南西から）
3　ガラス製小玉出土状況（北西から）
4　33 号墳埋葬施設２完掘状況（南西から）
5　33 号墳埋葬施設２出土遺物
図版８　1　34 号墳検出状況（南東から）
2　34 号墳埋葬施設検出状況（南西から）
図版９　1　34 号墳周溝断面（南西から）
2　34 号墳墳丘断面（南東から）
3　34 号墳埋葬施設断面（南東から）
4　34 号墳埋葬施設断面（南西から）
5　34 号墳埋葬施設検出状況（南東から）
6　34 号墳埋葬施設遺物出土状況（南西から）
7　34 号墳埋葬施設完掘状況（南西から）
8　34 号墳埋葬施設出土遺物
図版 10　1　35 号墳検出状況（南東から）
2　35 号墳周溝断面（南西から）
3　35 号墳墳丘断面（南西から）
4　35 号墳遺物出土状況（北東から）
5　35 号墳出土遺物
図版 11　1　11 号墳検出状況（南から）
2　11 号墳埋葬施設検出状況（北から）
図版 12　1　11 号墳二次墳丘調査状況（南西から）
2　11 号墳埋葬施設鉄鏃出土状況（南西から）
3　11 号墳埋葬施設鉄鏃出土状況（南東から）
4　11 号墳墳丘断面（南東から）
5　11 号墳一次墳丘調査状況（南東から）
6　11 号墳埋葬施設断面（南西から）
7　11 号墳一次墳丘調査状況（南東から）
8　11 号墳墳丘盛土完掘状況（南東から）
図版 13　1　11 号墳埋葬施設土器検出状況（南西から）
2　11 号墳埋葬施設土器出土状況（南東から）
3　11 号墳埋葬施設鉄剣出土状況（南西から）
4　11 号墳埋葬施設鉄剣出土状況（南東から）
5　11 号墳埋葬施設出土遺物
図版 14　1　26 号墳検出状況（南東から）
2　26 号墳埋葬施設検出状況（南西から）
図版 15　1　26 号墳周溝検出状況（南東から）
2　26 号墳一次墳丘盛土調査状況（南から）
3　26 号墳一次墳丘盛土調査状況（南から）
4　26 号墳埋葬施設断面（南から）
5　26 号墳埋葬施設土器出土状況（南西から）
6　26 号墳完掘状況（北東から）
7　26 号墳埋葬施設、表土、１- １層出土遺物
図版 16　1　38 号墳周溝検出状況　（北から）
2　38 号墳周溝断面（南東から）
3　38 号墳完掘状況（北から）
図版 17　1　南西斜面全景（南西から）
2　１号横穴墓検出状況（南西から）
図版 18　1　１号横穴墓前庭部断面ｃ（南西から）
2　１号横穴墓前庭部断面ｄ（南西から）
3　１号横穴墓閉塞石検出状況（南西から）
4　１号横穴墓閉塞石検出状況（南西から）
5　１号横穴墓羨門検出状況（南西から）
6　１号横穴墓羨門の溝断面（南西から）
7　１号横穴墓玄室断面（北から）
8　１号横穴墓玄室断面（南西から）
図版 19　1　１号横穴墓玄室内遺物出土状況（北から）
2　１号横穴墓玄室内遺物出土状況（北西から）
3　１号横穴墓玄室内遺物出土状況（西から）
4　１号横穴墓玄室内遺物出土状況（北西から）
5　１号横穴墓玄室内遺物出土状況（南西から）
図版 20　1　１号横穴墓羨門検出状況（南西から）
2　１号横穴墓羨門検出状況（南西から）
3　１号横穴墓羨門検出状況（南西から）
4　１号横穴墓羨門検出状況（南東から）
5　１号横穴墓羨道底面検出状況（南西から）
6　１号横穴墓羨道右壁検出状況（東から）
7　１号横穴墓羨道左壁検出状況（北から）
図版 21　1　１号横穴墓玄室検出状況（北から）
2　１号横穴墓左壁北東側検出状況（北西から）
3　１号横穴墓左壁南東側検出状況（北西から）
4　１号横穴墓左袖検出状況（北東から）

5　1号横穴墓右壁南西側検出状況（南東から）
6　1号横穴墓周壁溝検出状況（南から）
7　1号横穴墓玄門検出状況（北東から）
図版 22　1号横穴墓出土遺物
図版 23　1　99 墳丘検出状況（南東から）
2　100 平坦部検出状況（北東から）
3　100 平坦部断面（南西から）
4　99 墳丘出土遺物
図版 24　1　南北尾根第２- １面検出状況（南から）
2　第１- ２面 17 平坦部検出状況（南西から）
3　７土坑検出状況（南西から）
4　７土坑断面（南東から）
5　13 土坑検出状況（南から）
6　13 土坑断面（北東から）
7　10 トレンチ断面（南から）
8　12 トレンチ断面（西から）
図版 25　1　南北尾根第１－１面全景（南から）
2　１道検出状況（北西から）
3　２道検出状況（北から）
4　１道断面（南東から）
5　２道断面（南東から）
図版 26　1　１－１・２層出土遺物
2　２－１層出土遺物
3　表土出土遺物
図版 27　1　調査前調査地全景（南から）
2　調査後調査地全景（西から）
図版 28　1　15 号墳全景（南西から）
2　15 号墳墳丘南北断面（西から）
図版 29　1　36 号墳周溝内遺物出土状況（南から）
2　36 号墳出土遺物
図版 30　1　37 号墳完掘状況（東から）
2　16 号墳北側周溝内遺物出土状況（東から）
3　16 号墳東側周溝内遺物出土状況（西から）
図版 31　1　16 号墳出土遺物
2　遺構外出土遺物（須恵器、土師器）
3　遺構外出土遺物（石器）
4　遺構外出土遺物（埴輪、土製品）
図版 32　1　80 墳丘上層検出状況（西から）
2　80 墳丘および 49 墓検出状況（北西から）
図版 33　1　49 墓礫出土状況（南東から）
2　49 墓銭貨出土状況（南から）
3　49 墓出土遺物
図版 34　1　72 墓遺物出土状況（南から）
2　72 墓出土遺物
3　73 墓遺物出土状況（南から）
4　73 墓出土遺物
5　184 墓出土遺物
6　184 墓遺物出土状況（南から）
図版 35　1　Ⅰ期遺構外出土遺物（中世土器、陶磁器）
2　Ⅰ期遺構外出土遺物（銭貨）
3　Ⅰ期遺構外出土遺物（近世陶磁器）
4　Ⅰ期遺構外出土遺物（石造物）
図版 36　1　14 墓人骨等出土状況（南から）
2　16 墓甕内人骨等出土状況（南から）
3　16 墓甕内遺物出土状況（南から）
4　14・16・40・43・45 墓出土遺物
5　16 墓出土甕
図版 37　1　43 墓人骨等出土状況（西から）
2　45 墓人骨等出土状況（南から）
3　166 墓人骨等出土状況（南から）
図版 38　1　42 墓人骨等出土状況（北から）
2　42 墓出土遺物
3　29 墓出土遺物
4　32 墓人骨等出土状況（東から）
5　32 墓出土遺物
6　41 墓人骨等出土状況（東から）
7　41・114 墓出土遺物
図版 39　1　190 墓人骨等出土状況（北から）
2　190 墓出土遺物
3　38 墓出土甕
4　38 墓甕出土状況（西から）
図版 40　1　10 墓人骨等出土状況（北から）
2　10 墓出土遺物
3　180 墓出土遺物
4　15 墓人骨等出土状況（北から）
5　15 墓出土遺物
6　101 墓人骨等出土状況（南から）
7　101 墓出土遺物
図版 41　1　105 墓人骨等出土状況（東から）
2　76・105 墓出土遺物
3　181 墓出土遺物
4　92 墓人骨等出土状況（西から）
5　92 墓出土遺物
6　187 墓人骨等出土状況（北から）
7　187 墓出土遺物
図版 42　1　82・130 墓出土遺物
2　82 墓遺物出土状況（南から）
3　95 墓出土遺物

4　95 墓遺物出土状況（南から）
5　57 墓出土遺物
6　57 墓甕出土状況（北から）
7　57 墓甕内人骨等出土状況（北から）
図版 43　1　96 墓人骨等出土状況（南西から）
2　96 墓出土遺物
3　179 墓人骨等出土状況（北西から）
4　179 墓出土遺物
5　201 墓人骨等出土状況（北から）
6　157・201 墓出土遺物
図版 44　1　66 墓人骨等出土状況（西から）
2　66 墓出土遺物
3　70 墓人骨等出土状況（東から）
4　171・182 墓出土遺物
5　61・70 墓出土遺物
6　遺構内出土遺物
図版 45　1　Ⅱ期遺構外出土遺物（甕）
2　Ⅱ期遺構外出土遺物（瓦）
3　Ⅱ期遺構外出土遺物（土器、陶磁器）
図版 46　1　24 墓人骨等出土状況（南から）
2　26 墓人骨等出土状況（北西から）
3　26・221 墓出土遺物
4　135 墓出土遺物
図版 47　1　25 墓出土遺物
2　47 墓出土遺物
3　160 ～ 162・177 墓人骨等出土状況（北から）
図版 48　1　調査地東部墓検出状況（西から）
2　平坦部 1 完掘状況（西から）
3　1・2 f 区礫検出状況（西から）
図版 49　1　調査地西部墓完掘状況（東から）
2　1 d 区墓完掘状況（東から）
3　1 e 区墓完掘状況（東から）
図版 50　1　松原小奥遺跡完掘状況（西から）
2　調査後調査地全景（南から）

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第1節　調査に至る経緯

松原古墳群と松原小奥遺跡は、一般国道９号（鳥取西道路）改築工事に伴って発掘調査を実施した遺跡である。

山陰地方では、観光、物流などの地域活性化をめざした幹線道路ネットワークの形成、交通渋滞の解消および緩和、災害時の緊急輸送路確保等を目的とし、中国横断自動車道路姫路鳥取線や山陰自動車道等の国土開発幹線道路の整備が進められている。鳥取市本高と鳥取市青谷町青谷を結ぶ全長19.3kmの鳥取西道路もその一環として、山陰自動車道の一部となる事業である。

鳥取西道路の計画地内には多くの遺跡が存在している。建設に先立って国土交通省、鳥取県、鳥取市により埋蔵文化財の取扱いについて協議がもたれ、まず、計画地内に存在する遺跡の状況を把握する必要性が確認された。これを受け、平成17年度からは、計画地内の踏査による分布調査や鳥取市教育委員会による範囲確認調査が逐次行われている。

松原地区丘陵部の道路計画地内でも、事前の踏査等により古墳群が確認されており、計画地内の古墳分布範囲および基数を確認するため、平成19・20年度には鳥取市教育委員会が文化庁の国庫補助事業として範囲確認調査を行った。

その結果、事業地内には大小11基の古墳が存在することが明らかとなり（註１）、この取扱いについては再度、国土交通省、鳥取県、鳥取市で慎重に協議が重ねられた。そして平成20年度には、調査対象となる丘陵部のうち西側の約3,970㎡を発掘調査（記録保存）することとなり、文化財保護法第94条による手続きを踏まえて、鳥取県埋蔵文化財センターが国土交通省鳥取河川国道事務所

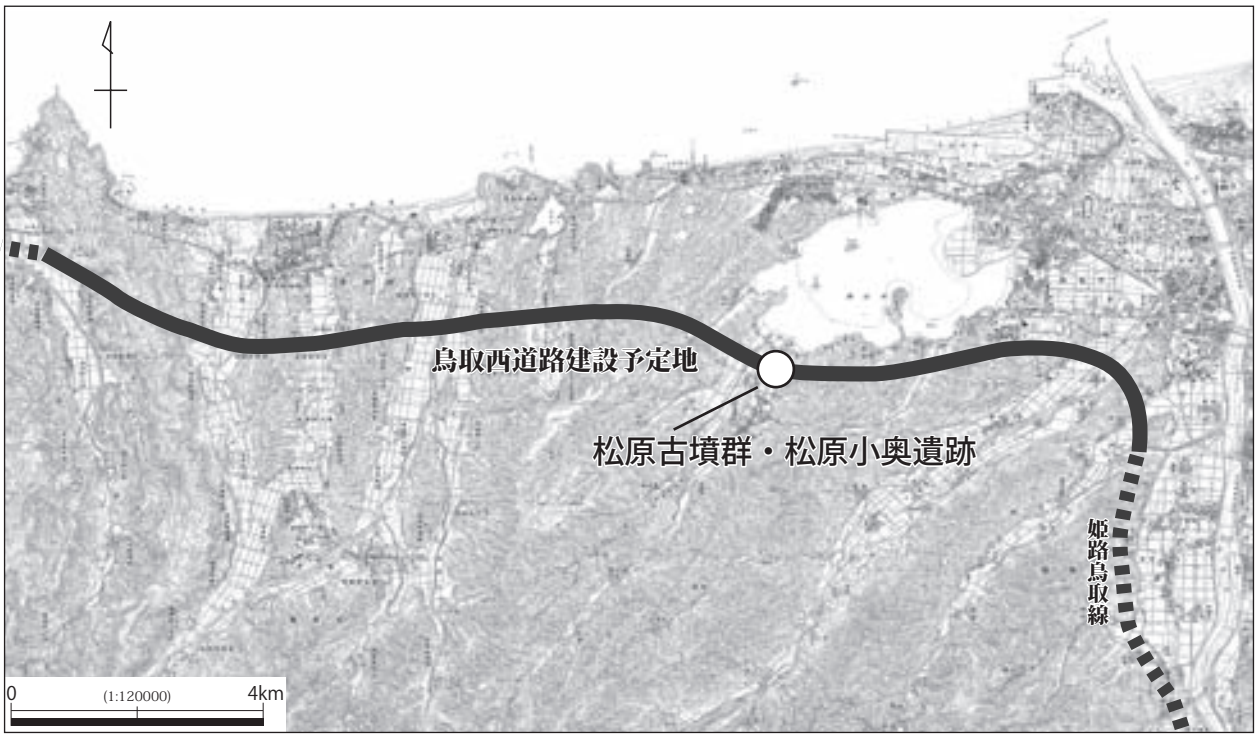


図１　鳥取西道路路線図と調査地の関係

の委託を受け、発掘調査を実施している。

平成 21 年度には、20 年度調査地東側に隣接する丘陵上部、および北側谷部を挟んだ松原小奥遺跡について調査することとなった。21 年度からは、鳥取西道路に係る記録保存のための発掘調査については、鳥取県教育委員会が国土交通省鳥取河川国道事務所の委託を受けたうえで、現場での発掘作業、出土遺物の整理作業、および報告書の作成を財団法人鳥取県教育文化財団調査室に再委託して調査を行うこととなった。さらに、発掘作業、調査記録作業等について、株式会社アコードに発掘調査支援を受けた。

第２節　調査の経過

平成 20 年度の調査

先述のとおり、松原古墳群では平成20年度、鳥取県埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われた。調査前には、東西方向の丘陵上約 3,970 ㎡に、古墳８基および斜面部の平坦地があると想定されていた。しかし、調査の結果、古墳 10 基、竪穴住居１棟、中近世墓 12 基などが検出された。古墳では、古墳時代後期の円墳と方墳が確認され、そのうち、松原 28 号墳では、横穴式石室が検出されている。これらの成果については、平成 22 年３月に報告書が刊行された（註２）。

事前、試掘調査

平成 21 年度に発掘調査を実施する松原古墳群と松原小奥遺跡の両調査地については、前年度の３月に国土交通省により伐木作業が終了しており、４月には、周辺も含めた詳細な現状の観察と、平成 19 年度に実施された、鳥取市教育委員会による試掘調査成果の確認を行った。

このうち、松原古墳群の南北方向の丘陵部にある松原 11 号墳は、当初の分布調査では前方後円墳とされていた。しかし、前方部と後円部の間とみなされる位置で行われた試掘調査で、周溝状の落ち込みが検出されたことから、「２基の古墳が隣接して築造されているものと推察され」た（註３）。そのため円墳状の高まりを松原 11 号墳とし、南側の平坦部については、古墳と確認された時点で新規に番号付けをすることとした。

また、松原小奥遺跡では、墓地造成時や今次の道路計画に伴う墓地移転時の撹乱等によって、地形が大きく改変されているため、調査地内に古墳が存在するかは不明瞭であった。しかし、調査地外の丘陵高位には古墳が２基存在していることや、周辺丘陵上には、古墳群が形成されている様相から、古墳の存在は充分あり得ることと想定されていた。また、事前踏査によって調査地内高位で円筒埴輪片を、低位では須恵器片を表採した。改めて現況地形をみると、墓地は大きく５段に築かれており、墓地造成により大幅に削平されている可能性も高いが、こうした段がもともと古墳の単位であったことも考慮していく必要性を確認した。

測量調査

本格的な調査は、鳥取県教育文化財団と株式会社アコードとの調査支援業務契約が整った５月１日から開始した。

まず現地確認を行い、伐木材の片づけや草刈り作業を実施した後、基準点および水準点、調査グリット杭を現地に設置し、５月 20 日、調査前空撮と同時に航空写真を利用した調査前地形測量を行なった。

松原古墳群ではこの段階で、東西尾根の南側斜面部において平坦地が数段認められた。また、東西、南北それぞれの尾根上に、当初想定していない古墳状の隆起もみられた。このため、後日できあがっ

図２　調査地詳細位置（鳥取市都市計画図を元に作成）

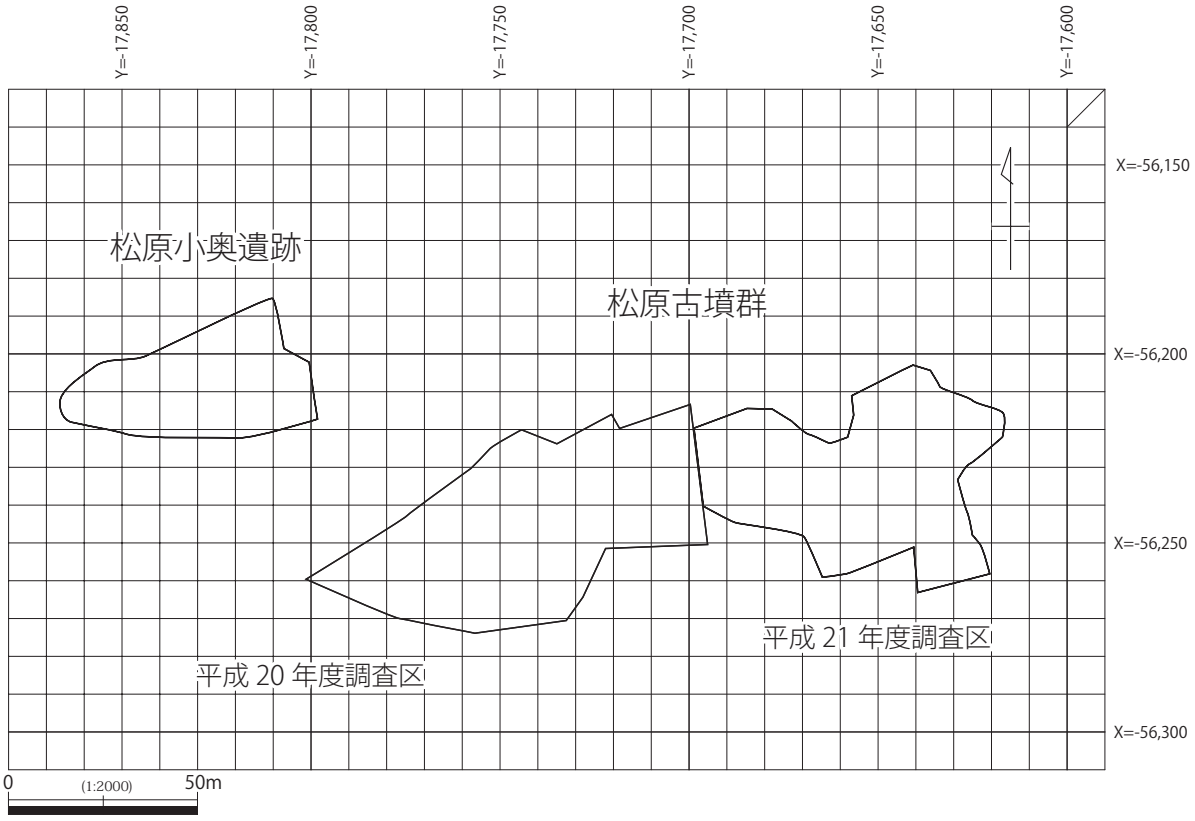


図３　調査地位置

た素図を参考に、詳細な微地形等の補足測量を行なった。そして、その地形的な特徴および古墳等遺構の分布状況から、「南北尾根」、「東西尾根」、「南西斜面」という名称をつけ、順次調査を進めていった。

また、松原小奥遺跡では、現況の墓地区画と調査地内に散布する人頭大ほどの礫についても実測を行った。そして、この下から墓が検出されることを想定し、礫と墓の対応関係が把握できるようにした。

松原古墳群の調査

【南北尾根の調査】

こうした事前調査や測量成果をもとに土層観察用畦を設定し、６月８日から人力による表土掘削に着手した。表土掘削は、南北尾根上の 11 号墳周辺から着手し、随時、畦に沿ってトレンチを掘削し、地層の堆積状況を把握しながら調査を進めた。その結果、11 号墳北側の平坦部が中世以降の造成によるもので、それに伴って 11 号墳裾を中心に削平を受けていること、さらに現況の旧中国自然歩道下層から、平坦部と同時期以降の道が検出され、こうした土地改変が、古墳時代以降も尾根上で行われていたことが判明した。

また、鳥取市の試掘によって想定されていた 11 号墳北側は、新規の古墳（33 号墳）であるとともに、その北側にも 34・35 号墳という２基の古墳があることが確認できた。

さらに北東部や東西尾根との交点部分にある古墳状隆起にもトレンチを入れた。その結果、前者については古墳ではないと判断したが、後者については、明確な埋葬施設は確認できなかったものの、鉄滓が数点出土するなど、何らかの遺構であることが想定された。そしてこれは後ほど、南側斜面下方で横穴墓が検出されたことから、横穴墓の後背墳丘であることが判明する。

【東西尾根および南西斜面の調査】

９月、東西尾根を挟む北東および南西斜面に入れたトレンチの観察から、各尾根から続く遺物包含層が斜面部へ連続することがわかり、その上層の表土については重機で掘削することとした。また並行して調査中の松原小奥遺跡において、当初想定を大幅に上回る遺構が検出されたことから、古墳群の作業を一時縮小して、同遺跡へ調査を集中する体制をとった。

その後、松原小奥遺跡の掘削作業が一段落した 10 月半ばから、古墳群の調査を再開させた。東西尾根の 26 号墳を中心とした調査になり、その西側、昨年度調査地の境では、周溝のみしか残っていない 38 号墳を検出した。

【横穴墓の発見】

10 月後半からは南西斜面へと調査の主体が移り、着手当初に確認していた平坦部を中心に調査を進めていった。そして、調査終盤の 11 月 26 日、この斜面部でもっとも広い 100 平坦部を調査していたところ、北側の斜面部へと続く堆積を確認。トレンチを掘った結果、斜面に垂直方向の人為的な掘り込みであることがわかり、さらにこの奥へ掘り進めていくと横穴墓が現れた。

そのため、調査期間を延長するとともに、まず、玄室内の遺存状況を確認した。横穴墓を構築する地盤自体が比較的もろい粘土であったため、このまま調査を進めては落盤事故の発生が危惧された。そこで、急遽、重機により玄室天井までの斜面部を掘削し、安全を確保した。一方、調査地内の周辺にくまなくトレンチを設定し、発見された横穴墓に関連する遺構の確認に努めたが、結局、今回の調査地では、横穴墓は検出した１基のみであった。しかし横穴墓は、複数基が群をなして築造されるこ

とが一般的であることや、本調査地外の南側には、一連の平坦部および斜面部が続くため、そこにさらなる横穴墓が存在する可能性はなお残っている。当該地は工事範囲内でもあることから、試掘調査等による確認が必要と考える。

【現地片付け】

35 号墳は南北尾根の調査地北側に位置し、南側周溝のみが本調査地内にある。埋葬施設は、工事予定地境界あたりから北に展開すると考えられた。そのため、国土交通省の工事による掘削ラインと 35 号墳の調査範囲を調整するため、平成 22 年 10 月 20 日に国土交通省と現地で協議した。その結果、発掘調査は周溝までとし、その周溝裾部から南側を工事掘削範囲とするよう、道路法面の設計が変更されることとなった。35 号墳の墳丘はすべて保存できることとなったため、周溝裾部の測量を行い、プラスチック杭を打設することによって、保護すべき範囲を現地に明示した。さらに、35 号墳周溝北側斜面部から調査地内の墳丘部分については、シートを貼って養生した。

小雪がちらつく中、12 月 25 日にすべての現地調査を終了した。

松原小奥遺跡の調査

松原古墳群と同じく、６月８日に人力による表土掘削を東側、すなわち調査地高位から着手した。

調査地は墓地で、大きく５段の雛壇状を呈している。そのため、旧地形がかなり改変されていることが容易に想定された。そこで、調査地を南北に２分するような東西方向の土層観察用畔を設置し、それに沿ったトレンチを入れ、堆積など地下の状況を確認しながら作業を進めていった。

また、調査地が狭小で発掘作業員数を一日当り 10 名ほどしか投入できないという制約があったため、調査は東側から西側（丘陵高位から低位）という流れで、現代墓地区画の１段ずつを順に進めていくことにした。

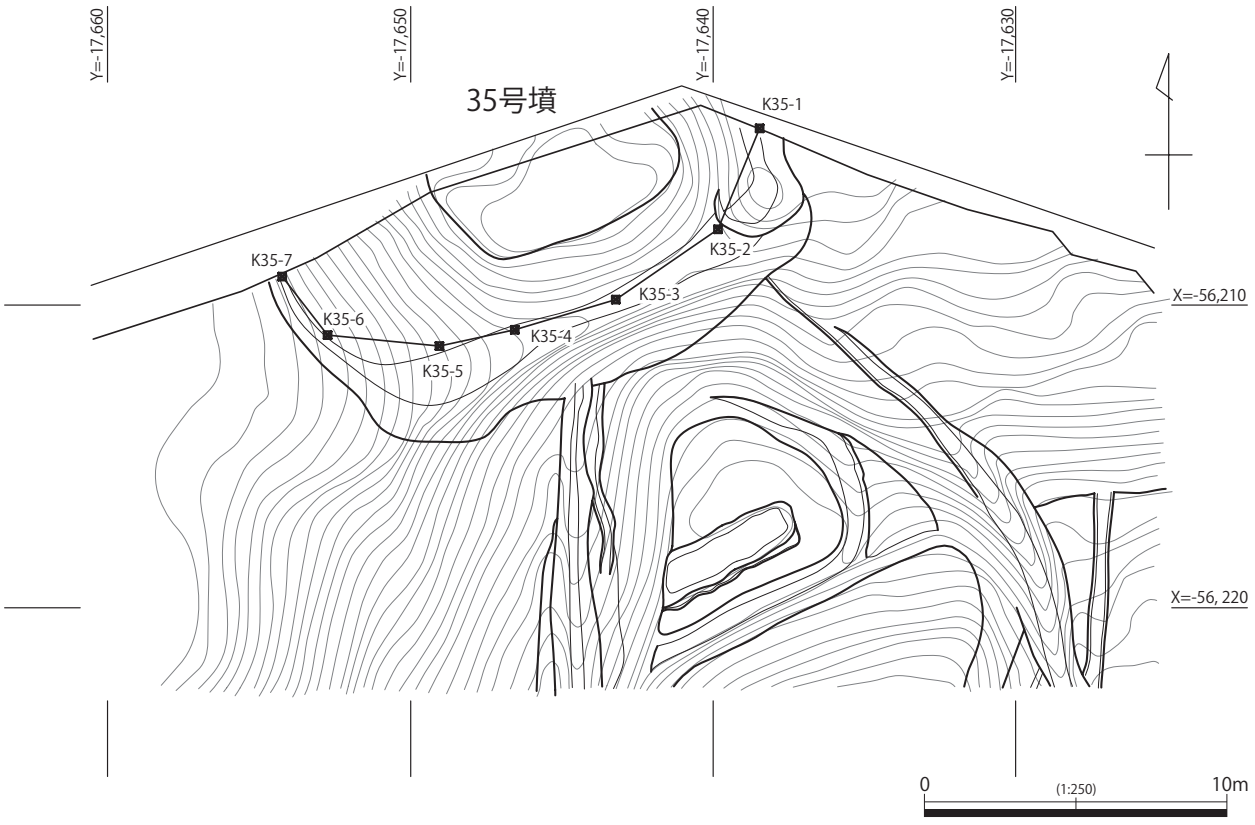


図４　松原 35 号墳養生範囲

【中世末以降の墓】

表土は薄く、それを除去するとすぐに地山面があらわれた。そこで、平面的な遺構検出作業を行った。地山面を掘り込んだ後、その土で埋め戻された痕跡を見出し、その切り合い関係について、トレンチを入れながら把握していった。その結果、中世末以降の墓とともに、近年の改修に伴うと考えられる撹乱坑が多く存在することが明らかとなった。しかも、それぞれの埋土はいずれも同じような土であるため、それらを峻別する作業はかなり困難であった。また、地元の方々からの聞き取りにより、墓地移動に伴う改葬時（平成 20 年）に、小型重機を用いて掘削、埋戻しがなされたということもわかった。いくつかの撹乱をみると、かなり深く大きなものが多いことがわかり、作業の手戻りが大きいため、トレンチで撹乱と判断できたものについては、中世末から近世墓の調査に影響しない限り、掘り下げないこととした。

【近代以降の墓】

改葬が地元の方々によって行われたといっても、それは地表面で認識できるものに限られていた。そのため、他にも比較的新しい時期の墓があることを想定しながら調査を進めていった。ただし、検出時点ではその時期判定はできないため、供伴する副葬品や棺桶に使用された釘の形態から判断することとし、すべての墓を図化した後、人骨と遺物の取り上げ作業を行った。

同時に、国土交通省と、この人骨および石塔に関する取扱い協議を進めた。そして、10 月 20 日付けで、調査報告の対象とするものは近世までとし、近代以降の墓から出土した人骨等の遺物については、国土交通省が爾後の対応をすることとなった。また、石塔についても、戒名から近縁者が判明する可能性があるため、同様とした。

【コンクリートの撤去および重機による掘削】

墓の検出作業が進むにつれ、現代の墓地区画下へ続く遺構が多数出てきたため、墓地の基礎となっている構造物の撤去が必要となった。しかし、検出作業が進んでいたため、重機を調査地内へ搬入させることができず、撤去は人力で対応できる範囲とせざるを得なかった。そこで 8 月半ば、コンクリートブレーカーを使い、撤去できるものに限り作業を実施した。

また調査地西側では、トレンチ調査により、当初墓の掘削面と考えていた面が後世の造成であること、さらに、平面検出で墓と考えていたものが撹乱痕跡であることがわかった。そして、本来の遺構検出面は造成土下にあることから、この造成土については、8 月後半から重機で掘削することとした。

【古墳の検出】

当初想定を上回る、多数の中世以降現代に至る墓の検出に追われる中、その墓壙やトレンチの中、あるいは平面検出作業中に、埴輪片が出土する箇所がいくつかあった。

そこで、墓の検出作業がほぼ終了した東側から順に、古墳検出作業に取りかかった。とくに、東側は調査地外へと続く 15 号墳があり、その墳丘裾部と考えられる辺りにある墓や撹乱からは、埴輪片が比較的多く出土した。調査の結果、部分的ながら周溝を確認。さらにその中からも埴輪が集中して出土した。

この状況を手がかりに、その他の地区でも作業をし、当初想定されていた 16 号墳で東側周溝を確認できたほか、新たに 36・37 号墳を周溝のみながら検出することができた。

【現地片付け】

掘削作業がほぼ終わった 10 月 6 日、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。その後、残る人

松原古墳群・松原小奥遺跡の調査

2009 年 11 月 14 日（土）現地説明会資料

財団法人鳥取県教育文化財団では、鳥取西道路の建設に先立ち、今年の６月から松原古墳群・松原小奥遺跡（鳥取市松原）の発掘調査を行ってきました。

松原古墳群では、古墳時代前期～後期（1700 ～ 1400 年前）の古墳６基、松原小奥遺跡では、古墳時代後期（1500 ～ 1400 年前）の古墳４基がみつかりました。

松原古墳群の南北尾根でみつかった方墳３基は、松原周辺で古墳がつくられるようになった古墳時代前期にあたり、当地における古墳時代の始まりを考えるうえで貴重な手がかりを与えてくれるものです。

また、松原小奥遺跡でみつかった円墳のうち３基の周溝からは埴輪が出土しました。湖山池周辺で埴輪が出土する古墳の例は少なく、なぜ松原小奥遺跡の古墳に埴輪があるのか、注目される点です。

松原古墳群・松原小奥遺跡の発掘調査で明らかになったことについて古墳を中心としてご紹介いたします。

松原小奥遺跡を探る。

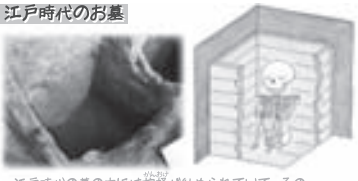
松原小奥遺跡は、松原集落の南東にある丘陵上にあります。

ここは調査前には墓地で、調査の結果、室町時代の終わりごろ（約 400 年前）からお墓がつくられていたことがわかりました。

墓穴の形は、江戸時代の初めごろまでは長方形で比較的浅く、その後は丸や正方形をした深いものに変わっていきます。

また、古墳時代後期（1500 ～ 1400 年前）の古墳があったこともわかりました。古墳の調査では埋葬施設はありませんでしたが、周溝が見つかり、その中からたくさんの埴輪が出土しました。

江戸時代のお墓



江戸時代の墓の中には棺桶が納められていて、その中に座った状態で葬られていました。

なかには、高さ 70 ㎝のカメを棺桶の代わりにしたものもありました。

古墳時代のお墓

周溝でみつかった埴輪は、もともと墳丘の上に置かれていたものが転落したと考えられます。

お墓をつくるときに削られたりしていますが、ところどころで古墳の周溝が残っていました。

松原古墳群を掘る。

今年度の調査では現在までに古墳が６基みつかっています。

古墳時代前期～後期（1700 ～ 1400 年前）にかけてつくられていることがわかりました。

古墳にはどのような人が葬られていたのでしょうか。当時の人たちも日本海までを見渡せる、この景色を眺めていたのでしょうか。

26 号墳のみつかったところ

35 号墳の周溝

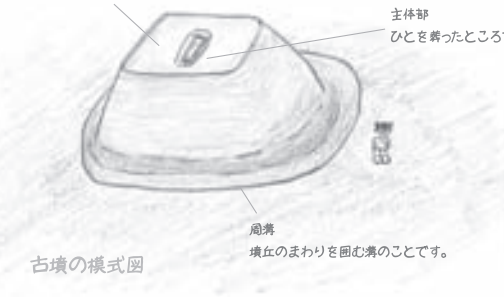
35 号墳の周溝から出土した土器

35 号墳

38 号墳のみつかったところ

古墳の調査状況

33 号墳の埋葬施設（第１主体部）



11 号墳から出土した鉄の剣（けん）

11 号墳から出土した鉄の鏃（やじり）

33 号墳の土器群（第３主体部）

葬られた人の頭をのせる枕として土器を使っていました。

図５　現地説明会資料

骨取り上げ作業を継続して行い、11 月 6 日すべての現地における作業を終了した。

現地説明会等の開催

松原古墳群の調査が終盤となった 11 月 14 日には現地説明会を行なった。すでに松原小奥遺跡は調査が終了していたため、古墳群のみ現地を見ていただき、松原小奥遺跡については、出土遺物とともに現地の様子をパネル展示することとしていた。しかし、現地説明会当日の朝まで雨が降り、古墳群へ上がる斜面部の状態が悪かったため、やむなく古墳群についてもパネル等で説明することになった。現地説明会には、地元を中心に 75 名の参加者があった。幸い、現地説明会の開始直前から晴れ間が見えたため、少しでも現地の近くで見ていただけるよう、比較的足元が安全なパイロット道路の終点まで参加者を御案内した。結果的には、上空はさわやかな晴れとなっただけに、現地を間近に見ていただけなかったことは大変残念であった。

なお、10 月 30 日には、地元松原地区の「明日の湖南を考える会」の方々 16 名に対し、現地見学、および講演会を行った。同じく地元にある湖南学園小・中学校において、12 月 7 日～ 11 日まで出土遺物および調査状況のパネルを展示し、併せて小学 5 ～中学 1 年の生徒に対し、遺跡の紹介を兼ねた講演会を開催した。さらに、3 月 13 日には、湖南地区公民館の依頼により、発掘調査成果に関する講演を行い、33 名の参加があった。

写真 1　現地説明会風景

写真 2　現地説明会風景

整理作業

遺物整理作業は鳥取県教育文化財団が現地調査と並行して行った。遺物の接合、復原および遺物実測の基本整理の他、図面のトレース作業等を行った。また、鳥取県埋蔵文化財センターの協力により、古墳および近世墓から出土した金属製品のX線撮影を行い、その細部観察等を行なった。

一方、現地で作成した図面などをもとに遺構所見の再検討を行い、それぞれを時期ごとに整理した。その上で、図面の編集作業を行い、本報告書にまとめている。

また、遺物と記録資料の収納も行い、平成22年3月31日に遺物整理作業を終了した。

第3節　調査体制

発掘調査および報告書作成は以下の体制で行った。

	平成21年度	平成22年度
鳥取県教育委員会		
教 育 長	中永　廣樹	横濵　純一
鳥取県教育委員会事務局文化財課		
課　　長	植田　司郎	植田　司郎
歴史遺産室長	中原　　斉	中原　　斉
課長補佐（兼主幹）	植木　敏郎	田貝　　隆
副 主 幹	寺垣　仁志	福市　　信
文化財係長	北浦　弘人	北浦　弘人
文化財主事	高尾　浩司	高尾　浩司
財団法人　鳥取県教育文化財団		
理 事 長	有田　博充	井上　善弘
事務局長	中村　金一	漆原　貞夫
事務職員（調査室を兼務）	岡田美津子	岡田美津子
調査室		
室　　長（美和調査事務所長を兼務）	松井　　潔（※1）	松井　　潔（※1）
次　　長	石本　富正	石本　富正
事務職員	福田早由里	福田早由里
美和調査事務所調査第二担当		
副 主 幹	中森　　祥（※1）	中森　　祥（※1）
文化財主事	後川恵太郎（※2）	後川恵太郎（※2）
文化財主事	田中　正利（※1）	田中　正利（※1）

※1　鳥取県埋蔵文化財センターから派遣　　※2　財団法人大阪府文化財センターから派遣

発掘調査支援業者

株式会社アコード

調査協力

国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、財団法人大阪府文化財センター、鳥取市教育委員会、鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財センター、松原地区自治会、湖南地区公民館、明日の湖南を考える会

註

1）加川　崇ほか編　2009『平成20（2008）年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会

2）小口英一郎ほか編　2010『松原古墳群』Ⅰ　鳥取県埋蔵文化財センター

3）註1に同じ

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　位置と地理的環境

松原古墳群、松原小奥遺跡は鳥取市松原に所在する。鳥取市は鳥取県東部に位置しており、東は岩美郡、南は八頭郡、西は東伯郡と接し、北には日本海が広がる。総面積 765.66 ㎢、人口約 20 万人を有する県庁所在地である。

当遺跡周辺の地形は、中国山地に端を発し日本海の方向に延びる山、丘陵地とそれを開析する谷部、湖山川が流れる平野部、三角州に大きく分類され、日本海側には潟湖である湖山池がある（図６）。

1943 年鳥取地震の活断層である鹿野－吉岡断層は、当遺跡の南側において東西方向に走向しており、山地を分断するような地形を形成している。断層が成因となるような地形は、吉岡断層の以北においても複数見い出すことができ、断層がこの地域の景観に果たした役割は大きい。また、当遺跡の南東には、応和２年（962 年）ないし後村上天皇（1339 ～ 1368 年）の頃からとも伝えられる吉岡温泉があり、花崗岩の断層から湧き出る温泉とされる。

調査地は、地形分類上は丘陵地に位置しており、中新世に形成された鳥取層群中の河原火砕岩とその上部に堆積する泥岩、土塊および岩塊が偽礫の構造をもつ斜面堆積物、これらの地層の上部が土壌化、風化することにより形成された地層で構成される。

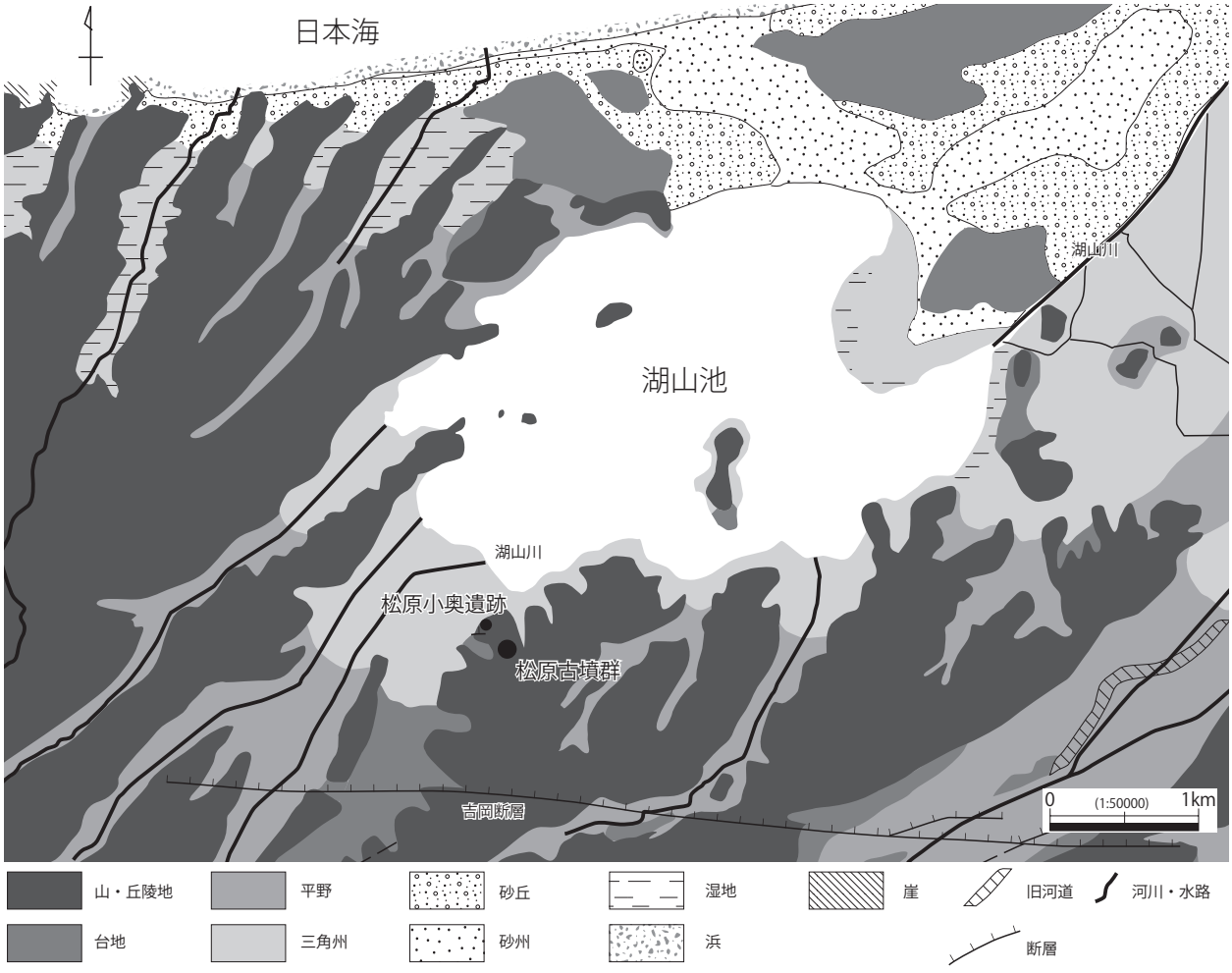


図６　遺跡周辺地形（鳥取県 1975 土地分類基本調査地形分類図鳥取北部・鳥取南部を改変して作図）

第２節　歴史的環境

今回の調査地は、湖山池の南西部にあたる。湖山池の周辺は、鳥取県東部の中で多くの遺跡が集中している地域の１つである。本節では、湖山池周辺を中心に地域の歴史を概観していく。

【縄文時代】

湖山池周辺で人々の生活痕跡が確認できるのは縄文時代前期末からで、南東部の桂見遺跡で少量の大歳山式土器が出土している。ただ、まとまった数の遺物が見つかるようになるのは縄文時代中期末からである。なお、鳥取平野周辺で見ると、これに先行するものとして、鳥取市浜坂の砂丘で有茎尖頭器が採集されているほか、鳥取市福部町の栗谷遺跡で縄文時代前期から継続して生活していた様子をうかがい知ることができる。

中期末から後期になると、湖山池の南東部にある布勢、桂見の低湿地を中心に人々の生活が展開している。布勢第１遺跡では後期の杭と板材を用いた水路護岸と思われる遺構が確認されている。このあたりでは腐植土層が発達していて、調査では多くの木製品が出土している。なかでも布勢第１遺跡で見つかった朱漆塗りの木製容器や、桂見遺跡で平成６・７年の調査で見つかった丸木舟は特出される。池の南側にある青島でも後期からの土器が見つかっている。

後期後半から晩期には、千代川や合流する河川によって形成された自然堤防上に人々が進出するようになる。縄文海進時に湖山池から鳥取平野にかけて広がる内湾が、海退するなかで河川堆積によって平野が形成されたことによるのだろう。野坂川沿いの大桝遺跡や、千代川と湖山池の中間にある岩吉遺跡、池の北東部にある湖山第２遺跡で晩期の土器が出土している。池の南西側では岩本第２遺跡で少量ではあるが晩期の突帯文土器が出土している。ただ､いずれも明確な遺構を確認できていない。

【弥生時代】

前期の遺物が出土するのは縄文時代晩期に展開している地域と大きな差異はない。ただ、いずれも遺構がほとんど確認できていない状況であり、詳細な様相はよく分かっていないというのが実情といえる。

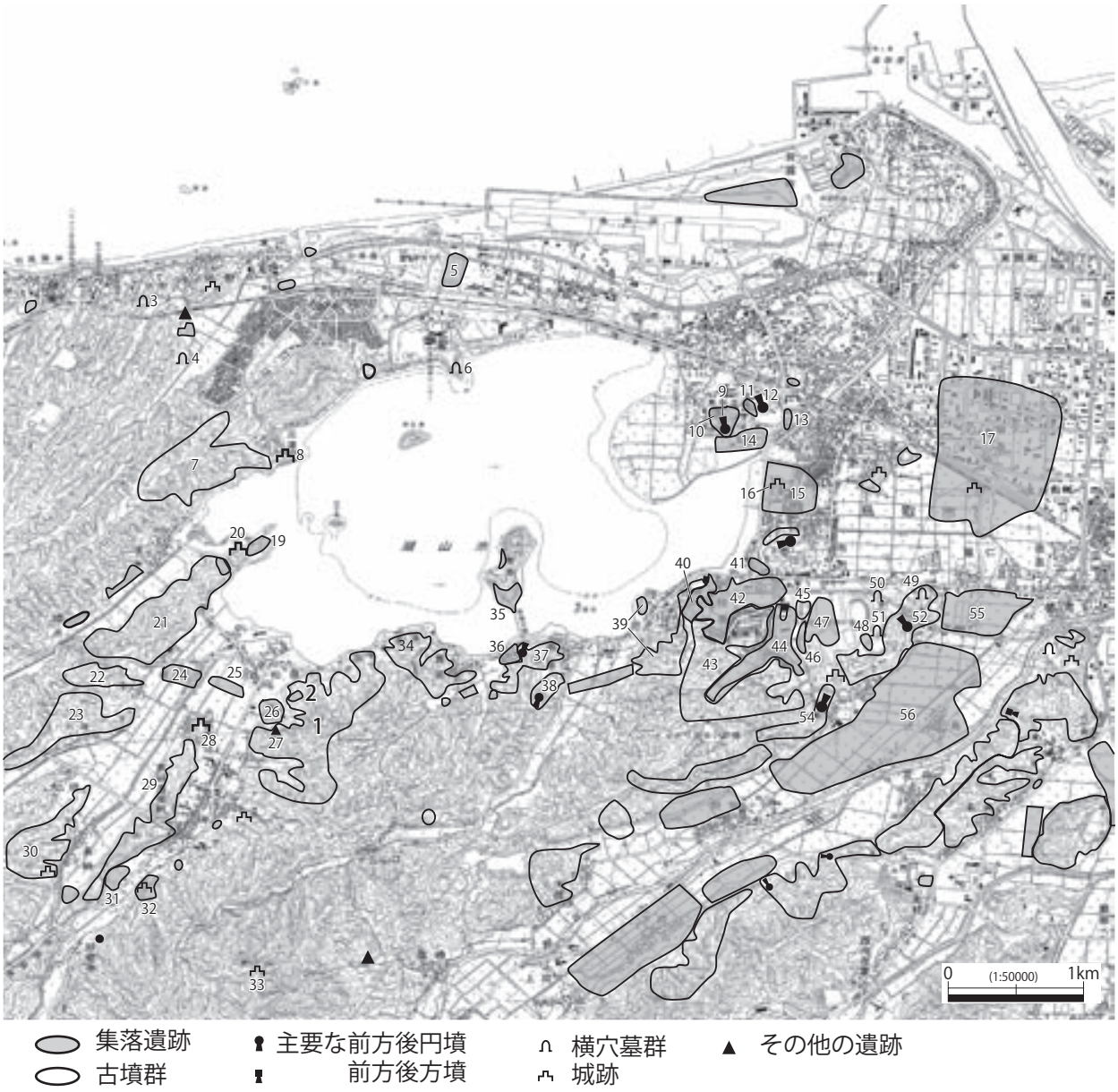
明確な生活痕跡が確認できるようになるのは中期に入ってからである。北東部の湖山第２遺跡では中期前葉と思われる掘立柱建物跡が確認されている。中期中葉の様相はよく分かっていないが、中期後葉になると徐々に遺構が確認されるようになる。南東部の布勢第２遺跡や北東部の湖山第２遺跡では竪穴住居跡が、東部の岩吉遺跡では掘立柱建物が確認されており、これらの集落は後期にも継続していくことになる。

南部では、高住字宮ノ谷の丘陵で流水文銅鐸が出土している。青島の対岸にある塞ノ谷遺跡では土器とともに分銅形土製品が出土している。このあたりにも同時期の集落が存在していた可能性が考えられる。

北部の砂丘地では中ノ茶屋遺跡で遺物の散布が確認されている。

後期になると建物跡が確認される遺跡が各所でみられるようになる。湖山第２遺跡ではこの頃から遺構数が増えており、南東部においては、布勢第２遺跡に続いて桂見遺跡や帆城遺跡、大桝遺跡では丘陵裾で、西桂見遺跡では丘陵上でそれぞれ建物跡が確認されている。とくに布勢第２遺跡では玉作工房と思われる竪穴住居跡が確認されており注目される。

南東部の丘陵上では後期になると墳墓群が造られており、丘陵上の高まりなどで土壙墓のまとまりを形成している。その中で後期中葉に造られた長軸 17.8m の布勢鶴指奥１号墳丘墓や、桂見墳墓群



遺跡一覧

1 松原古墳群　2 松原小奥遺跡　3 伏野神社の南横穴墓群　4 伏野所在横穴墓群　5 中ノ茶屋遺跡　6 三津所在横穴墓　7 三津古墳群　8 三津ヶ崎本陣山城跡　9 三浦 1 号墳　10 三浦遺跡　11 大熊段遺跡　12 大熊段 1 号墳　13 湖山第 1 遺跡　14 湖山第 2 遺跡　15 天神山遺跡　16 天神山城跡　17 岩吉遺跡　18 布勢 1 号墳　19 岩本第 2 遺跡　20 防己尾城跡　21 岩本古墳群　22 大谷古墳群　23 大畑古墳群　24 金沢坂津口遺跡　25 松原田中遺跡　26 松原谷田遺跡　27 松原所在古墓　28 丸山城跡　29 吉岡古墳群　30 長柄古墳群　31 吉岡遺跡（大海地区）　32 吉岡遺跡（丸山地区）　33 蓑上山城跡　34 良田古墳群　35 青島第 1 遺跡　36 塞ノ谷遺跡　37 高住古墳群　38 高住宮ノ谷古墳群　39 倉見古墳群　40 西桂見遺跡　41 帆城遺跡　42 桂見遺跡　43 桂見古墳群　44 東桂見遺跡　45 布勢古墳群　46 布勢鶴指奥墳墓群　47 布勢第 1 遺跡　48 布勢第 2 遺跡　49 里仁第 1 横穴群　50 里仁第 2 横穴群　51 里仁第 3 横穴群　52 里仁古墳群　53 鍋山城跡　54 桷間古墳群　55 里仁遺跡　56 大桷遺跡

図 7　周辺の遺跡

で一回り大きい墓壙に水銀朱や玉類を副葬する第１土壙墓の存在は、首長層の存在を示すものといえる。さらに後期末になると突出部を含めると全長約 65m に及ぶ西桂見墳丘墓が出現しており、この時期において湖山池南東部に有力な集団が存在していたことが考えられる。

また、それまで明瞭な遺構が確認されていなかった南西部でも、松原谷田遺跡や岩本第２遺跡で建物跡が見つかっている。

【古墳時代】

古墳時代にはいると、南部から西部にかけての丘陵上を中心に古墳が造られるようになる。

鳥取平野で最大の前方後円墳である桝間１号墳（全長 92 m）は、大桝遺跡を見下ろす尾根上にある。湖山池に面する地域でいうと里仁 29 号墳の全長 81m が最大である。また全長 30m 前後の中規模な前方後円墳が南東部の桂見、南部の高住や良田、南西部の松原、吉岡の各古墳群に点在している。松原古墳群では、５号墳と７号墳が前方後円墳であり、特に７号墳は全長約 54m と南西部では突出した規模を持つ。

前期の古墳は弥生時代の墳墓群のあった桂見や、西桂見遺跡から続く丘陵上にある倉見で調査されている。これらはすべて方墳であり、立地も含めて弥生時代からの伝統を継承していることが想定される。

中期の古墳としては里仁 32 ～ 35 号墳で調査が行われている。いずれも方墳で、32・33 号墳で鰭付円筒埴輪を棺に転用した埋葬施設が確認されているほか、35 号墳では多数の竪櫛が出土している。

後期になると、北東部の濃山台地上にある琵琶隈古墳（三浦１号墳）（全長 36m）、大熊段１号墳（全長 46m）、東部にある布勢古墳（全長 59m）といった前方後円墳が比較的近接した範囲で造られている。横穴式石室は南東部で倉見９号墳、南部で高住 12 号墳、南西部では松原 28 号墳や吉岡１号墳（葦岡長者古墳）などがあるが、千代川東岸地域に比べると確認されている例は少ない。

後期の古墳では、平成 20 年度の松原古墳群の調査がある。ここでは尾根頂部が広くなるところを中心に 10 基の古墳が築造されている。

集落については、湖山第２遺跡や西桂見遺跡、布勢第２遺跡、松原谷田遺跡などで弥生後期から継続しているようである。ただ、中期の遺構、遺物は少なくなる傾向にある。西桂見遺跡では前期までで集落は廃絶しており、布勢第２遺跡では中期の建物跡は確認できていない。湖山第２遺跡では中期までで遺構が見られなくなり、隣接する湖山第１遺跡で中期末から後期にかけての建物跡が確認されるようになる。松原谷田遺跡は、後世の掘削によって遺構の遺存状態が良くなく、前期以降は遺物の散布が確認できるのみである。

南部の青島の対岸にある塞ノ谷遺跡では、木製の護岸施設のある池状遺構が見つかっており、この中から弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物が出土している。その中には弥生時代の分銅型土製品や、舟などを模した木製品、赤色塗彩された土師器が出土しており、水に関係する祭祀が行われていたのでないかとされる。

【古代】

湖山池周辺は、旧国名、郡名でいえば因幡国高草郡の一部にあたる。

この時期の遺構としては、桂見遺跡と岩吉遺跡で掘立柱建物跡が確認されている。桂見遺跡では周辺から赤色塗彩された土師器や転用硯、木簡が出土している。岩吉遺跡では墨書土器や木簡が出土し

ており、「草田」という墨書が多く見られる。そして両方の遺跡で人形や斎串などの木製祭祀具が出土している。

南西部では、松原谷田遺跡で掘立柱建物跡が 1 棟確認されており、出土する土器から平安時代のものと推定されている。また、遺構は確認できていないが、吉岡遺跡では須恵器とともに奈良時代初め頃と考えられる単弁十二弁蓮華文軒丸瓦や鴟尾の破片が出土している。調査地の近くで瓦が多く表採される吉岡大海地区に古代寺院があったと想定される。

【中世】

南北朝の争乱期において因幡の実質的な支配を確立した山名時氏は、貞治三（1346）年に室町幕府から正式に因幡守護に任じられ、以後山名氏が因幡守護職に就くこととなる。

その守護所として築城されたのが天神山城である。正確な築城時期についてはよく分かっていないが、15 世紀後半には守護所として機能していたと考えられている。その後、但馬山名氏の支配下に入るが、永禄六（1563）年に武田高信による攻撃を受けた山名豊数が退去したことによって廃城となる。

天神山城の北側の三浦遺跡、大熊段遺跡や、南東の徳尾遺跡、南側の里仁古墳群、布勢墳墓群、布勢鶴指奥墳墓群、桂見墳墓群、西桂見遺跡でこの時期の墓が見つかっている。墓には土葬墓と火葬骨を納めた墓の他、墓壙を掘ってその中で荼毘に付した後そのまま埋めた墓も見られる。大熊段遺跡、布勢墳墓群、桂見墳墓群、西桂見遺跡等では方形に周溝を持つものや、さらに土を盛り上げたものが確認されている。

一方、南西部では中世の城跡として丸山城跡と防己尾城跡が知られている。これらはこの地域を拠点としたとされる吉岡氏との関連性が考えられる。

第Ⅲ章　調査の方法

第１節　現地調査

調査地の地区割り（第８図）

調査の標準化をはかるため、遺跡、遺構の位置表示、遺物の取り上げ等に使用する調査区割り（グリッド）を以下のとおり定め、調査を行なっている。

遺跡、遺構の位置は平面直角座標の第Ⅴ系（世界測地系）を使用して表示する。

遺跡（調査地）内の地区割りは鳥取県の全域を第６図に示したように、まず第Ⅰ区画として10,000 m× 10,000 mで１～91 に区画する。次に第Ⅰ区画内を 100 等分して 1,000 m ×1,000 mを作成、第Ⅱ区画とし南北軸に１～ 10、東西軸にａ～ｊまでの記号を付す。さらに第Ⅱ区画を 100 等分して 100 m× 100 mを作成、第Ⅲ区画とし南北軸に１～ 10、東西軸にＡ～Ｊまでの記号を付し、第Ⅳ区画として 100 m× 100 mの区画を 100 等分 10 m ×10 mの区画を作成する。この 10 m × 10 mの区画が遺物取り上げの最大単位となり、列（南北軸）、行（東西軸）の順で数字（1 ～ 10）、アルファベット（ａ～ｊ）で表記し区画を示す。

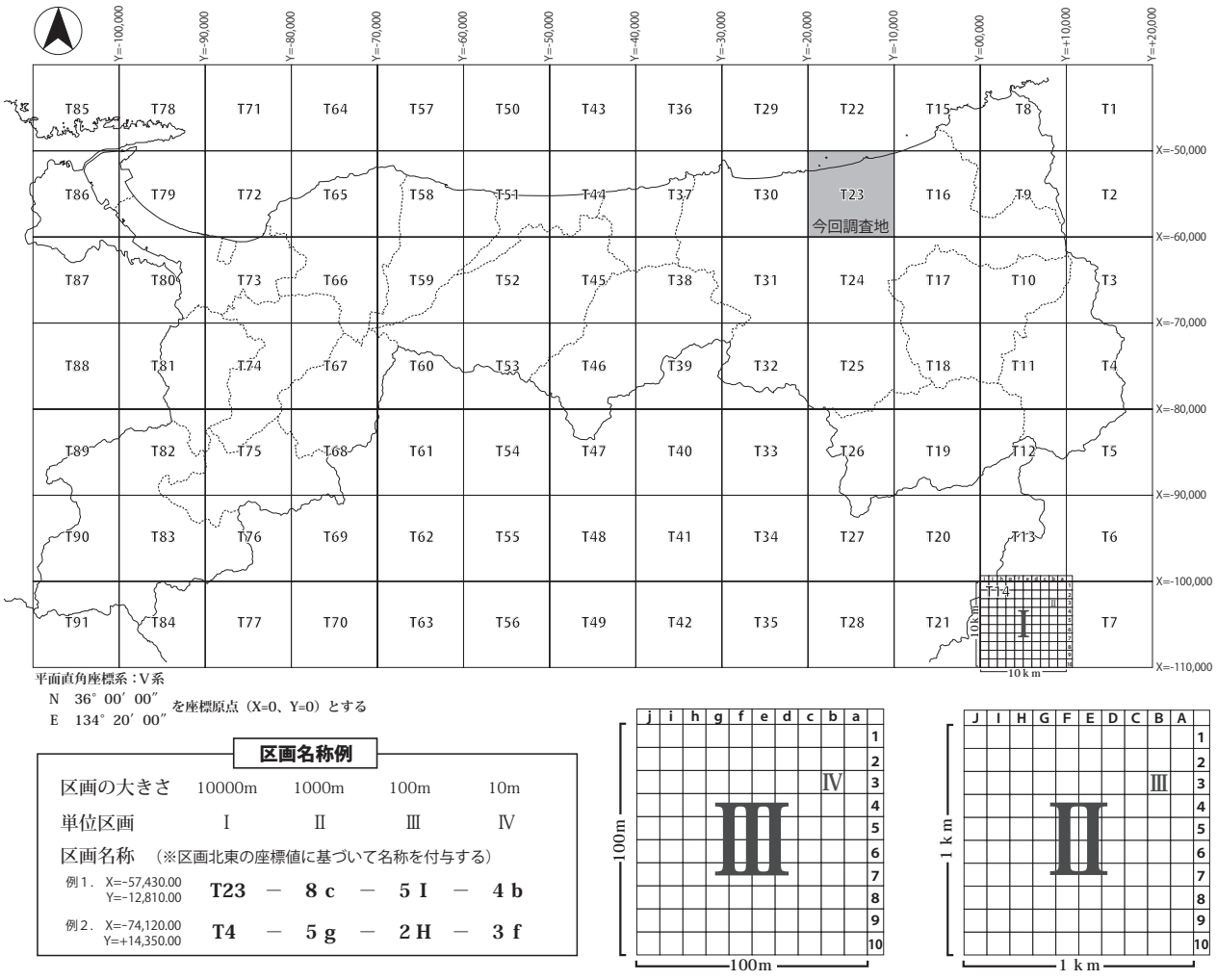


図８　調査区割り模式

遺物の取り上げ

遺物の取り上げは、上記の地区割りを基本にして 10 m ×10 mの単位で行っている。また、遺物の取り上げカード及び遺物取り上げ台帳にもこの地区名を必ず記入しており、地図上でも出土地点を示すことが可能となっている。

遺構番号と遺構種類の呼称

遺構の番号については、検出した順に番号を付し、その性格がわかるものについては番号の後に種類を記載した。つまり、「1 土坑、2 墓、3 ピット」などである。

一方古墳に関しては、1 基の古墳をひとつの単位として扱い、その古墳を構成する墳丘（盛土も含む）、周溝については個別の番号は付していない。また埋葬施設が複数ある場合は墳丘内における選地状況や前後関係を考慮して「1、2」とした。すなわち「33 号墳埋葬施設 1」というように登録している。

なお、鳥取市教育委員会文化財課等と協議の上、松原古墳群および松原小奥遺跡において新たに発見した古墳については、遺跡台帳に記されている松原古墳群として登録された最終の古墳番号の次番号から番号を付した。今年度両遺跡の調査で新規に確認した古墳は 33 号墳から 38 号墳になる。また先述したとおり、前方後円墳として登録されていた 11 号墳は、後円部分が円墳の 11 号墳、前方部分が方墳の 33 号墳に分かれることが明らかとなった。

なお、松原古墳群では調査後に検討を進めた結果、以下のとおり遺構名称を変更して報告を行った。

33 号墳の埋葬施設 3 →埋葬施設 2 、仮 1 号墳→ 99 墳丘

掘削の方法

本調査に入る事前の踏査および試掘調査により、松原古墳群では尾根上に古墳状の隆起が連続して見られること、そして松原古墳群、松原小奥両遺跡では表土が薄いことが明らかとなったため、表土掘削からすべて人力で行った。

また両遺跡を覆う堆積土については、まず地形に沿って主軸を設定し、それに沿ってトレンチを掘ったほか、この主軸から直交など枝状に派生させたトレンチを適宜入れた。この断面観察により、古墳群では古墳構築面や周溝、古墳築造前の表土層である土壌層、松原小奥遺跡では古墳や中世以降墓の造成面や各墓同士の切り合い関係などを把握することに努めた。その後、平面的な掘削作業を行ない、古墳墳丘や各墓等を検出した。

〈松原古墳群〉

古墳群における埋葬施設は、墳丘検出、測量終了後、慎重に平面的検出を行った。33・34 号墳については墓壙掘方を容易に検出できたが、埋葬後に盛土が施されていた 26 号墳、墳頂部に木の根が張っていた 11 号墳については時間を要した。そのためとくに後者については、トレンチを設定して断面観察による調査を中心に把握していくことにした。なお、このトレンチの設置は最小限に留めた。また、埋葬施設は掘方まで完掘し、埋葬施設の構築方法の把握に努めた。

各古墳埋葬施設および横穴墓玄室内の埋土は、底面に近い部分について篩作業を行い、微細な遺物の収集に努めた。その結果、横穴墓玄室から人骨（歯）、26 号墳から鉄製品の細片を収集することができた。

墳丘盛土についても、古墳築造以前の旧表土層直下まで掘り下げを行い、墳丘の構築方法の把握に努めた。古墳時代以前の堆積については部分的にトレンチを掘削し、堆積の状況や遺構の有無の確認

を行なった。

〈松原小奥遺跡〉

先述のようにトレンチ、および平面的な検出作業により墓同士の切り合いを把握し、その記録を採り終えた後、切り合いの新しいものから順次掘り下げを行っていった。とくに方形の掘方をもつ墓では多量に釘が出土し、棺の規模を把握するために、極力その出土地点を記録することに努めた。

またすべての墓埋土は採取し篩かけを行って、人骨や釘など微細な遺物を収集した。

遺跡の図面

図面は松原古墳群、松原小奥遺跡それぞれで作成し、通し番号を付して管理していった。両調査地の全体図は、ラジコンヘリによる空中測量を調査前、および調査後、さらに古墳群については古墳墳丘検出状況について行い作成した。そこで図化されたものをもとに、細部はトータルステーションを用いた電子平板で補足測量している。縮尺はいずれも 1 /100 で、等高線間隔は 0.2 mである。

調査地内の堆積をみるための主要な土層断面図は縮尺 1 /20 で作成し、その方法はトータルステーションと電子平板を活用した。古墳埋葬施設に関連する平面、断面図は縮尺 1 /10、古墳に関連する遺物の出土状況図については、状況に合わせ縮尺 1 / 2、1 / 5、1 /10 で作成した。実測方法は支援調査員の手測りによるもののほか、測量士によりトータルステーションや簡易的な写真測量も活用した。また中世以降の墓については平面、断面図をトータルステーションや簡易的な写真測量を用いたほか、人骨出土状況については簡易写真測量をもとに手測りによる補足測量を行った。こうして作成した原図は番号を付し、登録台帳を作成して管理している。

写真撮影

調査地全体の写真については古墳の立地や墳丘の全体景観、周辺地形との関係性を表現するため、ラジコンヘリにより調査前、墳丘検出時、調査後にそれぞれ撮影した。

また、４×５判リバーサル、黒白、６×７判リバーサル、黒白、35mm 判リバーサル、黒白、デジタルデータの４種類を、撮影対象に応じ適宜選択しながら撮影していった。

４×５判以外はいずれも撮影日順に番号を付し、登録台帳を作成し管理している。なお、デジタルデータには撮影の諸データを写し込み、各フィルムカットの検索用資料の役割を持たせた。また、デジタルデータは各カット RAW データと jpeg データの２種類を作成し保存している。

写真３　発掘調査作業風景

写真４　測量作業風景

第２節　整理作業

土器、陶磁器類

遺物整理は現場作業と並行して行った。古墳から出土したものには脆弱な土器もあったため、その状況に応じ薬剤による強化を行った。その後、接合、復原を行なった後、実測作業を実施した。

金属製品

金属製品は土落とし程度のクリーニングを施し、古墳出土の鉄製品については RP システムにより保存している。また、この鉄製品および近世墓出土の金属製品の一部は、鳥取県埋蔵文化財センターの機材を借用してＸ線撮影を行った。このＸ線写真によって、錆で覆われている製品の細部を観察し、写真を参考にしながら実測図を作成した。

人骨

人骨についても土落とし程度のクリーニングをした後、鳥取大学医学部井上貴央教授の下へ搬送した。そこでさらなるクリーニングが施され、接合作業が行われた。また、その遺存状況に応じ強化剤を塗布している。

写真撮影

人骨をのぞく遺物について、４×５判あるいは６× ７判リバーサル、黒白フィルムにて調査担当者が撮影した。

遺構、遺物の検討

古墳や築造時期、中近世墓の形成過程や各古墳、中近世墓の特徴等を明らかにすることを目的に、各遺構や出土遺物の細かな検討を行なった。その成果は第Ⅳ～Ⅵ章に記した。

収納

調査で得られた図面、写真の記録類、土器などの遺物はすべて登録して収納作業を行い、各資料は活用に対応することを念頭に、随時検索できる状況で保管している。

写真５　整理作業風景

写真６　遺物写真撮影風景

第Ⅳ章　松原古墳群の調査

第１節　調査の概要と基本層序

１）遺跡の立地と既往調査（図９、巻頭図版１、図版１）

松原古墳群は、湖山池の南西岸、吉岡温泉町から良田に広がる丘陵の北西部に位置する。古墳群が展開する丘陵の西側は、長柄から湖山池に向かって平野部があり、この平野部を主要河川である湖山川が流れている。

同古墳群周辺には、弥生時代後期～平安時代の遺構が確認された松原谷田遺跡、弥生時代～中世の遺物散布地の松原田中遺跡、古墳時代～中世の遺物散布地の金沢坂津口遺跡がある。古墳群では、松原古墳群の北東側に良田古墳群、平野部を隔てて岩本、大谷、大畑古墳群がある。

松原古墳群では、現在まで古墳 37 基（松原１～ 18 号墳、20 ～ 38 号墳）が確認されている。このうち５・７号墳は前方後円墳とされる。既往調査では、平成 19・20 年度に一般国道９号（鳥取西道路）改築工事に先立つ調査が行われている。

平成 19 年度は、鳥取市教育委員会により、松原古墳群の試掘調査が行われた（以下、H19 試掘）。この H19 試掘は、古墳群の立地する丘陵上４箇所で行われた。第２トレンチは 11 号墳周溝、第３トレンチは３・４平坦部、第４トレンチは 26 号墳周溝、第５トレンチは 26 号墳南東側の東西尾根において行われている。

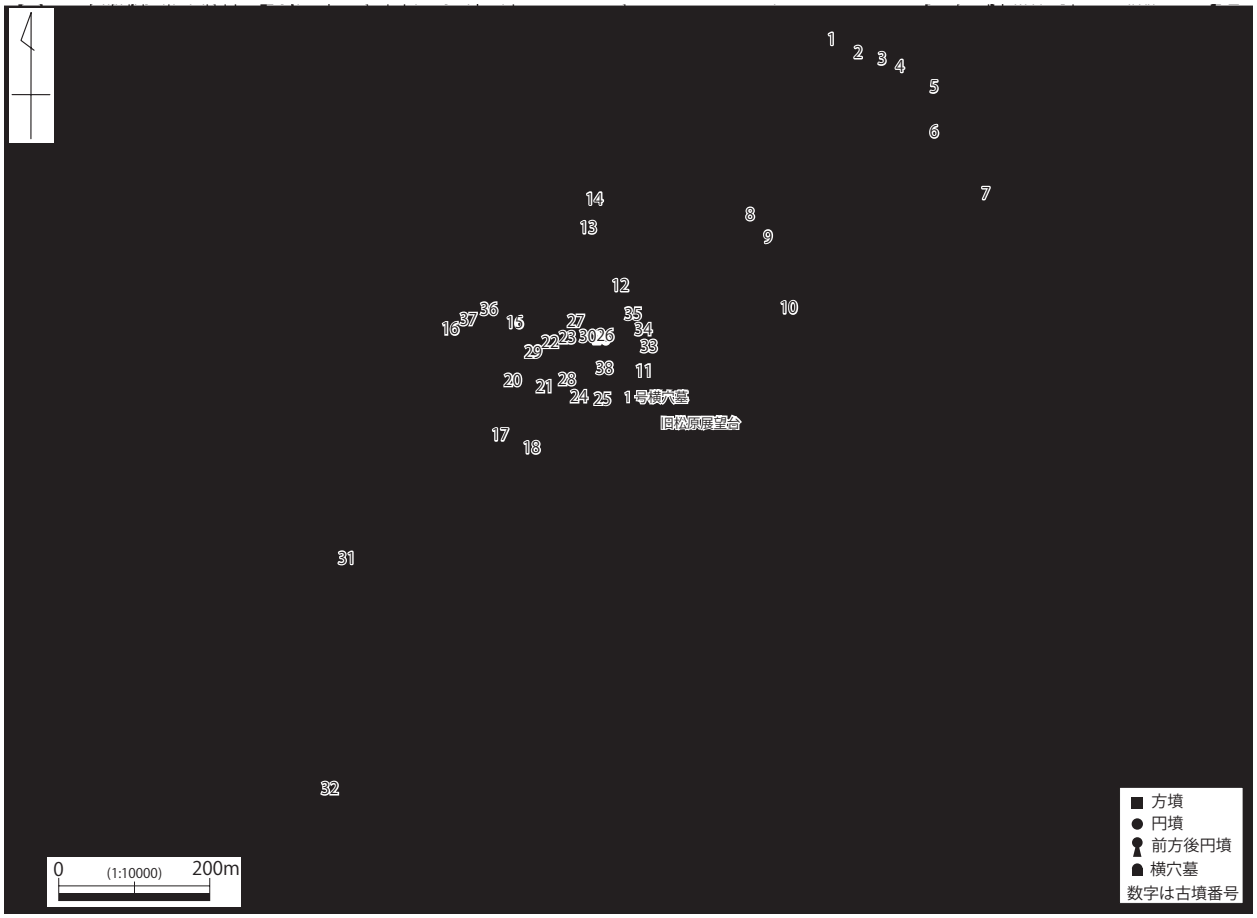


図９　松原古墳群分布（鳥取市都市計画図を元に作成）

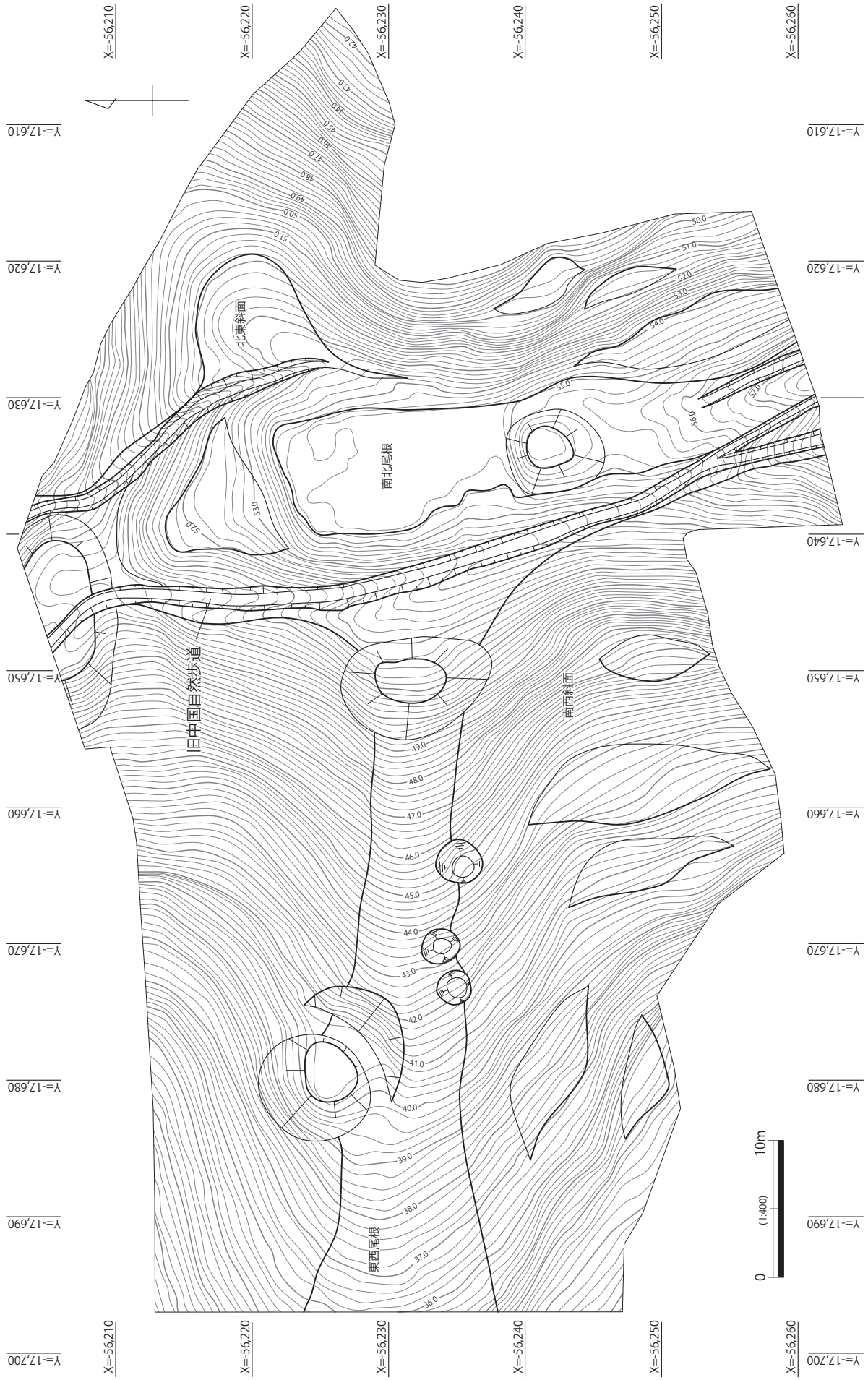


図 10　調査前地形測量　平面

平成 20 年度は、鳥取県埋蔵文化財センターにより、松原 20 ～ 25・27 ～ 30 号墳の調査が行われた（以下、H20 調査）。調査地は平成 21 年度調査地の西側である。古墳時代中～後期を中心とした円墳、方墳が確認されており、横穴式石室を採用する 28 号墳が 1 基含まれる。横穴式石室は、基底石から 2 段目までが検出されており、玄室長 3.1 m、幅 1.6 m、残存高 1.5 mを測る。

2）平成 21 年度調査の概要

平成 21 年度は、古墳時代以前の遺構として、溝、土坑、ピットを検出した。時期の詳細は不明であるが、溝、土坑、ピットから、竪穴住居の構造物と考えられる被熱粘土塊が出土した。

古墳時代前期～終末期の遺構として、古墳 6 基、横穴墓 1 基を確認した。南北尾根で、古墳時代前期の 33 ～ 35 号墳、古墳時代中期の 11 号墳、東西尾根で古墳時代中期～後期の 26・38 号墳、南西斜面で古墳時代終末期の 1 号横穴墓を検出した。

中世～近世の遺構として、平坦部と道を検出した。この平坦部は、平面形が長方形で土手、溝を伴う。

3）調査地内の基本層序（図 10 ～ 13）

今回の調査地における基本層序は、大別 3 層、細別 5 層に分かれる。発掘調査では、土層観察用トレンチの掘削を行い、地形及び土層の連続性の把握を行った。なお、土層観察用トレンチは連番を付し、必要に応じて写真記録、図面作成を行った。以下では、今回の調査地の地形及び土層の堆積につ

図 11　トレンチ配置

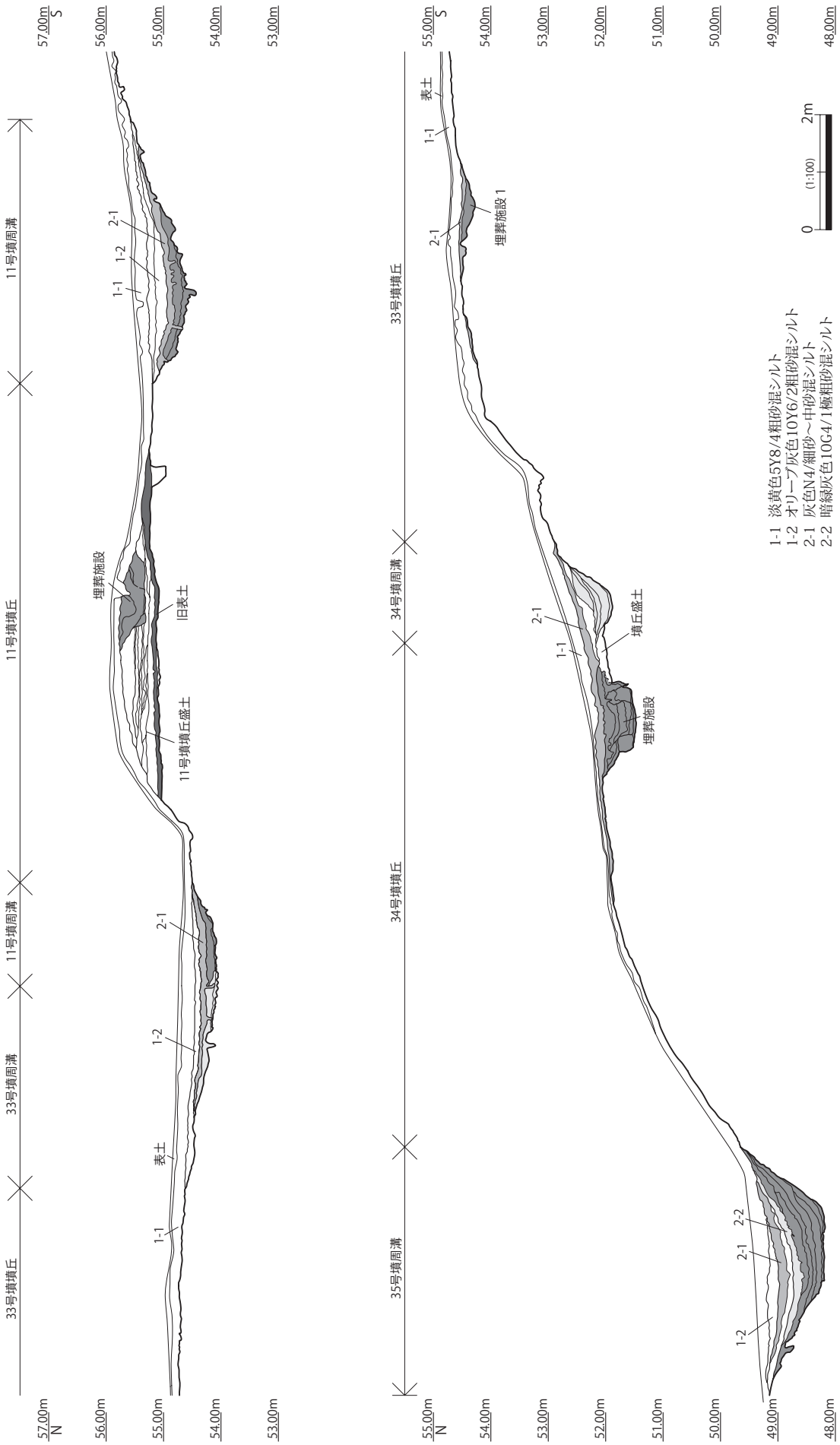

33号墳墳丘
33号墳周溝
11号墳周溝
11号墳墳丘
11号墳周溝
57.00m
56.00m
55.00m
54.00m
53.00m
S
N
埋葬施設
旧表土
11号墳墳丘盛土
表土
1-1
1-2
2-1
35号墳周溝
34号墳墳丘
34号墳周溝
33号墳墳丘
55.00m
54.00m
53.00m
52.00m
51.00m
50.00m
49.00m
48.00m
埋葬施設 1
墳丘盛土
2-2
0
(1:100)
2m
1-1 淡黄色5Y8/4粗砂混シルト
1-2 オリーブ灰色10Y6/2粗砂混シルト
2-1 灰色N4/細砂～中砂混シルト
2-2 暗緑灰色10G4/1極粗砂混シルト

図12　6トレンチ　断面

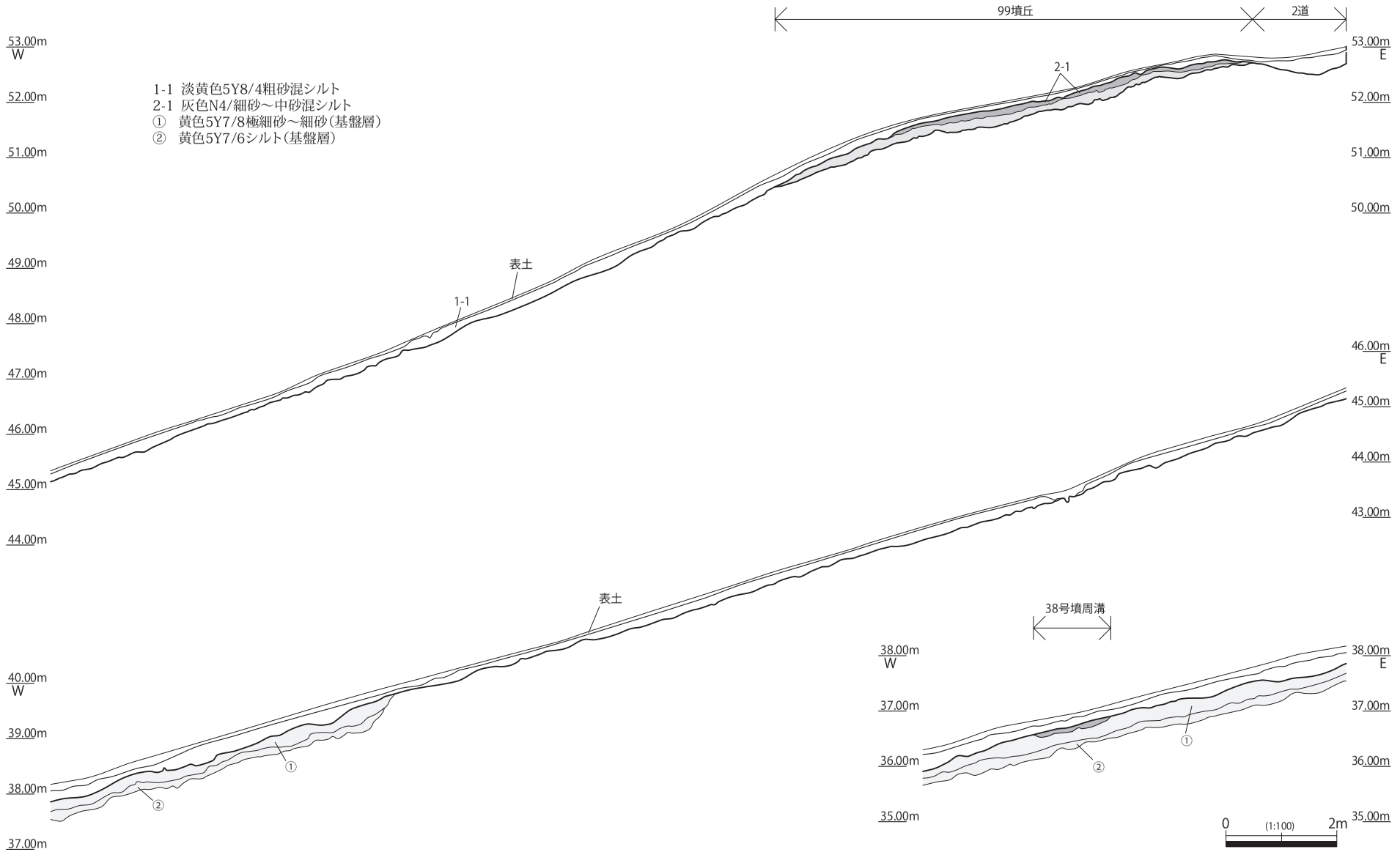


図 13　19・21 トレンチ　断面

いて、南北および東西尾根を縦断する６トレンチと 19・21 トレンチを図 12・13 に示し、各土層の特徴について報告を行う。なお、同じ土層であっても各地点の堆積環境によって土質は異なる場合があった。

表土

近代～現代。層厚３～５㎝で、極細砂混シルトを基調とし、調査地全域に認められた。土器底部の破片及び昭和 10 ～ 15 年に製作された陶製玩具が出土した。

１層

中世～近世。1-1 層は層厚５～ 15 ㎝で、中砂～粗砂混シルトを基調とし、調査地全域に認められた。須恵器、瓦質土器、鉄釘が出土した。南北尾根の 1-1 層上面では、３平坦部とそれに伴う 93 土手、94 溝を検出した。また、1-1 層下面遺構として８溝を 17 平坦部で確認した。1-2 層は層厚５～ 10 ㎝、粗砂混シルトを基調とする。周溝内及び斜面などに堆積する。

２層

調査地内で確認した古土壌を２層とした。古墳周溝や斜面部など低所を中心に堆積し、灰～暗、黒色を帯びる 2-1 層は、層厚 10 ㎝、細砂～中砂混シルトを基調とし、土師器、須恵器が出土した。古墳時代中期～古墳時代終末期にかけて形成されたと考えられる。

2-1 層と間層を挟んで明瞭に分離できる古土壌を 2-2 層とした。35 号墳周溝内に堆積する 2-2 層からは、古墳時代前期の土師器が出土した。また、11・26 号墳の墳丘基底面となる表土は、調査地内で認識した古土壌の３層目の土層にあたり、本文中では「旧表土」と表記した。

３層

基盤層を３層とした。基盤層は、鳥取層群の上部に堆積する層で構成される。南北尾根では、南側から中央にかけて石英安山岩から灰白色泥岩が認められた。調査地北側及び東西尾根は、風化した赤色シルト質粘土～黄褐色シルト質粘土が堆積する。東西尾根ではその上部に黄色シルト、黄色極細砂～細砂の堆積が認められた。これらの基盤層上部には、崩落や地滑り等によって形成されたシルト層や土壌化あるいは風化によって堆積したシルト層が堆積していた。また、南北尾根では、調査地外の東側で流紋岩系安山岩の露頭部が認められた。

南北尾根の基盤層の標高は、南側 57.4 ～ 57.7 m、北側 49.0 ～ 49.2 mを測り、最大で 8.7 mの比高差がある。11 号墳の築造された場所から旧松原展望台（標高 89.0 m）があった南側にかけての比高差は 31.6 mあり、急激な傾斜となる。東西尾根の基盤層の標高は、東側 33 号墳の墳頂部で 54.7 m、38 号墳の西側で 36.0 mを測り、最大 18.7 m以上の比高差があった。

第２節　古墳時代以前の調査

１）概要（図 14・15、巻頭図版２、図版２・４）

2-2 層及び 11・26 号墳の基底面を構成する旧表土を除去した基盤層（３層）上面を第３面として調査を行った。旧表土及び検出した遺構から時期を示す遺物が出土していないため、時期の詳細は不明である。ただし、11・26 号墳の築造時期から古墳時代中期以前の遺構面と考えられる。なお、調査地の大半は、１～２層の除去を行った段階で基盤層が露出しており、帰属する遺構面が不明な遺構を第３面として調査を行った。

第３面では、溝、土坑およびピットを検出した。11 号墳の旧表土を除去して検出した溝、ピット

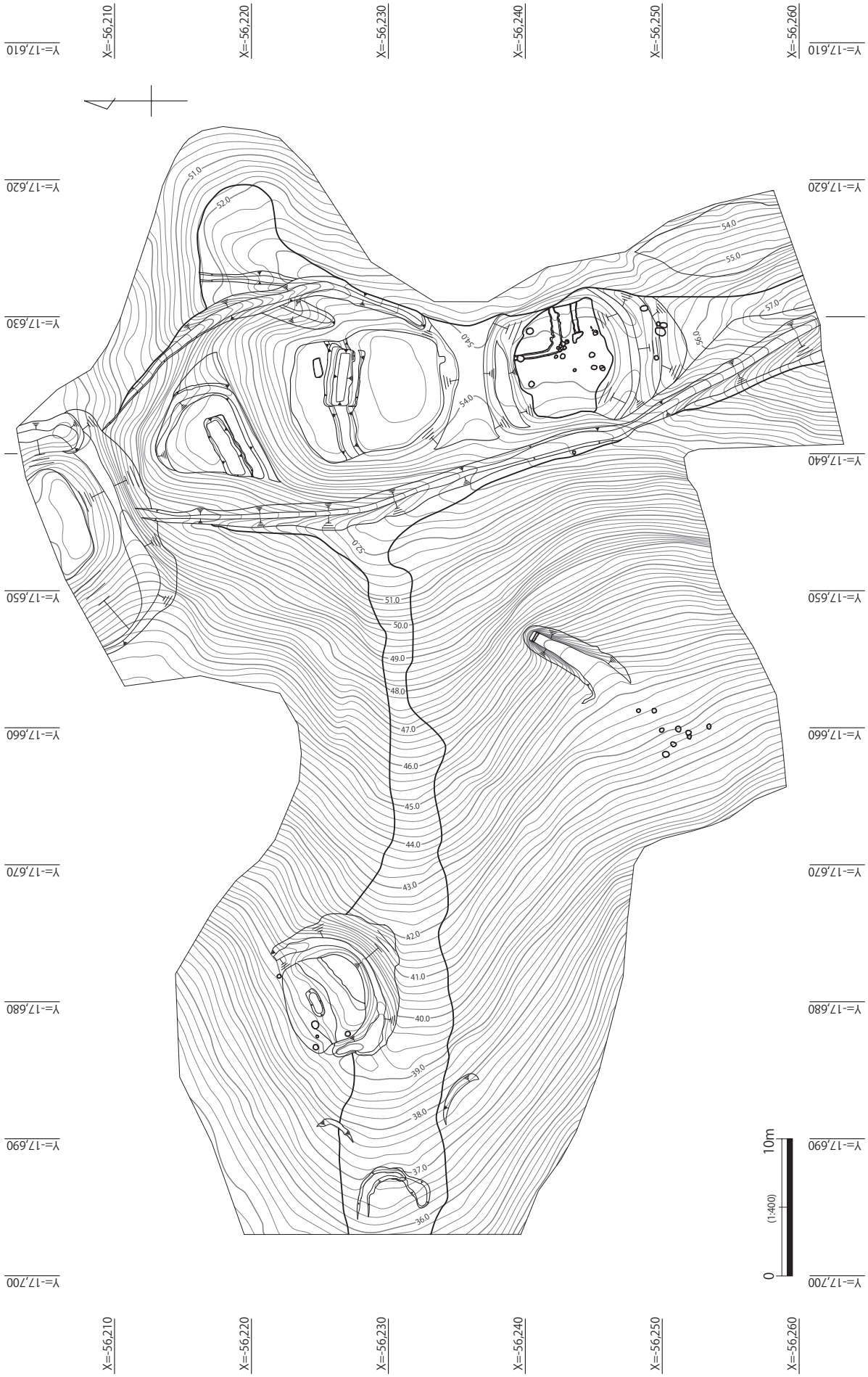

X=-56,210
X=-56,220
X=-56,230
X=-56,240
X=-56,250
X=-56,260
Y=-17,610
Y=-17,620
Y=-17,630
Y=-17,640
Y=-17,650
Y=-17,660
Y=-17,670
Y=-17,680
Y=-17,690
Y=-17,700
51.0
52.0
54.0
55.0
56.0
57.0
54.0
54.0
52.0
51.0
50.0
49.0
48.0
47.0
46.0
45.0
44.0
43.0
42.0
41.0
40.0
39.0
38.0
37.0
36.0
0
(1:400)
10m

図14　第3面　平面

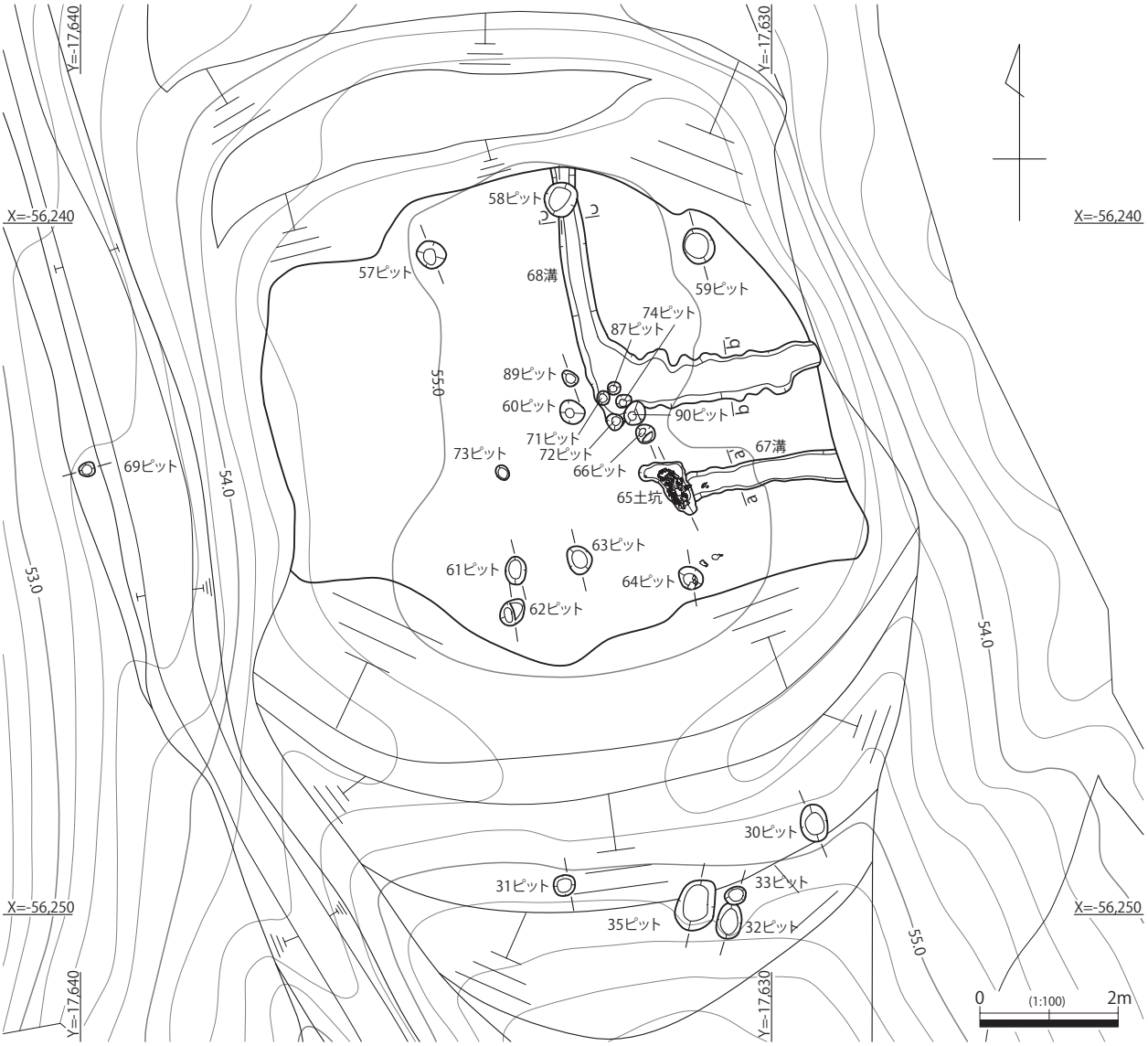


図 15　第 3 面　11 号墳周辺部　平面

は明確な掘方を持ち、深く掘り込まれたものが多かった。被熱粘土塊を出土しているものもあることから人為的に掘削されたものと判断した。一方、26 号墳及び 1 号横穴墓の平坦部で確認したピット状の凹みは、断面形が不整形で植物の根状を呈しており、最終的に生痕と判断した。

2）検出した遺構

11 号墳の基底面を構成する旧表土を除去した面と、11 号墳南側周溝の肩部を中心に溝、土坑およびピットを検出した。11 号墳周辺は、北側を 1-1 面平坦部造成時に、南側を 11 号墳周溝掘削時に改変を受けており、本来は図 15 で示した範囲外にも遺構が広がっていた可能性がある。

65 土坑（図 16、図版 4）

67 溝西側、68 溝南側で検出した。旧表土上、内では掘方が検出できなかったため、最終的に基盤層上面まで掘り下げを行い掘方を確認した。平面形は不整形である。中央部で東西 0.40 m、南北 0.83m、深さ 0.17 mを測る。埋土は被熱粘土塊を含む灰黄褐色シルトで、ブロック状を呈する。67 溝と重複関係にあり、67 溝が新しい。65 土坑周辺や埋土に被熱を受けた痕跡は認められなかった。また、大小の被熱粘土塊が入り混じって出土しているが、規則性は認められなかった。

67 溝（図 17）

65 土坑の東側で検出した。幅 0.30 ～ 0.40 m、深さ 0.04 mを測る。埋土は極細砂混シルトを基調とする。埋土の上部には旧表土が堆積しており、旧表土が形成される段階には、浅い凹みであったと考えられる。65 土坑のものと考えられる被熱焼土塊が出土している。

68 溝（図 17）

65 土坑の北側で検出した。幅 0.30 ～ 0.90 m、深さ 0.03 ～ 0.08 mを測る。L 字状に曲折しており、東西方向では掘方の立ち上がりが不明瞭であった。埋土上層は、炭化物を微量に含む粘質シルト、下層がシルトブロックを含む粘質シルトである。68 溝から遺物は出土しなかった。

ピット（図 17）

11 号墳直下及びその周辺で検出したピットは、総数 22 基である。埋土は灰色 5Y4/1 極細砂混シルトと、灰色 5Y6/1 極細砂混シルトを主体とするものに分類でき、それぞれ異なる地表面から掘り込まれた可能性がある。平面形は円形～楕円形で、深さは 0.04 ～ 0.46 mを測る。断面形はU字状や皿状を呈するものがあり、58 ピットや 89 ピットのように明瞭な掘り込みを持たないものも含まれる。64 ピットから被熱粘土塊が出土しており、65 土坑のものと接合している。これ以外に遺物は出土していないため、詳細な時期は不明である。

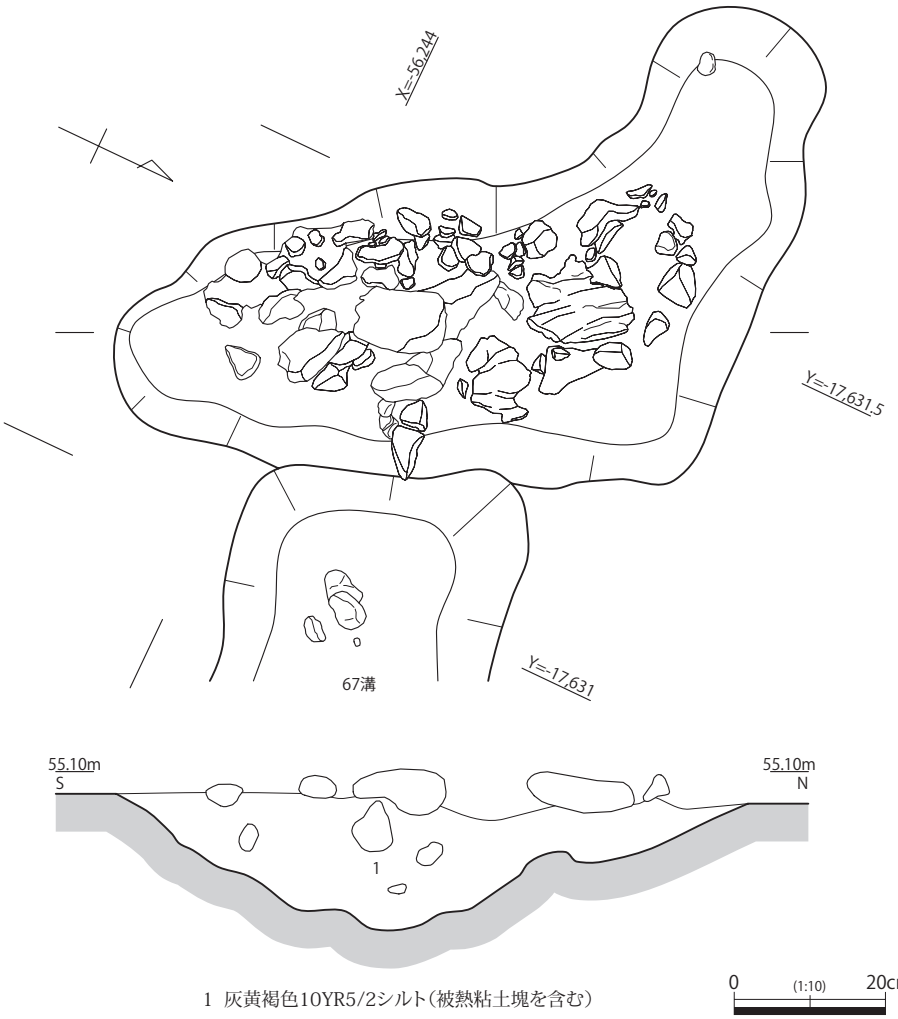
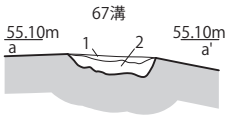
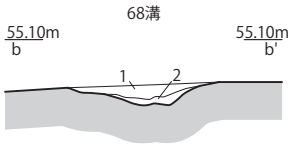


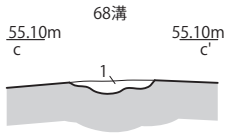
図 16　65 土坑　平、断面



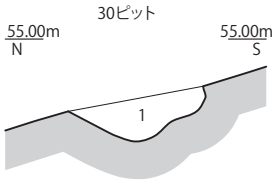
1 褐灰色10YR5/1極細砂混シルト
2 浅黄色5Y7/3極細砂混シルト(灰色5Y6/1シルトブロックを含む)



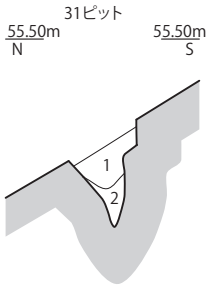
1 灰色10Y4/1極細砂混粘質シルト(炭化物を微量に含む)
2 灰白色5Y7/2粘質シルト



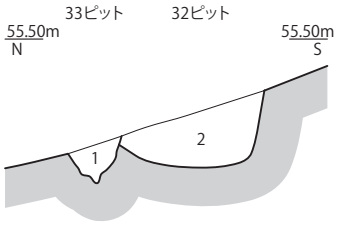
1 灰色10Y4/1極細砂混粘質シルト(炭化物を微量に含む)



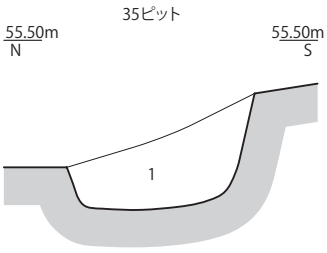
1 灰色5Y6/1粗砂混シルト



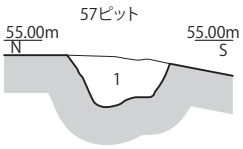
1 灰色5Y6/1粗砂混シルト
2 黄色2.5Y8/6シルト(灰色5Y4/1シルトブロック含む)



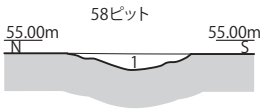
1 灰色5Y6/1粗砂混シルト
2 褐灰色7.5YR6/1極細砂混シルト



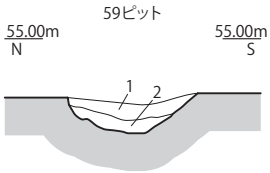
1 灰色5Y6/1極細砂混シルト



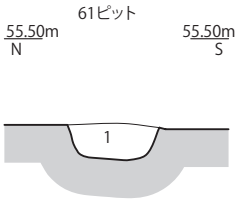
1 灰色5Y6/1極細砂混シルト



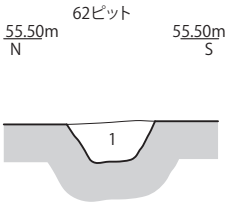
1 灰色5Y4/1極細砂混シルト



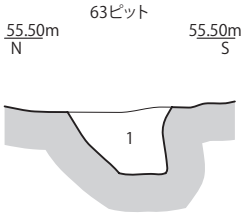
1 灰白色5Y7/2シルト(基盤ブロック)
2 灰色10Y5/1シルト



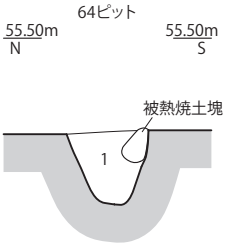
1 灰色5Y6/1極細砂混シルト



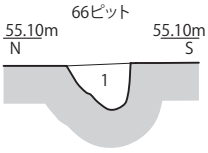
1 灰色5Y6/1極細砂混シルト



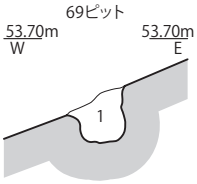
1 灰色5Y6/1極細砂混シルト



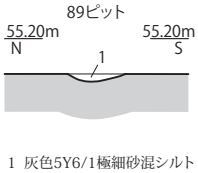
1 灰色5Y6/1極細砂混シルト



1 灰色5Y6/1極細砂混シルト



1 灰色5Y6/1シルト



1 灰色5Y6/1極細砂混シルト

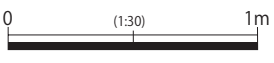


図17　第3面　溝、ピット　断面

図 18　64 ピット、65 土坑　出土遺物

64 ピット、65 土坑出土遺物（図 18、図版 4 ）

64 ピット、65 土坑、67 溝、11 号墳墳丘盛土および旧表土から出土した被熱粘土塊は、総重量 6750 g を測る。64 ピットから 380 g、65 土坑から 3540 g、67 溝から 700 g、11 号墳墳丘盛土及び旧表土から 2130 g が出土した。すべて破片となって出土しており、中には草木類の圧痕や接合痕が残るものがあった。形状は一様ではなく、大きさについても 1 ㎝以下の細片となっているものから、10 ㎝以上のものまで含んでいる。このうち 1 ～ 4 の図化を行った。 1 は 65 土坑出土で、各面に草木類の圧痕が残る。 2 は 64 ピット、65 土坑出土で、接合資料である。表面が平坦で、裏面に草木類の圧痕が観察された。 3 は 65 土坑出土で、断面形が半円形を呈し、側面には接合痕が残る。 4 は 65 土坑出土で、やや丸みを帯びた平坦な面をもち、接合痕が筋状の凹凸となって観察される。

第３節　古墳時代の調査

１）古墳、横穴墓の立地と構成（図 19）

今回の調査地で確認した古墳と横穴墓は、大きく分けて南北尾根、東西尾根、南西斜面に立地する。南北尾根には、古墳時代前期中葉～後葉の 33 ～ 35 号墳、古墳時代中期前葉～中葉の 11 号墳が立地する。東西尾根には、古墳時代中期後葉～後期中葉の 26・38 号墳が立地する。南西斜面には、古墳時代終末期の 1 号横穴墓が立地する。

尾根あるいは斜面ごとに時期的なまとまりを持って古墳と横穴墓は築造されており、以下では南北および東西尾根、南西斜面に分けて調査成果を報告する。

２）南北尾根の調査

ａ）概要

南北尾根では、33 ～ 35・11 号墳の 4 基を確認した。古墳時代前期に 33・34 号墳が築造される。35 号墳は墳丘が調査地外に当たるため、時期の詳細は不明である。古墳は 35 号墳北側においても分布しており、古墳時代前期～中期にかけて南北尾根上に順次築造していったことが想定できる。

11 号墳以南から旧中国自然歩道の松原展望台までは傾斜が急峻で、H19 試掘 1 トレンチにおいても遺構は確認されていない。また、南北尾根北側、北東方向にのびる尾根を北東斜面として調査した。調査前の北東斜面は、後世の改変に伴い墳丘状を呈する部分があったため、古墳の存在を想定した。しかし、南北尾根から分岐する基盤岩の高まりを確認したに留まった。

ｂ）33 号墳

概要

南北尾根の中央、11 号墳の北側に位置する。33 号墳は、H19 試掘によって埋葬施設の存在が指摘されていたため、11・35 号墳の間に古墳の存在が想定された。

1-1 層を除去した段階で、埋葬施設 1 の直上に堆積する 2-1 層と 11・33 号墳の周溝を検出した。周溝掘削と並行し、33 号墳の埋葬施設の検出作業を行ったところ、33 号墳の中央部で基盤ブロックを含むシルトが溝状に落ち込む部分を確認した。H19 試掘トレンチ周辺が当該場所にあたる。

この溝状落ち込みは、平面形の検討や埋葬施設の床面を形成する中砂～粗砂の確認によって、埋葬施設 1 であることが判明した。同時に、この埋葬施設の周辺を精査したところ、埋葬施設 1 北側で主軸が異なる埋葬施設 2 を検出した。

なお、二段墓壙である埋葬施設 1 の二段目掘方は東側に方形の突出部を持っており、当初この部分を埋葬施設と想定した。断ち割りを行ったところ、二段目掘方と重複関係がないことが判明し、二段目掘方の一部として最終的に評価した。

埋葬施設 1 は、一段目掘方の内側で棺痕跡を確認した後、床面まで掘り下げを行い、遺物出土状況等の記録後、完掘を行った。埋葬施設 2 は、検出面からの遺存状況が悪いこともあり、棺痕跡は確認できなかった。床面の調査を行って完掘を行い、33 号墳埋葬施設の調査を終了した。

墳丘と周溝（図 20・21、図版 5）

33 号墳は方墳で、南北 14.38 ～ 16.00 m（34 号墳の南側周溝の肩部まで）、東西 13.11 m（1 道と 2 道の間）を測る。東西は後世に改変されており正確な規模は不明であるが、南側周溝で北側への屈曲がみられることから、南北に長い長方形の墳形であったと考える。

第Ⅳ章　松原古墳群の調査

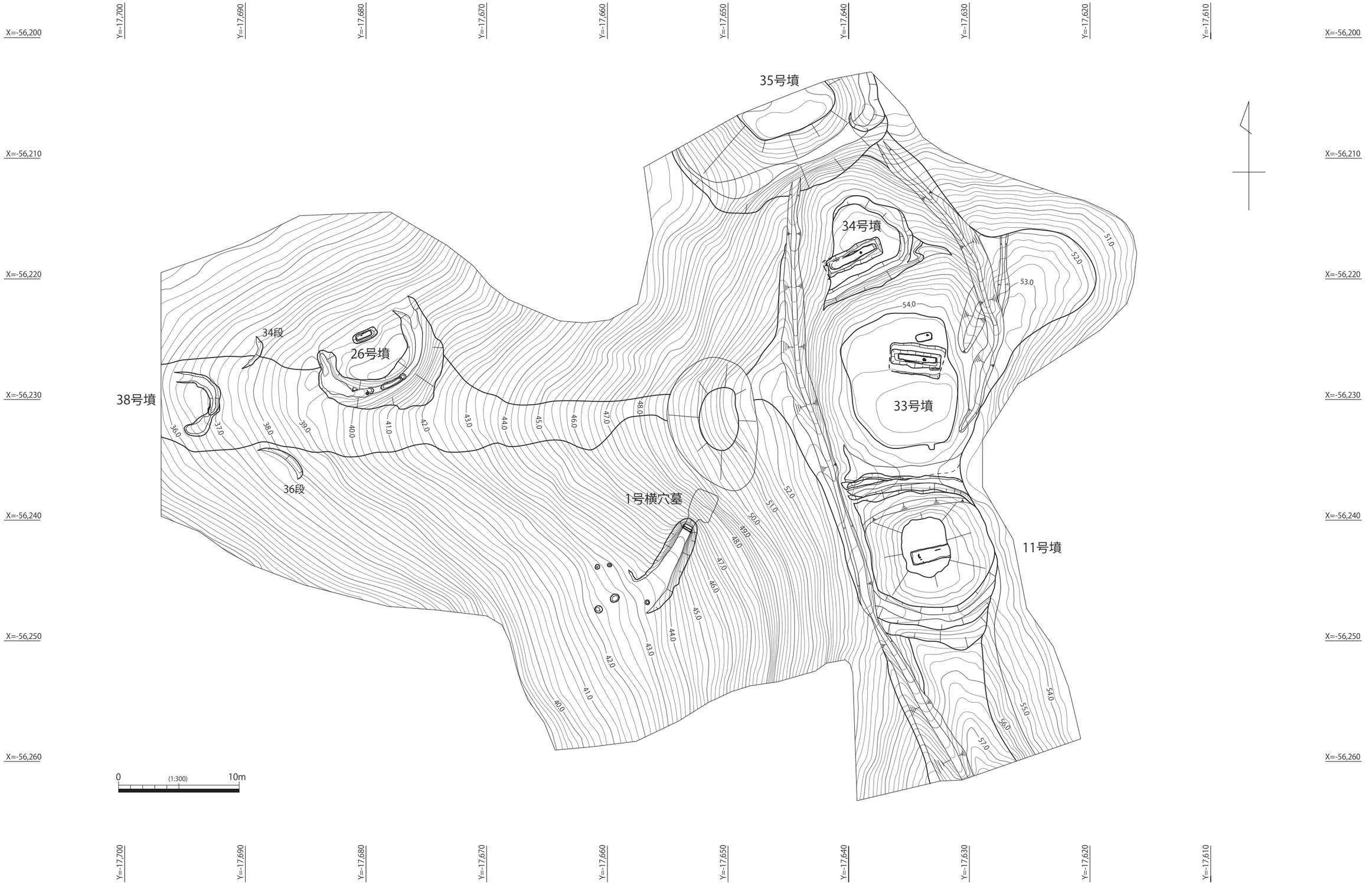


図 19　古墳、横穴墓　平面

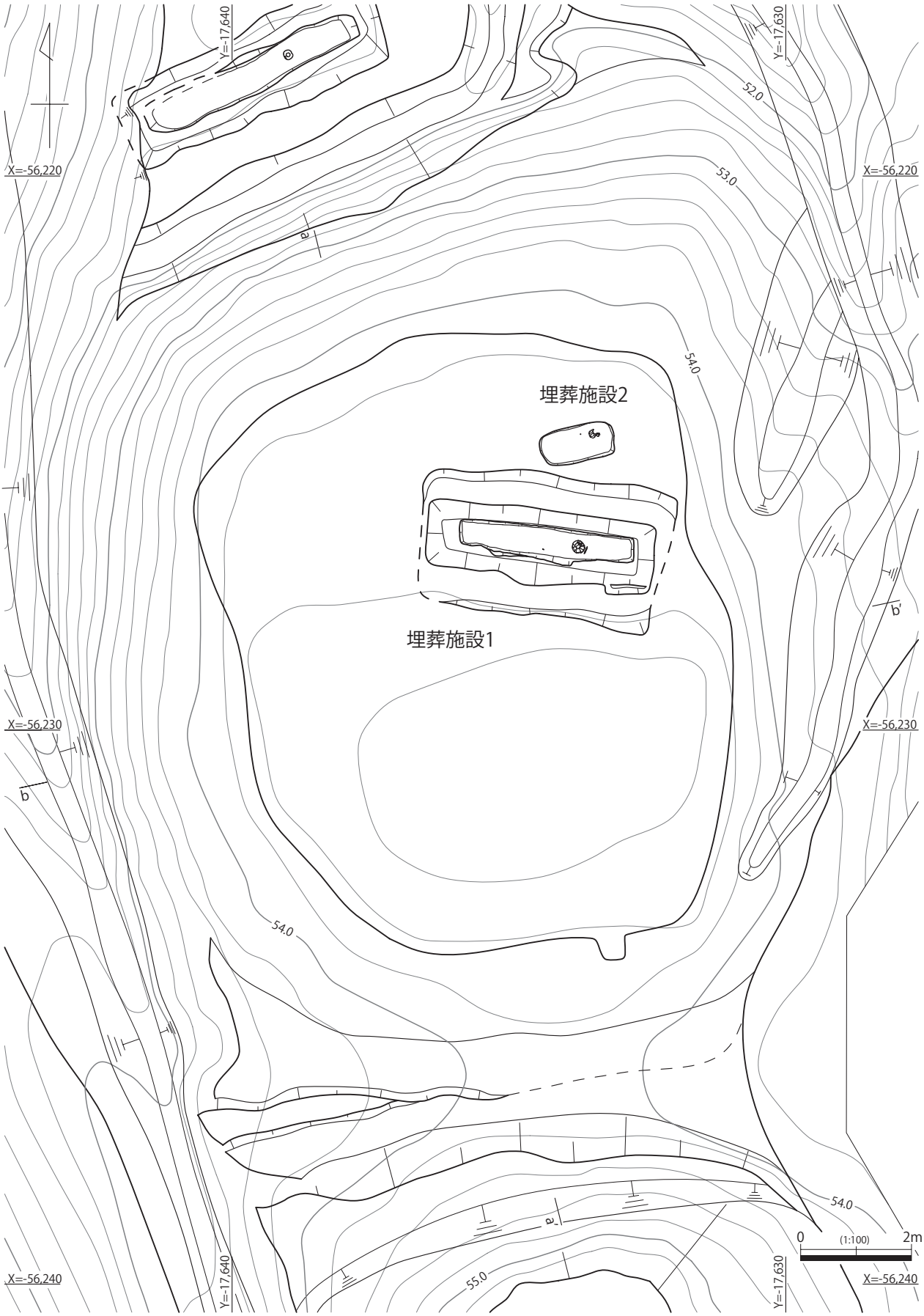

Y=-17,640
Y=-17,630
X=-56,220
X=-56,230
X=-56,240
52.0
53.0
54.0
55.0
埋葬施設2
埋葬施設1
a
a'
b
b'
0
(1:100)
2m

図 20　33 号墳　平面

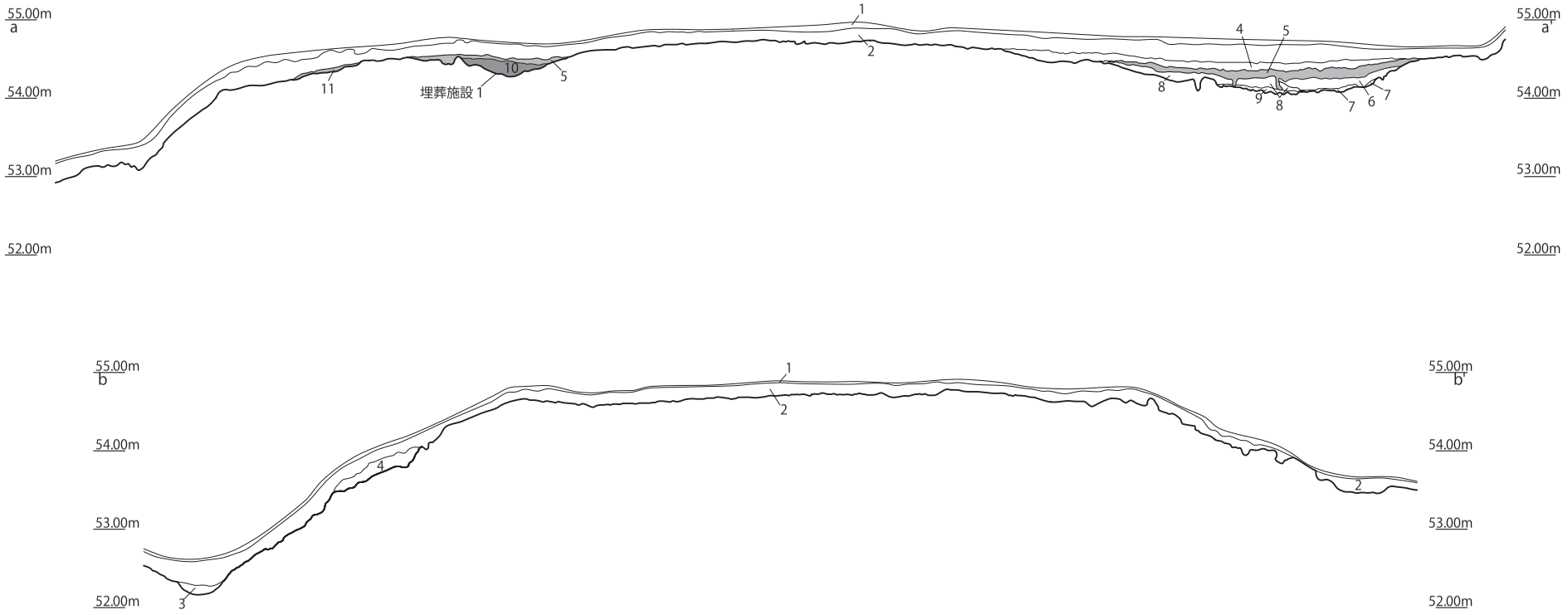
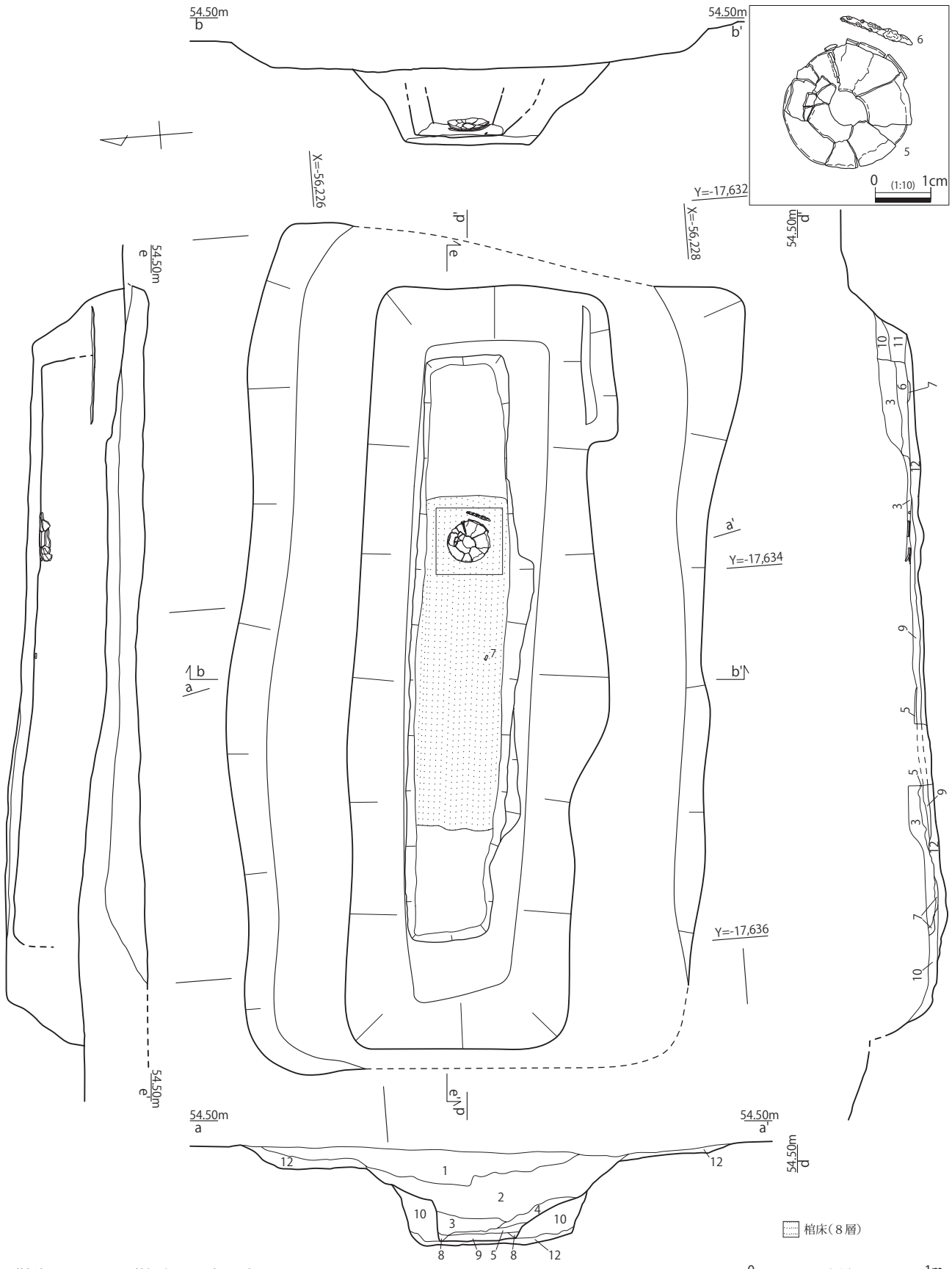

55.00m
a
54.00m
53.00m
52.00m
a'
埋葬施設１
b
b'
1 表土
2 淡黄色5Y8/4粗砂混シルト(1-1層)
3 灰白色5Y7/2粗砂混シルト(98道埋土)
4 オリーブ灰色10Y6/2粗砂混シルト(1-2層)
5 灰色10Y4/1粗砂混シルト(2-1層)
6 暗青灰色5BG4/1中砂～粗砂混シルト(11号墳周溝埋土)
7 明黄褐色2.5Y6/6シルト(加工時形成層)
8 灰黄色2.5Y6/2中砂～粗砂混シルト(33号墳周溝埋土)
9 明黄褐色2.5Y7/6シルト(33号墳周溝埋土)
10 にぶい黄橙色10YR6/4シルト(基盤層ブロックを含む、33号墳埋葬施設１)
11 灰色10Y4/1粗砂混シルト(古土壌)
0
(1:80)
2m

図 21　33 号墳　断面



1　明黄褐色10YR7/6シルト(基盤ブロックを多量に含む)
2　黄橙色10YR7/8シルト
3　明黄褐色2.5Y7/6シルト(やや粘性あり)
4　にぶい黄色2.5Y6/3極細砂混シルト(基盤ブロックを少量含む)
5　浅黄色5Y7/3極細砂混シルト
6　浅黄色5Y7/4極細砂～細砂混シルト
7　褐灰色10YR6/1シルト
8　浅黄色5Y7/3極細砂混シルト(弱い粘性あり)
9　黄灰色2.5Y5/1中砂～粗砂(棺床)
10　灰黄色2.5Y7/2シルト(極細砂～細砂微量に含む)
11　明黄褐色10YR7/6シルト(粘性あり)
12　浅黄色5Y7/4シルト(基盤ブロック)

図 22　33 号墳　埋葬施設 1　平、断、立面

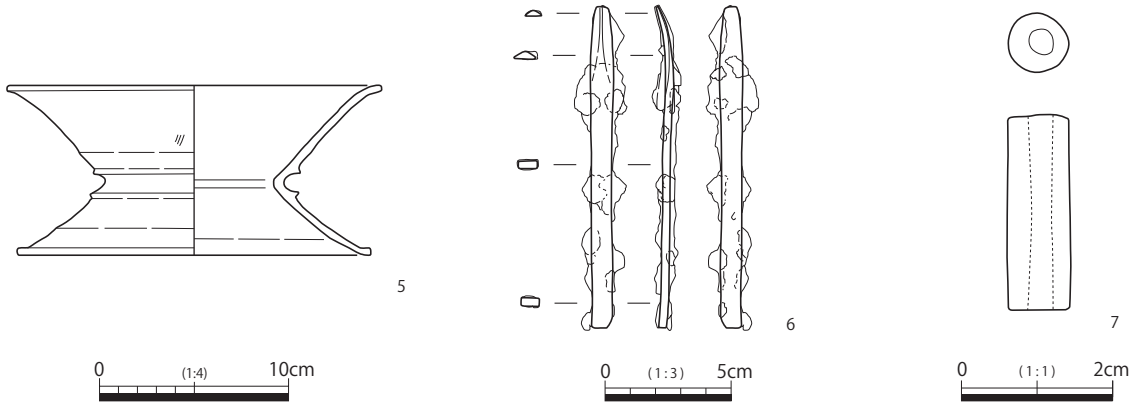


図 23　33 号墳　埋葬施設 1　出土遺物

周溝は、尾根高位となる南側に掘り込まれている。11 号墳の北側周溝に切られているため全容は不明である。残存幅 2.70 ～ 3.80 m、墳頂部から深さ 0.72 mを測る。

埋葬施設 1（図 22、巻頭図版 3、図版 6）

墳丘の中央から北寄りに位置し、南北尾根に直交する二段墓壙の埋葬施設である。一段目掘方は平面形が長方形で、長軸 4.57 m、短軸 2.61 mを測る。検出面から 0.11 mで緩やかに段をなし、基盤層上面を平坦に加工している。東西の段は後世の改変や土壌化の影響により検出できなかった。

二段目掘方は平面形が長方形で、長軸 4.11 m、短軸 1.20 ～ 1.40 m、深さ 0.42 mを測る。先述したとおり、掘方南東側が方形に張り出しており、断面形は階段状をなしている。

棺痕跡は、二段目掘方検出面から 0.2 m～ 0.4 m掘り下げた時点で確認した。平面形は長方形を呈し、主軸はＥ－５°－Ｓを取る。長軸 3.16 m、短軸 0.46 ～ 0.64 m、深さ 0.22 mを測る。底面に近いところまで掘り下げを行わないと棺痕跡が確認できない部分があった。

床面は、基盤ブロックと中砂～粗砂を用いて整形している。砂を用いた床面は棺痕跡の中央、長軸 1.80 mの範囲で検出しており、断面形は凸状を示し、中央部が緩やかに盛り上がっている。なお、裏込めは、底面と同質の基盤ブロックを用いていた。

また、床面東西の小口両側において褐灰色を呈するシルト（図 22- 7 層）を検出した。層厚 0.02 m以下で立ち上がりが明瞭ではなかったことから、小口板の痕跡ではないと考えられる。

出土遺物（図 23、図版 6）

床面から土師器、鉄鉇、碧玉製管玉が出土した。５は土師器で、器種は鼓形器台である。脚台部を打ち欠いて、土器枕として用いられた。受部外面にハケメが残る。６は鉄鉇である。刃先を南西に向けて、鼓形器台の東側から出土した。７は碧玉製管玉である。中央部南寄りから 1 点出土した。

５は谷口編年Ⅶ - ２期に比定でき、埋葬施設 1 は古墳時代前期中葉に構築されたものと考えられる。

埋葬施設 2（図 24、図版 7）

埋葬施設 1 の北側で検出した。上部は後世の改変により削平を受ける。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸はＥ－ 16°－Ｓである。長軸 1.35 m、短軸 0.61 m、深さ 0.09 mを測る。灰黄色シルトを除去して、基盤ブロックを含む極細砂混シルトで形成される床面を検出した。この床面から土師器、ガラス製小玉が出土した。棺痕跡は確認できなかった。

出土遺物（図 25、図版 7）

床面から土師器、ガラス製小玉が出土した。８は土師器で、器種は鼓形器台である。受部を打ち欠

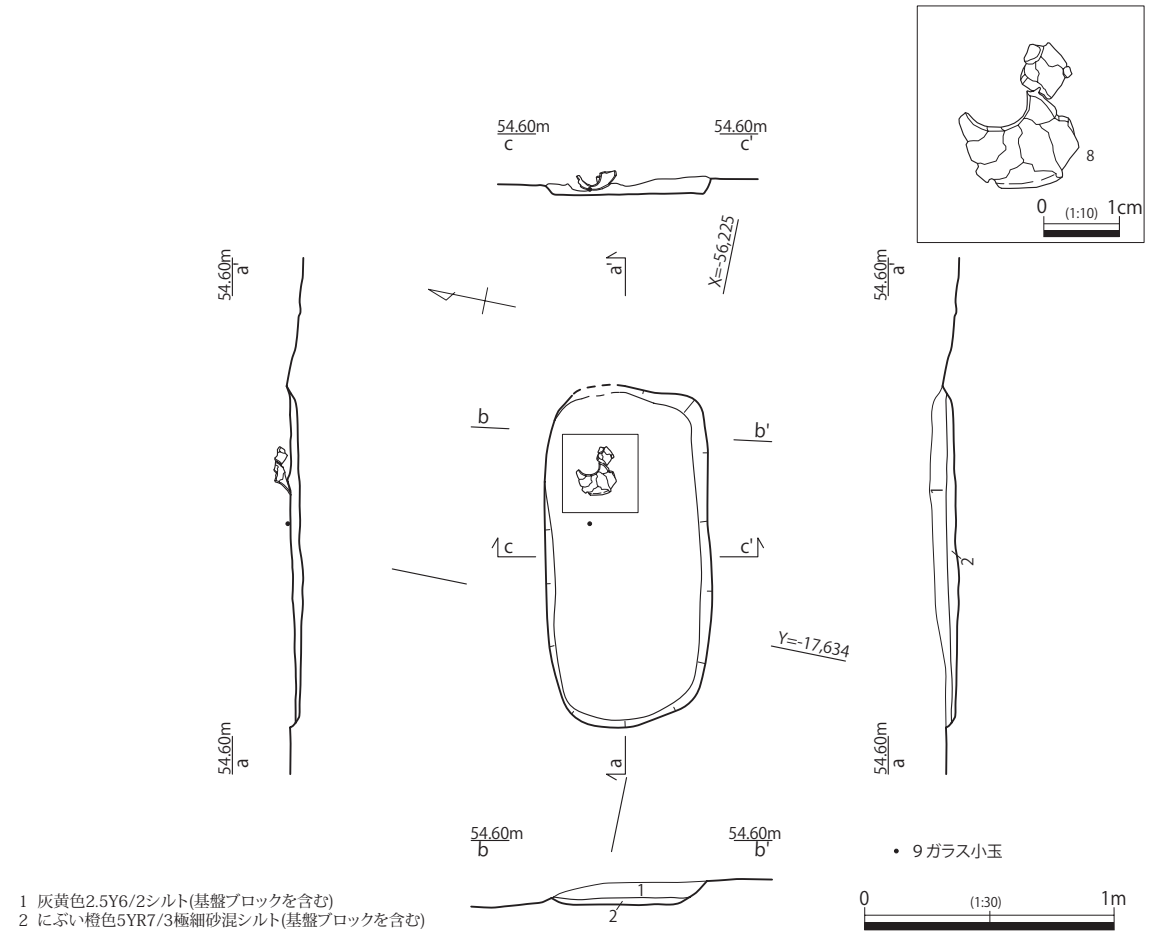


図 24　33 号墳　埋葬施設 2　平、断、立面

いて土器枕として用いたと考えられる。脚台部内面はケズリ調整である。9 はガラス小玉で、1 点のみで、鼓形器台から約 10 ㎝離れて出土した。

8 は谷口編年Ⅶ - 2 期に比定でき、埋葬施設 2 は古墳時代前期中葉に構築されたものと考えられる。

c）34 号墳

概要

南北尾根の中央北寄り、33 号墳の北側で検出した。第 1-1・2 面の調査段階に平坦部として認識しており、墳形は不明なものの、古墳の存在が想定された。2-1 層を除去した面で、尾根高位となる南側において周溝を検出した。この周溝は西側を後世の改変により削平されていたが、南東隅に当たる周溝の屈曲部を良好な状態で検出した。

周溝を掘削した後、埋葬施設の検出作業に入った。墳丘盛土と埋葬施設の裏込めは同質の基盤ブロックを用いていたため、墳丘盛土を除去した基盤層上面まで掘り下げて掘方を検出した。

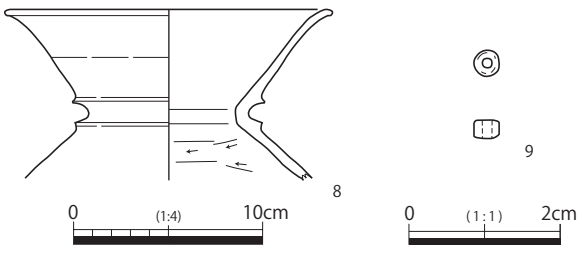


図 25　33 号墳　埋葬施設 2　出土遺物

埋葬施設掘方の中央では、トレンチ断面で棺痕跡を確認したため、次にその検出作業を行なった。棺痕跡は棺腐朽に伴う陥没により上層の土が落ち込んでいたため、やや乱されている部分があるものの、良好な状態で残存していた。棺内、裏込めの順に掘削を行なって埋葬施設を完掘した後、断ち割り作業を行なって 34 号墳の調査を終了した。

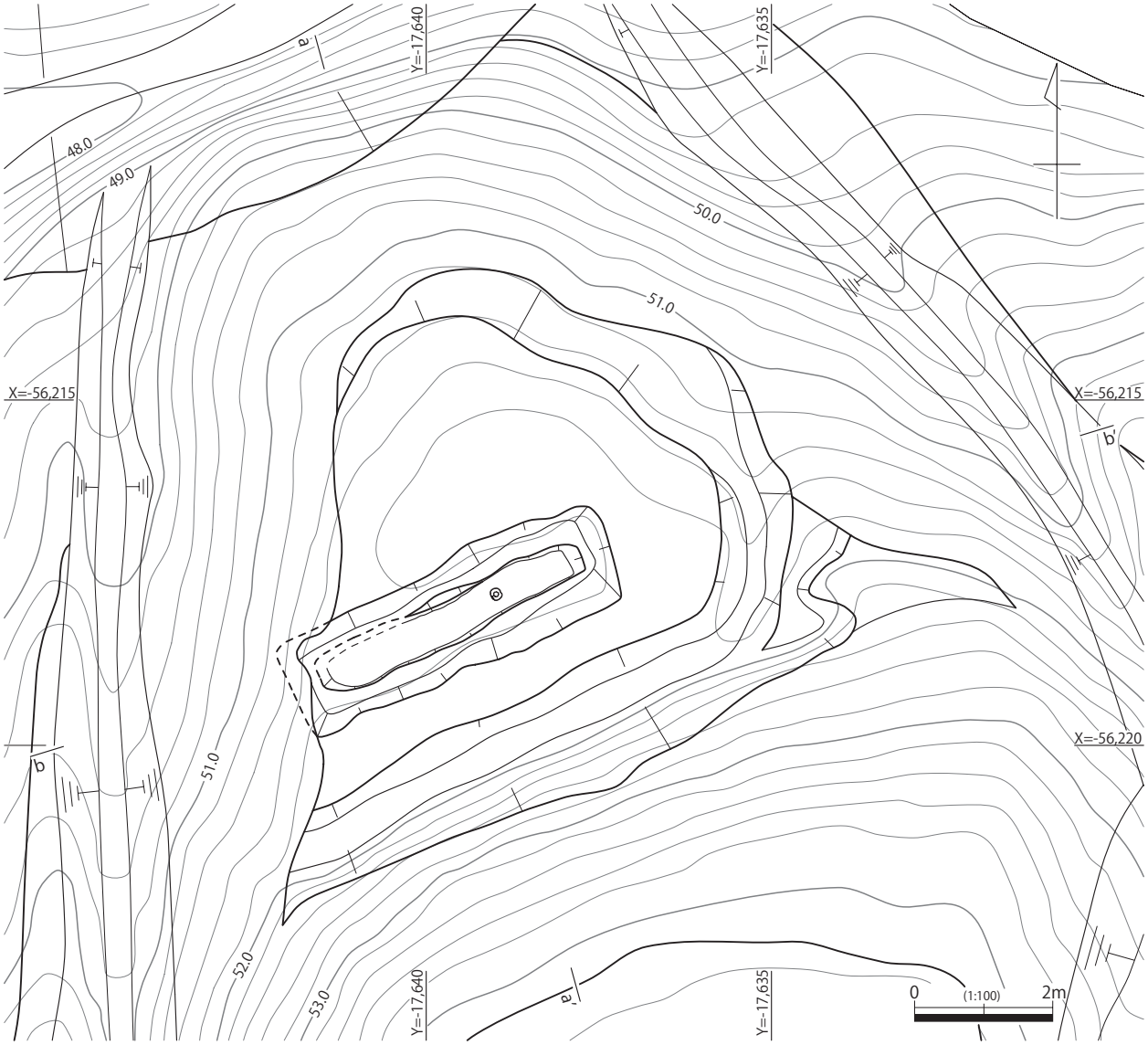


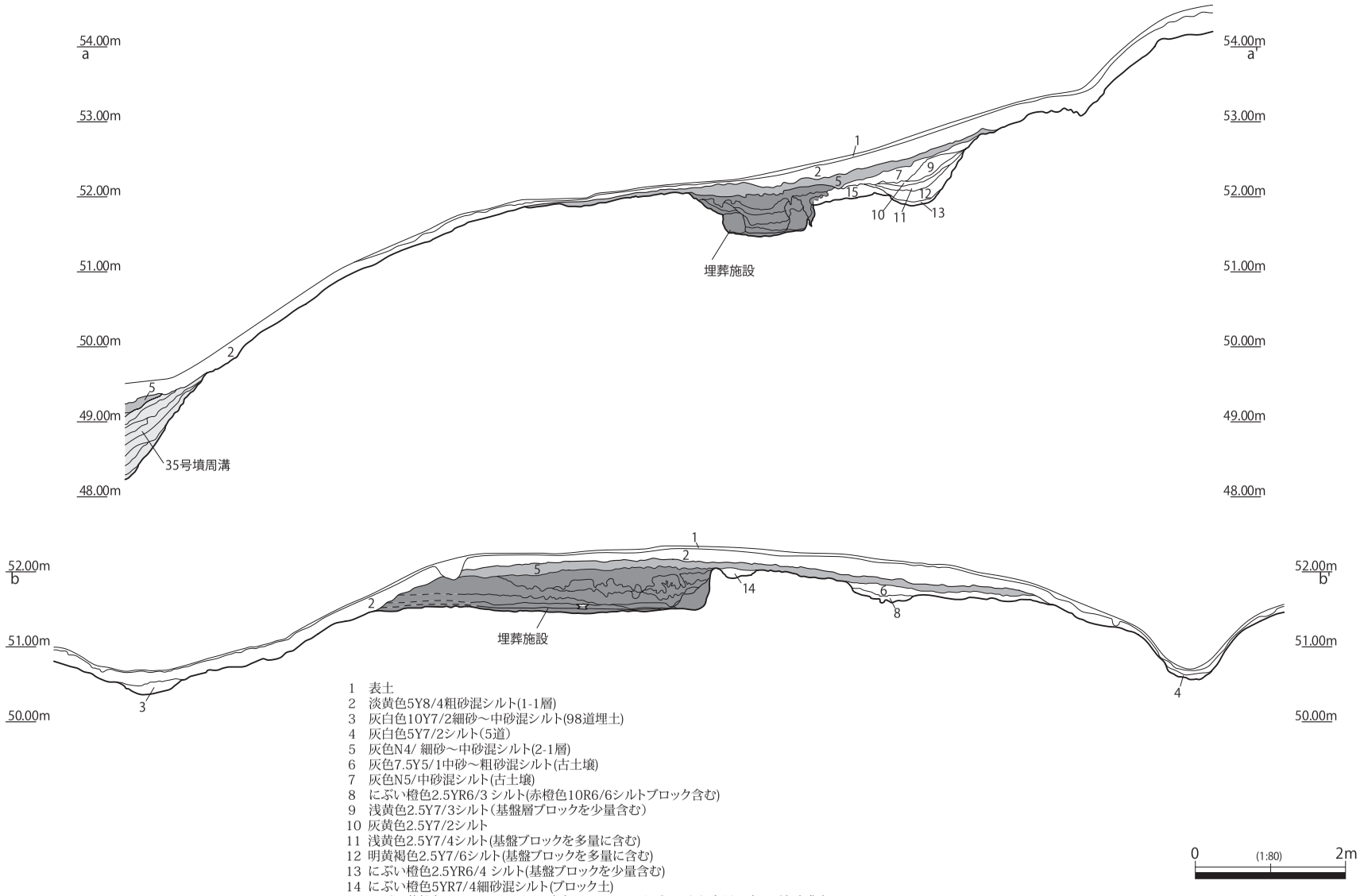
図 26　34 号墳　平面

墳丘と周溝（図 26・27、図版８・９）

墳形は方墳である。ただし、北東側は不整形な形状を示す。この北東側には、2-1 層とした古土壌が堆積しており、古墳築造当初から同様の形状を示していたと考えられる。南北は 8.31 ～ 8.56 m（34 号墳の南側周溝肩部まで）、東西は 8.83 m（２道東側肩部まで）を測る。北および西側は後世の改変により詳細は不明である。

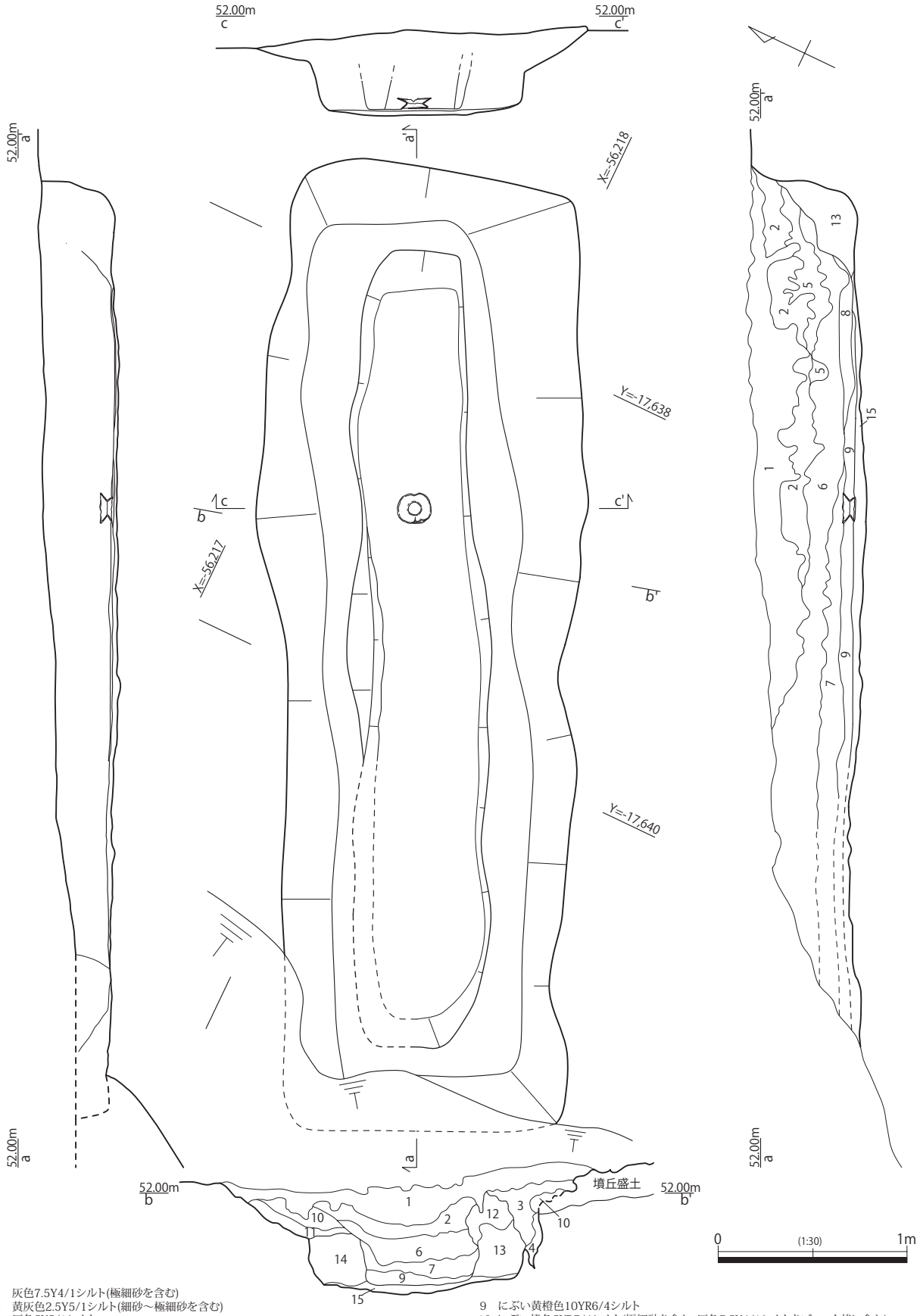
墳丘盛土は墓壙南側でのみ確認できた（図 30）。地山を平坦に整形した後、基盤ブロックを用いて盛土を行っている。先述のとおり、この盛土は埋葬施設裏込めと土質が同じで、図 28-10 層と墳丘盛土の層境はブロック土の単位の違いを示している。

周溝は尾根の高位側に掘り込まれており、南東部で屈曲する。南側周溝は幅 1.10 ～ 1.80 m、深さ 0.24 m（墳頂部からの計測値）である。東側周溝は、幅 0.84 ～ 1.00 m、深さ 0.30 m（墳頂部からの計測値）である。南北方向の周溝掘方は北側に向かって徐々に浅くなり、北東側の斜面では不明瞭となる。南および東側周溝の埋土は、基盤ブロックを含むシルトを主体とする。周溝は、2-1 層とした古土壌の形成時に平坦化している。



1　表土
2　淡黄色5Y8/4粗砂混シルト(1-1層)
3　灰白色10Y7/2細砂～中砂混シルト(98道埋土)
4　灰白色5Y7/2シルト(5道)
5　灰色N4/ 細砂～中砂混シルト(2-1層)
6　灰色7.5Y5/1中砂～粗砂混シルト(古土壌)
7　灰色N5/中砂混シルト(古土壌)
8　にぶい橙色2.5YR6/3 シルト(赤橙色10R6/6シルトブロック含む)
9　浅黄色2.5Y7/3シルト(基盤層ブロックを少量含む)
10 灰黄色2.5Y7/2シルト
11 浅黄色2.5Y7/4シルト(基盤ブロックを多量に含む)
12 明黄褐色2.5Y7/6シルト(基盤ブロックを多量に含む)
13 にぶい橙色2.5YR6/4 シルト(基盤ブロックを少量含む)
14 にぶい橙色5YR7/4細砂混シルト(ブロック土)
15 にぶい黄橙色10YR6/4シルト(灰白色10Y8/1シルトブロックを多量に含む、墳丘盛土)

図 27　34 号墳　断面



1　灰色7.5Y4/1シルト(極細砂を含む)
2　黄灰色2.5Y5/1シルト(細砂～極細砂を含む)
3　灰色5Y5/1シルト
4　にぶい黄橙色10YR7/2シルト
5　黄灰色2.5Y6/1シルト
6　明黄褐色10YR7/6シルト(基盤ブロックを多量に含む、灰色7.5Y4/1シルトブロックを含む)
7　橙色7.5YR7/6シルト
8　にぶい黄橙色7.5YR7/4シルト(基盤層ブロックを少量含む)
9　にぶい黄橙色10YR6/4シルト
10　にぶい橙色5YR7/4シルト(極細砂を含む、灰色7.5Y4/1シルトをブロック状に含む)
11　橙色7.5YR7/6シルト(極細砂～細砂を含む)
12　浅黄橙色7.5YR8/4シルト(灰色7.5Y4/1シルトをブロック状に含む)
13　にぶい黄色2.5Y6/3シルト(灰白色10Y8/1シルトブロックを多量に含む
14　にぶい黄橙色10YR6/3シルト
15　淡橙色5YR8/3シルト(基盤ブロック土)

図 28　34 号墳　埋葬施設　平、断、立面

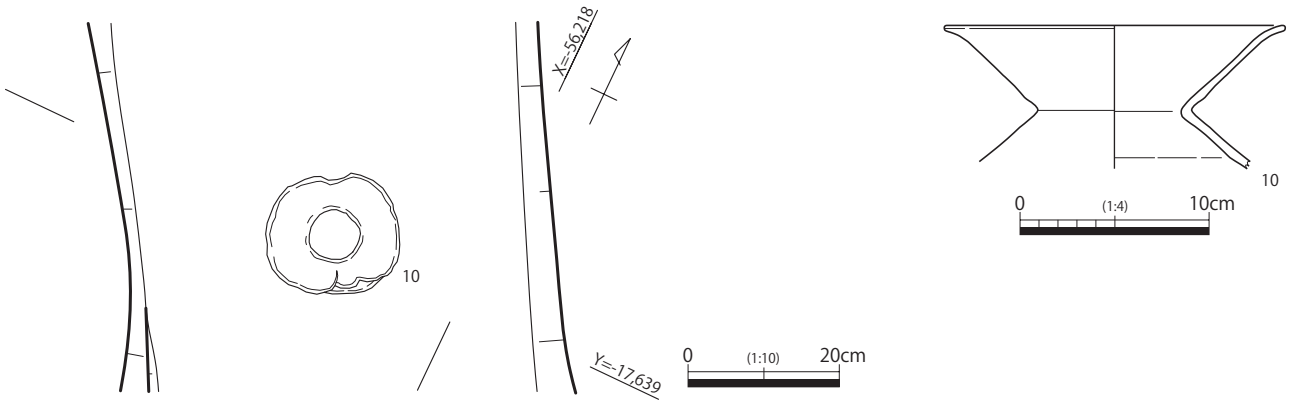


図 29　34 号墳　遺物出土状況　平面、出土遺物

埋葬施設（図 28・29、巻頭図版３、図版８・９）

墳丘の中央より南側で、2-1 層及び墳丘盛土を除去した基盤層上面で検出した。平面形は長方形を呈する。南北尾根に直交し、主軸はＥ－ 26°－Ｎである。長軸 4.86 m、短軸 1.49 ～ 1.72 m、深さ 0.61 mを測る。

棺痕跡は、埋葬施設の掘方検出面から 0.2 m掘り下げた時点で確認した。長軸 4.17 m、短軸 0.57 ～ 0.76 m、深さ 0.55 mを測る。床面は基盤ブロックを用いて整形しており、直上から土師器 1 点が出土した。

出土遺物（図 29、図版９）

10 は土師器で、器種は鼓形器台である。受部を打ち欠いて、土器枕として使用したものと考えられる。遺存状況が悪く、内、外面の調整は不明。

10 は谷口編年Ⅶ - ２期以降、東伯耆の天神川編年Ⅳ期に比定でき、埋葬施設は古墳時代前期後葉に構築されたものと考えられる。

ｄ）35 号墳

概要

南北尾根の北側、34 号墳北側で検出した。調査前から墳丘状の隆起が認められたため、古墳の存在が推測できた。墳丘上には中世以降の道が通っていたほか、現代は旧中国自然歩道の主要なルートであったため、後世の改変が顕著である。

調査は、南北尾根を縦断する６トレンチと墳丘中央に十字に交差する 15・16 トレンチを設置して掘り下げを行った。周溝は、第 2-1 面で深さ 0.3 mの浅い凹みとなって認識できた。遺存状況の悪い部分もあるが、この段階で方形にめぐることを確認している。なお、「第Ⅰ章第２節調査の経過」で述べたとおり、国土交通省と協議した結果、発掘調査は周溝までとし、墳裾～墳丘は保存対象となったため未調査である。

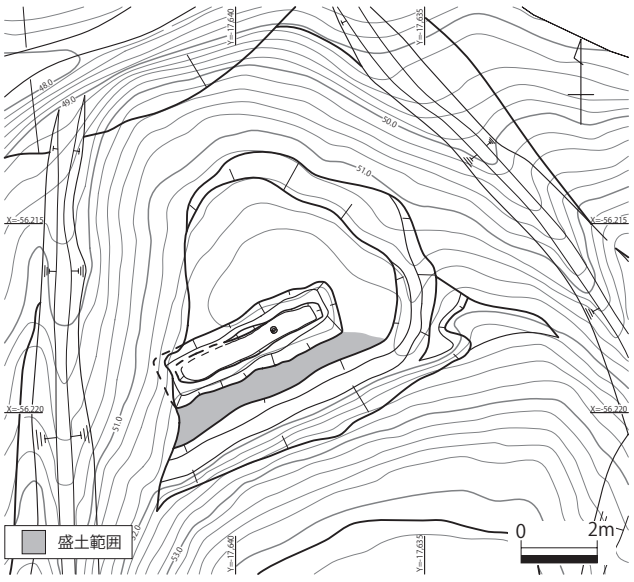


図 30　34 号墳　墳丘盛土範囲　平面

墳丘と周溝（図 31 ～ 33、図版 10）

墳形は方墳である。東西 4.76 ～ 5.16 m、

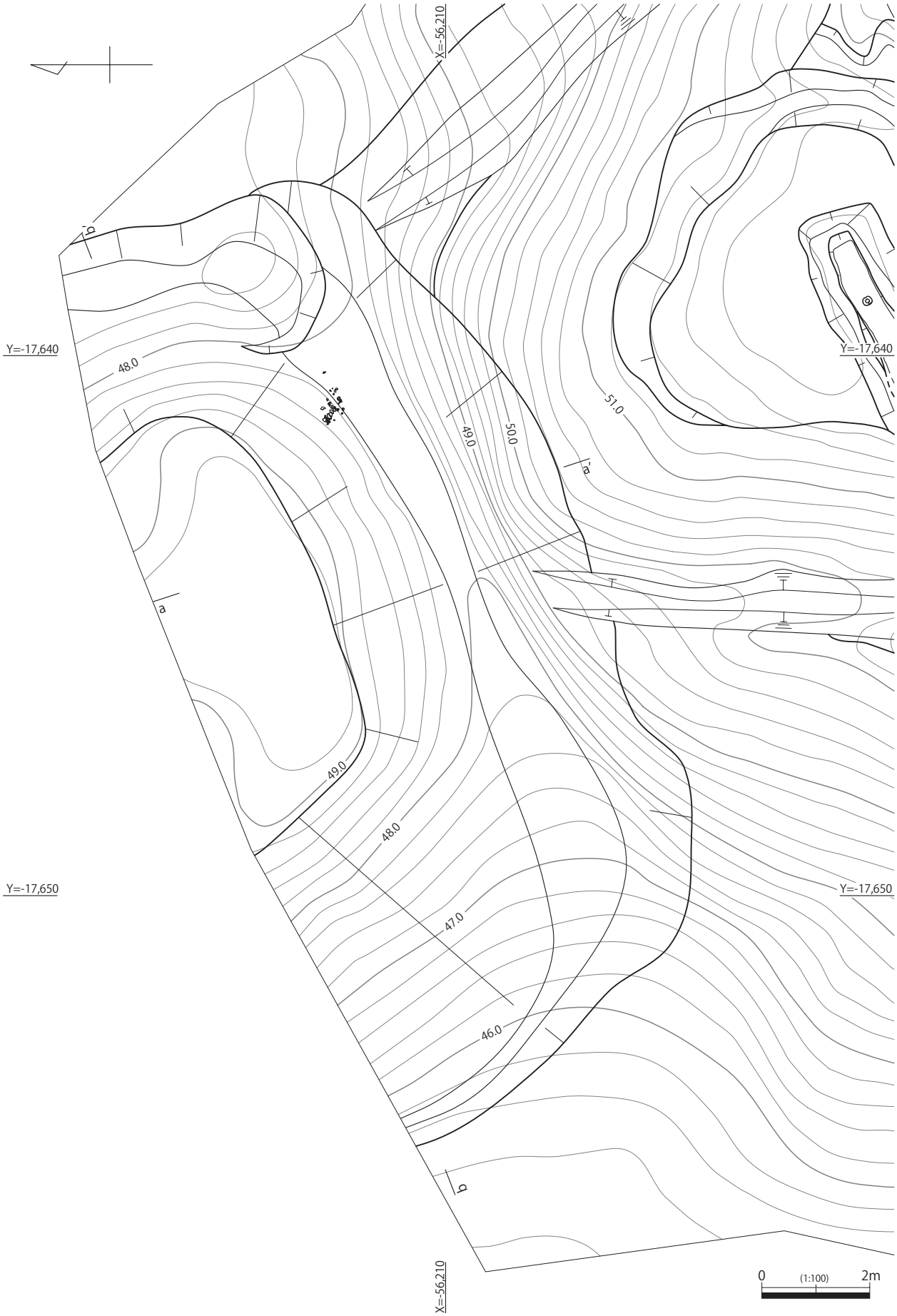
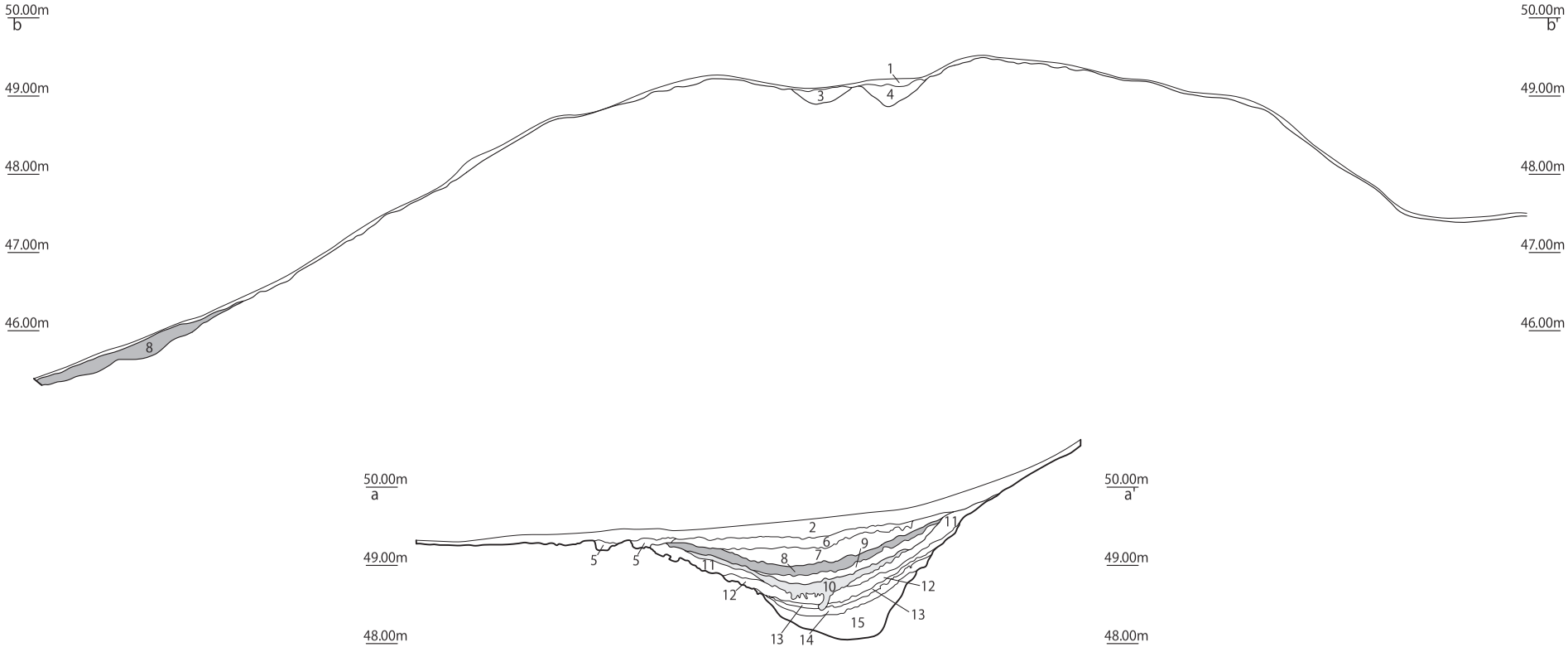


図 31　35 号墳　平面



1　表土
2　淡黄色5Y8/4粗砂混シルト(1-1層)
3　にぶい橙色7.5YR7/3極細砂混シルト(98道)
4　灰褐色5YR6/2細砂混シルト(96道)
5　オリーブ灰色10Y6/2粗砂～極粗砂混シルト(98道埋土)
6　浅黄色5Y7/3粗砂混シルト
7　灰色N4/中砂～粗砂混シルト(灰白色10Y7/2シルトを微量に含む)
8　暗灰色N3/細砂混シルト(2-1層)
9　灰白色5Y7/2極細砂～細砂混シルト
10　暗緑灰色10G4/1 極細砂混シルト(2-2層)
11　にぶい橙色5YR6/3シルト(基盤ブロックを含む)
12　灰白色5Y8/2細砂混シルト(にぶい橙色5YR6/3シルトブロックを含む)
13　淡黄色5Y8/3細砂混シルト
14　灰赤色10R6/2シルト(にぶい赤橙色10R6/3シルトブロックを含む、粗砂～極細砂を微量に含む)
15　淡赤橙色2.5YR7/3シルト(にぶい赤橙色10R6/3シルトブロックを含む)

0　(1:80)　2m

図 32　35 号墳　断面

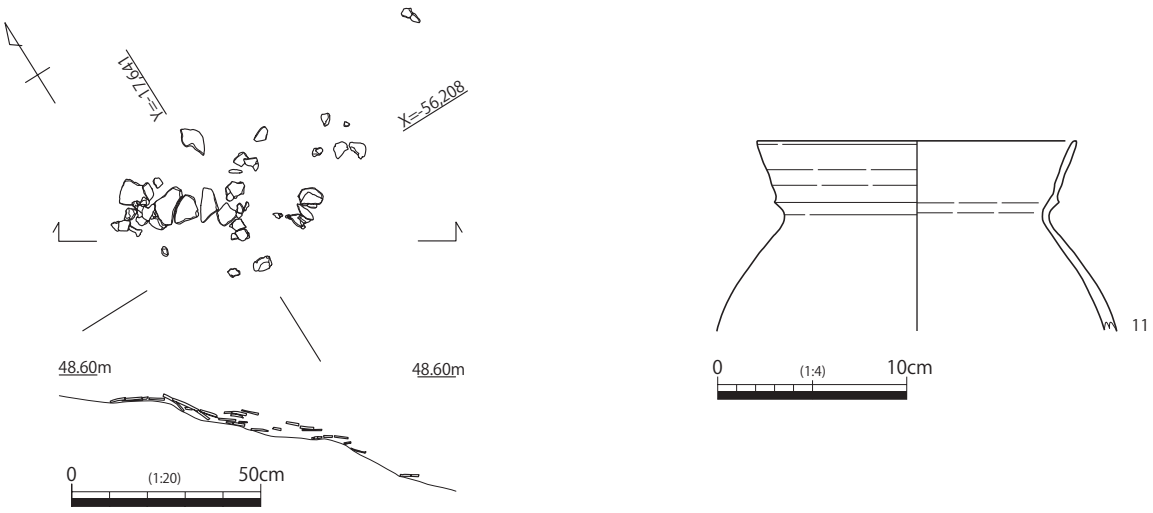


図 33　35 号墳　周溝内遺物出土状況および出土遺物

南北は調査地外となり、詳細は不明である。現在の隆起が墳形を反映させるものとすれば 15.89 m（推定値）の規模に復元でき、33 号墳と同じく平面形は長方形になるものと想定される。墳丘は前述のとおり現状保存することとなったため未調査である。ただし、周溝調査時の状況や土層観察から表土の直下は基盤層となっており、盛土は確認できなかった。墳丘の流出や後世の削平を考慮しても、33・34 号墳と同じように地山整形が主体で墳丘を築造し、盛土はほとんど行われていなかった可能性が高いことが想定される。

周溝は尾根高位となる南側を中心に掘削している。南東および南西で屈曲しているが、墳丘の東西では掘方が不明瞭である。南側周溝は幅 0.45 ～ 0.48 m、深さ 1.28 mを測る。34 号墳の墳頂部からの深さ 3.80 mを測る。埋土は下位に基盤ブロックを含む風化したシルト、上位に間層を挟んで古土壌２層が堆積する。2-2 層掘削時に古墳時代前期の土師器甕が出土した（図 33）。それより下層では遺物は出土しなかった。

出土遺物（図 33、図版 10）

11 は土師器甕である。周溝内にあたる墳丘斜面から出土した。細片となって出土しており、遺存状況も悪く、器面調整は不明である。頸部から体部は直接接合せず、図上復元している。

11 は谷口編年Ⅶ-1 ～２期、古墳時代前期前葉～中葉のものと考えられる。

ｅ）11 号墳

概要

南北尾根の中央の南寄り、33 号墳の南側で検出した。H19 試掘前は 33 号墳と合わせて前方後円墳の存在が想定されていたが、この時の試掘調査により 11・33 号墳の間に周溝が確認されたため、それぞれ別の古墳であることが判明した。

調査前の状況は墳形が円形であったため、円墳であることを想定しながら調査を行っていた。しかし、中世以降の段階に墳丘が大幅な改変を受けていることが明らかとなり、第 2-1 面では、北と南側周溝がコの字型に屈曲していることが判明したため、最終的に方墳と判断した。

11 号墳は、東西及び南北の６・７トレンチを設置した後、表土掘削を行った。1-1、1-2 層を掘削した段階で周溝内に堆積する 2-1 層とした古土壌の範囲を検出し、次に周溝埋土の掘削を行った。周溝底では基盤ブロック主体の土層が堆積しており、この上部での精査を行った後、周溝を完掘した。

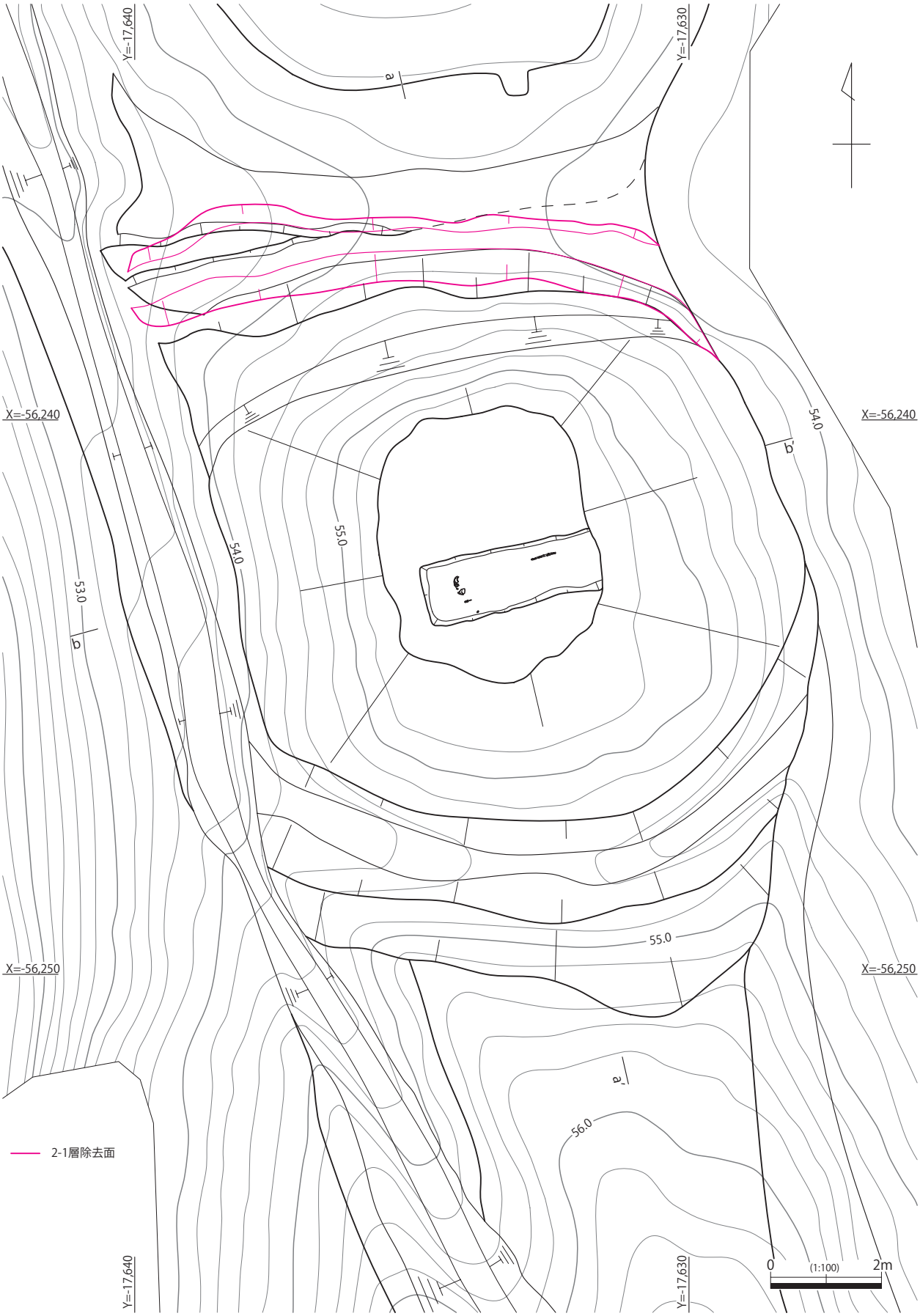
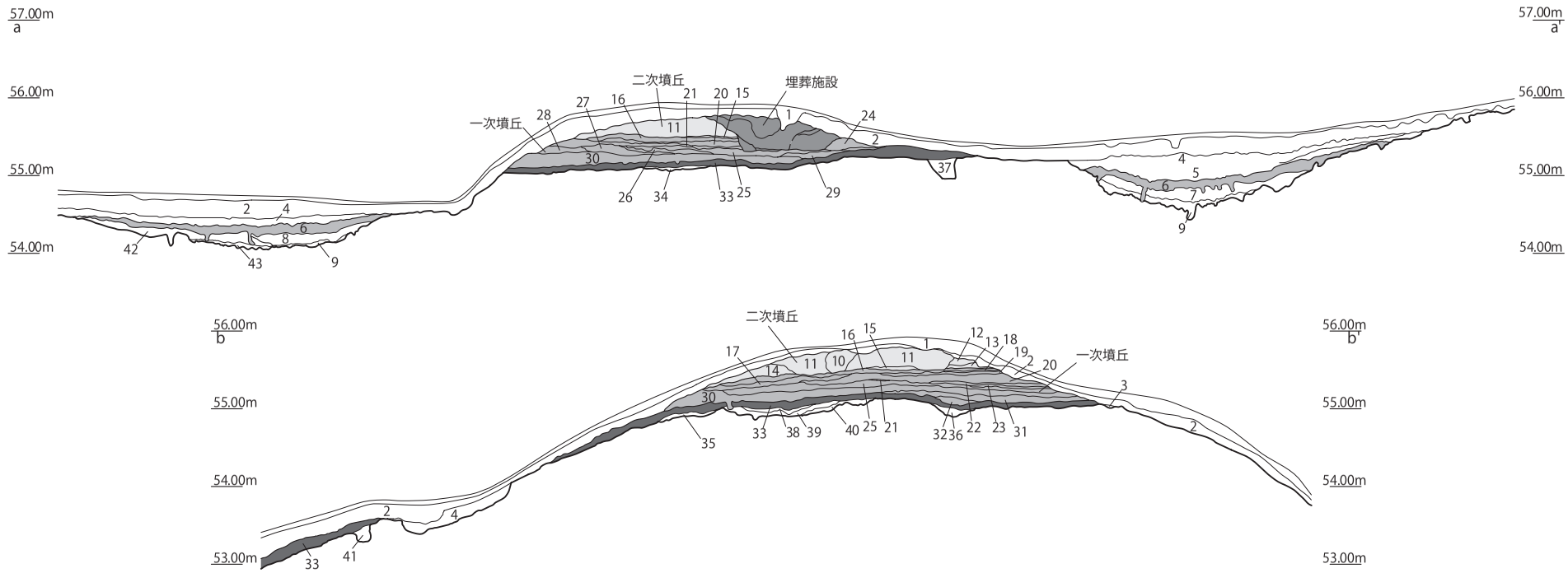
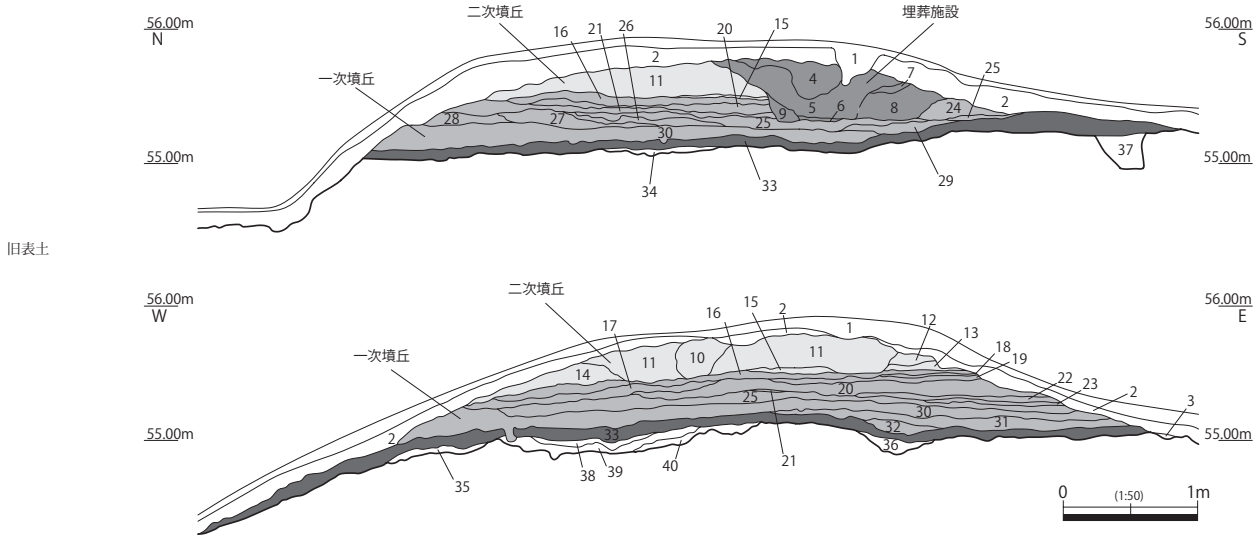

Y=-17,640
Y=-17,630
X=-56,240
X=-56,250
a
a'
b
b'
54.0
55.0
53.0
56.0
2-1層除去面
0
(1:100)
2m

図 34　11 号墳　平面



1 表土
2 浅黄色5Y7/3極細砂～細砂混シルト(1-1層)
3 灰白色10Y7/2粗砂混シルト(5道埋土)
4 オリーブ灰色10Y6/2粗砂混シルト(1-2層)
5 灰色7.5Y5/1シルト(基盤ブロックを含む)
6 灰色N4/細砂～中砂混シルト(2-1層)
7 灰色5Y4/1シルト(基盤ブロックを含む)
8 暗青灰色5BG4/1シルト(基盤ブロックを含む)
9 明黄褐色2.5Y6/6シルト(基盤ブロック、加工時形成層)
10 灰色10Y6/1極細砂混シルト(旧表土のブロック土)
11 明黄褐色2.5Y7/6極細砂混シルト
12 浅黄色2.5Y7/4シルト(基盤ブロックを含む)
13 灰黄色2.5Y7/2シルト
14 灰オリーブ色5Y6/2細砂混シルト(旧表土ブロックを含む)
15 淡黄色5Y8/4極細砂混シルト
16 灰色10Y5/1シルト(基盤・旧表土ブロックを含む)
17 灰色5Y5/1極細砂～細砂混シルト(旧表土ブロックを含む)
18 浅黄色2.5Y7/3シルト
19 灰色5Y5/1極細砂～細砂混シルト(旧表土ブロックを含む)
20 浅黄色2.5Y7/4極細砂混シルト
21 灰色10Y5/1極細砂～細砂混シルト(旧表土ブロックを含む)
22 浅黄色5Y7/3極細砂混シルト
23 灰色5Y6/1極細砂混シルト
24 灰オリーブ色5Y6/2極細砂～細砂混シルト
25 灰色10Y5/1極細砂～細砂混シルト
26 灰色5Y6/1極細砂混シルト(旧表土ブロックを含む)
27 にぶい黄橙色10YR7/4シルト(基盤ブロックを含む)
28 浅黄橙色10YR8/4シルト
29 浅黄橙色10YR8/3シルト(基盤ブロックを含む)
30 淡黄色5Y8/4シルト(基盤・旧表土ブロックを含む)
31 淡黄色5Y8/3シルト(基盤・旧表土ブロックを含む)
32 灰色N5/極細砂混シルト(ブロック土)
33 灰色10Y6/1極細砂～細砂混シルト(旧表土)
34 暗緑灰色5G4/1極細砂混シルト
35 灰色10Y5/1極細砂混シルト(旧表土)
36 暗緑灰色10G4/1シルト(被熱粘土塊ブロックを含む)
37 灰色5Y6/1極細砂混シルト
38 暗緑灰色5G3/1極細砂混シルト
39 灰色10Y6/1極細砂～細砂混シルト
40 灰色10Y5/1シルト
41 灰色5Y6/1シルト
42 灰黄色2.5Y6/2中砂～粗砂混シルト(33号墳周溝埋土)
43 明黄褐色2.5Y7/6シルト(33号墳周溝埋土)

図35 11号墳 断面



1　表土
2　浅黄色5Y7/3極細砂～細砂混シルト(1-1層)
3　灰白色10Y7/2粗砂混シルト(5道埋土)
4　灰色7.5Y6/1極細砂混シルト(2-1層ブロックを含む)
5　浅黄色5Y7/4シルト(基盤ブロックを含む)
6　灰色10Y6/1極細砂混シルト(床面)
7　灰黄色2.5Y7/2シルト
8　灰オリーブ色5Y6/2シルト
9　淡黄色5Y8/4極細砂混シルト
10　灰色10Y6/1極細砂混シルト(旧表土のブロック土)
11　明黄褐色2.5Y7/6極細砂混シルト
12　浅黄色2.5Y7/4シルト(基盤ブロックを含む)
13　灰黄色2.5Y7/2シルト
14　灰オリーブ色5Y6/2細砂混シルト(旧表土ブロックを含む)
15　淡黄色5Y8/4極細砂混シルト
16　灰色10Y5/1シルト(基盤・旧表土ブロックを含む)
17　灰色5Y5/1極細砂～細砂混シルト(旧表土ブロックを含む)
18　浅黄色2.5Y7/3シルト
19　灰色5Y5/1極細砂～細砂混シルト(旧表土ブロックを含む)
20　浅黄色2.5Y7/4極細砂混シルト
21　灰色10Y5/1極細砂～細砂混シルト(旧表土ブロックを含む)
22　浅黄色5Y7/3極細砂混シルト
23　灰色5Y6/1極細砂混シルト
24　灰オリーブ色5Y6/2極細砂～細砂混シルト
25　灰色10Y5/1極細砂～細砂混シルト
26　灰色5Y6/1極細砂混シルト(旧表土ブロックを含む)
27　にぶい黄橙色10YR7/4シルト(基盤ブロックを含む)
28　浅黄橙色10YR8/4シルト
29　浅黄橙色10YR8/3シルト(基盤ブロックを含む)
30　淡黄色5Y8/4シルト(基盤・旧表土ブロックを含む)
31　淡黄色5Y8/3シルト(基盤・旧表土ブロックを含む)
32　灰色N5/極細砂混シルト(ブロック)
33　灰色10Y6/1極細砂～細砂混シルト(旧表土)
34　暗緑灰色5G4/1極細砂混シルト
35　灰色10Y5/1極細砂混シルト
36　暗緑灰色10G4/1シルト(被熱粘土塊ブロックを含む)
37　灰色5Y6/1極細砂混シルト
38　暗緑灰色5G3/1極細砂混シルト
39　灰色10Y6/1極細砂～細砂混シルト
40　灰色10Y5/1シルト

図 36　11 号墳　墳丘　断面

この基盤ブロック主体の土層は周溝掘削、墳丘築造時の堆積土で、加工時形成層と考えられる。

墳丘は、盛土の単位で大きく上部と下部の二単位に明瞭に分かれることが判明し、上部を二次墳丘、下部を一次墳丘として調査を実施した。

二次墳丘の調査では、木根の直下から 13・14 鉄鏃が出土した。ほぼ同一の標高で出土したため改めて平面検出を行ったが、二次墳丘内の埋葬施設の陥没痕と植物擾乱を確認したに留まる。

二次墳丘を完掘した後、一次墳丘の掘り下げを行った。南北断面において墳丘を切る明確な掘り込みのラインを確認していたため、埋葬施設の存在が想定された。しかし、平面的に明確な掘方が確認できなかったため、墳丘の掘り下げを続行したところ鉄剣が出土した。その後、再度平、断面の検討を行って墓壙を確定した。埋葬施設の掘方埋土と一次墳丘盛土には土質にほとんど違いが認められない部分があり、特に南側の掘方ラインは明瞭ではなかった。

埋葬施設完掘後、墳丘盛土の掘り下げを旧表土まで行い、11 号墳の調査を終了した。

墳丘と周溝（図 34 ～ 37、巻頭図版６、図版３・12）

11 号墳は方墳である。やや楕円形を呈する部分がある。東西 11.00 m（検出値）、南北 10.36 m である。東西は、後世の改変により全容は不明である。ただし、西側墳丘斜面では旧表土の堆積を確認しているため、墳丘築造以前の地形を利用しながら、墳形を整えた可能性が高いと考える。

墳丘は盛土の単位から２回の工程に大きく分けて構築している。下部を一次墳丘、上部を二次墳丘

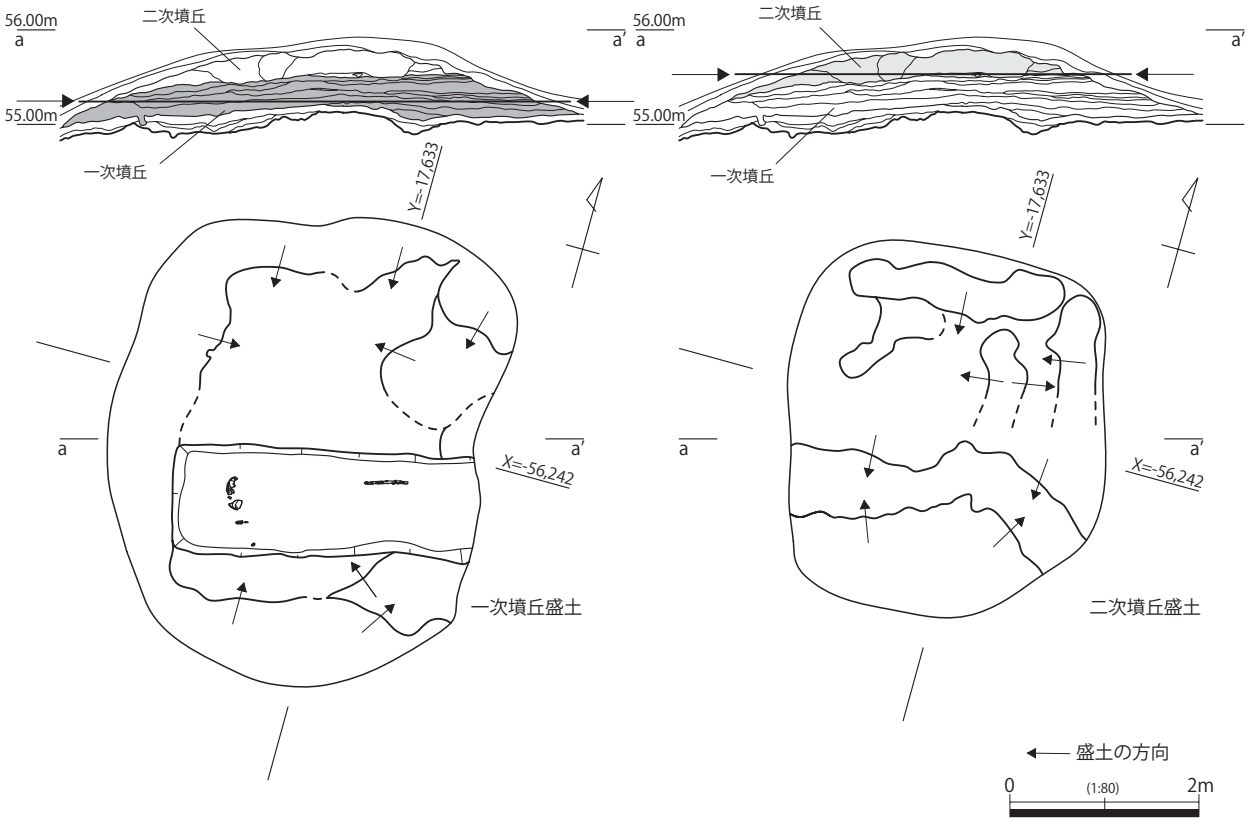


図 37　11 号墳　一次、二次墳丘盛土　平、断面

として調査を行った。

二次墳丘は、周溝際から内側に盛土を行って墳丘を築造する。一次墳丘と比較して盛土の単位が明瞭ではなく、個々のブロックの形状も不明瞭なものが多かった。

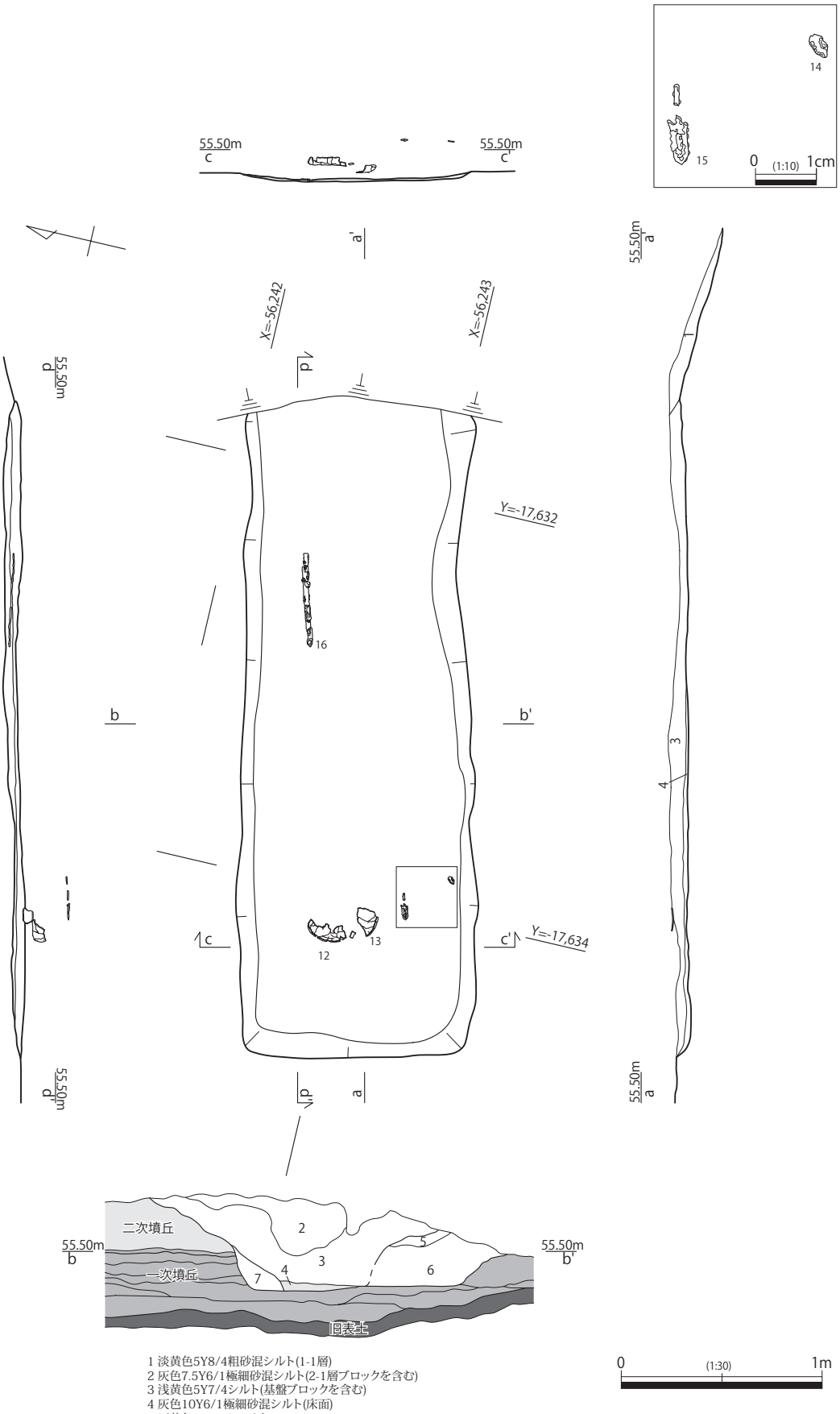
一次墳丘は、地形が高い南側を基準に西および北側から盛土を行っている。内側の盛土は水平を意識してなされており、盛土を構成するブロックの形状は上から圧力がかかったために左右に広がった形状を呈している。上位の盛土では、基盤ブロックを多く含む層と旧表土ブロックを多く含む層が互層であることが観察できた。

一次墳丘の最上部には、旧表土ブロックを多量に含む盛土が積まれている（図 36-16 層）。この層が一次墳丘に形成された土壌になる可能性を考えて検討を行ったが、ブロックの単位が明瞭であったことから一次墳丘の盛土の一部と判断した。また、16 層と二次墳丘との間には間層が入らないため、一次墳丘から二次墳丘は間を置かずに築造したものと考えている。

一次、二次墳丘は、一次墳丘に旧表土ブロックが多く含まれるのに対し、二次墳丘にほとんど含まれない点で際立った違いがあった。二次墳丘築造時に一次墳丘築造時の周溝を掘り下げたため、旧表土が含まれなかったものと考えられる。

周溝は北および南側を検出した。北側周溝は、33 号墳南側周溝に接して掘削している。幅 1.10 ～ 1.70 m、深さ 1.71 m（墳頂部から）を測る。底面直上には基盤ブロックの堆積が認められ（図 35-９層）、加工時形成層と考えられる。その上部には風化したシルト、古土壌が堆積する。

南側周溝は幅 1.60 ～ 3.70 m、深さ 1.36 mを測る。北側周溝と同じく、底面直上に周溝の加工時形成層と考えられるシルトが認められる。その上部に風化したシルト、2-1 層とした古土壌が堆積していた。両周溝が平坦化するのは 1-2 層が形成される中世以降の段階である。



1 淡黄色5Y8/4粗砂混シルト(1-1層)
2 灰色7.5Y6/1極細砂混シルト(2-1層ブロックを含む)
3 浅黄色5Y7/4シルト(基盤ブロックを含む)
4 灰色10Y6/1極細砂混シルト(床面)
5 灰黄色2.5Y7/2シルト
6 灰オリーブ色5Y6/2シルト
7 淡黄色5Y8/4極細砂混シルト

図 38　11 号墳　埋葬施設　平、断、立面

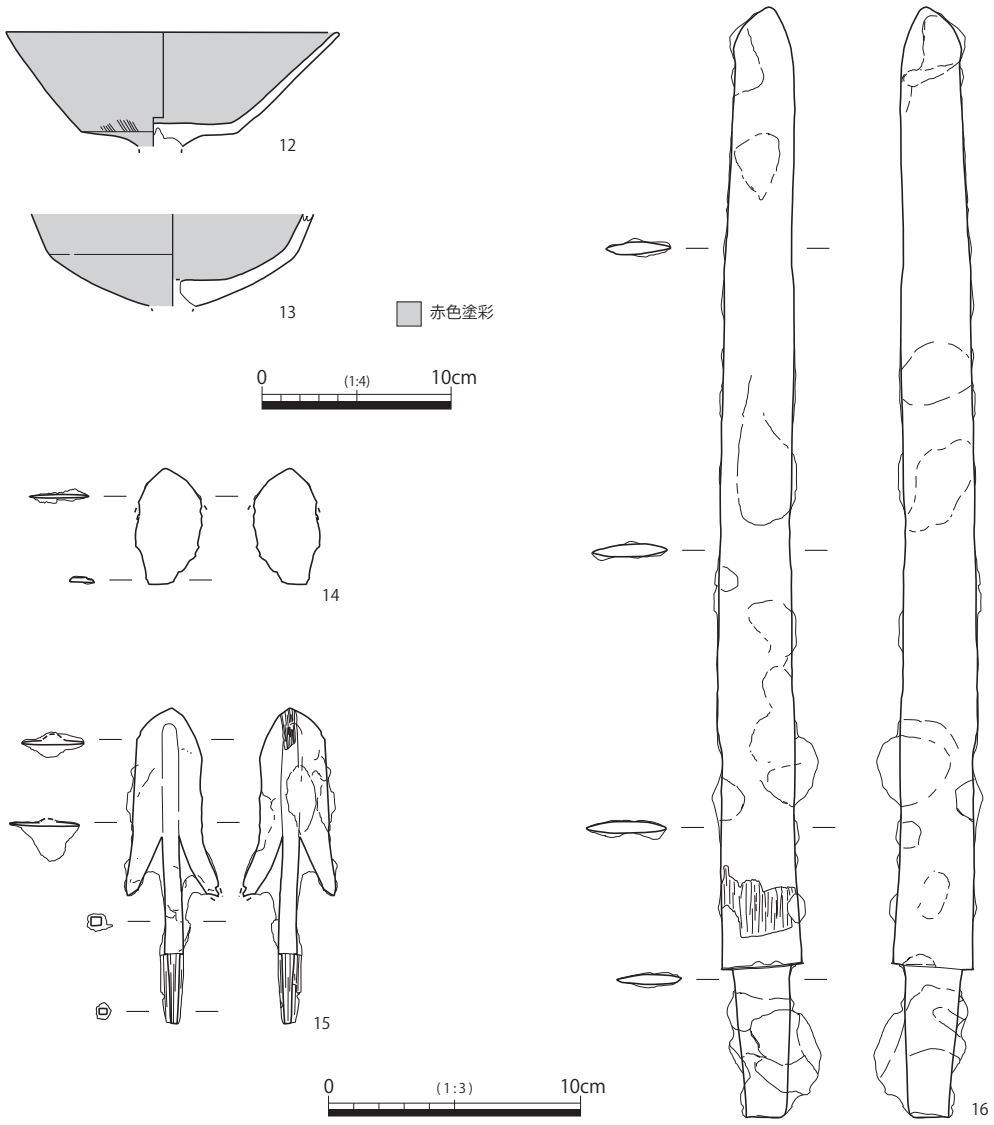


図 39　11 号墳　埋葬施設　出土遺物

埋葬施設（図 38、図版 11 ～ 13）

埋葬施設は墳丘の中央で確認した。北側は後世の改変により失われており、全容は不明である。長軸 3.25 m（検出値）、短軸 1.12 ～ 1.20 m、検出面から床面までの深さ 0.08 m、底面までの深さ 0.10 mである。一次墳丘内で底面の掘り込みが完結しており、掘方の北および西側を除いて墓壙埋土と墳丘盛土の違いが明瞭ではなかった。

埋葬施設からは土師器高杯、鉄鏃、鉄剣が出土した。鉄剣には木棺と考えられる木質が付着しており、また、床面である粘質シルトの広がりが部分的に押えられたことから木棺直葬であったと考えられる。鉄鏃２点は、二次墳丘調査中に出土した。ほぼ同じ標高から出土しており、棺上副葬品と考えられる。二次墳丘内で行った平面的な精査では、断面の所見で示したような落ち込みを確認している（図 37）が、この落ち込みは埋葬施設の掘方と連続するものである。

出土遺物（図 39、図版 13）

12・13 は土師器で、器種は有段高杯の杯部である。埋葬施設の西寄り、床面から３cm 離れて口縁部を上向きにした状態で出土した。細片で遺存状況は悪い。棺上に置かれた土器が木棺の腐朽に伴って棺内に落ち込んだ資料と考えられる。14・15 は鉄鏃である。いずれも二次墳丘の掘り下げ時に木

根の下から出土した資料である。14 は鏃身部のみが出土しており、15 と形状が似ることから鉄鏃と判断した。しかし、遺存状況が悪いため、同様の形状を示す鉄剣の刃先となる可能性がある。15 は茎部に矢柄の木質が残存する。また、鏃身部にも木質が付着している。鏃身部には鏑状に突出する部分があり図化を行なっているが、錆膨れの可能性が高い。16 は鉄剣である。埋葬施設中央の北寄り、床面の直上から剣先を西に向けた状態で出土した。６箇所で折損しており、木棺と考えられる木質が付着する。茎部は扁平に歪曲する部分がある。角関で、柄縁と鞘口の間に形成されたと考えられる錆が付着する。また、茎部の目釘穴はＸ線写真において観察されなかったため図示していない。12・13 は岩吉編年Ⅷ期に比定でき、埋葬施設は古墳時代中期前葉～中葉に構築されたものと考えられる。

３）東西尾根の調査

ａ）概要

東西尾根は、南北尾根から西方向に分岐して急峻な傾斜をなし、標高 43 ｍあたりから緩やかな斜面となっている。今回の調査区西側には古墳時代中期～後期にかけて築造された H20 調査の古墳群が連なる。

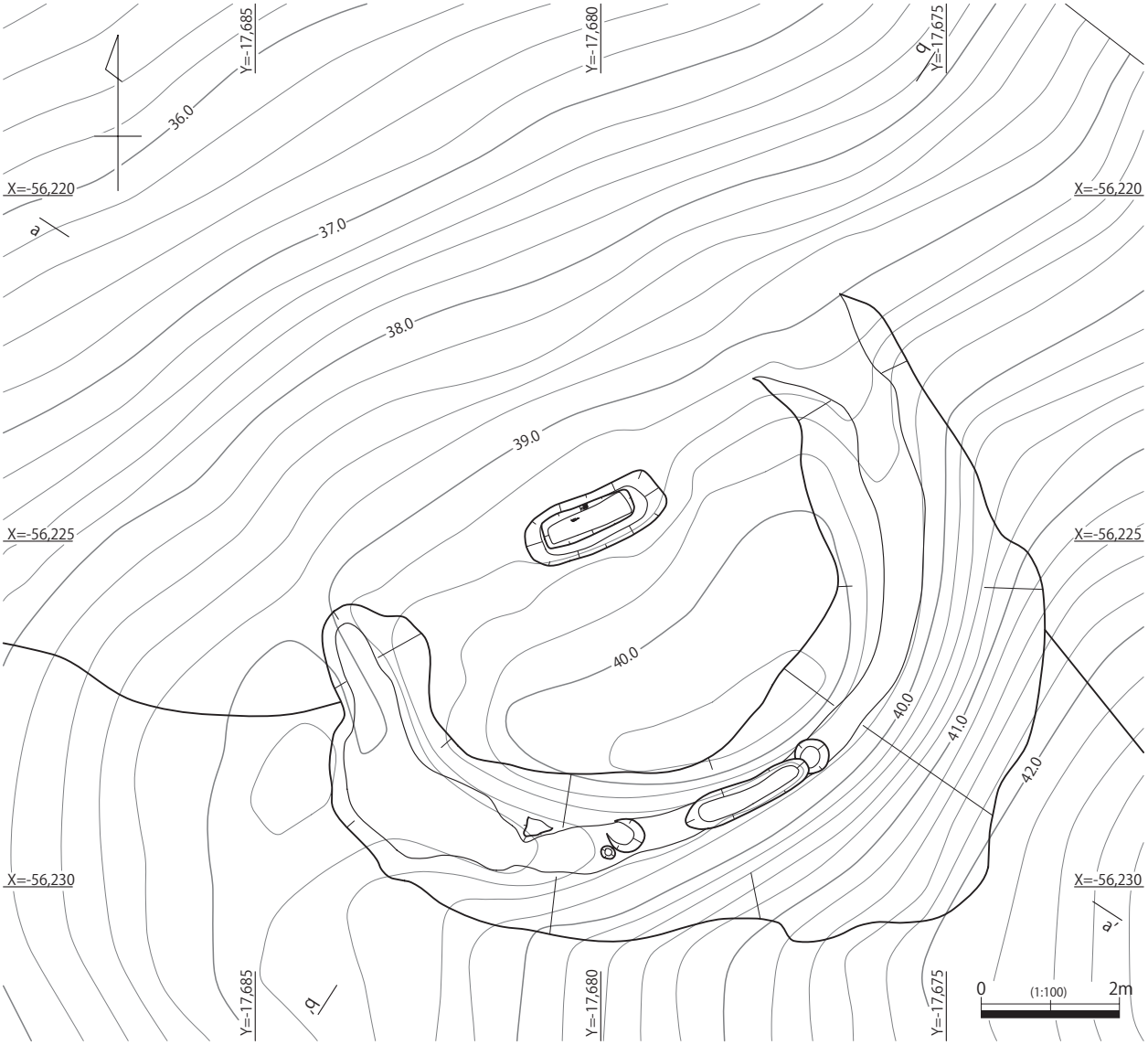
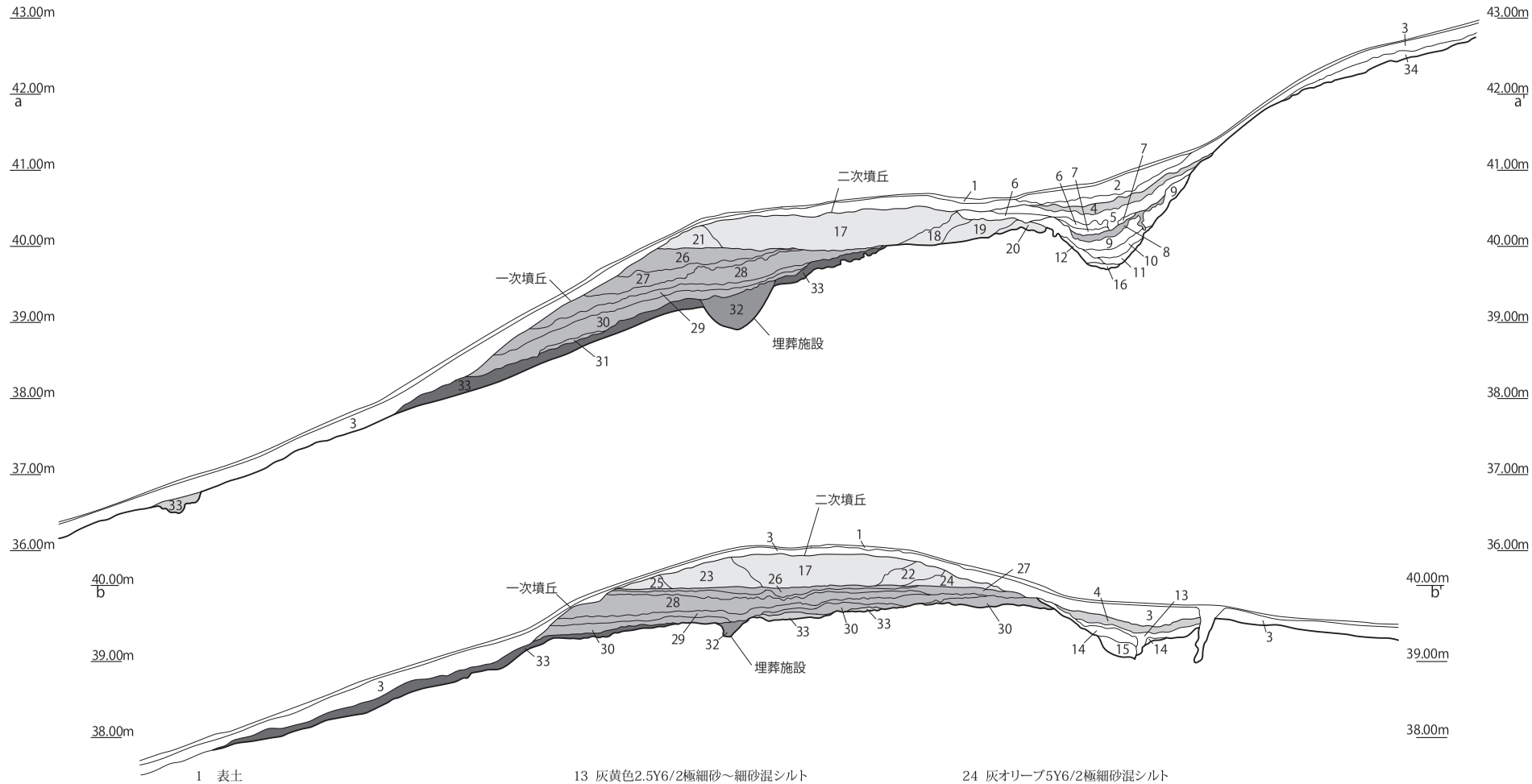


図 40　26 号墳　平面



1 表土
2 橙色2.5YR7/6シルト(基盤ブロックを多量に含む)
3 淡黄色5Y8/4粗砂混シルト(1-1層)
4 灰色N4/ 細砂～中砂混シルト(2-1層)
5 黄灰色2.5Y5/1シルト(基盤ブロックを多量に含む)
6 灰色5Y5/1シルト(基盤ブロックを少量含む)
7 にぶい橙色5YR7/3シルト(基盤ブロックを多量に含む)
8 灰褐色7.5YR6/2シルト(極細砂～細砂を少量含む、古土壌)
9 にぶい橙色7.5YR7/4極細砂混シルト
10 にぶい橙色5YR6/4極細砂混シルト(基盤ブロックを多量に含む)
11 橙色7.5YR7/6シルト(極細砂～細砂を多量に含む)
12 橙色5YR7/6シルト
13 灰黄色2.5Y6/2極細砂～細砂混シルト
14 灰黄褐色10YR6/2シルト
15 灰褐色7.5YR6/2極細砂混シルト
16 浅黄橙色7.5YR8/6シルト(基盤ブロックを多量に含む)
17 にぶい橙色5YR7/4細砂混シルト
18 にぶい橙色5YR7/3極細砂混シルト
19 淡赤橙2.5YR7/4シルト
20 明褐灰色5YR7/2シルト(基盤ブロックを多量に含む)
21 にぶい橙色5YR6/4シルト
22 橙色7.5YR6/6極細砂～細砂混シルト
23 にぶい橙色5YR7/4シルト(黄灰色2.5Y5/1シルトブロックを含む)
24 灰オリーブ5Y6/2極細砂混シルト
25 にぶい橙色7.5YR6/4シルト(極細砂～細砂を多量含む)
26 橙色2.5YR7/6シルト(基盤ブロックを含む)
27 灰黄色2.5Y7/2シルト(基盤・旧表土ブロックを含む)
28 灰白色5Y7/2シルト(基盤ブロックを含む)
29 灰色10Y5/1シルト(基盤・旧表土ブロックを多量に含む)
30 灰オリーブ5Y6/2シルト(基盤・旧表土ブロックを多量に含む)
31 橙色5YR7/6シルト
32 浅黄色5Y7/3シルト(極細砂を少量含む、埋葬施設)
33 灰色5Y4/1シルト(旧表土)
34 灰オリーブ色5Y6/2シルト(1-2層)

図41 26号墳 断面

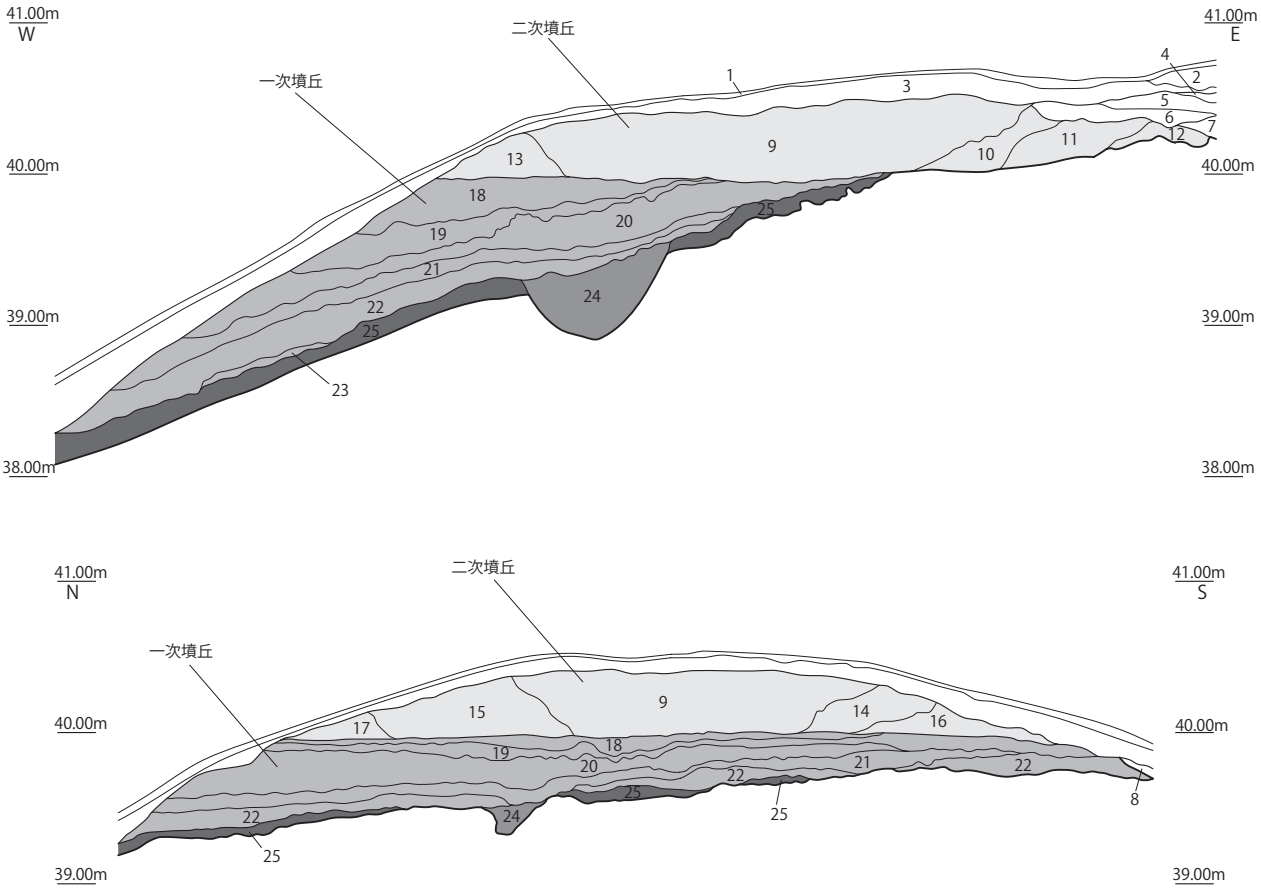


図 42　26 号墳　墳丘　断面

東西尾根では、古墳時代中期～後期に築造された古墳 2 基、段 2 基を確認した。内、38 号墳は埋没墳で、新規に確認した古墳である。

なお、38 号墳の北側では、1-1 層掘削時に流紋岩系安山岩 1 点、流紋岩質凝灰角礫岩 2 点の計 3 点の石が出土した。30 ～ 40cm 大で、いずれも加工痕はない。流紋岩系安山岩は南北尾根の露頭部と、流紋岩質凝灰角礫岩は後述する 1 号横穴墓の閉塞石と岩質が同じである。

東西尾根と南北尾根の接点で確認した 99 墳丘は、 1 号横穴墓の後背墳丘として評価したため、南西斜面の調査成果で報告を行う。

b）26 号墳

概要

26 号墳は、東西尾根の中央から西寄り、尾根頂部から北にやや下がった場所で検出した。調査前から 26 号墳墳丘及び周溝が凹凸となって確認できた。H19 試掘では 26 号墳墳丘南東部にトレンチが入れられ、古墳の周溝であることが確認されている。

表土掘削から調査を開始しており、表土中からは土師器、須恵器のほか鉄滓が出土した。次に、

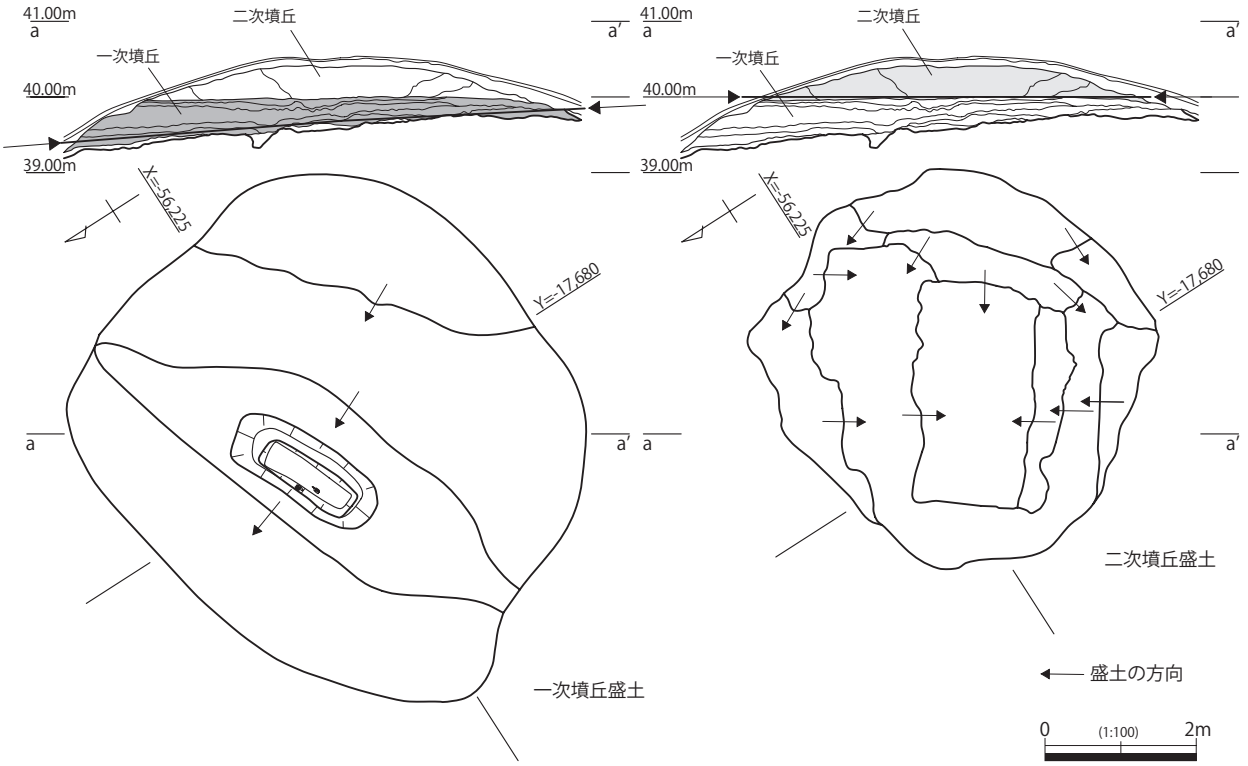


図 43　26 号墳　一次、二次墳丘盛土　平、断面

1-1 層を除去して周溝内の 2-1 層とした古土壌の範囲を平面的に押さえた後、周溝掘削を行った。

墳丘は盛土の単位から 2 回の工程に大きく分けて構築している。下部を一次墳丘、上部を二次墳丘として調査を行った。

二次墳丘は周溝側から中央に向かって盛土しており、中央部の盛土単位が長方形であったことから当初埋葬施設として調査を行った。しかし、①墓壙の加工（底面と側壁の接点）が不明瞭であったこと、②二次墳丘断面での立ち上がりや埋土を含めて盛土の一単位として把握できたこと、③出土遺物が皆無であったことから、最終的に埋葬施設ではないと判断した。また、一次墳丘上面を加工（改変）した痕跡が認められなかったことからも、墳丘築造工程により一次、二次墳丘が形成されたものと考えている。

二次墳丘の調査の後、一次墳丘の掘削を行った。一次墳丘は斜面が平坦になるように盛土しており、盛土単位毎に掘削を行って旧表土を検出した。

埋葬施設は旧表土の直上で検出した。棺痕跡が掘方検出面では不明瞭であったため、墓壙全体を掘り下げて検出した。棺内、裏込めの順に掘削を行い、埋葬施設を完掘した後、最終の断ち割り作業を行って 26 号墳の調査を終了した。

墳丘と周溝（図 40 ～ 43、巻頭図版 6 、図版 3・14・15）

26 号墳は円墳で、直径は 7.50 ～ 7.70 mを測る。先述のとおり、墳丘盛土は大きく上下の 2 単位に分かれ、下部を一次墳丘、上部を二次墳丘として調査を行った。

一次墳丘は南東側基盤層の一部を整形して平坦にした後、水平に盛土を行っている。墳丘の北西斜面では旧表土の堆積を確認しており、斜面側では旧地形に大きな改変は加えていないと考えられる。墳丘盛土は、基盤ブロックないし旧表土ブロック主体の土が互層に観察され、盛土単位が明瞭であった。一次墳丘盛土は、南東部基盤層整形時と周溝掘削時に生じた排土を用いたと考えられるが、盛土

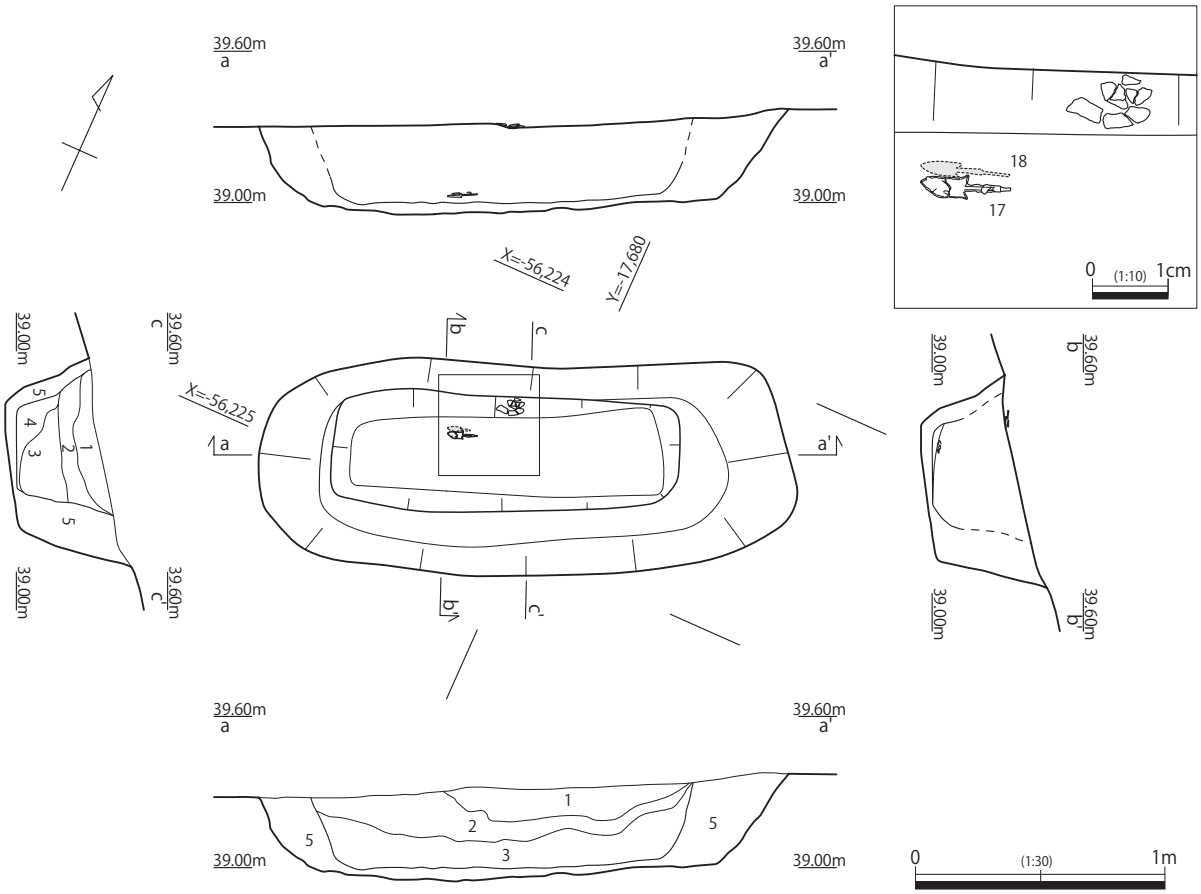


図 44　26 号墳　埋葬施設　平、断、立面

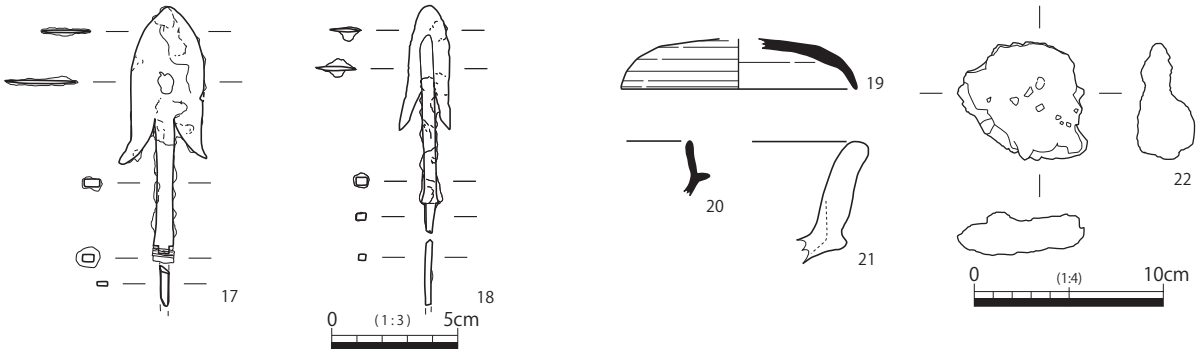


図 45　26 号墳　出土遺物

単位毎に掘削地点や掘削深度が変更されたために土質に明瞭な違いが生じた可能性がある。なお、南東側基盤層の整形は、一次墳丘墳頂部を加工した形跡が認められなかったことから、一次墳丘築造時の工程に含めている。

二次墳丘は、一次墳丘上面に南東側から盛土を行い、周溝際に平面がロの字状を呈する土手状に高まる盛土を行ってから、内側に向かって盛土を行っている。北西側は内側盛土と外側盛土の土質が似ていることや、植物擾乱の影響で盛土単位が不明瞭であった。

周溝は調査前から凹みとなって認識しており、当初から円墳であることが想定された。表土を除去

した 1-1 層上面では、南東側の周溝肩部で地滑りの痕跡を検出した。2-1 層とした古土壌上面では、馬蹄形にめぐる周溝の全容が確認できた。断面形はＵ字形、幅 1.25 ～ 4.01 m、深さ 0.86 mを測る。埋土は、上部に 2-1 層とした古土壌の堆積があり、以下、橙色を基調としたシルト～極細砂混シルト、底面直上に基盤ブロックを多量に含む浅黄橙色シルト（加工時形成層）が認められた。なお、周溝南側の底面では、周溝掘削時にできたと考えられる凹凸を検出している。

埋葬施設（図 44、図版 14・15）

平面形は長方形、西側は楕円形を呈する。長軸 2.10 m、短軸 0.80 ～ 0.85 m、深さ 0.47 mを測る。検出面では、埋葬施設中央の北西寄りで土師器が出土した。細片のため器種は不明。一次墳丘築造直前に置かれた土器と考えられる。

棺痕跡は、全体を検出面から0.18ｍ掘り下げたところで検出した。平面形は長方形を呈し、長軸1.37 m、短軸 0.43 ～ 0.49 m、深さ 0.44 mを測る。埋土は極細砂混シルトのブロックで、木棺の腐朽に伴う陥没により上部から落ち込んだものと考えられる。床面及び裏込めには、同質の基盤ブロックを用いている（図 44-5 層）。床面を形成するブロックの断面形は細い紐状を呈するのに対し、裏込めを形成するブロックは３～４㎝大の亜角形を呈するものが含まれていた。

床面からは鉄鏃が２点出土した。18 は出土時に原位置から動いてしまったため、図 44 では点線で表現している。鉄鏃２点は鏃身部を南西に向けた状態で出土しており、茎部の近くに矢柄の木質も残存していた。

出土遺物（図 45、図版 15）

17・18 は鉄鏃で埋葬施設 1 から出土した。17 は茎部に矢柄の木質と横位の巻締が遺存する。鏃身部中央に不整形な孔があり、腐食によって開いた孔の可能性があるが図化している。18 は 17 と比較して鏃身部の幅が狭い。錆化が進んでおり、茎部の遺存状況は悪い。

19 ～ 22 は表土から出土した資料である。19 は須恵器杯蓋である。田辺編年 TK10（新）～ TK43 に比定できる。20 は須恵器杯身である。田辺編年 TK10（新）に比定できる。21 は土師器複合口縁壺の口縁部である。口縁部以外に同一個体と考えられる体部片が出土している。

22 は鉄滓である。断面形は椀形を呈す。砂礫が全体に付着しており、炉壁の可能性がある。26 号墳周溝外、尾根の高位側へ 3.00 m離れた地点から出土しており、99 墳丘から出土している鉄滓と関連する可能性がある（図 48）。

出土した須恵器は田辺編年 TK10（新）～ TK43 に比定でき、17 鉄鏃は H20 調査の 21 号墳第 1 主体部から出土した鉄鏃と類似しており、埋葬施設は古墳時代後期中葉に構築されたものと考えられる。

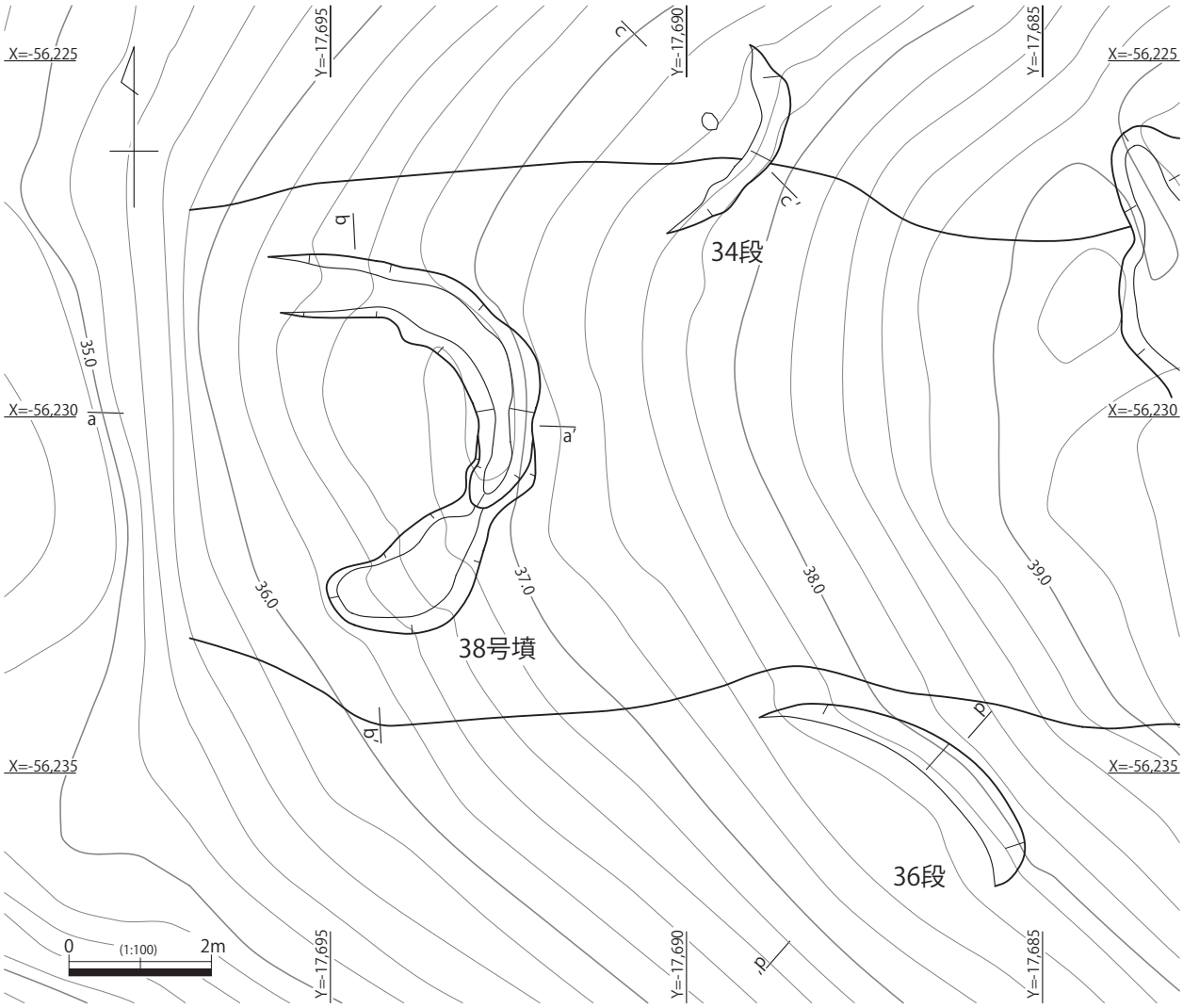
ｃ）38 号墳

概要

26 号墳の南西、H20 調査の 25 号墳東側で検出した。調査前は完全に埋没しており、表土、1-1 層を除去した段階で認識した古墳である。半円形の周溝を確認したが、墳丘は失われ旧表土が一部で残存していた。周溝の掘削を行った後、旧表土を掘削して調査を終了した。

墳丘と周溝（図 46、図版 16）

墳丘は失われており、詳細は不明である。周溝の平面的な形状から円墳と考えられる。周溝の肩部間で墳丘規模を復元すると、南北 3.63 m、東西 4.38 m、南側周溝底面からの残存高 0.31 mを測る。



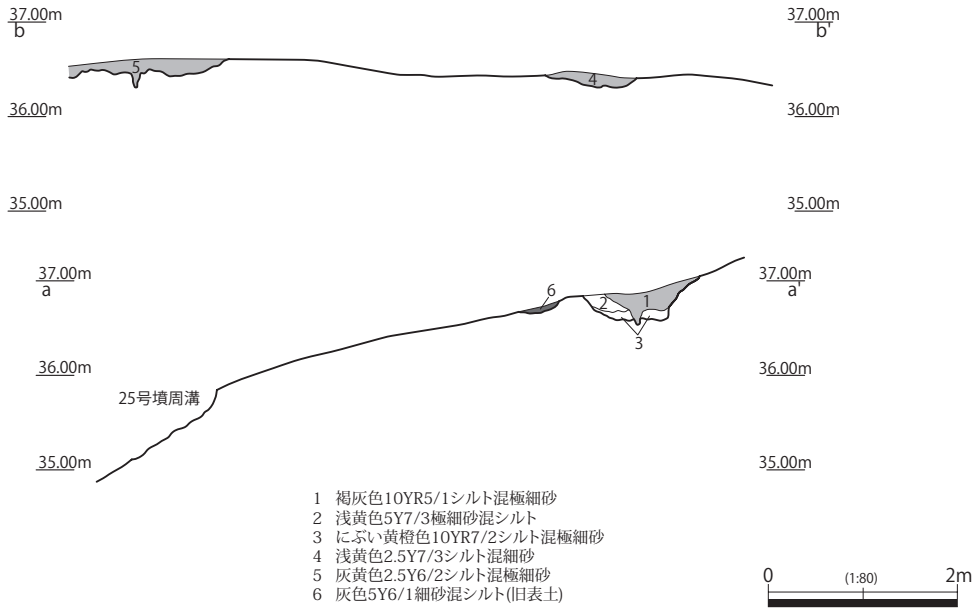


図 46　34・36 段平面、38 号墳　平、断面

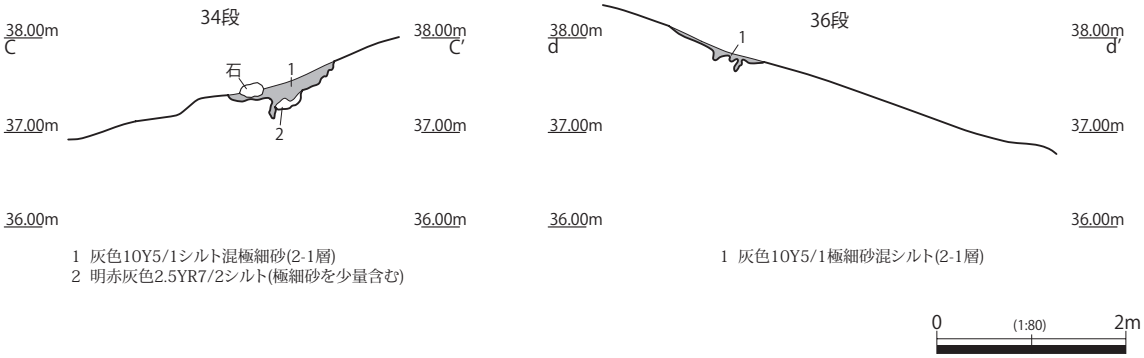


図 47　34・36 段　断面

周溝は断面形が不整形で、幅 0.74 ～ 1.30 m、深さ 0.14 ～ 0.28 mを測る。埋土はシルト～極細砂を主体としており、上部に 2-1 層とした古土壌の堆積が認められた。尾根の高位側を掘削し、検出時には半円形にめぐっていることが確認できたが、墳丘の南北で掘方は徐々に浅くなって不明瞭となる。38 号墳から遺物は出土しなかった。ただし、25 号墳周溝が 38 号墳墳丘裾部に相当する西側を平面的に切っていることから、38 号墳の築造が先行すると考えられる。

d）34 段（図 46・47）

26 号墳と 38 号墳の間で検出した。検出長 2.90 mで、深さ 0.30 mを測る。古墳の周溝の可能性を考えて掘削を行った。しかし、古墳とした場合に墳丘側となる北西で立ち上がりが不明瞭であったことや、断面形が不整形であったことから、段として評価した。埋土は下層から明赤灰色シルト、その上部に 2-1 層とした古土壌が堆積する。

流紋岩質安山岩石 1 点と土師器 1 点が出土した。土師器は細片のため、器種不明である。

e）36 段（図 46・47）

38 号墳の南東、尾根をやや下がった場所で検出した。検出長 4.20 m、深さ 0.14 mを測る。埋土は 2-1 層とした古土壌で、断面形は不整形である。34 段と同じく、明瞭な掘り込みを持たず、人為的な加工の形跡は認められなかった。

4）南西斜面の調査

a）概要

南北尾根と東西尾根に挟まれた斜面を南西斜面として調査を行った。南西斜面では 1 号横穴墓、平坦部、ピットを検出した。

また、1 号横穴墓の後背墳丘と評価した 99 墳丘についてもここで報告を行う。

b）1 号横穴墓（図 48・49、巻頭図版 4 、図版 17）

概要

調査前の南西斜面では平坦部があったため、それに対して 1・2 トレンチの掘削を行った。その際、古土壌 2 層とその間に堆積する基盤ブロック土を確認している。ただし、この段階では基盤ブロック土の堆積を斜面堆積物と評価していた。次に、表土、1-1・2 層を除去したところ、土師器、須恵器の細片を含む古土壌（2-1 層）が平坦部と 99 墳丘の方向に向かって堆積している状況が確認できた。この古土壌を掘り下げると、基盤ブロックを含むシルトで埋没した谷状の地形を検出した。

谷状の地形を埋めるシルト層は層厚 2 mに及ぶ。引き続き掘り下げを行うと、斜面北東部に基盤層

が垂直に立ち上がる部分が確認できた。この立ち上がりに沿って掘削を進めると、断面形が釣鐘形の穴があらわれ、ここでようやく横穴墓を認識するに至った。

横穴墓の調査は、前庭部から羨道の掘削を最初に行った。羨門では閉塞石及び羨門底面を掘り込む溝を検出した。次に羨道から玄室の堆積物を除去して玄室内の状況を検討したところ、天井部の大半が崩落していることが判明した。玄室内での作業に安全上の問題があると判断されたため、天井部より上部の基盤層を重機によって除去した。なお、重機による掘削前に、天井部と一部の遺物についてレーザー測量を行っている。

玄室内の調査は、天井部の崩落土や水成堆積層のシルトを除去した床面直上を機能廃絶面として調査を行った。機能廃絶面とは、横穴墓が埋没する直前の状態を指している。床面の直上及び崩落土中からは人骨や須恵器が出土した。

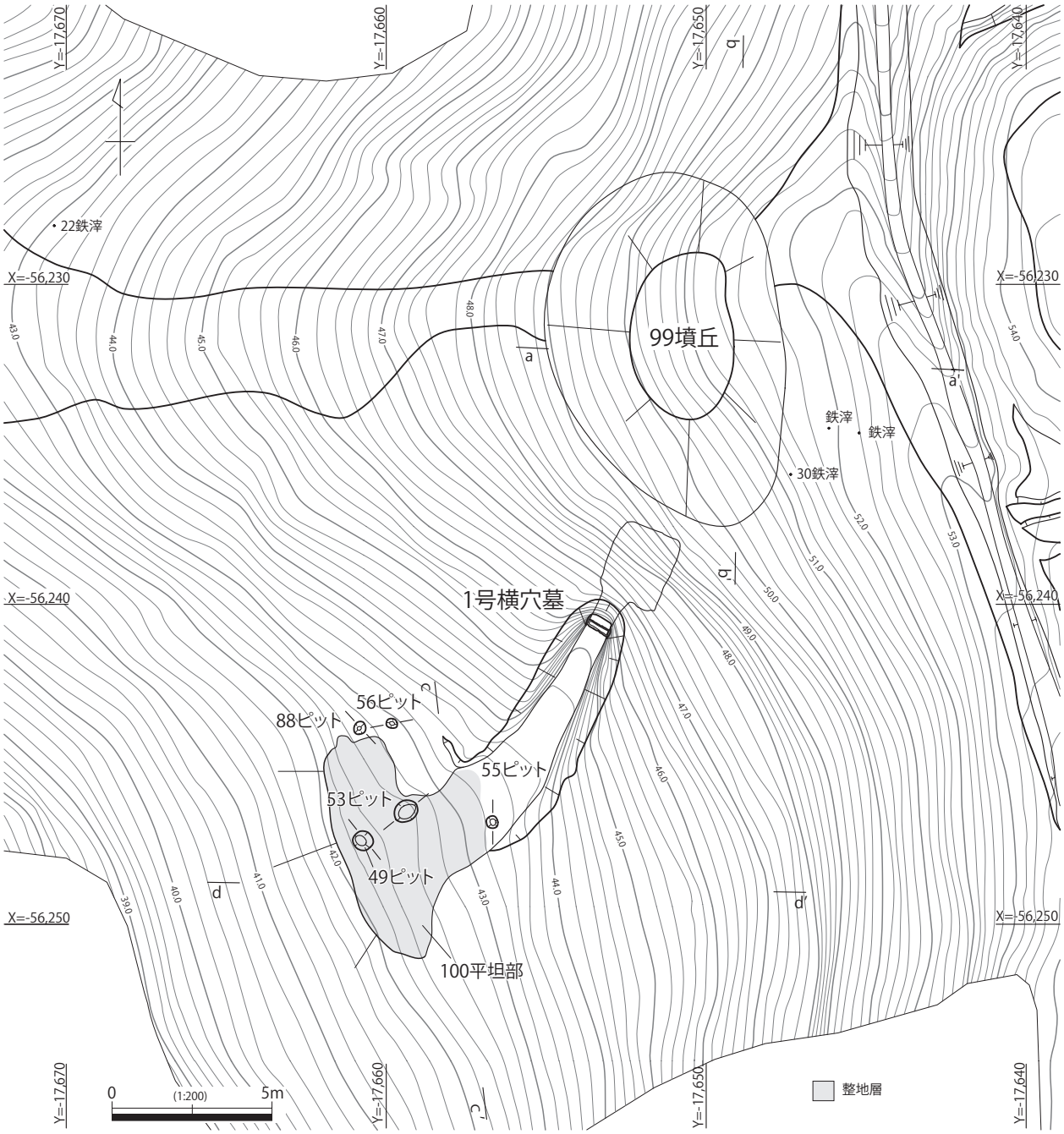


図 48　1 号横穴墓、99 墳丘　平面

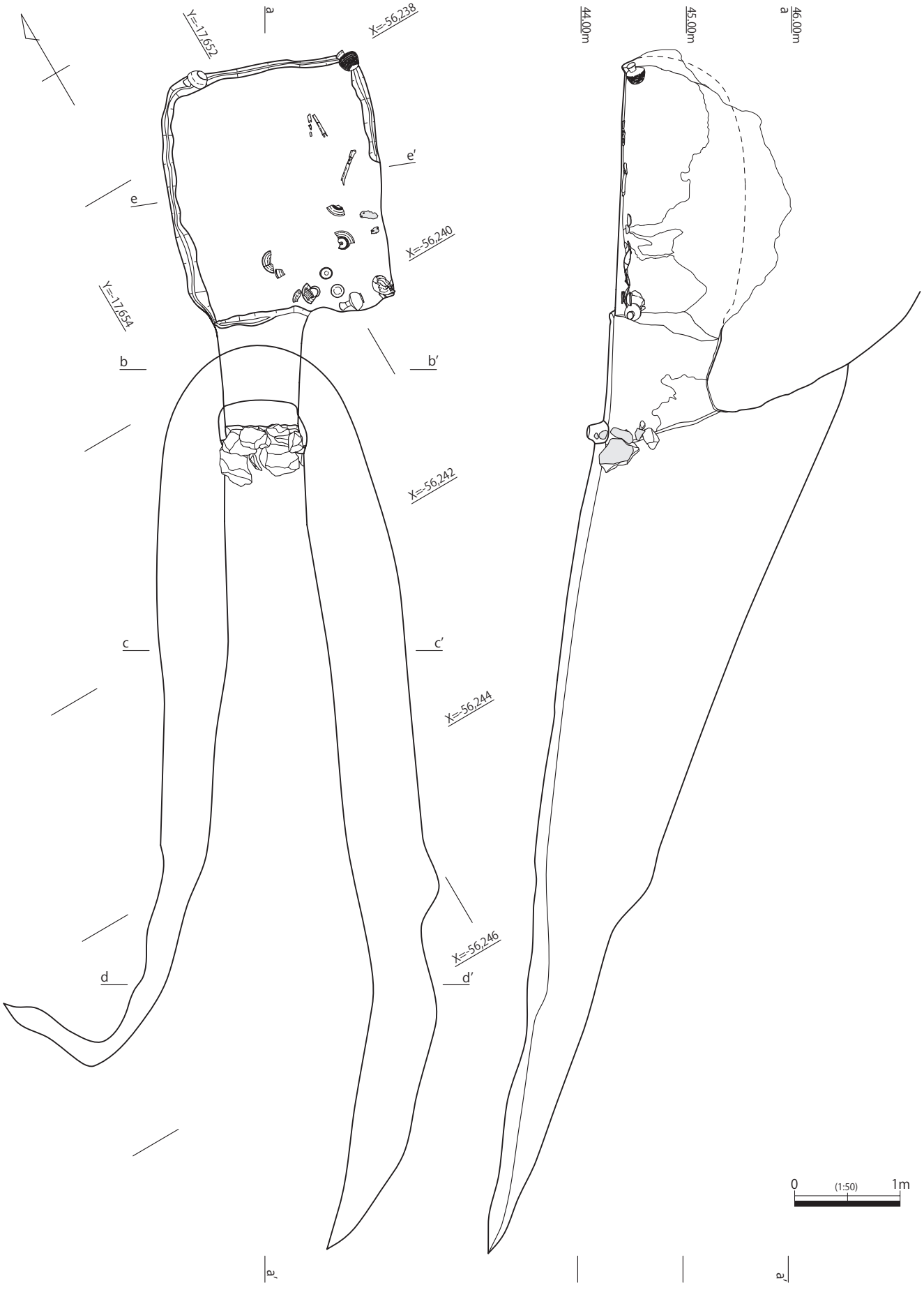
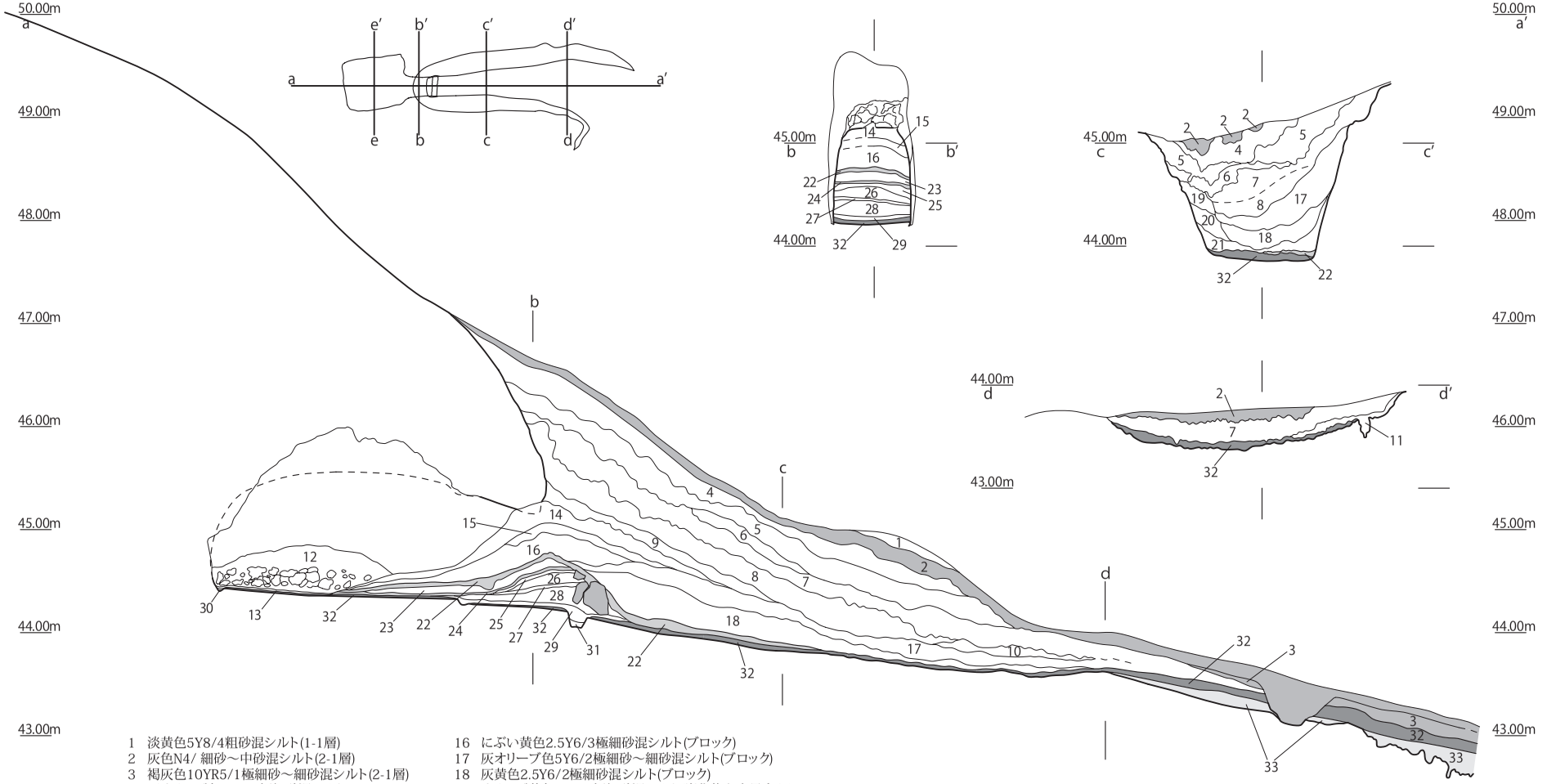


図 49　1 号横穴墓　平、断面



1 淡黄色5Y8/4粗砂混シルト(1-1層)
2 灰色N4/ 細砂～中砂混シルト(2-1層)
3 褐灰色10YR5/1極細砂～細砂混シルト(2-1層)
4 灰オリーブ色5Y6/2極細砂混シルト
5 灰色5Y5/1極細砂～細砂混シルト
6 オリーブ黄色5Y6/3極細砂混シルト
7 灰色5Y5/1極細砂～細砂混シルト(ブロック)
8 オリーブ黄色5Y6/3極細砂混シルト(ブロック)
9 にぶい黄色2.5Y6/3極細砂混シルト
10 灰黄色2.5Y7/2極細砂混シルト
11 オリーブ灰色10Y6/2極細砂～細砂混シルト
12 明褐灰色7.5YR7/2シルト(基盤ブロック)
13 褐灰色10YR6/1粘土～シルト(水成堆積層)
14 灰色5Y5/1極細砂混シルト
15 オリーブ黄色5Y6/3極細砂混シルト(ブロック)
16 にぶい黄色2.5Y6/3極細砂混シルト(ブロック)
17 灰オリーブ色5Y6/2極細砂～細砂混シルト(ブロック)
18 灰黄色2.5Y6/2極細砂混シルト(ブロック)
19 オリーブ黄色5Y6/4極細砂混シルト(炭化物を少量含む)
20 灰黄色2.5Y6/2極細砂混シルト(炭化物を少量含む)
21 にぶい黄橙色10YR6/3極細砂～細砂混シルト
22 灰色5Y6/1極細砂混シルト(土壌層)
23 にぶい橙色5YR7/3極細砂混シルト(基盤ブロックを含む)
24 黄灰色2.5Y6/1極細砂混シルト(土壌層)
25 にぶい橙色7.5YR7/3極細砂混シルト(基盤ブロックを含む)
26 黄灰色2.5Y6/1極細砂混シルト(弱い土壌化)
27 明褐色7.5YR7/2シルト(基盤ブロックを含む)
28 灰黄褐色10YR6/2極細砂混シルト
29 灰色5Y6/1極細砂混シルト(基盤ブロックを含む)
30 灰黄褐色10YR6/2極細砂混シルト(周壁溝埋土)
31 灰黄褐色10YR6/2シルト(羨門の溝埋土)
32 オリーブ黄色5Y6/3シルト(基盤ブロック土、玄室内床面・整地層)
33 暗緑灰色10G4/1中砂～粗砂混シルト(古土壌、2-2層)

0 (1:60) 2m

図 50　1 号横穴墓　玄室～前庭部　断面

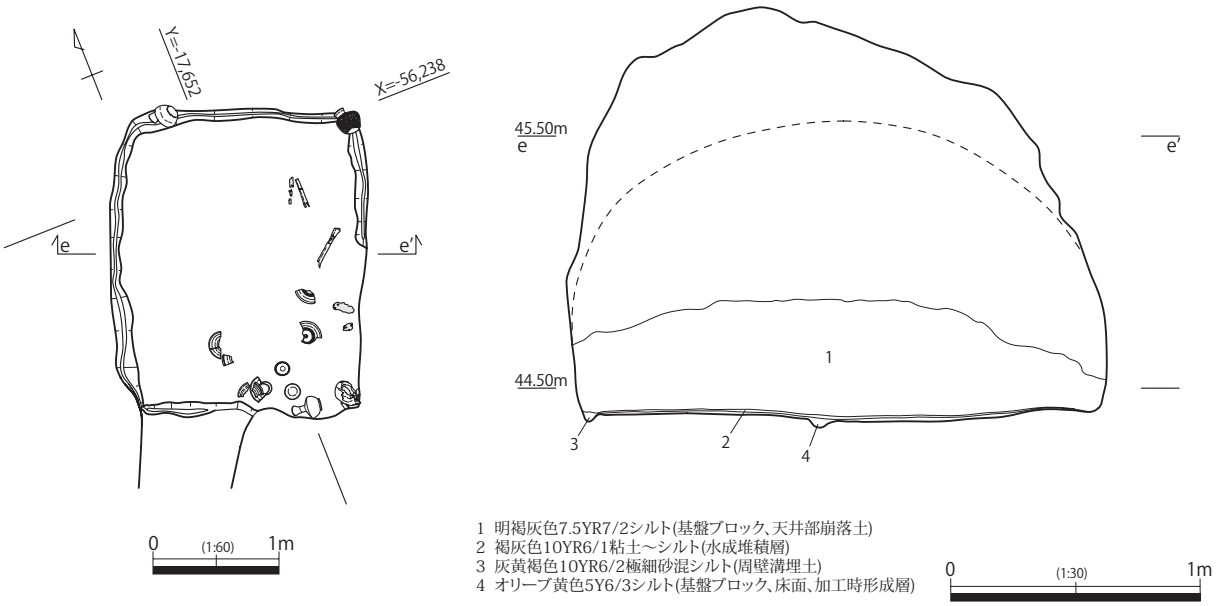


図 51　1 号横穴墓　玄室　断面（南北）

次に、床面を除去した基盤層の上面を加工面として調査した。加工面とは横穴墓の掘削、加工直後の状態を指し、玄室、羨道、前庭部の床面および整地層を除去した面を指している。加工面の調査では、玄室奥壁、側壁、羨道などに残された加工痕の観察と記録作業を行っている。

堆積状況（図 50・51、図版 18）

以下では、1 号横穴墓の堆積状況について加工面となる基盤層直上の堆積から埋没に至るまでの記述を行う。

玄室、羨道、前庭部では、加工面直上に基盤ブロックを用いた床面、整地層を確認した。この床面と整地層は掘削時に生じた排土を用いている。前庭部前の 100 平坦部も同様に、横穴墓構築時の地表面上に基盤ブロックを敷き均して造成したものである。この床面、整地層は玄門と羨門で一部途切れるものの、玄室から平坦部に至るまで連続する土層である。

1 号横穴墓の埋没は、羨門を中心に風化したシルトが凸形に堆積していくことによって始まっており、羨門天井部に達した時点で、外部からの堆積は停止している（図 50-14 ～ 18、22 ～ 29 層）。土壌層（22・24 層）を 2 層確認しており、堆積の進む時期と進まない時期が交互に繰り返されたことが想定される。よって、羨門は長期に亘って開放していた可能性が高いと考えられる。

玄室内では、左袖と奥壁に近い床面を除いた床面で水成堆積層の粘土～シルト（13 層）を確認した。この層は、羨道の埋没に伴い、排水機能を失った玄室内が水浸しになった際に堆積した土層である。壁面には地下水を流し込んだ水口（浸食による穴）が、ほぼ全面で確認できた。なお、周壁溝にこの粘土～シルトが堆積していないことから、周壁溝は比較的早い段階に埋没したものと考えられる。

前庭部は、南西斜面との比高差を徐々になくしながら埋没する（4 ～ 10 層）。その上部には 2-1 層とした古土壌が形成されており、この段階には横穴墓の痕跡は跡形もなく消え、平坦部のみが地表面にあらわれていたと考えられる。

横穴墓の構造（図 52、巻頭図版 5、図版 19 ～ 21）

前庭部は、断面形が逆台形で、幅 1.80 ～ 2.62 m、羨門から 2.30 m離れた図 52- c ラインで高さ 1.70 m（左肩部～底面）を測る。平面形は、平坦部に向かってハの字形にやや開く。底面は基盤ブロック

第Ⅳ章　松原古墳群の調査

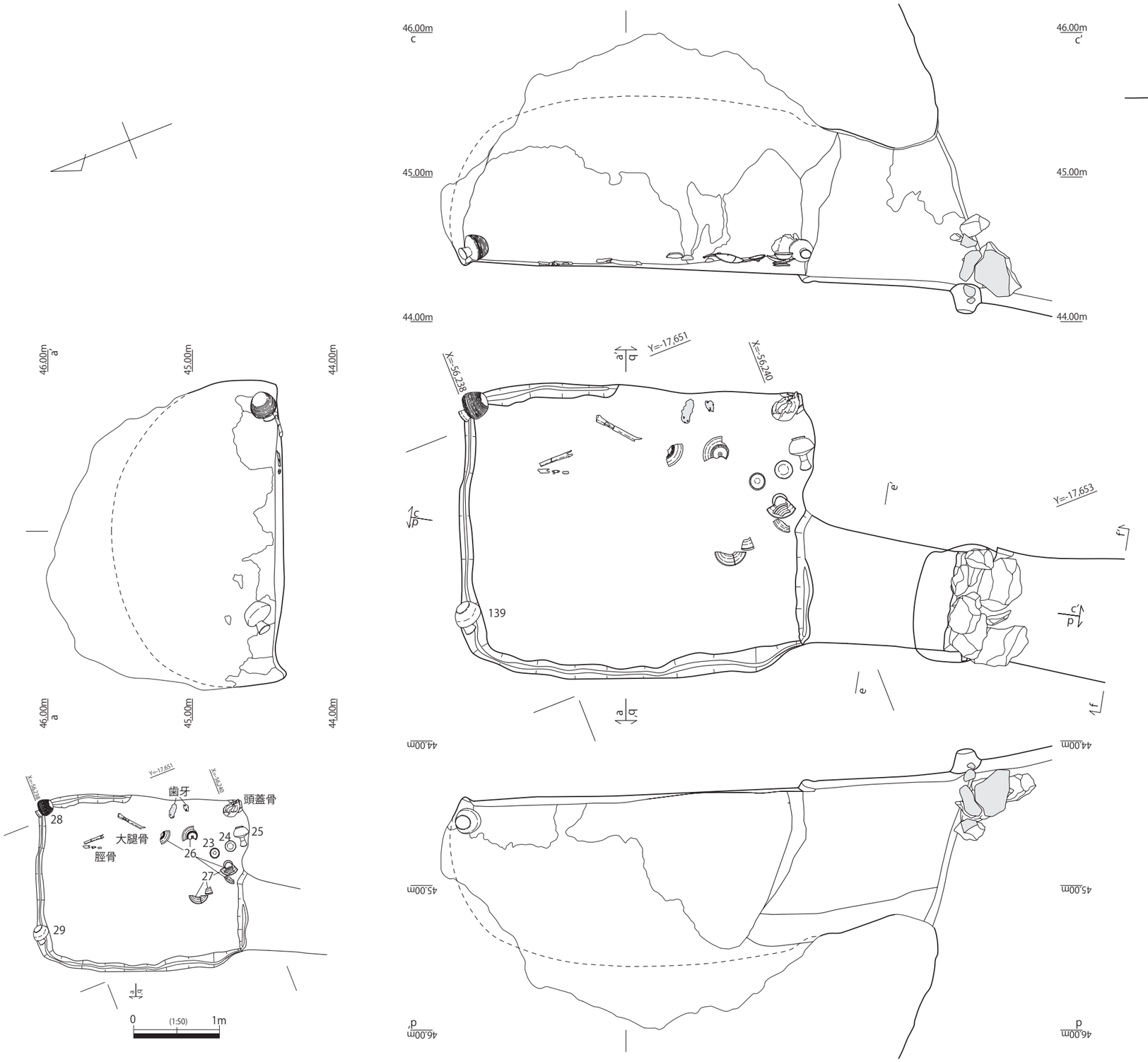


図 52　1 号横穴墓　玄室～羨道　平、立面（機能廃絶面）

を用いて平坦に整地していた。整地層は層厚 0.02 ～ 0.05 mを測る。

羨門は、断面形が釣鐘形である。高さ 0.98 m（崩落部を除く）、底面での幅 0.73 mを測る。天井部は一部崩落している。羨門側面には幅 2 ～ 6 cm の平坦な縁取りを施す。この縁取りは羨門の溝南東および北西隅に取り付いている。

また、羨門では、流紋岩質凝灰角礫岩を用いた閉塞石計 12 個を確認した。30 ～ 40cm 大の石 2 個（下段の石）が前庭部に対し直交方向に並び、10 ～ 30cm 大の小ぶりの石は、羨門側に落ち込むような状態で検出した。小ぶりの石は下段の石の上に積まれていた可能性もあるが、下段の石との間に間隙のあるものもあった。この閉塞石の機能は、羨門を塞ぐ際の構造物に関連すると考えており、扉板等の押さえに使用していたことを想定している。

羨門の溝は、検出長 0.70 m、幅 0.17 ～ 0.21 m、深さ 0.14 mを測る。底面に灰黄褐色シルトが堆積し、基盤ブロックを含む灰色極細砂混シルトで埋没していた。玄室や羨道の排水はこの溝に流れこんでいたことが想定できるが、水成堆積層は認められなかった。羨門の溝内の埋土に含まれる基盤ブロックは 6 ～ 8 ㎝大で角張っており、羨道天井部が崩落したものと考えられる。

羨道は、中央部で幅 0.72 m、高さ 0.95 mである。断面形は、羨門と同じ釣鐘形で玄室に近づくにつれて天井部が平坦になる。羨門及び玄室に近い部分に崩落が認められた。玄門に向って幅は広くなり、天井部が高くなるように傾斜が付いている。羨道及び前庭部底面は水平に対して 8.5 ～ 10° の傾斜で玄室につながる。

玄門は、台形に近い形状を示す。天井部での幅 0.45 m、床面での幅 0.95 m、高さ 1.00 m（崩落部を除く）を測る。玄門では、玄室と羨道の境界に落差 3 ㎝の段があり、羨道側に横方向の溝を設けている。玄室内の周壁溝を通った水はこの溝に集められ、外部には羨道の傾斜を利用して排水していたと考えられる。

玄室は、平面形が長方形で、長軸 2.30 ～ 2.42 m、短軸 1.75 ～ 2.04 mを測る。復元高は 1.18 mである。断面形は天井部が崩落していたものの、羨道と玄室の接点や遺存状況が比較的良好だった左側壁寄り天井部の形状からドーム形に復元した。また、天井部から床面に崩落したブロック土に稜を持つものがなく、平滑に整形しているものが多かったことも根拠とした。床面は、左袖から左側壁中央部及び奥壁に近い部分は整地せずに、基盤層直上を床面としていた。

玄室には左側壁中央から玄門にかけて逆時計回りに水が流れるように周壁溝が設けられていた。周壁溝は、断面形が U 字形で、幅 0.07 ～ 0.15 m、深さ 0.03 ～ 0.05 mを測る。壁面から流れ落ちる地下水の影響で浸食を受けている部分もあった。

玄室内からは人骨及び須恵器が出土した。玄室の左側に遺物は集中しており、奥壁右側に接して出土した 29 平瓶のみ離れて出土している。床面直上及び天井部の崩落土である基盤ブロック中から出土した遺物がある。床面直上から出土したものには、歯牙と大腿骨、脛骨、23 杯蓋、24 杯身がある。26 高杯蓋は、 4 点の破片に割れ、歯牙に近い 2 点が床面から 1 ～ 2 cm 浮いた状態で、他の 2 点は 27 高杯の杯内と高杯に近接して出土した。27 高杯は、脚部が床面直上から出土しており、杯部が脚部から離れた右壁側から出土している。25 長頸壺は、口縁部～頸部が左袖水口の浸食部に堆積する土の上に倒れた状態で出土している。

左袖に近いところから出土した頭蓋骨は、床面の整地が行われていない基盤層の直上から出土した。頭蓋骨は下顎骨と離れて出土しており、地面に接した部分は失われている。

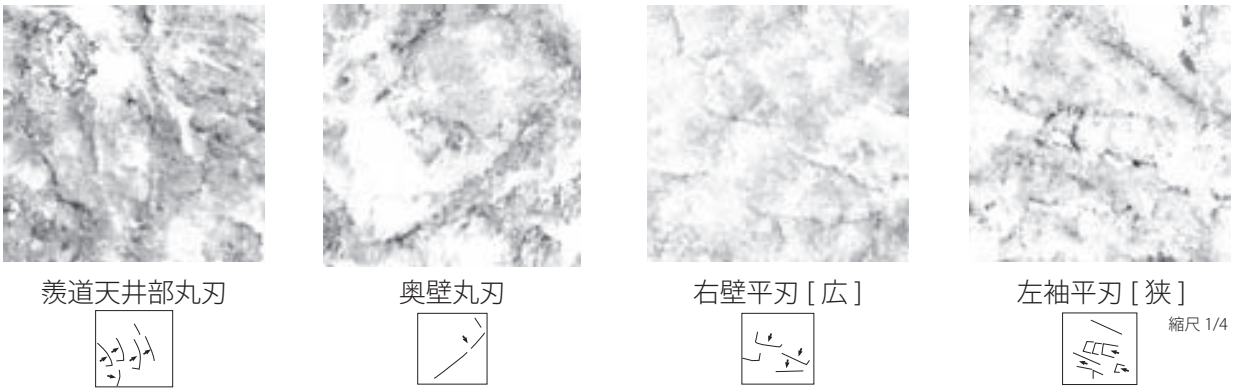


図 53　1 号横穴墓の加工痕　拓本

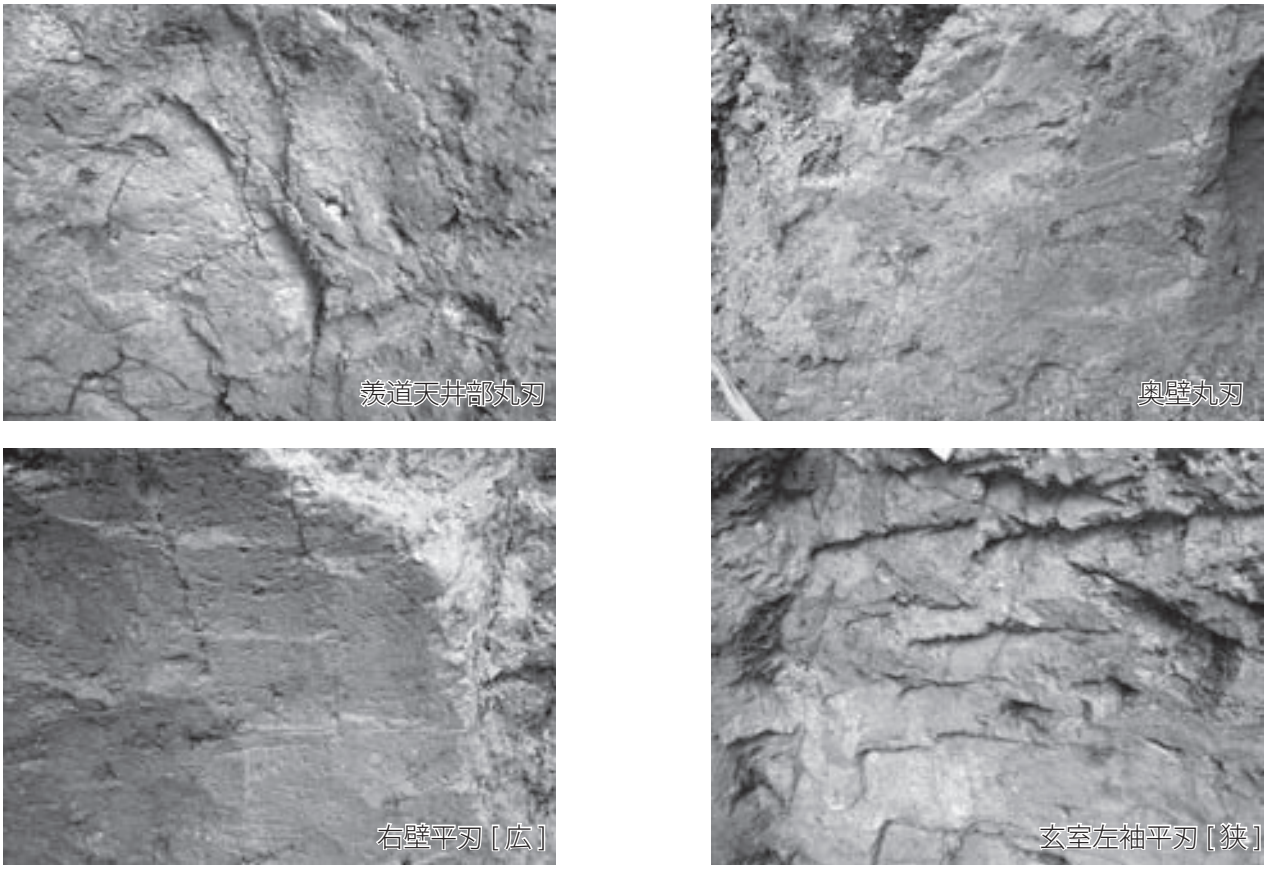


写真 7　1 号横穴墓の加工痕

また、28 平瓶は奥壁左側に接して出土した。出土地点は周壁溝の上部にあたり、口縁部を奥壁側に向けていた。この 28 平瓶と反対側の位置にあたる奥壁右側に接して出土した 29 平瓶も、28 と同じく周壁溝の上部で出土した。土器の下には基盤ブロックの堆積があり、近接する床面から約 6 cm 離れている。羨門は長期に渡って開放していた可能性が高く、床面から離れて出土した土器には追葬などの二次的な要因が考えられるが、天井部崩落に伴う床面への加撃も想定している。

横穴墓の構築（図 53 ～ 55、図版 20・21、写真 7）

羨門から玄室では、横穴墓構築時の加工痕が明瞭に残っており、加工痕の稜線を中心とした図化を行った。側壁や羨道天井部等の加工痕は、機能廃絶面とした図 52 にも表現すべきであるが、遺物出土状況と煩雑になることを避けた。なお、羨門から前庭部にかけては風化や崩落等の影響により、加工痕は確認できなかった。羨門から玄室に近づくに従い加工痕の遺存状況は良好である。

第Ⅳ章　松原古墳群の調査

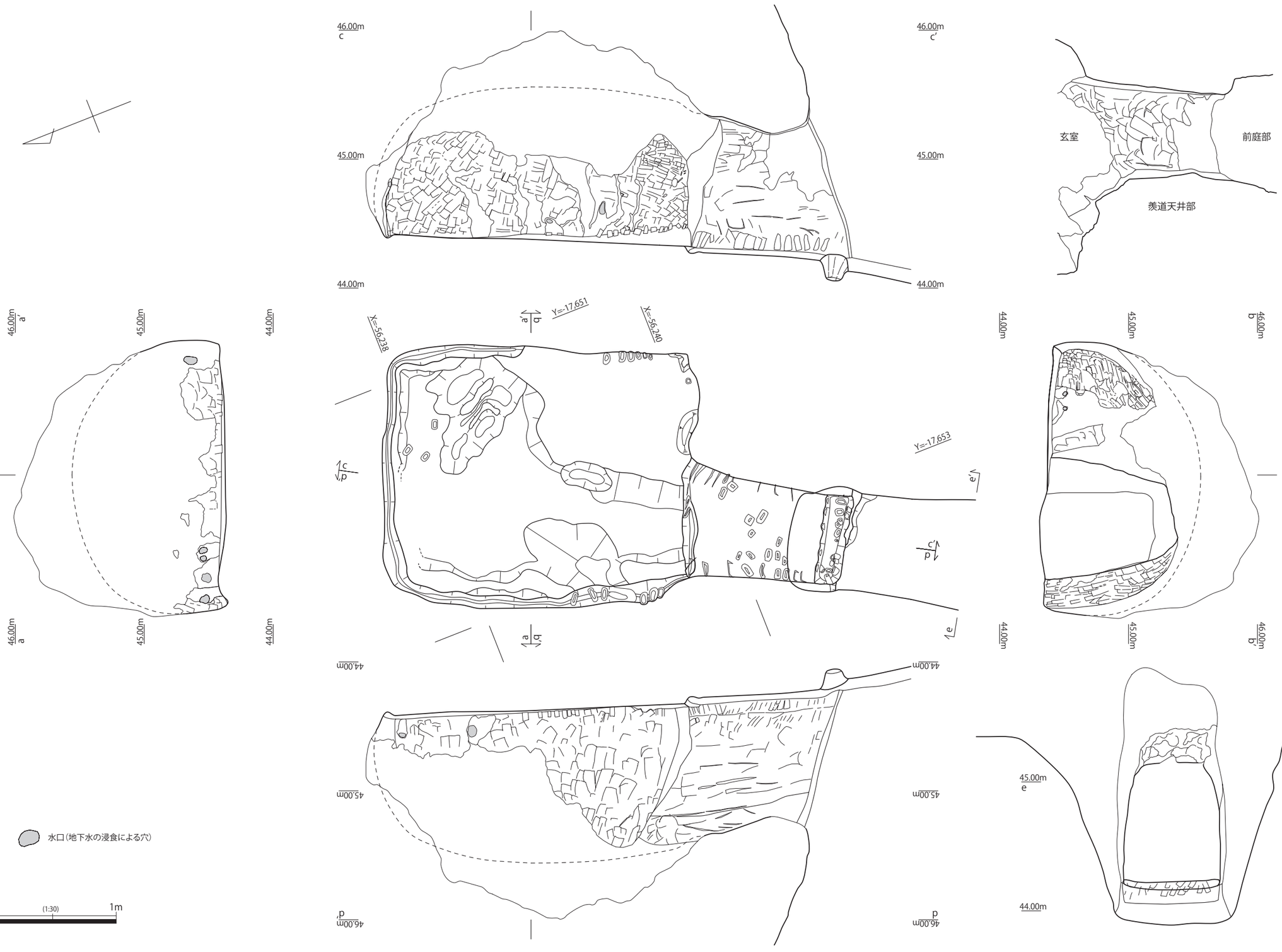


図 54　1 号横穴墓　玄室～羨道　平、立面（加工面）

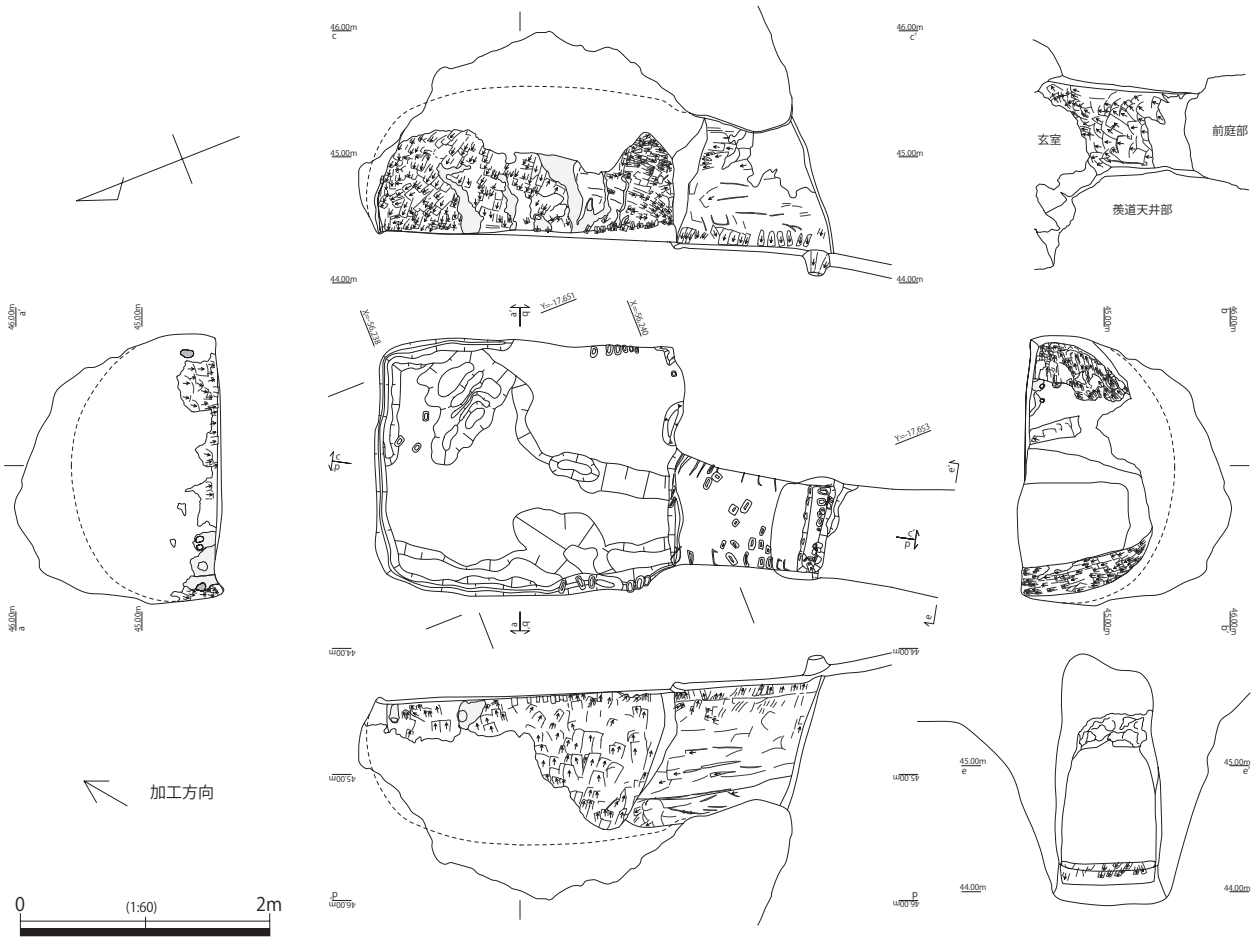


図 55　1 号横穴墓の加工方向　模式

加工痕は、刃先の形状によって 3 種類の工具痕を抽出した。刃先がU字形に緩やかな弧を示す丸刃、一文字に直線を示し幅 8 ～ 10 ㎝の平刃、一文字に直線を示し幅 4 ～ 4.5 ㎝の平刃がある。本文中において、平刃については幅の広い方を平刃 [広]、幅の狭い方を平刃 [狭] と表記することとする。

羨門の溝には、平刃 [狭] の工具痕が残る。縦方向に用いて溝を掘削している。底面には、溝掘削時と溝肩部の掘削時の工具痕が認められる。また、前庭部側となる溝肩部で、削り出しの高まりが認められた。

羨道天井部には丸刃の工具痕が残る。幅 8 ～ 12 ㎝、長さ 5 ～ 15 ㎝、深さ 0.2 ～ 0.3 ㎝。玄室→羨門、側壁→羨道天井部中央に向かって加工を行う。

羨道右および左壁には丸刃、平刃 [広]、[狭] の工具痕を確認した（図版 20）。右壁は、下から 20 ～ 25 ㎝上は主として平刃 [広] で加工を行って平滑に仕上げている。丸刃は羨門近くで 1 箇所確認した。また、平刃 [狭] を傾けて壁面に当てたために線状に加工痕が観察できる部分が 5 箇所で認められた。床面及び天井部に平行しており、羨道の企画線だった可能性がある。左壁においても平刃 [狭] による線状になった工具痕が認められる。左壁は右壁より欠損部が大きく、工具痕の検出範囲も狭かった。右および左壁の下側は、平刃 [狭] を縦方向に用いて羨道底面までの加工を行う。

羨道底面には丸刃、平刃 [狭] の工具痕が残る。平滑に仕上げられているため、工具痕の検出範囲は狭い。丸刃は、左壁と羨門寄りで先端が縦に入ることによってできたと考えられる痕跡を検出した。平刃 [狭] は壁沿いで主として確認しており、壁の下側を平刃 [狭] で加工した際に、底面に当たることによって形成されたものが含まれる。

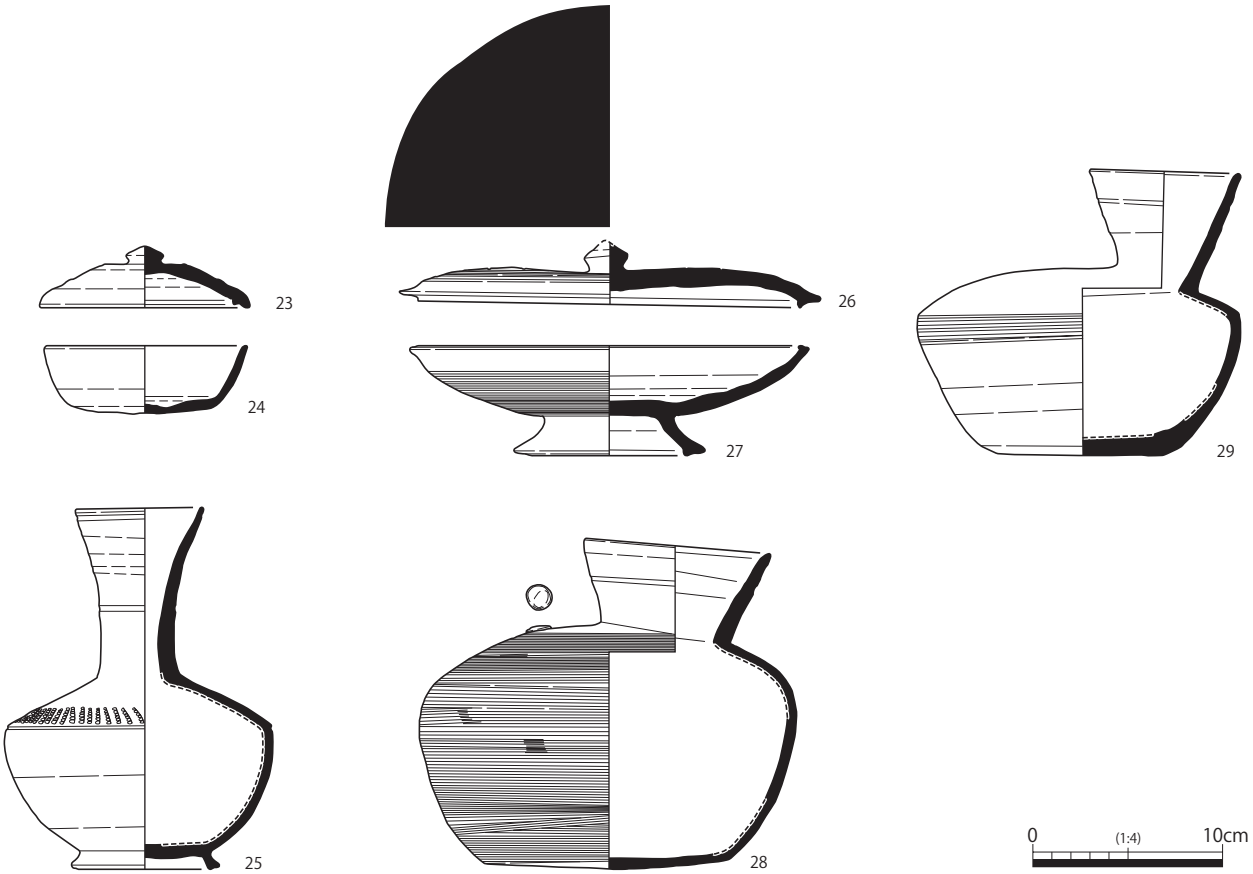


図 56　1 号横穴墓　出土遺物

玄室底面には平刃 [狭] の工具痕と底面加工時の凹凸が残る。底面は、左袖から左回りに低くなるように加工しており、周壁溝と同様に玄室内の排水を意識した構造となっている。周壁溝沿いには削り出しの高まりを確認した。右側壁寄りの高まりは、幅 0.16 ～ 0.30 m、高さ 0.02 mを測る。左側および奥壁寄りの高まりは、幅 0.08 ～ 0.10 m、高さ 0.01 mを測る。奥壁側の一部が途切れるが、調査時の掘り過ぎによる。右側壁寄りの高まりが途切れる部分と奥壁と左側壁寄りでは不整形な凹みを確認している。なお、周壁溝沿いの高まりと底面の凹凸は床面の土で平坦に均されているため、床面直上（機能面）では観察されない。

周壁溝には、平刃 [狭] の工具痕が残る。壁面の水口から流れ落ちた地下水によって浸食を受けているところも多い。平刃 [狭] の工具痕は、壁の下端部を縦方向に加工した際に付いたものである。

左袖には平刃 [狭] の工具痕が残る。平刃 [狭] の痕跡が最も深く残っており、深さ 0.7 ～ 1.6 ㎝のところもあった。左側壁→玄門方向に加工し、上下の方向については混在する。

左側壁には丸刃と平刃 [広]、[狭] の工具痕が残る。丸刃、平刃 [広] は 2 箇所で確認したのみで、大半は平刃 [狭] によって加工している。奥壁と左袖側から中央へ、下から上への加工を行っている。丸刃、平刃 [広] は荒掘り段階に使用した工具の可能性がある。

奥壁には丸刃と平刃 [狭] の工具痕が残る。遺存状況が悪く、壁面の崩落が顕著であった。左壁側では丸刃が下方向に向かって使われていることが分かっている。

右側壁には丸刃と平刃 [広]、[狭] の工具痕が残る。平刃 [狭] は奥壁側の一部と壁下端部から周壁溝の底面にかけて使われている。平刃 [広] を多用し、中央→右袖部、下→上方向に加工する。

右袖では右壁と同じく、平刃 [広]、[狭] の工具痕を確認した。平刃 [狭] は、下端部と周壁溝底

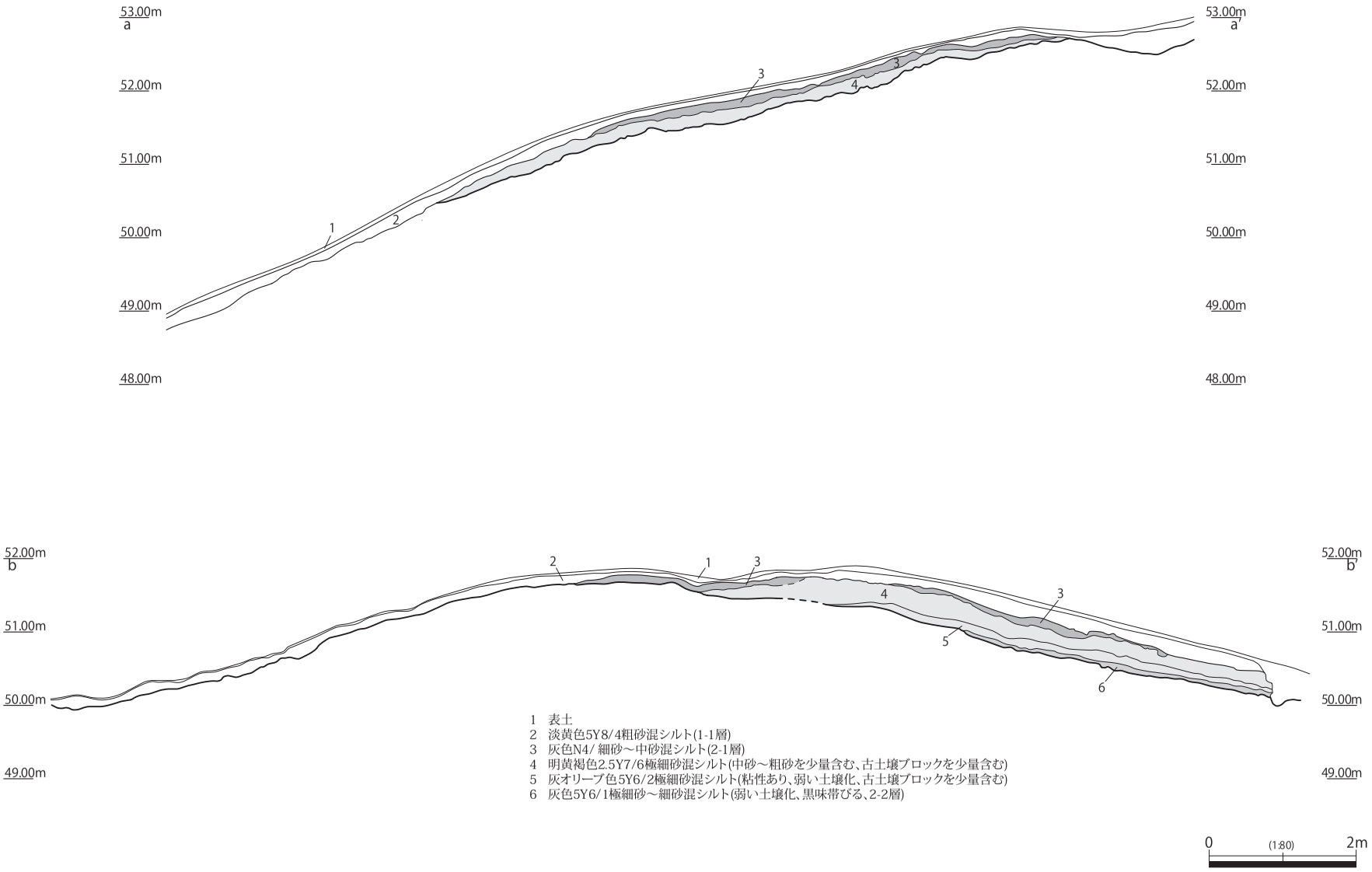

53.00m
a
52.00m
51.00m
50.00m
49.00m
48.00m
a'
1
2
3
4
52.00m
b
51.00m
50.00m
49.00m
b'
5
6
1 表土
2 淡黄色5Y8/4粗砂混シルト(1-1層)
3 灰色N4/ 細砂～中砂混シルト(2-1層)
4 明黄褐色2.5Y7/6極細砂混シルト(中砂～粗砂を少量含む、古土壌ブロックを少量含む)
5 灰オリーブ色5Y6/2極細砂混シルト(粘性あり、弱い土壌化、古土壌ブロックを少量含む)
6 灰色5Y6/1極細砂～細砂混シルト(弱い土壌化、黒味帯びる、2-2層)
0
(1:80)
2m

図 57　99 墳丘　断面

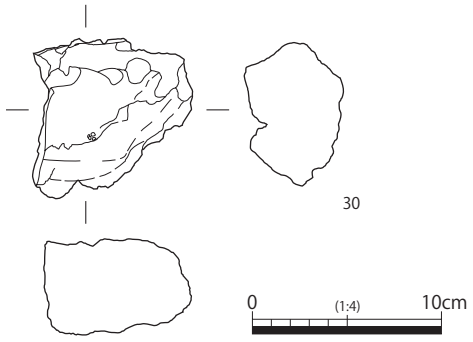


図 58　99 墳丘　出土遺物

面にかけて用いられている。平刃 [狭] は、右壁側→羨門、下→上方向に加工する。玄室底面では周壁溝を玄門右側に連続させており、片袖式に近い形状を示す。

横穴墓の構築は以下の工程に復元できる。

①荒掘りによる外形の確定。羨道、奥壁、左側壁の丸刃の工具痕は荒掘り段階の加工痕と考えられる。また、羨道の壁面の平刃 [狭] で付けられた筋状の痕跡は天井部や床面と平行しており、羨道を企画する線の可能性がある。

②平、立面形の確定。玄室の四隅を確定させた後、玄室の形状を整形する。玄室底面は特に排水システムを重視したようである。

③玄室四隅を起点とした仕上げ作業。天井部について詳細は不明であるが、この段階に全体が整えられたと考えられる。玄室の排水システムや玄室プランを重視したことを考えれば、玄室内の作業道でもあった羨道の仕上げもこの段階に行われたと考える。

なお、横穴墓の工具痕は玄室、羨道において３種類が抽出できた。荒掘りや仕上げといった作業工程の違いや壁面や溝の加工など作業目的の違いで、道具の使い分けをしていたことが看取できる。

玄室の構築方法の検討により、当初から玄室の左袖側に頭位を配置するための企画であった可能性がある。その一方で、右、左壁における平刃 [広]、[狭] の使用頻度の極端な差から追葬時の拡張や再加工の可能性も否定できない。

ただし、再加工については、①床面を上面から掘り込むような二次加工を行っていないこと、②床面の直上に再加工時の堆積が認められないこと、③羨道、前庭部に再加工時の痕跡が認められないことから、現状では積極的に評価していない。

出土遺物（図 56、巻頭図版５、図版 22）

出土した土器は、すべて須恵器である。23 は杯蓋である。内外面は回転ナデ調整を施す。24 は杯身である。内外面はナデ、回転ナデ調整、底面はヘラ切り後ヘラケズリ、ナデ調整を施す。26 は高杯蓋である。外面はカキメ後沈線二条と列点文を施す。27 は高杯である。杯部外面はカキメを施す。23・24、26・27 はそれぞれセット関係にあると考えられる。25 は長頸壺である。高台が付き、外面肩部は沈線１条と列点文を施す。28 は平瓶である。外面はカキメを施す。肩部は丸味を帯びて屈曲する。29 も平瓶である。肩部にカキメを施す。肩部は稜をなし、明瞭に屈曲する。人骨周辺から出土した 23 ～ 28 の須恵器は飛鳥Ⅲに比定しており、横穴墓は古墳時代終末期に構築されたものと考えられる。また、型式の違う 29 平瓶は飛鳥Ⅳに比定しており、この段階を横穴墓埋没直前（機能廃絶）の時期と想定している。

c）99 墳丘（図 48・57、図版 22）

概要

１号横穴墓の北東、東西尾根上で検出した。調査前から墳丘上の隆起として認識していたが、埋葬施設や周溝が確認できなかったため、断面記録等を行った後、基盤層上面まで完掘し作業を終了した。その後、南西斜面の調査に着手し、同斜面で１号横穴墓を検出したため、大垰山横穴墓群やマケン堀横穴墓群などで確認された後背墳丘として再評価を行った。

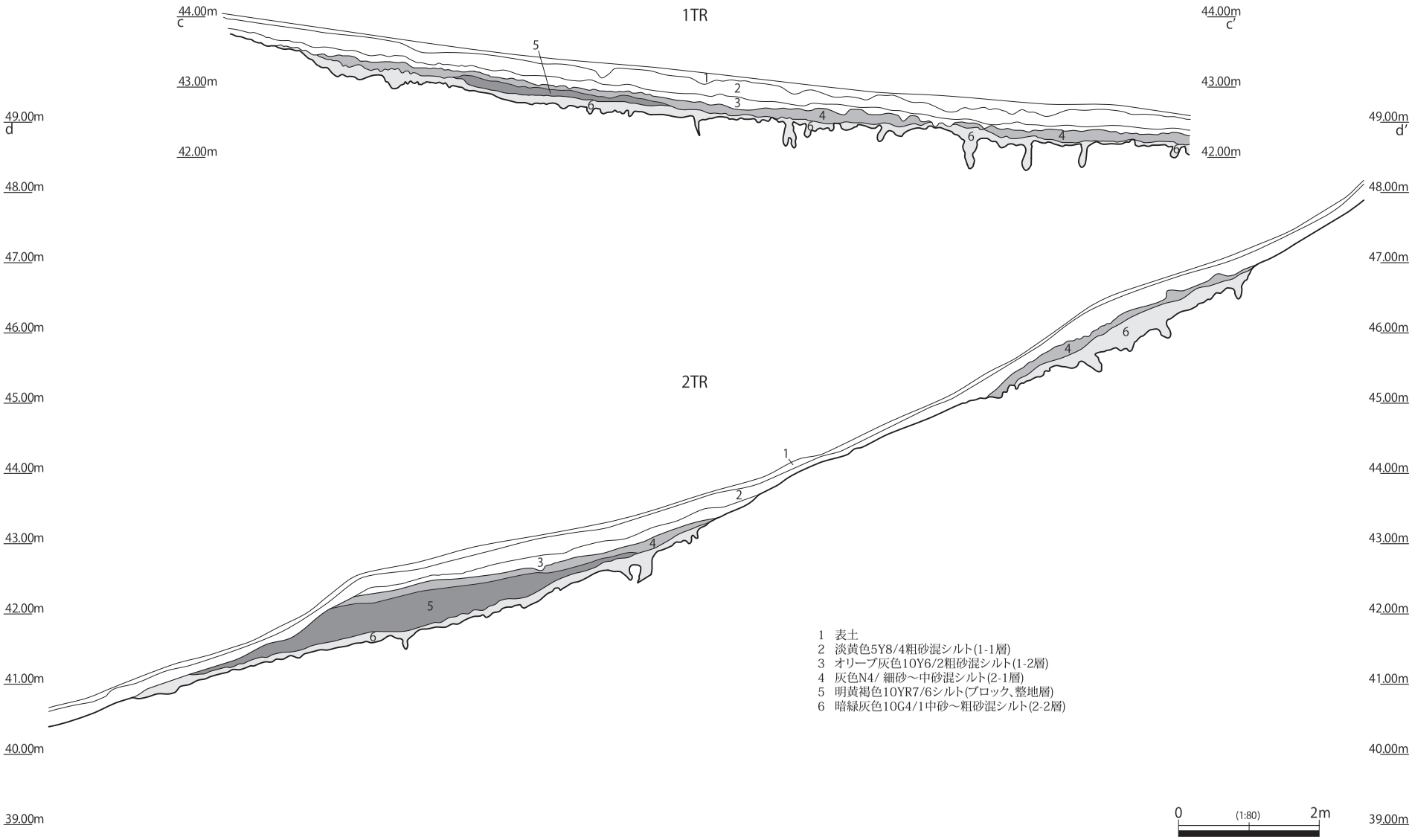


図 59　100 平坦部　断面

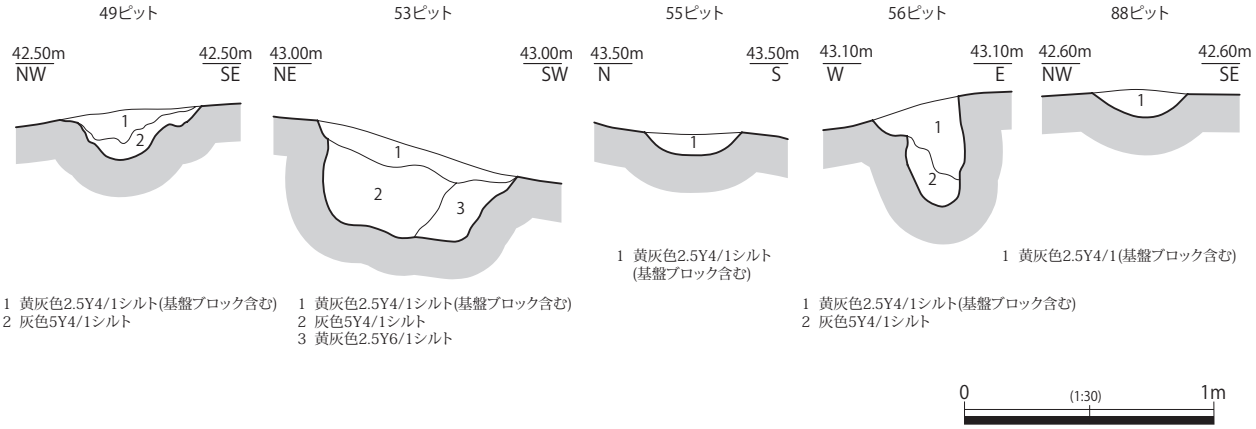


図 60　100 平坦部周辺　ピット断面

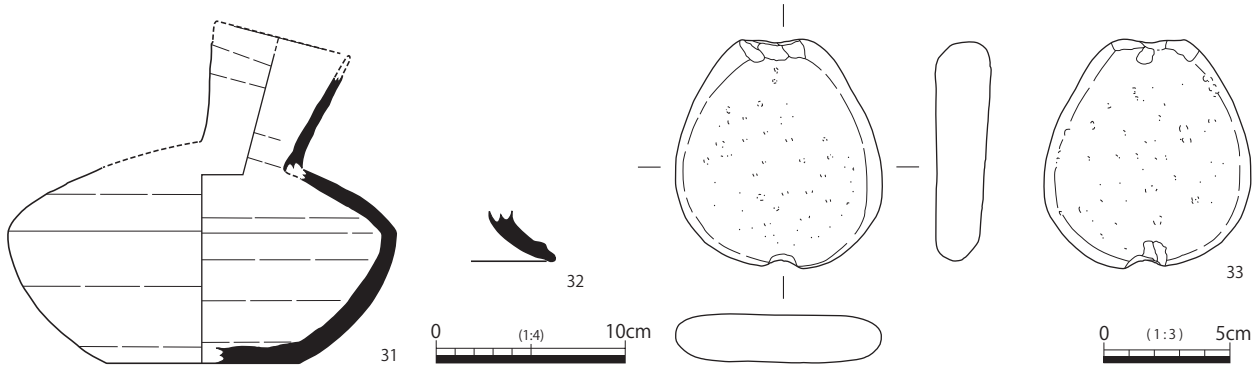


図 61　100 平坦部周辺　1-1、2-1 層　出土遺物

墳丘

墳形は楕円形を呈する。東側は２道の掘削時に撹乱されており、本来は円形であった可能性がある。南北 11.22 m、東西 7.18 ～ 7.43 m（検出長）、南側墳裾部と墳頂部の比高差 2.21 mを測る。墳丘の南西側で 2-2 層とした極細砂～細砂混シルトを確認しており、この土層が 99 墳丘基底面となる旧表土だった可能性がある。図 57- ４・５層は極細砂混シルトで、２層系のブロックが少量入り、その上部には 2-1 層とした古土壌が堆積していた。2-2 層が全体で観察されないことから、一部削り出しによって造成した墳丘の可能性がある。99 墳丘では、2-1 層からは鉄滓３点が出土した。先述のように、１号横穴墓から 99 墳丘にかけて堆積する 2-1 層から土師器、須恵器の破片が出土しており、99 墳丘で用いられた土器の可能性がある。

出土遺物（図 58、図版 23）

出土した鉄滓３点の内、断面形が椀形を呈する 30 を図化した。底面には炉壁が付着し、木炭痕がみられる。椀形鍛冶滓と考えられる。

ｄ）100 平坦部（図 48・59、図版 23）

１号横穴墓の前庭部前、南西斜面で検出した。南北幅 6.00 ～ 7.40 mで、前庭部から 4.30 ～ 4.42 mを測る。2-2 層とした１号横穴墓の構築時の地表面上に基盤ブロックを用いて造成している。基盤ブロックの層厚は 0.47 ～ 0.50 mを測り、角～亜角形の２～３cm 大のブロックも含まれるが、主体はシルトとなっている。この基盤ブロック直上には 2-1 層とした古土壌が堆積しており、2-1 層を除去した面ではピット５基を検出した。

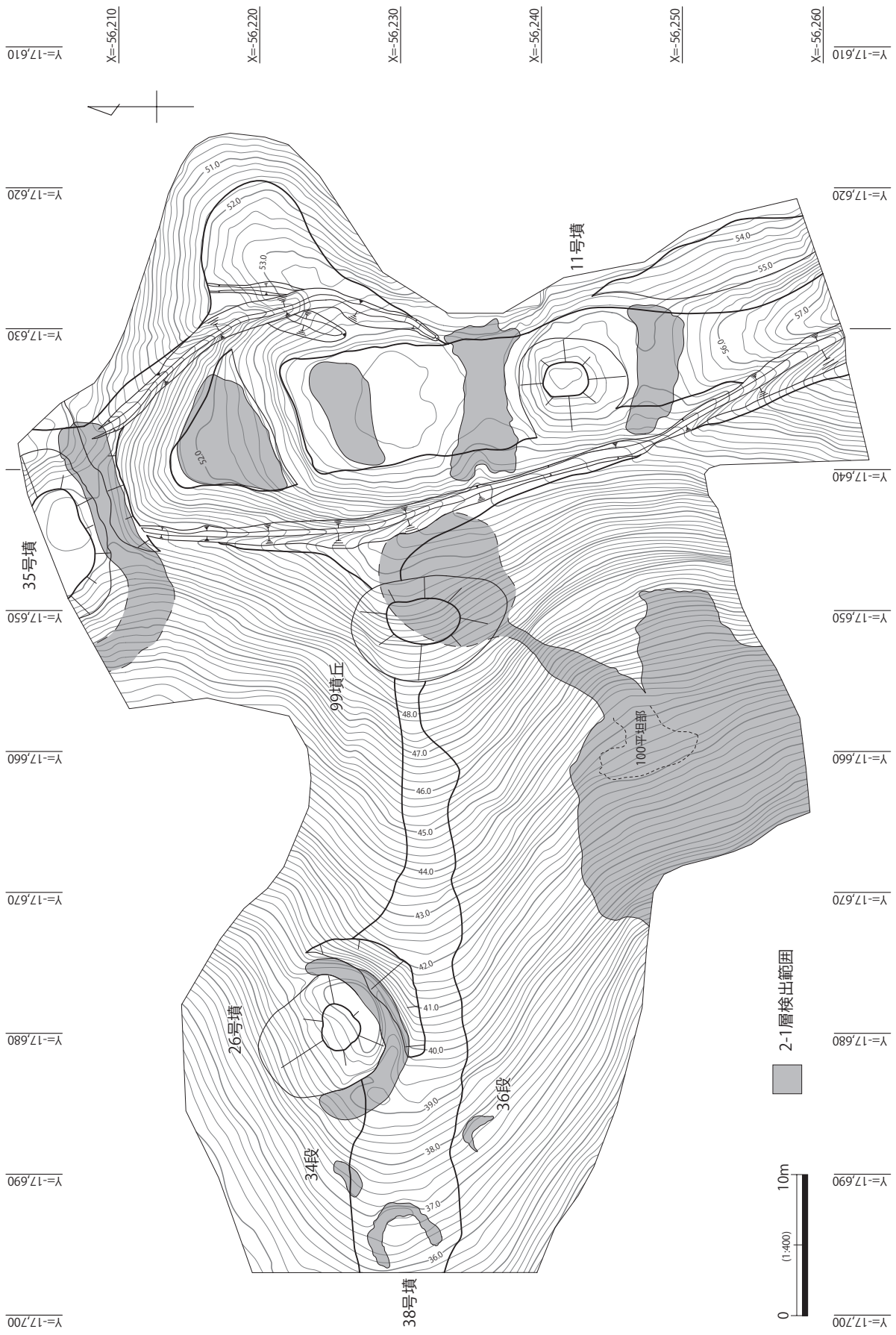

X=-56,210
X=-56,220
X=-56,230
X=-56,240
X=-56,250
X=-56,260
Y=-17,610
Y=-17,620
Y=-17,630
Y=-17,640
Y=-17,650
Y=-17,660
Y=-17,670
Y=-17,680
Y=-17,690
Y=-17,700
35号墳
11号墳
99墳丘
26号墳
34段
36段
38号墳
100平坦部
2-1層検出範囲
0
10m
(1:400)

図62　第2-1面　平面

49・53・55・56・88 ピット（図 60）

100 平坦部周辺で 2-1 層を除去した段階に検出した。49 ピットは、平面形が円形で、直径 0.60 m、深さ 0.20 mを測る。53 ピットは、平面形が楕円形で、長軸 0.80 m、短軸 0.64 m、深さ 0.36 mを測る。55 ピットは、平面形が円形で、直径 0.38 m、深さ 0.08 mを測る。56 ピットは、平面形が円形で、直径 0.30 m、深さ 0.42 mを測る。88 ピットは、平面形が円形で、直径 0.36 m、深さ 0.10 mを測る。いずれのピットも埋土は基盤ブロックを含むシルトを基調とする。49 ピットから須恵器細片が出土しているが、器種は不明である。

2-1 層出土遺物（図 61、図版 26）

99 墳丘から 100 平坦部にかけて堆積する 2-1 層からは土師器、須恵器、石製品が出土した。土器に完形品は含まれず、すべて破片で割れ口はシャープなものが多かった。31 は須恵器平瓶である。表土、1-1 ～ 2-1 層から細片となって出土した。口縁部と体部は接合しておらず、図上復元している。飛鳥Ⅳに比定される。32 は須恵器高杯の脚部である。33 は石錘である。角閃石石英安山岩を用いており、亜円礫の両端を打ち欠いて加工を行っている。

e）第 2-1 面（図 62、巻頭図版 2 、図版 24）

1-2 層を除去した面が第 2-1 面である。2-1 層とした古土壌は、周溝及び斜面部など低所となる部分において主として確認した。1-2 層の堆積範囲とほぼ同じである。2-1 層は、遺存状況が悪く、平面的な広がりが不明瞭な場合も多く、図 62 では古墳、1 号横穴墓の調査に関係して図化した 2-1 層の範囲を示している。

第 4 節　中世以降の調査

1）概要

1-1 層の上面と 1-1 層を除去した面において調査を行っており、それぞれ第 1-1・2 面と呼称した。なお、1-1 層と 1-2 層は土質に大きな違いはなく、層境が不明瞭な場合があった。

第 1-1・2 面では、平坦部、溝、道を検出した。各遺構面で平坦部や道にはそれぞれに遺構番号を付けたが、1-1 層の上面となる第 1-1 面は 1-1 層下面遺構の機能廃絶以降の痕跡である場合も考えられる。第 1-2 面では加工面や機能面が失われて本来の帰属面が明らかにできない道もあった。

1-1 層及び道からは土師器、須恵器、瓦質土器、鉄釘、表土からは土器、陶製玩具が出土しており、第 1-1・2 面は中世～近世にかけて形成されたものと考えられる。

2）第 1-2 面（図 63・64、図版 24）

17 平坦部、8 溝（図 65）

17 平坦部は、第 1-1 面の 3 平坦部の下面で検出した。長軸 16.20 ～ 16.58 m、短軸 8.00 ～ 8.39 mを測る。

8 溝は、幅 0.20 ～ 0.45 m、深さ 0.02 ～ 0.05 mを測る。1-1 層の下面遺構で、第 1-1 面 94 溝の直下で検出した。

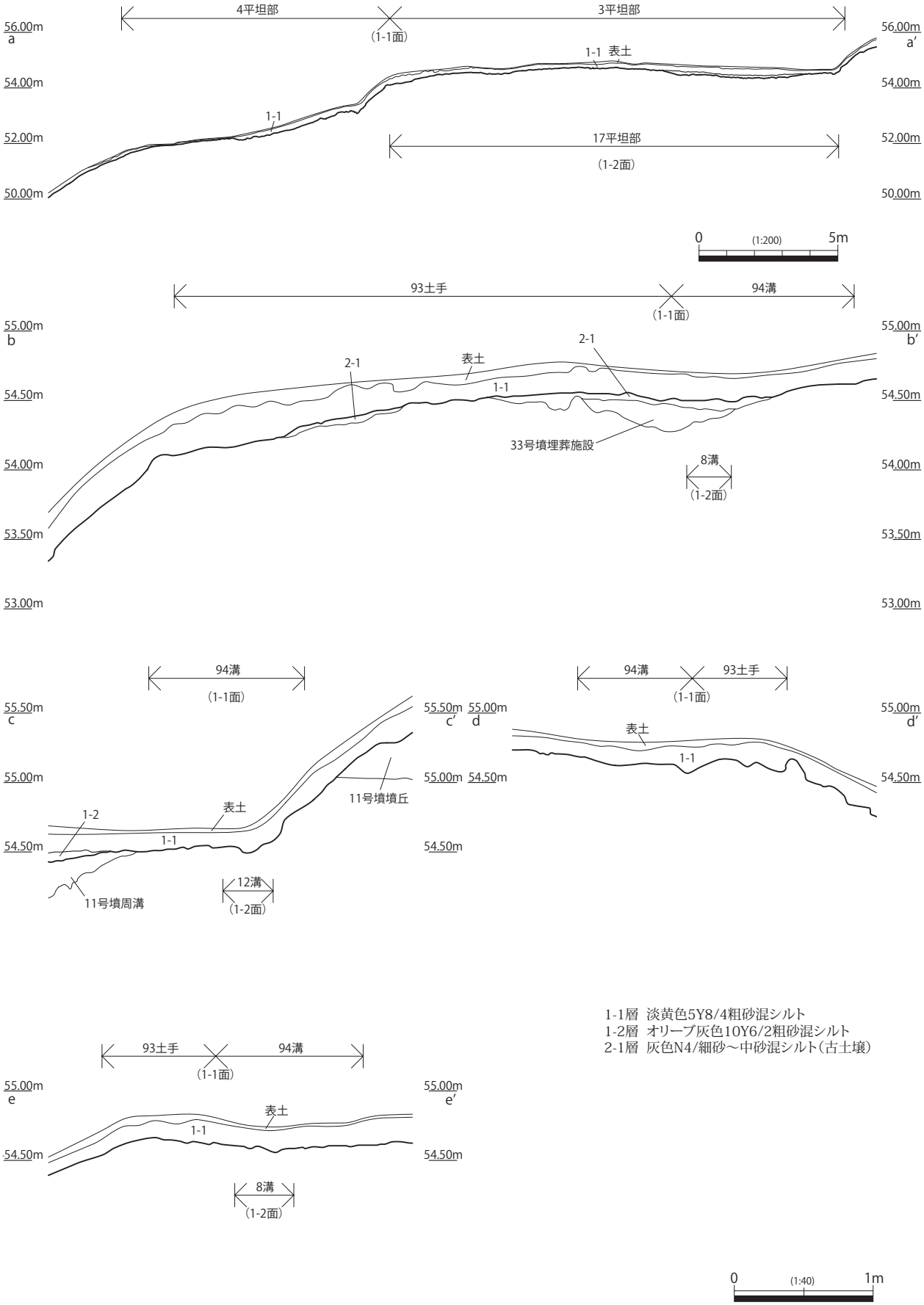
5・98 道（図 66）

5 道は 17 平坦部の東側を通り、尾根を南北に縦断する道である。幅 0.40 ～ 1.90 m、深さ 0.08 ～ 0.83 mを測る。南北尾根で検出した古墳の東側に位置する。第 1-1 面で検出した 1 道の下にあたる。

X=-56,210
X=-56,220
X=-56,230
X=-56,240
X=-56,250
X=-56,260
Y=-17,610
Y=-17,620
Y=-17,630
Y=-17,640
Y=-17,650
Y=-17,660
Y=-17,670
Y=-17,680
Y=-17,690
Y=-17,700
51.0
52.0
53.0
54.0
55.0
56.0
57.0
48.0
47.0
46.0
45.0
44.0
43.0
42.0
41.0
40.0
39.0
38.0
37.0
36.0
0
(1:400)
10m

図 63　第 1-2 面　平面

図 64　第 1-2 面　平面（南北尾根）



1-1層　淡黄色5Y8/4粗砂混シルト
1-2層　オリーブ灰色10Y6/2粗砂混シルト
2-1層　灰色N4/細砂～中砂混シルト(古土壌)

図 65　第 1-2 面　17 平坦部、8 溝　断面

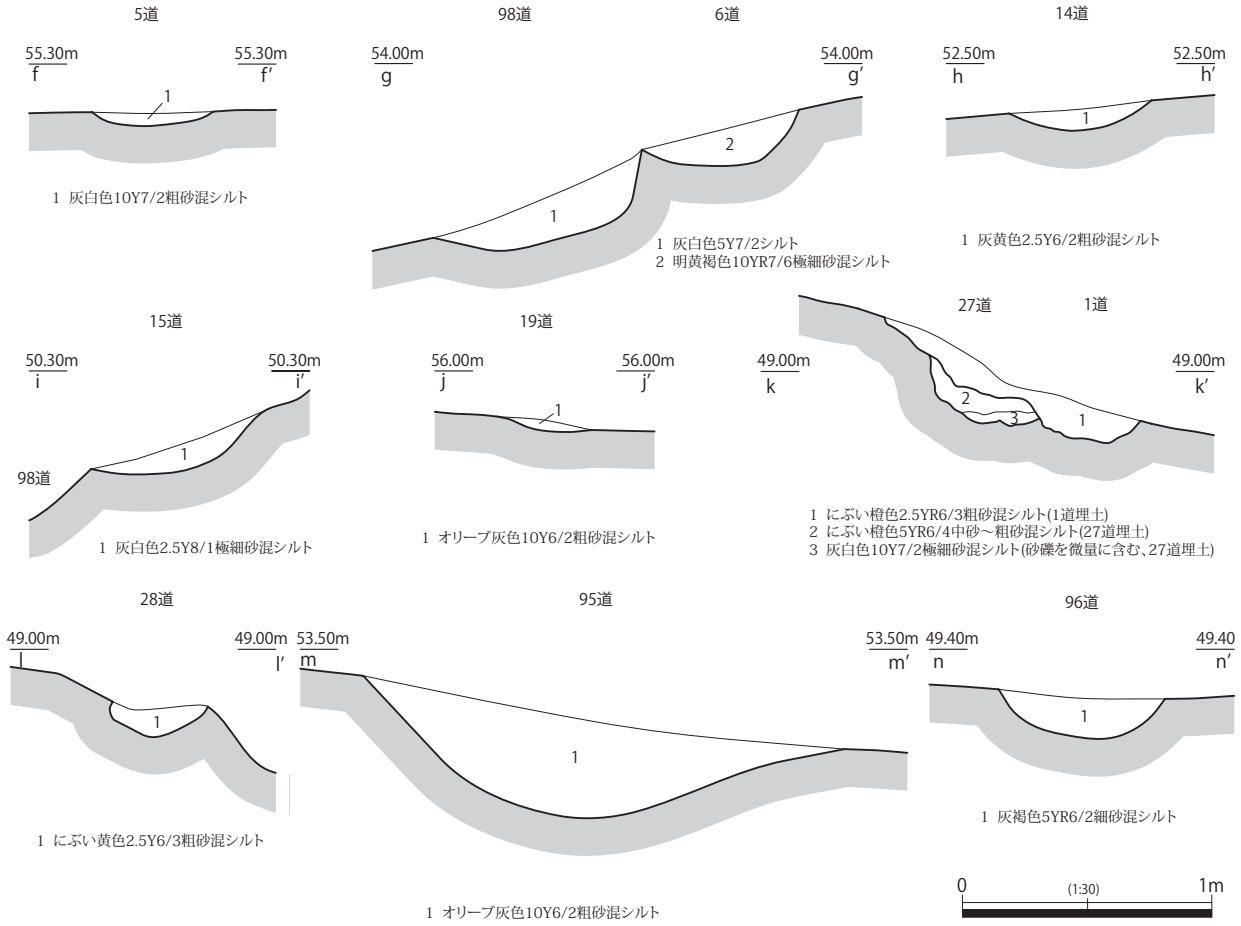


図 66　第 1-2 面　道断面

底面には硬くしまった粗砂混シルトが認められる部分もあった。瓦質土器の細片 1 点が出土した。また、5 道に接して樹齢約 80 年の立木を確認した。5 道はこれを避け南北に通っていることから、道として機能していた時期を下げて考える必要もある。

98 道は 17 平坦部の西側を通り、尾根を南北に縦断する道である。幅 0.30 ～ 2.00 m、深さ 0.14 ～ 0.50 mを測る。南北尾根で検出した古墳の西側に位置する。第 1-1 面で検出した 2 道の下にあたる。5 道と同じく、底面に硬くしまった細砂～中砂混シルトの堆積が認められる部分もあった。

6・15・19・96 道（図 66）

98 道の東側で検出した道である。98 道に先行する道で、個々の道には連続性がない。6 道は、幅 0.65 m、深さ 0.15 mである。埋土は極細砂混シルトである。15 道は、幅 0.60 m、深さ 0.10 mを測り、埋土は粗砂混シルトである。19 道は、幅 0.50 m、深さ 0.05 mを測り、埋土は細砂混シルトである。96 道は、幅 0.50 m、深さ 0.16 mを測り、埋土は極細砂混シルトである。

9・14・28・95 道（図 66）

5 道周辺で検出した道で、重複関係は 5 道の方が新しい。9 道は幅 0.65 m（検出長）、深さ 0.06 ～ 0.10 mを測り、埋土は砂礫混シルトである。14 道は幅 0.50 ～ 1.00 m、深さ 0.08 mを測り、埋土は粗砂混シルトである。27 道は幅 0.40 m、深さ 0.12 mを測り、埋土は下層から砂礫を含む極細砂混シルト、中砂～粗砂混シルトが堆積する。1 道に東側肩部を切られる。28 道は幅 0.30 ～ 0.40 m、深さ 0.11 mを測り、埋土は粗砂混シルトで、断続的に検出した。95 道は、幅 1.90 m、深さ 0.39 mを測り、埋土は粗砂混シルトである。

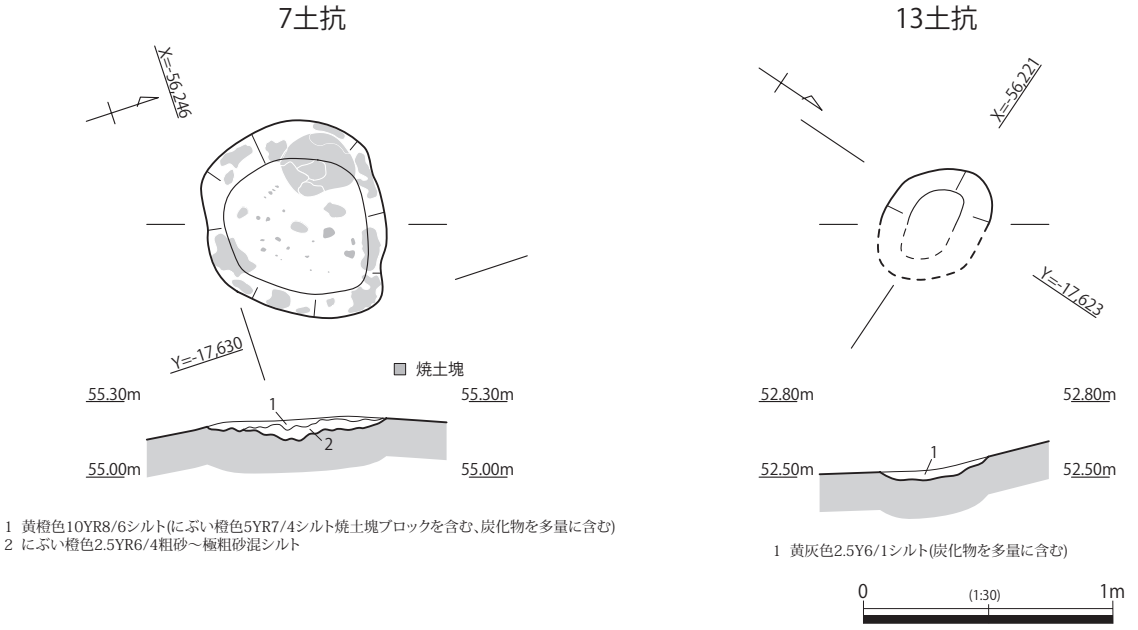


図 67　第 1-2 面　7・13 土坑　平、断面

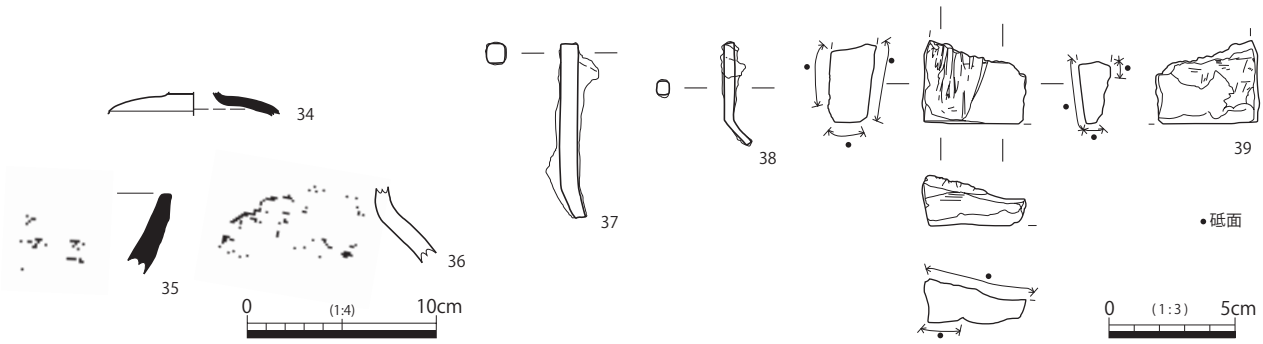


図 68　1-1、1-2 層　出土遺物

7 土坑（図 67、図版 24）

9 道の西側で検出した。平面形は方形に近い形状を呈す。南北 0.72 m、東西 0.82 m、深さ 0.17 mを測る。底面には焼土塊を含む粗砂～極粗砂混シルトブロックが堆積する。上層は焼土塊や炭化物を多量に含むシルトである。

13 土坑（図 67、図版 24）

北東斜面、1-2 層上面で検出した。平面形は、東側が土層観察用トレンチを設定した場所にあたるため全容は不明であるが、残存する部分は楕円形を呈す。南北 0.35 m、東西 0.25 m（検出長）、深さ 0.04 mを測る。埋土は植物遺体の炭化物を含むシルトである。遺物は出土しなかった。

出土遺物（図 68、図版 26）

34 は須恵器短頸壺の肩部である。内外面は回転ナデ調整である。35 は須恵器鉢の口縁部である。内外面は回転ナデ調整である。36 は瓦質土器で、甕体部の破片と考えられる。37･38 は鉄釘である。39 は砥石で、砥面は 3 面ある。凝灰岩質流紋岩製である。

3）第 1-1 面（図 69・70、図版 25）

3 平坦部、93 土手、86 道、94 溝（図 65）

3 平坦部は 11 号墳の北側に位置する。平面形は長方形で、南北 15.30 ～ 17.20 m、東西 7.30 ～ 8.20

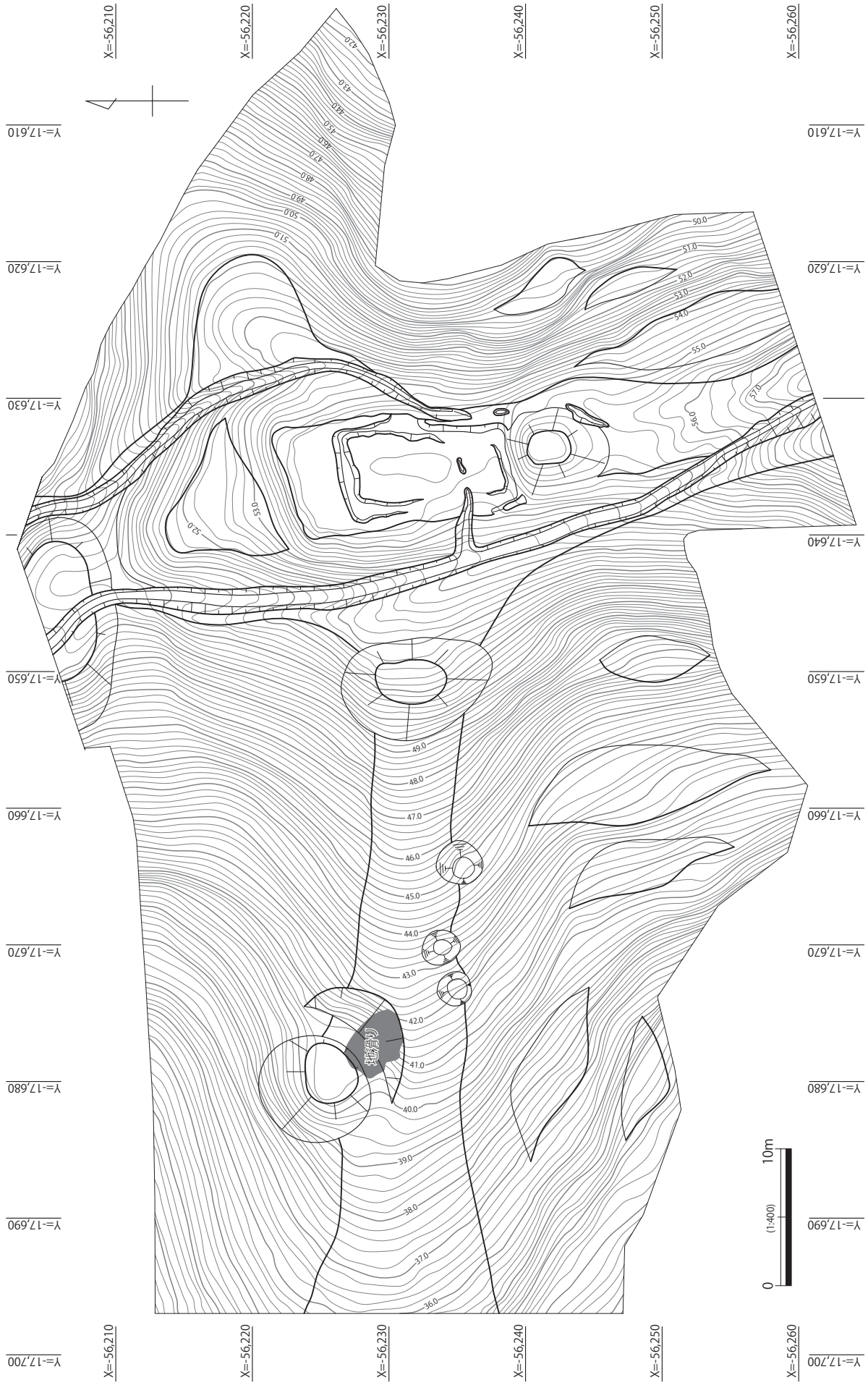

X=-56,210
X=-56,220
X=-56,230
X=-56,240
X=-56,250
X=-56,260
Y=-17,610
Y=-17,620
Y=-17,630
Y=-17,640
Y=-17,650
Y=-17,660
Y=-17,670
Y=-17,680
Y=-17,690
Y=-17,700
42.0
43.0
44.0
45.0
46.0
47.0
48.0
49.0
50.0
51.0
52.0
53.0
54.0
55.0
56.0
57.0
地滑り
0
(1:400)
10m

図69　第1-1面　平面

図 70　第 1-1 面　平面（南北尾根）

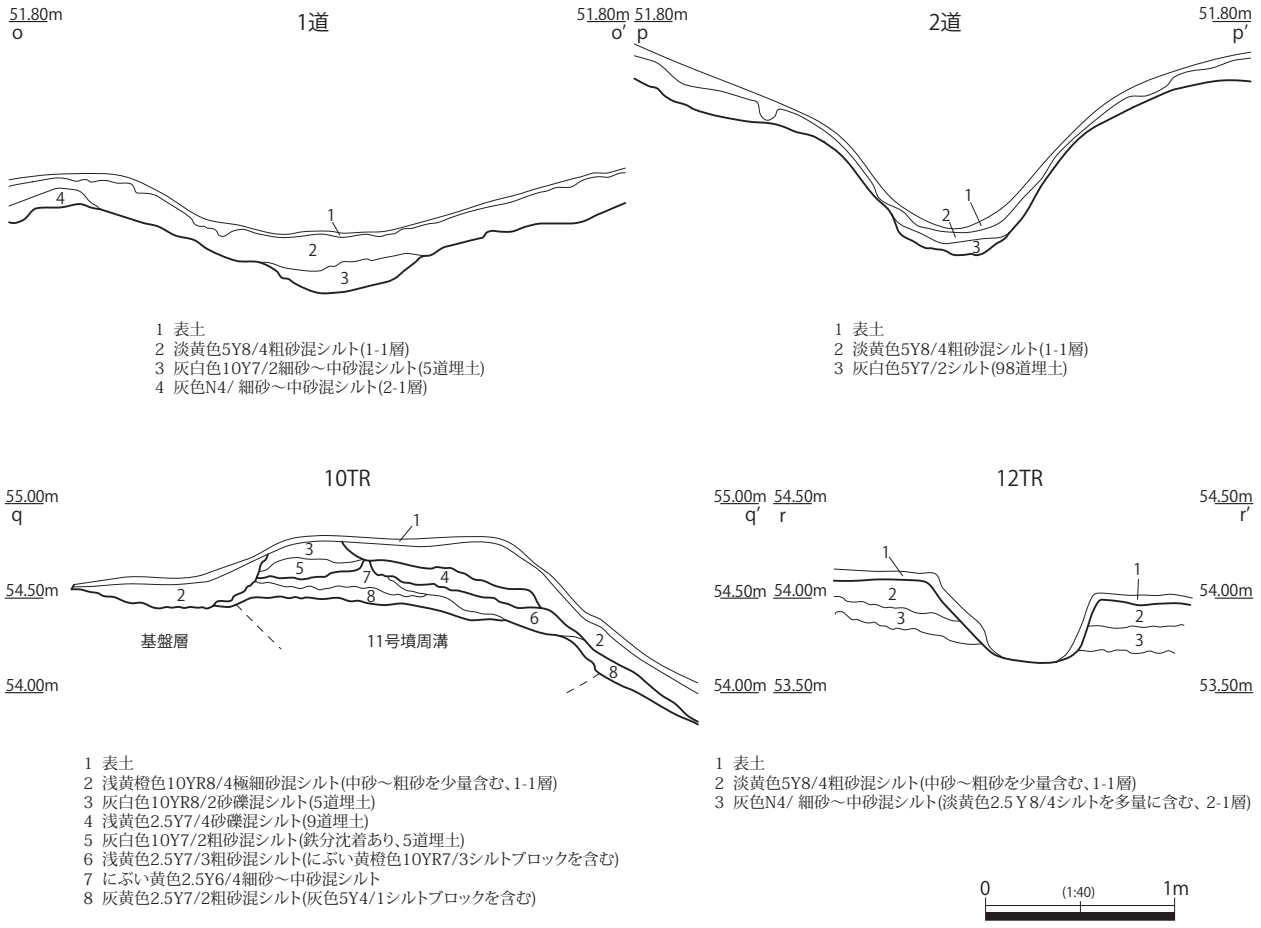


図 71　第 1-1 面　1・2 道、10・12 トレンチ　断面

mを測る。93 土手の内側の標高は北側で 54.8 m、南側で 54.5 mを測り、全体に平坦である。平坦部では北、東、西側を囲むようにめぐる 93 土手と、この土手の内側に 94 溝を検出した。

3 平坦部外周と 94 溝に挟まれた部分を 93 土手とした。土手の高さは平坦部中央と比高差がほとんどなく、1 ～ 3 cm 高まっている部分もあったが、全体としては平坦部中央から漸移的に低くなっている。東側は中央で一旦途切れて、11 号墳の北東側に接続している。土手を構成する 1-1 層ではブロック土が認められず、積極的に盛土を行った形跡は認められなかった。北側は幅 3.60 m、東側は幅 0.70 m、西側は幅 0.70 ～ 0.95 mである。

94 溝は 93 土手の内側をめぐる溝である。断面形は U 字形を呈する部分もあるが、全体に不整形である。幅 0.80 ～ 1.53 m、深さ 0.01 ～ 0.07 mを測る。1-1 層を除去した面において、この溝と同じ位置で 1-1 層の下面遺構である 8 溝を確認しており、8 溝廃絶後の状況を示す可能性がある。

86 道は 2 道から 3 平坦部へ上る道である。幅 1.40 m、深さ 0.45 mを測る。表土を除去した段階で確認しており、1-1 層を掘り込んでいることから、93 土手、94 溝より新しくなる可能性がある。

4 平坦部（図 65）

3 平坦部の北側に位置し、34 号墳の直上にあたる。平面形は不整形である。南北 7.7 m、東西 10.6 mを測る。標高は北側 51.6 m、南側 53.0 mで北側に向かって緩やかに傾斜する。3 平坦部との比高差は 1.1 ～ 1.3 mである。

第 1-1 面の 4 平坦部の直下にあたり、34 号墳周溝が平坦化して形成されたもので、人為的に造成した平坦部ではない可能性がある。

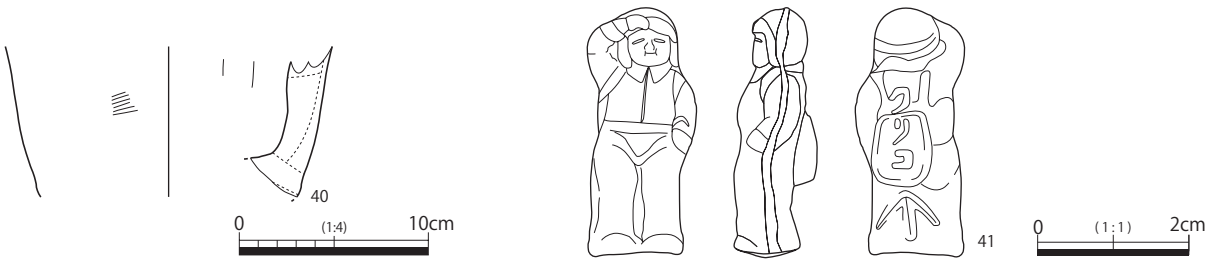


図 72　表土　出土遺物

1道（図 71）

3 平坦部の東側に位置し、尾根を南北に縦断する道である。幅 0.40 ～ 1.90 m、東側肩部からの深さ 0.10 ～ 0.40 mを測る。第 1-2 面の 98 道に対応する。11 号墳より以南では検出が困難であり、第 1-1 面の段階の主要なルートは 2 道であった可能性が高いと考えられる。

2道（図 71）

3 平坦部の西側に位置し、尾根を南北に縦断する道である。幅 1.00 ～ 2.00 m、深さ 0.10 ～ 0.51 mを測る。第 1-2 面の 5 道に対応し、旧中国自然歩道の前身となる遺構である。なお、調査区南側では、旧中国自然歩道が旧松原展望台に向けて南北尾根上に設置されていたのに対し、2 道は急峻な尾根を避け東側に巻道として連続しており、若干ルートが異なる。

出土遺物（図 72、図版 26）

40 は 3 平坦部表土から出土した破片遺物の接合資料である。にぶい黄橙色を呈し、外面は平滑に仕上げる。内面は縦方向にナデ調整を施す。当初、瓦当面が欠落した丸瓦と判断したが、瓦当面と丸瓦の接合部にしては内面の調整が粗雑であることや、粘土接合痕を瓦のものではないと判断したことから、土器の底部に比定した。

41 は陶製玩具である。 4 平坦部表土から出土した。背面に残された文字から菓子に付属して販売された玩具と考えられる。長さ 3.3cm、幅 1.4cm、厚み 1.1cm である。上下つなぎの飛行服に航空帽が組み合わされ、リュック（背嚢）を背負っている。背面の飛行服とリュックには片仮名で「クリコ」の文字が判読でき、グリコのおまけと考えられる。「グ」の濁点は表現していない。兵士や航空兵などをモチーフにしたおまけが生産された、1935 年（昭和 10 年）～ 1940（昭和 15 年）のものと推測される。

註

1）同様の被熱粘土塊は笠見第 3 遺跡の弥生時代中期の竪穴住居で出土している。焼失住居で、被熱粘土塊とともに竪穴住居の構造に関わる部材が炭化した状態で多量に出土している。笠見第 3 遺跡から出土した被熱粘土塊は被熱により硬化した平坦面をもち、草本類の圧痕があるものも多く、炭化材とともに竪穴住居の上屋を構成する遺物とされる。

高尾浩司ほか編 2007『笠見第 3 遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター

表１　松原古墳群　遺物観察表（土器）

図番号	遺構	器種	時期	法量	特徴	色調（内外面）・胎土	備考
5	33 号墳埋葬施設 1	土師器鼓形器台	谷口Ⅶ - 2	復元口径：19.6cm 器高：9.0cm 復元底径：18.6cm	外：磨滅、ハケメ一部に残る 内：受部磨滅、脚台部ケズリ？ 口縁端部ヨコナデ	内・外面：橙色 長石・石英を微量に含む	脚台部を打ち欠いて、土器枕として使用。※
8	33 号墳埋葬施設 2	土師器鼓形器台	谷口Ⅶ - 2	復元口径：16.8cm 残存高：8.9cm	外：受部ヨコナデ、脚台部磨滅 内：受部磨滅、脚台部ケズリ	内・外面：橙色 長石・石英を微量に含む	受部を打ち欠いて、土器枕として使用。※
10	34 号墳埋葬施設	土師器鼓形器台	谷口Ⅶ - 2 ～ （天神川Ⅳ）	復元口径：17.8cm 残存高：7.6cm	外：磨滅 内：受部磨滅、脚台部ケズリ？	内・外面：橙色 長石・石英を微量に含む	受部を打ち欠いて、土器枕として使用。※
11	35 号墳南側周溝 2-2 層	土師器甕	谷口Ⅶ - 1 ～ Ⅶ - 2	復元口径：16.7cm 残存高：10.1cm	内・内面：磨滅	内・外面：橙色 長石・石英を微量に含む	図上復元
12	11 号墳埋葬施設	土師器高杯	岩吉Ⅷ	復元口径：17.6cm 残存高：6.5cm	外：磨滅・ハケメー部に残る、赤色塗彩 内：磨滅、赤色塗彩	内・外面：橙色 長石・石英を微量に含む	
13	11 号墳埋葬施設	土師器高杯	岩吉Ⅷ	残存高：4.9cm	外：磨滅・赤色塗彩 内：磨滅、赤色塗彩	内・外面：淡橙色 長石・石英を微量に含む	図上復元
19	26 号墳墳丘表土・ 周溝内 1-1 層	須恵器杯蓋	TK10（新） ～ TK43	復元口径：12.4cm 残存高：2.6cm	外：回転ヘラケズリ・回転ナデ 内：回転ナデ	内・外面：灰色 長石・石英を微量に含む	図上復元
20	26 号墳墳丘表土	須恵器杯身	TK10（新）	残存高：2.9cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	内・外面：灰色 長石・石英を微量に含む	
21	26 号墳墳丘表土	土師器壷		残存高：6.4cm	内・外面：磨滅	内・外面：橙色 長石・石英を少量含む	
23	1 号横穴墓玄室内	須恵器杯蓋	飛鳥Ⅲ	口径：11.0cm 器高：3.2cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	内面：灰色 外面：灰色～灰白色 長石・石英を微量に含む	焼け歪みあり。
24	1 号横穴墓玄室内	須恵器杯身	飛鳥Ⅲ	口径：10.6cm 器高：3.6cm	外：回転ナデ、底部ヘラ切り後ヘラケズリ・ナデ 内：回転ナデ・ナデ	内・外面：灰色 長石・石英を微量に含む	
25	1 号横穴墓玄室内	須恵器長頸壷	飛鳥Ⅲ	口径：19.1cm 器高：6.7cm 底径：6.8cm	外：回転ナデ、肩部に列点文・沈線 内：回転ナデ	内・外面：灰白色 長石・石英を微量に含む	外面に自然釉あり。
26	1 号横穴墓玄室内	須恵器高杯蓋	飛鳥Ⅲ	口径：20.1cm 残存高：3.2cm	外：回転ナデ・カキメ・沈線間に列点文 内：回転ナデ・ナデ	内・外面：灰色～黒色 長石・石英を微量に含む	焼け歪みあり。
27	1 号横穴墓玄室内	須恵器高杯	飛鳥Ⅲ	口径：20.0cm 器高：5.8cm 底径：8.2cm	外：回転ナデ・カキメ、底部回転ナデ・ナデ 内：回転ナデ・ナデ	内・外面：灰色 長石・石英を微量に含む	焼け歪みあり。
28	1 号横穴墓玄室内	須恵器平瓶	飛鳥Ⅲ	口径：9.7cm 器高：17.5cm	外：回転ナデ・カキメ・円形浮文 内：回転ナデ	内・外面：暗青灰色 長石・石英を微量に含む	
29	1 号横穴墓玄室内	須恵器平瓶	飛鳥Ⅳ	口径：7.8cm 器高：15.2cm	外：回転ナデ・カキメ・回転ヘラケズリ、底部ヘラ切り後ナデ 内：回転ナデ	内・外面：灰色～黒褐色 長石・石英を微量に含む	
31	100 平坦部周辺 表土・1-1・2-1 層	須恵器平瓶	飛鳥Ⅳ	残存高：17.0cm	外：回転ナデ・底部ヘラ切り後ナデ 内：回転ナデ	内・外面：灰白色 長石・石英を微量に含む	
32	100 平坦部周辺 2-1 層	高杯脚部	飛鳥か	残存高：3.4cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	内・外面：灰色 長石・石英を微量に含む	
34	100 平坦部周辺 1-1 層	須恵器短頸壷	飛鳥か	残存高：1.1cm	外：回転ナデ・沈線 内：回転ナデ	内面：暗褐色 外面：灰白色 長石を微量に含む	内面に茶褐色の付着物あり
35	100 平坦部周辺 1-1 層	須恵器鉢	飛鳥～奈良	残存高：4.3cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	内・外面：灰色 長石・石英を微量に含む	
36	100 平坦部周辺 1-1 層	瓦質土器	中世	残存高：3.4cm	内・外面：磨滅	内・外面：淡灰色 長石・石英を微量に含む	
40	3 平坦部表土	土器 （土師器か）	近世～	残存高：8.0cm 復元底径：13.6cm	外：ハケのちナデ 内：ナデ	内・外面：にぶい橙色 長石・石英を微量に含む	

※鼓形器台の打ち欠きは遺存状況が悪く、破断面が不明確なため、実測図では表現していない。

・時期比定は以下に掲げた文献に基づく。

大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし－陶邑の須恵器－』

古代の土器研究会編 1992『古代の土器１　都城の土器集成』

田辺昭三 1996『陶邑古窯群Ⅰ』

谷口恭子、前田均編 1991『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取市文化財報告書 30 鳥取市教育委員会、鳥取市遺跡調査団

谷口恭子 2000「因幡における弥生時代後期から庄内式併行期の土器について」『庄内式土器研究ＸＸⅡ』

牧本哲雄 1999「第９章第１節古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 61 (財)鳥取県教育文化財団

表２　松原古墳群　遺物観察表（鉄製品）

図番号	遺構	種別	法量	特徴	備考
6	33 号墳埋葬施設 1	鉄鉇	刃部現長：3.30cm　現幅：0.90cm　現厚：0.30cm 茎部現長：9.70cm　現幅：0.80cm　現厚：0.30cm 全長：13.0cm　重さ：18.6g	刃部は鏑があり、やや反る。茎部断面は長方形。	
14	11 号墳埋葬施設	鉄鏃	鏃身部現長 4.60cm　現幅：2.50cm　現厚：0.21cm 重さ 8.0g	下端は欠損。	鉄剣の刃先となる可能性あり。
15	11 号墳埋葬施設	鉄鏃	鏃身部現長：7.40cm　現幅：3.68cm　現厚：0.16cm 頸部現長：4.69cm　現幅：0.69cm　現厚：0.31cm 茎部現長：2.78cm　現幅：0.37cm　現厚：0.31cm 重さ：27.8g	柳葉形。腸抉あり。頸部断面形は長方形で角関。茎部断面形は長方形で、木質痕あり。	
16	11 号墳埋葬施設	鉄剣	刃部現長：38.20cm　現幅：2.80cm　現厚：0.52cm 茎部現長：5.97cm　現幅：1.92cm　現厚：0.31cm 重さ：235.0g	刃部の断面形は菱形。鎬は不明。角関。茎部の目釘孔は観察されなかった。茎部の断面形は長方形。木質が付着。茎尻部扁平に歪曲。	
17	26 号墳埋葬施設	鉄鏃	鏃身部：現長：6.28cm　現幅：3.50cm　現厚：0.16cm 頸部：現長：5.11cm　現幅：0.60cm　現厚：0.30cm 茎部：現幅：0.30cm　現厚：0.15cm（長さ不明） 重さ：14.7g	柳葉形。腸抉あり。平造。中央部に長軸 0.8cm、短軸 0.6cm の孔あり。ただし、銹化によって空いた可能性がある。頸部断面形は長方形で、台形関、茎部断面形は長方形で、木質・巻締痕あり。	
18	26 号墳埋葬施設	鉄鏃	鏃身部現長：4.93cm　現幅：1.95cm　現厚：0.18cm 頸部現長：4.40cm　現幅：0.43cm　現厚：0.31cm 茎部現長：3.80cm　現幅：0.40cm　現厚：0.28cm 重さ：7.2g	柳葉形。腸抉あり。平造。頸部断面形は長方形で、台形関。茎部断面形は長方形。	
37	17 平坦部 1-1 層	鉄釘	現長：6.92cm　現幅：0.75cm 現厚：0.78cm　重さ：24.9g	銹化顕著。	
38	11 号墳南側周溝内 1-2 層	鉄釘	現長：4.05cm　現幅 0.40cm 残存厚：0.52cm　重さ：3.4g	銹化顕著。	

表３　松原古墳群　遺物観察表（石製品ほか）

図番号	遺構	種別	法量	特徴	色調（内外面）・胎土	備考
1	65 土坑	焼土塊	残存長：13.4cm　残存幅：11.9cm 残存厚：6.0cm　重さ：540g	草木類の圧痕（断面形円形）が表面２箇所、右端部１箇所、左端部１箇所、裏面１箇所。表面と左端部の圧痕には同一方向に筋状の痕跡あり。	外面：橙色 長石・石英を微量に含む	
2	64 ピット、65 土坑	焼土塊	残存長：16.3cm　残存幅：10.6cm 残存厚：4.8cm　重さ：760g	表面は全体に磨滅。上下・右端部は欠損・左端部は平坦な面を持つ。裏面は草木類の圧痕(断面形円形)あり。	外面：橙色 長石・石英微量に含む	
3	65 土坑	焼土塊	残存長：15.4cm　残存幅：5.5cm 残存厚：7.0cm　重さ：500g	断面形を半円形に整形。全体磨滅。	外面：橙色 長石・石英微量に含む	
4	65 土坑	焼土塊	残存長：11.1cm　残存幅：8.7cm 残存厚：3.6cm　重さ：350g	表面を平滑に仕上げる。両・下端部は欠損。裏面は剥離痕があり、筋状の痕跡あり。	外面：橙色 長石・石英微量に含む	
7	33 号墳埋葬施設 1	管玉	長さ：2.6cm　径：0.8cm 孔径：0.3 ～ 0.4cm　重さ：2.7g	碧玉製。両面側より穿孔。		
9	33 号墳埋葬施設 2	ガラス小玉	長さ：0.3cm　径：0.3cm 孔径：0.1cm　重さ：0.04g	ガラス製。気泡あり。		
22	26 号墳東側表土	鉄滓	現長：6.3cm　現幅：6.7cm 厚み：3.0cm　重さ：130g	全体に砂礫が付着。		炉壁の可能性あり。
30	99 墳丘 2-1 層	鉄滓	現長：8.5cm　現幅：8.4cm 厚み：4.9cm　重さ：550g	底面には炉壁が付着。木炭痕あり。滓質は緻密。磁着あり。		
33	1 号横穴墓前庭部 2-1 層	石錘	現長：9.2cm　現幅：8.2cm 現厚：2.1cm　重さ：200g	扁平な亜円礫の長軸の両端を打ち欠く。		角閃石石英安山岩
39	11 号墳南側周溝内 1-2 層	砥石	現長：3.2cm　現幅：4.0cm 現厚：1.9cm　重さ：27.8g	砥面３面。		凝灰岩質流紋岩
41	4 平坦部表土	陶製玩具	現長：3.3cm　現幅：1.4cm 現厚：1.1cm　重さ：5.3g	表・裏面型合わせ。底部に表・裏面型合わせ時の穴あり。側面の合せ目のバリは焼成前にケズリ取る。昭和初期のグリコのおまけ。		

表４　松原古墳群　古墳・横穴墓一覧（平成 21 年度調査）

古墳名	時期	墳形	規模	埋葬施設			出土遺物		備考
	古墳時代		長辺・長径 短辺・短径 比高差	棺規模 長軸×短軸×深さ	墓壙規模 長軸×短軸×深さ	主軸	棺内・墓壙内遺物	墳丘・周溝出土遺物	
11 号墳	中期	方墳	南北：11.00 東西：(10.36) 北：1.71　南：1.36		(3.25)×1.12～1.20 ×0.10（検出面から）	E-5° -N	鉄剣１・鉄鏃２・土師器（高杯２）	土師器（高杯）	
26 号墳	後期	円墳	7.50 ～ 7.70 北東：1.50　南東：0.83 南西：1.38	1.37×0.43×0.49 × 0.44	2.10×0.80 ～ 0.85× 0.47	E-22° -N	鉄鏃２・土師器（器種不明１）	土師器(複合口縁壷) 須恵器 （杯身・杯蓋・甕） 鉄滓	
33 号墳	前期	方墳	14.38 ～ 16.00 (13.11) 南：0.72	3.16×0.46～0.64 × 0.22	一段：4.57×2.61× 0.11 二段：4.11×1.20 ～ 1.40×0.42	E-5° -S	鉄鏃１・碧玉製管玉１・土師器（鼓形器台１）		
	前期	方墳			1.35×0.61×0.09	E-16° -N	ガラス製小玉１・土師器（鼓形器台１）		
34 号墳	前期	方墳	8.31 ～ 8.56 (8.83) 南：0.30　東：0.45	4.17×0.57～0.76 × 0.55	(4.86)×1.49～1.72 ×0.61	E-26° -N	土師器（鼓形器台１）		
35 号墳	前期	方墳	4.76 ～ 5.16 15.89 東：2.10　西：3.64 南：1.28		不明		調査地内では確認されず	土師器（甕）	
38 号墳	中期	円墳	西北：3.63 東西：(4.38) (南：0.28)		不明				

横穴墓名	時期	形状・規模		出土遺物		備考
		後背墳丘・前庭部・羨門・羨道	玄室	玄室内	後背墳丘・前庭部・平坦部	
1 号 横穴墓	終末期	後背墳丘（99 墳丘） 南北 11.22 ×東西（7.18 ～ 7.43） 前庭部 幅：1.80 ～ 2.62 中央部深さ 1.70 羨門の溝 検出長 0.70 幅 0.17 ～ 0.21、深さ 0.14 羨門　釣鐘形 高さ 0.98（崩落部を除く） 底面幅 0.73 羨道中央部 底面幅 0.72 高さ 0.95 玄門　台形？ 高さ 1.00（崩落部を除く） 幅 0.95	玄室　ドーム形 長軸：2.30 ～ 2.42 短軸：1.73 ～ 2.04 復元高：(1.18) 周壁溝 幅：0.07 ～ 0.15 深さ：0.03 ～ 0.05	人骨 須恵器 （杯蓋１・杯身１・高杯蓋１・高杯１・平瓶２・長頸壷１）	後背墳丘（99 墳丘） 鉄滓 前庭部・平坦部 土師器片(器種不明) 須恵器 （高杯脚部・平瓶） 石錘	人骨は壮年期の女性

・単位はメートルを使用する。

・比高差は墳頂部と墳丘裾部で計測。

・( ) は残存値。

参考文献

加川崇ほか編 2009『平成 20（2008）年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会

小口英一郎ほか編 2010『松原古墳群Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター

田中千恵子ほか編 1990『マケン堀古墳群北福王寺遺跡』西伯町教育委員会

中原斉編 1987『大塚山横穴墓群』鳥取県教育文化財団

八重洲出版 2003『グリコのおまけ型録おまけの 80 年史』

第Ⅴ章　松原小奥遺跡の発掘調査

第１節　調査の概要

１）遺跡の立地と概要

松原小奥遺跡は、湖山池の南側にある丘陵から西に派生する細い尾根上にある。この尾根は、平成20年度に鳥取県埋蔵文化財センターが調査した尾根の谷を挟んだ北側にあたり、平野部にある松原集落とは４～14mほどの比高差がある。調査前は松原集落の共同墓地であった。

調査の結果、４基の古墳（15・16・36・37号墳）と中世以降の墓205基、道状遺構４条が確認できた。また調査地南東部の尾根斜面で平坦面が２箇所造られていた。

古墳は、墓地造成によって埋葬施設は残っておらず、周溝が断片的にしか確認できなかったが、いずれも径10ｍ前後の円墳と思われる。周辺から出土している土器から古墳時代後期のものと思われる。周溝内からは埴輪片が出土しているが、平成20年度調査で見つかった同時期の古墳からは埴輪は出土しておらず、古墳群内での差違が注目される。

墓は中世後期以降継続的に築造されていたことが分かり、陶磁器や銅銭、金属製品などの副葬品が出土した。なかには人骨が遺存していたものもあり、埋葬体位や方向についてのデータを得ることができた。また、中世の墓の中に墳丘を伴うものを１基確認している。近世以降の墓地造成などで全体形の把握ができないものの、周溝が巡っていたことが確認できた。

平坦面は、遺物が出土していないため詳細は不明であるものの、方形の土坑を検出しており、墓に伴うものと思われる。

道状遺構は、調査地南東部から尾根上に上がるもの２条と、尾根筋に沿うように走る２条を確認し

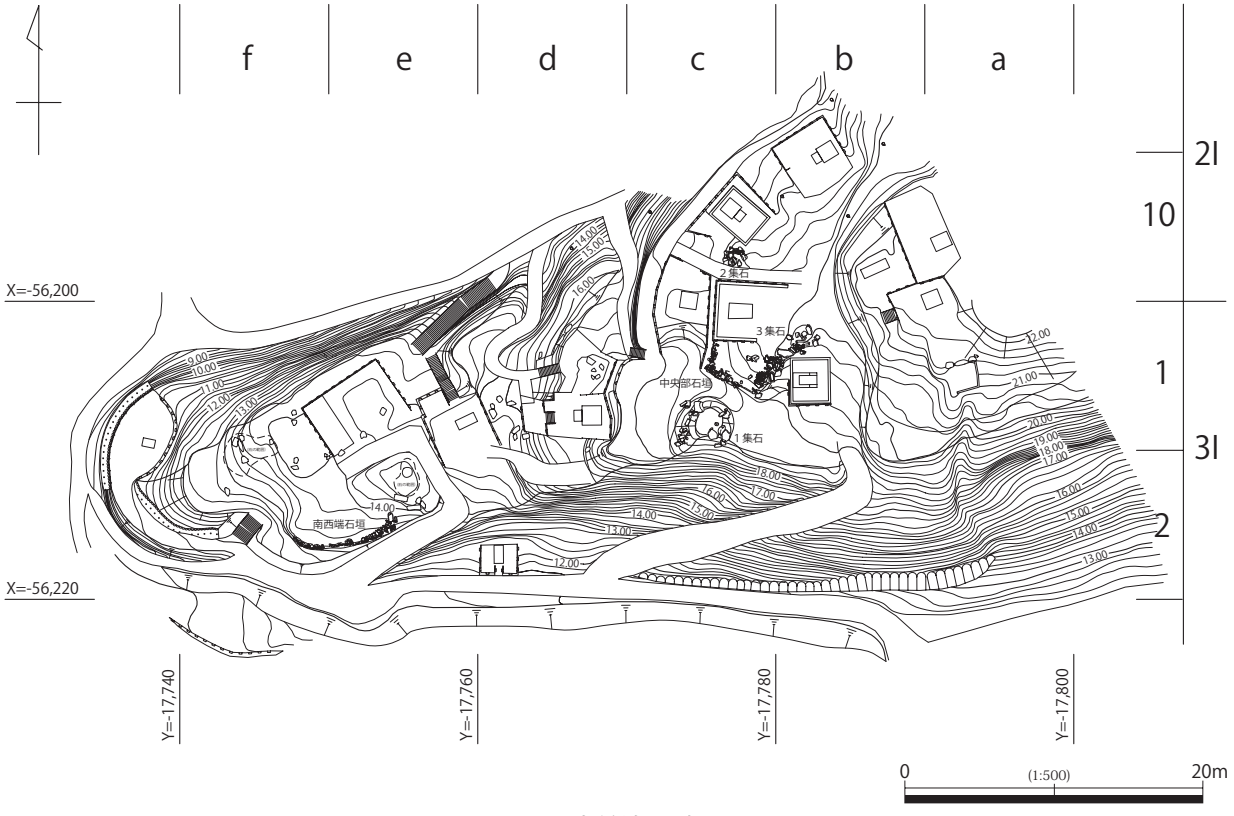


図73　調査前地形測量平面

た。尾根筋の遺構は近世以降の墓壙に切られているため、墓地が構成された初期段階に造られたものの可能性がある。

２）調査地内の基本層序（図 74）

調査地内では、墓の改葬作業による撹乱を受けていた。そのため、調査地のある尾根筋に沿うように堆積状態を確認するための東西主軸トレンチ（A-A'）を設定し、墓地の平坦部から斜面に至る部分にはこれに直交するトレンチを掘削して状況の確認を行った。トレンチは現代墓が存在していない箇所に設定し、そこで得られた断片的なデータから調査地全体の様相を推測することとなった。

調査地内には大きく５つの段が存在している。結果的に最下段を除き、これらの段はそれぞれが古墳に対応していることが分かり、墓地の段が造成以前の古墳の形状を反映していることが確認できた。

層序は、基本的には表土の下に基盤ブロックを少量含む褐色シルト層、基盤ブロックを含んだ明赤褐色シルト層が堆積している。この２つの堆積は近世以降の墓地造成によるものと思われ、古墳の墳丘を切り崩して整地したものと考えられる。その下が赤色の風化岩を基本とした基盤層である。なお、15 号墳と 37 号墳の墳丘部分では、基盤層の上ににぶい黄橙色シルト層が薄く堆積していた。当初は古墳の盛土または古墳築造前の土壌化層の可能性も想定したが、撹拌などの乱れが見られないことから自然堆積層と判断した。

近世以降の墓は、本来は明赤褐色シルト層の上面から掘りこまれていたのだが、遺構埋土とほとんど差がなく、検出が困難であった。そのため、この層を掘り下げて基盤層上で近世以降の墓と古墳を検出することとした。

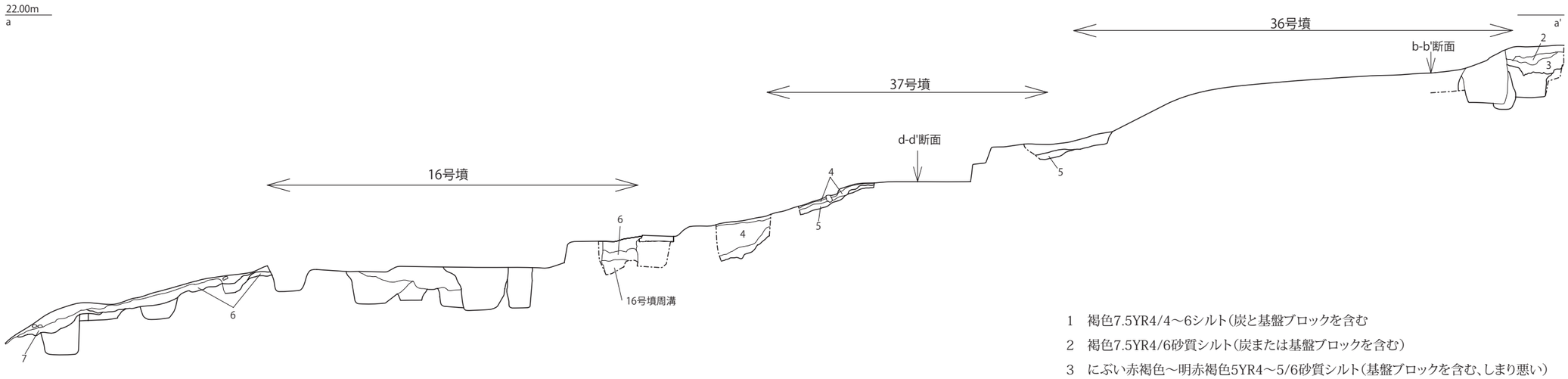
T23-7h-2I-10a 地区（以下、地区名は第 4 区画以下で表記する）から 10b 区にかけて広がる段は 15 号墳に対応する。段の上の部分はほとんどが調査地外または現代墓による撹乱を受けている。南側斜面では明赤褐色シルトが厚く堆積していることが確認できる。一方、西側斜面では褐色シルトが薄く堆積していた。

1b から 1c 区を中心とした段（以下「東側段」）は 36 号墳に対応する。北側は現代の改葬に伴う大規模な撹乱を受けている。東西中軸ラインより南側で基盤層が傾斜しており、ここに造成と思われる堆積が見られる（B-B'）。南側斜面（C-C'）には、この上に炭を含む褐色シルトが約 1.2m 堆積する。これは平坦面を南側に拡張するために行ったものと思われ、遺構の分布状態などから近代以降に行ったものと推定される。1c 区南側では、古墳時代から中世にかけて堆積したにぶい赤褐色シルト層と褐色シルト層を観察することができる（図 90）。

1d 区を中心とする中央部の段（以下「中央段」）は 37 号墳に対応するものと思われる。南、北、西斜面部には褐色シルト堆積が観察できる。この辺りは、調査地内では尾根頂部の幅が最も狭くなっている。そのため、墓地造成に当たって大規模に造成が必要であったのだと思われる。とくに西側では基盤層の傾斜が急で、造成層が厚く堆積する。

1e 区から 2f 区にかけて広がる西側の段（以下「西側段」）は 16 号墳に対応する。褐色シルトの堆積はほとんど見られず、全体に明赤褐色シルトの堆積が広がっている。この堆積は東側の段で見られるものと比べるとしまりが悪い。北側は、調査前の状況から、現在ある里道によって斜面が削られていると思われる。尾根先端部の緩斜面では、この下ににぶい赤褐色シルトが堆積している。これは上層のものとは土質が異なるもので、上層よりも古い時期に堆積したものと想定される。

第Ⅴ章　松原小奥遺跡の発掘調査



1　褐色7.5YR4/4～6シルト（炭と基盤ブロックを含む
2　褐色7.5YR4/6砂質シルト（炭または基盤ブロックを含む）
3　にぶい赤褐色～明赤褐色5YR4～5/6砂質シルト（基盤ブロックを含む、しまり悪い）
4　褐色7.5YR4/4シルト（基盤ブロックを含む）
5　赤褐色～にぶい赤褐色5YR4/4～6シルト（基盤ブロックを含む）
6　明赤褐色5YR5/6シルト（基盤ブロックを含む、しまり悪い）
7　赤褐色～にぶい赤褐色5YR4/4～6シルト

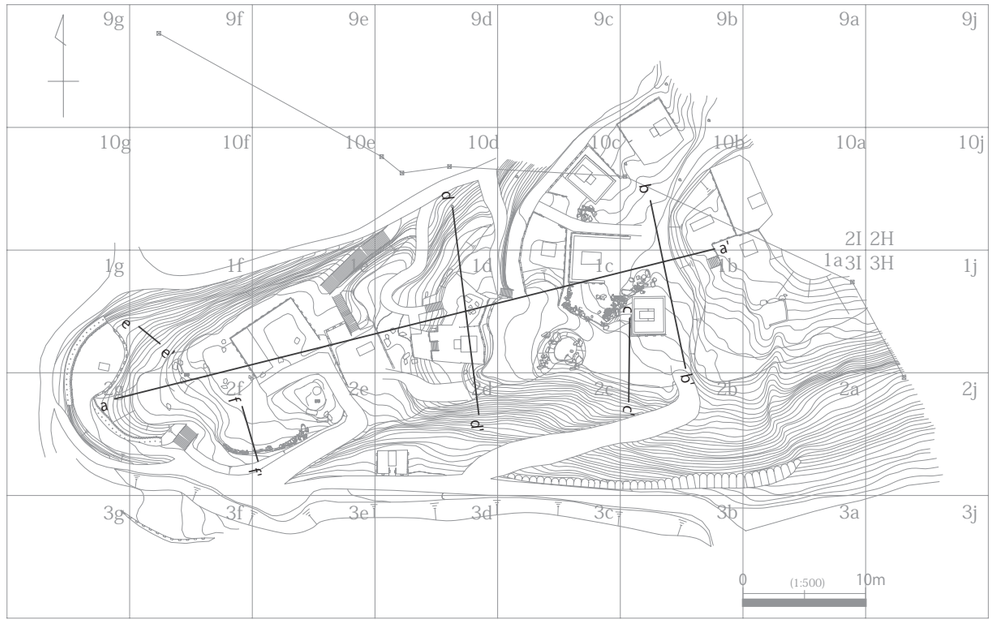


図 74　土層断面

第２節　古墳時代の調査

１）概要（図 75）

調査前から須恵器や円筒埴輪が表採されており、調査地東端に 15 号墳、尾根先端部に 16 号墳が認識されていた。平成 19 年度に鳥取市教育委員会が試掘調査を行った際、西側段の南西部法面を精査している。このとき、古墳周溝とみられる落ち込みがあることが確認されている。

また調査地内には直径が 50cm 前後の円礫が点在しており、特に尾根先端部あたりに多く確認できた。中には 1 m近いものもあり、平成 20 年度の松原古墳群の調査において横穴式石室が見つかっていたことから、調査地内にも石室を埋葬施設とした古墳がある可能性が考えられた。

調査を進めていくと、墓地内では近世以降の造成や墓壙掘削によってそれ以前の堆積や遺構が壊されていた。その中で、断片的に墳丘盛土や周溝を検出することができ、調査前から認識されていた２基のほかに、新たに２基の古墳（36・37 号墳）が存在したことが分かった。また５段のうち最下段を除く墓地の平坦面が、それぞれ古墳の形状を反映していることもあわせて判明した。

古墳は尾根頂部に造られており、尾根の高位側に周溝を掘削し、低位側は墳形を整えるために一部を削ることで墳丘を構築している。

古墳時代後期中葉の比較的短期間に築造されたとみられ、37 号墳を除く３基の周溝内から埴輪が出土している。平成 20 年度の調査でも同時期の古墳が確認されているが、埴輪は出土していない。そのため２つの古墳グループで築造集団が異なる可能性が考えられる。

埋葬施設は 15 号墳では調査地外になり、その他の３基については後世の墓地造成などによる土地改変で失われていた。調査前に確認できた石材の中に古墳時代に据えられたと特定できるものはない。石室で使われていたものが墓地造成の際に再利用されたことも考えられるが、可能性の域を出ない。

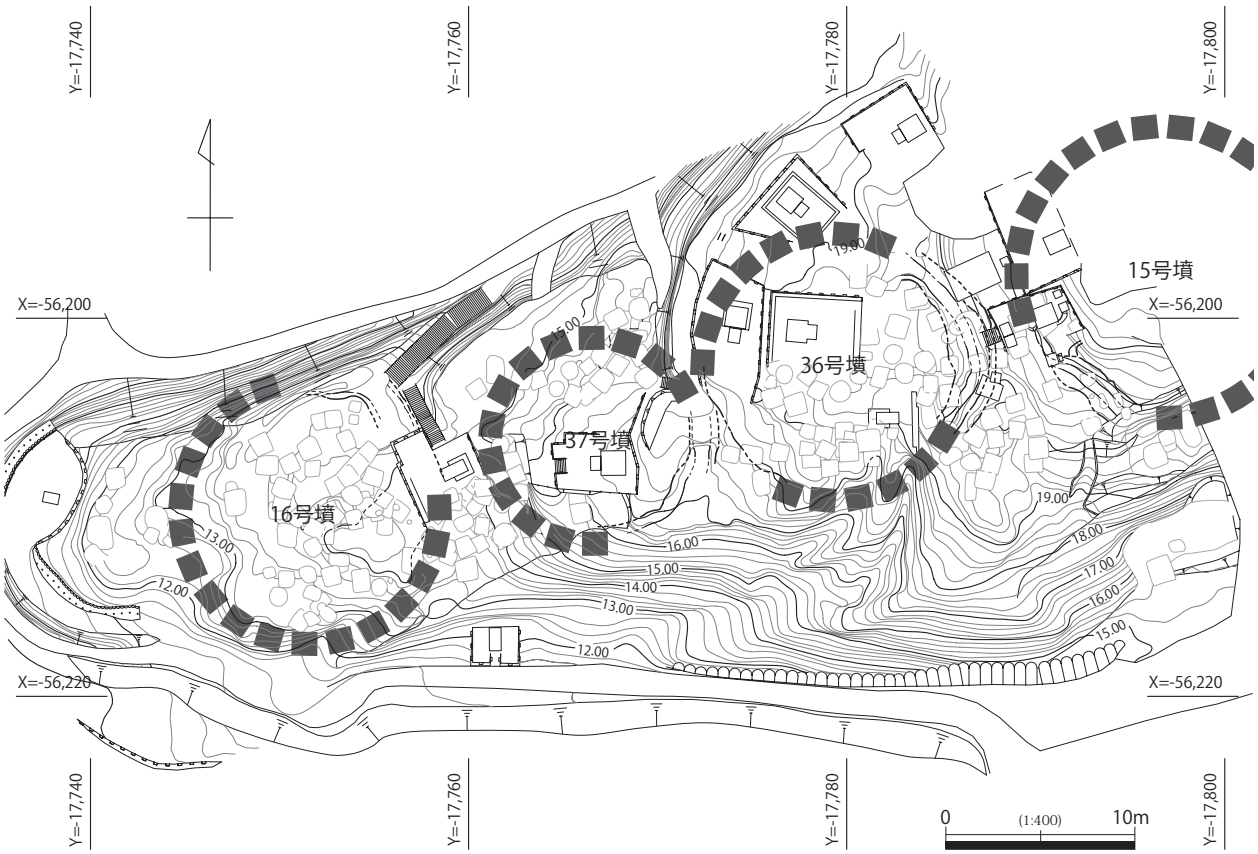


図 75　古墳配置

2）古墳の調査

a）15 号墳（図 76 ～ 78、巻頭図版 7・8-2、図版 28）

調査地の東端で見つかった古墳で、直径 15m 程度の円墳と推定される。埋葬施設があると思われる墳頂部は調査地外になり、南側は平坦面 1 によって、西側は現代の墓地造成によって削られている。

調査にあたっては、現況地形から想定される墳形に合わせて、尾根方向の a-a' とそれに直交する b-b' にトレンチを設定して、堆積状況を確認しながら行うこととした。ところが、竹根の影響があって堆積が墓地造成に伴うものか、あるいは古墳築造によるものかを判別することが困難であった。そのため、平面的に徐々に掘り下げを行うこととした。

トレンチ断面をさらに観察したところ、基盤層の直上に旧表土と思われる層が確認できた。そこでこの層の上面まで掘り下げて精査した結果、墳丘南西部で周溝を検出することができた。その後、各所の堆積状況を観察、検討した結果、旧表土上面に墳丘盛土が残っていたことが判明した。

墳丘と周溝

墳丘は 10a 区から 1a 区北側にかけて残存する。残存する部分は、全体に北東から南西へゆるやかに傾斜している。

堆積状況を観察すると、古墳築造時の表土（図 76-13・15・16 層）の上に堆積する 12・14 層は、上層の現代造成土に比べて含んでいる基盤ブロックが細かめになる。そのため、別の段階に行われた造成土と考えられ、この層を墳丘盛土と判断した。盛土は厚さ 0.1m 程度確認できるが、大半は削られたものとみられる。そのため、調査地東端でやや平坦になる部分は墳頂部とはならない。

周溝は墳丘の南西部で確認することができた。外側肩は削られているが、断面形は浅い逆台形と推定される。現状で確認できるのは長さ 3.65 m、幅 1.48m、墳丘側の肩からの深さは 0.37m である。墳丘側の肩は標高 21m の等高線に沿うように北西方向に延びている。36 号墳周溝と隣接する部分で墳形が乱れていることから、15 号墳が先行する可能性がある。

周溝埋土は 3 層に分けることができる。このうち 10 層と 11 層はほとんど土壌化しておらず、また周溝底面にも土壌化した堆積が見られない。このことから、これらの堆積は墳丘掘削後、比較的早い段階で短期間に堆積したものと考えられる。その後、最終的に土壌化の進んだ 9 層によって埋没する。

周溝内からは埴輪片が出土しており、中でも南側では南北 1.40 m、東西 1.05 mの範囲でまとまって出土している。なかには、6 のようなかなり大きな破片もあるが、総じてバラバラに割れた状態であった。埴輪群は 9 層から出土しており、その高さはほぼ同じである。また、周溝底面で埴輪を据えたような痕跡も確認できなかった。以上のことから、おそらく墳頂部で使われていたものが周溝が埋没する過程で割れた状態で混入したものと考えられる。

また、埴輪に混じって水晶の破片が点在して出土した。大きさにはばらつきがあり、大きいもので長さ 2.0 ～ 2.5cm、太さ 1.1cm 程度。いずれも特に加工をされていない。基盤層にも水晶は少量含むが、比較的狭い範囲で出土しているので、人為的に持ち込まれた可能性もある。

出土遺物

周溝内から須恵器と円筒埴輪が出土している。

1 は須恵器で、小片ではあるが杯蓋と判断した。外面の回転ヘラケズリの範囲がかなり狭い。

円筒埴輪は、胎土や焼成、調整の状態を勘案すると数個体が混在している。2 、3 は赤褐色を呈する個体で、それぞれ別の個体の破片である。2 は外面は縦方向、内面は横方向の細かいハケメ調整が

1　表土
2　橙色5YR7/6シルト
3　橙色5YR6/6シルト
4　灰黄色2.5Y6/2細砂混シルト(造成土)
5　灰赤色2.5YR6/2中砂～粗砂混シルト
6　灰褐色7.5YR5/2細砂混シルト(基盤ブロックを含む)
7　灰黄色2.5Y6/2細砂混シルト
8　にぶい橙色2.5YR6/4シルト
9　灰黄褐色10YR5/2極細砂混シルト(古土壌)
10　灰黄色2.5Y6/2中砂混シルト(15号墳周溝)
11　灰黄褐色10YR6/2極細砂混シルト(15号墳周溝)
12　灰オリーブ5Y6/2細砂混シルト(墳丘盛土)
13　暗灰黄色2.5Y5/2極細砂混シルト(旧表土)
14　にぶい橙色7.5YR7/4極細砂～細砂混シルト(墳丘盛土)
15　灰黄褐色10YR5/2細砂混シルト(旧表土)
16　褐灰色10YR6/1極細砂混シルト(旧表土)
17　にぶい褐色7.5YR5/3細砂混シルト(36号墳周溝)
18　灰黄褐色10YR5/2中砂混シルト(36号墳周溝、古土壌)
19　灰黄色2.5Y7/2極細砂混シルト(36号墳周溝)
20　灰赤黄色2.5YR5/2極細砂混シルト(36号墳周溝、古土壌)
21　灰オリーブ5Y6/2極細砂混シルト(36号墳周溝)
22　明褐灰色5YR7/2シルト(36号墳周溝)

図 76　15 号墳平、断面

図 77　15 号墳周溝内遺物出土状況

図 78　15 号墳出土遺物

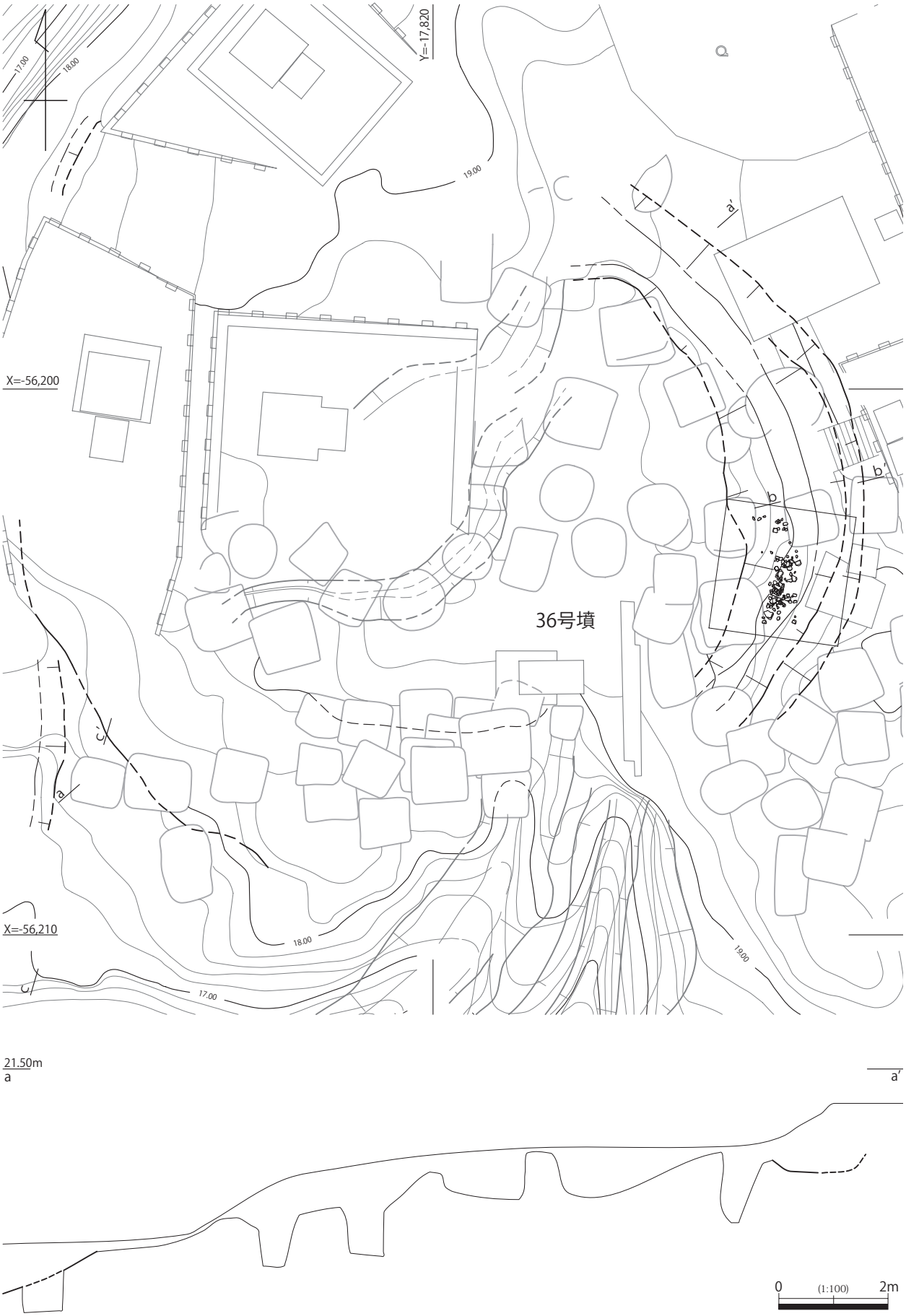

Y=-17,820
X=-56,200
X=-56,210
17.00
18.00
19.00
36号墳
a
a'
b
b'
c
c'
21.50m
0
(1:100)
2m

図 79　36 号墳平、断面

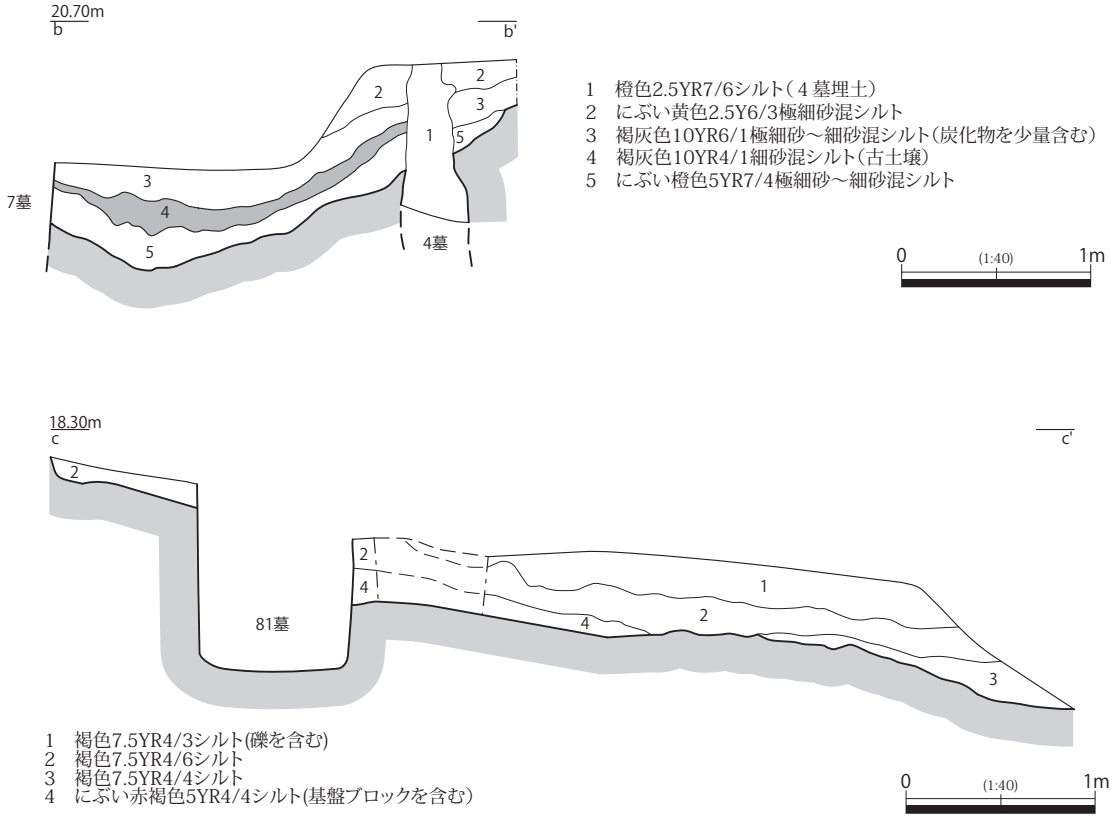


図 80　36 号墳断面

施されている。３は底部で、内面には工具を強く押し当てて行った粗いハケ調整が観察できる。底端面にヘラ状工具の痕跡が認められる。

６は浅黄橙色の中に赤褐色が斑状に入る色調で、口縁から２条の突帯までが確認できる。突帯の間には円形の透かし穴がある。突帯は３面ともヨコナデで仕上げている。外面の縦方向のハケメ調整は口縁端部にまで及ぶ。また突帯上面や突帯貼り付け時のナデ調整の上にかかるようにハケメが観察できる箇所があり、突帯貼り付け後の調整であることが分かる。外面に赤色塗彩を施す。

４・５は劣化や剥離によって調整痕が確認できないが、色調の特徴から６と同一個体になる可能性がある。内面が肥厚する点が共通する。

b）36 号墳（図 79 ～ 82、図版 29）

調査地の東寄り、1b 区から 1c 区の東側段で確認した古墳で、直径 14m 程度の円墳と推定される。

近世以降の調査を行っている際、東側段の東端辺りで墓壙の間に褐灰色を中心としたシルトの堆積が点在していた。この中には埴輪片が含まれていたことから古墳の周溝になると考えられた。

当初は東に隣接する 15 号墳の周溝に伴うものと考えていたが、精査を進めていくうちにこの堆積が北西 - 南東方向に円弧状に延びることを確認した。これによって、15 号墳とは別の古墳になる可能性が考えられた。

一方、東側段の南西部で褐灰色シルトの広がりがみられた。これを掘り下げると平坦面となっており、基盤層の高まりのラインは東側周溝から推定された墳丘ラインと一致した。

さらに、東側段の北西部にトレンチを設定して調査したところ、わずかではあるが段差があり、ゆるやかに傾斜している基盤層がそこからやや急になっていた。この位置も、東側周溝の外側ラインと一致するので、古墳の築造に伴うものと考えられた。

図 81　36 号墳周溝内遺物出土状況

以上の状況から、ここが調査前に認識されていなかった円墳の周溝と判断し、新規古墳として 36 号墳と命名した。

墳丘は、東側に尾根筋に直交する周溝を掘削し、南側では平坦面を造ることで墳形を整えたものと推測される。北側と西側については墓地造成によって削られていた。

図 79 で 36 号墳を縦断する形で調査前と調査後の断面形状を示した。墳丘部分は墓地造成によってほとんど跡形がない状態になっており、墳丘盛土となる可能性がある堆積は確認できなかった。

東側周溝

近世墓壙によって至る所が壊されていたが、墳丘の東から北東辺りに周溝が巡っていたことが確認できた。断面形は外側の肩が２段になったＶ字状を呈する。確認できたのは、長さ 10 ｍ程度、幅 2.35m 程度で、墳丘側肩からの深さは 0.42m ある。底面は北西部（図 79a-a’ ライン辺り）が最も高く、南に行くに従い低くなっている。

図 82　36 号墳出土遺物

周溝の埋土は２層に分けることができる。上層（４層）に比べて下層（５層）の堆積は土壌化などをあまりしていない。周溝底面に土壌化した層がないので、下層は周溝を掘削した後、比較的早い段階で墳丘盛土が流入した可能性が考えられる。土壌化した上層は、東側（図 80b-b'）では単層であるが、少し南側の 15 号墳周溝を確認したトレンチ（図 76a-a'）ではこれに対応する 18 層の下に別の土壌化した層（20 層）が確認できる。

周溝内からは、南北 1.96 m、東西 0.56 mの範囲で埴輪片が出土している。埴輪は上層から出土しており、全体に細片化している。多くは比較的同じような高さでまとまっているが、深くなっている周溝南東部では出土した高さにばらつきもみられる。おそらく墳頂部に使われていたものが、転落、破砕して、土とともに埋まったものと考えるのが自然であろう。

ここで考えておかねばならないのが、この埴輪が 36 号墳に伴うものかどうかである。15 号墳周溝は、墳丘西面での外側肩の有無を確認できなかった。仮に周溝を尾根高位側から半月状あるいは馬蹄形に掘削していた場合、西面は斜面状となっていた可能性がある。この場合、15 号墳から埴輪が土とともに墳頂から流出すると、36 号墳周溝に堆積することも考えられる。しかし、15 号墳と 36 号墳で似た埴輪片も見られるものの、復元作業において２つの埴輪群の間で確実な接合関係が確認できなかった。このことを重視して、ここでは 36 号墳に立てられたものと考えておきたい。

墳丘南西部

東側周溝と同様に、墓壙の間で褐色シルトの堆積が見られた。そこで比較的堆積が良好に確認できる部分で土層確認畦を設定して堆積状態の確認を行った（図 80c-c'）。その結果、この部分では周溝を造るのではなく、平坦面を造ることで墳裾を整えていると推測された。平坦面の幅は確認畦付近で 2.2m 程度で、その外側（３層が堆積している辺り）は緩やかな斜面となっているが、傾斜変換は明

1　褐灰色 10YR6/1 細砂混シルト
2　にぶい橙色 5YR6/4 極細砂混シルト (明赤灰色 10R7/1 シルトブロックを含む)
3　灰色 5Y4/1 極細砂混シルト (にぶい橙色 7.5YR7/4 シルトを含む、古土壌)
4　明褐灰色 5YR7/1 シルト
5　にぶい黄橙色 10YR7/4 極細砂混シルト

図 83　37 号墳　平、断面

瞭でない。この断面で墳丘寄りに堆積しているにぶい赤褐色シルト（４層）は東周溝の下層と同様、早い段階で墳丘盛土が流出したものと思われる。

東側周溝と堆積状況を対比すると、東側周溝で埴輪が出土した b-b'4 層は南西部の c-c'2 層と対応する。ところが、この層からは遺物が全く出土しなかった。その要因として、埋葬施設がある墳頂部が尾根高位にあたる東側に偏っていた可能性が考えられる。墳頂部で使われていたと思われる埴輪などは、墳丘の崩落によって東側周溝や墳丘斜面に土とともに転落したと思われる。その後に行われた墓地造成によってほとんどが失われ、東側周溝に転落したものだけが調査によって発見できた可能性

が想定される。ただし、それを実証できるだけの決め手に欠き、想像の域を出ない。

墳丘北西部

トレンチ調査で、基盤の段差を確認した。段差自体は 0.1m 程度であるが、段差を境に傾斜がやや急になる。この段差の肩は東側周溝の外側肩を延ばした先に当たってくる。おそらくこの段差が墳丘裾の平坦面の外縁部になるのであろう。

出土遺物（図 82）

周溝内から埴輪片と埴質の不明土製品が出土した。

7 は断面形や傾きから朝顔形埴輪の可能性がある。8・9 は胎土や焼成が類似する。10 は、突帯の上面を強くヨコナデすることで貼り付けを行っている。また突帯直下の体部も強いヨコナデが観察できる。11 は円筒埴輪の口縁で、ハケ調整後にヨコナデすることで端部外面を丸く仕上げる。12 は底端部にヘラ状工具の痕跡が見られる。13 は形象埴輪にしては厚みがあり、該当する器物が想定できないため不明土製品とした。ここではナデで仕上げられている平滑な面を表面として図化している。裏面は突帯状に盛り上がっており、端面にあたる部分はナデで仕上げているが、表面に比べるとやや粗い。

c）37 号墳（図 83・90、図版 30-1）

調査地中央、1d 区辺りで確認した古墳で、直径 10m 程度の円墳と推定される。

後述する中世後期の墳墓（80 墳丘）の堆積状況をトレンチで確認していた際、溝状遺構があることが判明した。断面の精査から、この溝は中世墳墓よりも古いものであることを確認した。また 36 号墳南西部の平坦面よりも 1 段深くなり、北東から南西方向に溝が延びることから 36 号墳とは別の古墳となることが判明した（図 90、28･29 層）。以上のことから新規古墳と判断し、37 号墳と命名した。

墳丘は尾根高位である東側に尾根筋に直交した周溝を掘削し、南側に平坦面を造り出すことで墳形を整えたものと推定する。

周溝の規模は検出段階で幅 1.55m、深さ 0.25m である。周溝が確認できるのは前述のトレンチ周辺だけである。南東裾の土層確認畦を見ると、36 号墳の南西部の状況と同じように平坦面が造られている。周溝はこの平坦面につながってくるものと思われる。

d）16 号墳（図 84・85、巻頭図版 8-1・3、図版 30-2・3、31-1）

調査地西側、1e 区から 2f 区にかけての西側段にあった古墳で、直径 13m 程度の円墳と推測される。

東西主軸トレンチの土層観察で、西側平坦面の東端近くで落ち込みを観察することができた。調査前からこの平坦面付近に 16 号墳が想定されていたので、この落ち込みが周溝になる可能性が考えられた。その後、西側段で遺構検出を行っていると、北東部で褐色シルトを埋土とする浅い溝が確認でき、埋土からは須恵器片と埴輪片が少量出土した。また、段の南東には谷状に低くなる箇所があり、この周辺で埴輪片が出土した。これらが周溝になると判断し、墳丘は尾根高位に直交する周溝を掘削して形状を整えて構築したものと推測される。

周溝の平面形はやや直線的である。ただ、墳形をとどめていると思われる西側段の形状をみると、南西部や北西部で傾斜が変わる 13.0m の等高線付近のラインが円弧状になる。これを重視して円墳と判断した。

周溝の幅は両肩が確認できる北東部で 1.80m、深さは比較的残存している中軸トレンチで 0.43m ある。

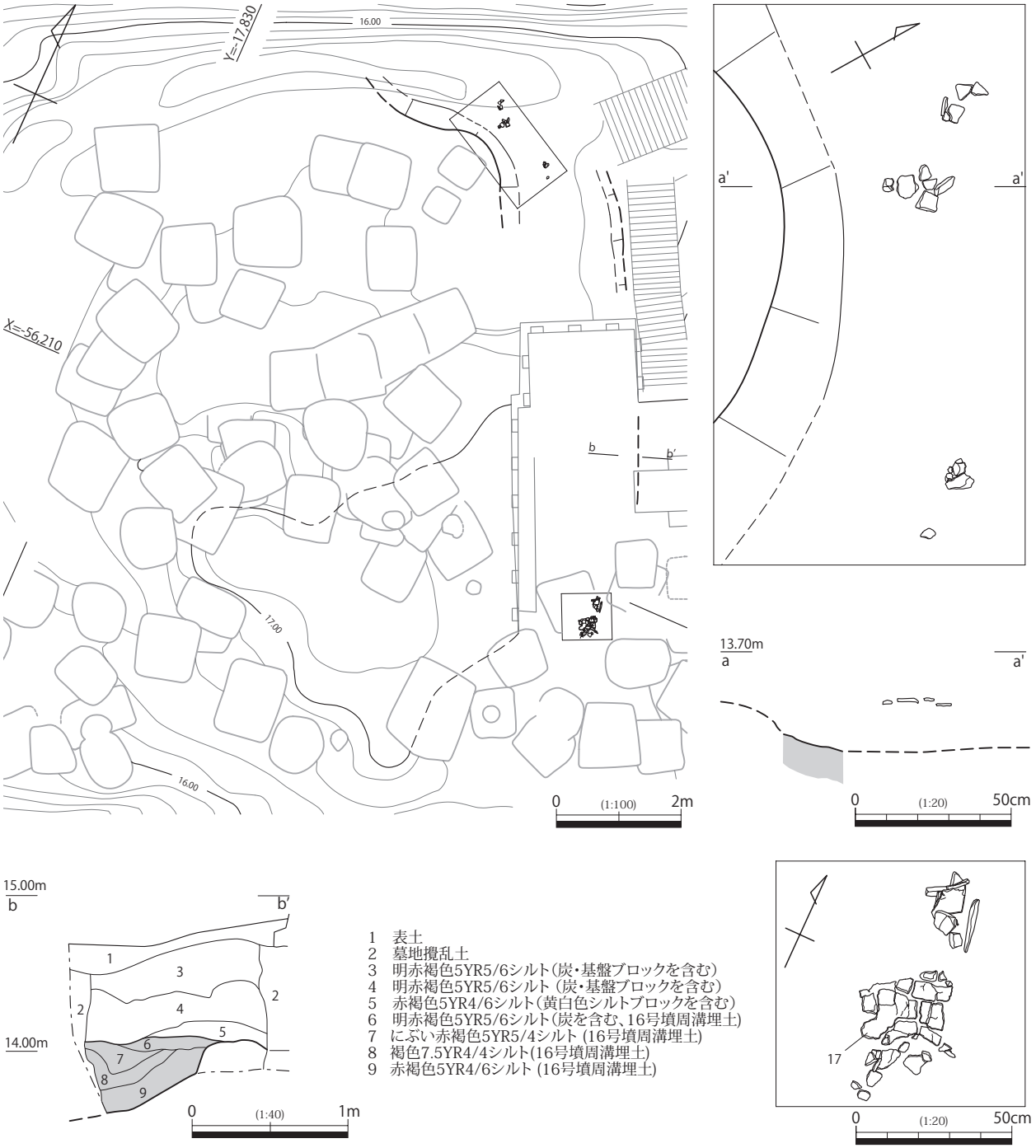


図 84　16 号墳平、断面、および周溝内遺物出土状況

周溝の北東部と東側で埴輪が出土している。とくに東側の一群は南北 0.80 m、東西 0.35m の範囲でまとまって出土した。これらは近世以降の墓壙に壊されずに残ったもので、比較的大きな破片を含んでいた。埴輪はすべて土壌化した層（8 に相当する）から出土しており、底面から数 cm 浮いた状態であった。おそらく、15･36 号墳同様に、墳頂部に使われていたものが転落し、土とともに埋まったものと考えられる。

出土遺物（図 85）

周溝内から埴輪片が出土している。

14・15 は円筒埴輪の口縁部である。指でつまみ出すようにして成形した後ヨコナデで仕上げているが、ナデ調整が弱いため指頭痕が残る。15 の口縁端部では沈線状の窪みが確認できる。いずれに

図 85　16 号墳出土遺物

も外面に黒色斑が確認できる。

16 は底部になると思われる。これを底部とした理由について述べておく。この個体は焼成や胎土が口縁部である 15 と類似している。また、調整に使われているハケ工具の原体幅と本数（10 本 /1.9cm）も一致するので、同じ工具を使って作られたことが確認できた。その一方で、指ではさんで広げるような成形が認められないこと、内面調整が 15 では横方向を基調ととしているのに対して 16 は右上がり方向を指向していること、16 には 15 ではみられない端面のカットが確認できることから､明らかに異なる形状のものを作ろうとしている意図が看て取ることができた。このことから、これを底部と判断するに至った。内面のハケ調整が右上から左下に行われている状況から、底部側からの調整が行われていることが分かる。いわゆる「基底部倒立再調整」がおこなわれたものと考えられる。タタキ調整の痕跡は確認できないが、器壁がゆがんでいるので、タタキが行われていた可能性がある。確認できるのはハケ調整と基底端のカットで、カットはやや内傾する形に仕上げている。

17 は下にあった突帯がすべてはずれた状態で、貼り付け前のタテハケが確認できる。口縁部はほぼ直立した状態に仕上げられ、外面のハケメ調整は端部の近くにまで及んでいる。突帯は端部のナデの後に上下をナデで仕上げる。二次調整は確認できない。外面に赤色塗彩を施す。18 は突帯端部のナデ成形が不明瞭で上面の強いナデによって貼り付けを行っている様子が観察できる。19 は、平面形がやや弧状になるものの直線的である。そのため円筒埴輪ではなく、何らかの形象埴輪の底部にな

図 86　遺構外出土遺物（土器、埴輪）

図 87　遺構外出土遺物（石器）

る可能性が考えられる。

３）遺構外出土遺物（古墳時代以前）（図 86・87、図版 31- ２～４）

墓地造成による堆積や墓壙埋土からは、古墳に関連する遺物が出土している。また、古墳時代以前と思われる遺物が若干出土しているため、ここでまとめる。

20 ～ 22 は須恵器杯である。20 は回転ヘラケズリがやや平たくなる底面部分に限定されており、口縁端部には段や面を持たずに丸く仕上げている。37 号墳周溝の上の造成土から出土。21 は端部内面がほぼ直立するようになっている。36 号墳東周溝近くの造成土から出土。22 は焼成が甘く，表面の劣化が著しい。1b 区の 45 墓埋土から出土。23 ～ 25 は須恵器蓋で、外面口縁と天井部の境は沈線化している。23 は 1b 区造成土、24 は 1b 区表土、25 は 10c 区表土出土。26・27 は土師器で、26 は甕、27 は蓋。27 は内外面とも丁寧なナデで仕上げられている。26 は 1b 区の４墓、27 は 15 号墳東西確認トレンチ（図 76a-a'）出土。

28 ～ 32 は埴質の不明土製品である。いずれも形状が少なくとも円筒埴輪が該当しないものであり、形象埴輪の可能性もがあるものの具体的な器物の推定が不可能であるため、一括して土製品として扱う。28 は表面に粘土がはずれた痕跡が見られ、突帯などが貼り付けられていたものと思われる。裏面にはこれに直交する突帯状の盛り上がりがある。１b 区の４墓出土。29 は、断面がＬ字状の粘土板の裏面に粘土ひもを貼り付けて補強したような形状をしており、裏面の粘土紐を強い指ナデによって貼り付けた様子が観察できる。1b 区の 151 溝出土。30 は粘土紐をつなぎ合わせた後、表面を粘土で面的に覆い整形している。端部から 6cm 内側の所に粘土がはずれた痕跡が見られ、突帯などが貼り付けられていたと考えられる。端部の稜線を真っ直ぐにするとかなり傾斜する形状になるので、陶棺の蓋になる可能性がある。1b 区の現代撹乱土出土。31 は円筒形をしているものの、器壁が厚く径が小さいことから、円筒埴輪ではないものと判断した。外面には指頭痕を残しており、全体に凹凸がある。2f 区の 184 墓出土。32 は横断面で見ると徐々に厚みが減っていき、縦断面はほぼ真っ直ぐで端部を丸く仕上げている。外面に赤色塗彩を施す。1e 区の 136 墓出土。

33 は円筒埴輪の突帯部分で，端面が丸く仕上げられている。1b 区の 78 墓出土。34 と 35 は円筒埴輪底部で、内面に粘土の継ぎ目が明確に確認できる。34 は底端面にヘラ状工具の痕跡が見られ、外面に黒色斑がある。ともに 1b 区の現代撹乱土出土。

石器は２点出土している。36 は礫の各面に擦ったためにできたと思われるＶ字状の溝や平坦面が確認できる。ただ、砥石にしては多孔性の石材であり不自然さを感じる。1b 区の３集石出土。37 は打製石鏃で素材は安山岩と思われる。1c 区の 21 墓出土。

表５　遺物観察表（古墳時代土器、埴輪）

図番号	遺構・層位	器種	時期	法量（cm）	特徴	色調（外面）・胎土	備考
1	15 号墳周溝？	須恵器坏蓋	古墳時代後期	残存高 1.3	外面：回転ヘラ削り 内面：回転ナデ	外面・内面：灰白色 砂粒・黒色粒を含む	
2	15 号墳南西側周溝	円筒埴輪体部	古墳時代後期	残存高 6.9	外面：タテハケ 内面：左上ハケ	外面：明褐色 内面：橙色	
3	15 号墳南西側周溝	円筒埴輪底部	古墳時代後期	残存高 5.9 底径 20.2	外面：タテハケ？（劣化のため不詳） 内面：左上ハケ、底部底面に工具痕？	外面・内面：橙色 壁内：黄橙色	
4	15 号墳墳丘南北トレンチ内	円筒埴輪底部	古墳時代後期	残存高 4.0 底径 15.6	外面・内面：劣化のため不詳	内面・外面：浅黄色に橙色が斑状に混じる	
5	15 号墳南西側周溝	円筒埴輪底部	古墳時代後期	残存高 5.0 底径 18.0	外面・内面：劣化のため不詳	内面・外面：浅黄色に橙色が斑状に混じる	
6	15 号墳南西側周溝	円筒埴輪	古墳時代後期	残存高 29.0 口径 31.6	外面：タテハケ（突帯貼付後のものもあり） 突帯：ヨコナデ 内面：ヨコハケ	内面・外面：浅黄色に橙色が斑状に混じる	外面赤色塗彩
7	36 号墳東周溝下層	朝顔形埴輪か	古墳時代後期	残存高 8.1	外面：タテハケ 内面：ヨコハケ	内面・外面：明赤褐色 壁内：浅黄色 胎土：細砂粒を少量含む	
8	36 号墳東周溝下層	円筒埴輪体部	古墳時代後期	残存高 9.6	外面：タテハケ 突帯：ヨコナデ（下面についてはやや不明瞭） 内面：劣化のため不詳	内面・外面：明赤褐色 壁内：浅黄色 胎土：細砂粒を少量含む	
9	36 号墳東周溝下層	円筒埴輪体部	古墳時代後期	残存高 12.0	外面：タテハケ 突帯：ヨコナデ 内面：劣化のため不詳	内面・外面：明赤褐色 壁内：浅黄色 胎土：細砂粒を少量含む	
10	36 号墳東周溝下層	円筒埴輪体部	古墳時代後期	残存高 6.7	外面：左上ハケ 突帯：ヨコナデ（上面は明瞭、下面は不明瞭） 内面：ヨコハケ	外面：黄橙色 内面：明赤褐色	
11	36 号墳東周溝下層	円筒埴輪口縁	古墳時代後期	残存高 5.9 口径 33.2	外面：タテハケ後口縁部ヨコナデ 内面：ヨコハケ後口縁部ヨコナデ	外面：橙色 内面：明赤褐色 壁内：黄橙色	
12	36 号墳周溝	円筒埴輪底部	古墳時代後期	残存高 6.1 底径 19.8	外面：劣化のため不詳 内面：ヨコハケ	外面・内面：橙色 壁内：一部黒褐色	黒色斑あり
13	36 号墳東周溝下層	形象埴輪？	古墳時代後期	残存長 11.8 残存幅 8.3 残存厚 4.3	表面：劣化のため不詳 裏面：ハケ調整あり	外面・内面：明褐色 壁内：浅黄色	
14	16 号墳周溝	円筒埴輪口縁	古墳時代後期	残存高 11.1 口径 24.8	外面：タテハケ後口縁部ヨコナデ？ 内面：劣化のため不詳	外面・内面：橙色	黒色斑あり
15	16 号墳周溝	円筒埴輪口縁	古墳時代後期	残存高 9.5 口径 27.4	外面：タテ～右上ハケ後口縁部ヨコナデ 内面：ヨコハケ後口縁部ヨコナデ	外面・内面：橙色	黒色斑あり
16	16 号墳周溝	円筒埴輪底部	古墳時代後期	残存高 10.4 底径 19.0	外面：左上ハケ後右上ハケ（倒立ハケか） 内面：左下ハケ（倒立ハケ）、底端面に工具切断痕	外面・内面：橙色	
17	16 号墳周溝	円筒埴輪	古墳時代後期	残存高 26.0 口径 28.8	外面：タテハケ 突帯：ヨコナデ（下面についてはやや不明瞭） 内面：劣化のため不詳	外面：明褐色 内面：橙色 壁内：にぶい橙色	外面赤色塗彩、突帯剥離部分で貼り付け前のタテハケが確認できる
18	16 号墳周溝	円筒埴輪体部	古墳時代後期	残存高 7.5	外面：劣化により不詳（タテハケか） 突帯：ナデ（上面が明瞭、仮面は不明瞭） 内面：劣化により不詳	外面：にぶい橙色 内面：橙色	
19	16 号墳周溝内	形象埴輪台部？	古墳時代後期	残存高 9.0	外面：タテハケ 内面：左下ハケ後タテハケ（成形時の指頭痕が残る）	外面：明赤褐色 内面：にぶい橙色 壁内：浅黄色	
20	表土内	須恵器坏身	古墳時代後期	器高 4.3 口径 13.2	外面：受け部回転ナデ・坏部回転ナデ・底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	外面・内面：灰色 胎土：白色砂粒を含む	底面のヘラケズリは底面から見て時計回り

図番号	遺構・層位	器種	時期	法量（cm）	特徴	色調（外面）・胎土	備考
21	近世整地層	須恵器坏身	古墳時代後期	残存高 2.8 口径 10.8	外面・内面：回転ナデ	外面：灰白色 内面：灰色 胎土：白色砂粒を少量含む	
22	40 墓	須恵器坏身	古墳時代後期	残存高 2.2	外面・内面：劣化により不詳	外面・内面：灰白色 胎土：砂礫粒を多く含む	焼成不良
23	黄褐色土上面	須恵器坏蓋	古墳時代後期	残存高 2.1	外面：回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	外面：灰白色 内面：灰色 胎土：白色砂粒を含む	ヘラケズリは上から見て時計回り
24	表土	須恵器坏蓋	古墳時代後期	残存高 3.3 口径 12.4	外面：回転ナデ・天井と口縁の境に沈線 内面：回転ナデ・口縁端部に面取り	外面・内面：明灰色 胎土：白色砂粒を含む	
25	2 集石	須恵器坏蓋	古墳時代後期	残存高 2.8 口径 11.6	外面：回転ナデ・天井と口縁の境に沈線 内面：回転ナデ・口縁端部は段状になる	外面・内面：灰色 胎土：白色砂粒を少量含む	
26	4 墓	土師器甕	古墳時代後期	残存高 4.7	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ・体部ヨコケズリ	外面：褐灰色 内面：黒褐色 壁内：にぶい黄橙色 胎土：粗砂粒を含む	
27	表土	土師器蓋？	古墳時代後期	残存高 2.7 口径 10.4	外面・内面：ナデ	外面・内面：にぶい橙色 壁内：にぶい黄橙色 胎土：砂粒を少量含む	
28	4 墓	形象埴輪？	古墳時代後期	最大長 16.0 最大幅 10.4 最大厚 4.3	表面：ハケ？（劣化により不詳） 裏面：劣化により不詳	表面：黄橙色 裏面・壁内：明黄褐色 胎土：赤色粒を含む	
29	151 溝	形象埴輪？	古墳時代後期	最大長 12.5 最大幅 8.9 最大厚 6.8	表面：劣化により不詳 裏面：粘土紐貼り付けの際の強いナデを残す	表面・裏面：橙色 壁内：浅黄橙色 胎土：赤色粒を含む	
30	現代墓撹乱土	形象埴輪？	古墳時代後期	最大長 11.4 最大幅 15.0 最大厚 4.1	表面：ナデ 端面・裏面：ハケ	表面・裏面・壁内：橙色 胎土：白色砂礫粒を含む	幅5cm 程度の粘土紐を接合し、表面に粘土を薄く貼り付けることで仕上げている
31	184 墓	形象埴輪？	古墳時代後期	残存高 9.8	外面：ナデ・指頭痕を残す 内面：ナデ	外面・内面：橙色 壁内：にぶい黄橙色 胎土：砂礫粒・赤色粒を含む	
32	136 墓	形象埴輪？	古墳時代後期	残存高 9.2	外面・内面：ナデ	外面・内面：橙色 壁内：にぶい橙色・黒褐色 胎土：砂礫粒・赤色粒を含む	外面赤色塗彩
33	78 墓	円筒埴輪体部	古墳時代後期	残存高 4.6	外面：劣化により不詳 突帯：ヨコナデ（上面は明瞭、下面は不明瞭）	外面：にぶい橙色 内面：橙色 壁内：浅黄橙色 胎土：白色砂粒・赤色粒を少量含む	
34	表採	円筒埴輪底部	古墳時代後期	残存高 7.2 底径 20.0	外面：ヨコハケ後ナデ 内面：未調整か・粘土接合を残す	外面：にぶい橙色 内面：橙色 壁内：にぶい橙色・黒褐色 胎土：砂礫粒・赤色粒を含む	
35	撹乱	円筒埴輪底部	古墳時代後期	残存高 5.9 底径 28.8	外面：劣化により不詳 内面：未調整か・指頭痕と粘土接合を残す、端面に工具痕	外面：にぶい橙色 内面：橙色 壁内：浅黄橙色 胎土：白色砂粒・赤色粒を少量含む	黒色斑あり

表6　遺物観察表（石器）

図番号	遺構・層位	器種	時期	法量（cm）	特徴	石材	備考
36	3集石	不明石製品	不明	長 5.35、 幅 4.2、厚 2.9	各面を擦ることによってできた溝状の凹み		
37	21 墓	打製石鏃	弥生時代か	長 2.1、 幅 1.6、厚 0.3	凹基式	安山岩	

第３節　中世以降の調査

１）概要

調査地は松原地区の墓地として利用されてきたところである。道路路線設計により当該地が道路用地内となったことから、発掘調査の前年度までに地元住民により墓の改葬が行われ、墓上に乗る石塔類や埋納されている骨壺等が集落近くの墓地へ移された。

このように現在その縁者がわかる墓については改葬が終了したことから、調査地から墓が検出された場合は無縁となってしまったものと判断し、調査することとした。ただし、出土遺物等から明らかに近代以降の墓と比定できたものについては、国土交通省鳥取河川国道事務所と協議し、同省が改葬することとなった。そのため、本報告で対象とするのは近世までの遺構、遺物としたが、時期比定できなかった墓についても、墓形態や人骨状況などから概ね同時期と判断し、ここに含めた。

以上のことから、調査地内で検出した遺構は、中世後期から近世前期（17 世紀代）までをⅠ期、近世後期（18 世紀代）以降近世末までをⅡ期、近代以降をⅢ期という３期に区分し、それ以外を時期不明とした。

Ⅰ期に位置づけられる遺構は、墓が６基、道が２条だけと非常に少ない。また、遺構外から出土した遺物も多くはない。本遺跡における主体となるのは続くⅡ期で、墓が 76 基ある。また副葬品などの遺物が伴わないため時期判定ができない遺構として、墓が 94 基、２つの平坦面とそこに掘られた土坑６基、墓道と考えられる道状遺構が２条ある。

Ⅲ期についてはここで概略だけを述べる（図 88）。本期に比定される墓は 29 基ある。ｃ・ｄ区を境に大きく東西に分かれるが、いずれもほぼ尾根頂部にある。葬制には２種類あり、土葬では方形掘方をもち座葬とするもの、火葬では小型骨壺に入れ、小さな掘方をもつものであった。時期比定は後者の陶磁器壺、前者では棺桶に丸釘が使われていたことによる。

なお、後述する遺物の時期決定などについては以下の文献を参照した。

上田秀夫　1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№.２

扇浦正義　1987「常滑大甕の編年的考察」『自證院遺跡』新宿区教育委員会

小野正敏　1982「14 ～ 16 世紀の染付碗、Ⅲの分類と年代」『貿易陶磁研究』№.２

木村孝一郎 2008「越前焼の編年的研究ノート」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会

九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年』

古泉　弘　1985「江戸の町の出土遺物」『季刊考古学』13　雄山閣

中森　祥　2006「鳥取県における中世後期土師器の展開」『調査研究紀要』Ⅰ　鳥取県埋蔵文化財センター

藤澤良祐　2009「総論」『愛知県史　別編窯業２　中世・近世　瀬戸系』愛知県史編さん委員会

また墓坑形態では、円形を呈するものが江戸近郊において近世後期にみられるタイプであるとされており、県内の事例においても概ね同様の傾向が窺える。そのため、本遺跡においても同時期のものとして扱うこととした。

長佐古真也 2004「発掘事例にみる多摩丘陵周辺の近世墓制」『墓と埋葬の江戸時代』吉川弘文館

北　浩明　2007「中近世墓群の変遷と特質」『門前第２遺跡Ⅱ（菖蒲田地区）』鳥取県埋蔵文化財センター

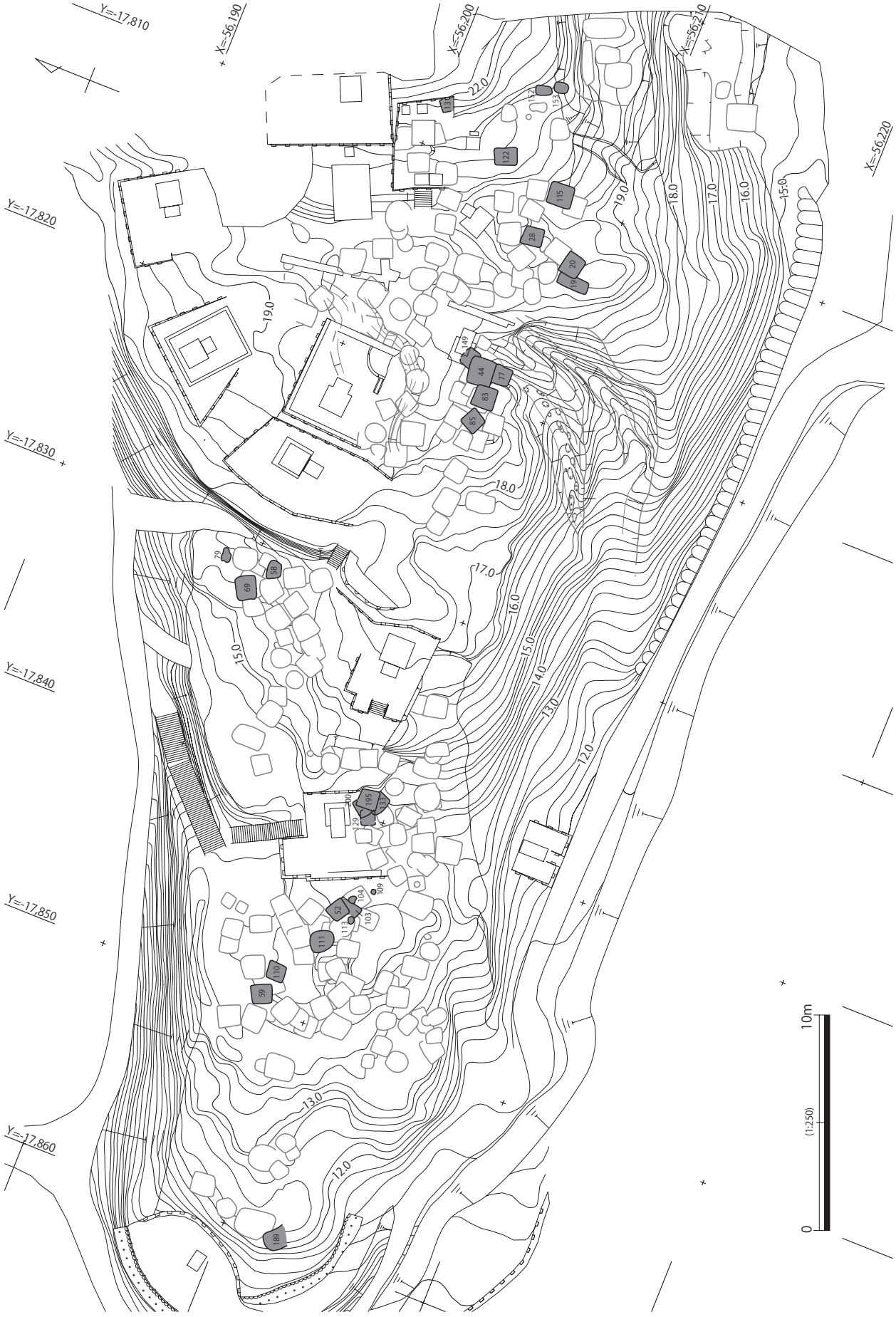

Y=-17,810
X=-56,190
X=-56,200
X=-56,210
X=-56,220
Y=-17,820
Y=-17,830
Y=-17,840
Y=-17,850
Y=-17,860
22.0
19.0
18.0
17.0
16.0
15.0
14.0
13.0
12.0
10m
(1:250)
0

図 88　Ⅲ期遺構配置

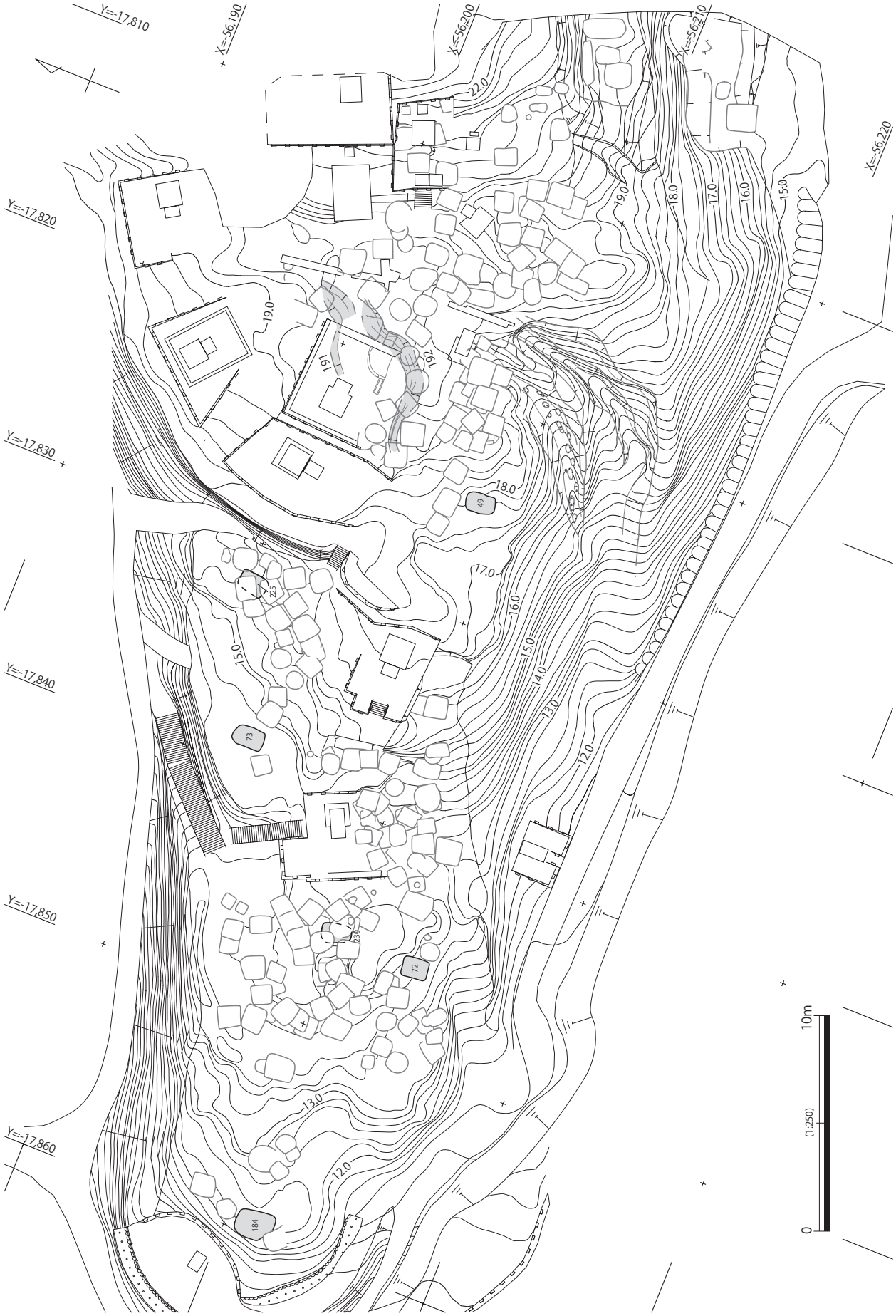

Y=-17,810
X=-56,190
X=-56,200
X=-56,210
X=-56,220
Y=-17,820
Y=-17,830
Y=-17,840
Y=-17,850
Y=-17,860
22.0
19.0
18.0
17.0
16.0
15.0
14.0
13.0
12.0
191
192
49
225
73
238
72
184
10m
(1:250)
0

図 89　Ⅰ期遺構配置

2）調査の方法

a）掘削作業

鳥取市教育委員会による試掘調査結果から、表土は 0.1 mほどと薄く、それを除去すればすぐに墓の掘り込まれた面が検出されると想定していた。そこで調査地東側、丘陵の高所より人力による表土掘削を行い、そのまま遺構検出作業へと移っていった。ただ平面的な検出だけでは、墓の埋土なのか改葬に伴い掘削され、再度埋め戻された土（撹乱）なのか判別できないものがかなりあったため、適宜トレンチを入れ、下層の堆積状況や遺構同士の切り合い関係などを把握しつつ進めていった。そしてその土層断面を詳細に観察していくと、調査前に行われた改葬に伴って、部分的に大幅な掘削および造成が行われていることが明らかとなった。そこで、そうした箇所については重機を用いて造成土を除去し、その後平面検出を行っていくこととした。

なお、現在の墓地を区画するために設けられた、ブロック列やコンクリート基礎などが残ったままであったため、撤去可能なものについてはブレーカーなどを利用し、撤去作業を行った。

平面的に確認できた遺構については基本的に半裁して掘り下げ、遺構内の土層堆積を確認することに努めたが、その堆積を細分し得なかったものについては主となる土の記録をとり、掘り下げていった。

b）人骨調査

人骨の出土に当たっては検出状況の写真撮影を行ったあと、簡易写真測量によって図化した。そしてその図面をもとに取り上げた単位ごとに番号を付け、人骨部位名、および方向等を記載していった。取り上げ作業については鳥取大学医学部井上貴央教授、同江田真毅助教、藤井理恵氏にお願いしたほか、中森が担当した。

人骨は美和調査事務所においてクリーニングをしたあと、鳥取大学医学部井上研究室において接合作業および分析、鑑定を行っていただいた。その結果については第Ⅵ章第３節に掲載している。

3）Ⅰ期の調査（図 89）

a）墓

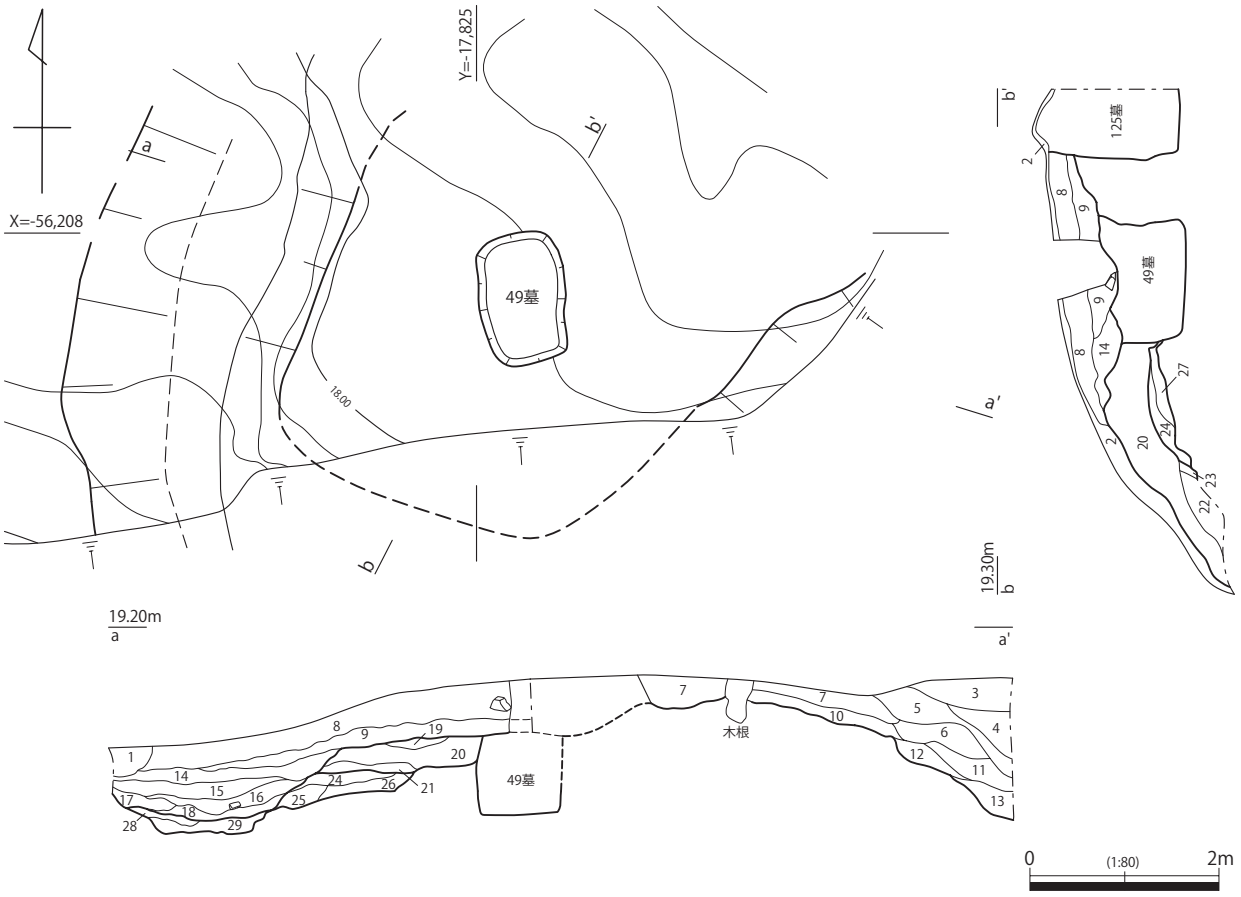
Ⅰ期に比定できた墓はわずかに６基で、調査地の中央から西側にかけて点在している。いずれも長方形の掘方をもち、南北方向に主軸をとっている。同様な墓がさらに何基かあるものの、出土遺物もなく、また遺構同士の切り合いなどからも時期の特定ができなかったため、時期不明として後節で述べている墓がある。

49 墓・80 墳丘（図 90-91、図版 32-33）

１ｃ区南側東側平坦面の南端辺りで周溝を伴う墳丘、およびその頂部中央から掘り込まれる墓を検出した。

調査前の段階で礫や墓石が点在するマウンドが存在していた。このマウンドは遺構番号１としてトレンチを入れて堆積状態の確認を行った。その結果、ビニールなどが出土することから、最近の堆積であることが判明し、石材についても遺構に伴うものではないと判断した。

これらを除去していくとともに、その下の状況を確認するためのトレンチを新たに掘削して、堆積状況を確認した。すると、１マウンドの下層に別のマウンドがあることが判明した。また、このマウンドの上面から掘り込む 49 墓があり、トレンチ掘削中に瀬戸美濃皿（38）が出土した。



1　撹乱
2　赤褐色2.5YR4/6シルト(基盤ブロックを含む､しまり悪い)
3　褐色7.5YR4/4シルト(炭･基盤ブロックを含む)
4　明赤褐色5YR5/6砂質シルト(基盤ブロックを含む)
5　赤褐色2.5YR4/6シルト(基盤ブロックを含む)
6　明赤褐色5YR5/6砂質シルト(基盤ブロックを含む)
7　暗赤褐色5YR3/4砂質シルト
8　にぶい赤褐色5YR4/4砂質シルト(基盤ブロックを含む)
9　褐色7.5YR4/6シルト(基盤ブロックを含む)
10 赤褐色5YR4/6シルト(基盤ブロックを含む､しまりやや悪い)
11 赤褐色5YR4/6シルト(基盤ブロック少量を含む､しまりやや悪い)
12 赤褐色5YR4/6シルト(基盤ブロック少量を含む)
13　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
14　暗褐色7.5YR3/4シルト(基盤ブロックを含む)
15　にぶい赤褐色5YR4/4シルト(基盤ブロックを含む)
16　にぶい赤褐色5YR4/3シルト
17　赤褐色5YR4/6砂質シルト(基盤ブロックを含む)
18　にぶい赤褐色5YR4～5/4砂質シルト(基盤ブロックを含む)
19　赤褐色5YR4/6シルト(基盤ブロック･炭を含む)
20　褐色7.5YR4/3シルト(基盤ブロックを少量含む)
21　褐色7.5YR4/3シルト(基盤ブロックを少量含む､炭を含む)
22　赤褐色5YR4/6砂質シルト(基盤ブロックを多く含む)
23　にぶい赤褐色5YR4/4砂質シルト
24　褐色7.5YR4/4～6褐色シルト
25　褐色7.5YR4/3～4シルト
26　赤褐色5YR4/6シルト(基盤ブロックを含む)
27　にぶい赤褐色5YR4/3～4シルト(基盤ブロックを含む)
28　暗褐色7.5YR3/4シルト(基盤･明赤褐色ブロックを含む)
29　明赤褐色5YR5/6砂質シルト(基盤ブロックを含む)

図 90　49 墓、80 墳丘平、断面

以上のことから、このマウンドが 49 墓に伴う墳丘であると判断した。

80 墳丘は南側が崖となっており、丘陵低位の西側でのみ周溝を確認した。このことから検出し得た範囲はほぼ北側の半分以下と考えられる。周溝外（西）側は円弧状になるが、墳丘側はやや直線的である。幅 2.42m､検出時の西墳頂部と周溝底面までの高低差が 0.71m､周溝外側との高低差は 0.15m である。この形状から墳丘形態は円形であったことが窺える。墳丘の構造は東側半分が基盤層の削り出し、西側半分は基盤ブロックを少量含む褐色シルト（20・21・24・25）の堆積である。この堆積層下で旧表土が確認できないので、墳丘が盛土されたかどうかは判断できない。

墳丘の規模は明確にし得ないが、周溝の状況等から、径 6 m程度のものだったと思われる。

49 墓は墳丘のほぼ中央にあるが、南北を長軸とする長方形で長さ 1.4m、幅 0.9m ほどを測り、検出面からの深さは 0.9m である。埋土は 4 層に分けることができるが､棺の痕跡などは確認できなかっ

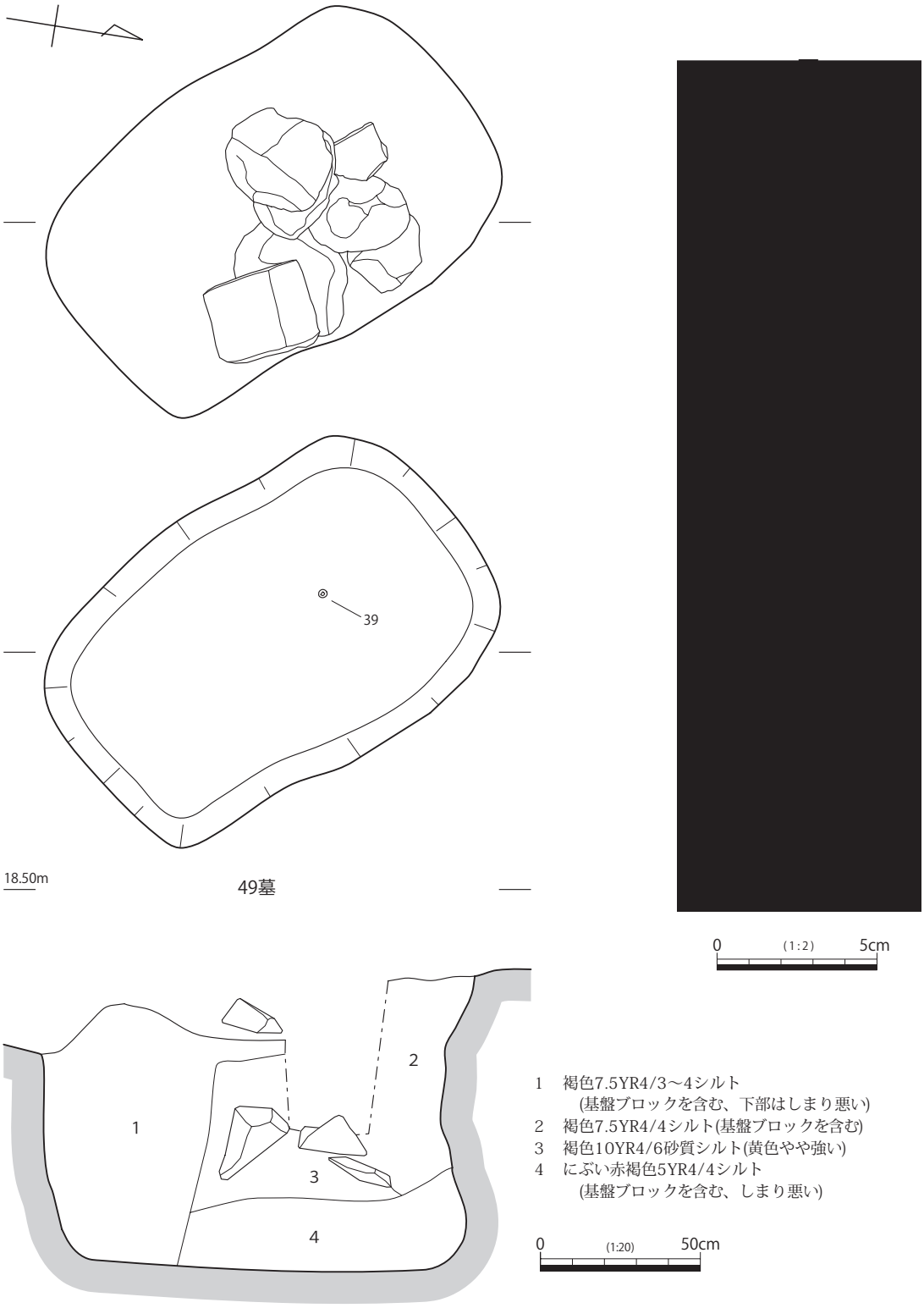


図 91　49 墓および出土遺物

た。墓壙内には地輪と思われる立方体の石材や円礫などが落ち込むように出土しており、これらが標石であった可能性が高い。

墓壙底面中央やや北よりで、６点が重なった状態の銅銭（39）が出土しているほか、埋土上層から瀬戸美濃折縁皿（38）が出土している。その形態から大窯第４段階後半のものと考えられる。

72 墓（図 92、図版 34-1・2）

２ｅ区中央部に位置する。平面長方形を呈し、長径 1.2 m、短径 0.95 m、深さ 0.95 mほどを測る。

人骨は底部北側にまとまって出土した。壮年女性骨と考えられ、一部小児骨が混じる。女性骨の埋葬体位は不明。

遺物は人骨の北側、底部よりやや浮いたところから肥前系陶器皿（40）があったほか、東側ほぼ底面で古寛永通寶が２点（43・44）出土した。

73 墓（図 92、図版 34-3・4）

１ｄ区北西隅に位置する。平面長方形を呈し、長径 1.5 m、短径 1.0 m、深さ 0.8 mほどを測る。人骨は遺存していなかったが、北側底面から壁面への立上り部分では、口縁部を下にした状態で肥前系陶器皿（41）が出土した。また埋土上層からは青花碗Ｃ群の底部片（42）が出土している。体部から上部は欠損しており、いわゆる円盤状土製品の可能性も考えられる。

184 墓（図 93、図版 34-5・6）

２ｆ・ｇ区にまたがって位置する。南西隅は 189 墓に切られるが、平面長方形を呈し、長径 1.7 m、短径 1.35 m、深さ 1.05 mほどを測る。人骨は北側底部より壮年女性と考えられる頭蓋骨のみ検出した。埋葬体位は不明ながら、当該期の他事例からみて側臥屈葬であるかもしれない。

遺物は底部南西部より肥前系陶器皿（45）が正位で出土している。なお、埋土上層からは円筒埴輪片も出土しており、古墳を切って近世以降造墓されている可能性が考えられよう。

225 墓（図 93）

10ｄ・１ｄ区にまたがって位置する。69･186 墓に切られているため全形を把握しきれていないが、東がやや広い台形状を呈す。長径 1.4 m、短径 0.9 m、検出した深さは 0.5 mほどを測る。遺物は出土していないものの、近世の墓に切られることと墓形状から本期に属すると判断した。

230 墓（図 93）

２ｄ・ｅ区にまたがって位置する。近代以降の 111 墓、近世の 179 墓などに切られること、および平面が長方形を呈すことから､遺物は出土していないが本期と判断した。長径 1.4 m､短径 0.95 m、検出した深さ 0.3 mほどを測る。

ｂ）その他の遺構

191・192 道（図 94）

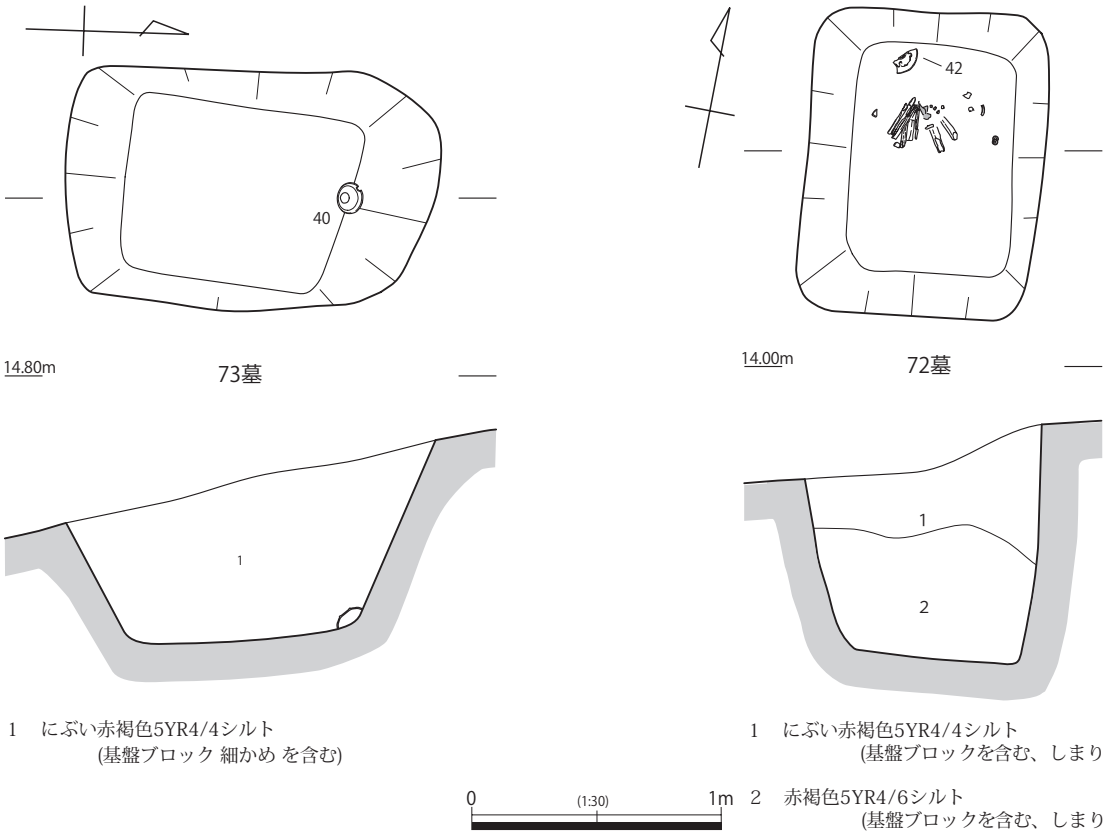
調査地東側の平坦面では、墓壙に切られるように、やや黄色みを帯びた赤褐色シルトを中心とした堆積が部分的に広がっていた。墓壙の壁を精査すると、埋土の異なる２条の溝状の遺構になることが判明した。遺物が出土せず、平面的な切り合いが確認できないため、前後関係は不明であった。

191 道は現代墓地の区画内、およびその外側で部分的に確認した。北側は墓地改葬時の撹乱、西側は現代墓造成時に基盤層を掘り下げているため、その先を追うことができない。

溝の両肩が唯一確認できる箇所（b-b'）で幅が 1.13m、深さが 0.33m である。これから約 0.8m 離れた 43 墓を確認した際に掘削したトレンチで深さが 0.71m、底面の標高差が約 0.5m ある。やや急な傾斜をもつが、後述する 151 道北端部分の傾斜（水平距離 2m で約 0.8m の高低差) と大きな差はない。旧地形が尾根頂部から北側へ傾斜する地点となるので、151 道同様に尾根上に上がるための道であった可能性が考えられる。

埋土は基盤ブロックを含むにぶい赤褐色シルトを中心としており、墓地造成時に埋められたものと考えられる。

192道は断片的に埋土と思われる堆積が確認できるだけなので､平面形状を特定するのが難しいが、

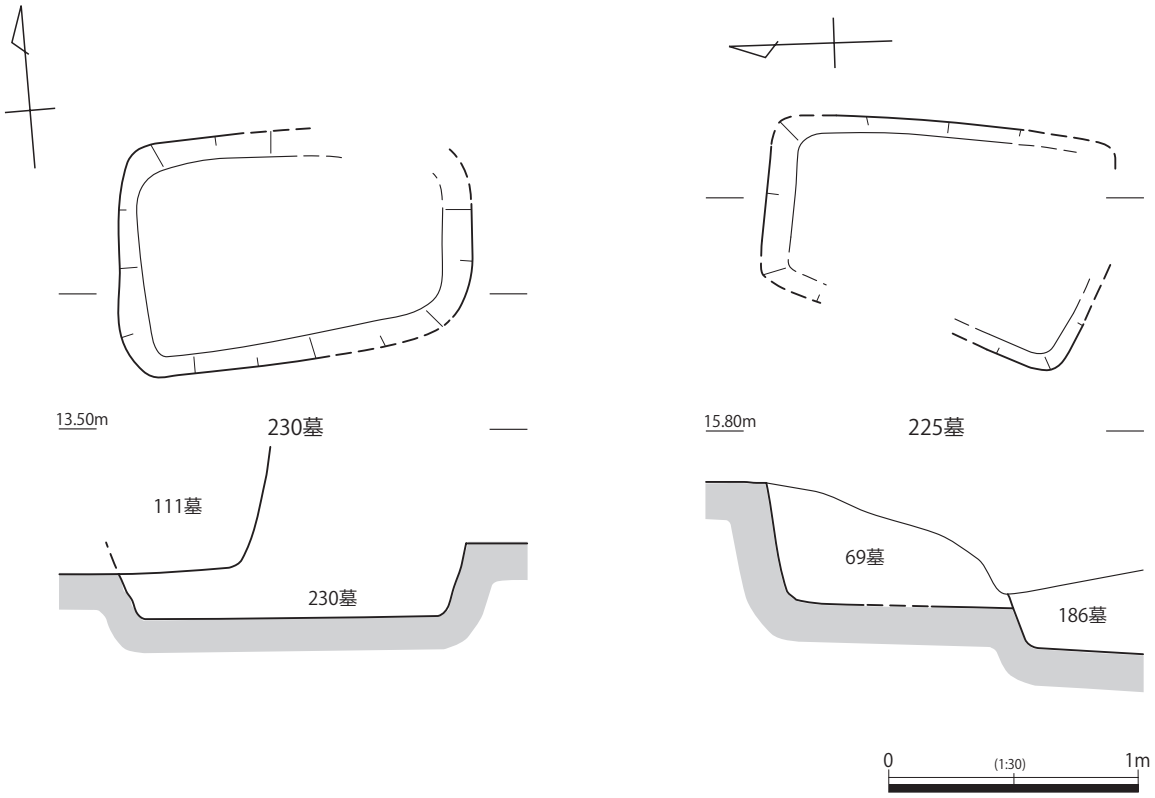


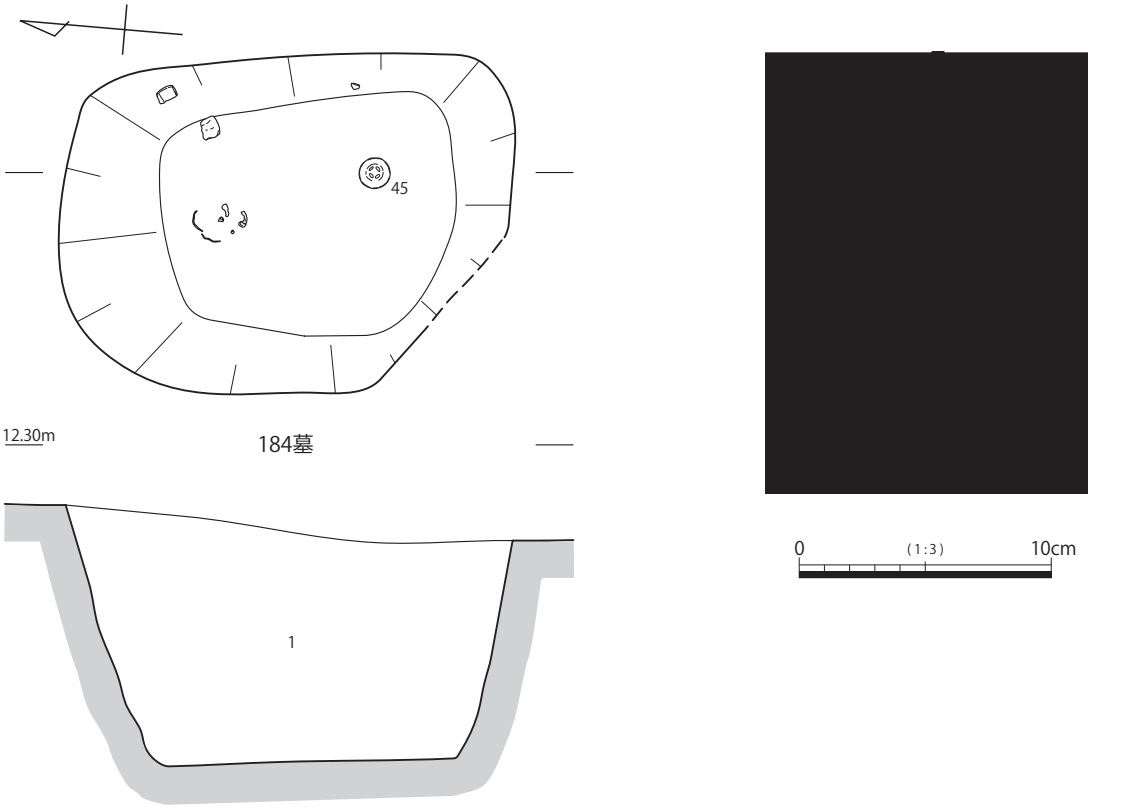
1　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
(基盤ブロック 細かめ を含む)

1　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

2　赤褐色5YR4/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

図 92　72・73 墓および出土遺物





1　赤褐色2.5YR4/6シルト（基盤ブロックを含む、しまりやや悪い）

図 93　184・225・230 墓および 184 墓出土遺物

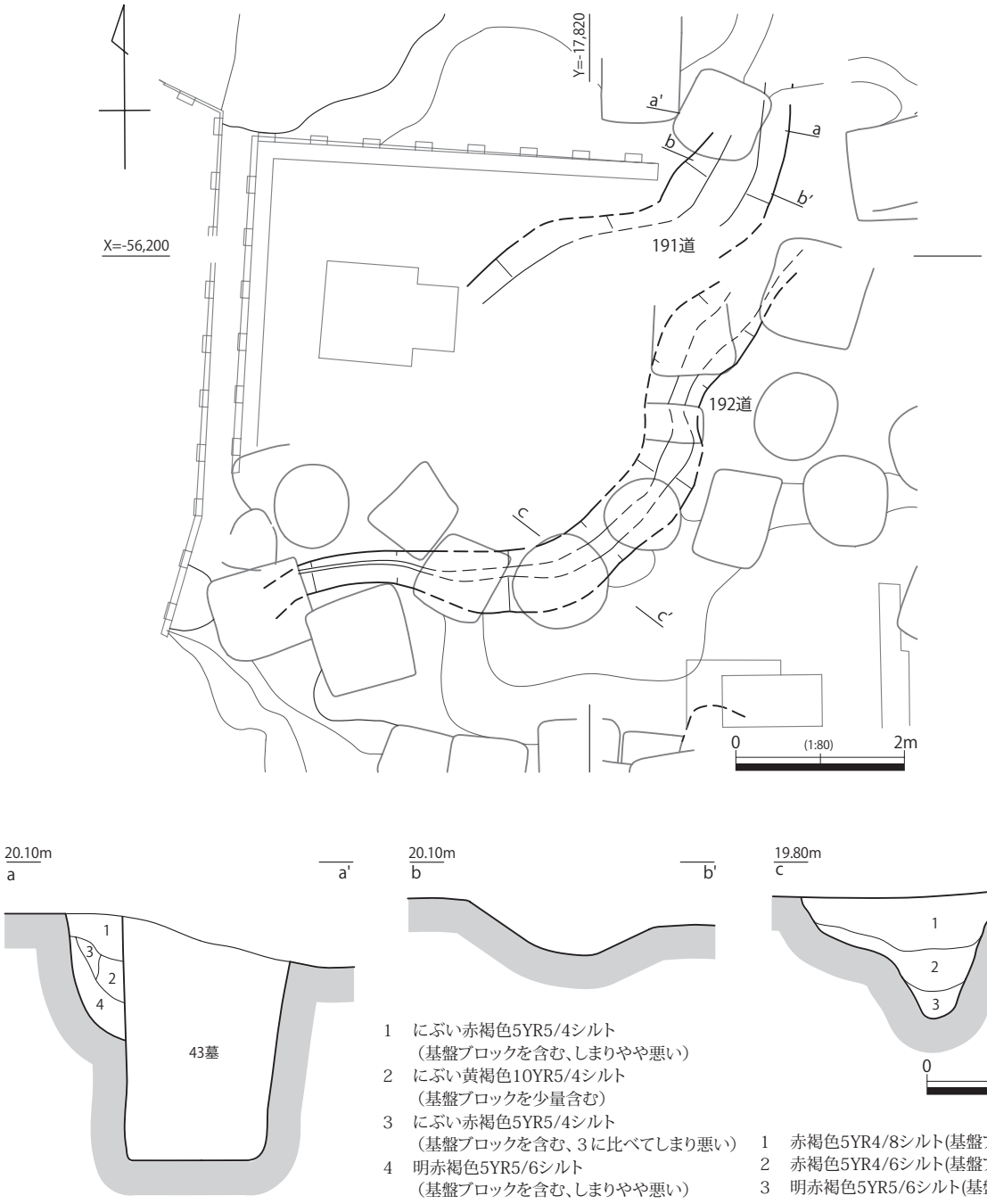


図 94　191・192 道　平、断面

南西から北東に円弧状に延びていたものと推測される。土層確認畦（c-c'）で幅1.36m、深さ0.72mある。西側については191道と同じく現代墓によって追うことができない。北東側は道を切る37墓の反対側に埋土と思われる堆積が確認できないのでそれ以上は延びない可能性がある。

埋土は基盤ブロックを含む赤褐色シルトであり、基地造成の際に埋められたと考える。

c）遺構外出土遺物（図 96・97、図版 35）

中世後期の陶磁器や渡来銭がわずかながら出土している。46 ～ 49 は青花である。1 d ～ 1 f 区で出土しており、概ねⅠ期墓の分布域に重なる。50 は無文の青磁碗。51 は瀬戸美濃焼大窯期の丸皿、52 は古瀬戸後期の壺で、被熱している。53 は須恵器系の壺。54 ～ 56 は渡来銭であるが、54・55 は 5 枚が接着した状態のものである。おそらく墓に埋納されていたものであろう。57 ～ 60 は石造

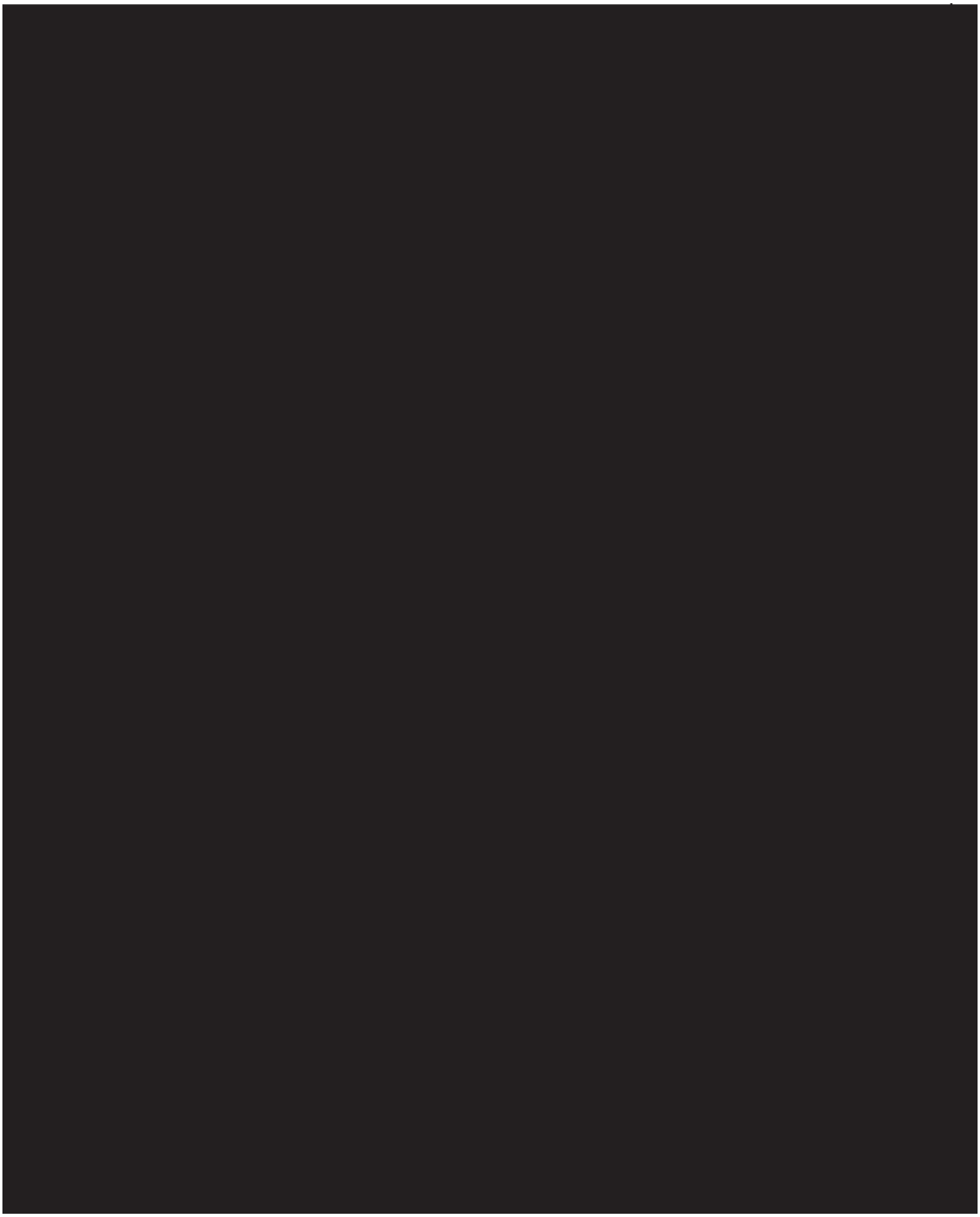
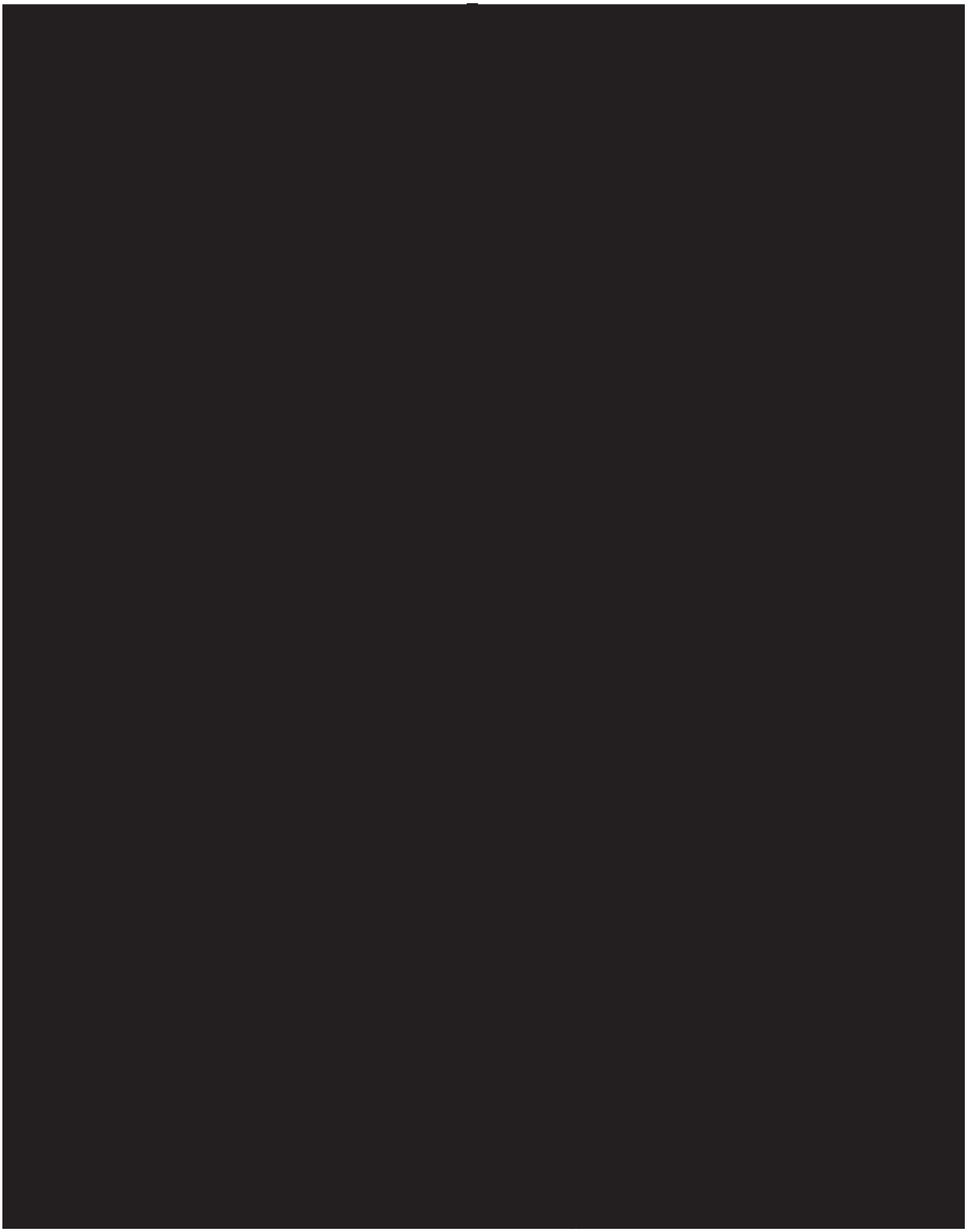


図 96　Ⅰ期遺構外出土遺物（石造物）

物である。59 は一石五輪塔空風部。また 61 ～ 66 は 17 世紀代の肥前系陶磁器である。67 は褐色釉のかかった碗。瀬戸美濃焼で大窯期のものと考えられる。68 ～ 70 は底部回転糸切りの土師器皿、および杯である。皿の２点は調査池内東側、１ａ・ｂ区から出土している。17 世紀代のものと考えられる。



63

0　(1:3)　10cm

図 97　Ⅰ期遺構外出土遺物（近世国産陶磁器、土師器）

4）Ⅱ期の調査（図 98・99）

a）墓

Ⅱ基に属する墓は全部で 76 基あり、ほぼ調査地全域に分布する。出土した遺物、他遺構との切り合い、および墓形態から判断した。以下、調査地東側から順次、各墓の説明をしていくこととする。

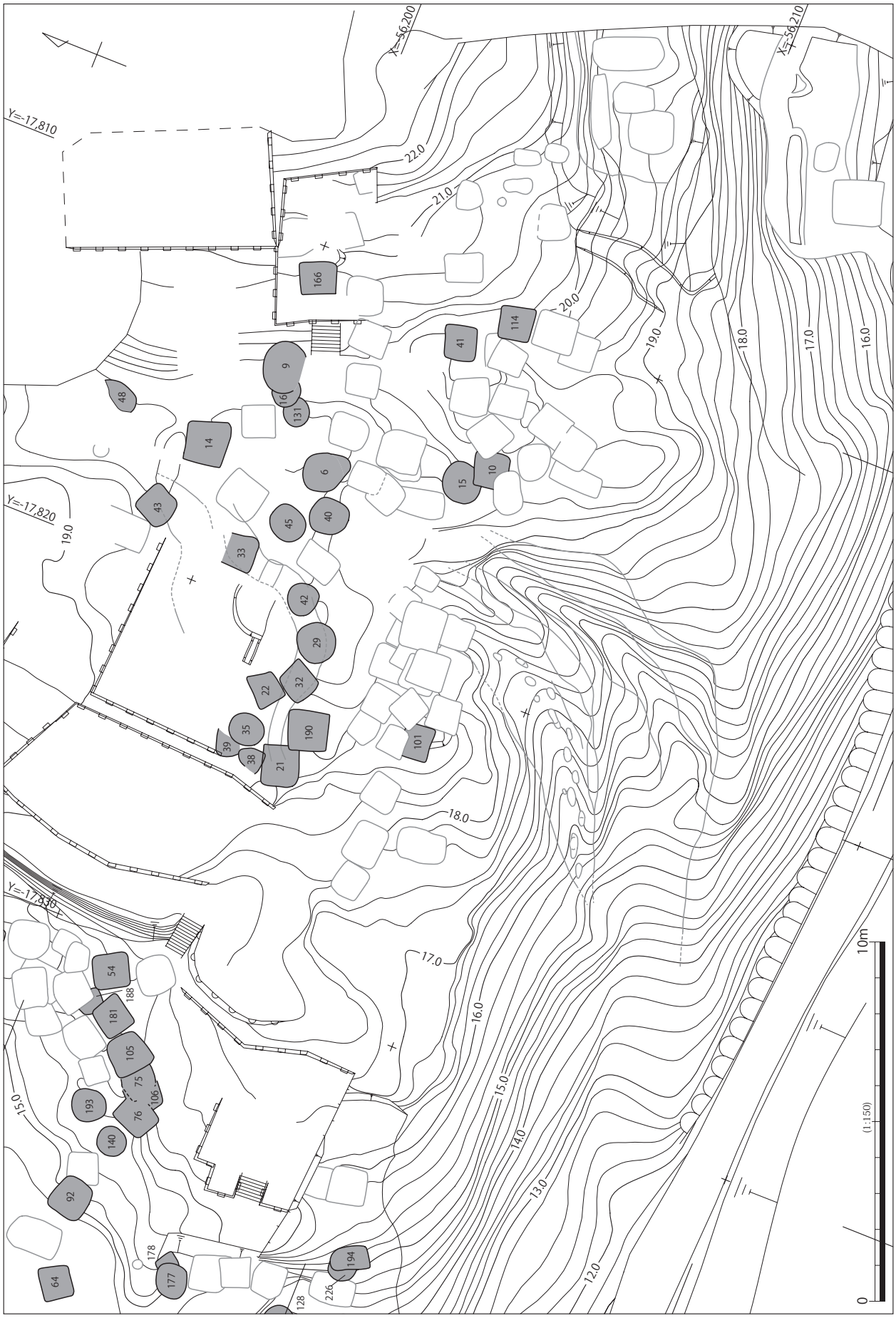

X=-56,200
X=-56,210
Y=-17,810
Y=-17,820
Y=-17,830
22.0
21.0
20.0
19.0
18.0
17.0
16.0
15.0
14.0
13.0
12.0
166
114
41
9
16
131
48
14
6
15
10
43
45
40
33
42
29
22
32
35
39
38
21
190
101
54
188
181
105
75
106
193
76
140
92
64
178
177
194
226
128
10m
0
(1:150)

図 98　Ⅱ期遺構配置 1

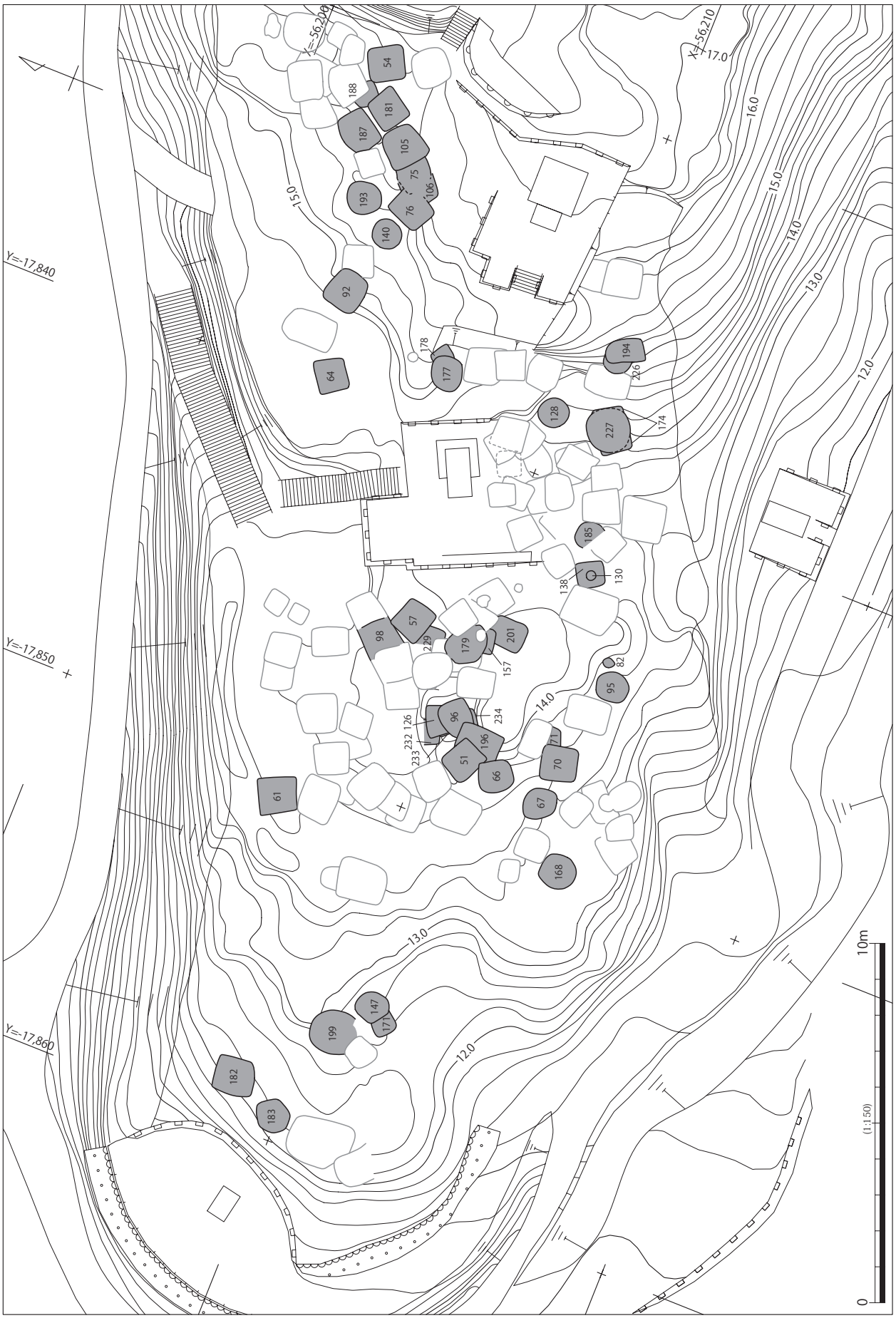


図 99　II 期遺構配置 2

9墓（図 100）

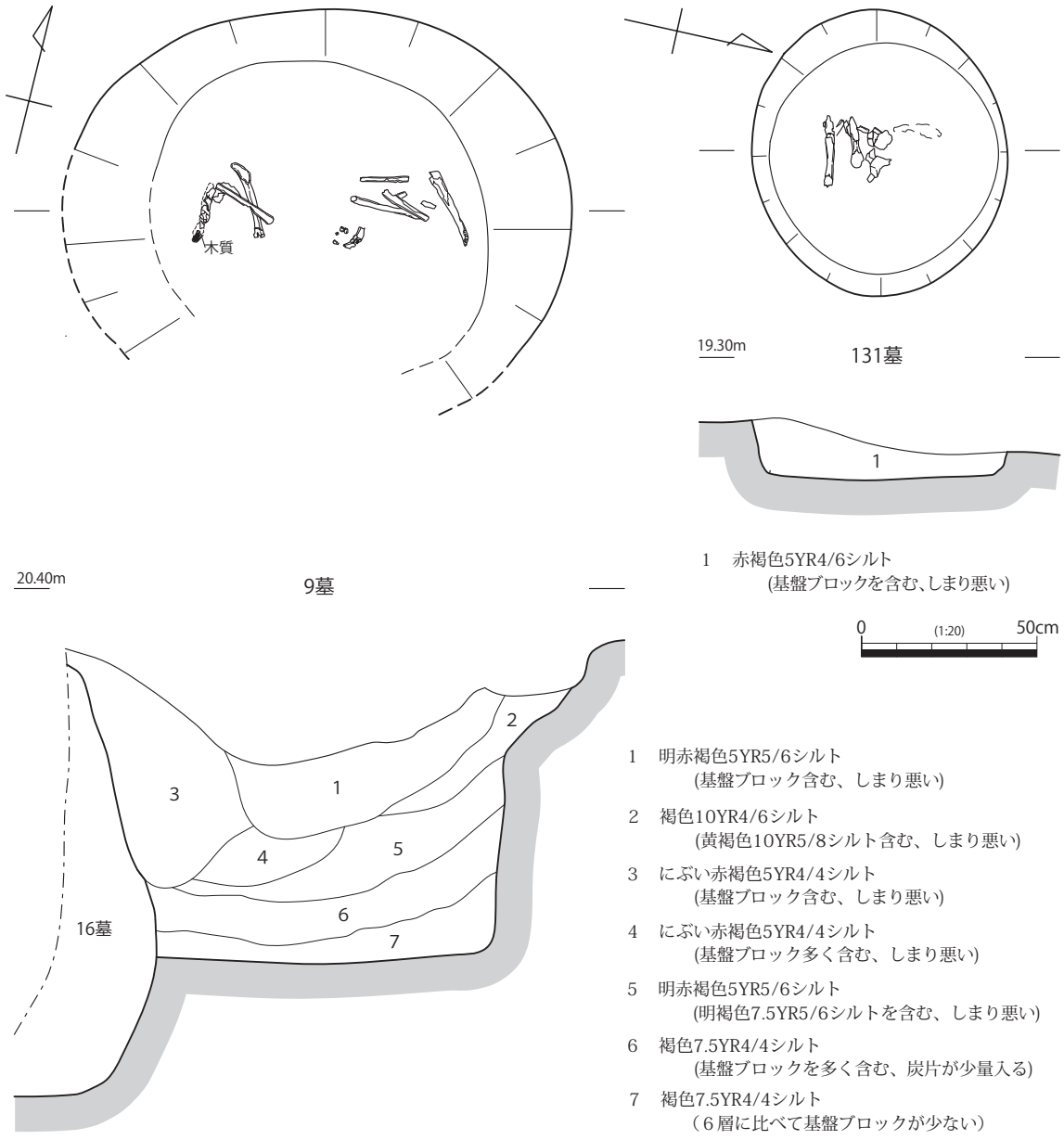
10 b・1 b区にまたがって位置する。西側を近世後期の 16 墓、北側は現代の撹乱に切られる。平面は東西方向がやや長い楕円形を呈し、長径は 1.45 m、深さ 0.9 mほどを測る。底部から 10 歳前後の人骨を検出したが、性別は不明。埋葬体位も不明である。

131 墓（図 100）

1 b区北側中央に位置し、東側を 16 墓に切られ、径 0.8 mほどの円形を呈する。また上部は現代の撹乱によって大幅に削平されているため、検出した深さは 0.2 mほどであった。出土した人骨は成人のもので、女性の可能性が想定されている。人骨の遺存状況が悪く、埋葬体位は不明である。

16 墓（図 101、図版 36-2 ～ 5）

1 b区北側中央に位置し、9・131 墓を切る。径 0.8 mほどの円形掘方の中から口径 0.6 m、高さ 0.7 mほどを測る大型の陶器甕（71）が出土し、甕内には人骨があった。このことから甕は棺桶として使用されていたものといえよう。これはその形態から常滑産と考えられ、扇浦正義の分類による



1　赤褐色5YR4/6シルト
(基盤ブロックを含む､しまり悪い)

0　(1:20)　50cm

1　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロック含む、しまり悪い)

2　褐色10YR4/6シルト
(黄褐色10YR5/8シルト含む、しまり悪い)

3　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
(基盤ブロック含む、しまり悪い)

4　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
(基盤ブロック多く含む、しまり悪い)

5　明赤褐色5YR5/6シルト
(明褐色7.5YR5/6シルトを含む、しまり悪い)

6　褐色7.5YR4/4シルト
(基盤ブロックを多く含む、炭片が少量入る)

7　褐色7.5YR4/4シルト
（6層に比べて基盤ブロックが少ない）

図 100　9・131 墓

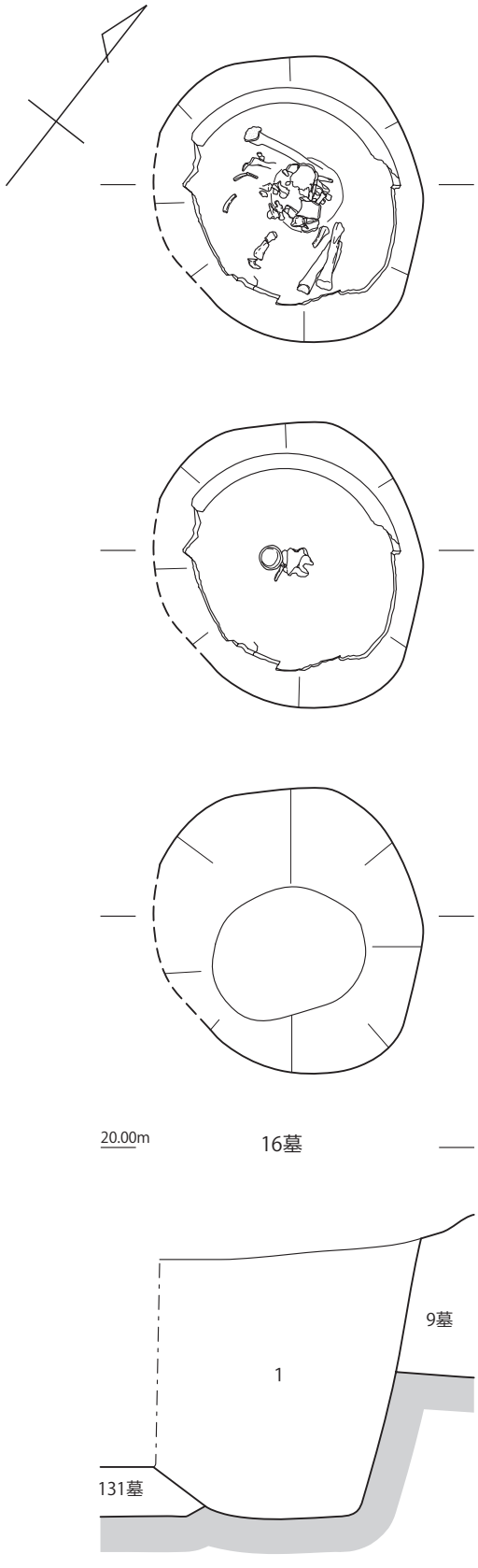
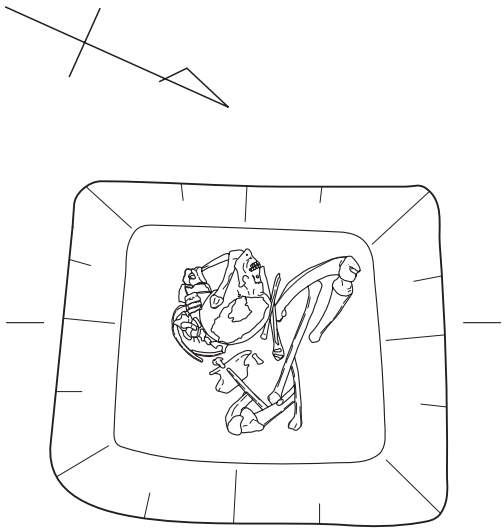
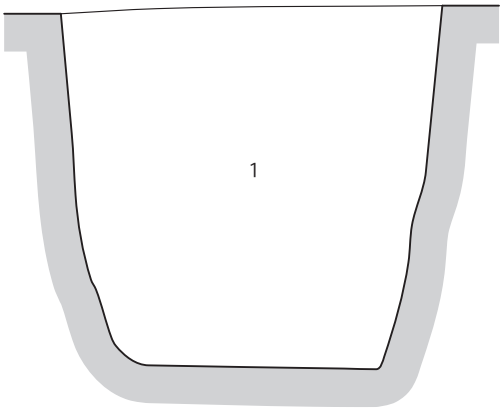


写真 8　16 墓甕（71）検出状況

図 101　16 墓および出土遺物



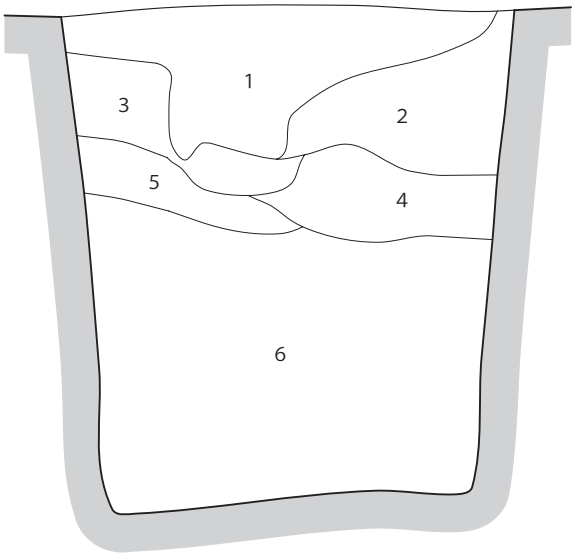
20.90m　166墓



1　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロック含む､しまり悪い)

0　(1:20)　50cm

20.20m　14墓



1　明褐色7.5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、陥没穴堆積)

2　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤、明褐色シルトブロックを含む、しまり悪い)

3　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、２に比べしまりはよい)

4　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

5　明褐色7.5YR5/6シルト
(基盤・明赤褐色シルトブロックを含む、しまり悪い)

6　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm

図 102　14・166 墓および出土遺物

E 類に相当すると考えられる。

人骨は壮年～熟年男性で、膝が立った状態であったことから埋葬体位は北北東を向く座葬と考えられる。なお、寛骨直上から青銅製品（72）が出土した。仏具と考えられ、股の上あるいは首から提げてあったのであろう。

166 墓（図 102）

10 ｂ・1 ｂ区にまたがって位置し、現代の墓地区画の中から検出された。南北軸が 1.0 m、東西軸は 0.9 mほどとほぼ方形を呈し、深さは 0.95 mほどを測る。墓内からは比較的遺存状況のよい熟年女性の人骨が検出され、この出土状況から北を向いた座葬であったと考えられる。また頭蓋骨下からは煙管（73）が出土した。

14 墓（図 102、図版 36-1）

10 ｂ区南側に位置する。径約 1.2 mの方形を呈し、深さは 1.35 mほどを測る。墓壙底面中央から南側にかけて壮年女性と考えられる人骨があった。埋葬体位は北を向いた座葬である。また墓壙底面ほぼ中央部では、棺材の痕跡と考えられる有機質土壌上から銅銭３点（うち１点は寛永通寶）が出土したほか、人骨の西側で漆器蓋がみられた。

43 墓（図 103、図版 37-1）

10 ｂ区南西隅に位置する。径約 1.0 mの方形を呈し、深さは 1.45 mほどを測る。底面から約 0.45 mの方形を呈する木質部材が検出され、その中に収まるように人骨があったことから、この木質が棺桶の痕跡であろう。人骨は熟～老年で、男性か。出土状況から北西を向く座葬であったと考えられる。この棺の内側には灰白色の土壌が帯状に検出されたが、土壌分析により稲藁であることが判明した。遺体を覆うように稲藁をかぶせたのであろうか。また頭蓋骨下から煙管雁首（75）が出土した。吸口が見つかっていないが、その出土地点からみて副葬品と判断している。

48 墓（図 103）

10 ｂ区ほぼ中央で、調査地境近くに位置する。現代の撹乱により墓壙の西側半分が切られているため全形は不明だが、径 1.4 mほどの円形を呈するものと考えられる。深さは 1.1 mほどを測る。人骨など遺物は出土していない。

33・34 墓（図 104、図版 44-6）

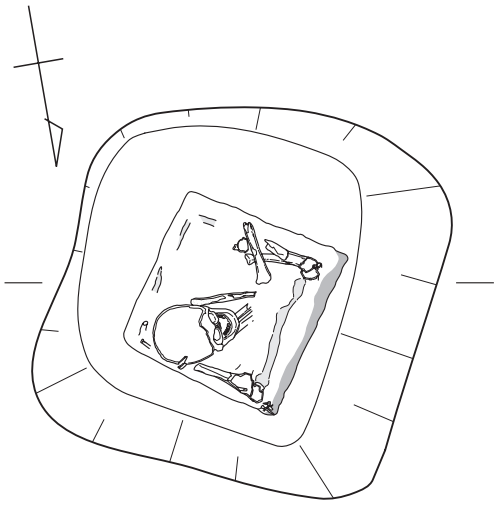
1 ｂ区北西隅に位置する。北側は現代の撹乱によって切られる。底面北西部がやや内側に屈曲することから、墓壙はほぼ方形だったと考えられる。東西軸から一辺約 0.9 mを測るものであろう。底部から出土した人骨は熟年男性で、その状況から北北東を向く座葬であったと考えられる。副葬品はないが、埋土上層から肥前系磁器碗（76）が出土している。

なお、34 墓は 33 墓に大半を切られ、わずかに東辺が残るのみであった。

45 墓（図 104、図版 36-4、37-2）

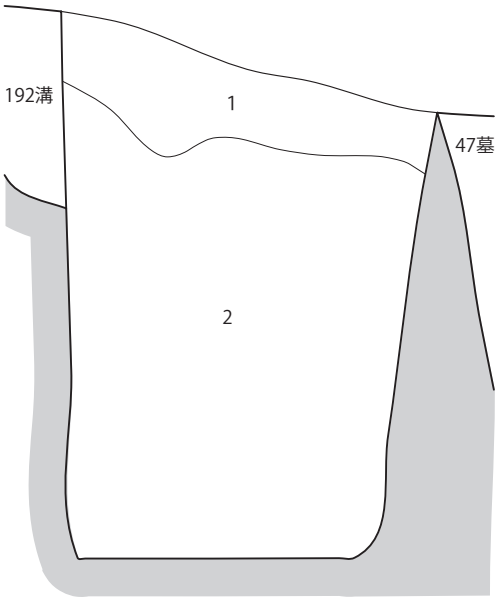
1 ｂ区北西隅、33 墓の 0.5 m南東に位置する。上面は 0.95 ～ 1.05 mを測り、やや楕円形状を呈すが、底面では約 0.65 mの円形。墓壙中央、底部より 0.2 mほど浮いたところから、長径 0.25 mの角礫が出土した。さらにその下、底部北壁側に人骨がかたまっていた。人骨は熟年女性で、出土状況から北北西向きの座葬と考えられる。

角礫下から箱の留金具と考えられる鉄製品（78）、簪の頭飾部（77）が出土した。



20.00m

43墓

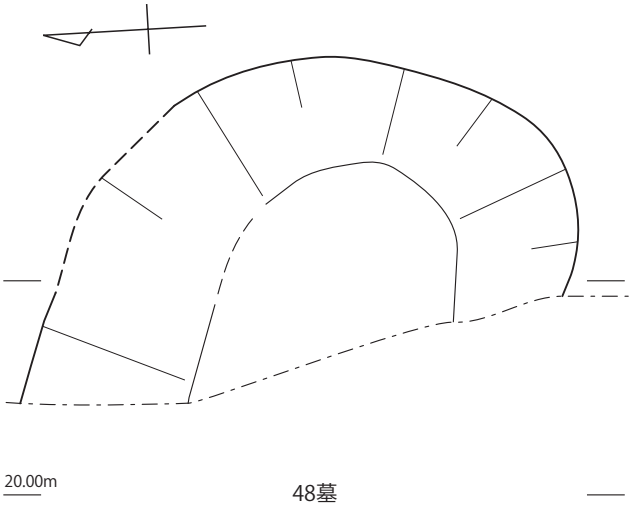


1　明褐色7.5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

2　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

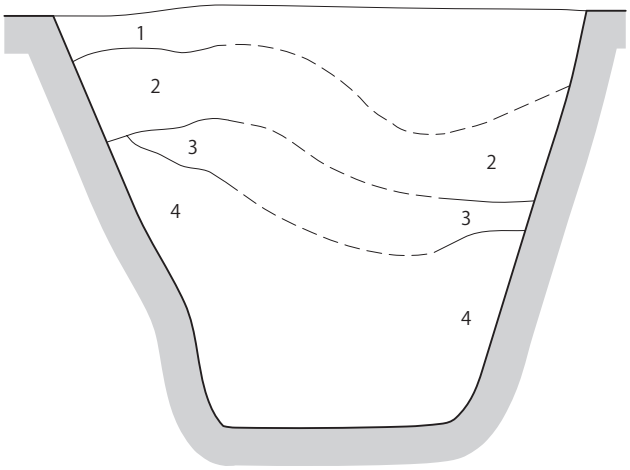
0　(1:20)　50cm

0　(1:2)　5cm



20.00m

48墓



1　にぶい赤褐色5YR5/4砂質シルト（基盤ブロックを含む）

2　にぶい赤褐色5YR4/4砂質シルト（基盤ブロックを含む）

3　褐色7.5YR4/6砂質シルト
（基盤ブロックを含む、しまり悪い）

4　にぶい赤褐色2.5YR4/4シルト
（基盤ブロックを含む、しまり悪い）

0　(1:20)　50cm

図 103　43・48 墓および 43 墓出土遺物

6 墓（図 105）

1 b区北側に位置する。底部の平面形をみると隅丸方形を呈しているようだが、各辺が上面と対応しない。また南東側はテラス部が設けられるため、その平面形がやや不定となる。明確ではないが、もともとは径 1.1 mほどの円形であったと判断した。検出面からの深さが約 1.6 mと非常に深いタイプである。底部中央から遺存状態のよい壮年男性の人骨が出土した。その状況から北東向きの座葬と考えられる。副葬品等は出土していない。

40 墓（図 105、図版 36-4）

1 b区北側、6 墓の南西に位置する。1.0 ～ 1.1 mとやや不定な円形を呈す。底部北側から壮年男性の人骨がまとまって出土した。膝は立てておらず、床面近くから出土していることから、北を向き正座位で埋葬されたと考えられる。人骨の間から小型の玉（79）が出土している。数珠玉であろうか。

42 墓（図 106、図版 38-1・2）

1 b区西側隅に位置する。径 0.9 mほどの円形墓壙である。底部から人骨が出土しているが、遺存状況はよくない。男性？で壮～熟年とされる。大腿骨が立って出土している位置からみて、北北東向きの座葬であったと考えられる。副葬品が底部西隅から鎌柄部（81）、椎骨周辺から鋏、毛抜、木製櫛が接着したもの（80）が出土している。後者は頭佗袋に入れられたため錆により固着したのであろう。

29 墓（図 107、図版 38-3）

1 b・c区にまたがって位置する。径 1.1 mほどを測るほぼ円形の墓壙である。検出面からの深さは約 1.7 mと非常に深い。底部南側から熟～老年男性の上、下顎骨が出土した。また、片方の刃部が欠損した鋏（82）、留金具（83）が出土している。

22 墓（図 108、図版 44-6）

1 c区北側に位置し、上部は現代の墓でやや撹乱を受ける。底面の形状から北東－南西を長軸とする長方形を呈す。検出面で長軸 0.95 m、短軸 0.8 mほどを測る。人骨はなく、埋土上層から肥前系陶器皿片（84）が出土している。

32 墓（図 108、図版 38-4・5）

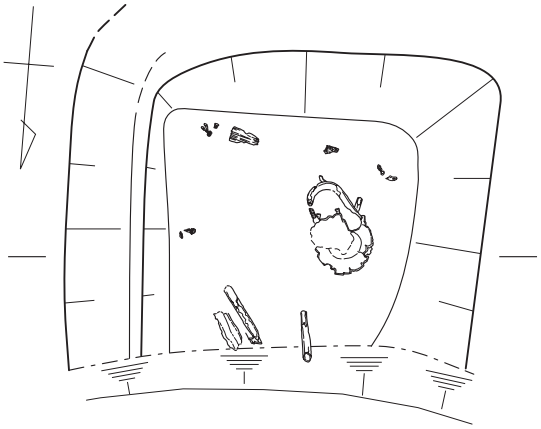
1 c区、22 墓に南東で接する。0.9 ～ 0.95 mを測るほぼ方形の墓壙で、底面より遺存状態の悪い熟～老年の男性と考えられる人骨が出土している。埋葬体位は不明。底部中央からはまとまって 5 点の寛永通寶（85 ～ 87）が出土した。うち 87 は 3 点が接着したもので、床面近くにある。出土状況から棺底部あるいは墓壙底面上に置かれた可能性も考えられる。

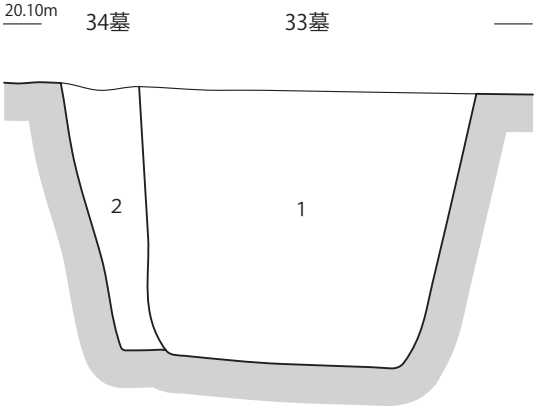
35・39 墓（図 109）

1 c区中央付近に位置する。

35 墓は長径 0.9 m、短径 0.8 mを測るほぼ円形の墓壙で、検出した深さは 1.3 mほどであった。ただし上部が現代の墓により撹乱されていたこと、および同墓が切る 39 墓の掘り込み面がさらに 0.25 mほども高いことから、もとはさらに深い掘方であったと考えられる。埋土内には拳大ほどの角礫がいくつか含まれていたが、出土状況にまとまりもなく層位も異なることから、標石が落ち込んできたものではなく、埋め戻す際の混入と判断している。人骨などは出土していない。

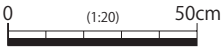
この墓の西側にあり、切られる 39 墓は全体の形状がわからない。検出面からの掘り込みも 0.9 mと浅い。

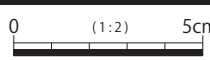


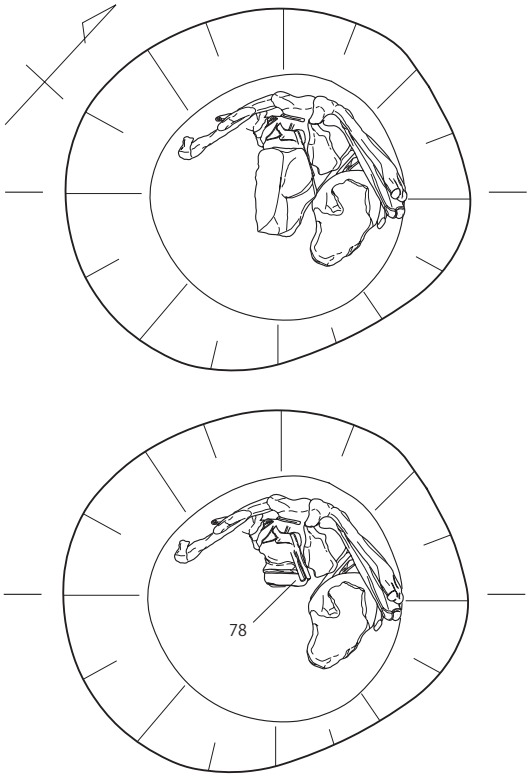


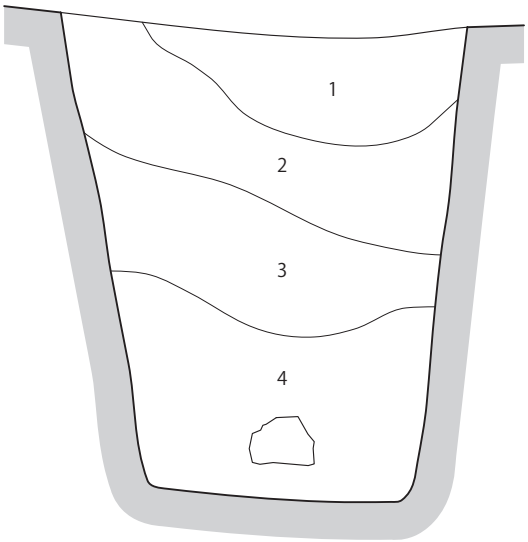
1　黄褐色10YR5/6～8シルト
　　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

2　明赤褐色5YR5/6シルト
　　(基盤ブロック・黄褐色土ブロックを含む、しまり悪い)









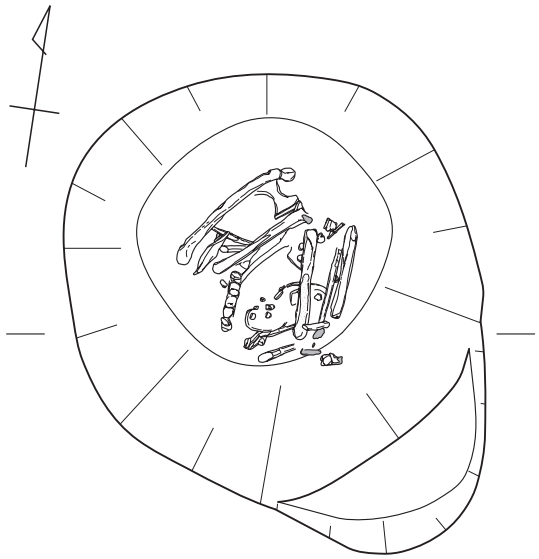
1　明褐色7.5YR5/6シルト
　（基盤ブロックを含む、しまり悪い、墓壙陥没穴堆積）

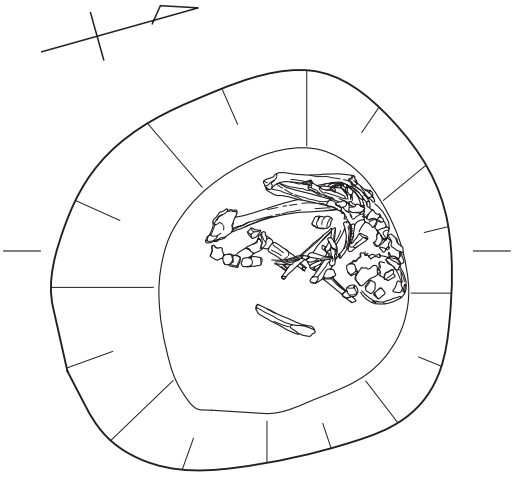
2　明赤褐色5YR5/6シルト
　（基盤ブロック・黄褐色シルトブロックを含む、しまり悪い）

3　にぶい赤褐色5YR4/4砂質シルト
　（基盤ブロック・黄褐色シルトブロックを含む、しまり悪い）

4　赤褐色5YR4/6シルト
　（基盤ブロックを含む、しまり悪い）

図 104　33・34・45 墓および出土遺物



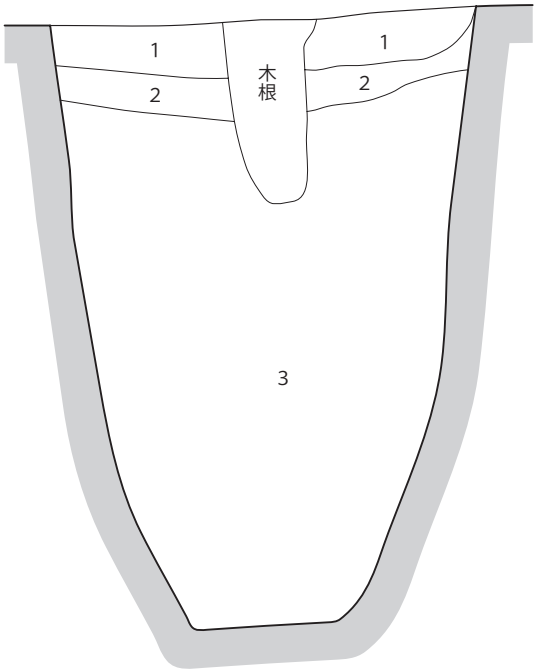


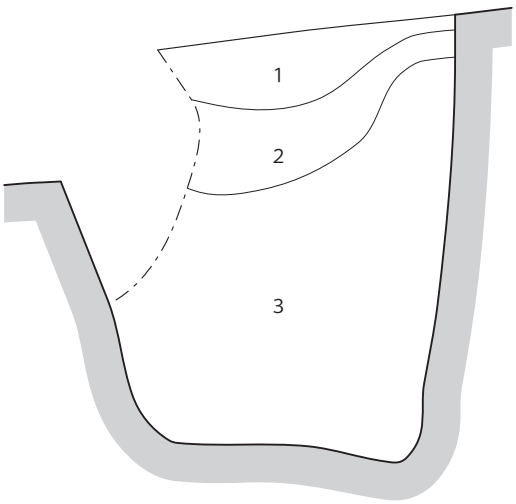
20.00m

40墓

20.00m

6墓





1　褐色7.5YR4/6シルト
（基盤ブロックを含む、墓壙陥没穴堆積）
2　赤褐色5YR4/6シルト
（基盤ブロックを含む）
3　明赤褐色5YR5/6シルト
（基盤ブロックを含む、しまり悪い）

0　(1:20)　50cm

1　赤褐色2.5YR4/6シルト(基盤ブロックを含む)
2　明褐色7.5YR5/6シルト(基盤ブロックを含む)
3　明赤褐色2.5YR5/6砂質シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm

79

0　(1:1)　2cm

図 105　6・40 墓および 40 墓出土遺物

38 墓（図 109、図版 39-3・4）

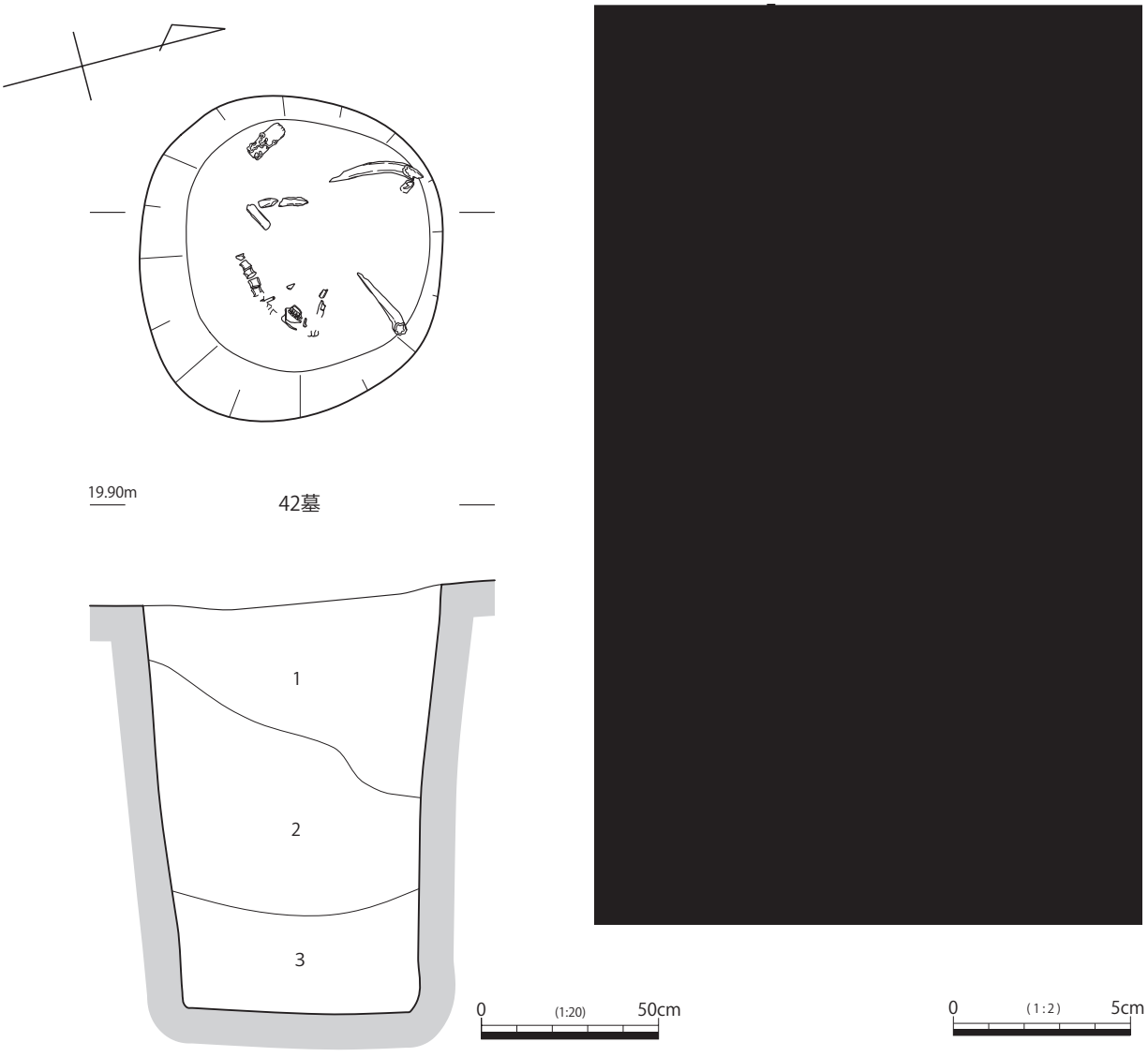
1 c 区、35・39 墓に南接する。撹乱によってその掘方形状は不明であるが、墓壙内西側から越前焼甕が出土した。中から人骨は出土していないが、おそらく甕棺として埋納されたものと考えられる。甕は木村孝一郎によるⅦ－２期（18 世紀前半）に相当するであろう。

21 墓（図 110）

1 c 区中央に位置し、190 墓に切られる。径 1.05 mほどの方形を呈する墓壙で、検出面からの深さ約 1.4 m。底部中央近くから長径 0.5 mほどの角礫が出土している。人骨などはない。

190 墓（図 110・111、図版 39-1・2）

1 c 区に位置し、北西角が墓 21 を切る。径 1.15 mほどの方形墓壙で、検出面からの深さは 2.15



1　にぶい赤褐色2.5YR4/4シルト
　　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
2　明褐色7.5YR5/6シルト
　　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
3　明赤褐色5YR5/6シルト
　　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

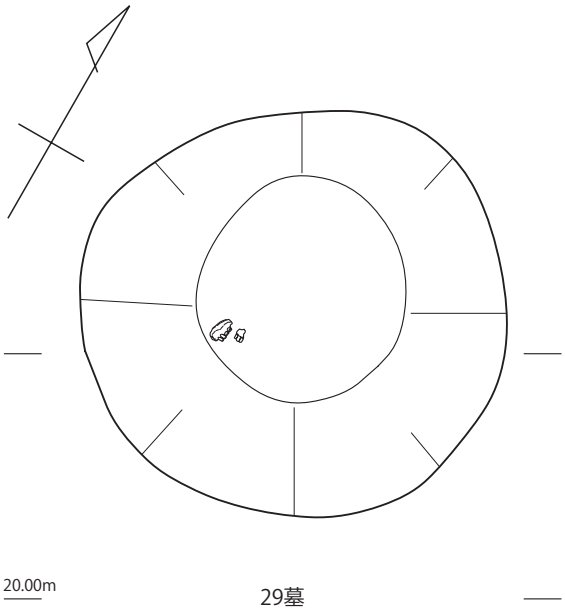
図 106　42 墓および出土遺物

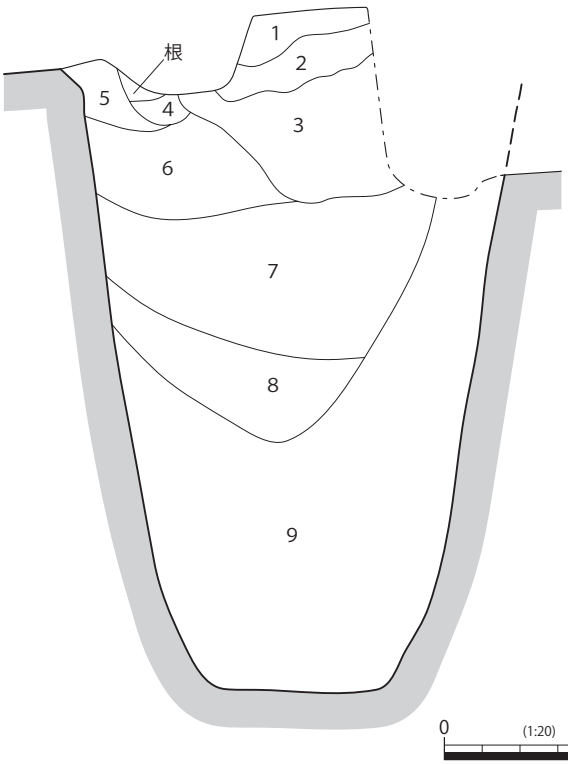
mと今回検出した墓の中でもっとも深い。底部北側から壮年で性別不詳の人骨が出土した。骨の遺存状況は悪く、埋葬体位も不明である。

また肥前系青磁皿（89）が墓壙内､頭蓋骨には寛永通寶（91 ～ 93）と木製櫛が接着して出土した。さらに墓壙検出面近くでは陶胎染付碗（90）も出土しているが、直接本墓壙に伴うものかは不明である。

41 墓（図 112、図版 38-6・7）

1 b区東側に位置する。東西 1.0 m、南北 0.9 mとやや長方形状を呈する墓壙。底部中央から老年男性の人骨があり、その出土状況から南西に向いた座葬であったと考えられる。人骨周辺には灰白色





1　暗褐色7.5YR3/4シルト
2　褐色7.5YR4/4砂質シルト(基盤ブロックを含む)
3　明赤褐色5YR5/6シルト
　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
4　褐色7.5YR4/6砂質シルト
5　にぶい赤褐色5YR4/4シルト(基盤ブロックを含む)
6　赤褐色5YR4/6シルト(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
7　明赤褐色5YR5/6シルト
　(基盤ブロック、黄褐色シルトブロックを含む、しまり悪い)
8　赤褐色5YR4/6シルト
　(基盤ブロック、黄褐色シルトブロックを含む、しまり悪い)
9　明赤褐色2.5YR5/6シルト
　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

図 107　29 墓および出土遺物

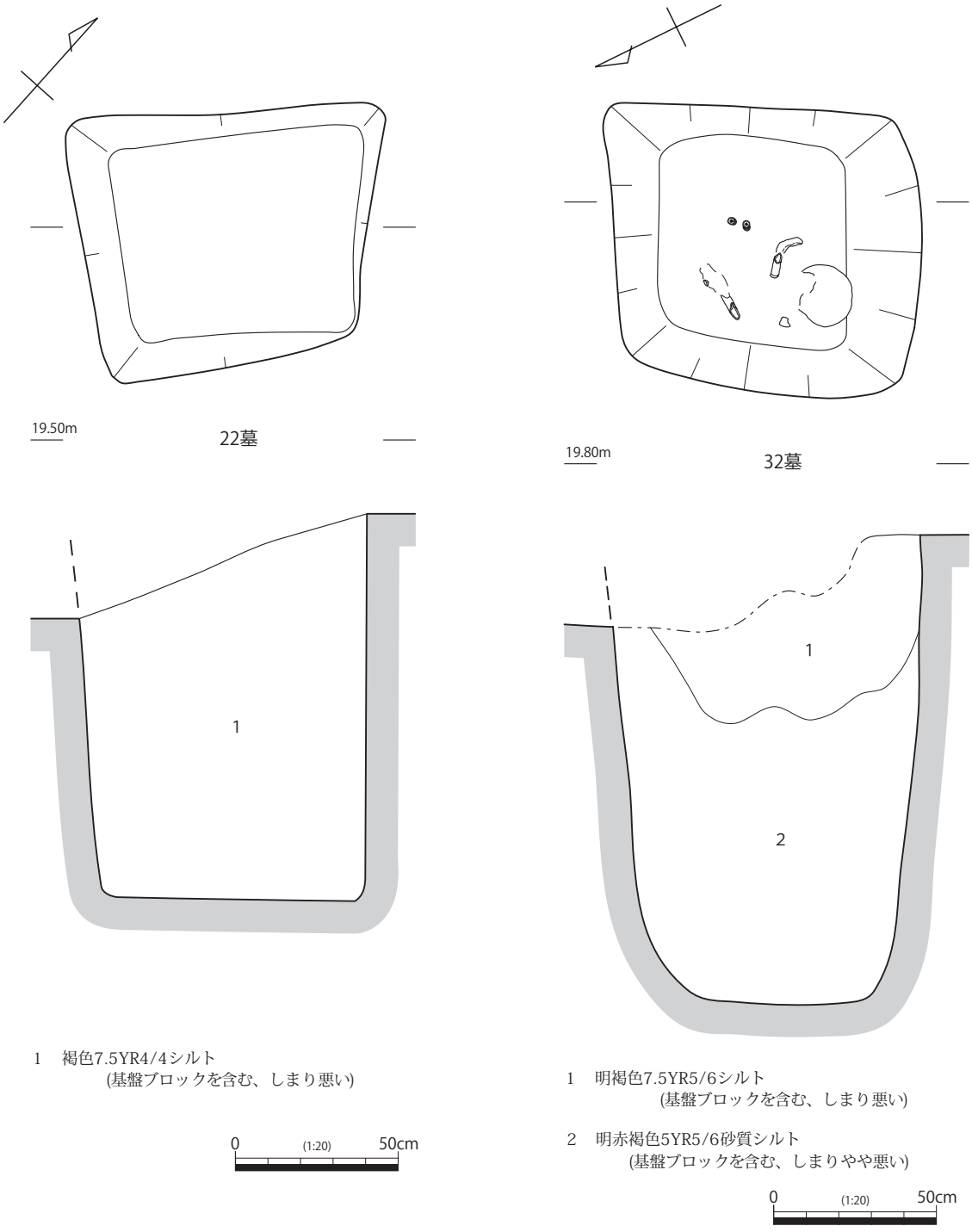
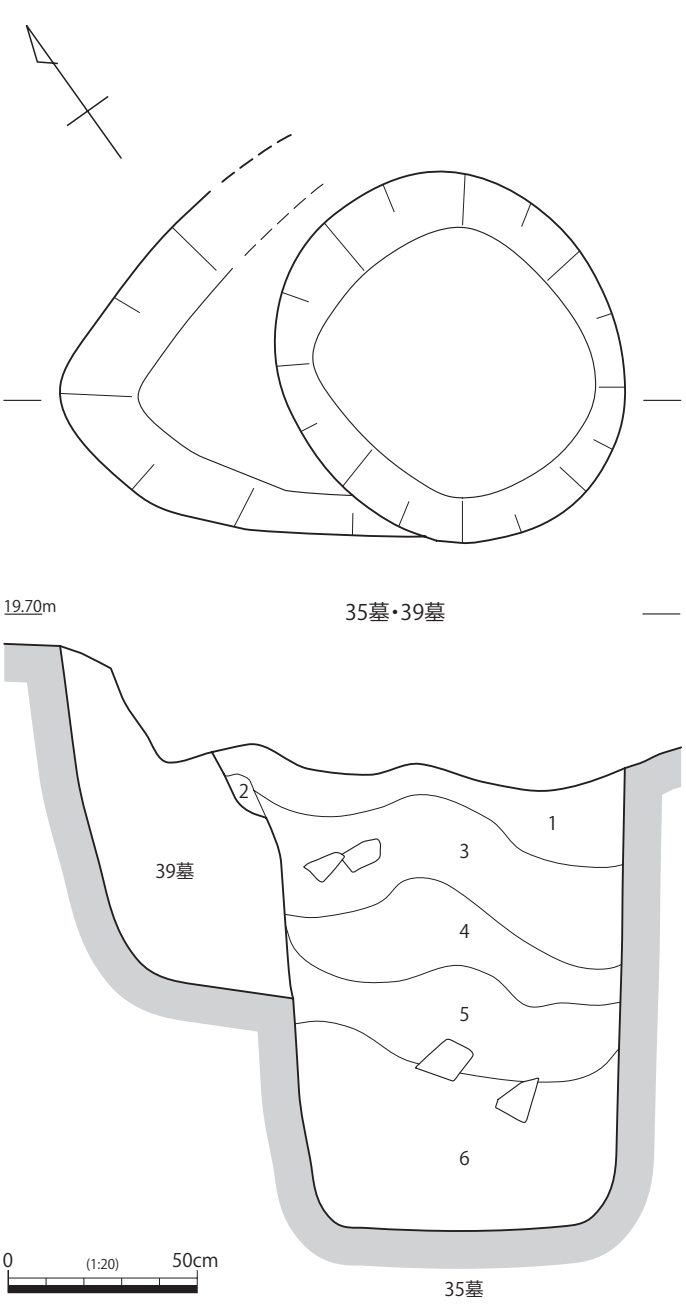
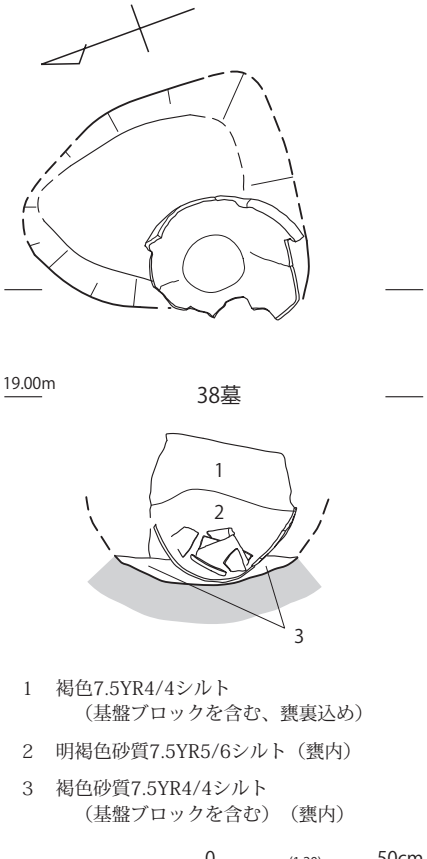


図 108　22・32 墓および出土遺物

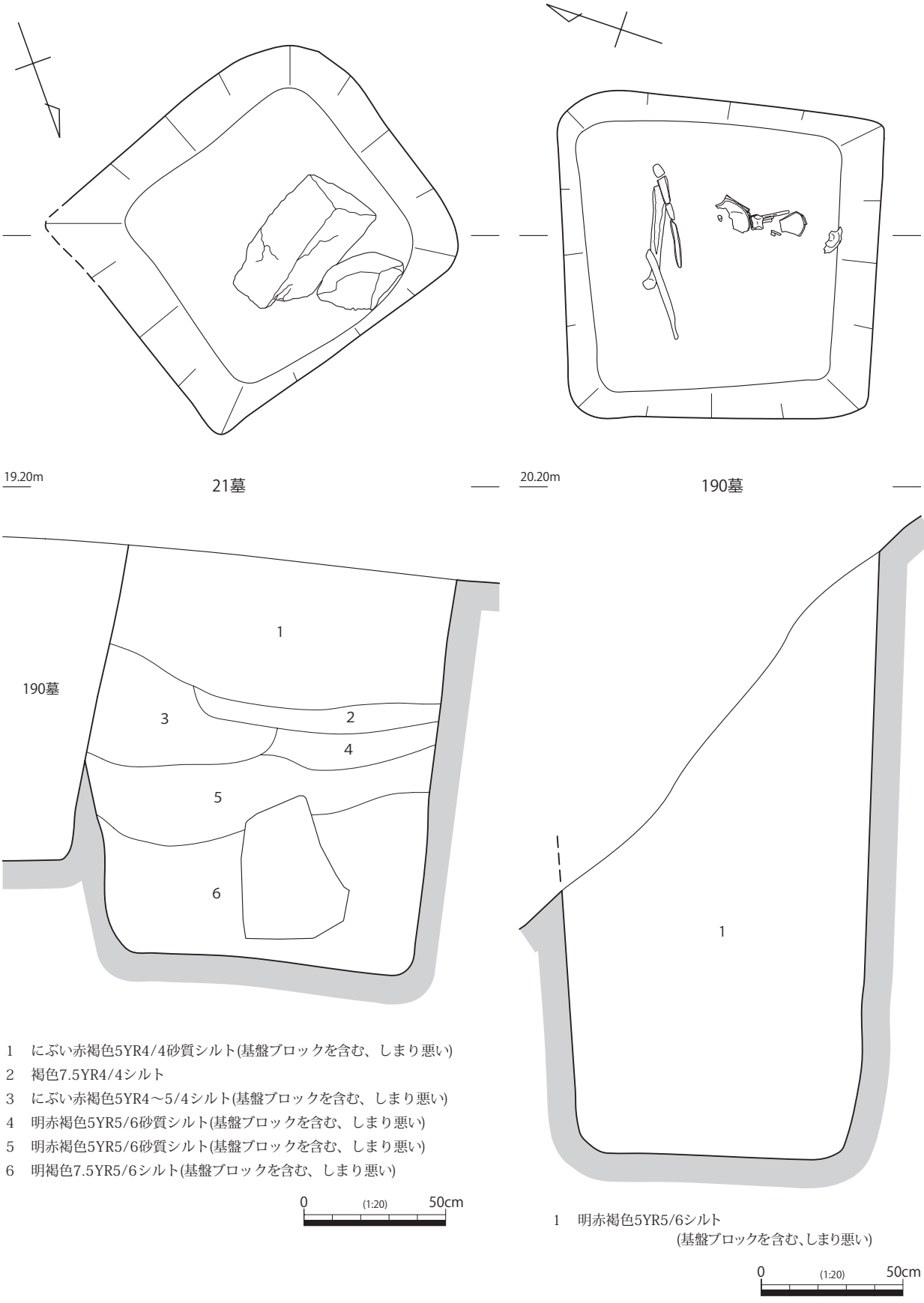


1　にぶい赤褐5YR4/4色シルト（基盤ブロックを含む、しまり悪い）
2　褐色7.5YR4/4シルト
3　赤褐色5YR4/6シルト（基盤ブロックを含む、しまり悪い）
4　赤褐色2.5YR4/6シルト（基盤ブロックを含む、しまり悪い）
5　明赤褐色5YR5/6シルト
　　（基盤ブロック・黄褐色土ブロックを含む、しまり悪い）
6　褐色7.5YR4/6砂質シルト（基盤ブロックを含む、しまり悪い）



1　褐色7.5YR4/4シルト
　　（基盤ブロックを含む、褒裏込め）
2　明褐色砂質7.5YR5/6シルト（褒内）
3　褐色砂質7.5YR4/4シルト
　　（基盤ブロックを含む）（褒内）

図 109　35・38・39 墓および 38 墓出土遺物



1　にぶい赤褐色5YR4/4砂質シルト(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
2　褐色7.5YR4/4シルト
3　にぶい赤褐色5YR4～5/4シルト(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
4　明赤褐色5YR5/6砂質シルト(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
5　明赤褐色5YR5/6砂質シルト(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
6　明褐色7.5YR5/6シルト(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

1　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

図 110　21・190 墓

図 111　190 墓出土遺物

の土壌があり、分析により稲藁と判明した。また墓壙内上層からは肥前系陶器碗（94）が出土した。

114 墓（図 112、図版 38-7）

1 a・b 区にまたがって検出した。径 0.95 mを測る方形の墓壙である。深さは 1.15 mほどで、底部では人骨が散在的に出土した。年齢性別、埋葬体位ともに不明である。なお、底部南側からは銭貨が合計３点出土している。１点は布目（95）が付着しており、２点が接着（96）しているものは和紙が付いていたことから、それでくるまれていたのであろう。これら銭貨のすぐ北側には毛髪状のものがみられる。そのため、銭貨は頭部近くにあったことが想定され、和紙でくるんだ銭貨を布に入れ、首から提げていた可能性が考えられよう。

15 墓（図 113、図版 40-4・5）

1 b区のほぼ中央に位置し、南東隅を 10 墓に切られる。径 1.1 mほどの円形を呈す。深さは 1.45 mで、底部からまとまって人骨が出土した。人骨は壮年女性のもので、顔を北へ向けた座葬であったと考えられる。毛抜（97）が右尺骨近くから出土している。

10 墓（図 113・114、図版 40-1・2）

1 b区に位置し、北東隅で 15 墓を切り、東側は５墓、南西隅は８墓に切られる。径 1.0 mほどの方形を呈し、深さは約 1.1 mを測る。底面は南側が高く北側へ傾斜しており、その比高差は 0.1 mほどである。底面中央やや南東よりのところから壮年後半～熟年前半の男性人骨が出土した。これは顔を北西に向けた座葬であった。副葬品等には火打金、煙管、金具がある。煙管は胴部中央で螺旋式にはめ込むもので、火皿側には黒漆によってストライプを描く竹製のカバーが残る。これは火皿への立ち上りが短いことから古泉分類Ⅴ期に相当すると考える。

101 墓（図 115、図版 40-6・7）

1 c区南東隅の墓密集地帯の中に位置する。北側を 102 墓、南東隅には 100 墓に切られる。東西軸で約 1.0 mを測るが、底面の形状からやや東西の長い長方形を呈すると考えられる。深さは 1.15 mほどを測る。人骨は底面中央からまとまって出土しているが、座葬の老年男性とともに生後数ヶ月

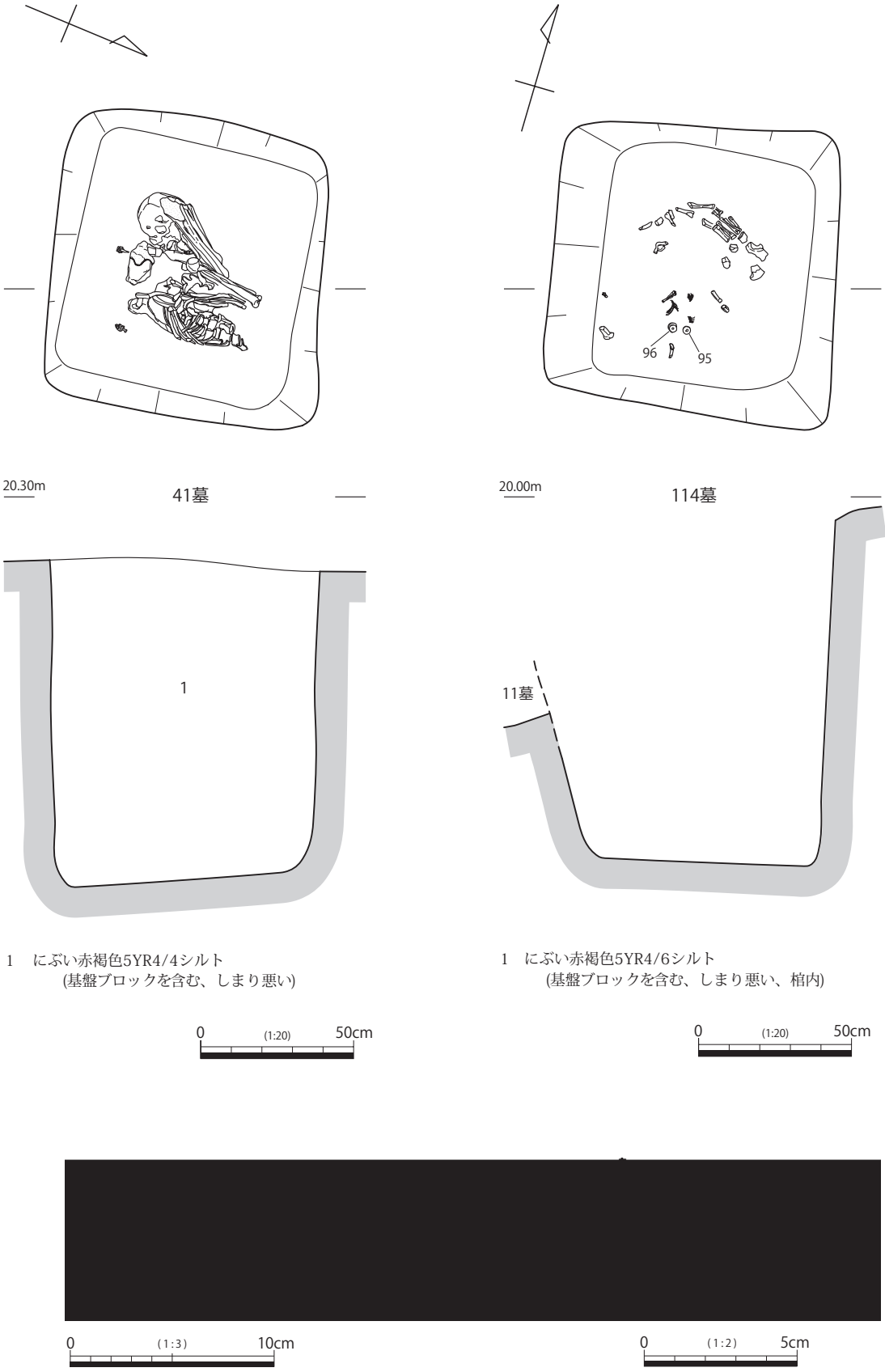
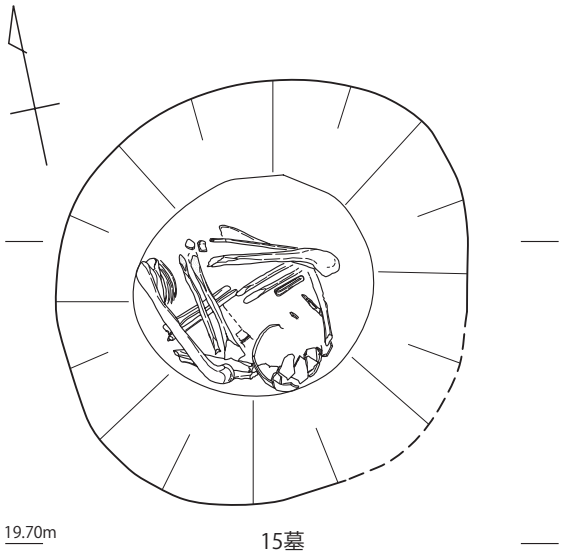
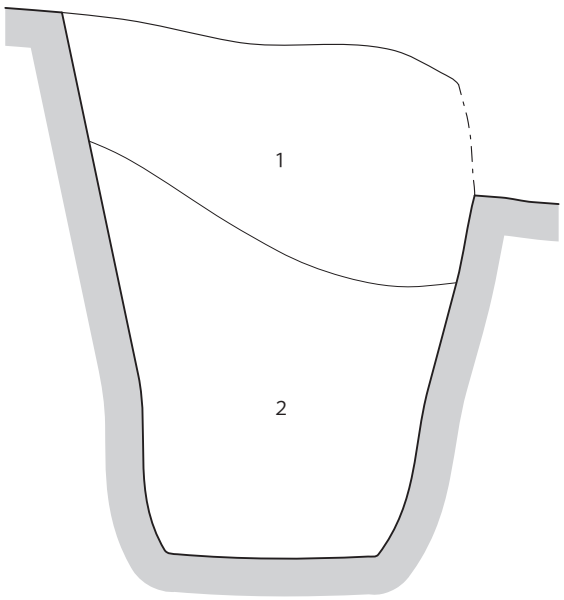
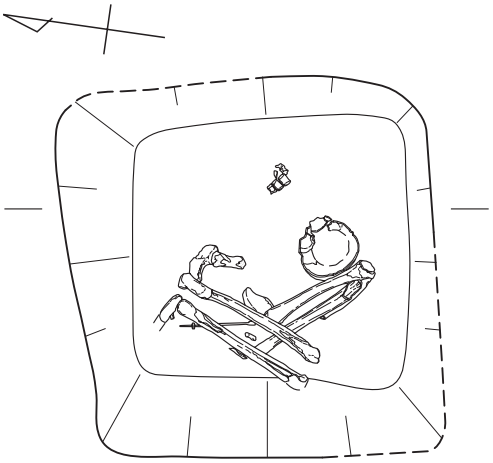


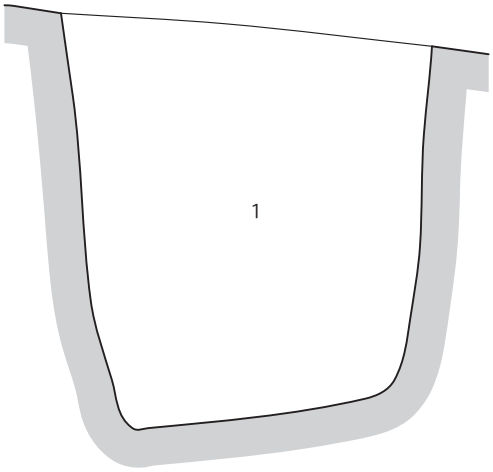
図 112　41・114 墓および出土遺物

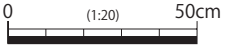




1　暗赤褐色5YR3/4砂質シルト
　　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
2　赤褐色5YR4/6砂質シルト
　　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)







1　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
　　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

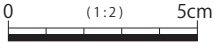


図 113　10・15 墓および 15 墓出土遺物

図 114　10 墓出土遺物

の乳児の骨も検出されている。人骨の西脇から煙管、ガラス瓶、銭貨（新寛永通寶）、幼児を刻んだ青銅製品などがまとまって出土した。ここから板が付着した金具も見つかっていることから、木箱に入れて副葬されたものと思われる。煙管は火皿への立ち上りが短いことから古泉分類Ⅴ期に相当する。

181 墓（図 116、図版 41-3）

1 d区北東側に位置し、188 墓を切る。径約 1.0 mの方形を呈し、深さは 1.0 mほどを測る。底面中央から熟～老年の男性と考えられる人骨が出土した。北側を向く座葬であろうか。南側の椎骨辺りから灰状の土壌をまとまって検出したが、187 墓などと同様、棺内に納めた稲藁と考えられる。頭蓋骨除去後、その下から鋏（110）が出土した。また整理作業により、これと異なる軸部が見つかったが、その形状から鋏の柄と考えられる。混入したものか。

188 墓（図 116）

1 d区北東側に位置し、北は 186 墓、南は 181 墓に切られる。径 0.7 mほど、深さ 0.7 mと小型の墓壙で、底面南隅から成人の頭蓋骨のみが出土した。年齢、性別、埋葬体位等不明である。

140 墓（図 116）

1 d区中央やや北よりに位置する。径 0.8 mほどの円形を呈し、深さ 1.3 mを測る。人骨などは検出していない。

54 墓（図 117）

1 d区北東隅に位置する。径約 1.0 mの方形を呈し、深さは 1.4 mほどを測る。底面中央から遺存状況の比較的よい人骨が出土した。北を向く座葬の、壮年女性と考えられる。釘が人骨周囲からほぼ方形に分布しており、概ね径 0.5 mほどの棺に遺体は納められていたと思われる。

193 墓（図 117）

1 d区中央やや北に位置する。上面は径 1 mほどの不正な楕円形を呈すが、底面は径 0.6 mの隅丸方形状となるため、墓壙形態は方形であった可能性も考えられる。底面北寄りに人骨片が出土してい

るが、性別不詳、熟～老年の下顎骨と小児の頭蓋骨であった。

75 墓（図 118）

1 d区中央やや東に位置し、東側を 105 墓に切られ、西側では 106 墓を切る。径 0.9 mほどの方形で、深さは 0.9 mほどであったと考えられる。底面中央やや南西よりに遺存状態のよい人骨を検出した。壮年女性で顔を北に向けた座葬と考えられる。

106 墓（図 118）

1 d区中央やや東に位置し、東側を 75 墓、西側は 76 墓に切られる。径 1.0 mほどの方形で、深さ約 1.2 mを測る。底面中央からは埋葬体位不明の壮年女性人骨が出土した。

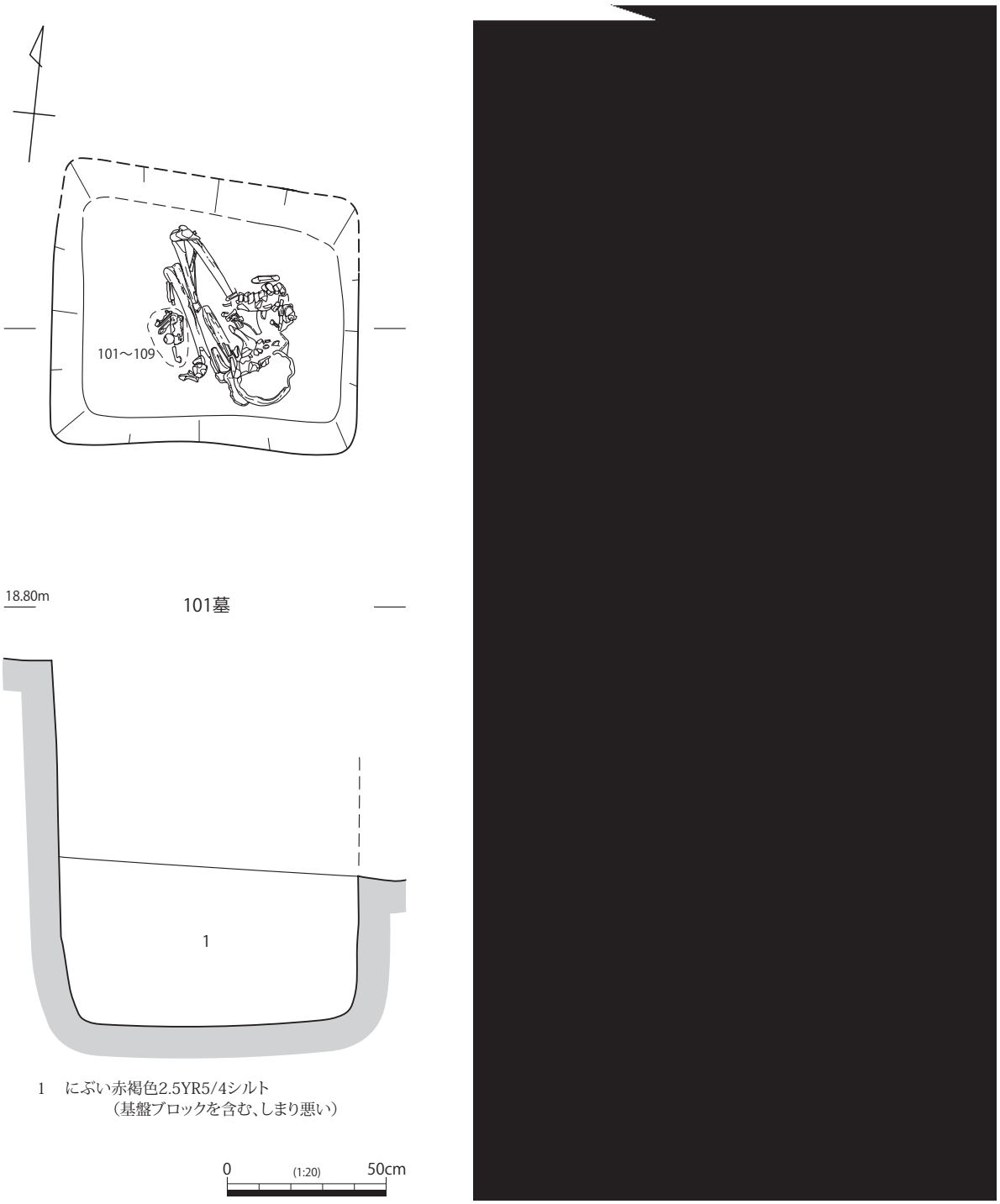
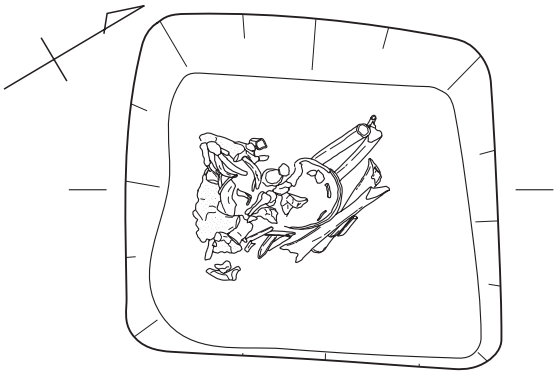
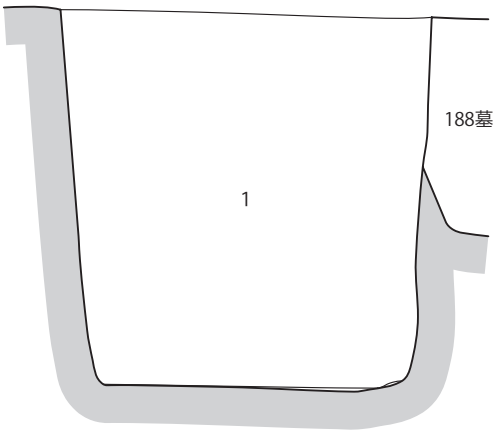


図 115　101 墓および出土遺物

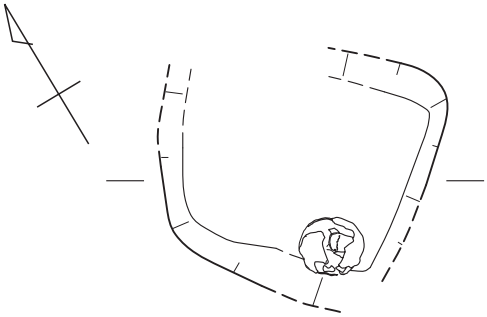


16.30m　181墓

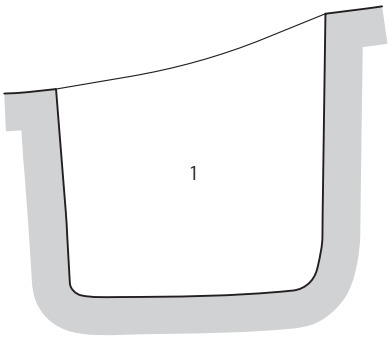


1　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
(基盤ブロックを含む)

0　(1:20)　50cm

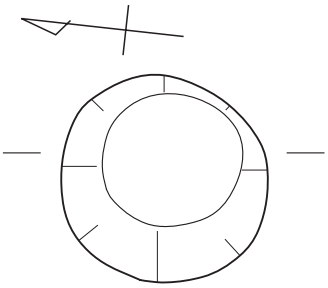


16.40m　188墓

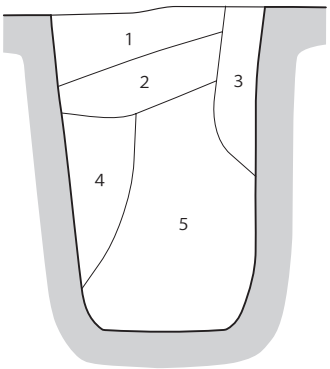


1　赤褐色5YR4/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm



15.70m　140墓



1　明赤褐色2.5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む)
2　赤褐色5YR4/6シルト
(基盤ブロックを含む)
3　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む)
4　にぶい赤褐色2.5YR4/4シルト
(基盤ブロックを含む)
5　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロック・赤褐色シルトブロックを含む)

0　(1:30)　1m

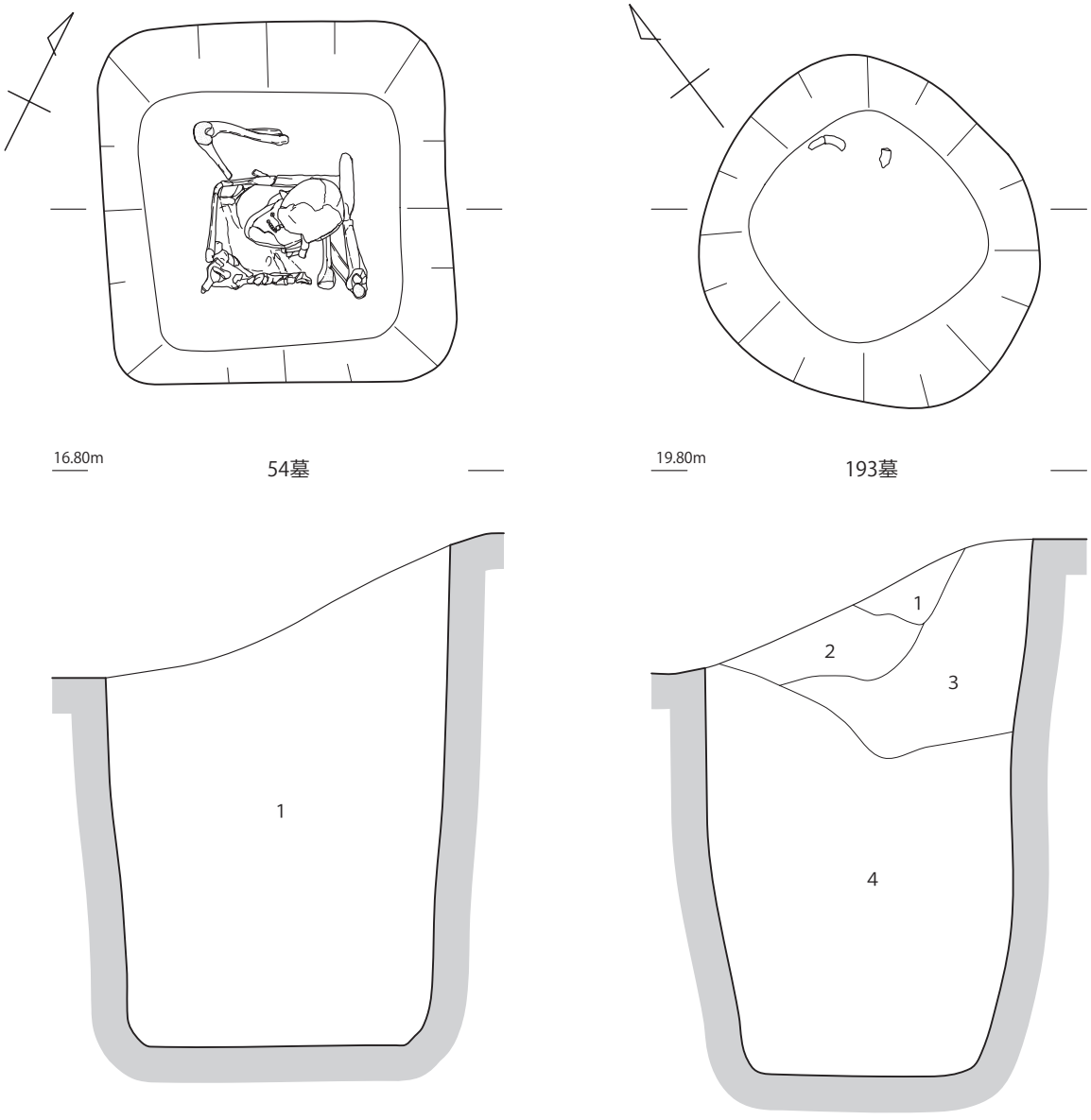
図 116　140・181・188 墓および 181 墓出土遺物

76 墓（図 119）

1 d区中央やや東に位置し、東側で 106 墓を切る。墓壙上面は南北 1.1 m、東西 0.9 mのやや長方形を呈するが、深さ約 1.0 mを測る。底面中央からまとまって人骨を検出した。壮年女性で西を向いた座葬と考えられる。頭蓋骨上から簪（112）が出土している。装着したまま葬られたのであろうか。

105 墓（図 119、図版 41-1・2）

1 d区中央やや東に位置し、西側の 75 墓を切る。径 1.1 mほどの方形を呈し、深さ約 1.5 mを測る。



1　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

1　赤褐色5YR4/6シルト
(基盤・褐色シルトブロックを含む、しまり悪い)

2　にぶい赤褐色5YR5/4シルト
(基盤ブロック、褐色シルトブロックを含む、しまり悪い)

3　褐色10YR4/6シルト(基盤ブロックを含む)

4　にぶい赤褐色5YR5/4シルト
(基盤ブロック、褐色シルトブロックを含む、しまり悪い)

図 117　54・193 墓

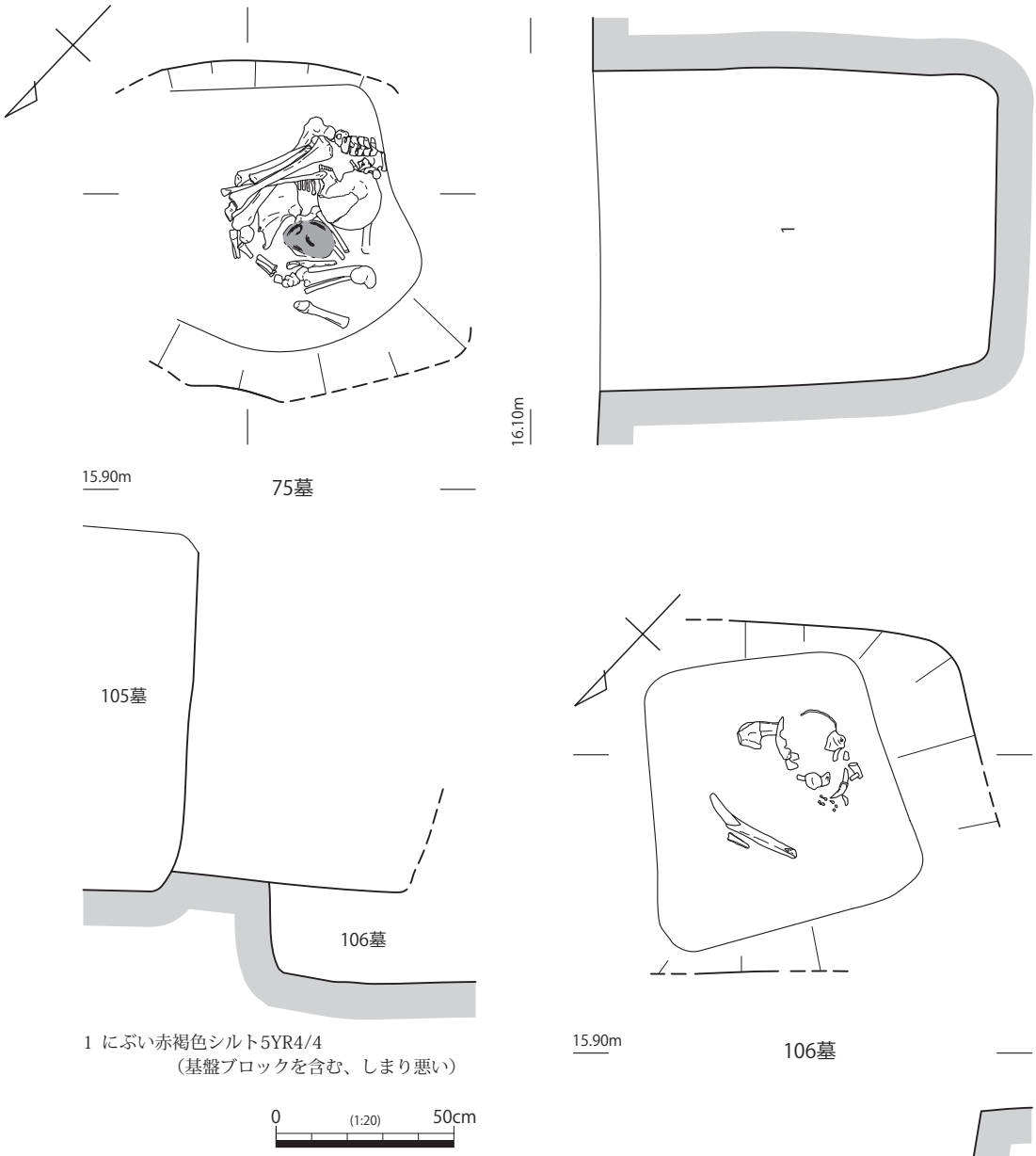


写真 9　75 墓人骨等出土状況
（北西から、左にみえるのが 105 墓、右は 106 墓）

図 118　75・106 墓

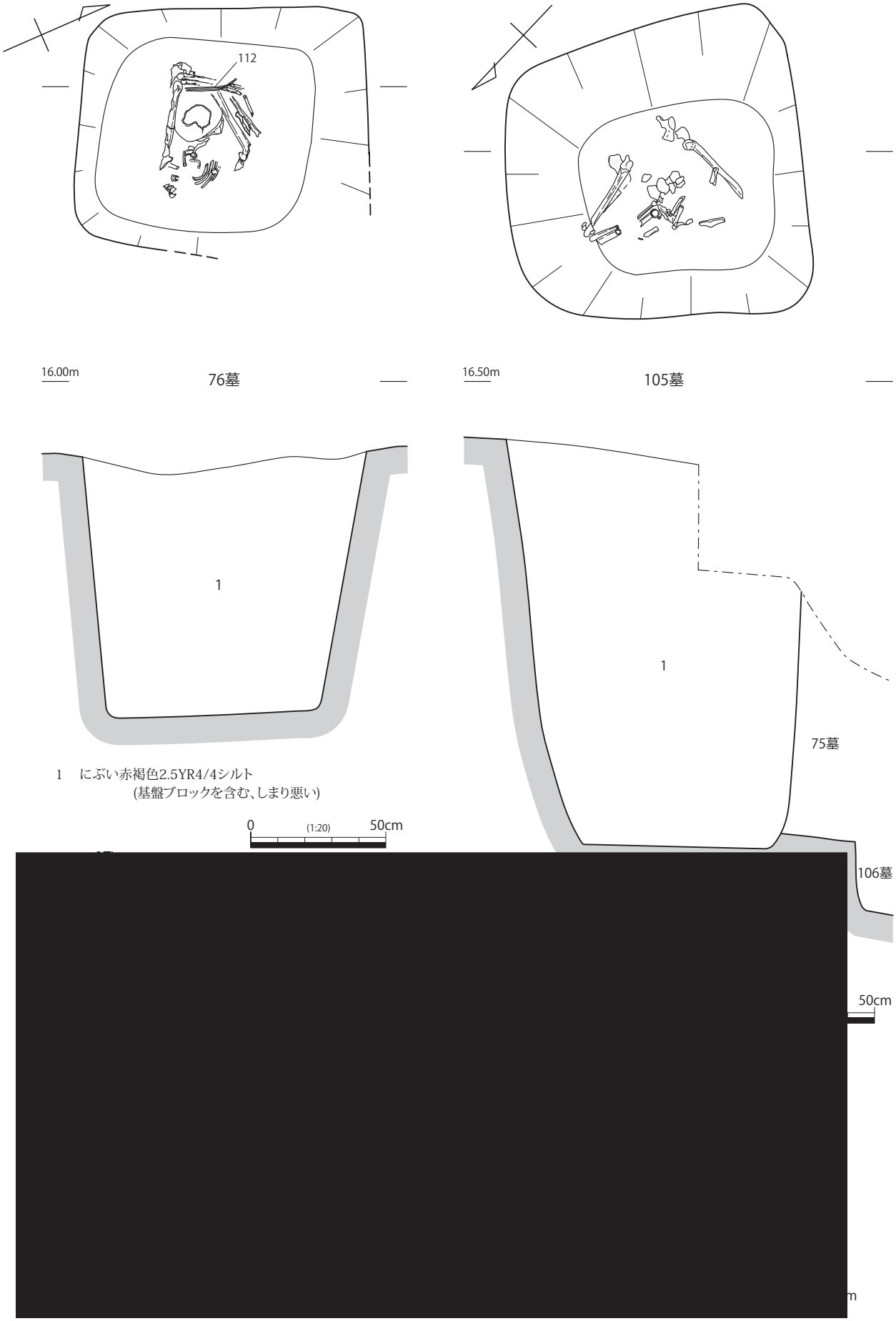


図 119　76・105 墓および出土遺物

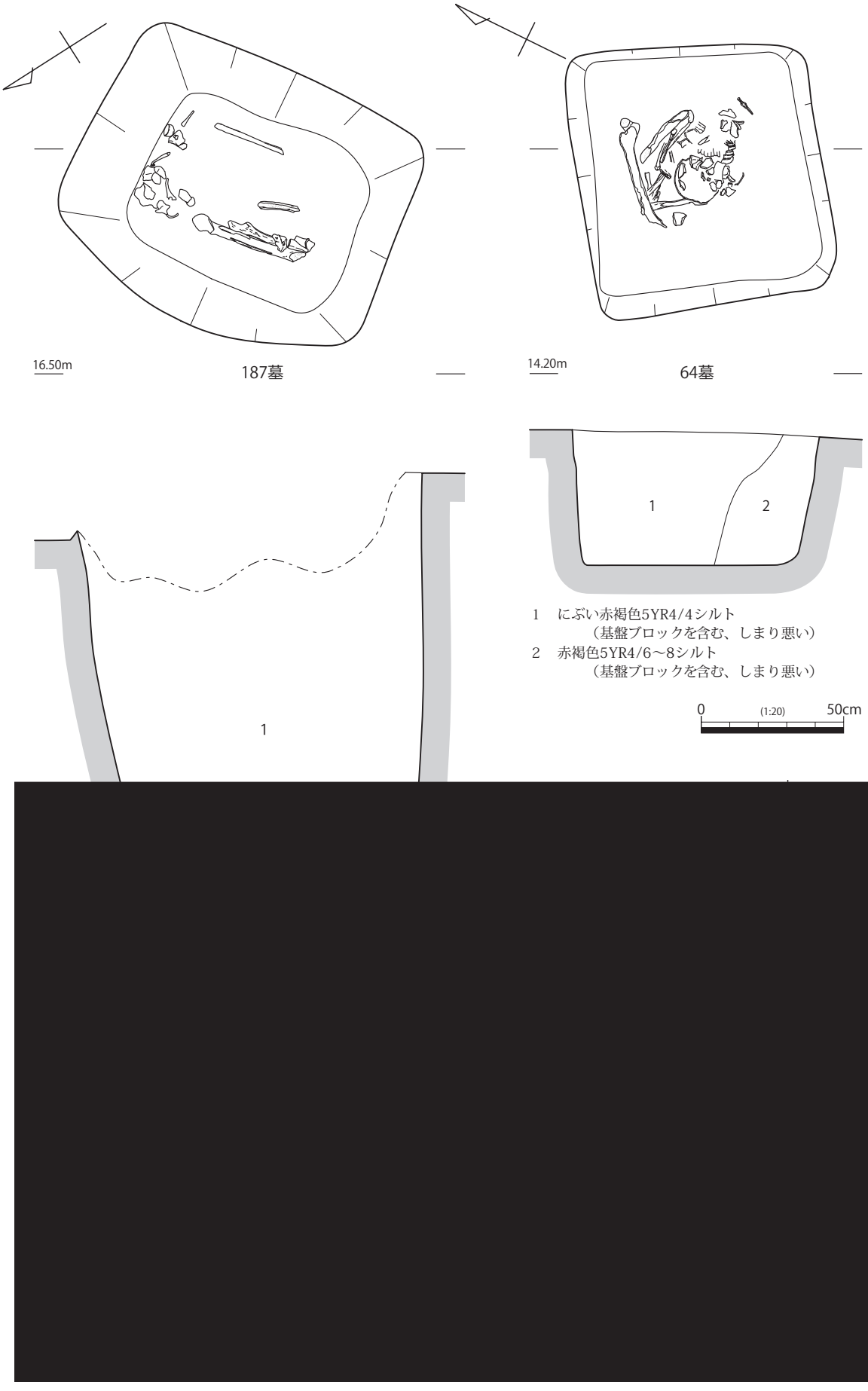


図 120　64・187 墓および出土遺物

底面からやや散在的に人骨が出土した。熟～老年の女性で、頭を北西に向けた半腹臥正座位で埋葬されたと考えられる。頭蓋骨北側で、樹皮状のものにくるまれた状態の銭貨（114）と煙管雁首（113）が出土している。また、人骨周辺に有機質の褐色土壌があり分析したところ、他の墓壙同様、稲藁を起源とするものであることがわかった。

187 墓（図 120、図版 41-6・7）

1 d区北東部に位置し、86 墓に切られる。長径 1.15 m、短径 0.9 mほどを測る長方形で、深さは 1.55 mほどになる。底面から人骨が出土したが、熟～老年男性で埋葬体位は不明であった。東側壁面近くから、青銅製品（116）、煙管（115）、火打金（117）などがまとまって出土した。またこの下には炭状の土壌が人骨下まで広がっており、分析したところ稲藁であることが判明した。

64 墓（図 120、図版 44-6）

1 d区西端でわずかに 1 e区にかかるところにある。約 0.9 mの方形を呈すが、上面は削平されていたため、深さは 0.45 mほどしか残存していない。底面中央から、顔を北西に向けた座葬の熟～老年男性が出土した。また埋土上層からは胎土目痕をもつ陶器鉢（120）が出土している。

92 墓（図 121、図版 41-4・5）

1 d区北西部に位置し、141 墓に切られる。長径 1.1 m、短径 1.0 mほどのほぼ方形を呈する。深さは 0.7 mほどを検出した。底面中央から顔を北西に向けた座葬の熟年男性を検出している。人骨西側から煙管（121）、6 枚が接着した銭貨（123）、飾金具（122）が出土している。

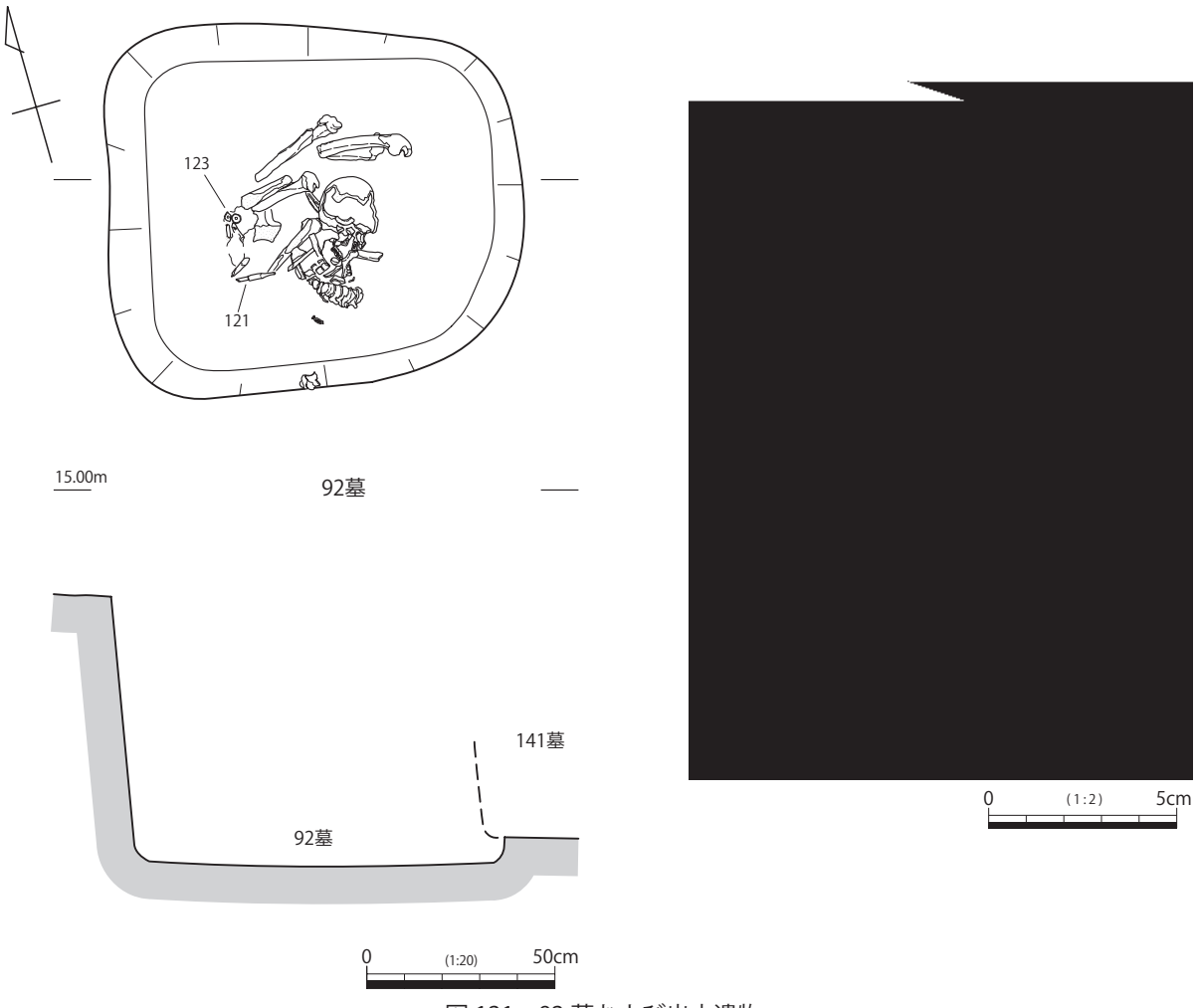
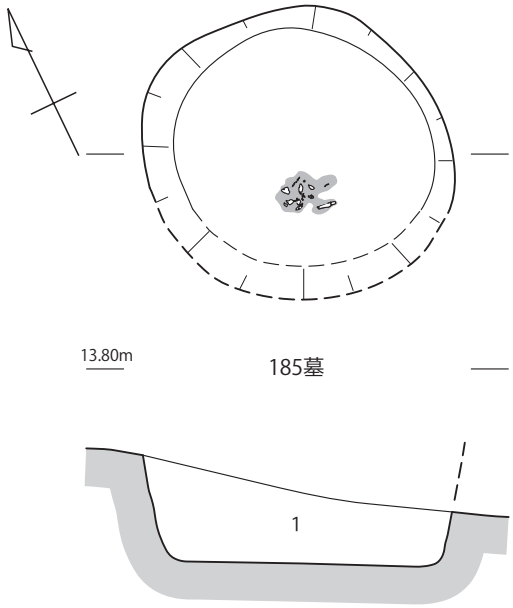
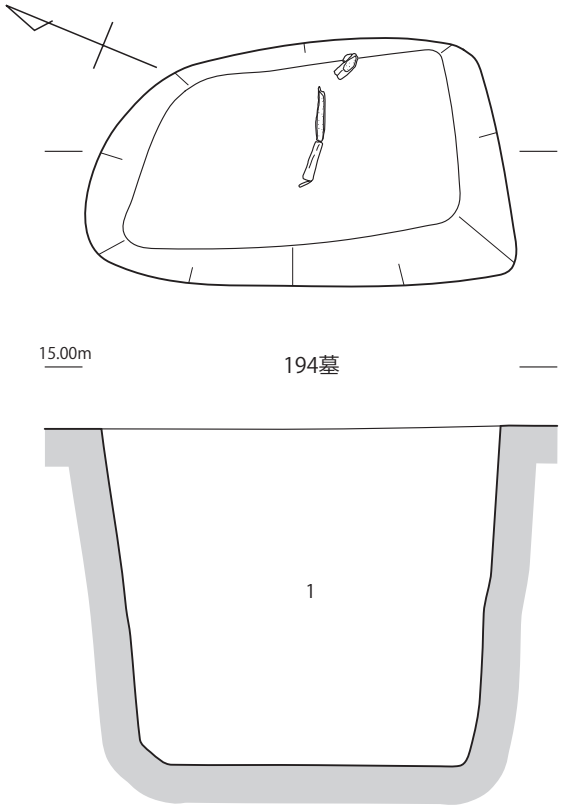
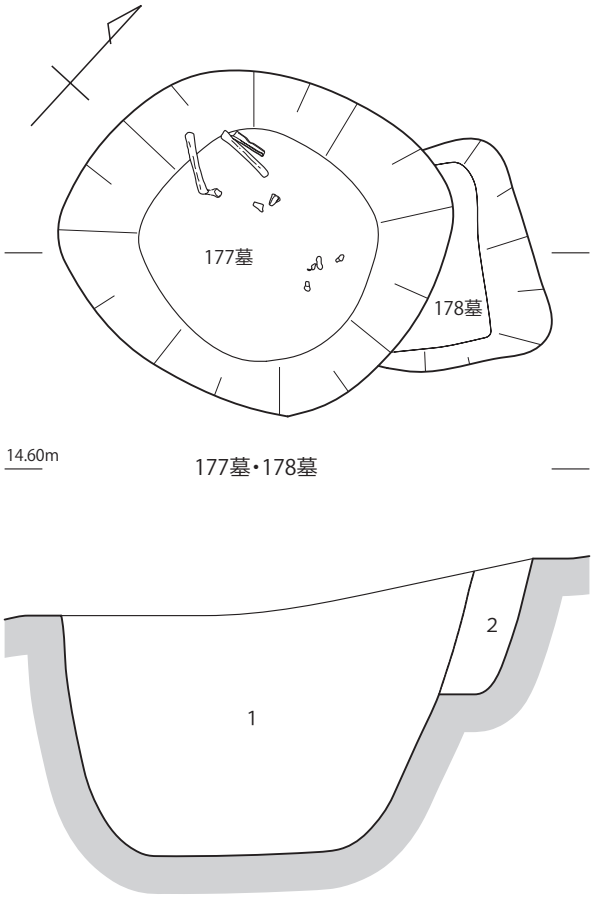


図 121　92 墓および出土遺物







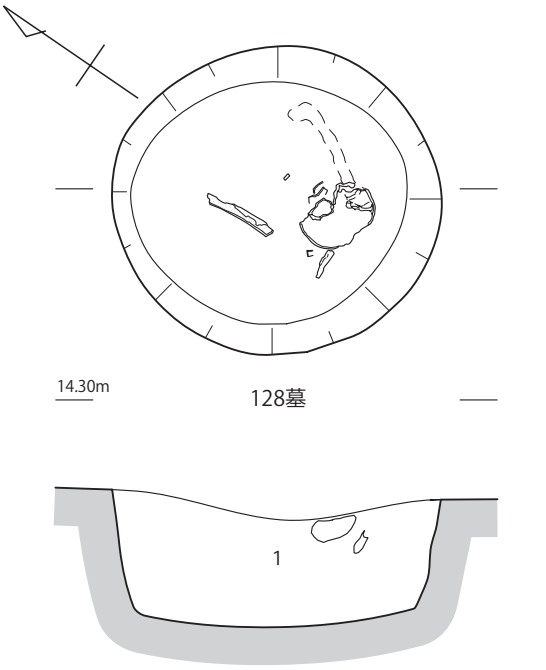


図 122　128・177・178・185・194 墓

185 墓（図 122）

２ｅ区北東部に位置する。全体に上面は削平を受けているほか、南側にある時期不明の 197 墓との切り合い関係は把握できなかった。検出上面で径 0.8 mほどの円形を呈すると思われる。底面から小児骨と考えられる人骨がわずかに出土した。

194 墓（図 122）

２ｄ区北側に位置し、226 墓を切る。長径 1.1 m、短径 0.65 mほどのやや不定な長方形を呈し、深さは約 0.9 mを測る。底面から 0.4 mほど浮いた位置で大腿骨が出土。頭蓋骨等はその下層からみつかっている。埋葬体位は不明で、熟年女性と考えられる。

177・178 墓（図 122）

１ｄ区西側に位置する。径約 0.6 mの 178 墓を 177 墓が切る。なお、178 墓からは出土遺物等がないが、周囲の状況から見て墓と位置づけている。177 墓は径 0.9 mほどの不定な円形を呈し、深さは 0.75 mほどを測る。底面西壁周辺で残りの悪い成人人骨が出土した。

128 墓（図 122）

1・2ｄ区境に位置する。径 0.85 mほどの円形で、削平を受けているため、検出し得たのは深さ 0.35 mほどである。底面から出土した人骨は老年男性で、埋葬体位は不明である。

138 墓（図 123）

２ｅ区北西部に位置し、埋土上層を切って後述する 130 墓がつくられている。径 0.8 mの方形を呈し、深さは 0.65 mを測る。底面から出土した人骨は顔を北西に向け、半仰臥屈位で埋葬された熟年女性？であった。人骨の北側底面を中心に灰状の堆積があり、分析した結果、稲藁であることが判明した。

180 墓（図 123、図版 40-3）

１・２ｅ区境に位置する。近代以降の 228 墓に切られ、173 墓を切る。上面は削平されている。概ね径 0.8 mの方形と考えられる。わずかに人骨が底面から検出したが、成人骨とのみ判明している。また煙管（124）が出土している。

173 墓（図 123）

１ｄ区北西隅に位置する。北を 180 墓、南を 156 墓に切られる。東西径で 0.95 mを測るが、形状は不明。煙管火皿が出土したが、180 墓雁首と接合した。これは本来、180 墓に帰属するものであり、作業時に混在した可能性が高いと考えている。

174 墓（図 123）

２ｄ区北西部に位置し、227 墓に切られるため、本期と判断した。長径 1.3 m、短径 0.9 mほどを測る長方形を呈し、深さは 0.65 mほどを測る。遺物は出土していない。

227 墓（図 123）

２ｄ区北西部に位置し、174 墓を切る。上面は削平を受ける。径 1.2 mを測る円形の墓壙。遺物等は出土していない。

226 墓（図 123）

２ｄ区北側に位置し、194 墓に切られる。径約 0.9 mの円形を呈し、深さは 0.5 mほどを検出した。遺物は出土していない。

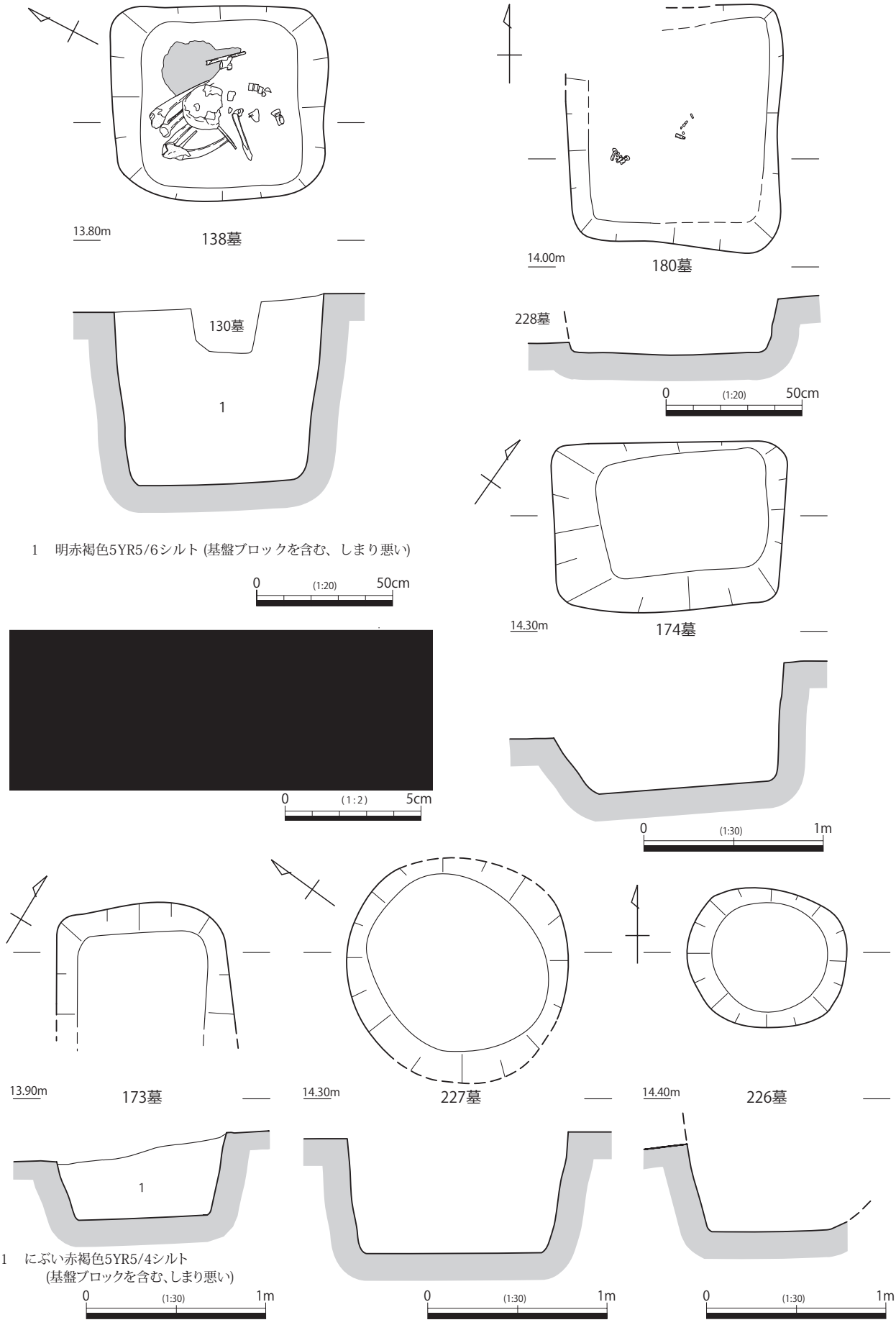


図 123　138・173・174・180・226・227 墓および 180 墓出土遺物

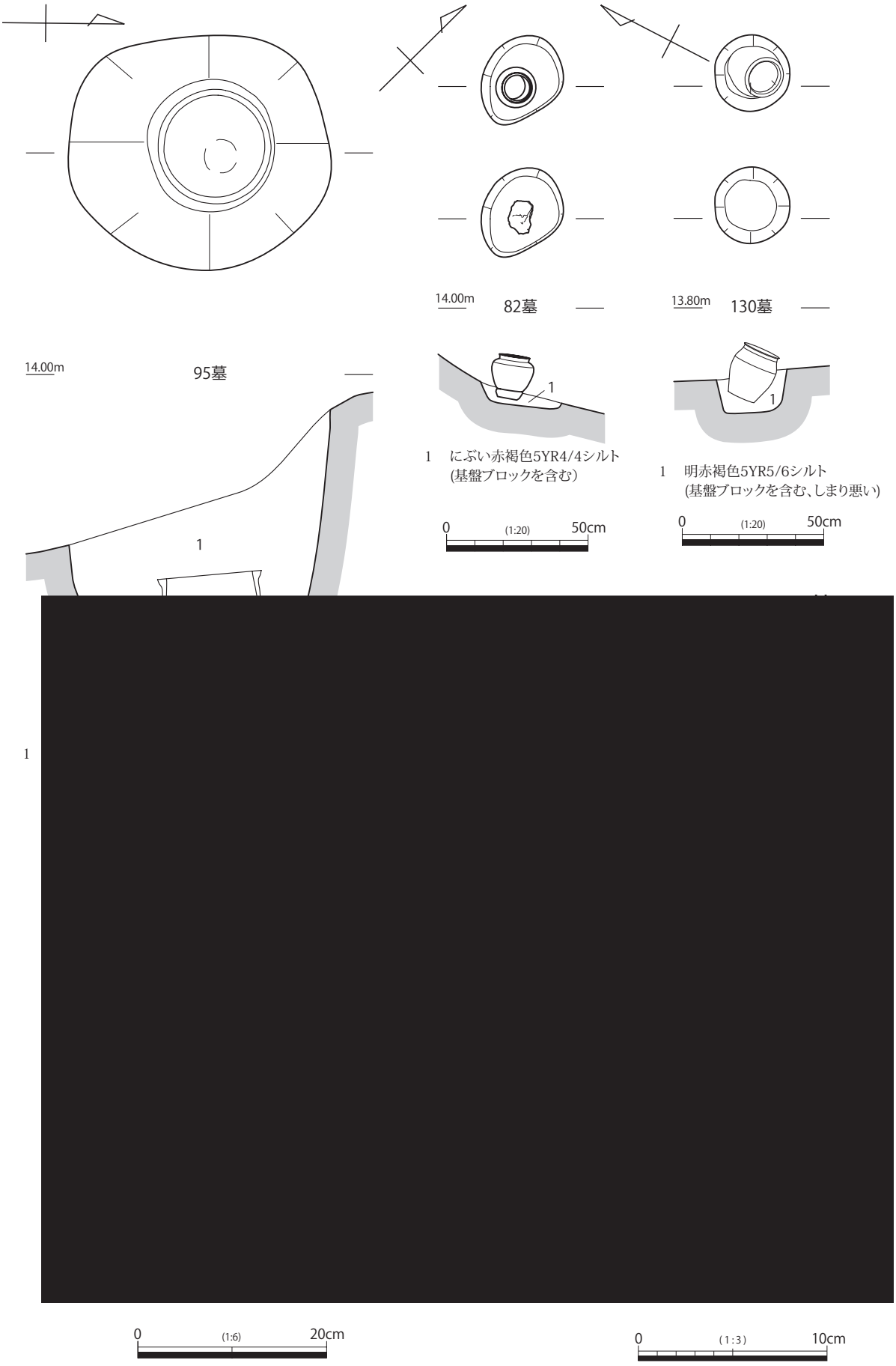
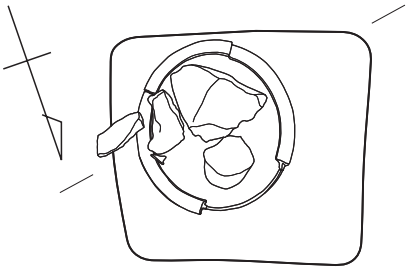
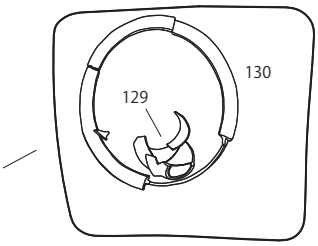
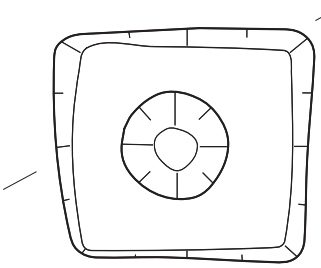
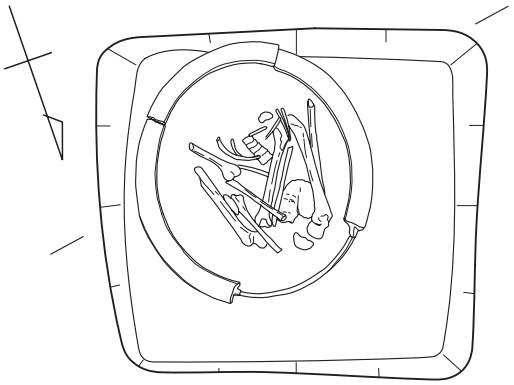


図 124　82・95・130 墓および出土遺物



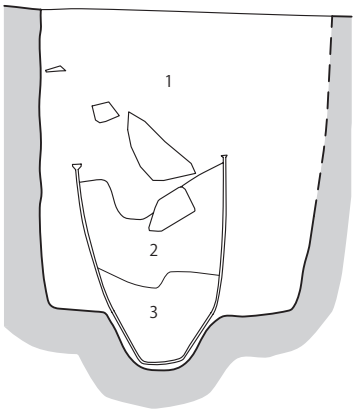






14.00m

57墓



1　赤褐色5YR4/6シルト
　　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
2　明赤褐色5YR5/6シルト(襞内上層)
3　明赤褐色5YR5/6シルト
　　(黄褐色シルトブロックを含む)

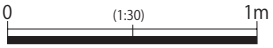


図 125　57 墓および出土遺物

95 墓（図 124、図版 42-3・4）

２ｅ区中央に位置する。長径 0.9 mほどのやや不定な楕円形状を呈す。深さ 1.0 mほどを測り、底面に越前焼甕（125）が据えられていた。甕内から成人と考えられる頭蓋骨片がわずかに出土した。

82 墓（図 124、図版 42-1・2）

２ｅ区中央､95 墓の東側に位置する。径 0.3 mほどの小さな掘方をもち､そこに越前焼小型壺（127）が納められていた。壺の下には底部と同規模の平石を検出している。壺を安定させるためのものであろうか。壺内から成人火葬骨片を検出した。

130 墓（図 124、図版 42-1）

２ｅ区北東部、138 墓の上層に位置する。径 0.3 m弱の円形掘方内に、越前焼小型壺（128）が納められていた。壺口縁部がやや南に傾いている。壺内から熟年男性の火葬骨片を検出している。

57 墓（図 125、図版 42-5 ～ 7）

１ｅ区南部に位置し、北側の 98 墓を切る。径 1.0 mの方形を呈す墓壙内南東隅には、大型の常滑焼甕（E 類、130）が出土した。墓壙底面を 0.15 mほど掘りくぼめ、ちょうど甕の底部が収まるように据えられていた。甕内には人頭大以上の礫が落ち込んでおり、それを除去すると褐釉のかかった陶器甕（129）があり、その下から人骨を検出した。成人女性が座葬で葬られていたと考えられる。

157 墓（図 126、図版 43-6）

２ｅ区北側に位置し、179 墓に北側を切られる。東西径は 0.7 mほどを測るが、全体形状は不明である。深さは約 0.6 m。底面より人骨がまとまって出土している。女性・子供の骨と考えられるが、埋葬体位は不明。人骨に接して、肥前系陶器小杯（131）が出土している。

179 墓（図 126、図版 43-3・4）

１・２ｅ区にまたがり、近代の 52・111 墓に切られ、157・230 墓を切る。長径 1.25 m、短径 1.0 mほどを測る不定型な墓壙である。底面から再葬の可能性のある女性骨とともに子供の骨が出土している。この骨に混じり、青銅製の円形容器（136）と足袋金具（135）、やや離れて肥前系磁器小杯が２点（133・134）出土した。

201 墓（図 126、図版 43-5・6）

２ｅ区北側に位置し、北側を近代の 108 墓等に切られる。長径 1.0 m、短径 0.8 mほどの長方形を呈する墓壙と考えられる。深さは 0.8 mほどを測る。底面中央から幼児の骨がまとまって出土しており、骨に接して磁器小杯（132）もある。

232 ～ 234 墓（図 127）

１・２ｅ区にまたがって、南北方向に３基が切り合う。また 96 墓に切られることから、これらは本期に比定した。造墓の順は 232 → 233 → 234 である。234 墓は長径 0.9 m、短径 0.65 mほどを測る長方形墓壙で、深さは 0.5 mほどを検出している。他の２基は大半が切られるため判然としないが、234 墓と底面レベルがほぼ同一であり、短径も同じであることから概ね同規模であったと考えられる。いずれからも遺物は出土していない。

98 墓（図 127）

１ｅ区南側に位置する。57 墓に切られるため、本期に比定した。また 68・94・99 と連なって検出したが､これらの切り合いが判然しなかったため､この３基は時期不明とし後述する。98 墓は径 1.0 mを測る方形で、深さは 0.5 mほどを検出した。遺物は出土していない。

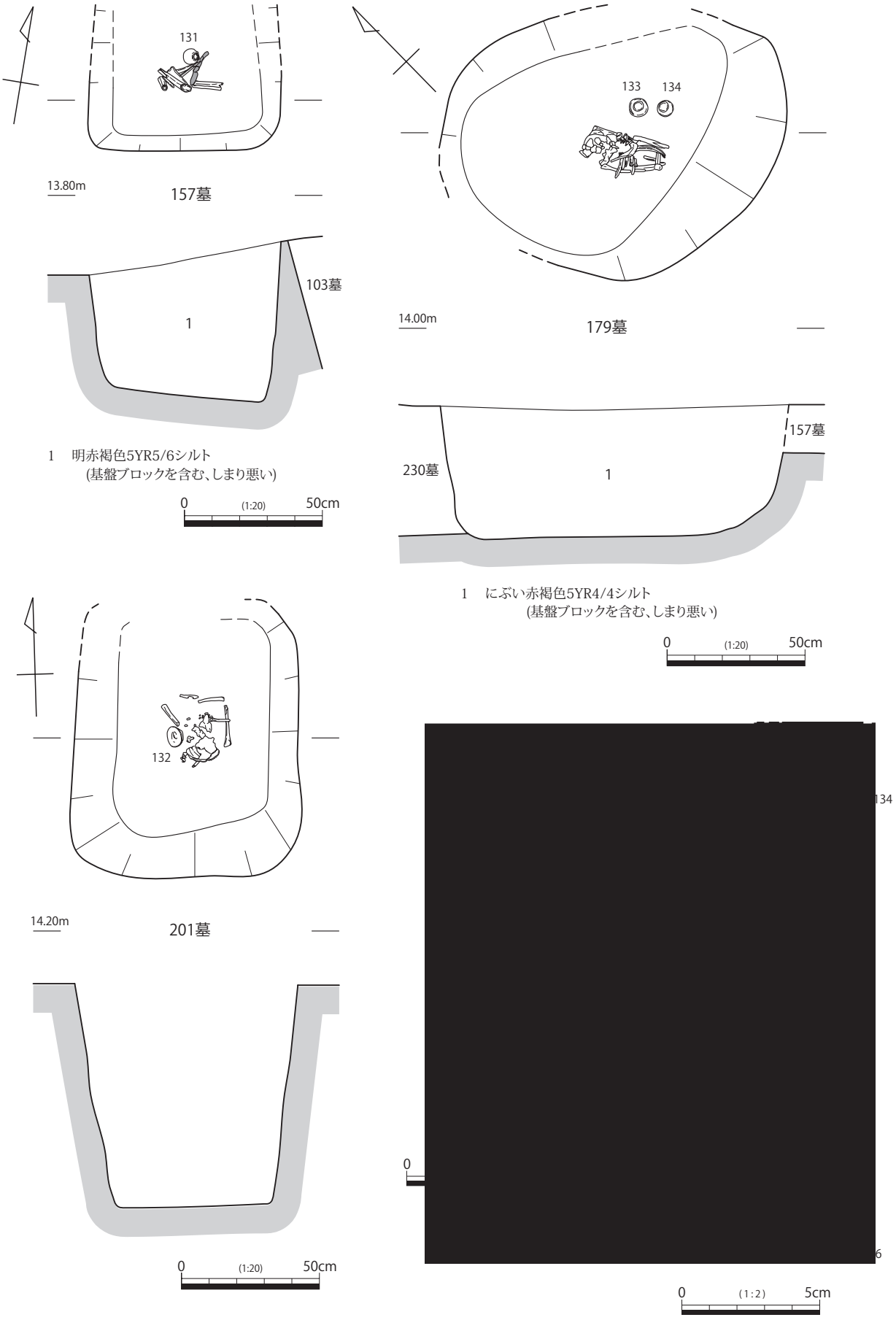


図 126　157・179・201 墓および出土遺物

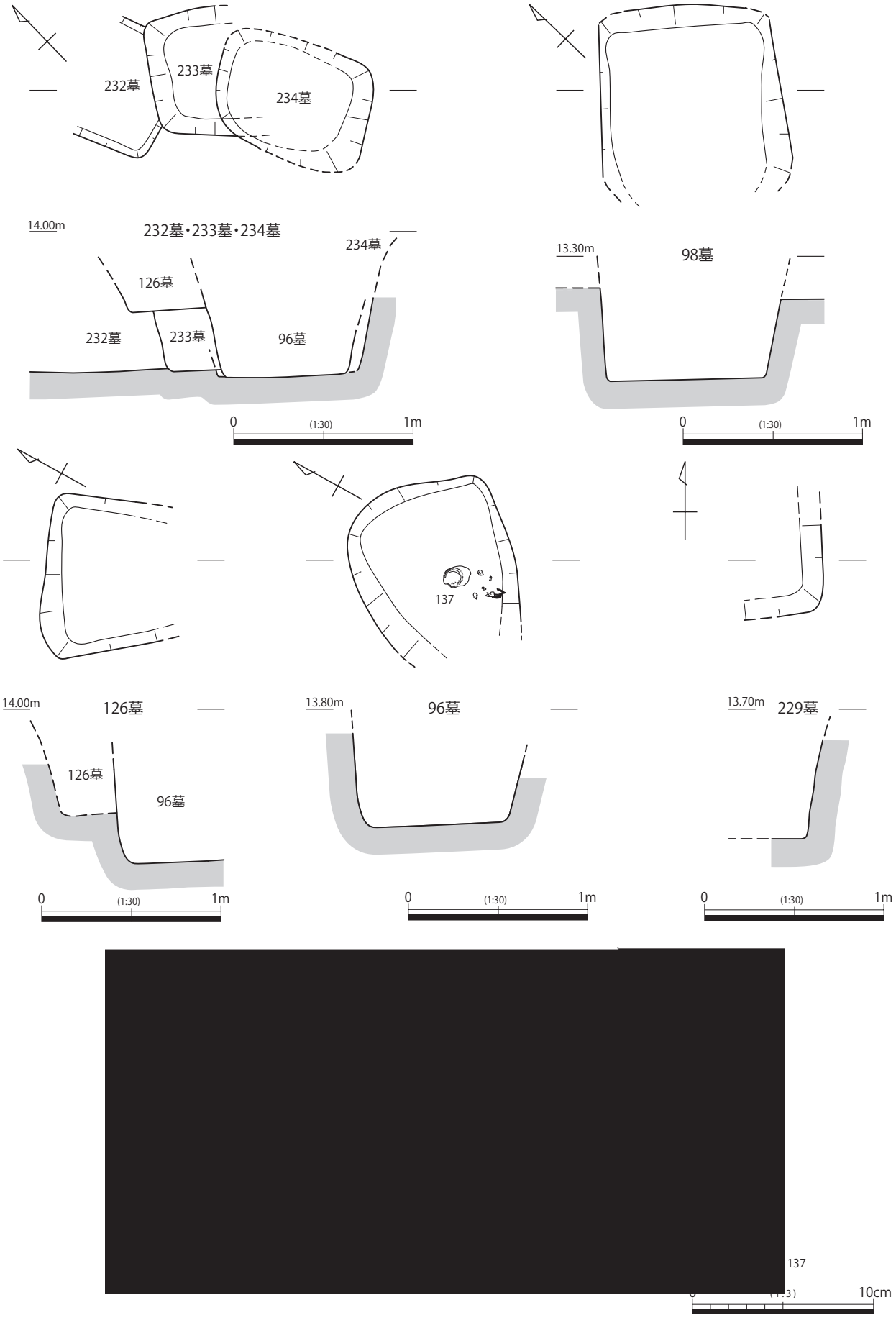
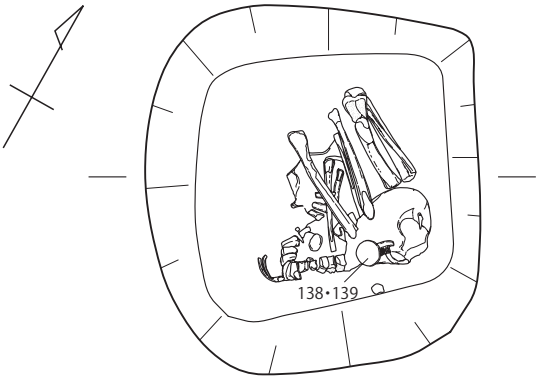
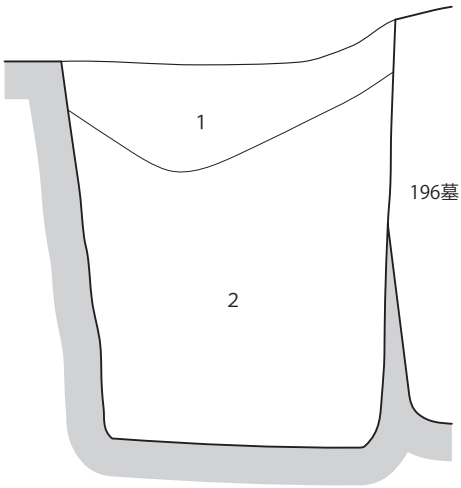


図 127　96・98・126・229・232 ～ 234 墓および 96 墓出土遺物



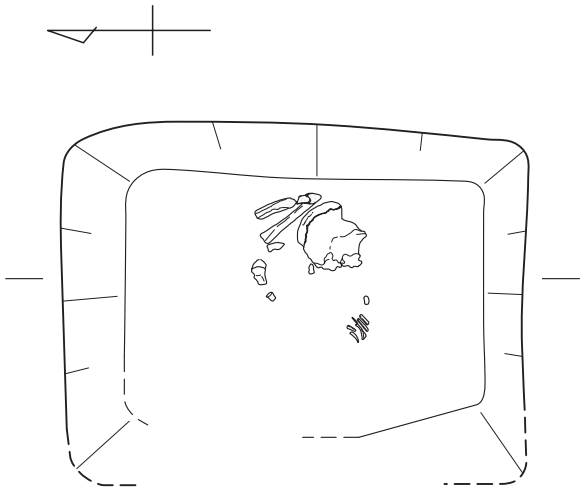
14.00m　66墓



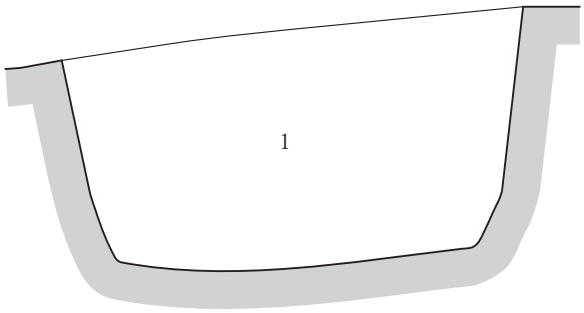
1　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
2　赤褐色5YR4/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm

0　5cm

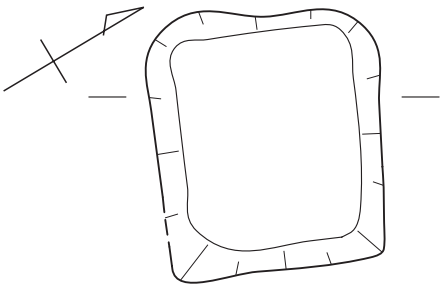


13.50m　196墓

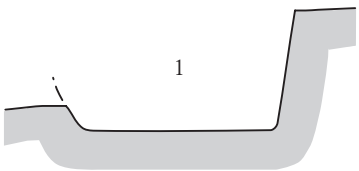


1　明赤褐色5YR5/6シルト
（基盤ブロックを含む、しまり悪い）

0　(1:20)　50cm



13.40m　51墓



1　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:30)　1m

図 128　51・66・196 墓および 66 墓出土遺物

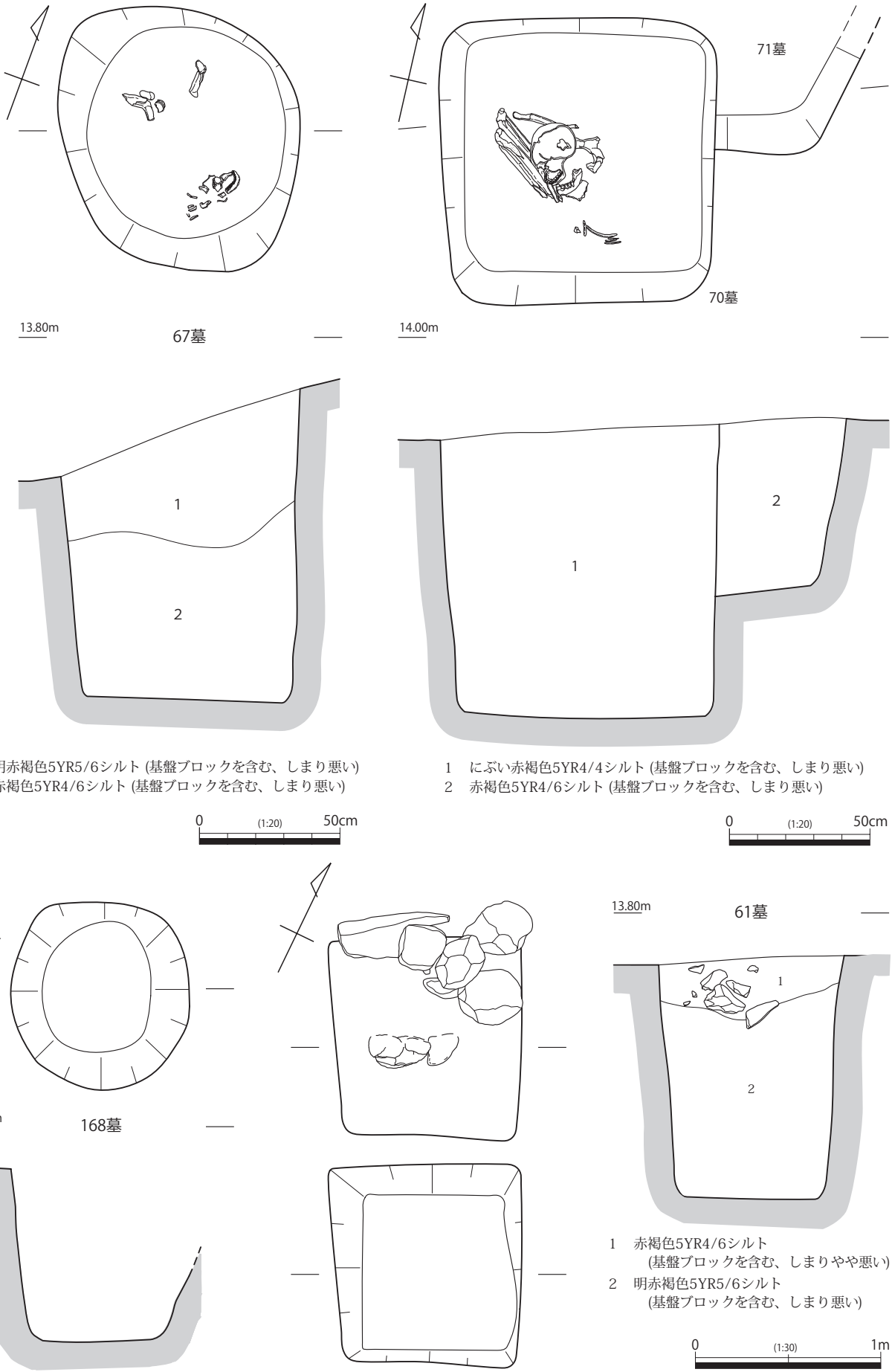


図 129　61・67・70・71・168 墓

126 墓（図 127）

1・2 e 区にまたがり、96 墓に南側を切られ、233 墓を切る。東西径で 0.8 mほどを測るが形状は不明。遺物は出土していない。

96 墓（図 127、図版 43-1・2）

2 e 区北に位置し、126・234 墓などを切る。南西の 196 墓との切り合いは不明であった。検出した長径は 0.9 mで、これより少し大きい長方形を呈する墓壙と思われる。底面中央からは立った状態で犬の土製品（137）があった。その北側、壁際からは幼児骨がわずかに出土している。

229 墓（図 127）

1 e 区南側に位置し、北東部は 57 墓に切られ、南西部は 230 墓と切り合う。後者の関係は把握できなかった。わずかしか検出できず形状等は不明。

66 墓（図 128、図版 44-1・2）

2 e 区北西隅に位置し、北側で 51・196 墓を切る。径 0.9 mほどの方形を呈し、深さは約 1.15 mを測る。底面から検出した人骨は青年男性のもので、北向きの座葬であった。また、鏡（139）と櫛（138）が重なって頭蓋骨などよりも上で出土した。このことから棺上に置かれていたものが、その腐朽によって落ち込んだものと考えられる。

196 墓（図 128）

2 e 区北西隅に位置し、西側は 51・66 墓に切られる。南北 1.2 m、東西 1.0 mほどの長方形を呈した墓壙で、深さは 0.7 mほどを測る。底面中央東側から人骨が出土しているが、壮年後半から熟年前半の女性と考えられる。また底面付近からは、若干ながら灰状の土を検出している。分析は行っていないが、他の事例から稲藁であったと考えられる。

51 墓（図 128）

2 e 区北西隅に位置し、北側で 66 墓に切られ、196 墓を切る。長径 1.0 m、短径 0.9 mほどのやや長方形を呈するもので、検出した深さは 0.45 mと浅い。人骨等は出土していない。

67 墓（図 129）

2 e 区西側に位置する。径 0.9 mほどの円形を呈し、深さ約 1.1 mを測る。底面からまばらながら人骨が検出され、性別不明、熟～老年のものと考えられる。遺物は出土していない。

70・71 墓（図 129・130、図版 44-3・4）

2 e 区西側に位置する。70 墓は 71･93 墓を切る。径 1.0 mほどの方形を呈し、深さ 1.0 mを測る。底面中央より壮年女性人骨を検出し、その体位は座葬であったと考えられる。また頭蓋骨下から 6 点の寛永通寶（145 ～ 147）、および木製の櫛（148）が出土した。

71 墓は西を 70 墓、北を 93 墓に切られ、墓壙南東部分しか残っていない。深さ 0.6 mほどを測り、遺物などは出土していない。

61 墓（図 129・130、図版 44-5）

1 f 区東側に位置する。上面北東部分には人頭大以上の礫がまとまってあった。径 1.05 mほどの方形を呈し、深さ約 1.25 mを測る。底面近くから銭貨が出土した。銭貨は和紙でくるまれたもの（141）もあったが、出土地点は抑えられなかった。

168 墓（図 129）

2 e・f 区にまたがる。径 0.95 mほどを測るほぼ円形を呈するもので、深さ約 0.95 mを検出した。

図 130　61・70・171・182 墓出土遺物

写真 10　人骨取上げ作業風景

人骨、釘など遺物は全く出土していない。

182 墓（図 130・131、図版 44-4）

1 f 区南西隅に位置する。現代の墓地造成によりかなり上部は削平されているが、径 1.1 mほどの方形を呈する。南側底面から熟年男性の骨が出土している。埋葬体位は不明。底面から寛永通寶が 1 点（149）出土した。

183 墓（図 131）

1・2 f 区にまたがる。西側上部を墓地造成により削平されている。径 0.9 mほどの不定な円形になると思われ、深さは 1.05 mを検出した。南側底面から人骨が出土したが、年齢、性別、埋葬体位とも不明である。

147・171 墓（図 130・131、図版 44-4）

2 f 区北側に位置する。147 墓が 171 墓を切る。147 墓は径 0.8 mほどのやや楕円形を呈するもので、深さは 0.6 mを測る。遺物は全く出土していないが、形状から墓と判断した。171 墓は北東側を 141 墓に切られるため、その形状は不明である。東西径が 0.65 mほどを測る。南北に長い長方形状を呈するものであろうか。鎌（140）が出土している。

199 墓（図 131）

2 f 区北側に位置する。南側を 146 墓に切られるが、南北が 1.4 mほどを測る楕円形状を呈すると考えられる。深さは 0.55 mほどであった。遺物は全く出土していない。

b）遺構外出土遺物（図 132・133、図版 45）

図 132・133 には遺構外から出土した土器、陶磁器類を掲載している。150 ～ 154 は肥前系の碗

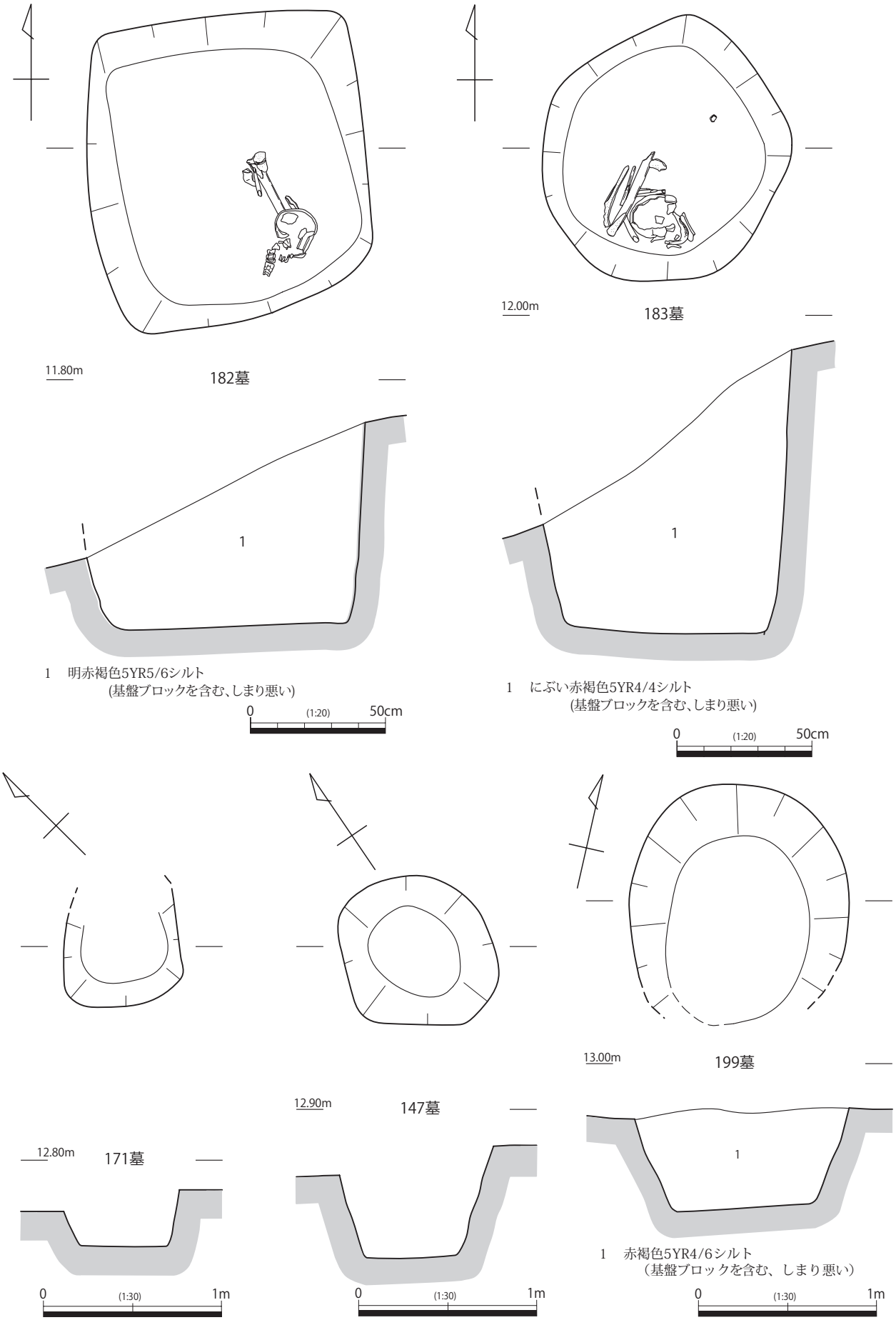


図 131　147・171・182・183・199 墓

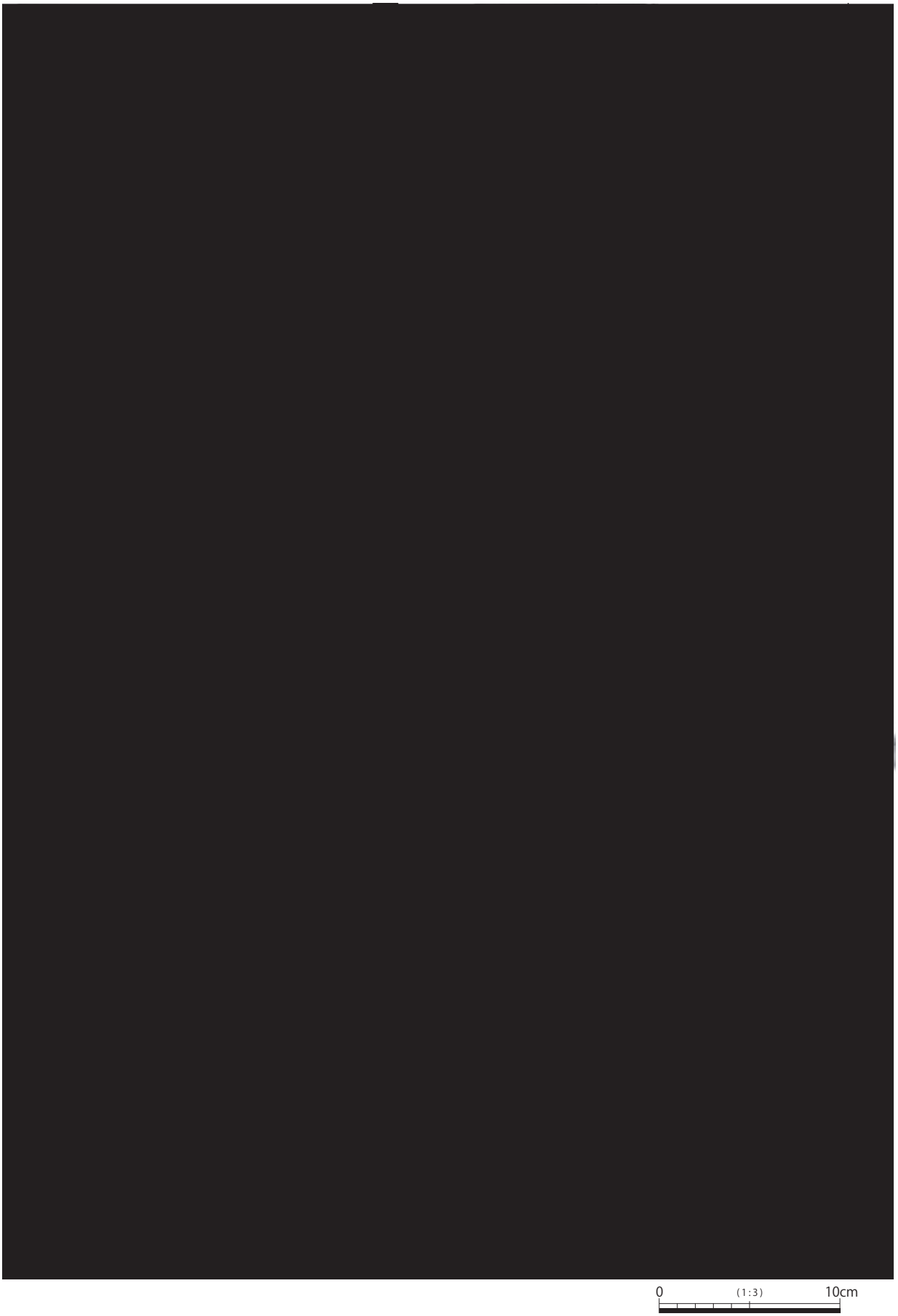


図 132　II 期遺構外出土遺物 1

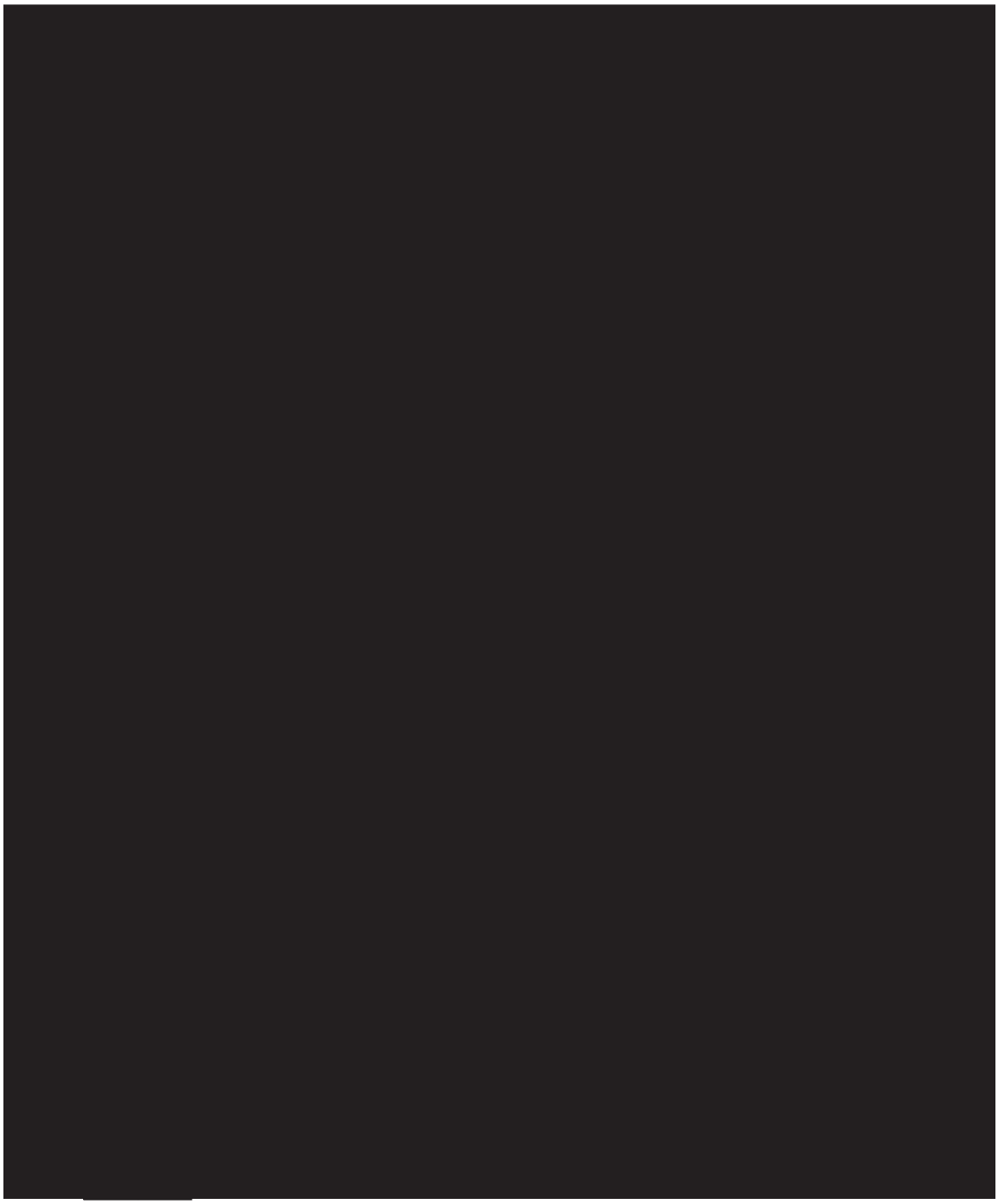


図 133　II 期遺構外出土遺物 2

である。155･156 はいわゆる陶胎染付碗。151 は京焼風の碗で、高台内には朱で○窯と記載される。在地の窯の名前であろうか？ 162 ～ 166 は土師器皿。165 は口縁が波状に欠けているが、そこにも煤が着くため、意図的に打ち欠かれたものと思われる。157 ～ 160・167・168 は小型の壺で、167 からは壮～熟年男性の火葬骨を検出した。169 は越前焼の壺で、墓 82・130 と同様である。167 のように火葬骨が残るものはわずかであるが、いずれも骨壺であったと考えられる。172 は瓦であるが戒名などが刻まれており、墓碑として再利用されたものである。

5）時期不明遺構の調査（図 134・135）

a）墓

時期不明の墓は全部で 94 基あり、ほぼ調査地全域に分布する。時期を決定づける遺物もなく、他遺構との切り合い等では判断できなかったため、時期不明とした。以下、調査地東側から順次、各墓の説明をしていくこととする。

164 墓（図 136）

1 b区北東隅に位置する。南北 1.0 m、東西 0.85 mほどの長方形を呈す。深さは約 1.0 m。北側底面から出土した人骨は遺存状態があまりよくなかった。壮年の女性と考えられるが、埋葬体位は不明。

165 墓（図 136）

1 b区北東隅に位置する。径 1.1 mほどの方形を呈し、深さは約 1.1 mを測る。底面中央から北側にかけて遺存状態のよくない、壮年女性のものと考えられる骨が出土した。

117 墓（図 136）

1 a区北西側、16 号墳周溝を切ってつくられる。上面形は不定ながら、底面は南北を軸とする長方形を呈すことから、長径 0.9 mほどの長方形であったと考えられる。人骨は底面からわずかに出土し、壮年のものとだけ判明している。

12 墓（図 136）

1 a区北西隅に位置し、北側には現代の墓基礎があるため、南側の一部のみ調査している。東西径で 1.0 m、深さは 0.75 mを測る。上面に人頭大ほどの礫があったが、人骨等遺物は出土していない。

11・222 墓（図 137）

1 b区東側に位置し、11 墓が 222 墓を切る。11 墓は南北 0.95 m、東西 0.8 mほどのやや長方形を呈し、深さ約 0.95 mを測る。底面南側から熟～老年の女性人骨を検出した。出土状況から顔を西北西に向けた半仰臥屈位であったと考えられる。

222 墓は南側を大きく 11 墓に切られ、北側のわずかな部分しか残っていない。東西径で約 1.0 mを測り、深さは 0.7 mほどとやや浅い。人骨等遺物は出土しなかった。

116 墓（図 137）

1 d区北西隅に位置し、北側は近代以降の 115 墓に切られる。径 1.0 mほどの方形を呈し、深さは 0.95 mを測る。底面やや南側から遺存状態のあまりよくない人骨が出土した。成人骨だが、性別および埋葬体位は不明である。釘がわずかに出土した以外に遺物はない。

18 墓（図 137）

1 a区中央に位置する。北側は撹乱によって切られているが、径 1.0 mほどの方形を呈するものと思われる。検出した深さは 0.5 mほどと浅い。釘も含め遺物は全く出土していない。

8墓（図 137）

1 b区南東側に位置し、10 墓を切る。長径 1.2 m、短径 0.8 mほどを測り、深さは 0.5 mほどと浅い。底面から燈籠基壇状の石造物を含む礫が出土したが、それ以外には人骨・釘なども出ていない。

5墓（図 138）

1 b区南東側に位置し、Ⅱ期の 10 墓を切る。径 1.0 mほどの方形を呈し、深さは 0.8 mほどを測る。底面中央やや東寄りで検出した人骨は、その特徴から小児骨と考えられる。0.2×0.3 mほどにまと

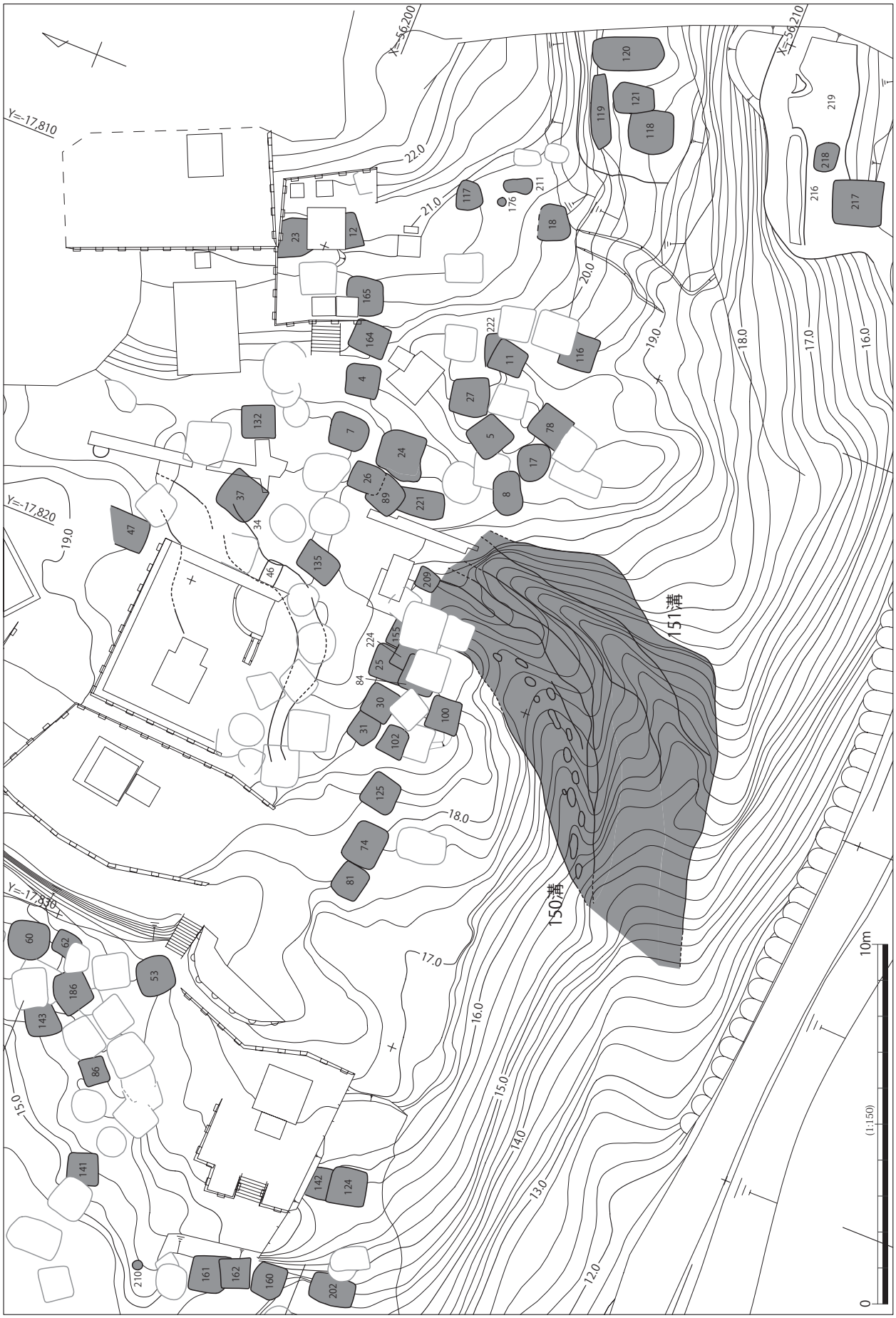


図 134　時期不明遺構配置 1

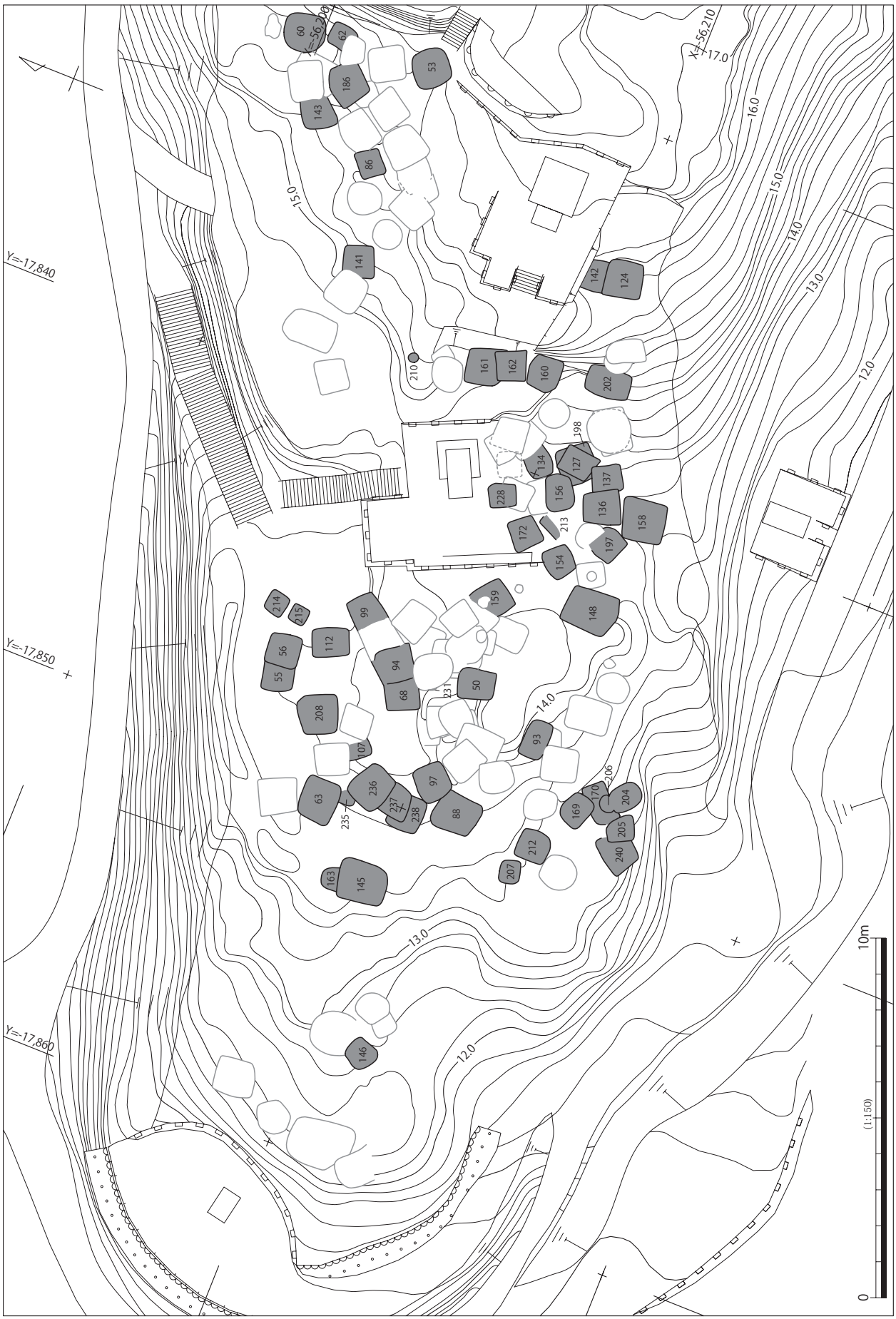
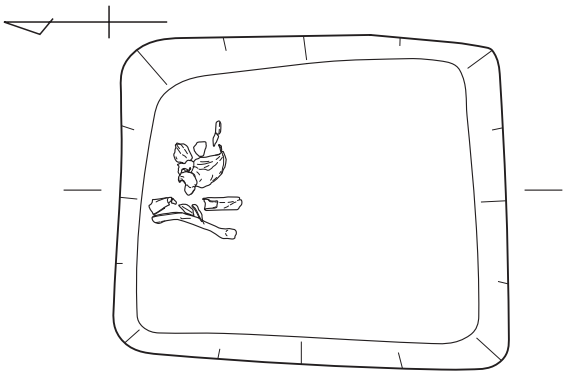
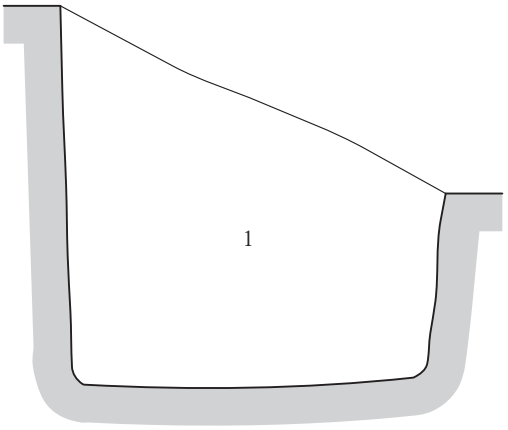


図 135　時期不明遺構配置 2



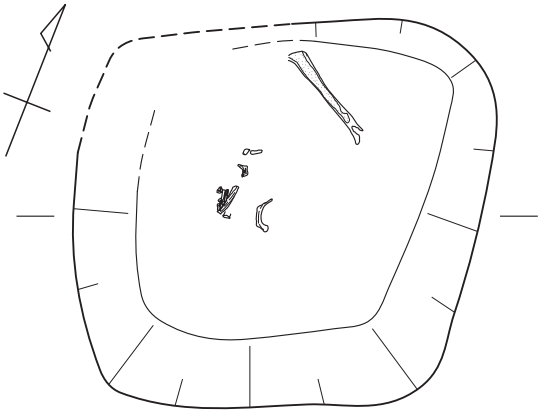
20.40m

164墓



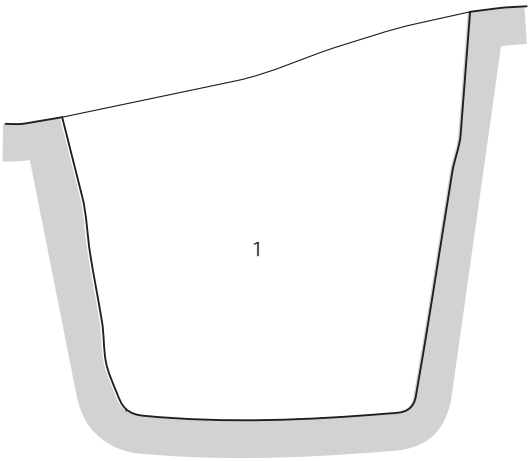
1　明赤褐色2.5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm



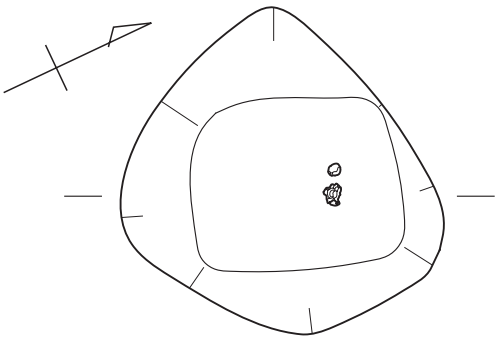
20.90m

165墓



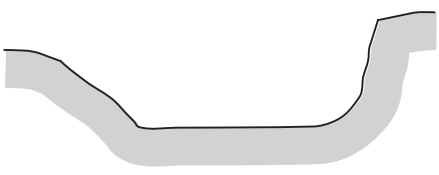
1　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロック含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm

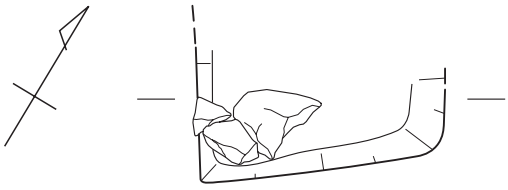


21.30m

117墓

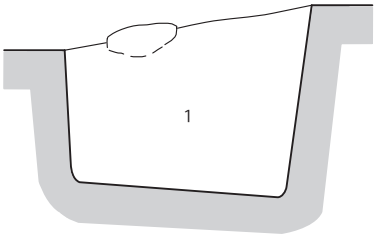


0　(1:20)　50cm



21.40m

12墓

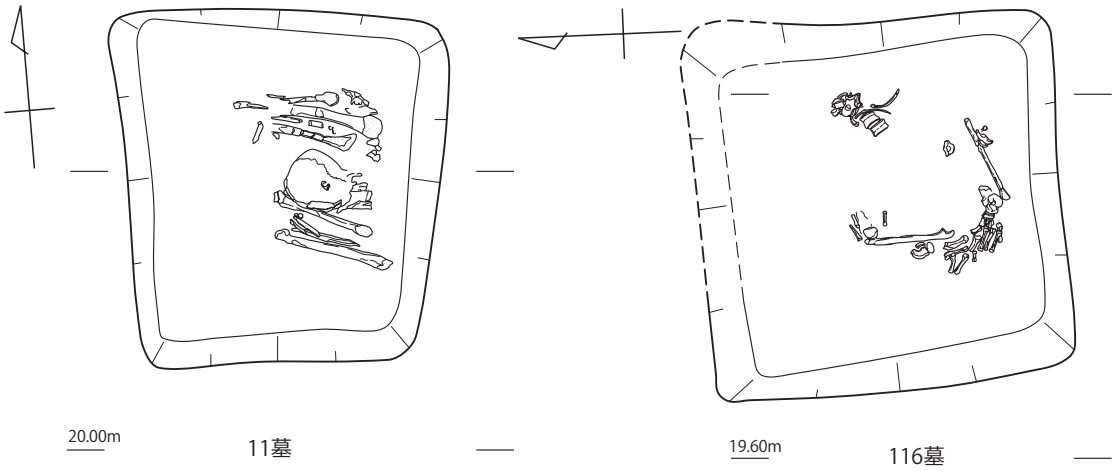


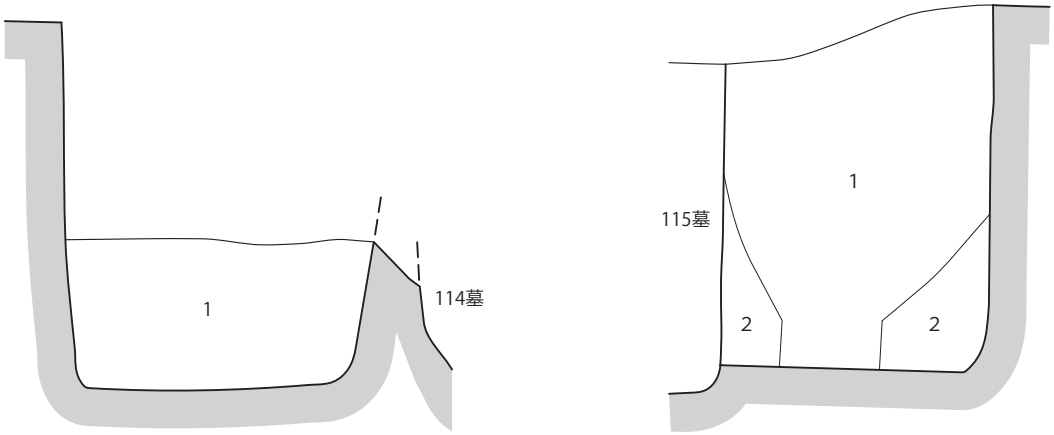
1　赤褐色5YR4/6シルト
(基盤ブロック含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm

0　(1:30)　1m

図 136　12・117・164・165 墓



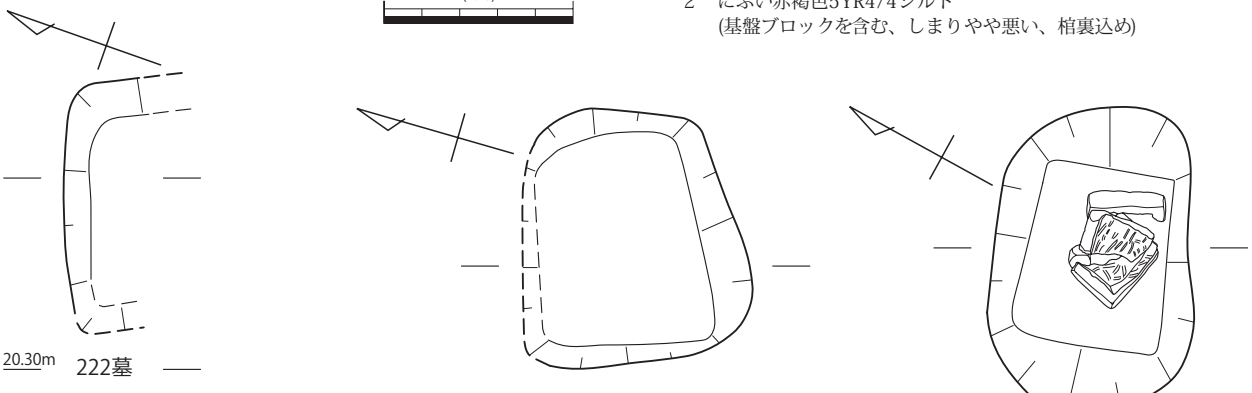


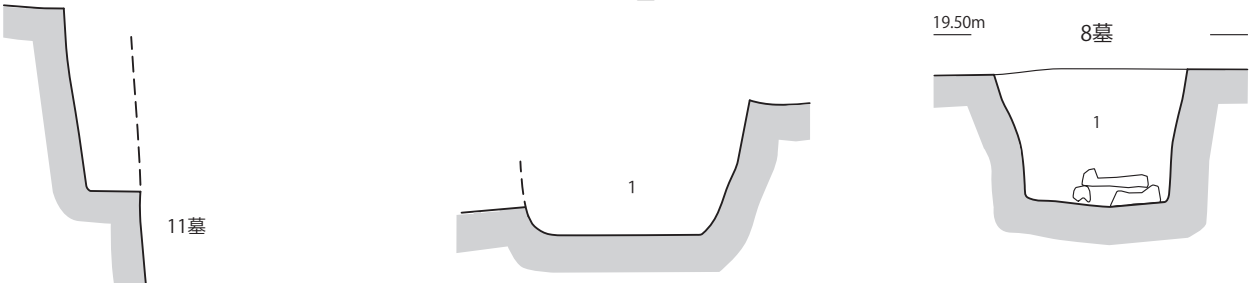
1　にぶい赤褐色5YR4/4砂質シルト(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm

1　赤褐色5YR4/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
2　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
(基盤ブロックを含む、しまりやや悪い、棺裏込め)

0　(1:20)　50cm





1　赤褐色2.5YR4/6シルト
(褐色シルトブロックを含む、しまり悪い)

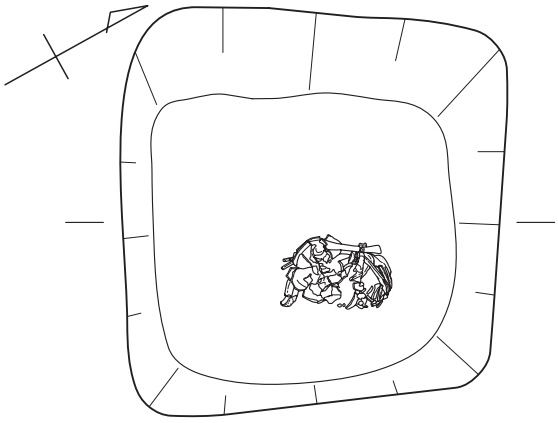
1　明褐色7.5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり弱い)

0　(1:30)　1m

0　(1:30)　1m

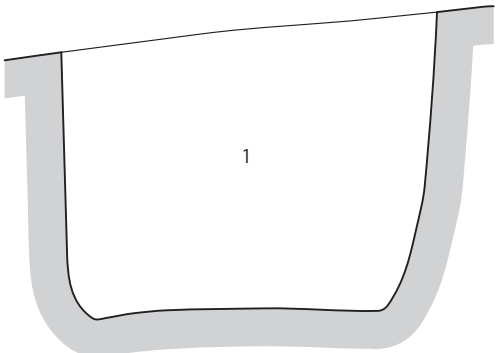
0　(1:30)　1m

図 137　8・11・18・116・222 墓



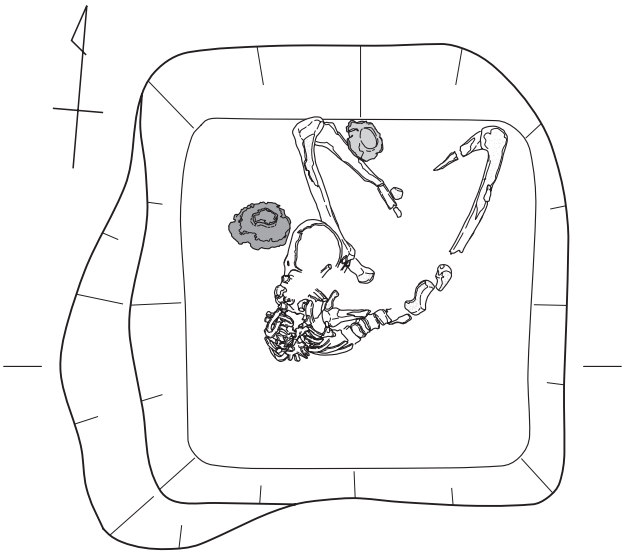
20.00m

5墓



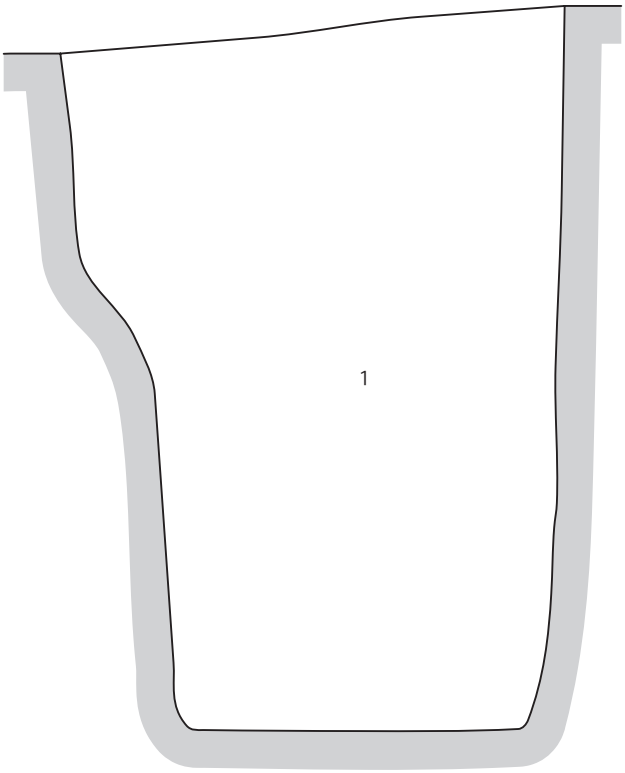
1　暗赤褐色5YR4/6シルト（基盤ブロックを含む、しまり悪い）

0　(1:20)　50cm



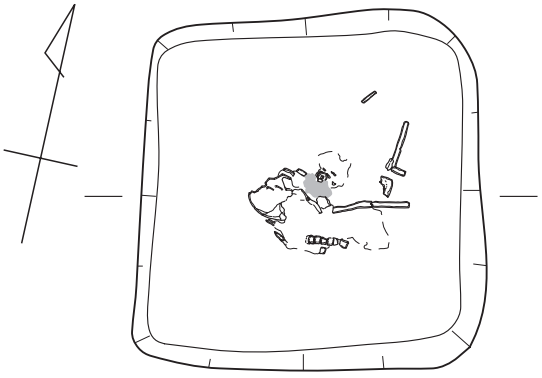
20.00m

24墓



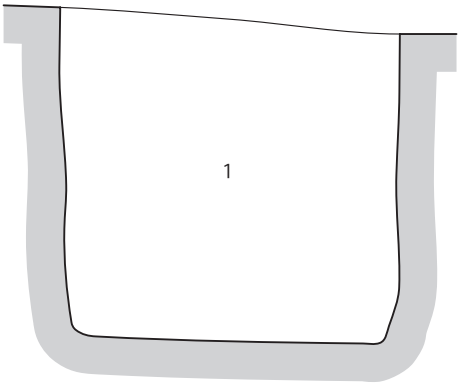
1　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm



20.20m

4墓



1　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm

図 138　4・5・24 墓

まって出土している状況から、ほぼその大きさの棺に入れられたのであろう。

24 墓（図 138、図版 46-1）

1 b区ほぼ中央に位置する。径約 1.2 mを測る方形で、深さは 1.9 mほどある。掘方西側上面はやや２段の掘り込みになっている。底面北側から顔を北北東に向け座葬の熟年女性の骨を検出した。また底面から浮いた位置で漆器の椀が出土しており、その状況から棺上に置かれたものが落ち込んできたと考えられる。

４墓（図 138）

1 b区北東側に位置する。径 0.9 mほどの方形で、深さは 0.85 mほどを測る。底面中央から人骨を検出したが、埋葬体位は不明。熟～老年の女性骨と考えられる。また人骨付近から灰状土壌を検出した。分析は行っていないが、他の墓から見つかった稲藁と同様と考えられる。

26 墓（図 139、図版 46-2・3）

1 b区ほぼ中央に位置し、南側で 89 墓を切る。南北 0.95 m、東西 0.8 mほどのやや長方形を呈し、深さは約 0.65 mを測る。底面より人骨が出土したが、それに被さるように径 0.3 mほどの折敷と考えられる漆塗木製品があった。人骨は壮～熟年の男性で、半腹臥正座位で埋葬されていたと考えられる。折敷の上面から青銅製容器（173）が出土した。出土状況から、折敷は棺上に置かれていたと思われる。

221 墓（図 139、図版 46-3）

1 b区ほぼ中央に位置し、北側を 221 墓に切られる。南北がおよそ 1.4 m、東西 0.8 mほどの長方形を呈す墓壙で、深さは北側で 0.85 mを測る。南側底面が 0.1 mほど高く、北へ向けて傾斜する。底面東側から下肢骨などがわずかに出土したが、年齢、性別などは不明であった。骨周辺から簪（175）が出土している。

78 墓（図 140）

1 b区南東隅に位置し、南側は 20 墓に切られる。径 1.0 mほどの方形を呈し、深さは 1.45 mを測る。底面中央から壮年男性の人骨が出土した。その状況から座葬であったと考えられる。

27 墓（図 140）

1 b区南東側に位置する。径 1.1 mほどの方形を呈し、深さは約 1.1 mを測る。埋土中位に径 0.3～0.4 mほどの礫が落ち込んでいた。人骨は底面北東部にまとまっており、老年男性で、顔を南西に向けた座葬であったと考えられる。また稲藁を起源とする土壌をわずかに検出している。

７墓（図 140）

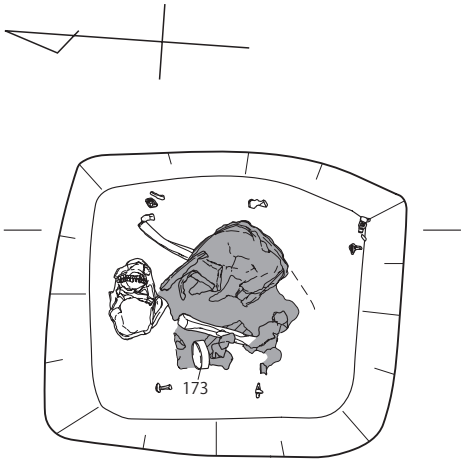
1 b区中央やや北側に位置する。径 0.9 mほどの方形を呈すが、南側は２段の掘り込みとなる。深さは 1.35 mを測る。底面から熟年男性で、顔を北に向けた座葬の人骨が出土した。

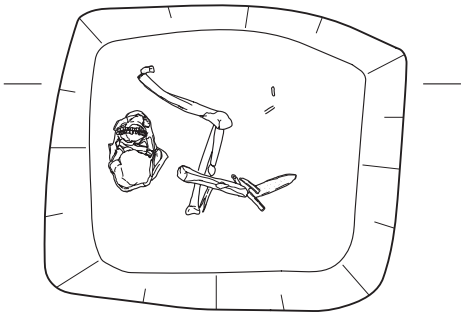
37 墓（図 141）

1 b区北西隅に位置する。径 1.2 mほどの方形を呈し、深さは約 1.25 mを測る。底面南東隅から人骨が出土したが、遺存状態はあまりよくない。熟～老年女性で、北に顔を向けた座葬であった可能性が考えられる。

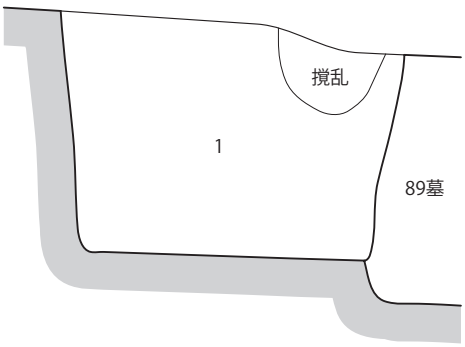
135 墓（図 141、図版 46-4）

1 b区北西側に位置する。南北 1.1 m、東西 0.8 mほどの長方形を呈し、深さは約 1.35 mを測る。底面から出土した人骨は熟年女性で、仰臥立膝位で埋葬されたと考えられる。底面から金属製品（176



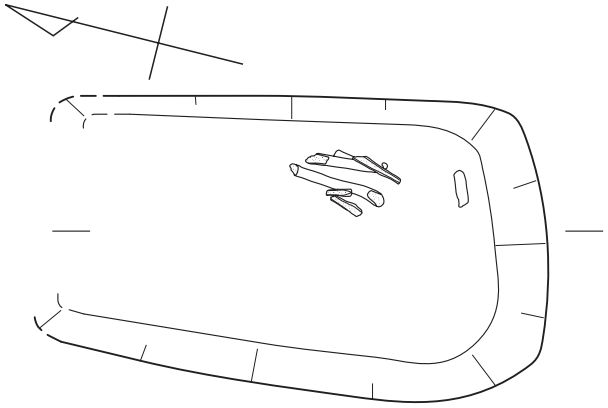


19.10m　26墓

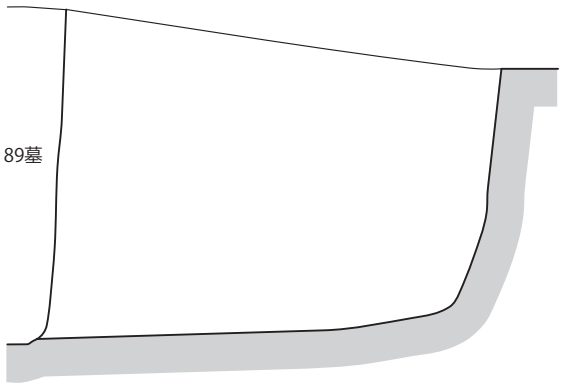


1　赤褐色シルト2.5YR4/6
（基盤ブロックを含む、しまり悪い）

0　(1:20)　50cm



19.20m　221墓



0　(1:20)　50cm

図 139　26・221 墓および出土遺物

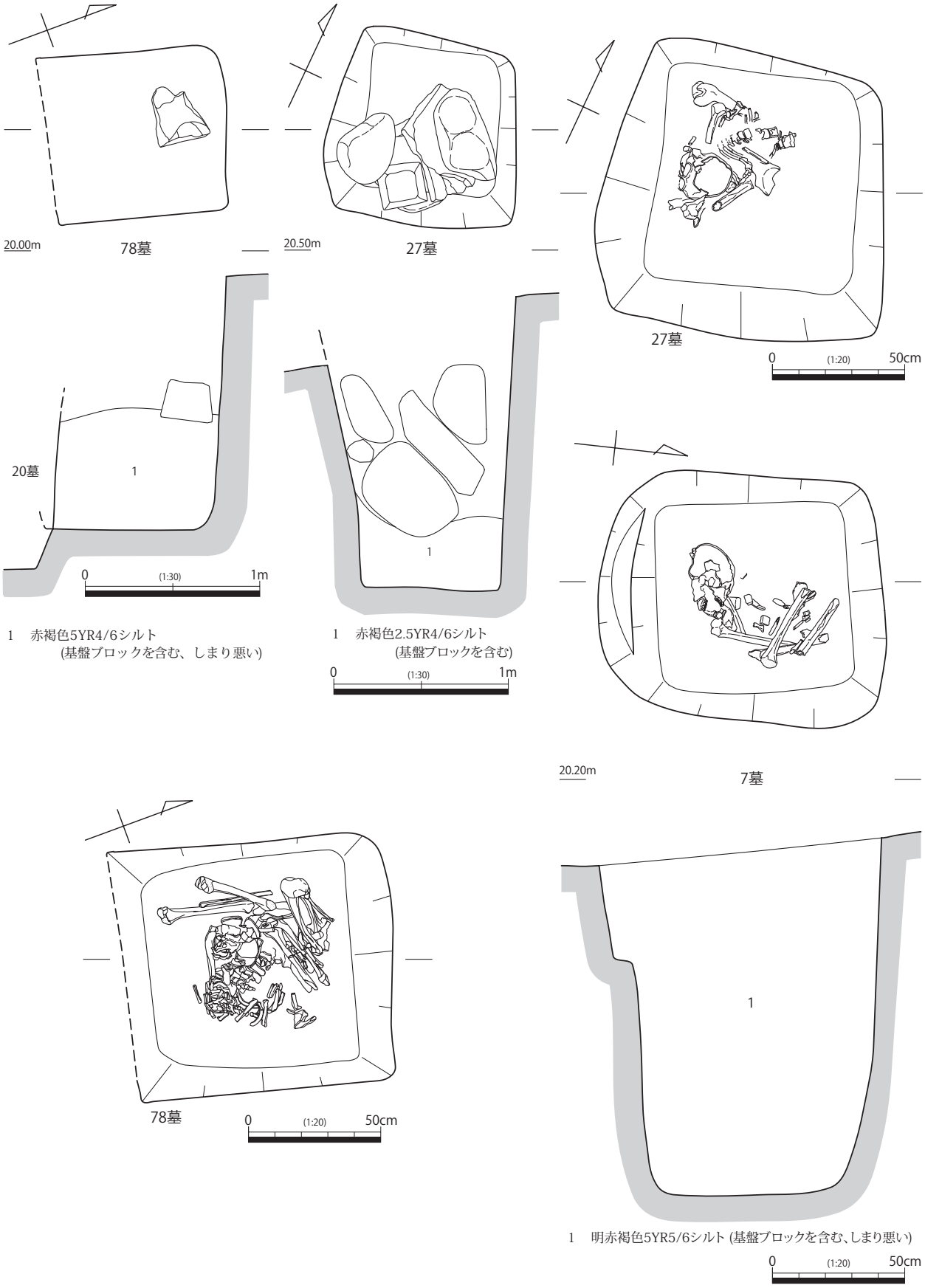
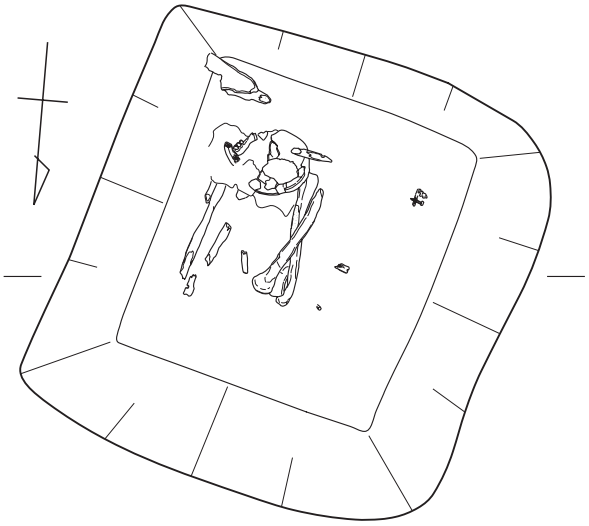
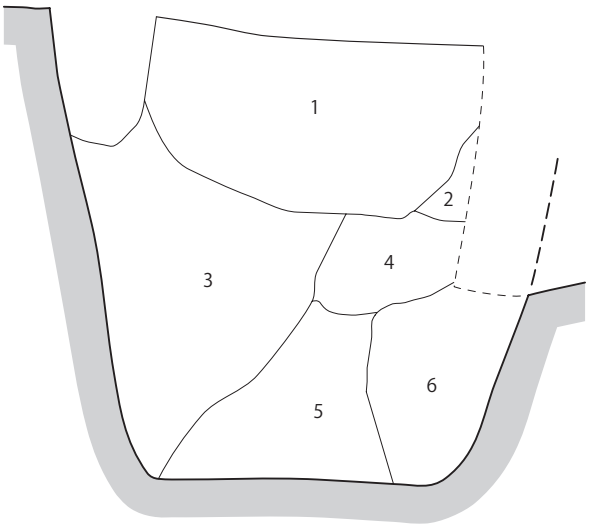

20.00m
78墓
20.50m
27墓
27墓
0 (1:20) 50cm
20墓
1
0 (1:30) 1m
1 赤褐色5YR4/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
1
1 赤褐色2.5YR4/6シルト
(基盤ブロックを含む)
0 (1:30) 1m
20.20m
7墓
78墓
0 (1:20) 50cm
1
1 明赤褐色5YR5/6シルト (基盤ブロックを含む、しまり悪い)
0 (1:20) 50cm

図 140　7・27・78 墓



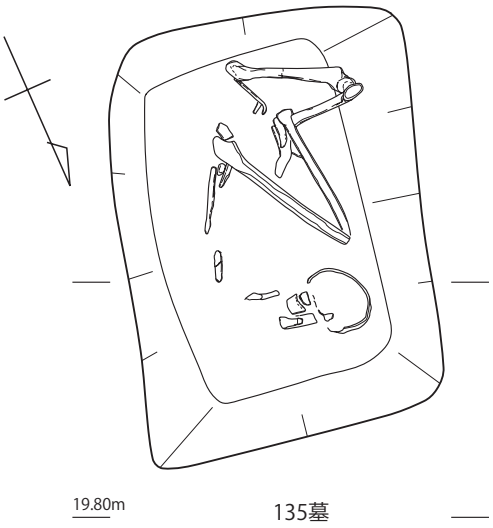
20.20m

37墓



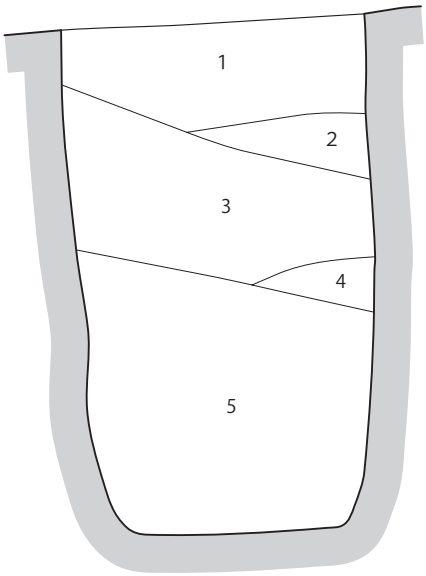
1　黄褐色10YR5/6シルト（基盤ブロックを含む、しまり悪い）
2　明赤褐色2.5YR5/6シルト（黄褐色シルトブロックを含む）
3　明赤褐色5YR5/6シルト
　（基盤ブロック・黄褐色シルトブロックを含む、しまり悪い）
4　褐色10YR4/6シルト(炭片を含む)
5　4に明赤褐色シルトブロックを含む
6　にぶい赤褐色2.5YR4/4砂質シルト
　（黄褐色シルトブロックを含む、しまり悪い）

0　(1:20)　50cm



19.80m

135墓



1　明赤褐色5YR5/6シルト
　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
2　明褐色7.5YR5/6シルト
　(明赤褐色シルトが斑状に入る)
3　明赤褐色2.5YR5/6シルト
　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
4　褐色7.5YR4/6シルト
5　赤褐色2.5YR4/6シルト
　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm

5cm

図 141　37・135 墓および 135 墓出土遺物

～ 178）が出土している。箱、あるいは棺桶の留め具であろうか？

132 墓（図 142）

1 b・10 b区にまたがって位置する。径 0.95 mほどの方形で、深さ約 1.25 mを測る。底面中央から人骨を検出したが、熟～老年の男性で顔を北北西に向けた立膝座位で埋葬されたものと考えられる。人骨に接した北側には白色土壌があり、分析により稲藁と判断された。棺の内側に入れられたものであろう。またその分布から、径 0.6 mほどの棺桶であったと推定される。

89 墓（図 142）

1 b区ほぼ中央に位置し、221 墓を切り、26 墓に切られる。径 0.95 mほどの方形を呈すもので、深さも 0.95 mを測る。底面中央の人骨は老年女性で、顔を北北東に向けた座葬であったと考えられる。この人骨を囲むように灰白色土壌があり、132 墓同様稲藁であった。その分布から 0.45 mほどの棺桶であったと想定する。

46 墓（図 142）

1 b区北西隅に位置する。西側は現代の墓基礎に接するが、ほぼその掘方上面を把握できた。東西 0.7 m、南北 0.45 mほどの長方形を呈する。深さは 0.75 mほどを測る小型のものである。遺物は全く出土していないが、周囲の状況から墓と判断した。

47 墓（図 143、図版 47-2）

10 b区南西隅に位置し、北側は現代の撹乱で大きく削られる。南北は検出長約 1.05 m、東西は 0.95 mを測り、南北を長軸とする長方形であろう。深さは 1.35 mほどを測る。底面から遺存状態の悪い熟年女性人骨が出土したが、仰臥立膝位で埋葬されたと考えられる。棺桶の金具（179・180）が出土している。

84 墓（図 144）

1 b・c区にまたがり、近代以降の 83 墓に大半を切られるため、わずかに底面近くで輪郭を把握できたのみである。径 1.0 mほどの方形と考えられる。

155・224 墓（図 144）

155 墓は 1 b区西側に位置し、44 墓などに南側の大半を切られる。北西隅部分をわずかに検出したのみである。224 墓も同様で、北西隅部分をわずかに検出した。

223 墓（図 144）

1 b区西側に位置し、44 墓に北側の大半を切られる。東西径で 0.9 mを測るが、形状は不明である。

209 墓（図 144）

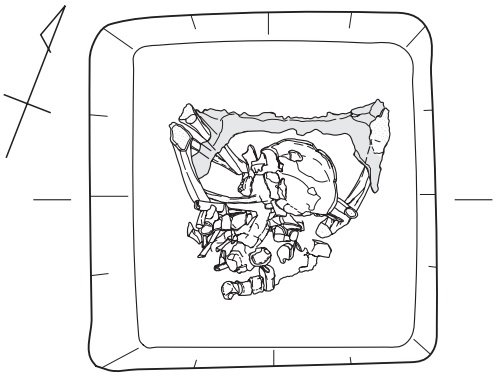
1 b区西側に位置する。径 0.6 mほどの方形を上面は呈すが、底面はやや東西に長い。深さ 0.8 mほどを測る。遺物等は全く出土していないが、周辺の状況から墓と判断した。

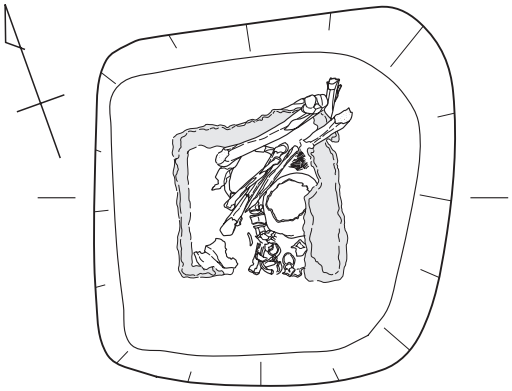
31 墓（図 144）

1 c区東側に位置し、30 墓に東側を切られる。南北の検出長 0.9 mほど、東西は約 0.75 mで、南北に長い長方形を呈す。深さは 1.25 mを測る。底面西側から遺存状態の悪い人骨が出土したが、小児のものと考えられる。

30 墓（図 144）

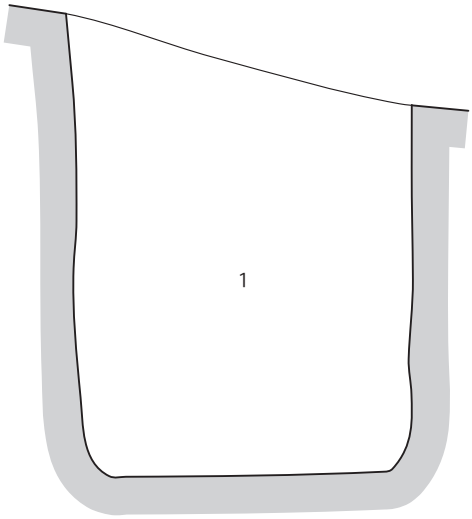
1 c区東側に位置する。径 0.9 mほどの方形を呈し、深さ約 1.7 mを測る。底面から検出した人骨は老年女性で、顔を南西に向けた座葬であったと考えられる。





20.00m

132墓

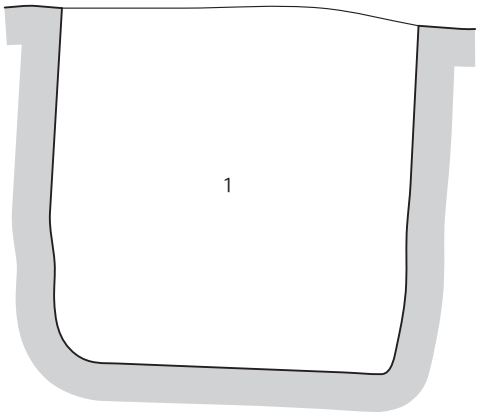


1　赤褐色5YR4/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm

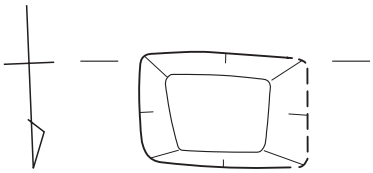
19.30m

89墓



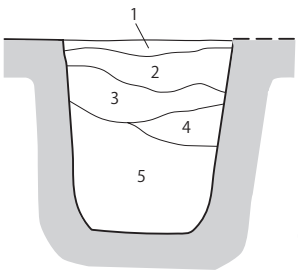
1　暗赤褐色5YR3/6砂質シルト
(基盤ブロックを含む)

0　(1:20)　50cm



20.00m

46墓



1　明赤褐色5YR5/6シルト
（基盤ブロックを含む、しまり悪い）
2　褐色7.5YR4/6砂質シルト
（基盤ブロックを含む、しまり悪い）
3　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
（基盤ブロックを含む、しまり悪い）
4　赤褐色5YR4/6砂質シルト
（基盤ブロックを含む、しまり悪い）
5　にぶい赤褐色5YR4/4砂質シルト
（基盤ブロックを含む、しまり悪い）

0　(1:30)　1m

図 142　46・89・132 墓

25 墓（図 145、図版 47-1）

1 b・c 区にまたがる。南東部は 224 墓と切り合うが、その前後関係は不明。径 0.95 mほどの方形を呈し、深さは約 1.4 mを測る。底面中央の人骨は熟年女性で、座葬であったと考えられる。櫛（181）が頭蓋骨下から出土した。

100 墓（図 145）

1 c 区南東隅に位置する。径 0.9 mほどの方形で、深さも 0.9 mを測る。底面から遺存状態のよい熟年女性の骨を検出。顔を北西に向けた座葬と考えられる。この周囲に白色土壌があり、分析によって稲藁であることが判明した。

102 墓（図 146）

1 c 区南東隅に位置し、Ⅱ期の 101 墓を切る。底面は方形を呈すが、西壁の傾斜がやや緩く、上面は東西に長い形状を呈す。深さ 1.25 mを測る。人骨は北側にまとまっており、老年女性で半腹臥正座位だったと考えられる。人骨周囲からわずかに白色土壌を検出した。稲藁であろう。

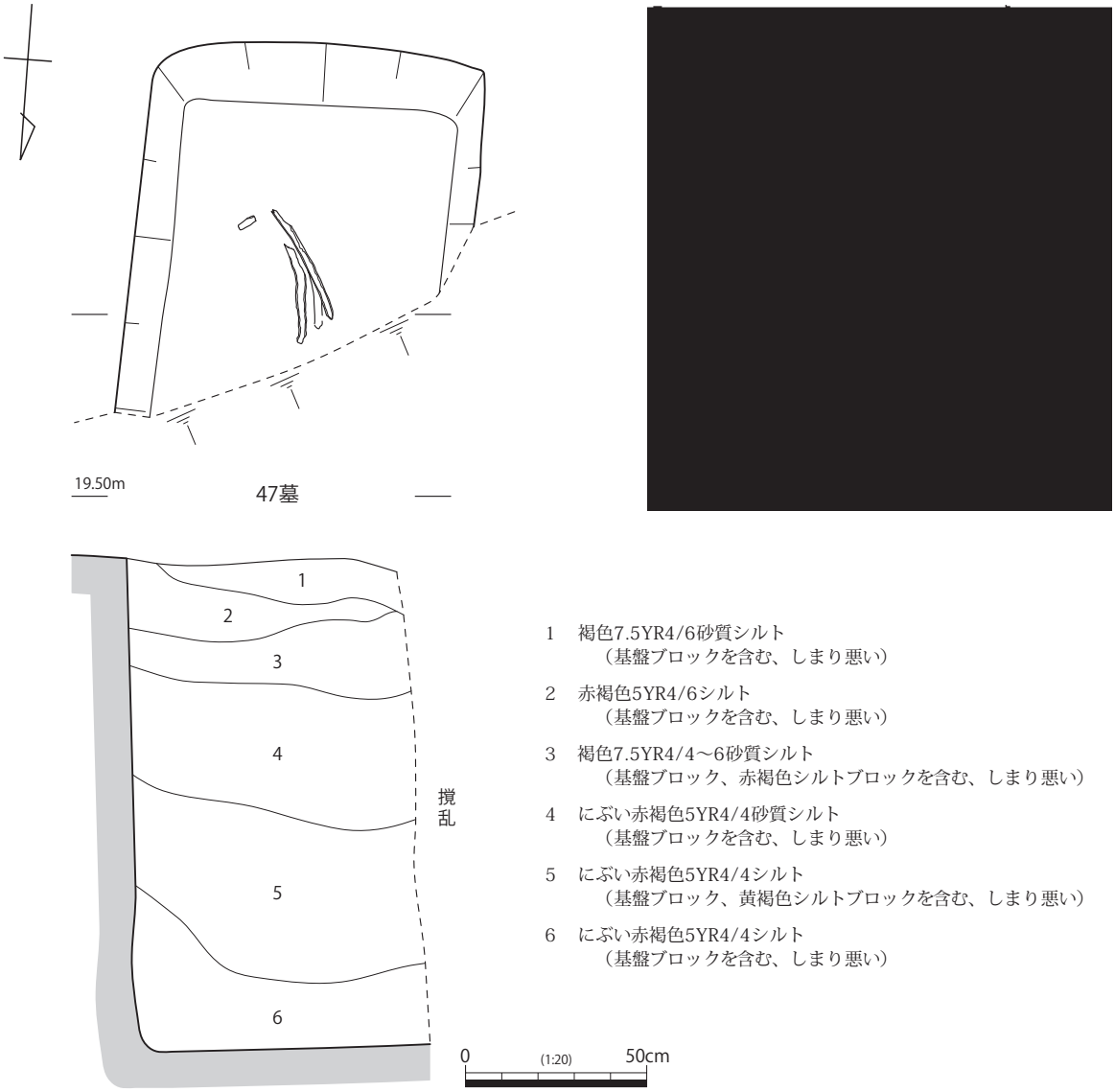


図 143　47 墓および出土遺物

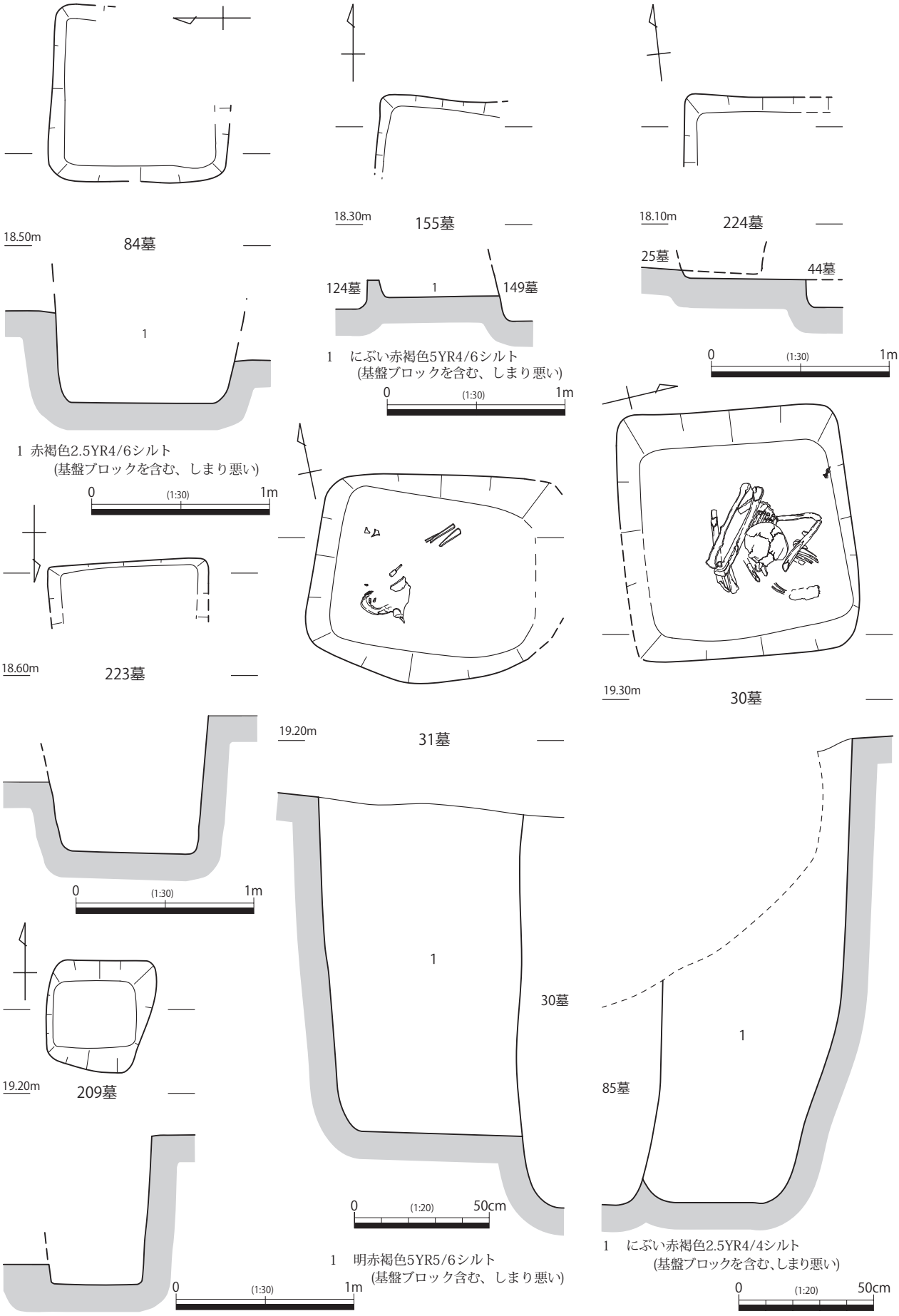
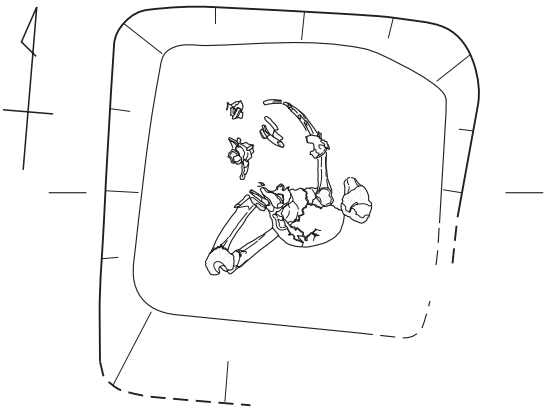


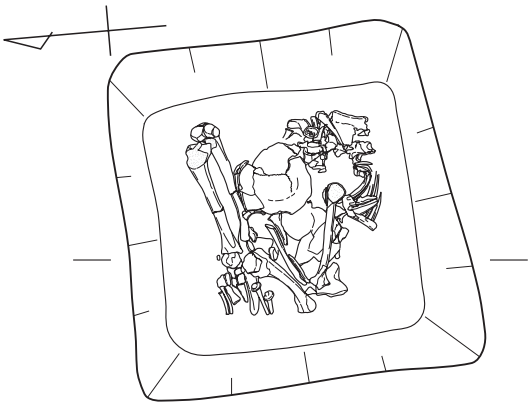
図 144　30・31・84・155・209・223・224 墓

125 墓（図 146）

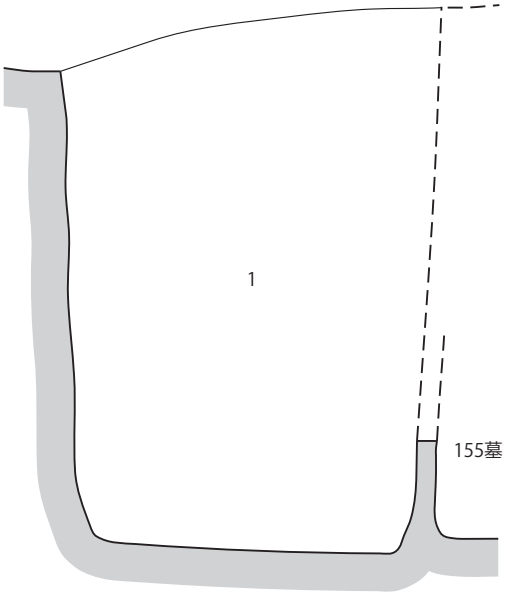
1 c 区中央やや南に位置する。径 0.95 mほどの方形で、深さは 1.05 mを測る。人骨は底面北側にあり、熟年女性が正座位で埋葬されたと考えられる。



19.50m　25墓

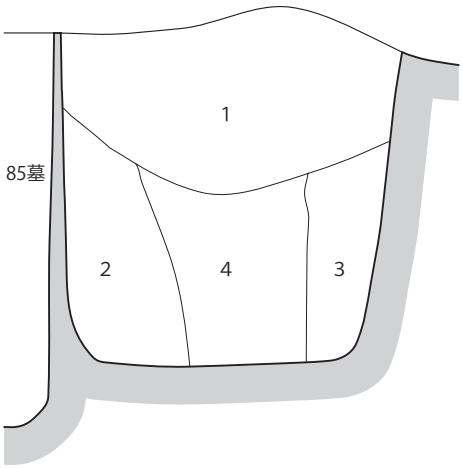


18.70m　100墓



1　赤褐色2.5YR4/6～8シルト
（基盤ブロックを含む、しまり悪い）

0　(1:20)　50cm



1　にぶい赤褐色2.5YR4/4シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い、棺上)

2　赤褐色5YR4/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い、棺裏込め)

3　赤褐色5YR4/6～8シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い、棺裏込め)

4　赤褐色2.5YR4/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い、棺内)

0　(1:20)　50cm

181

0　(1:2)　5cm

図 145　25・100 墓および 25 墓出土遺物

81 墓（図 147）

1 c 区中央やや南に位置し、東側で 74 墓を切る。径 0.9 mほどのほぼ方形を呈し、深さは 1.1 m ほどを測る。底面から出土した人骨は壮年男性で、顔を北北西に向けた座葬と考えられる。

74 墓（図 147）

1 c 区中央やや南に位置し、81 墓に切られる。東西径が 1.25 m、南北 0.95 mを測る長方形で、深さは 0.8 mと 81 墓に比べ浅い。底面から出土した人骨は熟～老年男性で、顔を北東に向けた座葬と考えられる。

53 墓（図 148）

1 d 区北西隅に位置する。径 1.1 mほどの方形を呈し、深さ約 1.1 mを測る。底面中央の人骨は性別不明老年で、座葬であったと考えられる。

186 墓（図 148）

1 d 区北西隅に位置し、Ⅱ期の 188 墓を切る。北側がややいびつながら、南北 1.1 m、東西 1.0 mほどの方形を呈す。深さは 0.6 mほどとやや浅い。

62 墓（図 149）

1 d 区北東隅に位置し、Ⅲ期の 58 墓に南側を切られる。径 0.7 mほどのほぼ方形を呈し、深さは 0.8 mを測る。釘が 2 本出土している以外には遺物はみられない。

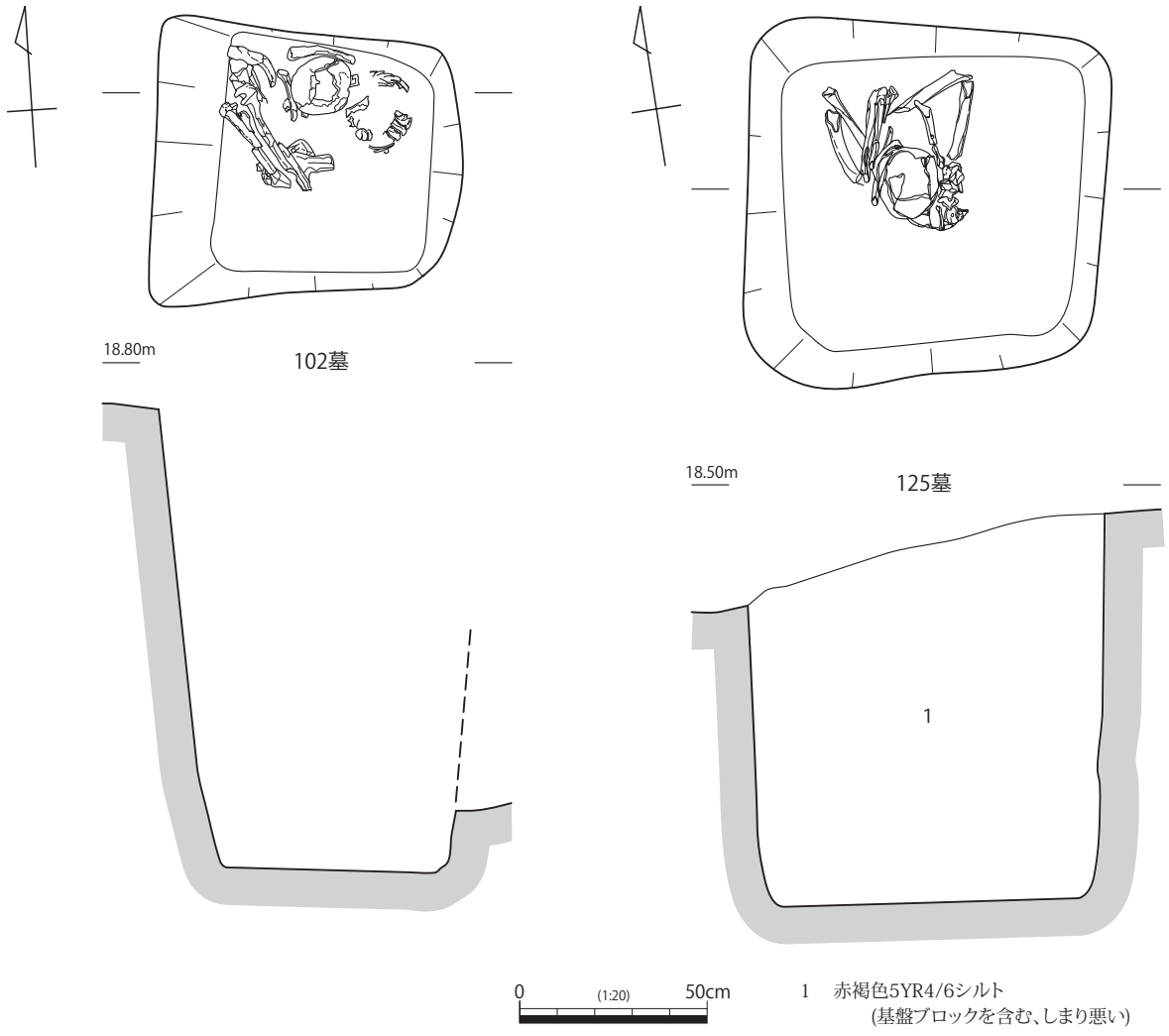


図 146　102・125 墓

141 墓（図 149）

1 d区中央やや北に位置し、西側の 92 墓を切る。西側上面に径 0.4 mほどの礫がいくつかみられた。径 0.9 mほどの方形を呈し、深さは約 0.8 mを測る。底面から熟年男性の骨が出土している。

60 墓（図 149）

10 d区南西隅に位置する。径 1.1 mほどの隅丸方形であろうか。深さ 1.0 mほどを測る。遺物は全く出土していない。

143 墓（図 149）

1 d区北東隅に位置し、Ⅲ期の 69 墓に東側を切られる。東西方向の検出長約 1.0 mで、平面形は台形を呈す。深さは 0.4 mほどあり、底面は東側が 0.1 mほど高い。遺物は出土していない。

86 墓（図 149）

1 d区北東隅に位置し、東側でⅡ期の 187 墓を切る。径 0.7 mほどの方形を呈し、深さは約 0.6 mを測る。遺物は出土していない。

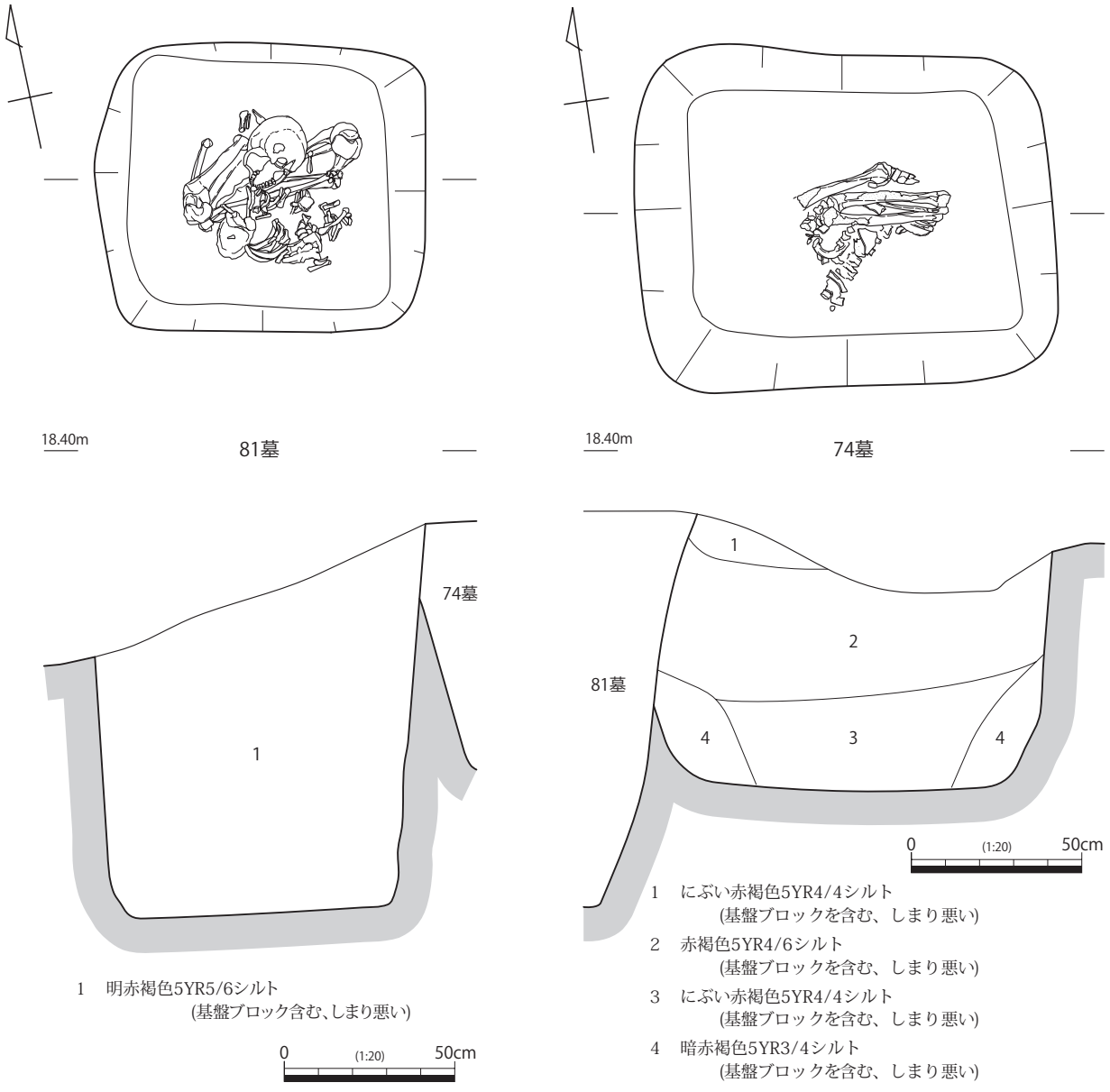


図 147　74・81 墓

160 ～ 162 墓（図 150、図版 47-3）

１ｄ区南西隅に位置し、３基が南北に列状をなす。相互の切り合い関係は把握できなかった。検出した深さはまちまちだが、底面レベルを比較すると、160・161 墓が標高 13.7 mに対し、これらの間にある 162 墓が 13.5 mと深くなっている。

160 墓は径 0.95 mの方形を呈し、底面中央からは青年女性と考えられる人骨が出土した。周囲には灰白色土壌があり、分析により稲藁であることが判明している。その分布範囲および釘の出土状況から、径 0.4 mほどの棺桶であったと考えられる。161 墓は径 1.05 mの方形で、底面やや東側から出土した人骨は熟年男性で、座葬であった。周囲には灰白色土壌があり、分析は未実施ながら稲藁であろう。その分布範囲から径 0.5 mの棺桶であったと想定する。162 墓は径 0.85 mの方形で、一見他の２基よりやや小型のようであるが、先述のとおり検出した深さが浅いためであり、本来は同規模であったと考えられる。底面から出土した人骨は壮年女性で、顔を北北西に向けた半腹正座位と考えられる。

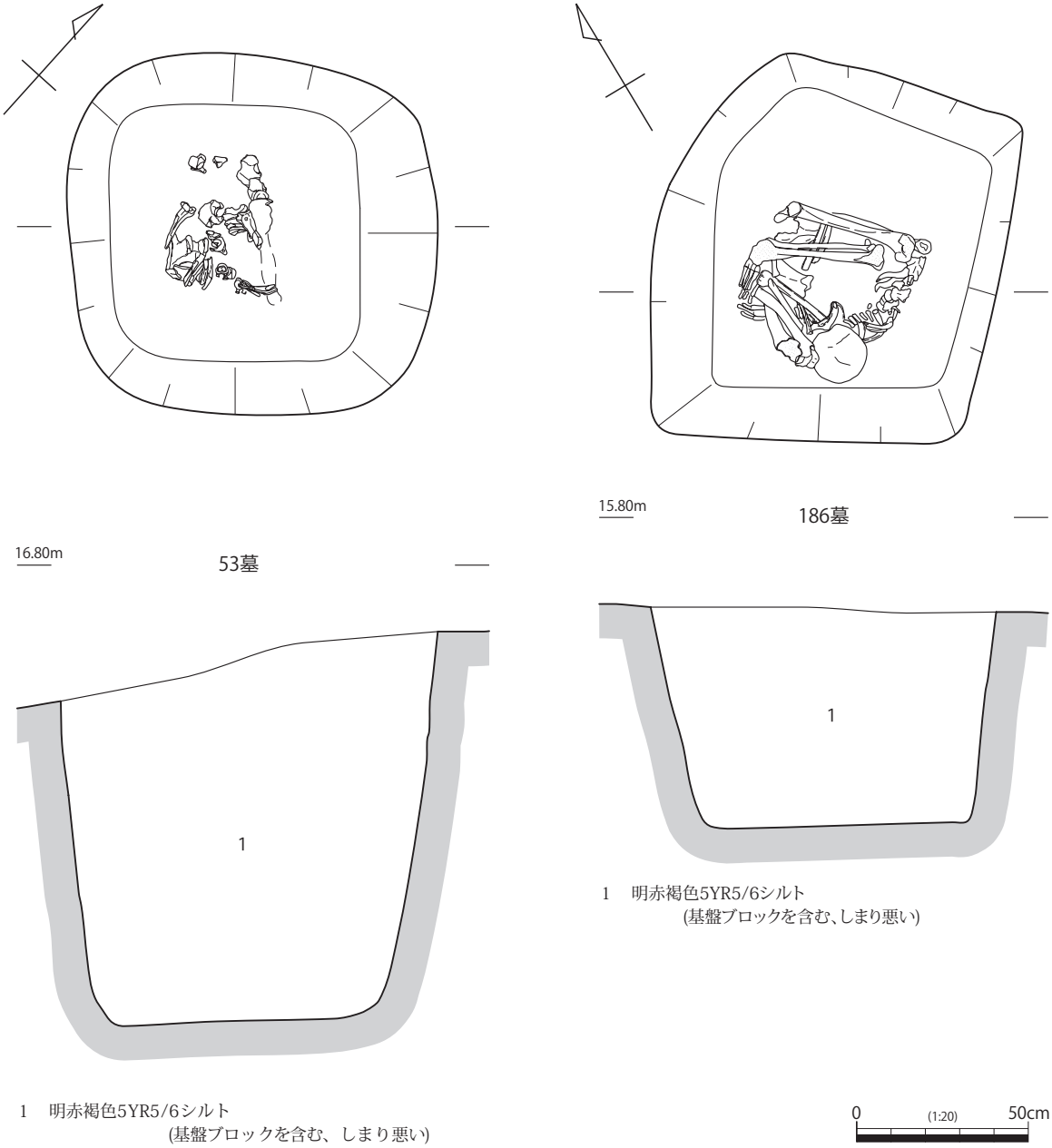


図 148　53・186 墓

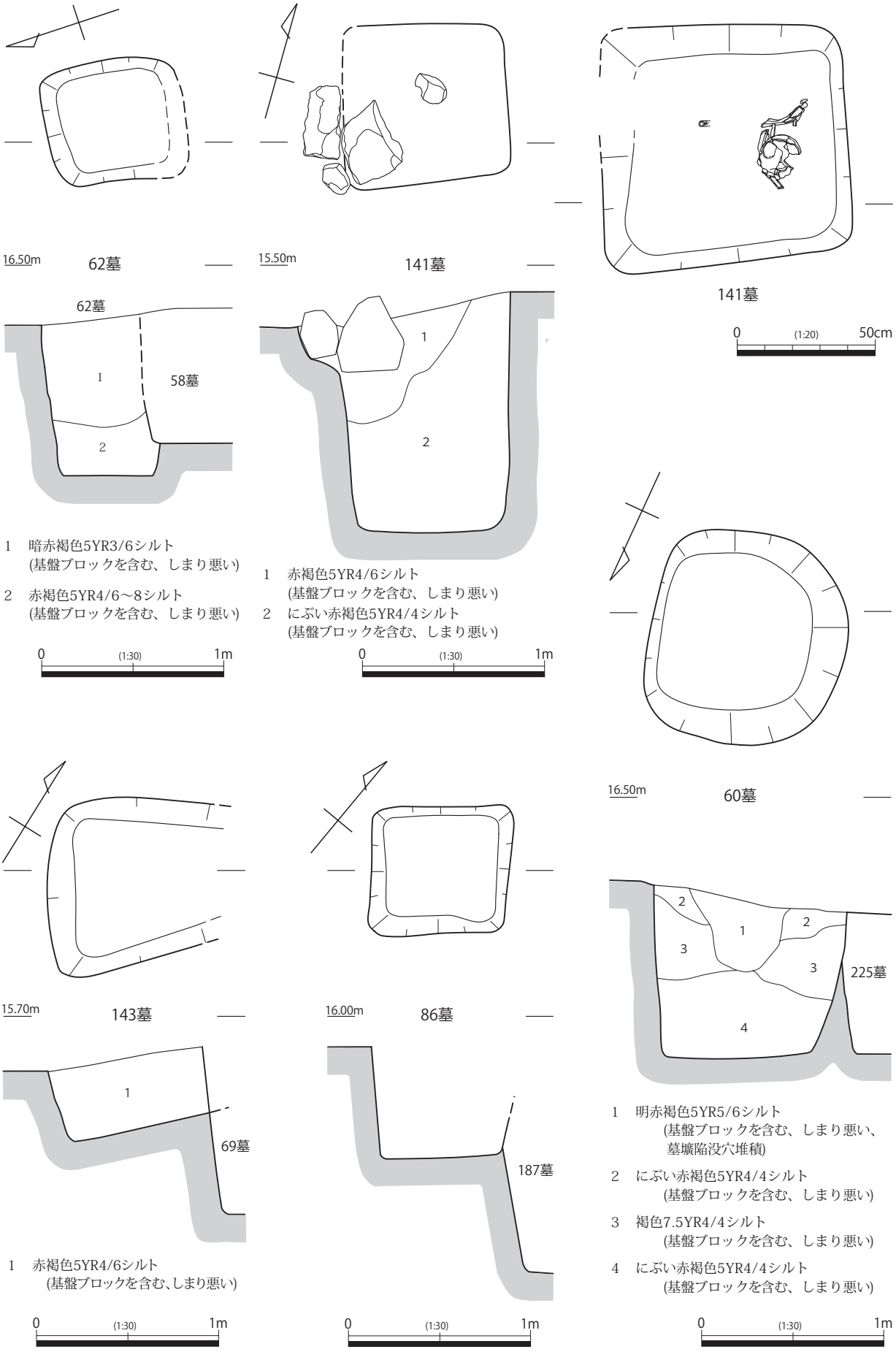


図 149　60・62・86・141・143 墓

172 墓（図 150）

２ｅ区北東隅に位置する。径 0.85 mの方形を呈し、検出した深さは 0.45 mほどである。底面中央より人骨が出土した。熟～老年女性で、顔を北西に向けた座葬と考えられる。人骨北側を中心に灰色土壌がみられ、分析未実施ながら他の事例同様稲藁であろう。径 0.4 mほどの棺桶に納められたと想定する。

124・142 墓（図 151）

１・２ｄ区にまたがる２基である。南側の 124 墓が 142 墓を切る。前者は径 1.05 mの方形で、深さ 1.25 mを測る。底面中央にある人骨は熟～老年男性で、西を向く座葬と考えられる。後者は東西径 0.9 mほどで、おそらく方形を呈す墓壙であろう。深さ 1.3 mほどを測る。底面中央の人骨は壮年女性で、顔を南西に向けた座葬と考えられる。いずれにも灰白色土壌があり、142 墓を分析したところ稲藁と判定された。

136 墓（図 152）

２ｄ・ｅ区にまたがり、137 墓を切る。南北 1.05 m、東西 0.95 mとほぼ方形を呈する墓壙で、深さは 0.65 mを検出した。底面中央から出土した人骨は熟年の女性か。顔を北西に向けた半仰臥屈位と考えられる。人骨の北側で灰色土壌がみられ、分析によって稲藁と判定された。また籾殻も含まれていたことがわかった。

137 墓（図 152）

２ｄ区北西隅に位置し、西側を 136 墓に切られる。径 0.8 mほどのほぼ方形を呈し、深さは 0.55 mを検出した。底面から出土した人骨は壮年男性で、顔を北西に向けた座葬と考えられる。

202 墓（図 152）

２ｄ区北西隅に位置する。226 墓と切り合うがその関係を把握できなかったため、時期不明としている。南北 1.3 m、東西 0.85 mほどを測る長方形で、上面はかなり削平される。226 墓に切られるのであれば、その形状からⅠ期に遡る可能性もあるが、確定できない。

156 墓（図 152）

２ｄ・ｅ区にまたがり、Ⅱ期の 173 を切る。南北 0.8 m、東西の検出長は 0.9 mで、東西に長い隅丸長方形状を呈すと考えられる。深さは 0.55 mほど。遺物は全く出土していない。

127・198 墓（図 152）

２ｄ区北西隅に位置する。198 墓を 127 墓が切り、198 墓は 137 墓を切っている。127 墓は南北 0.9 m、東西 0.75 mを測る長方形、198 墓は 1.05 mの方形を呈す。人骨など遺物は出土していない。

134 墓（図 153）

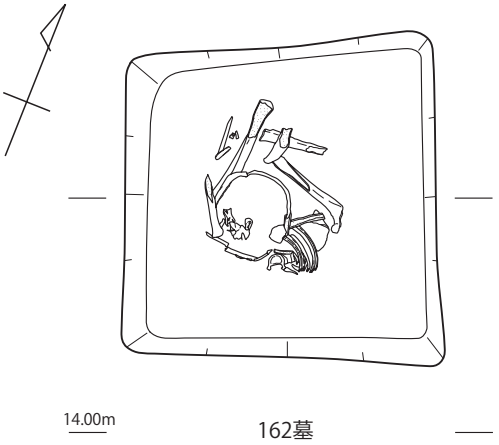
１・２ｄ区にまたがりⅢ期の 134 墓に北側を切られる。長径 1.0 m、短径 0.75 mほどの長方形を呈す。墓壙内から釘が出土したことから墓と判断している。

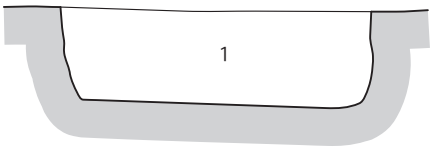
228 墓（図 153）

１ｅ区南東隅に位置し、Ⅱ期の 180 墓を切る。径 0.7 mほどのほぼ方形を呈す。遺物は全く出土していない。

148 墓（図 153）

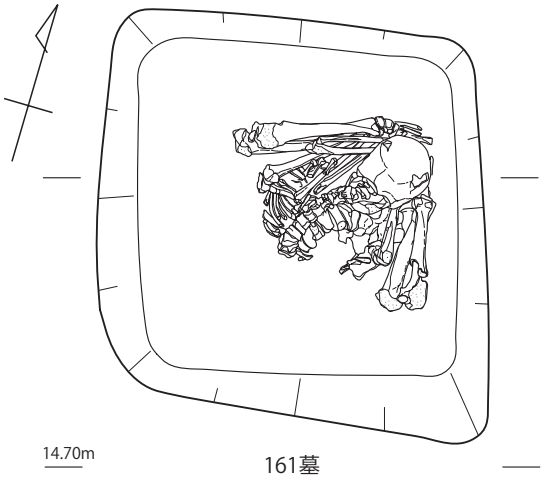
２ｅ区北東側に位置し、北東部分をⅡ期の 138 墓と切り合うが、その関係は不明である。南北 1.5 m、東西 1.15 mを測る長方形で、深さは 1.15 mであった。138 に切られるのであれば、その形状

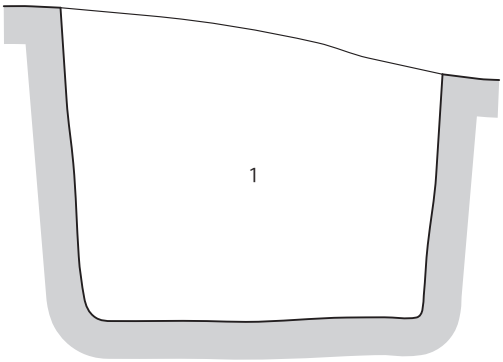




1　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

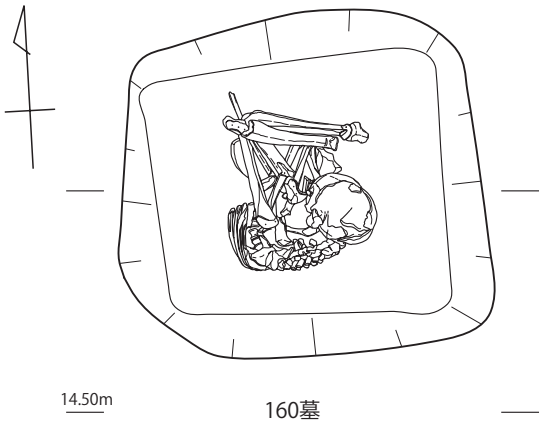
0　(1:20)　50cm

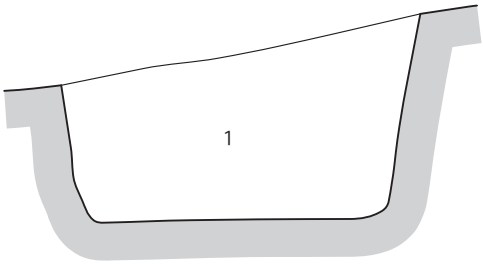




1　赤褐色5YR4/6シルト(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

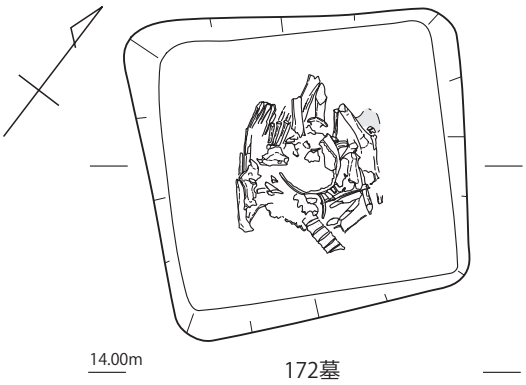
0　(1:20)　50cm

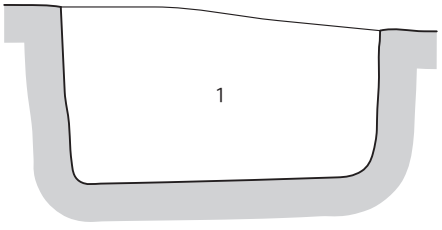




1　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm





1　にぶい赤褐色5YR5/4シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm

図 150　160 ～ 162・172 墓

や長軸方向などから、Ⅰ期に比定することができるが、確定できなかった。

154 墓（図 153）

２ｅ区北東隅に位置する。径 0.8 mほどの方形で、深さは 0.7 mほどを測る。埋土観察および釘の分布状況から、径 0.35 mほどの棺があったことが想定されるが、人骨等は検出していない。

213 墓（図 153）

２ｅ区北東隅に位置する。現代の撹乱によって墓壙北西隅のみ検出した。方形を呈するか。

158 墓（図 153）

２ｄ・ｅ区にまたがって位置する。径 1.2 mの方形を呈する。上面が削平されており、深さは 0.5 mほどを検出したのみである。遺物は出土していない。

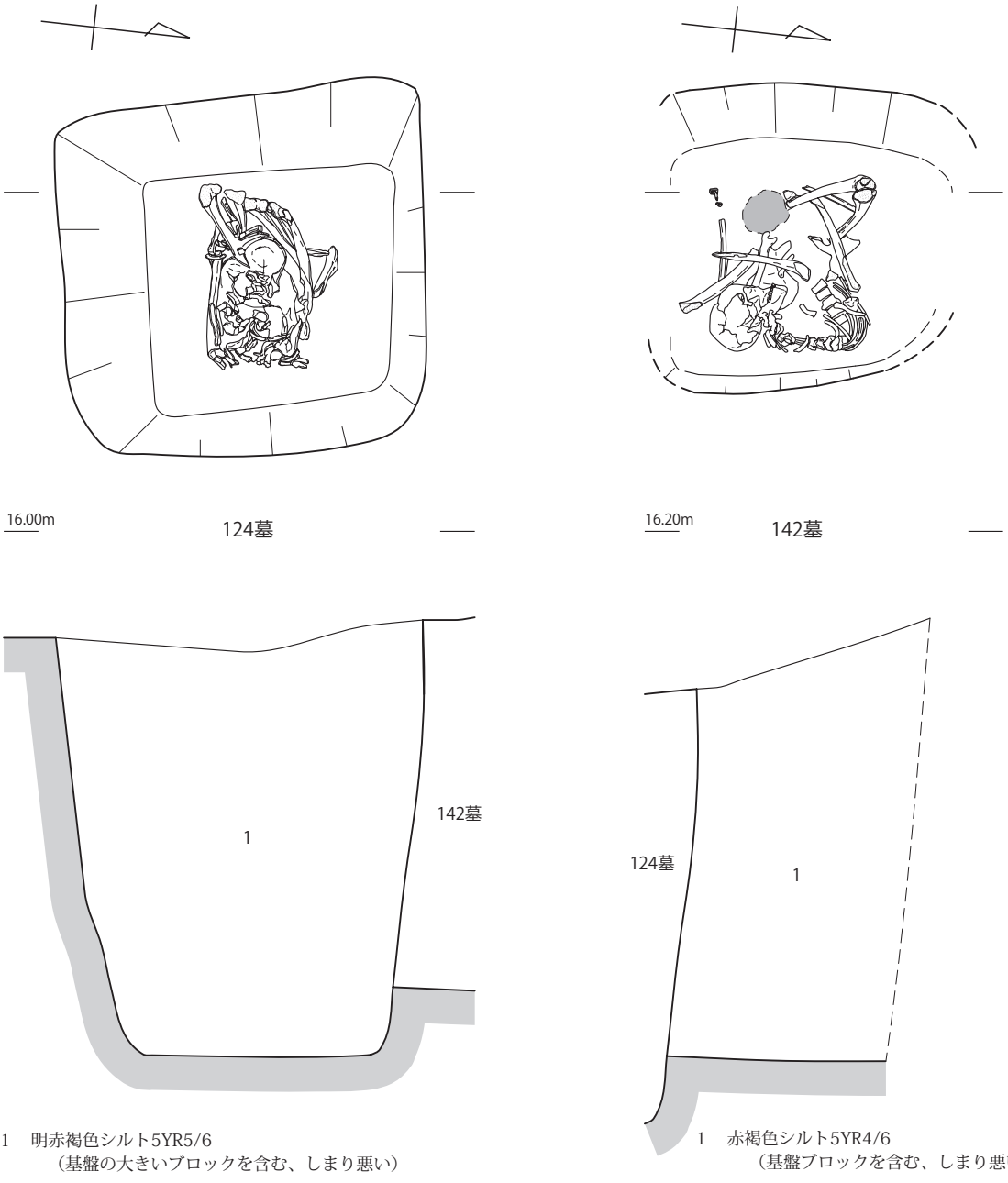
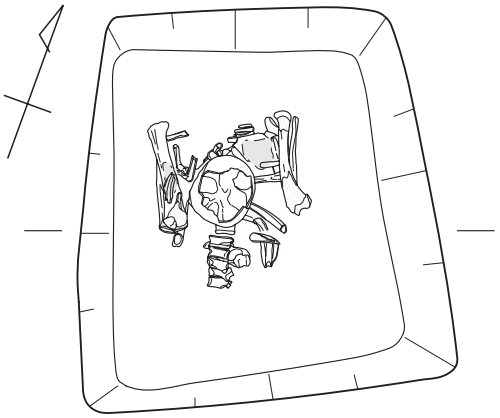
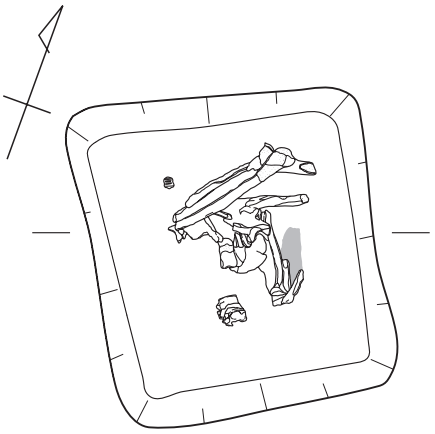


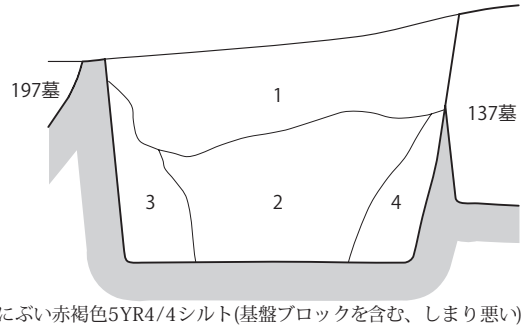
図 151　124・142 墓



13.90m　136墓

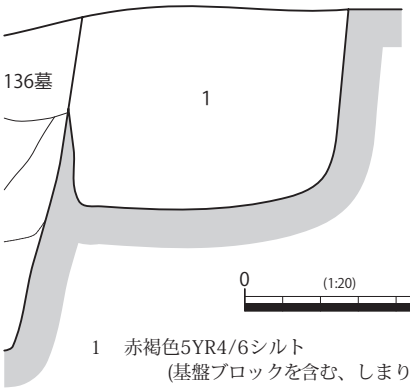


13.90m　137墓



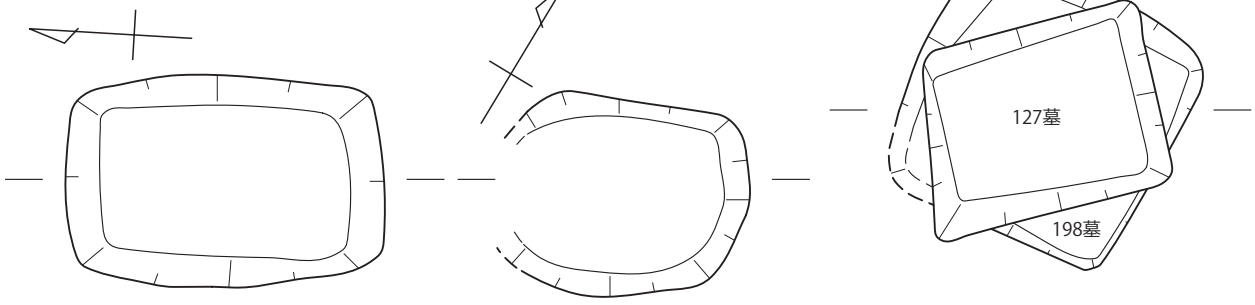
1　にぶい赤褐色5YR4/4シルト(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
2　明赤褐色5YR5/6シルト(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
3　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
　　(基盤ブロックを含む、しまり悪い、棺裏込め)
4　赤褐色５YR4/6シルト
　　(基盤ブロックを含む、しまり悪い、棺裏込め)

0　(1:20)　50cm

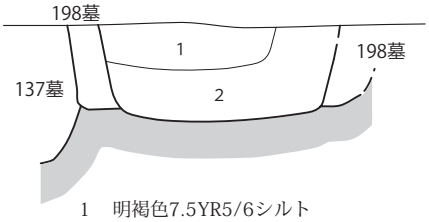


0　(1:20)　50cm

1　赤褐色5YR4/6シルト
　　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)



14.00m　127墓・198墓

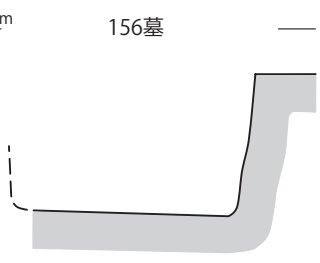


1　明褐色7.5YR5/6シルト
　　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
2　明赤褐色5YR5/6シルト
　　(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

14.50m　202墓

0　(1:30)　1m

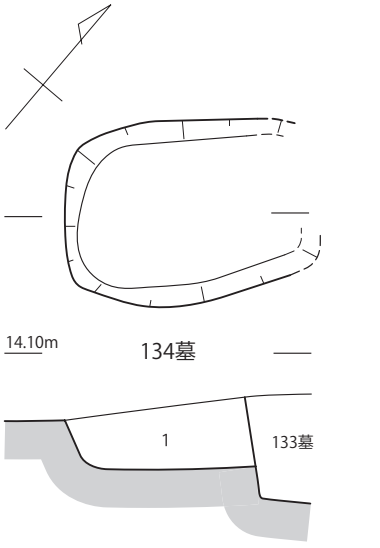
14.00m　156墓

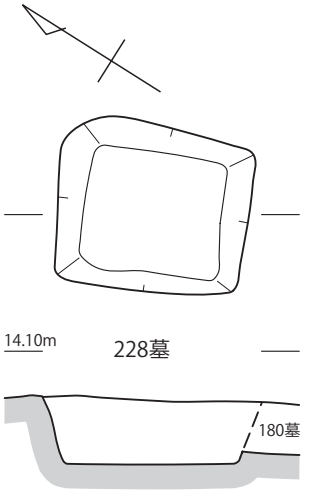


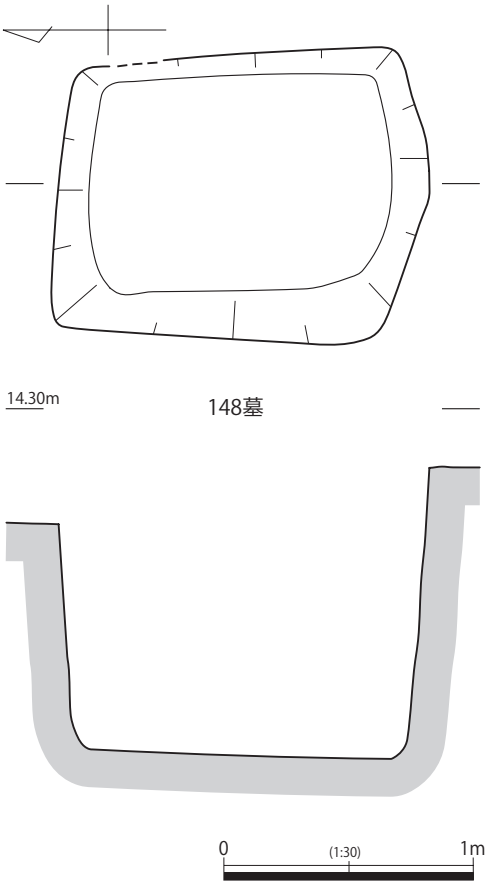
0　(1:30)　1m

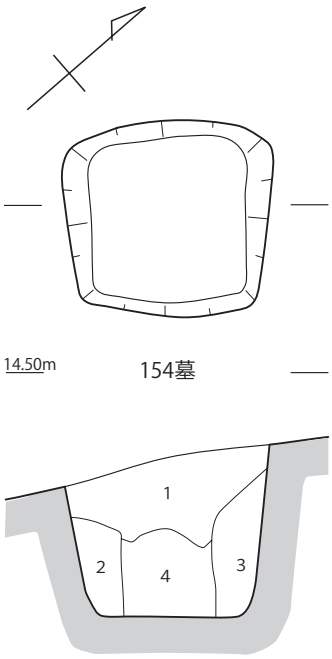
0　(1:30)　1m

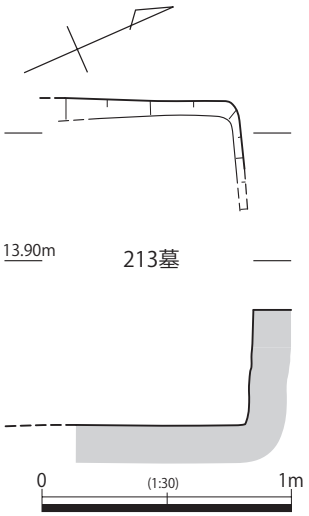
図 152　127・136・137・156・198・202 墓

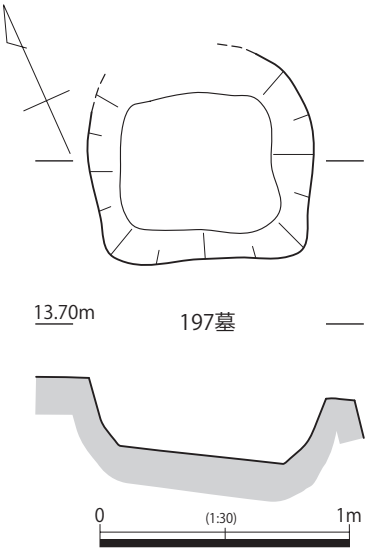












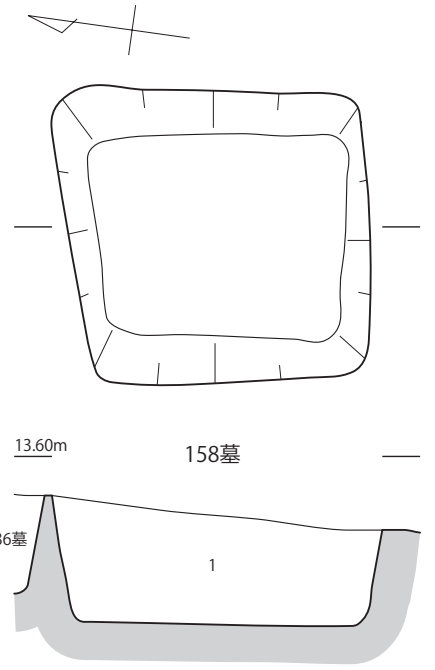
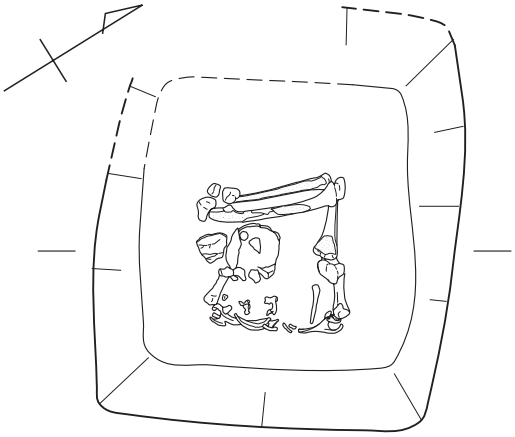
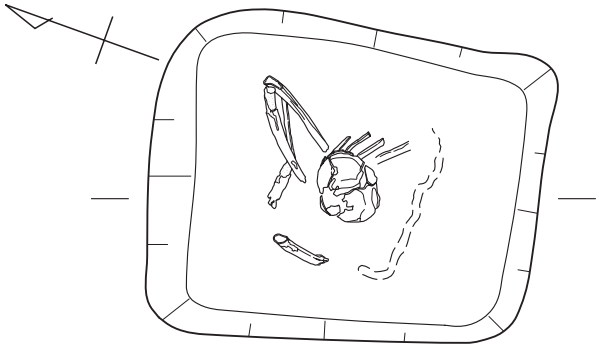


図 153　134・148・154・158・197・213・228 墓



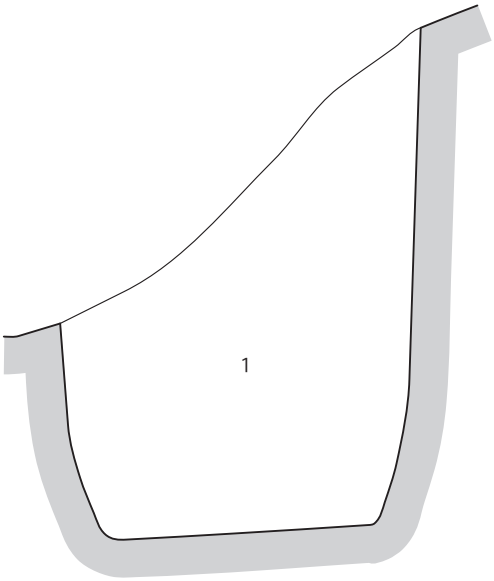


14.00m

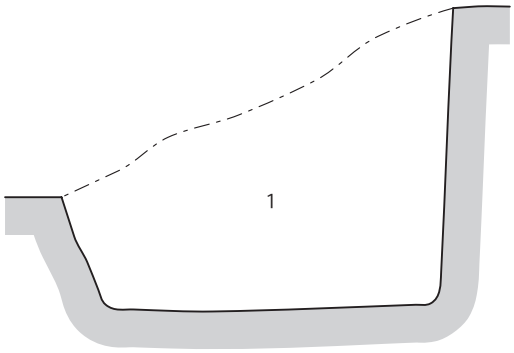
50墓

14.50m

159墓

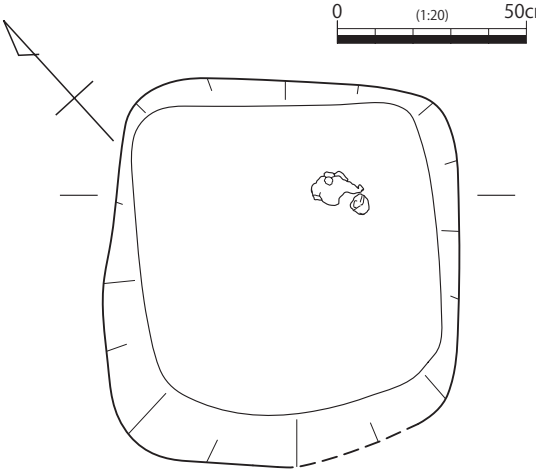


1　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)



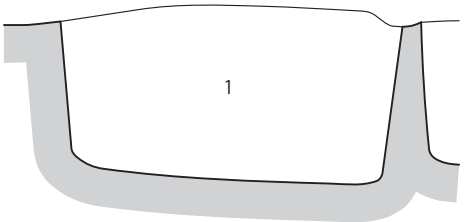
1　明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm



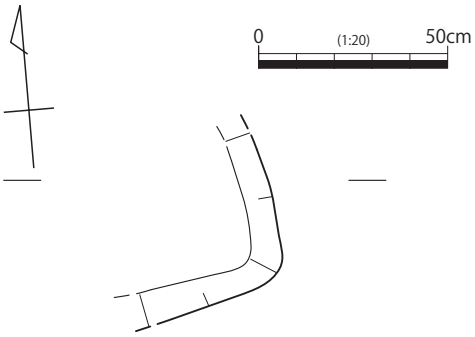
13.30m

97墓



1 明赤褐色5YR5/6シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

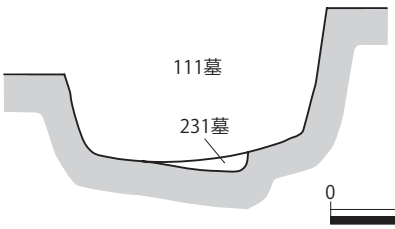
0　(1:20)　50cm



0　(1:20)　50cm

13.60m

231墓



0　(1:30)　1m

図 154　50・97・159・231 墓

197 墓（図 153）

2 e区北東側に位置する。北側を撹乱され、Ⅱ期の 185 墓との関係は把握できなかった。径 0.9 mほどの方形を呈する。遺物は出土していない。

159 墓（図 154）

1・2 e区にまたがり、Ⅲ期の 103 墓に西側を切られる。長径 1.1 m、短径 0.95 mほどの長方形を呈し、深さは 1.3 mを測る。底面中央から出土した人骨は熟年女性で、顔を西北西に向けた座葬と考えられる。また灰白色土壌があり、分析によって稲藁と判明した。その分布から 0.4 mほどの棺桶に収められたと想定する。

50 墓（図 154）

2 e区北側に位置する。南北 1.05 m、東西 0.85 mほどの長方形を呈し、深さは 0.75 mほどを測る。底面中央の人骨は壮～熟年女性で、顔を北北西に向けた座葬と考えられる。人骨南側で帯状に灰色土壌を検出したが、おそらく稲藁であろう。その分布から 0.4 mほどの棺桶が復元できる。

231 墓（図 154）

1 e区南側に位置し、Ⅲ期の 111 墓に大きく切られるため、南東隅部分しか残っていない。

97 墓（図 154）

2 e区北西隅に位置し、南隅を 88 墓に切られる。径 1.0 mほどのほぼ方形を呈し、深さは 0.45 mを検出した。底面東隅で成人の肩甲骨のみが出土した。

93 墓（図 155）

2 e区北西側に位置し、南側で 70・71 墓を切る。北側は根が伸びており、上端の検出はできていない。東西径 1.1 mほどを測り、底面形状から方形のものと考えられる。底面中央から出土した人骨は熟年女性で、顔を北北西に向けた座葬であった。人骨下から稲藁起源の白色土壌を検出した。

88 墓（図 155）

2 e区北西隅に位置し、北東隅で 97 墓を切る。南北 1.2 m、東西 1.05 mほどのほぼ長方形を呈す。底面に頭蓋骨や歯が散布していたが、壮～熟年と判断されたのみである。

68・94 墓（図 155）

1 e区南西側に位置し、68 墓が東側を 94 墓に切られ、94 墓は東側でⅡ期の 98 墓を切る。いずれも上面を削平され、検出した深さは浅い。68 墓は 0.95 mほどの方形を呈す。人骨はないが、多量の釘が出土しており、土葬であったことが窺える。94 墓はほぼ径 1.0 mの方形を呈す。遺物はない。

99 墓（図 155）

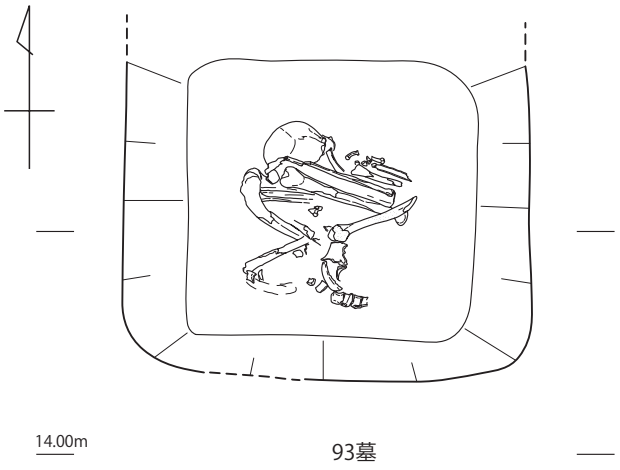
1 e区南西側に位置し、西側でⅡ期の 98 墓と切り合う。ただしその前後関係は把握できなかったため、本墓は時期不明とした。東西径 0.9 mほどの方形を呈すと考えられる。遺物は出土していない。

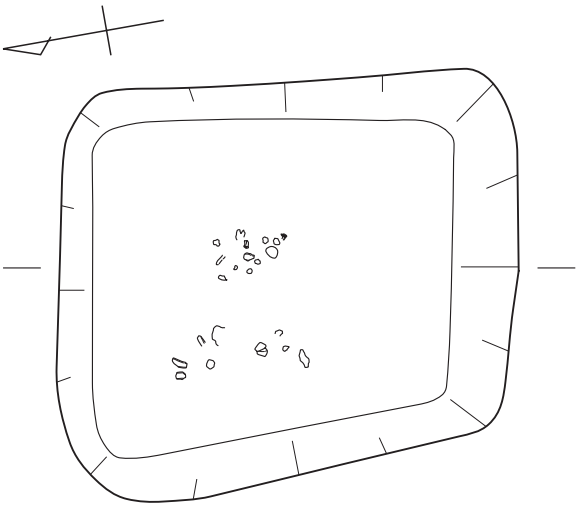
55・56 墓（図 156）

1 e区中央やや東側に位置する。56 墓が西側の 55 墓を切る。前者は径 0.9 mほどの方形で、深さは約 1 mを測る。後者は南北径が 0.85 mを測り、概ねその規模の方形であろう。深さは 0.6 mほどと 56 墓に比べ浅い。55 墓からはまとまって釘が出土したため、いずれも墓と判断した。

214・215 墓（図 156）

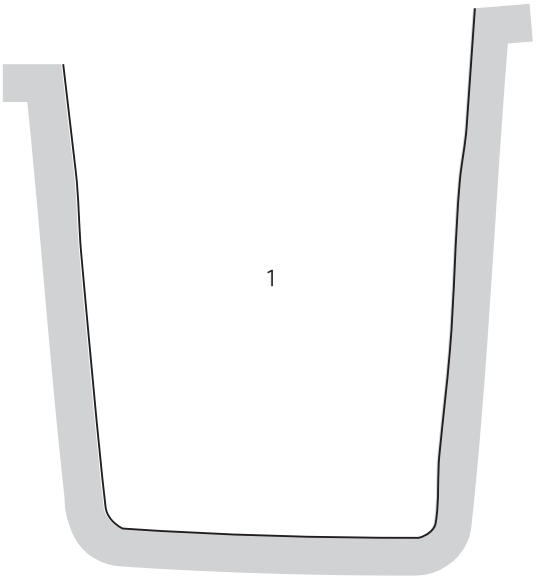
1 e区ほぼ中央に位置し、2 基が近接する。どちらも上面をかなり削平されており、本来の深さ等はわからないが、検出深度からそれほど深いものとは考えられない。北側の 214 墓は径 0.6 mほど、





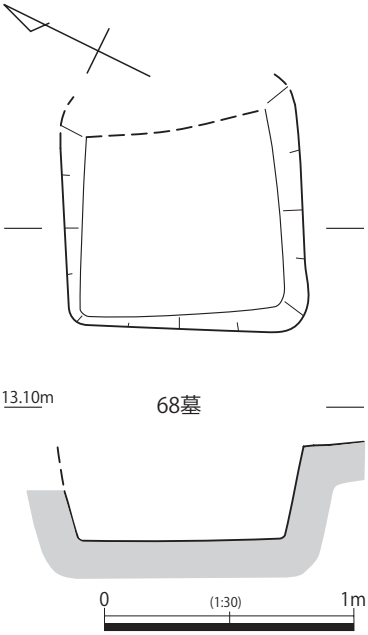
1　にぶい赤褐色5YR4/4シルト
(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

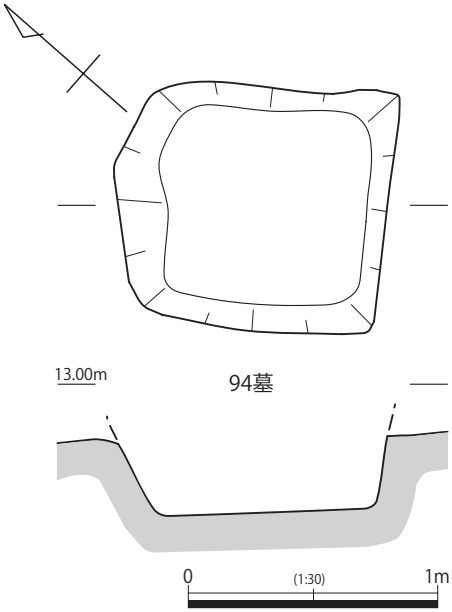
0　(1:20)　50cm



1　明赤褐色5YR5/6シルト(基盤ブロックを含む、しまり悪い)

0　(1:20)　50cm





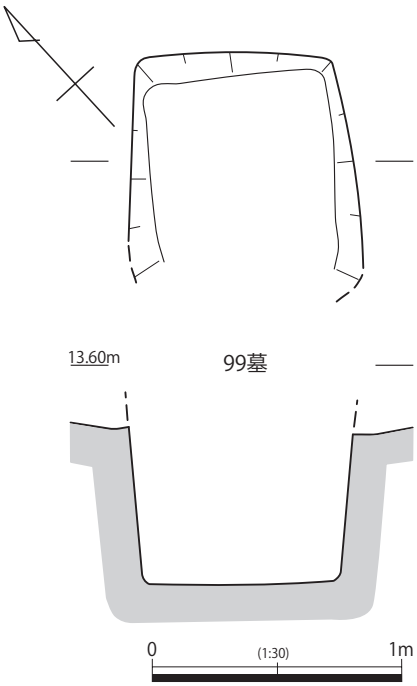


図 155　68・88・93・94・99 墓

215 墓は径 0.5 mほどの方形を呈し、後者の方が一回り小さく、深さも浅い。どちらからも遺物は出土していないが、本墓地内の状況から墓と判断している。

208 墓（図 156）

1 e区西側に位置する。径 1.1 mほどの方形を呈し、深さ 0.8 mほどを検出した。遺物は全く出土していない。

107 墓（図 156）

1 e区南西側に位置し、Ⅲ期の 59・110 墓に大きく切られるため、北側隅部分しか残っていない。また遺物等も出土していない。

112 墓（図 156）

1 e区中央やや東側に位置する。長径 1.05 m、短径 0.8 mほどの長方形を呈し、深さは 0.85 mを測る。北と東側の２箇所、底面よりやや浮いたところから人骨が出土したが、年齢、性別等不明である。

63 墓（図 157）

1 f区南東隅に位置する。東西上端は 1.2 mとやや広いが、底面が方形を呈しているため、南北径 1.05 mほどの方形を呈すると考えられる。深さは 1.0 mほどを測る。釘が６本出土したのみであった。

235・236 墓（図 157）

1 e・f区にまたがる。236 墓は東西 1.2 m、南北 1.05 mほどを測り、やや長方形を呈す。検出した深さは 0.35 mほどを測る。235 墓は東を 236 墓、北を 63 墓に切られるため、南西隅が残るのみである。どちらからも遺物は出土していない。

145・163 墓（図 157）

1・2 f区にまたがって位置する。145 墓が北側の 163 墓を切る。前者は長径 1.4 m 、短径 1.1 mほどの長方形を呈す。後者は東西径 0.65 mほどを測るが、平面形は不明。どちらも深さはほぼ同じで、0.55 mほどを測る。遺物は出土していない。

146 墓（図 157）

2 f区北側に位置し、Ⅱ期の 199 墓を切る。径 0.75 mほどのほぼ方形を呈し、深さは 0.5 mほどを測る。遺物等は全く出土していない。

237・238 墓（図 157）

2 f杭周辺に位置する。237 墓は南側で 238 墓を切り、北側で 236 墓に切られる。237 墓は東西径 0.9 mで、南北の長い長方形を呈するか。238 墓は径 1.0 mほどの方形を呈する。どちらからも遺物は出土していない。

207 墓（図 157）

2 f区東側に位置する。南北 0.55 m、東西 0.65 mほどのやや長方形を呈す。深さは 0.2 mほどを検出したのみで、遺物は出土していない。

169 墓（図 158）

2 e区西側に位置し、南側で 170 墓を切る。長径 0.9 m、短径 0.75 mほどの長方形を呈し、検出した深さは 0.8 mほどであった。遺物は出土していない。

170 墓（図 158）

2 e区西側に位置する。北側を 169 墓に切られるが、長径 1.2 m、短径 0.7 mほどの長方形を呈す。

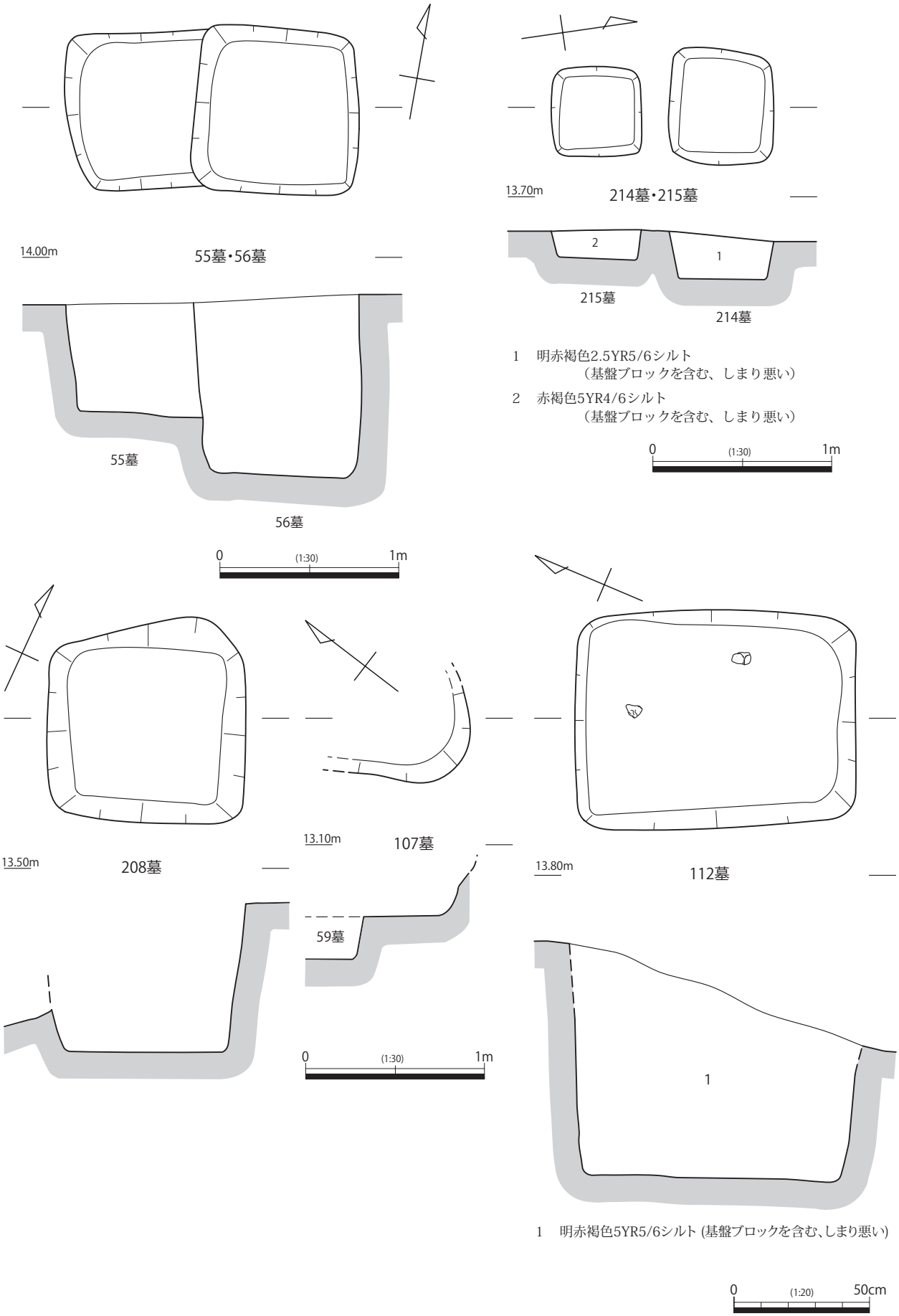


図 156　55・56・107・112・208・214・215 墓

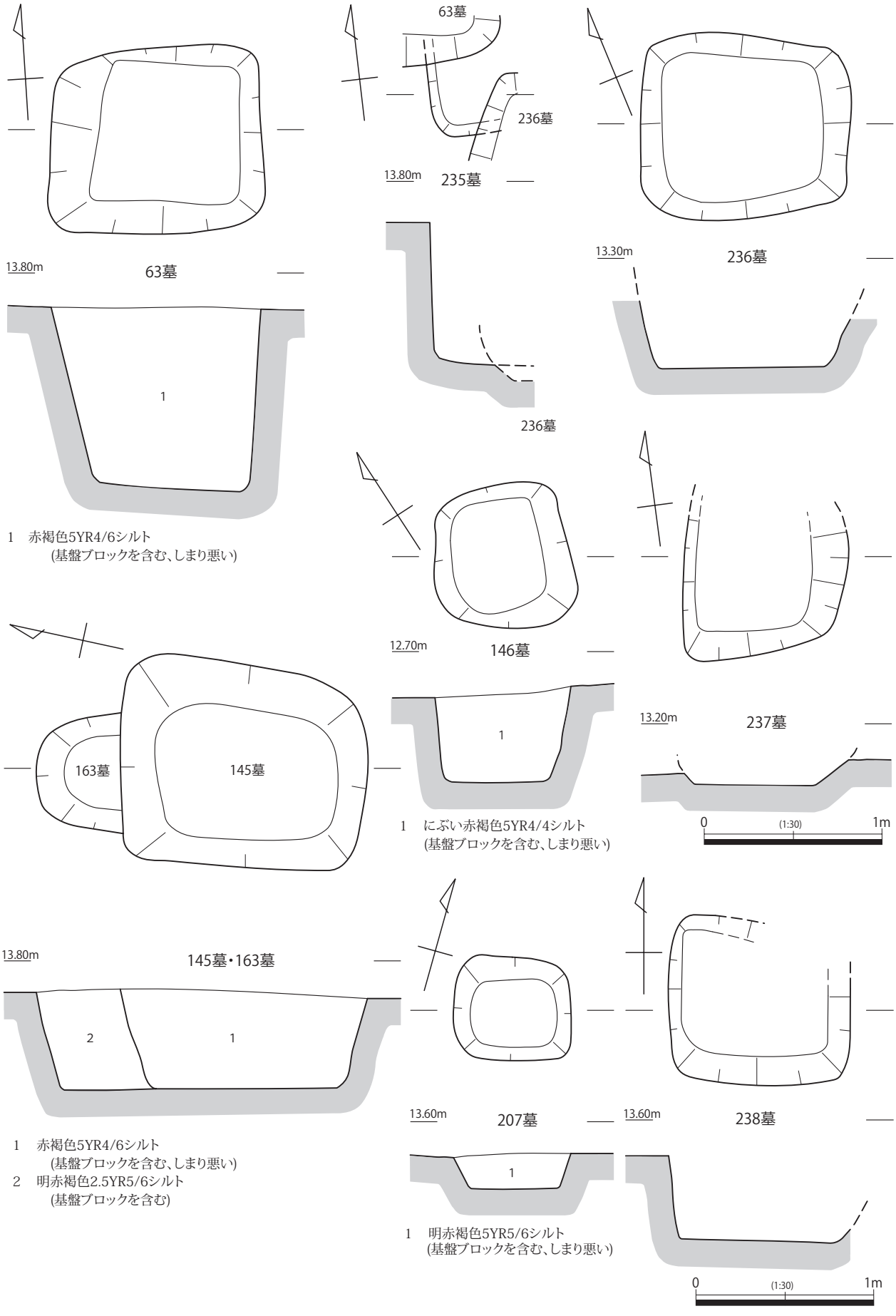


図 157　63・145・146・163・207・235 ～ 238 墓

深さは 0.6 mほどを測る。

212 墓（図 158）

２ｅ区西側に位置する。径 0.9 mほどの方形を呈し、深さ 0.8 mを測る。遺物は出土していない。

240 墓（図 158）

２ｅ区西側に位置する。北側は 205 墓に切られるが、長径 1.15 m、短径 0.9 mほどの長方形を呈し、検出した深さは 0.25 mであった。遺物は出土していない。

205 墓（図 158）

２ｅ区西側に位置し、170・240 墓を切る。長径 0.8 m、短径 0.65 mほどのややいびつな長方形を呈す。底面は北側が高く、南側に傾斜する。

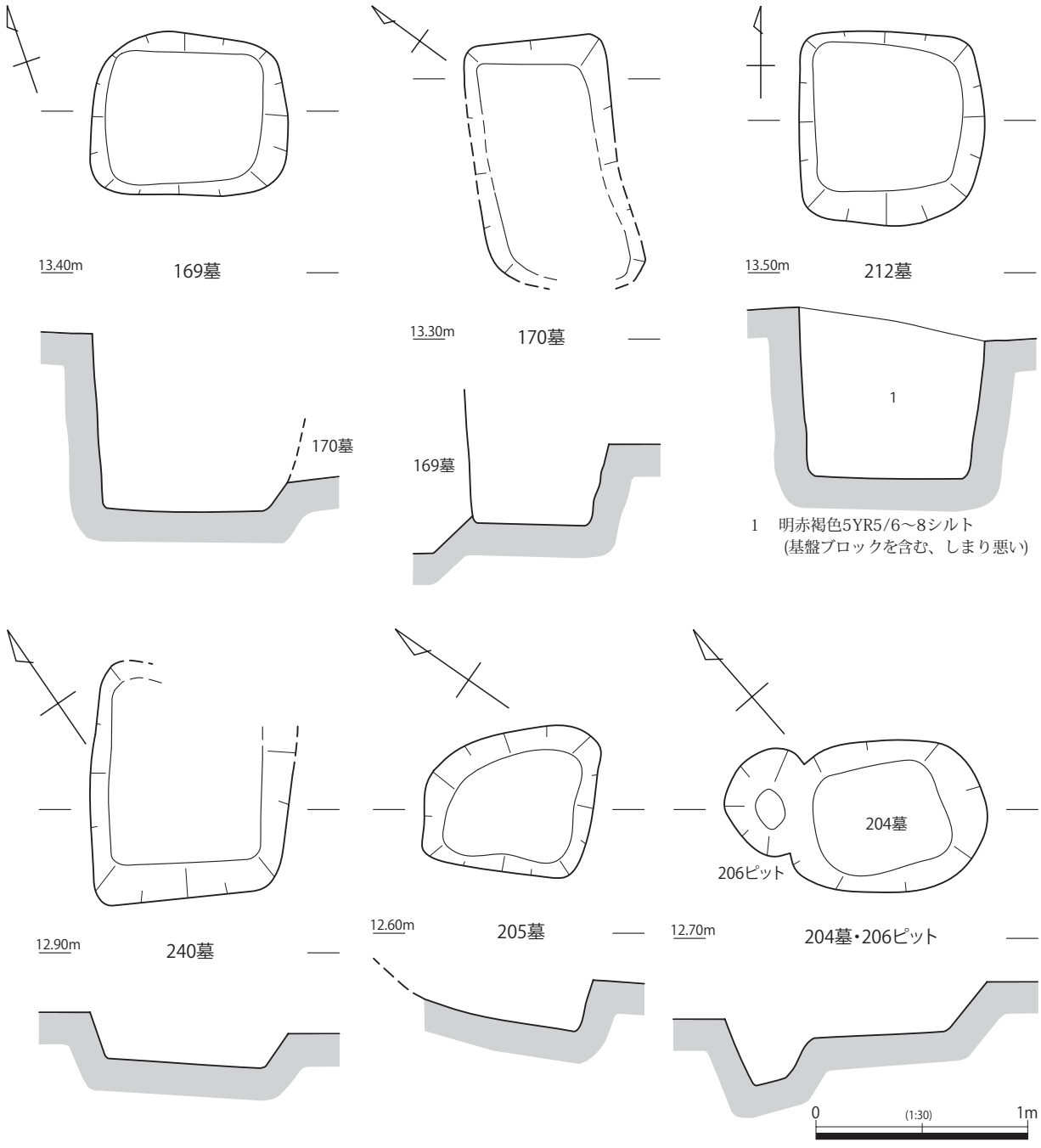


図 158　169・170・204・205・212・240 墓、206 ピット

204 墓・206 ピット（図 158）

２ｅ区西側に位置し、170 墓を切る。204 墓は長径 0.95 m、短径 0.7 mほどを測る長方形の墓壙。検出した深さは 0.25 mほどであった。その北側にある 206 ピットとの切り合いはわからないが、ピットは径 0.5 mほどを測る。いずれも遺物は出土していない。

ｂ）その他の遺構

平坦面

調査区南東斜面で２基の平坦面を確認している。平坦面ではそれぞれ方形の土坑を確認している。遺物などがないので時期や性格はよくわかっていない。ただ、平成 20 年度調査では北斜面に平坦面を設けて中世の墓が造られている。そのため、土坑が墓になる可能性が想定される。

以下、各平坦面について詳しく述べる。

平坦面１（図 159）

15 号墳の南裾を壊す形で造られている。東西 4.3m 以上、南北 3.1 mで、東側は調査区外になる。また西側も撹乱の影響で不明瞭である。

北側で 0.8m 程度基盤層を削ることで平坦面としているが、厳密には北から南へ 0.2m 程度の傾斜がある。北西辺には浅く溝状に掘られているが、段の裾全体にめぐらせるような意識は見られない。

平坦面上には３基の土坑が確認されている。118 土坑は東西・南北とも 1.28 mのやや崩れた方形をしており、深さは 0.48 m。上層に炭を含む灰褐色シルトが、下層には橙色系のシルトが堆積する。121 土坑は南北 1.17 m、東西 0.94 mのやや崩れた方形の土坑で、118 土坑を切る。深さは 0.39 mでにぶい橙色系のシルトが堆積する。120 土坑は南北 2.02 m、東西 0.94 mの長方形の土坑で、深さは最も残っている北側で 0.33 mと浅めである。にぶい橙色シルトを埋土とする。いずれも遺物は出土していない。

平坦面２（図 160）

平坦面１の南側の斜面に造られている。東西 6.4 m以上、南北 2.3 m以上ある。東側は調査区外になり、南側も土坑の検出状況を考えると崩落などによって失われている可能性が高い。埋土は基盤ブロックを含む明赤褐色シルトである。

平坦面は北側で 1.3 m程度斜面の基盤層を削ることによって造られている。西側も肩を削り出している状態を確認できる。北東には浅く溝状に掘られているが、段の裾全体にめぐらせる意識は見られない。

この平坦面には２基の土坑が確認されているが、いずれも浅い。217 土坑は南北 1.39 m、東西 1.38 mのほぼ方形の土坑で、深さは 0.28m。218 土坑は東西 0.82 m、南北 0.62 mの崩れた長方形で、深さは 0.15 m。いずれも遺物は出土していない。

調査区南西部の道状遺構（図 161）

調査地南東の斜面で２条の道状遺構を検出した。

第１節でも述べたように、調査区南東部では近代以降に整地したとみられる造成土層が厚く堆積していた。これを除去して平面と確認トレンチ（a-a'）で精査したところ、ここに２条の溝状の遺構が存在していることが分かった。そこで西側に 150、東側に 151 の遺構番号をつけて調査を実施した。

２つの道が切り合う部分があるが、上面は撹乱によって壊されており、わずかに底面で確認できた

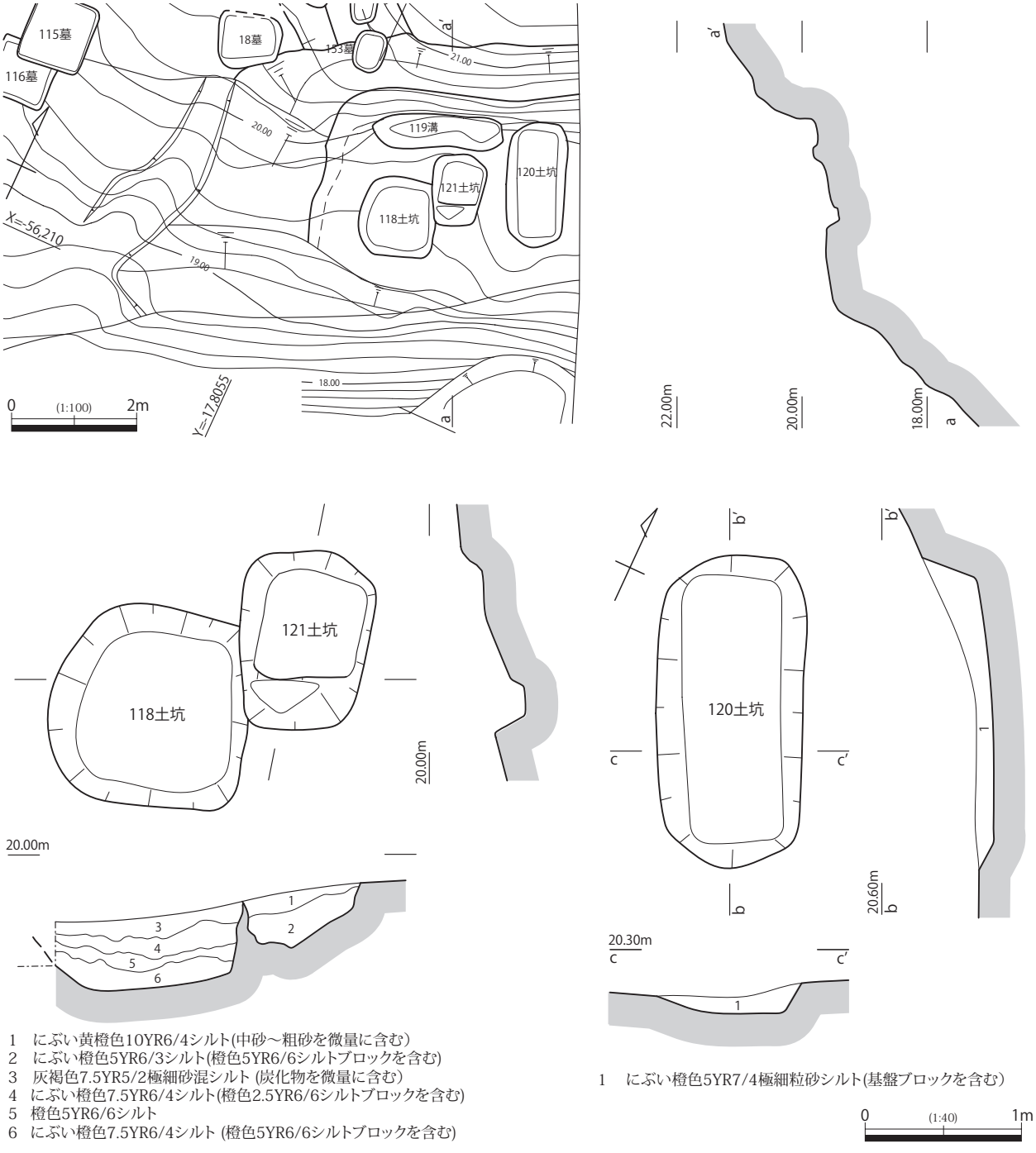
だけである。そのため２つの道の前後関係は不明である。

いずれの道も尾根筋に対して垂直に切り通すのではなく、尾根筋に対して斜めになる南西 - 北東方向に上がっていき、頂部に近い部分でほぼ尾根筋に垂直になるように曲がっていく。こうすることで道の勾配を緩やかにしようとしているのだろう。２つの道は曲がり方には差があり、150 が緩やかにカーブしていくのに対し、151 は「く」の字に折れ曲がったような平面形となる。

以下、各遺構について詳しく述べる。

150 道

幅は最も狭い尾根頂部付近で 1.40m、最も広い中央あたり（c-c'）で 2.08m。深さは中央あたりで西側肩から測ると 0.56m になる。中央部の東側がテラス状になる部分があるが、基本的に断面形は



1　にぶい黄橙色10YR6/4シルト(中砂～粗砂を微量に含む)
2　にぶい橙色5YR6/3シルト(橙色5YR6/6シルトブロックを含む)
3　灰褐色7.5YR5/2極細砂混シルト (炭化物を微量に含む)
4　にぶい橙色7.5YR6/4シルト(橙色2.5YR6/6シルトブロックを含む)
5　橙色5YR6/6シルト
6　にぶい橙色7.5YR6/4シルト (橙色5YR6/6シルトブロックを含む)

1　にぶい橙色5YR7/4極細粒砂シルト(基盤ブロックを含む)

図 159　平坦部 1 および 118・120・121 土坑

逆台形をしており、底面幅は 0.70m 程度ある。尾根頂部と検出できた西端との高低差は約 2.6 mである。

底面にはピット状の窪みが 15 箇所確認できた。長さは長いもので 0.70m、短いもので 0.16m、幅はほとんどが 0.16 ～ 0.24m であまり大きな差がない。窪みは左右交互になるように分布しており、間隔は心々間で 0.7m 前後とほぼ一定している。間隔が歩幅としてはやや広めではあるが、大きさや配置を考えると、人が繰り返し歩くうちに、同じような場所を足場とすることでくぼんでいったものと考えられる。

埋土は 4 層に分層でき、上の 3 層が基盤ブロックを含む赤褐色系のシルトであるのに対し、最下層（10）は明黄褐色シルトで、斑状に鉄分沈着と思われる褐色部分がみられる。そのため、葉理層が見られないものの、最下層は道として機能していた段階に徐々に堆積したものであり、上の堆積は道として使わなくなった後に造成で埋め戻したものと思われる。

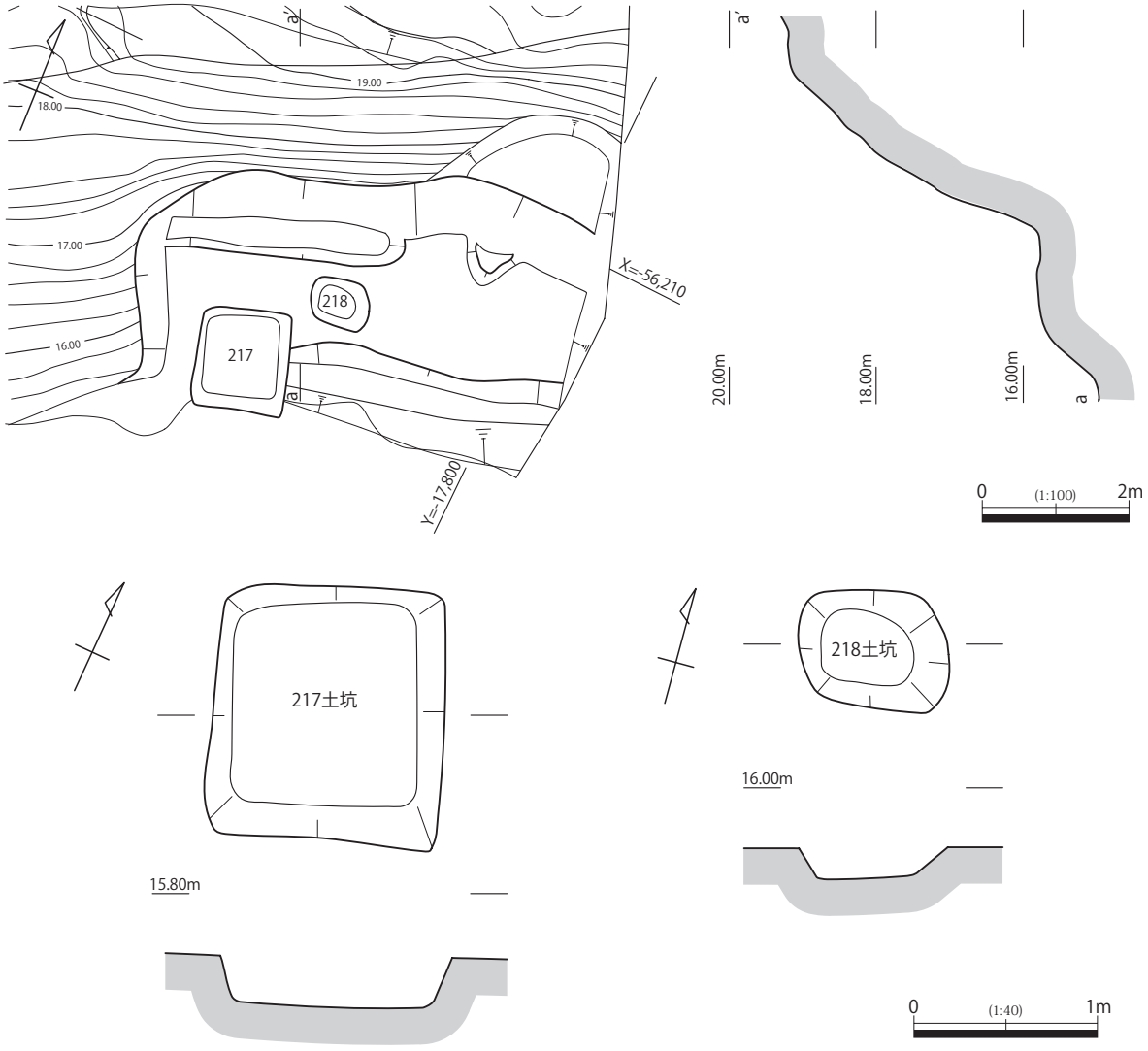
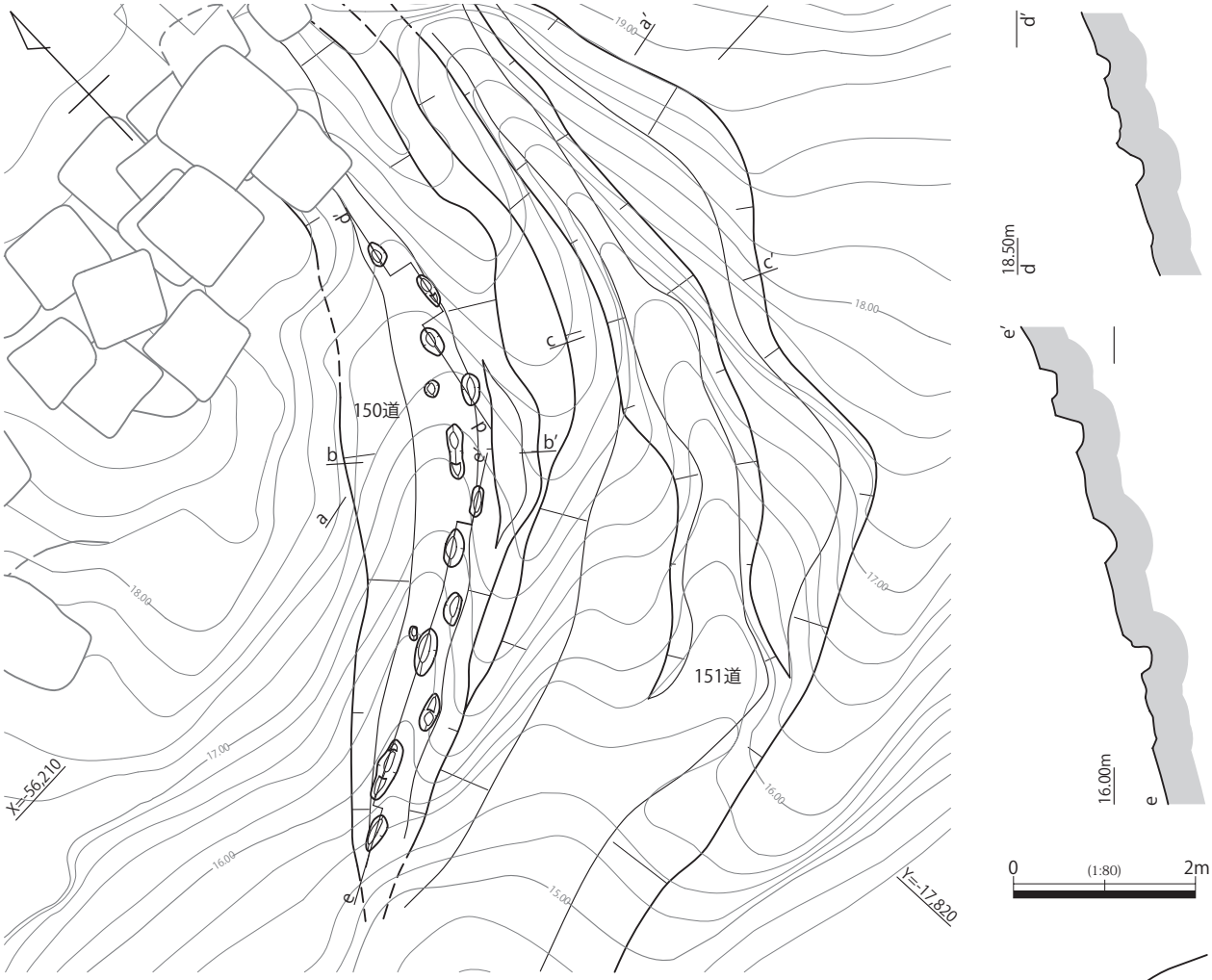
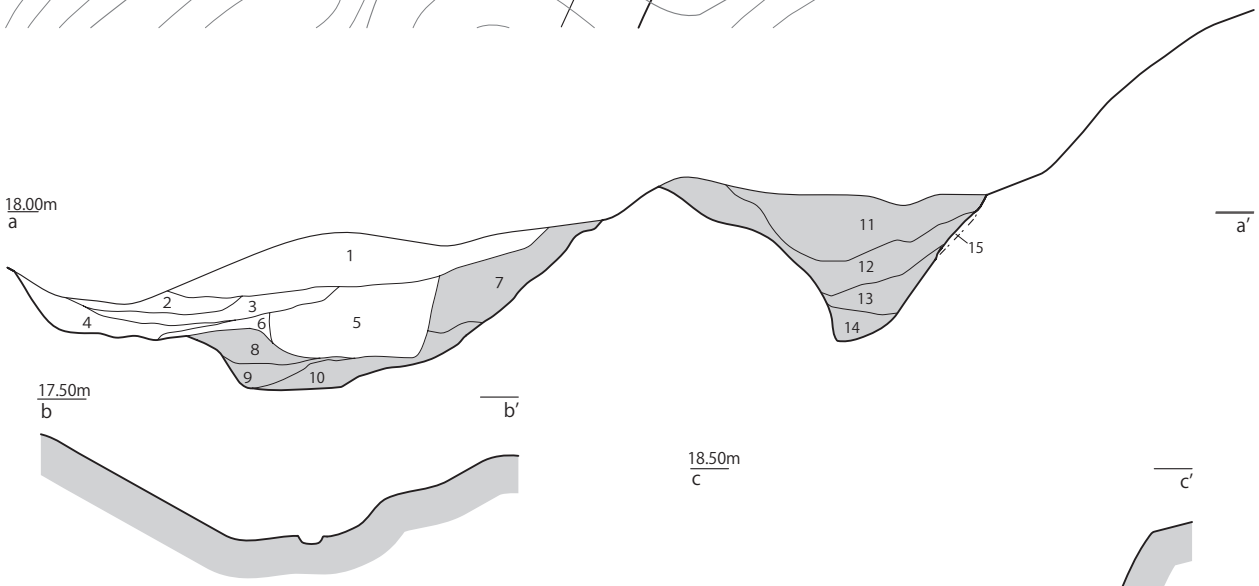
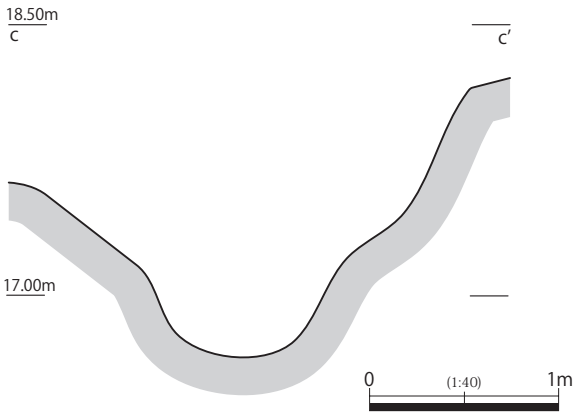


図 160　平坦部 2 および 217・218 土坑







1　赤褐色5YR4/6砂質シルト(基盤ブロックを含む、しまり悪い、墓地撹乱)
2　赤褐色5YR4/6シルト(基盤ブロックを含む)
3　にぶい赤褐色5YR4/4～6シルト(基盤ブロックを含む)
4　明赤褐色5YR4～5/6シルト(基盤ブロックを含む)
5　にぶい赤褐色5YR4/4シルト(基盤ブロックを含む、しまり悪い)
6　にぶい赤褐色5YR4/4シルト(上部に炭と思われる黒い帯が見られる)
7　赤褐色5YR4/6～8シルト(基盤ブロックを含む、150溝埋土)
8　明赤褐色5YR4～5/6シルト(150溝埋土)
9　にぶい赤褐色5YR4/4シルト(基盤ブロックを少量含む、150溝埋土)
10　明黄褐色10YR6/6シルト(鉄分沈着が斑状に見られる、150溝埋土)
11　暗褐色7.5YR3/4砂質シルト(基盤ブロックを含む、151溝埋土)
12　赤褐色5YR4/6～8シルト(基盤ブロック・炭を含む、151溝埋土)
13　にぶい赤褐色5YR4/4～6シルト(基盤ブロックを含む、151溝埋土)
14　赤褐色5YR4/8シルト(基盤ブロックを多量に含む、151溝埋土)
15　基盤層

図 161　150・151 道

151 道

検出段階で埋土が確認できた範囲は、幅が北側で 1.13m、南側では広がって 2.71m である。検出した南肩を延長していくと、北に折れ曲がって、すでに基盤層まで検出していた東側の傾斜変換ラインにつながることが分かった。このため、埋土は確認できないものの、このラインまで道を造る際に掘削した可能性が高く、ここまで含めると北側の幅は 1.94m となる。

断面形は北側ではⅤ字状になっているが、南に行くとU字に近い形となる。また東側には犬走り状の緩斜面がある。そのため、道を造る手順として、斜面を東側で約 0.8 m掘り下げて平坦な面を造り、その後で道の本体となる溝状の部分を掘削するという作業工程が想定される。本体部分の深さは 0.77m である。

表７　遺物観察表（中近世土器・陶磁器）

図番号	遺構・層位	種類	時期	法量（cm）	特徴	材質等	備考
38	49 墓	瀬戸美濃陶器 折縁皿	大窯４期後半 （16c 後葉）	口径 10.8 器高 2.2	口縁部は折り曲げ、内面に浅い凹線をもつ。見込みは円形に釉剥ぎ。高台は削り出しで、端部は丸みをもつ。高台に砂付着。	内外面：オリーブ黄灰色 胎土：やや軟質な淡灰色	
40	73 墓	唐津皿	Ⅱ期	口径 12.0 器高 3.5	体部で屈曲し、口縁端部はやや上方を向く。見込みおよび高台に砂目が４箇所付着。釉は内面と外面は体部下位までかかる。	内外面：オリーブ灰色、 露胎部：にぶい赤褐色	
41	73 墓	青花碗Ｃ群	16c 中葉	残存高 1.3 底径 4.0	見込みに草花文。高台畳付は露胎。	内外面：白色、 胎土：灰白色	
42	72 墓	唐津丸皿 （平戸系）	Ⅲ期 （17 ｃ後半）	口径 13.4 器高 3.7	見込み蛇の目釉剥ぎし、部分的に砂目がある。内面には鉄釉で圏線文が描かれる。	内外面：オリーブ灰色、 露胎部：灰褐色	
45	184 墓	唐津溝縁皿	Ⅱ期	口径 12.2 器高 3.2	体部で屈曲し、口縁端部内面には沈線。見込みに砂目が４箇所付着。釉は内面と外面は体部下位までかかる。	内外面：オリーブ灰色、 露胎部：にぶい赤褐色	
46	１ｅ区	青花碗Ｃ群	16c 中葉	口径 11.4 残存高 4.2	外面に草花文、内面は口縁および体部下位に２重の圏線。	内外面：白色、 胎土：灰白色	
47	１ｄ区	青花碗Ｃ群	16c 中葉	口径 13.0 残存高 1.4	外面に草花文？、内面は口縁部に２重の圏線。	内外面：白色、 胎土：灰白色	
48	１ｅ区	青花碗 （漳州窯）	16c 後半	口径 13.4 残存高 2.2	外面は意匠不明、内面は口縁部に２重の圏線。呉須はにぶい青みをもつ。	内外面：白色、 胎土：にぶい褐色	
49	１ｆ区	青花碗Ｃ群	16c 中葉	口径 12.2 器高 6.0	外面に草花文、内面は口縁および体部下位に２重の圏線。見込みにも草花文。	内外面：白色、 胎土：灰白色	
50	１ｂ区	青磁碗	15 ｃ	残存高 2.1	内外面無文。	外面：明オリーブ灰色、 胎土：灰白色	
51	１ｄ区	瀬戸美濃陶器 丸皿	大窯２期	残存高 2.0、 高台径 6.2	高台畳付も含め全面施釉。高台は削り出し。	内外面：オリーブ黄灰色 胎土：やや難質な淡灰色	
52	２ｅ区	瀬戸美濃陶器 壺	古瀬戸後期	残存高 8.2	外面釉だれ。内面は横方向回転ナデ。全体に被熱している。	内外面：オリーブ黄灰色 胎土：やや難質な淡灰色	
53	１ｅ区	須恵器壺		残存高 4.0	外面平行タタキ、内面はケズり後ナデ。	外面：暗青灰色	
61	１ｃ区	唐津皿	Ⅰ期	口径 13.4 器高 3.8	体部で屈曲し、口縁は直線的に外傾。見込みに胎土目が４箇所付着。釉は内面と外面は体部下位までかかり、以下露胎。	内外面：浅黄橙色、 露胎部：にぶい赤褐色	
62	２ｅ区	唐津皿	Ⅱ期	口径 12.2 器高 4.0	体部で屈曲し、口縁端部内面には沈線。見込みおよび高台に砂目が３箇所付着。釉は内面と外面は体部下位までかかる。	内外面：オリーブ灰色、 露胎部：褐色	
63	１ｃ区	唐津溝縁皿	Ⅱ期	口径 12.2 器高 4.0	体部で屈曲し、口縁端部内面には沈線。見込みおよび高台に砂目が３箇所付着。釉は内面と外面は体部下位までかかる。	内外面：オリーブ灰色、 露胎部：にぶい黄橙色	
64	１ｂ区	唐津丸皿 （平戸系）	Ⅲ期	口径 13.4 器高 3.3	見込み蛇の目釉剥ぎし、部分的に砂目がある。内面には鉄釉で圏線文が描かれる。	内外面：オリーブ灰色、 露胎部：灰褐色	
65	１ｆ区	伊万里皿	Ⅱ - １期	口径 12.8 器高 2.8	口縁部をわずかに外反させる。高台畳付以外は施釉。高台は削り出し。高台内外に砂が部分的に付着。見込みに文様が描かれる。	内外面：灰白色、 胎土：灰白色	
66	１ｅ区	波佐見青磁皿	Ⅳ期 （17 ｃ後半）	口径 13.4 器高 3.3	見込み蛇の目釉剥ぎし、部分的に砂目がある。釉は内面および外面口縁部にわずかにかかる。	内外面：暗オリーブ色、 露胎部：灰色	
67	—	唐津陶器碗		口径 7.0 器高 3.6	口縁部でわずかにくびれる碗。内外面褐色釉がかかる。	内外面：暗褐色	
68	１ａ区	土師器皿		残存高 1.0 底径 7.0	外面・内面：回転ナデ、底部回転糸切か。	内外面：橙色、 胎土：白色砂粒を少量含む	
69	１ｃ区表土	土師器皿		残存高 1.4 底径 6.6	外面・内面：回転ナデ、底部ナデ。	内外面：橙褐色、 胎土：白色砂粒を少量含む	
70	—	土師器杯		残存高 1.4 底径 6.6	外面・内面：回転ナデ、底部回転糸切。	内外面：にぶい黄橙色、 胎土：白色砂粒を少量含む	
71	16 墓	常滑甕	E 類 （19 ｃ前半）	口径 59.0 器高 73.0	内外面回転ナデ。口縁部はＴ字状に左右に拡張される。体部内面下位に孤状の刻文あり。底部は焼成時のひずみでひび割れ。	内外面：暗褐色、 胎土：砂粒を多く含む	
76	33 墓	波佐見青磁皿	Ⅳ期 （17 ｃ後半）	残存高 2.2 高台径 4.6	見込み蛇の目釉剥ぎ。	内外面：暗オリーブ色、 露胎部：灰色	
84	22 墓	波佐見青磁皿	Ⅳ期 （17 ｃ後半）	口径 13.6 器高 2.5	釉は内面および外面口縁部にわずかにかかる。	内外面：暗オリーブ色、 露胎部：灰色	

図番号	遺構・層位	種類	時期	法量（cm）	特徴	材質等	備考
88	38 墓	越前甕	Ⅶ－２（18 ｃ中葉）	口径 33.4 器高 38.8	内外面回転ナデ。内面口縁から体部中位にかけて指頭圧痕が目立つ。口縁部は外側に肥厚し、上面端部は指頭圧痕が連続する。体部外面に薄く褐色の釉をハケにより塗布している。	内外面：褐色、 胎土：淡褐色、砂粒を多く含む	
89	190 墓	波佐見青磁皿	Ⅳ期（17 ｃ後半）	口径 13.4 器高 3.3	見込み蛇の目釉剥ぎし、砂目が４箇所ある。高台にも同様の砂目がつく。釉は内外面にかかる。	内外面：暗オリーブ色、 露胎部：灰色	
90	190 墓	陶胎染付碗	Ⅴ - １期（18 ｃ前半）	口径 10.4 器高 7.2	外面に東屋山水文。高台畳付に砂が付着する。	内外面：暗オリーブ灰色	
94	41 墓	肥前系陶器碗	Ⅴ期（18 ｃ前半）	口径 9.6 器高 7.4	体部下位に最大径をもち、そこからわずかに内傾気味になる。回転ナデの痕跡明瞭。見込みおよび高台裏に小さな胎土目跡が残る。	内外面：オリーブ灰色	
120	64 墓	陶器鉢		残存高 2.2 高台径 4.6	底部からの立ち上がり部分に明瞭な稜をもつ。稜以下は露胎。見込みに胎土目が残る。高台貼り付け、畳付には糸切痕か？	内外面：浅黄色、 露胎部：淡黄橙色	
125	95 墓	越前甕	Ⅶ－１新（18 ｃ初）	口径 35.6 器高 40.4	内外面回転ナデ。内面は全体に指頭圧痕が目立つ。口縁部は外側に肥厚し、上面端部は浅く凹む。体部外面に薄く褐色の釉をハケにより塗布している。外面に３単位のへら状工具による刻文あり。	内外面：赤褐色、 胎土：淡褐色、砂粒を多く含む	
126	82 墓	土師器杯		残存高 0.9	内面ナデ、底部ケズリ。	内外面：淡橙色	
127	82 墓	越前壺		口径 10.5 器高 11.9	内外面回転ナデ。口縁部は外側に肥厚する。体部外面に薄く褐色の釉をハケにより塗布している。	内外面：暗赤褐色、 胎土：にぶい橙褐色	
128	130 墓	越前壺		口径 11.4 器高 18.1	内外面回転ナデ。口縁部は外側に肥厚し、端面はやや凹む。体部外面に薄く褐色の釉をハケにより塗布している。	内外面：暗赤褐色、 胎土：にぶい橙褐色	
129	57 墓	在地産壺		口径 22.0 器高 25.7	内外面回転ナデ。口縁部はＴ字状に肥厚し、端面は丸みを帯びる。器壁は薄い。高台は削り出し。畳付に胎土目が残る。全面に褐色の釉を厚く塗布している。	内外面：暗赤褐色	
130	57 墓	常滑甕	Ｅ類（19 ｃ前半）	口径 64.0 器高 74.4	内外面回転ナデ。口縁部はＴ字状に左右に拡張される。口縁上面には焼台の痕跡が多数残る。	内外面：暗褐色、 胎土：砂粒を多く含む	
131	157 墓	肥前系磁器小杯	Ⅴ期（18 ｃ前半）	口径 6.0 器高 3.6	体部は丸みをもつもの。体部外面下位から以下は露胎。高台は削り出しによる。外面に黒褐色の線描き文様。	内外面:オリーブ灰白色、 露胎部：浅黄橙色	
132	201 墓	瀬戸本業焼小杯		口径 7.0 器高 3.3	口縁部が端反のもの。高台畳付は釉剥ぎ。見込みに金色の文字および文様が描かれる。	内外面：白色	
133	179 墓	肥前系磁器小杯	Ⅲ～Ⅳ期（17ｃ後～18 ｃ前）	口径 5.6 器高 3.6	口縁部が端反のもの。底部は厚みをもつ。高台は露胎。外面に文様が描かれる。	内外面：白色	
134	179 墓	肥前系磁器小杯	Ⅱ～Ⅲ期（17 ｃ前半）	口 径 6.2 器 高 4.3	口縁部が端反のもの。底部は厚みをもつ。高台は露胎。外面にへら状工具による細い鎬が連続する。	内外面：白色	
137	96 墓	狛犬？		器高 15.9	前面と背面を別につくり、後に接合させている。器壁は薄手く、焼成はしっかりしている。	内外面：淡橙色、 胎土：雲母が多量に混じる	
150	１ｂ区 ３集石	肥前系磁器小杯	Ⅳ期（18 ｃ前半）	口径 8.4 器高 4.6	体部は丸みをもつもの。高台部露胎。口縁外面に雨降り文。	内外面：白色	
151	１ｃ区	在地産？杯		残存高 2.0 高台径 3.2	高台畳付は釉剥ぎ。やや高い高台を有する。高台裏に墨書で「○（車？）窯」とある。窯の名前であろうか？	内外面：淡黄色、 胎土：灰白色	
152	１ｃ区 表土	肥前系磁器碗	Ⅳ～Ⅴ期（18 ｃ）	口径 8.8 残存高 5.1	体部丸みをもち、口縁がほぼ直立するもの。	内外面：暗緑褐色	
153	１ｃ区	肥前系磁器碗	Ⅳ～Ⅴ期（18 ｃ）	口径 9.2 器高 7.2	体部丸みをもち、口縁がやや内傾するもの。高台部は露胎。	内外面：暗緑褐色、 露胎部：暗オリーブ色	
154		肥前系磁器碗	Ⅳ～Ⅴ期（１８ｃ）	口 径 9.2 器 高 7.2	体部丸みをもち、口縁がほぼ直立するもの。高台部は露胎。	内外面：暗緑褐色、露胎部：暗オリーブ色	
155	1b 区	陶胎染付碗	Ⅴ - １期（１８ｃ前半）	口 径 9.8 器高 7.6	外面に雲文。高台畳付に砂が付着する。	内外面：暗オリーブ灰色	

図番号	遺構・層位	種類	時期	法量（cm）	特徴	材質等	備考
156	1 c 区	陶胎染付碗	Ⅴ - 1 期 （18 c 前半）	口径 11.5 器高 7.6	外面に東屋山水文。高台畳付露胎。	内外面：暗オリーブ灰色	
157	1 b区 3集石	陶器香炉		口径 8.8 器高 4.4	体部中位に最大径をもち、頸部で屈曲する。口縁は内外に肥厚する。体部下位に3箇所足状の粘土粒がつく。体部下位から高台は露胎。	内外面:暗オリーブ黄色、 露胎部：赤褐色	
158	2 e区	陶器小壺		口径 6.7 器高 7.2	頸部で屈曲し、短く直立する口縁部がつく。高台と口縁は露胎。高台は低いが厚みのあるもので、底部の器壁は非常に薄い。	内外面：灰オリーブ色、 露胎部：にぶい黄色	148・149 は製法や器形が同じであるため、同じ窯で製作されたものと考えられる。
159	2 e区	陶器小壺		口径 7.0 器高 7.8	頸部で屈曲し、短く直立する口縁部がつく。高台と口縁は露胎。高台は低いが厚みのあるもの。	内外面：灰オリーブ色、 露胎部：にぶい黄色	
160	10 b トレンチ内	陶器小壺		口径 5.4 器高 8.4	頸部で屈曲し、短く直立する口縁部がつく。底部と口縁は露胎。高台は碁笥底をなす。	内外面：灰オリーブ色、 露胎部：にぶい黄色	
161	1 f区 表土	陶器皿		口径 7.9 器高 2.0	底部からほぼ直線的に外傾する。回転ナデ。全面施釉し、口縁内面に 4 条の細い沈線がみられる。	内外面：にぶい黄橙色	
162	1 e区	陶器皿		口径 9.8 器高 2.2	体部がやや丸みをもつタイプ。回転ナデ。口縁端部から内面にかけ施釉。	施釉部：暗黄灰色、 露胎部：にぶい褐色	
163	2 e区	土師器皿		口径 8.3 器高 1.9	体部がやや丸みをもつタイプ。体部回転ナデ。底部糸切り。	浅黄色	
164	2 e区	土師器皿		口径 8.3 器高 1.6	体部がやや丸みをもつタイプ。体部回転ナデ。底部糸切り。	浅黄色	
165	1 c区	土師器皿		口径 8.8 器高 2.1	口縁部が波状に打ち欠かれ、そこに煤が付着する。体部回転ナデ、底部は回転ヘラ切り。灯明皿として使われたものであろう。	橙色	
166	1 c区 表土	土師器皿		口径 13.8 器高 2.5	直線的に外傾する。底部はヘラ削りによるくぼみ底。焼成はよく硬質なものである。	橙色	
167	1 e区 表土	陶器小壺		口径 13.8 器高 2.5	頸部で屈曲し、短く直立する口縁部がつく。体部中位以下露胎。底部は厚みがあり、回転糸切り。	施釉部:暗オリーブ褐色、 露胎部：にぶい橙色	中から火葬骨あり
168	1 b区	在地産壺		口径 10.6 器高 14.0	内外面回転ナデ。口縁部はやや玉縁状に肥厚し､端面は尖り気味。器壁は薄い。高台は削り出し、碁笥底状になる。底部は露胎。高台裏に墨書がある。	施釉部：灰褐色、 露胎部：にぶい黄灰色	
169	2 d区	越前壺		口径 12.4 器高 18.9	内外面回転ナデ。口縁部は外側に肥厚し、端面はやや凹む。体部外面に薄く褐色の釉をハケにより塗布している。底部に板目が残る。	内外面：暗赤褐色、 胎土：にぶい橙褐色	中から火葬骨あり
170	1 b区	土師器壺		口径 15.0 器高 30.4	頸部で屈曲し、短く内傾する口縁部がつく。端部は玉縁状に肥厚。高台は削り出し、碁笥底状を呈す。高台部に 3 箇所の抉り込みがある。	橙色	図示していないが、これに伴う蓋と考えられる破片あり。
171	1 b区	陶器壺		口径 17.8 器高 25.0	体部から明瞭な屈曲がなく、内湾しながら口縁部へ続く。端部は外側へ玉縁状に肥厚。全面的に施釉され、体部下位には 6 箇所の胎土目がつく。頸部に波状の沈線文。	内面：暗オリーブ色、 外面：黒褐色	
172	1 a区	瓦		長さ 25.2 幅　18.5 厚さ 1.8	平瓦の凸面に戒名と没年月日、凹面に同じ戒名を刻書する。	暗灰色	

表８　遺物観察表（中近世墓出土金属・木・石製品）

図番号	遺構・層位	種類	時期	法量（cm）	特徴	材質等	備考
39	49 墓	銭貨	中世末	長 2.6、厚 0.6	６枚（祥符通寶１、不明５）が接着	青銅	
43	72 墓	銭貨	17 ｃ前葉		古寛永	青銅	
44	72 墓	銭貨	17 ｃ前葉		古寛永	青銅	
54	１ｅ区	銭貨		長 2.6、厚 0.6	５枚（元豊通寶､皇宋通寶？各１､不明３）	青銅	
55	１ｅ区	銭貨		長 2.6、厚 0.6	５枚（祥符通寶１、不明４）が接着	青銅	
56	２ｅ区	銭貨			元豊通寶	青銅	
57	10 ｂ区	五輪塔(火輪)		幅 26.7 高さ 17.0	軒は低く、隅が端反になる。上面にほぞ穴。	安山岩	
58		五輪塔(水輪)		幅 23.6 高さ 16.5	体部中位に最大径をもつ。上面はわずかに窪む。	安山岩	
59	２ｊ区	一石五輪塔(空風・火輪)		幅 14.1、厚さ 8.9、残存高 17.3	２条の沈線により空・風鈴を刻出する。側面は薄く、平べったいもの。	安山岩	
60	45 墓	五輪塔(地輪)		幅 26.3 高さ 18.7	表面には縦方向のノミの痕跡が顕著に残る。	安山岩	
72	16 墓	仏具？		口径 6.0 高さ 3.2	口縁端部は玉縁状になり、頂部に穿孔。	青銅	
73	166 墓	煙管	古泉Ⅴ期（18 ｃ後半）	長 5.7、幅 1.7、厚 1.0	頸部がほとんどなく火皿へ続く。接合部に継目。ラウが残存。	青銅	
74	14 墓	銭貨		長 2.8、厚 0.5	３枚（古寛永１、不明２）が接着	青銅	
75	43 墓	煙管（雁首）	古泉Ⅴ期（18 ｃ後半）	長 4.9、幅 1.5、厚 1.0	短い頸部があり、火皿へ続く。接合部に継目。	青銅	
77	45 墓	簪		残存長 2.5、幅 1.5、厚 0.2	菊花状の頭部飾りをもつ。中央とその下に２箇所穿孔がある。	青銅	
78	45 墓	留め具		残存長 9.7、幅 2.8、厚 0.2	薄い鉄板を２枚に折り返したもの。上部には木の板片があり、棺桶の留め具ではないかと考えられる。	鉄	
79	40 墓	玉		幅 0.5、高さ 0.4	石製の小玉。		
80	42 墓	鋏・毛抜・櫛		長 15.7、幅 0.8、厚 0.8	鋏・毛抜・櫛が錆により接着したもの。鋏の柄の中に縦位に直交して毛抜がある。鋏刃部に櫛の歯が付く。	鉄・木	
81	42 墓	鎌		残存長 13.0、幅 3.7、厚 0.8	断面三角形状を呈す。	鉄	
82	29 墓	鋏・櫛		長 15.5、幅 1.4、厚 0.6	鋏の柄から刃上部にかけて櫛の歯が接着。	鉄・木	
83	29 墓	留め具		残存長 9.7、幅 2.7、厚 0.3	薄い鉄板で上部はＬ字折り返している。上部には木の板片があり、棺桶の留め具ではないかと考えられる。	鉄	
85	32 墓	銭貨			寛永通寶（文銭）	青銅	
86	32 墓	銭貨			新寛永	青銅	
87	32 墓	銭貨		長 3.3、厚 0.4	３枚（古寛永１、不明２）が接着	青銅	
91	190 墓	銭貨		長 3.6、厚 0.2	２枚（新寛永１、不明１）が接着	青銅	
92	190 墓	銭貨		長 2.7、厚 0.2	２枚（新寛永１、不明１）が接着	青銅	
93	190 墓	銭貨		長 2.9、厚 0.3	２枚（不明２）が接着	青銅	
95	114 墓	銭貨		長 2.5、厚 0.2	不明１、布にくるまれる	青銅	
96	114 墓	銭貨		長 2.7、厚 0.4	２枚（不明２）が接着	青銅	

図番号	遺構・層位	種類	時期	法量（cm）	特徴	材質等	備考
97	15 墓	毛抜		長 10.1、幅 2.6、厚 1.0	錆により木も付着するが、製品かどうかは不明。	鉄	
98	10 墓	火打金		長 6.0、幅 2.5、厚 0.3	三角形を呈するもので、頂点下に小さな穿孔がある。片面に接着する小石が火打石かどうかは不明。片面には布が付着。	鉄	
99	10 墓	留め具？		長 2.6、厚 2.1	ボタン状のもの。上面には針金状のものが巻きつく。		
100	10 墓	煙管	古泉Ⅴ期（18 ｃ後半）	長 22.6、幅 1.6、厚 1.6	ラウは中央でネジ込み式になり、吸口と火皿をつなぐ。短い頸部があり、火皿へ続く。接合部に継目。ラウ部分は漆製の軸部で覆われていたと考えられる。	青銅	
101	101 墓	煙管	古泉Ⅴ期（18 ｃ後半）	長 7.1、幅 1.6、厚 1.0	頸部がほとんどなく火皿へ続く。接合部に継目。火皿は断面台形状を呈す。ラウが残存。吸口部分は玉状になる。	青銅	
102	101 墓	留め具		残存長 7.7、幅 3.2、厚 0.8	薄い鉄板で、釘跡とみられるものが３箇所ある。上部には木の板片があり、棺桶の留め具ではないかと考えられる。	鉄	
103	101 墓	金具		残存長 3.1、幅 5.2、厚 0.8	薄い銅板で、裏面には細い軸部をもち、木製板を留めている。箱の金具ではないかと考えられる。	青銅	
104	101 墓	銭貨		長 2.6、厚 0.2	新寛永（鉄銭） 1	鉄	
105	101 墓	銭貨			古寛永 1	青銅	
106	101 墓	銭貨			新寛永 1	青銅	
107	101 墓	留め具		残存長 1.3、幅 1.6、厚 0.7	ボタン状のもの。薄い針金状のものがあり、何かの金具であったのであろう。	青銅	
108	101 墓	装飾品		長 5.0、厚 0.2	乳児を線刻した銅板。	青銅	
109	101 墓	ガラス瓶		口径 1.8 器高 9.0	頸部が絞られ、口縁はやや玉縁状を呈す。外面に目盛がつく。薬瓶か？	ガラス	
110	181 墓	鋏		長 15.2、幅 2.4、 厚 0.7	刃部が重なっているもの。	鉄	
111	181 墓	鋏？		残存長 5.4、厚 0.7	鋏の軸部と考えられる。	鉄	
112	76 墓	簪		長 17.5、幅 0.7、厚 0.2	二股に分かれるもの	青銅	
113	105 墓	煙管（雁首）	古泉Ⅴ期（18 ｃ後半）	長 6.0、幅 1.1、厚 1.1	短い頸部があり、火皿へ続く。接合部に継目。ラウが残存。	青銅	
114	105 墓	銭貨		長 2.6、厚 0.7	６枚（不明６）が接着し、布にくるまれる。	青銅	
115	187 墓	煙管（雁首）	古泉Ⅳ期（18 ｃ前半）	残存長 15.9、幅 1.1、厚 1.0	長い頸部から火皿へ続く。吸口は細く長い。ラウが残存。	青銅	
116	187 墓	仏具？		口径 4.3 高さ 2.8	口縁端部は玉縁状になり、頂部に穿孔。	青銅	
117	187 墓	火打金		長 6.2、幅 2.5、厚 0.5	三角形を呈するもので、頂点下に小さな穿孔がある。下部が頂部よりも厚めになる。	鉄	
118	187 墓	留め具		長 2.4、幅 1.9、厚 2.4	円形部分があり、そこから続く軸部には板材が接着。箱などの留め金か。	鉄	
119	187 墓	釘			Ｌ字状に交差する釘。棺桶のコーナー部分に当たると思われる。	鉄	
121	92 墓	煙管	古泉Ⅴ期（18 ｃ後半）	残存長 15.2、幅 1.5、厚 1.4	短い頸部があり、火皿へ続く。接合部に継目。胴部が丸みを帯びる。吸口もラウ側は丸く、そこから細くなる。ラウが残存。	青銅	

図番号	遺構・層位	種類	時期	法量（cm）	特徴	材質等	備考
122	92 墓	金具		長 2.2、幅 3.6、厚 0.5	菱形をした薄い金属板。中央に穿孔。長軸左右に小さな釘穴があり、何かの飾り金具と考えられる。	青銅	
123	92 墓	銭貨		長 3.2、厚 1.2	６枚（不明６）が接着し、布にくるまれる。	青銅	
124	180 墓	煙管	古泉Ⅳ期（18 ｃ前半）	残存長 11.2、幅 1.6、厚 1.0	やや長い頸部があり、火皿へ続く。接合部に継目。ラウが残存。	青銅	
135	179 墓	足袋金具		長 1.4、厚 0.2	同種のものが他に２点あり。	銅？	
136	179 墓	容器		長 7.0、厚 2.6	円形の容器。	青銅	
138	66 墓	櫛		残存長 4.5、幅 3.3、厚 1.0		木	
139	66 墓	鏡		長 5.9、	円形で鏡面がやや反っている。片面に有機質のものが付着するが材質は不明。	青銅	
140	１71 墓	鎌		残存長 12.1、幅 4.8、厚 2.8	鎌の軸から刃部の部分。刃部は薄板を折り曲げてつくられている。軸に木製の柄が取り付けられ、円形の留め具も残る。	鉄	
141	61 墓	銭貨		長 2.5、厚 0.2	２点（新寛永、不明各１）	青銅	
142	61 墓	銭貨			新寛永１	青銅	
143	61 墓	銭貨			文銭１（布付着）	青銅	
144	61 墓	金具		長 2.6、厚 1.0	ボタン状のもの。何かの金具であったのであろう。	青銅	
145	70 墓	銭貨		長 2.7、厚 0.5	４点（新寛永１、不明３）	青銅	
146	70 墓	銭貨			新寛永１	青銅	
147	70 墓	銭貨			新寛永１	青銅	
148	70 墓	櫛		残存長 3.1、幅 2.1、厚 0.4		木	
149	182 墓	銭貨			新寛永１	青銅	
173	26 墓	容器		長 9.5、幅 5.3、厚 2.6	楕円形の容器。中には針状のものが１点と数珠玉が入っていた。	青銅	
174	26 墓	数珠玉		長 6.6、厚 0.8	楕円形容器内から出土。	木	
175	221 墓	簪		長 12.6、幅 1.7、厚 0.2	二股に分かれるもの。漆の付いた飾り玉がつく。	青銅	
176	135 墓	留め具		長 2.9、幅 1.5	円形部分があり、そこから続く軸部には板材が接着。箱などの留め金か。	鉄	
177	135 墓	留め具		長 5.3、幅 2.1	円形部分があり、そこから続く軸部には板材が接着。箱などの留め金か。	鉄	
178	135 墓	留め具		長 5.3、幅 2.1	円形部分があり、そこから続く軸部には板材が接着。箱などの留め金か。	鉄	
179	47 墓	留め具		長 3.7、幅 1.5	円形部分があり、そこから続く軸部には板材が接着。箱などの留め金か。	鉄	
180	47 墓	金具		長 3.5、幅 0.5	方形の薄板状金具。２箇所の釘跡がある。	銅？	
181	25 墓	櫛		長 2.4、幅 9.8、厚 0.2	木製完形の櫛		

第Ⅵ章　総　括

第 1 節　松原古墳群の形成過程

平成 21 年度の発掘調査では、古墳時代前期から古墳時代終末期に至る古墳 10 基と横穴墓 1 基を確認した。平成 20 年度に調査された古墳 10 基（以下 H20 調査）と合わせて、20 基に及ぶ古墳の調査が行われたこととなる（図 162）。松原古墳群はこれまで 37 基の古墳の存在が知られており、現状は本古墳群の全容解明に至る途上にあるものの、各支群の動態を比較検討できる段階を迎えつつある。以下では、周辺の成果と合わせながら、今回の調査成果を総括する。

1）古墳、横穴墓の立地

松原古墳群の立地する地質、地形を検討し、今回の調査で明らかとなった古墳、横穴墓と地質、地形の関係について述べる（註 1）。

a）地質の所見（図 163）

南北、東西尾根、南西斜面の地質について、以下の所見が得られた。なお、南北尾根は 33 ～ 35・11 号墳、東西尾根は 38・26 号墳、南西斜面は 1 号横穴墓がそれぞれ位置する場所を指す。

南北尾根 11 号墳の南側周溝以南において、中新世の鳥取層群中の河原火砕岩に対比できる石英安山岩ないし同岩質の火山砕屑岩と、泥岩を挟在して石英安山岩の岩脈が認められた。また、11 号墳の墳丘直下では黄色シルトが堆積しており、26 号墳周辺の基盤層下層となる黄色シルトに対比できると考えられる。この層は 11 号墳直下という限定的な範囲に堆積し、その上部には 11 号墳基底面となる旧表土（古土壌）が堆積する。

33 ～ 34 号墳にかけては、鳥取層群上部の堆積物となる白色泥岩が認められる。泥岩は硬軟（固

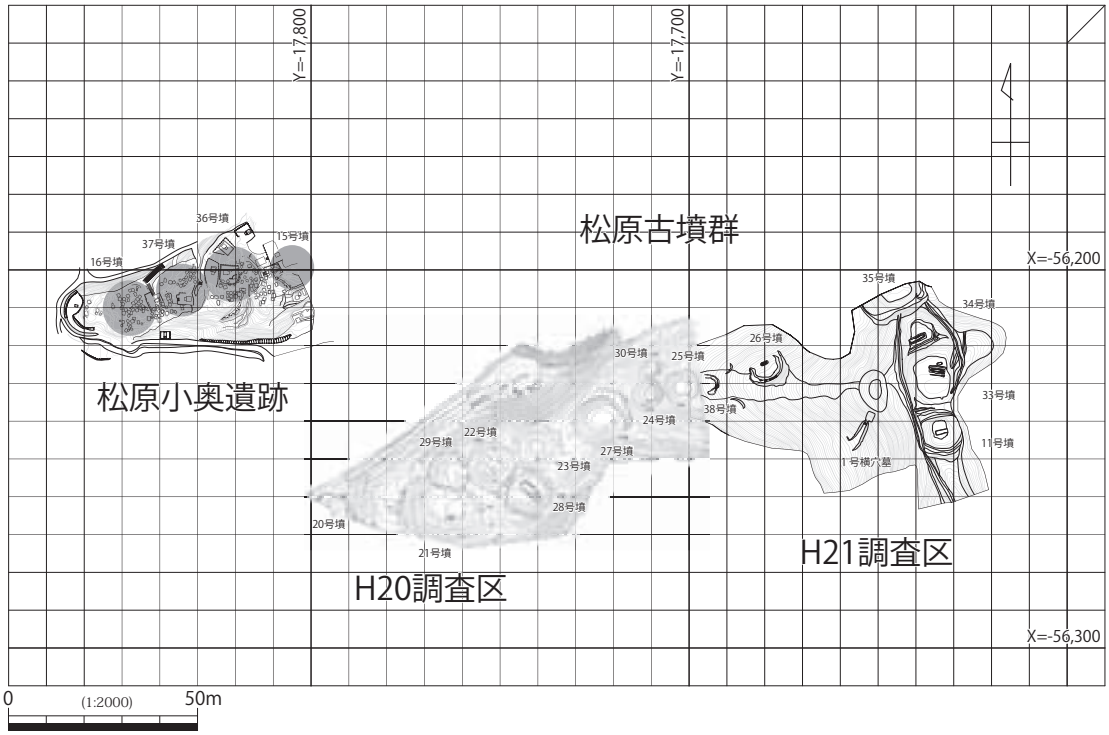


図 162　平成 20・21 年度調査　松原古墳群　平面

結度）により２種類に分類でき、Ⅰが硬く、Ⅱが軟らかい。風化の度合いにより、硬度（固結度）が違う可能性がある。33 号墳の墳丘北側では、風化した赤色シルト質粘土と白色泥岩の互層になっている。

34 号墳の埋葬施設以北には、鳥取層群上部層と考えられる風化した赤色シルト質粘土が堆積する。H20 調査区と松原小奥遺跡の基盤層は、この赤色シルト質粘土に対応するものと考えられる。

26 号墳～ 25 号墳及び 21・28 号墳南西では、下層から風化した赤色シルト質粘土、黄色シルト、黄色極細砂～細砂が堆積する。黄色極細砂～細砂の堆積する範囲から以西の傾斜は緩くなっている。同層は角閃石の柱状斑晶と黒雲母を含んでおり、大山上部火山灰の可能性がある。また、同層の上部には、古墳時代後期～古墳時代終末期にかけて形成された古土壌が堆積している。古土壌は層厚 10 ～ 15cm で、黄色極細砂～細砂の堆積範囲以外の場所と比較して分厚い。黄色極細砂～細砂が大山火山灰であるとすれば、このような古土壌は大山火山灰の上部に形成された黒ボクに関係する可能性があるが、現地観察では層相に明瞭な違いはなかった。26 号墳周辺の基盤層は下位から、白色泥岩、風化した赤色シルト質粘土、黄色極細砂～細砂である。北東斜面及び南西斜面では黄色シルトが認められた。南西斜面の黄色シルトは弱く土壌化して黒味を帯びており、南西斜面の埋没谷に分厚く堆積する。

b）古墳、横穴墓の立地

南北尾根の 33 号墳は白色泥岩、34 号墳は白色泥岩と赤色シルト質粘土の地層境界部、35 号墳は赤色シルト質粘土を基盤として築造している。

一方、11 号墳は、黄色シルトの上部に堆積する古土壌を基盤として築造している。このような古土壌は当調査区において低所を中心に堆積しており、黄色シルトと古土壌は尾根上の凹み、鞍部に堆積していた可能性が高いと考えられる。そのため、33 号墳南側周溝の掘削は尾根の鞍部を利用して掘削した可能性がある。

東西尾根の 26 号墳は、黄色極細砂と赤色シルトの地層境界部に掘削されており、周溝の掘削深度はこの２層の直下に堆積する白色泥岩に達する。38 号墳は、黄色極細砂を掘り込んで築造されている。

南西斜面の１号横穴墓は、黄色シルトと黄褐色シルト質粘土の地層境界付近に位置する。斜面部では黄色シルトの層厚が薄いため、地層の境界付近から掘削した可能性がある。

c）立地のまとめ

古墳と横穴墓は、次のようなことが反映されて築造されたと考えられる。

①中新世～更新世にかけて形成された地層の差異。各地層の層境が傾斜変換しており、特に古墳は傾斜が緩い場所に築造されている。

　地層や地質構造に影響された地形は「組織地形」とよばれるが、松原古墳群が立地する地形も一種の「組織地形」といえる。このような地形にある程度制約されながら、かつ、地形を利用しながら、古墳および横穴墓の築造は行われている。

②基盤層の硬度（固結度）。古墳の場合、周溝の掘削が容易な軟質の地盤を選地している。ただし、11・26・33 号墳では、硬い（固結度が高い）基盤層の割合が他の古墳と比較して高い。

２）古墳、横穴墓出土遺物の時期

33 号墳は埋葬施設２基からそれぞれ遺物が出土した。埋葬施設１では、土師器、鉄鉇、碧玉製管

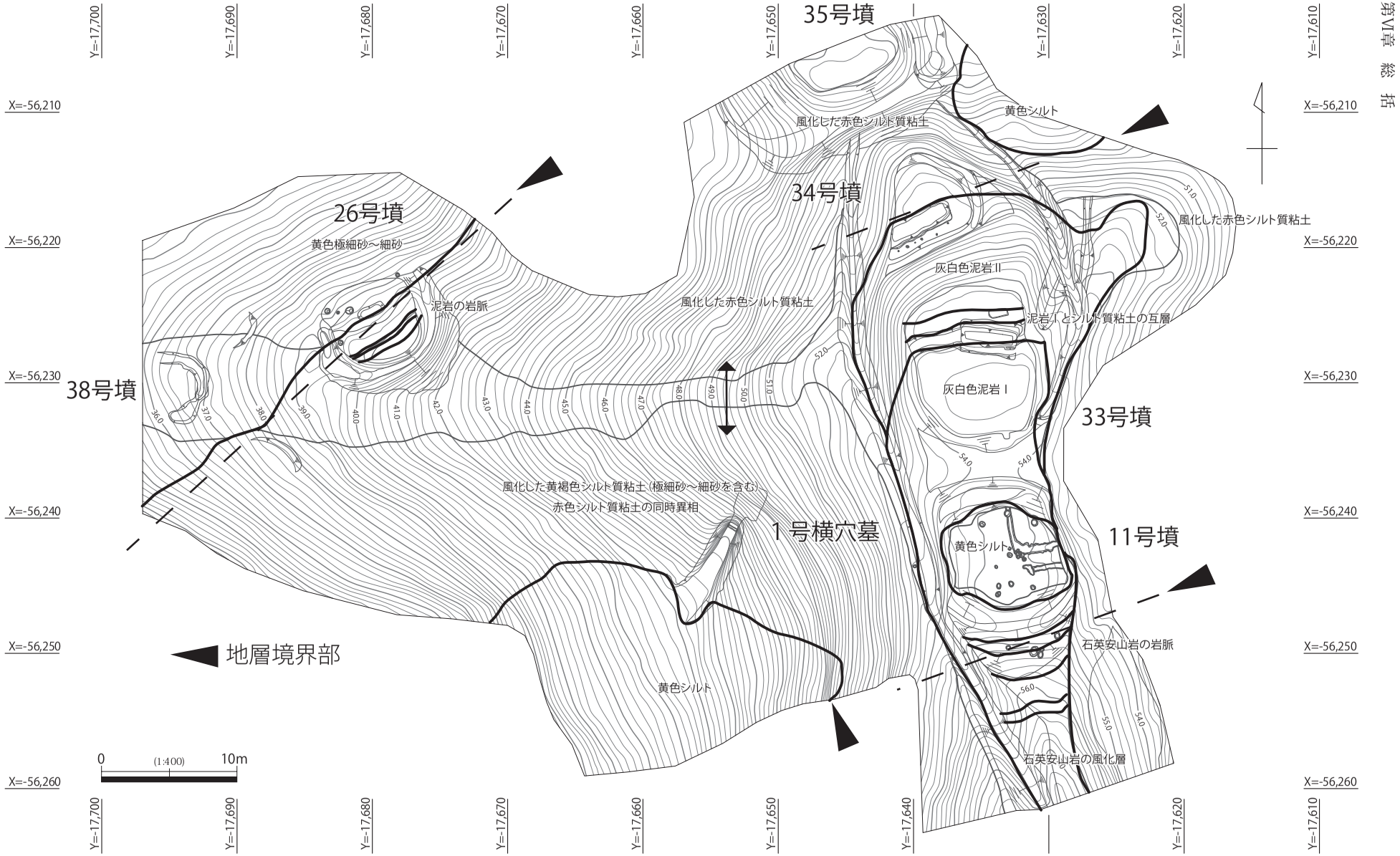


図 163　松原古墳群の立地する地質と地形

玉が出土した。土師器は鼓形器台で、谷口編年Ⅶ-２期に位置づけられ、古墳時代前期中葉に属する。埋葬施設２では、土師器、ガラス製小玉が出土した。土師器は鼓形器台で、埋葬施設１のものより筒部は長いものの、同段階の谷口編年Ⅶ-２期に位置づけた。古墳時代前期中葉に属する。両埋葬施設に切り合い関係はなく、前後関係については不明である。

34 号墳では、埋葬施設１から土師器が出土した。谷口編年Ⅶ-2 以降、東伯耆の天神川編年Ⅳ期に位置づけられる鼓形器台で、筒部は省略され、受部と脚台部の接合部の稜線が明瞭である。古墳時代前期後葉に属する。

35 号墳は墳丘の調査を行っておらず、埋葬施設の詳細は不明である。墳丘斜面から土師器甕が出土した。谷口編年Ⅶ-１～２期に比定されると考えられる。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げており面を持たない点で、古相を示している。古墳時代前期前葉～中葉に属する。

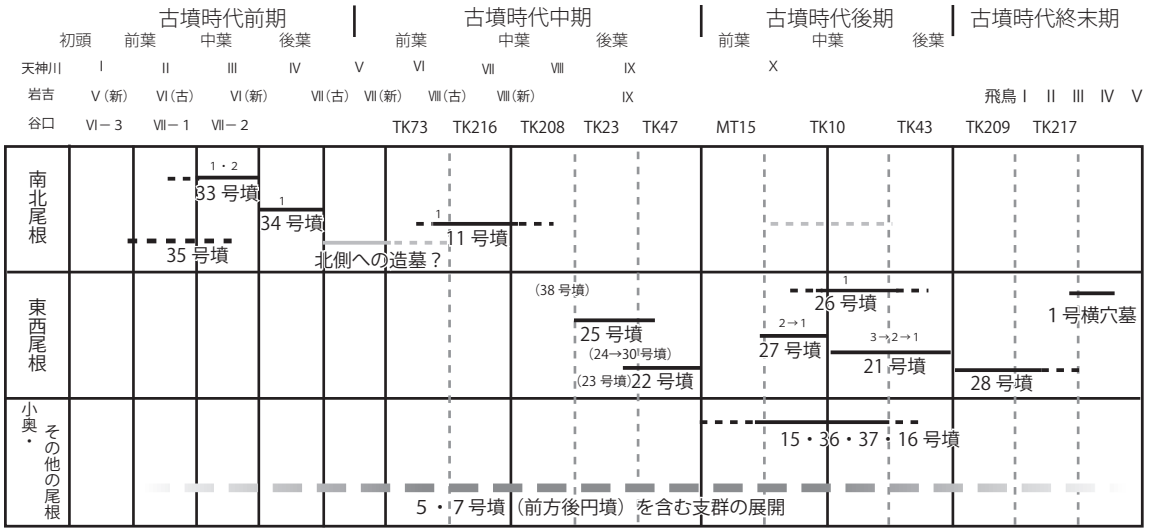
11 号墳では、埋葬施設からは鉄剣、鉄鏃、および土師器２点が出土した。土師器は有段高杯で、岩吉編年Ⅷに比定した。鉄鏃は２点出土しており、うち１点は鏃身部から茎部までが残存する。同形式の鉄鏃は、水野編年中期３～後期２の段階に製作されたもので、松原 21・26 号墳出土の鉄鏃と形状がやや異なる。土師器高杯から、11 号墳は古墳時代中期前葉～中葉に築造されたと考える（註２）。

26 号墳では埋葬施設から土師器と鉄鏃が出土した。土師器は出土状況から棺上遺物と考えられるが、細片で器種は不明である。鉄鏃は２点出土しており、21 号墳第１主体部出土の鉄鏃と同じ形式である。また、墳丘斜面や周溝内の表土、1-1 層、2-1 層から土師器と須恵器が出土した。須恵器杯身、蓋は田辺編年 TK10（新）～ TK43 に比定される。出土遺物や後述する墳丘築造方法が 21・27 号墳と共通することから、21・27 号墳とほぼ同時期に 26 号墳は築造されたと考えられる。古墳時代後期中葉に属する。

38 号墳では遺物が出土していないため、詳細は不明である。25 号墳の周溝は、38 号墳の墳丘裾部に相当する西側を平面的に切って周溝を設けており、38 号墳の築造後に 25 号墳を築造したものと考えられる。古墳時代中期後葉以前に属する。

１号横穴墓では、玄室から須恵器が出土している。飛鳥Ⅲの杯身、杯蓋、高杯、高杯蓋、長頸壺、平瓶がそれぞれ１点と、飛鳥Ⅳの平瓶１点である。前者は陰田編年では７期に相当する。杯蓋、高杯蓋は焼け歪みが大きい。杯身の法量も飛鳥Ⅲの杯Ｇの範疇にある。飛鳥Ⅳに比定した平瓶以外は、

表９　松原古墳群変遷



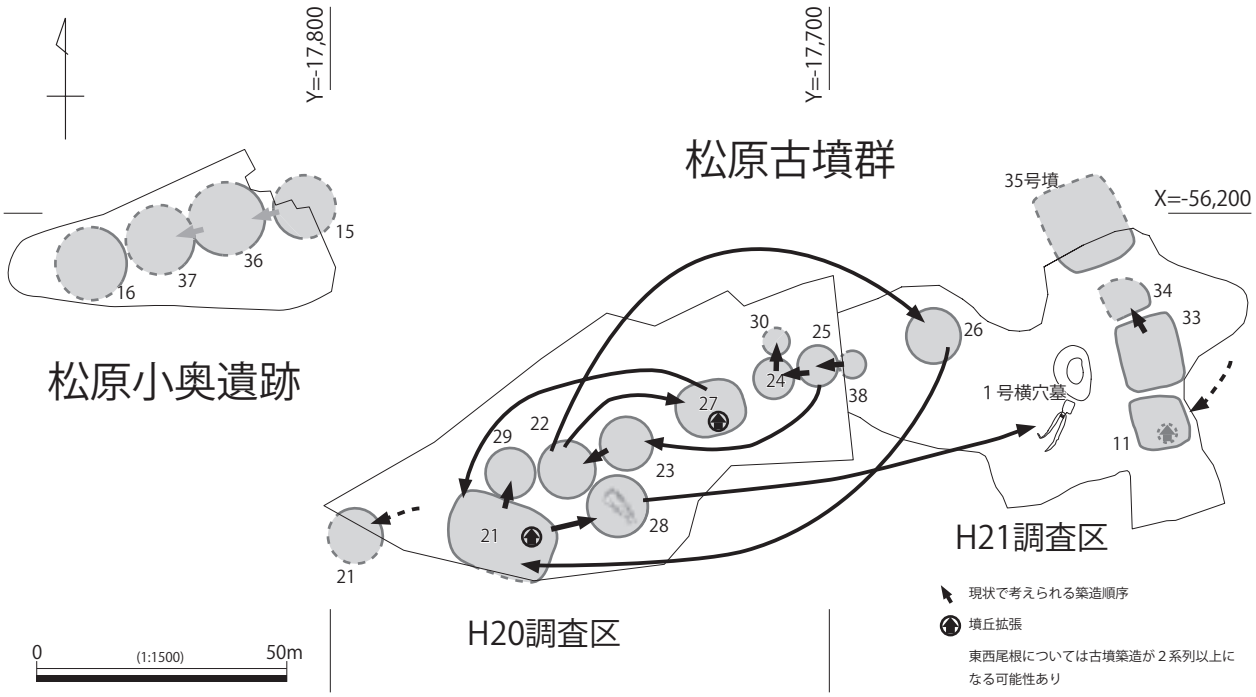


図 164　松原古墳群の変遷

すべて人骨周辺に集中する。なお、前庭部および横穴墓前面の平坦部では、横穴墓埋没後に堆積した 2-1 層から、飛鳥Ⅳの平瓶の細片と高杯脚部、石錘が出土している。古墳時代終末期に属する。

松原小奥遺跡の古墳出土遺物については、第Ⅴ章第２節及び第Ⅵ章総括第３節で詳述している。

３）古墳の築造順序

松原古墳群の築造順序を表９にまとめた。H20 調査については発掘調査報告書に準拠した。

松原古墳群では、古墳時代を通して古墳の築造が行われ、最終的に横穴墓を以って造墓が完了したと考えられる（図 164）。南北尾根に古墳時代前期中葉～中期中葉の古墳、東西尾根に古墳時代中期後葉～終末期の古墳、松原小奥の尾根に古墳時代後期中葉（以前）の古墳が築造されており、尾根毎に時期的なまとまりを持って古墳が築造されたことが分かる。

では、松原古墳群全体としての、群構成はどのような動向を示すのだろうか。

傾斜区分図鳥取北部、南部と都市計画図を参照し、尾根のみを直線で表現したものが図 165 である（31 号墳を南限として作図）。急傾斜と緩傾斜の区分は傾斜 30 度前後を目安とし、等高線密度を判断しながら行った。既知の古墳周辺にも、古墳と横穴墓の立地できる場所が広がっていることが確認でき、連続して墳

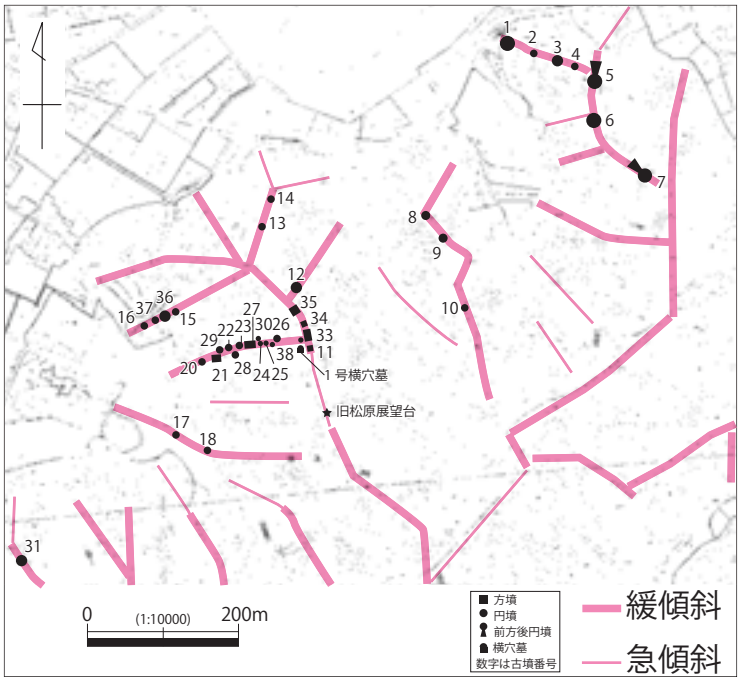
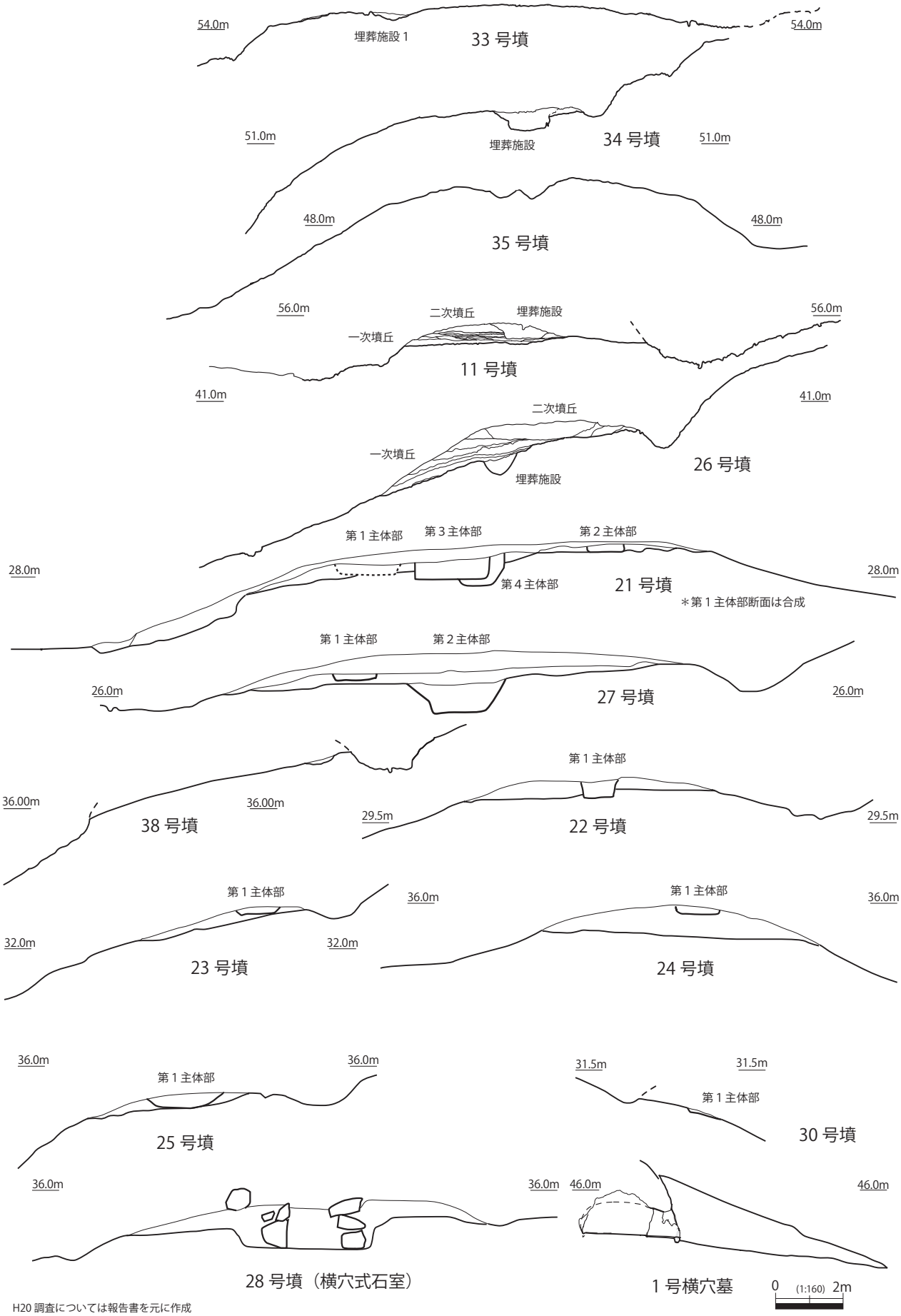


図 165　尾根稜線と傾斜区分



H20 調査については報告書を元に作成

図 166　松原古墳群墳丘　断面

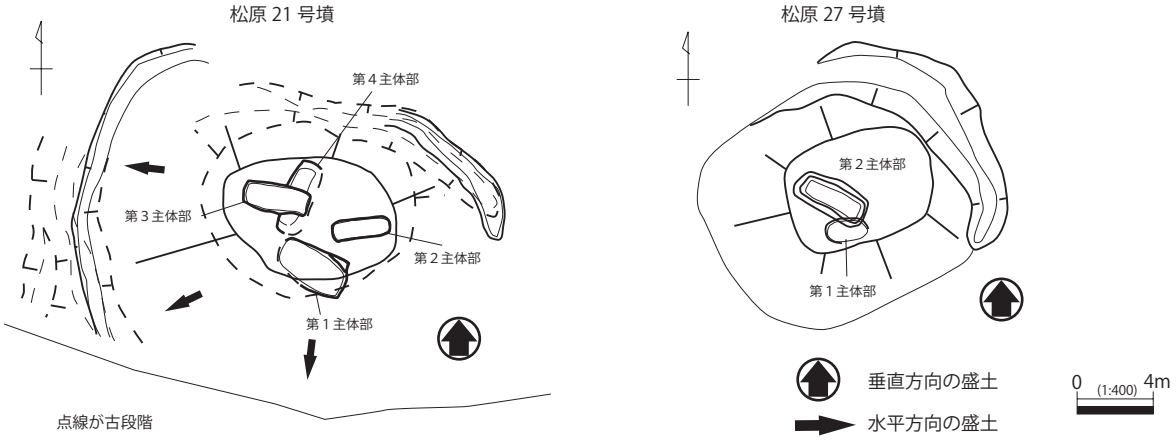


図 167　21・27 号墳　墳丘拡張平面

墓を築造している様子が看取できる。また、別の尾根には、詳細は不明であるものの、前方後円墳が含まれている点も注目される。

4）墳丘の築造方法（図 166）

今回の調査では、各古墳の墳丘築造について一定の見解が得られた。以下で各古墳の築造方法をまとめる（註３）。

33 号墳は地山整形、34 号墳は地山整形と一部盛土、35 号墳は地山整形？、11・26 号墳は一、二次墳丘を造成して墳丘を築造する。

H20 調査の古墳についても、墳丘築造の方法が詳細に検討されており、24・25・30 号墳は地山削り出し→小規模な盛土→墓壙構築、22・23 号墳は大規模な盛土→墓壙構築、21・27 号墳は墓壙構築→古段階墳丘→墓壙構築→新段階墳丘、28 号墳は石室墓壙の掘り込み→横穴式石室構築、墳丘盛土→墳丘盛土である。

5）　11・26 号墳の墳丘築造について

今回調査を行なった 11・26 号墳の墳丘築造方法は、一、二次墳丘という築造工程を経て完成されたものであった。H20 調査の 21・27 号墳では追葬に伴う墳丘拡張を行っており、その断面形態は松原 11・26 号墳と似ている（註４）。11・26 号墳の一、二次墳丘は墳丘の築造工程を示すものと判断したが、第Ⅳ章で述べたとおり、それぞれに問題点がある。もとより、両古墳ともに低地に立地する墳墓のように自然堆積層に覆われておらず、環境、人為的要因による後世の改変が顕著である。

湖山池周辺地域の墳丘拡張については、北浩明、岩垣命が各墳丘拡張事例を取り上げて、横穴式石室の成立と竪穴系埋葬施設を関連付けながら詳細に検討をしており、ここで行う検討もそれを前提とした（註５）。以下では、11・26 号墳墳丘築造の事実確認を行った後、因幡地域の墳丘拡張事例とその棺底レベルを検討し、最後に 11・26 号墳の一、二次墳丘の問題点を整理しておく。

なお、水平および垂直方向の墳丘拡張とは、水平方向は平面的に墳丘を広げることを指し、垂直方向とは上向きに墳丘を高くすることを指す。

a）松原 11・26 号墳の墳丘築造

両古墳には墳丘築造方法に以下の共通性があった。

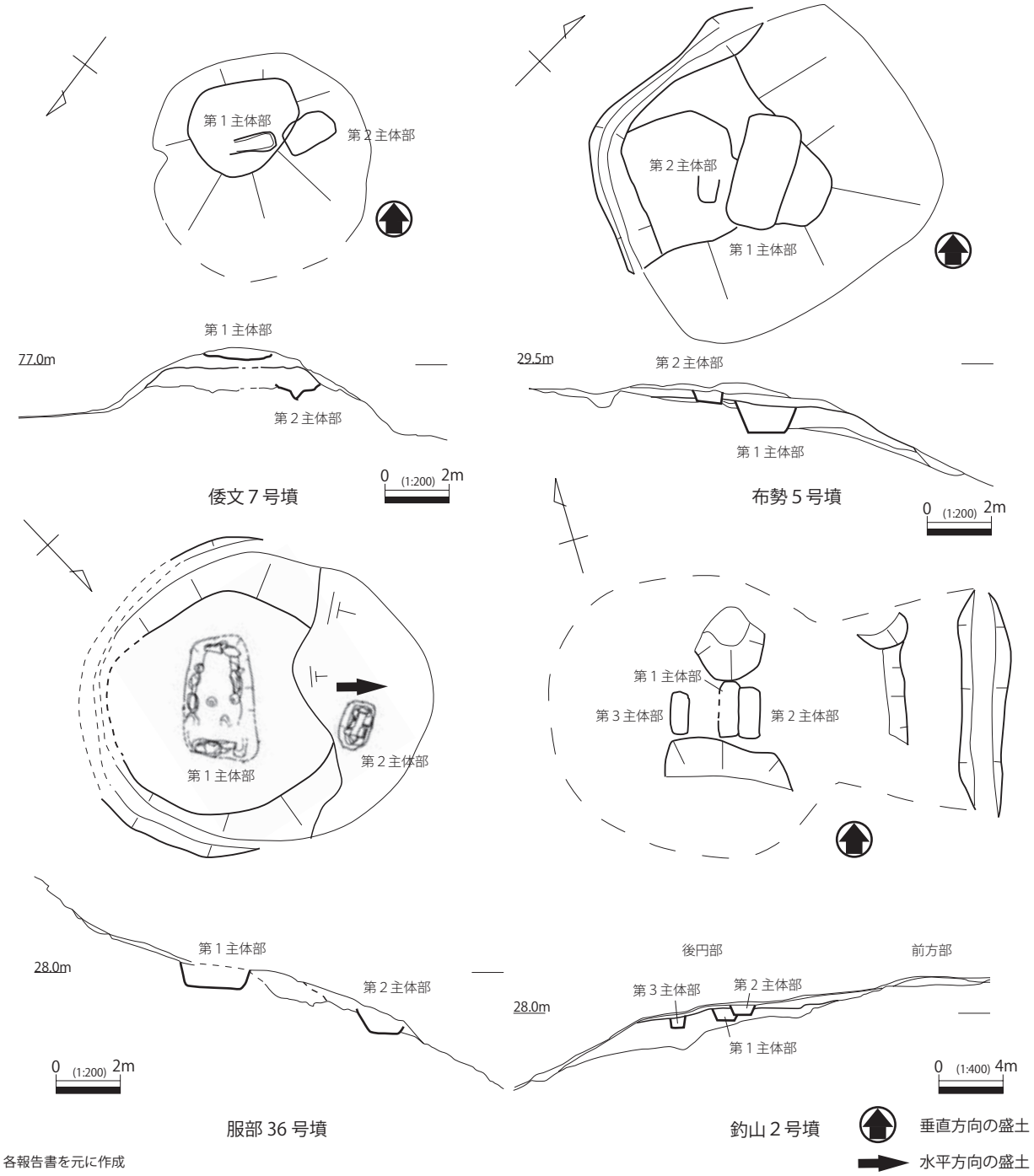


図 168　墳丘拡張の古墳　平面

①一次墳丘は、盛土を水平に積むことによって築造する。古土壌（旧表土）と基盤ブロック主体の盛土を交互に積む場合がある。

②二次墳丘は、墳丘周縁部から内側に向かって盛土を行っている。基盤ブロックが主体で、古土壌（旧表土）ブロックをほとんど含まない。

③周溝再掘削（再加工）の痕跡を伴わない。

④一、二次墳丘間に時間的な間隙を推測させるような間層や土壌が形成されない。また、一次墳丘上面を加工した痕跡がない。

b）墳丘拡張の事例（図 168）

湖山池周辺地域においては、墳丘に盛土を行って拡張するような事例が６基確認されている。すべ

て追葬を契機としたものである。

松原 21 号墳は、楕円形～隅丸方形の墳形を呈し、水平および垂直方向に墳丘拡張を行う。古段階の墳丘は、高所との標高差をなくしながら尾根低位を中心に盛土を行っている。新段階の墳丘は、墳丘の東半は古段階の墳丘をそのまま利用して墳丘西側を中心に盛土を行う。松原 27 号墳は、方形～楕円形の墳形を呈し、埋葬施設が２基確認されている。垂直方向に盛土を行って墳丘拡張を行う（図 167）。

21・27 号墳の墳丘築造の共通点は、古段階の墳丘の盛土を行う前に旧表土を掘り込む埋葬施設を構築することと、古段階墳丘の上面から新たな埋葬施設を構築し、その上に新段階墳丘を築造することである。

倭文７号墳は古墳時代前期後葉～中期後葉の円墳である。垂直方向に墳丘拡張しており、埋葬施設は２基確認されている。釣山２号墳は古墳時代後期後葉の前方後円墳である。墳丘は地山整形と、後円部を中心とした盛土による。垂直方向の墳丘拡張を行い、埋葬施設は３基確認された。布勢５号墳は古墳時代後期の方墳である。墳丘は地山整形と盛土によって行い、垂直方向に墳丘拡張している。埋葬施設は２基確認された。服部 36 号墳は古墳時代後期の円墳で、水平方向に墳丘拡張する。埋葬施設は２基確認された。

湖山池周辺部における墳丘拡張の特徴は以下のようにまとめられる。

①墳丘拡張は垂直方向を主流としながら、水平方向のものが含まれる。

②追葬の場合、墓壙は位置的に異なる場所が多い。

③周溝の再掘削を伴う墳丘拡張の事例がある。

ｃ）墓壙底面の標高について

次に埋葬施設底面の標高について検討する。ここでは、墳丘をもつ墓で複数の埋葬施設について分析を行った大庭重信氏の方法を用いる。大庭氏は墓壙底面の標高を比較し、埋葬施設の構築順序との相関関係から、構築順序の新しいものほど底面の標高が高くなる傾向があることを指摘している（註６）。切り合い関係が示されないような検出面において、複数の埋葬施設が同時に認識された場合に、このような視点は重要と考えられる。また、墓壙底面標高の検討は、墓壙検出面と墓壙構築時の墳丘上面の状況を推測する一つの手掛かりとなるものだろう。

松原古墳群、釣山古墳群および布勢墳墓群における墓壙底面の標高差の順序は、構築順に高くなる傾向を示す（図 168）。垂直方向の墳丘拡張では当然の結果といえる。

ただし、21 号墳では、第４→３→２→１主体部の順に構築されているが、墓壙底面の標高は第４→３→１→２主体部の順に浅くなっており、第１主体部と第２主体部の築造順序が標高差と矛盾している。第２主体部が構築された場所は基盤層が古墳築造前から高い場所に当たり、これが原因となって墓壙が浅くなった可能性も想定できる。

ｄ）11・26 号墳の問題点

上記の検討を踏まえて、以下に 11・26 号墳の墳丘築造の問題点についてまとめる。

11 号墳は、後世の改変や植物擾乱が顕著な場所であり、墳丘の半分以上が失われていることから、追葬を伴う垂直方向の墳丘拡張で墓壙が削平された部分にあった可能性も考えられる。

26 号墳は、二次墳丘の盛土単位で内部区画が長方形になる部分があり、当初これを埋葬施設の可能性のあるものとして調査を行った。第Ⅳ章で述べたとおり、墓壙の加工（底面と側壁の接点）が不

明瞭であったこと、二次墳丘断面での立ち上がりや埋土を含めて盛土の一単位として把握できたこと、また、出土遺物が皆無であったことから、最終的に埋葬施設ではないと判断した。ただし、垂直方向の墳丘拡張で検討を行ったように、墳頂部にあった埋葬施設が後世に失われている可能性については、11 号墳と同様完全に否定できない。

つまり、遺存および検出状況から考えると、両古墳ともに追葬による墳丘拡張の可能性を否定しきれない状況であることが現状における問題点である。ただし、特徴的な墳丘築造方法を示すことから、今後の調査事例の蓄積を以って再検討を行うことが可能だと考える。

6）　松原 1 号横穴墓について

因幡地域の横穴墓は、現状で 156 基以上が知られており、市町村合併前の旧鳥取市と旧気高郡に大半が集中する。1924 年の『因伯二国に於ける古墳の調査』所載の荒神山横穴墓群に始まり、続く 1964 年に調査が行われた浜坂横穴墓群は、因幡における代表的な横穴墓として学史に名を残している（註 7）。

古墳時代後期～終末期の浜坂横穴墓群は、22 基以上の横穴墓が群集しており、金銅製鈴、耳環をはじめとする 250 点以上の遺物が出土した。箱式石棺を使用するものも 4 基あり、羨門に積石して天井石を置く事例もみられる。

浜坂横穴墓群の調査以来、踏査や試掘などを含めた調査が行われてきている。湖山池の南西岸における横穴墓の発掘調査は松原 1 号横穴墓が初めての事例で、里仁横穴墓群や三津所在横穴墓、伏野所在横穴墓などと合わせて湖山池周辺に横穴墓が広がることが確認された。

因幡地域における横穴墓の傾向は、資料数に制約があり不明な点が多い。実態が比較的明らかとなっている浜坂横穴墓と松原 1 号横穴墓の一番大きな違いは、群集するかしないかということに尽きるだろう。松原古墳群では今後の調査で横穴墓が追加される可能性はあるが、東西尾根周辺では 1 基のみである。松原古墳群の埋葬施設の流れを、(直葬)または木棺直葬→横穴式石室→横穴墓とするならば、浜坂横穴墓は横穴墓で終始している点で大きく異なる。横穴墓のタイプは、前者を単独型とするならば後者は群集型であり、横穴墓の構築原理が大きく異なることが看取できる。

a）横穴墓の構造

玄室

平面形は長方形を呈し、右壁中央から逆時計回りに周壁溝がめぐる。左壁側に広がっており、奥壁－玄門方向が長軸となる。天井部の形態は、左および右側に遺存していた天井部の形状と崩落した天井部の偽礫が平滑で稜を持たないことから、ドーム形に復元した。右袖部が底面において羨道と連続するような形状を示すことや、奥壁側の平面形がやや隅丸になっていることなど、全体的に粗い造りである。ドーム形の玄室構造をもつ横穴墓は、県内では米子市日下横穴墓を別にすれば、江府町北谷ヒナ横穴群、日南町内ノ倉山横穴墓群など日野郡域を中心に集中的に分布している。

玄門、羨道、羨門

玄門、羨門は断面形がやや台形に近い形状を示すが、天井部と壁の境界を丸く仕上げていることから釣鐘形とした。玄門は玄室との間に段差があり、羨道側に溝が掘り込まれている。羨道には排水施設を設けておらず、外部への排水は羨道、前庭部の傾斜を利用している。また、羨門の側面には前庭部と段をなすような縁取りがなされている。中原斉は「二重構造の羨道」をもつものを羨道と玄門に

分け、羨道、玄門構造をもつものをＡ類、羨道をもたずに玄門のみのものをＢ類として分類しており（註８）、１号横穴墓は中原のＢ類に該当する。中原の定義する玄門が１号横穴墓の羨道に相当しており、今回の調査では呼称整理についての課題を残した。

前庭部、平坦部

羨門の前面を山陰地方で従来呼称されているとおり、前庭部とした。断面形は逆台形を示しており、１号横穴墓前面の平坦部に向けてハの字形に開く形状を示す。中原は、横穴墓導入初期のドーム形（丸天井形）の前庭部は、狭長で断面Ｕ字形から、平面形が羨門側に狭い台形で断面逆台形に変遷することを指摘しており、１号横穴墓は後者にあたる。地質、地形的により高所を掘削すれば前庭部を短くして基盤岩に到達することが可能であるが、長い前庭部を設けていることが１号横穴墓の特徴の一つといえる。ただし、現状より高所に玄室を設けた場合、天井部基盤岩の厚みを十分に確保できないという土木工学上の理由も考えられる。

前庭部の前面には、横穴墓の加工時に生じた排土を用いた平坦部が確認された。横穴墓の床面および底面の整地と同段階に造成されている。横穴墓埋没以降に形成された平坦部の古土壌（2-1 層）からは、細片と化した須恵器平瓶が出土している。出土地点は、99 墳丘（後背墳丘）の方向に点在しており、同墳丘で用いられていた可能性がある。現状では、平坦部における土器の使用を積極的に評価できないが、須恵器以外の遺物も平坦部から出土しており、「前庭部」的な空間として検討が必要である。

ｂ）横穴墓の構築方法

玄室の構築方法については、玄室底面の確定→玄室四隅の確定→壁面の調整という過程を復元したが、天井部が崩落していたため、壁面と天井部の加工順序とその方法については課題が残った。

従来の研究では、横穴墓は荒掘り→成形→調整の工程で加工されることが考えられており、１号横穴墓の細部加工痕もそれぞれの部位で異なるものがみられた。

今回確認された工具痕には、刃先がＵ字形に緩やかな弧をなす丸刃、一文字に直線を示し幅８～10 ㎝の平刃［広］、一文字に直線を示し幅４～ 4.5 ㎝の平刃［狭］があった。「横穴墓の掘削技法」においては、使用された工具にＵ字形の鍬、手斧、ノミ状工具などが想定されている（註９）。松原１号横穴墓で使用された工具については、今回出土していないので想定の域を出ないが、丸刃は荒掘りと成形段階、平刃［広］は荒掘りと調整段階、平刃［狭］は成形および調整段階に用いられたのではないかと考えている。

ｃ）後背墳丘

池上悟は、伯耆西部から出雲地域の横穴墓の特徴が墳丘を伴うこととし、「横穴墓発祥の地である北部九州地方から伝播した初期横穴墓の形成を保った事象」と指摘した（註 10）。今回、１号横穴墓は、後背墳丘と評価した 99 墳丘を検出しており、日本海側では東限を示す資料として注目される。１号横穴墓は、東西尾根の古墳と一定の範囲で群集する傾向にありながら、横穴墓としては単独で構築されている。東西尾根における後背墳丘の意味は、古墳群内での位置的関係の明示、ひいては被葬者の「系列」を表現するための機能があったことに言及しておきたい。

７）松原古墳群の意義

松原古墳群は今回の調査によって、古墳時代前期から終末期に至るまで造墓し続けることが判明し

た。その消長は当地域の墓制を考える上で一つのモデルとなるものである。ここでは、松原古墳群を主に湖山池周辺の古墳群を比較することによって、当地における墓制変遷上の意義について総括する。

ａ）湖山池周辺を中心とした墳丘墓、古墳築造の動向

弥生時代後期には、湖山池南東部の桂見、布勢周辺で墳丘墓が築造される。代表的な墳墓として布勢鶴指奥弥生墳丘墓がある。墳頂部の埋葬施設２基のうち、中心埋葬は二段墓壙である。墳丘墓の周辺では墓壙が多数検出されている。

倉見古墳群Ｄ地区の調査では、弥生時代後期の土壙墓群の北西に、古墳時代前期中葉の５号墳が築造される。中心埋葬となる二段墓壙と小形の墓壙が並列して検出された。この二段墓壙は墳丘中心部からやや南西に寄る。また、Ｂ地区に位置する古墳時代前期中葉の３号墳では、中心埋葬となる二段墓壙と、墳裾で古墳時代後期後葉の木棺墓が確認されている。Ｃ地区では、尾根の平坦部に溝を隔て南西および北東側に分かれ、弥生時代後期～古墳時代前期前葉の埋葬施設 12 基が構築される。北東側に位置する６基の内２基は二段墓壙で、それと同規模の墓壙１基とともに尾根上に並列する。

布勢５号墳は古墳時代後期の方墳で、埋葬施設が２基検出されており、前述したとおり、墳丘拡張を行っている。

釣山 22 ～ 24 号墳は、古墳時代前期中葉～後葉にかけて築造された。出土遺物は少量で、古墳築造の前後関係については不明である。24 号墳では、中心埋葬の大形墓壙を含む埋葬施設５基が確認された。22 号墳では、墳丘の西側に中心埋葬の墓壙を設け、隣接あるいは切り合い関係を持ちながら他の墓壙が構築される。２号墳は、古墳時代後期後葉の前方後円墳である。後円部において３基の埋葬施設が検出された。追葬に伴い、墳丘拡張を行っている。34 号墳は、古墳時代中期に築造されており、箱式石棺１基とこれと切り合う墓壙１基が確認された。35 号墳は埋葬施設が検出されておらず、詳細は不明である。

里仁 32 号墳では、箱式石棺２基と埴輪棺、土壙墓が検出された。箱式石棺２基は切り合い関係を持たず、同時に構築される。33 号墳は中心埋葬となる大形墓壙と、小形墓壙が並列して２基検出された。また、墳裾においても埴輪棺、墓壙１基が確認されている。34 号墳では墳頂部に３基、墳裾で２基の墓壙が確認された。墳頂部埋葬施設は大形墓壙が南西寄りにあり、小形の２基が並列する。35 号墳は墳丘中央に箱式石棺を設ける。

桂見１～３号墳は古墳時代前期前葉に築造された。１・２号墳は中心埋葬を二段墓壙とし、１号墳で墳裾に墓壙４基、２号墳で配石土壙墓と土器棺が確認されている。３号墳は後世の撹乱が顕著であったが、墓壙１基が確認されている。古墳時代前期の 10 号墳は、中心埋葬となる墓壙と土器棺を含む墓壙４基が確認された。古墳時代後期の６号墳は前方後円墳である。後円部で墓壙２基、くびれ部で墓壙１基が確認された。古墳時代後期の 12 ～ 15 号墳は、12・13・15 号墳で墓壙１基、14 号墳で墓壙１基がそれぞれ確認されている。また、弥生時代後期の土壙墓群がマウンド状を呈する尾根に確認されており、その中には中心埋葬となる大形墓壙が含まれている。18 ～ 21 号墳は古墳時代中期に築造された。全体に遺存状況が悪く、埋葬施設は 18 号墳墳頂部で１基、19 号墳の墳裾部で１基確認されたのみである。桂見 10 号墳では、中心埋葬と想定される墓壙と土器棺を含む４基の墓壙が確認された。古墳時代後期の６号墳は前方後円墳である。後円部で墓壙２基、くびれ部で墓壙１基が確認された。

服部墳墓群では、弥生時代後期の墳墓３基が、尾根上にまとまって築造される。２・３号墓は中心

図 169　湖山池周辺の墳墓、古墳群　平面

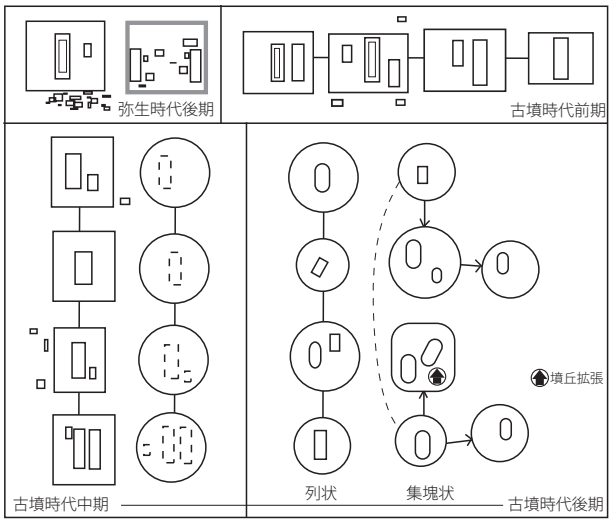


図 170　湖山池周辺の墳墓、古墳群築造模式

埋葬を二段墓壙とし、これと同規模の墓壙で追葬を行なう複数埋葬である。２号墓では尾根に直交する墓壙が１基確認されているが、一部は調査区外となり全容は不明である。弥生時代の墳墓と位置的に隔たった尾根で、古墳時代前期の古墳が３基確認されている。17・18 号墳では、墳丘中央部に中心埋葬の大形墓壙、これと平行ないし切り合って小形の墓壙が構築される。19 号墳では大形の墓壙に土器棺が伴う。

b）湖山池周辺における墳墓と古墳築造

弥生時代後期

この地域の墳丘墓は、山陰の他の墳丘墓と同じく多数埋葬の傾向にあり、「集団墓」の様相を呈する。倉見古墳群Ｃ地区土壙墓群は、溝によって北東と南西に分かれるが、北東側は同一規模の墓壙が並列しており、副葬品においても顕著な差は認められない。服部２・３号墓は中心埋葬となる二段墓壙が含まれる複数埋葬で、並列ないし直交して追葬を行っている。一部の墳墓を除き、古墳時代前期ほど特定の墓壙が突出しないのがこの段階の状況と考える。ただし、松井潔は千代川中流右岸地域と比較して、墳丘規模や埋葬施設に格差が生じていることを指摘している（註 11）。

古墳時代前期

倉見３・４・６号墳は単数埋葬で、５号墳は中心埋葬となる大、小形の墓壙が並列する。服部墳墓群では、一基の古墳に２基の埋葬施設が設けられるようになり、中心埋葬の小形化が進む。

釣山古墳群では中心埋葬が墳丘中央にあり、墳丘斜面に土器棺を埋葬する 23 号墳や、大形の墓壙が北東側と南西側に墳丘上で分かれている 24 号墳がある。

松原 33 号墳では二段墓壙と小形墓壙の組み合わせが古墳時代前期中葉に見いだせ、前期後葉の 34 号墳では大形墓壙の１基単独となる。松原 33・34 号墳に関する限り、前期段階には他古墳群の動向と同調している。

池淵俊一は山陰の古墳時代前期の墓制を、中心埋葬の顕在化、単数埋葬の増加、２～３基程度の埋葬数、集団墓の消滅等にまとめている（註 12）。

湖山池周辺では、古墳時代前期中葉～後葉に倉見古墳群で単数埋葬の古墳を見いだせるが、服部墳墓群や釣山古墳群では大、小形の墓壙を２基以上組み合わせる傾向が多く、古墳時代中期前葉～中葉の里仁古墳群でもその傾向は継続する。

古墳時代中期

里仁古墳群では、この段階を中心に方墳が築造される。墳頂部に１～２基の墓壙と墳裾および周溝内に追葬を行っている。33 号墳は墳丘に大形と小形の墓壙が並列する。墳裾および周溝内と思われる位置に埴輪棺２基と墓壙１基が設置されるが、32 号墳では、埴輪棺の被葬者は、中心埋葬となる箱式石棺の墓壙と切り合いながら墳丘に埋葬されており、埴輪棺を用いた被葬者に違いが認められる。

中期段階のこの地域の動向は、調査事例が少数であるため不明な点が多いというのが現状である。墳丘築造は里仁古墳群では地山整形のままであり、大形および小形の墓壙の２基以上の組み合わせが

多い傾向も継続している。ただし、里仁古墳群より後出すると考えられる松原 11 号墳では、墳丘盛土を伴っており、定点として押さえることはできないが、墳丘築造の変化がこの段階にあることには間違いない。また、土器棺や埴輪棺の追葬は、後期になるに従い減少するようである。成人を含めた古墳被葬者の埋葬原理に変化があったものと考えられる。古墳築造契機となる被葬者の変化を間接的に示している事象と考えられる。

古墳時代後期

桂見 14 号墳では、墳丘が 15 号墳の周溝に切られている。14 号墳墳頂部に追葬する空間があるにもかかわらず、14 号墳墳丘の一部を破壊して 15 号墳を築造しており、埋葬のために古墳築造を行う点で、追葬のために墳丘拡張を行う古墳と築造原理が大きく異なっている。

松原古墳群では、松原小奥の尾根と東西尾根の古墳で、前者が尾根の高位から古墳を築造し列状をなすのに対し、後者は必ずしもそうならず、尾根斜面部にも古墳を展開して集塊状をなす。また、前者は埴輪を用いている点で際立った違いを示している。このように尾根ごとに、築造原理、葬送儀礼が異なっている点が指摘でき、湖山池南西岸における一つの様相として把握されるべきものであろう。

現状における湖山池周辺地域における墳墓、古墳築造の変遷について、その模式を図 170 に示した。弥生時代後期は布勢鶴指奥弥生墳丘墓、桂見および西桂見土壙墓群を模式化しており、中心埋葬が顕在化しつつも全体として集団墓の様相を呈する。古墳時代前期は桂見、倉見、松原古墳群、服部墳墓群を模式化しており、中心埋葬が顕在化し、１～２基の墓壙が主流となる。古墳時代中期（前葉～中葉）は里仁、松原古墳群であり、前期段階のモデルを継続させている。古墳時代中期（後葉）～古墳時代後期は桂見、布勢、釣山、松原古墳群である。列状に展開する古墳（松原小奥）と集塊状に展開する古墳（松原、布勢？、桂見）に分けて考えた。

古墳時代後期～終末期の大きな変化の一つに、横穴式石室並びに横穴墓の導入がある。横穴式石室は、千代川以西では葦岡長者古墳（吉岡 1 号墳）、松原 28 号墳、倉見 9 号墳、熊田古墳が採用している。従来から、鳥取平野部と比較して導入が遅れることが指摘されている（註 13）。横穴墓は、湖山池周辺部にも分布していることが確認されているが、現状で調査事例は少なく、今回の松原 1 号横穴墓がこの段階の動向の一つを表わしているものと思われる。

結語

以上で、湖山池周辺を中心とした古墳群の動向と松原古墳群を総括した。松原古墳群の調査成果は、当地の墓制変遷を考える上でその基礎資料となるものである。ただし、今回の調査はあくまで群構成の一部分であり、副葬品を含めた諸要素の検討や他地域との比較など課題を残す。もとより、これ以外にも調査の蓄積があり、歴史的位置付け作業はその途に着いたばかりである。

註

1）古墳の立地の項は、赤木三郎先生にご教示、ご指導を賜りました。記して心からの謝意を表します。なお、文中に誤謬のある場合はすべて筆者の責であります。

2）横枕古墳群 73 号墳第 1 主体部に有段高杯の出土事例がある。須恵器と共伴しており、古墳時代中期中葉に属する。谷口恭子編 2003『横枕古墳群Ⅱ』（財）鳥取市文化財団

3）平成 21 年度刊行の『松原古墳群Ⅰ』において北浩明、岩垣命が墳丘拡張について論じている。なお、北浩明、岩垣命の「墳丘

増築」という用語が、本報告書の「墳丘拡張」に対応する。「墳丘拡張」とは、後川恵太郎 2008「方形周溝墓の墳丘築造方法について」で定義したとおり、一旦築造した墳丘に再度、盛土を行うことを意味する。また、そこで用いた第一次、第二次盛土という用語は一次、二次墳丘に変更した。

4）松原 21・27 号墳の事例については、報告書作成作業中に知ることになり、11 号墳の再検討を行った。

5）北浩明、岩垣命 2010「第２節古墳構築方法の変遷」『松原古墳群Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター

6）大庭重信 2009「墳丘空間の利用からみた方形周溝墓の埋葬原理」『史跡王山古墳群環境整備工事完成記念考古学研究フォーラム記録集方形周溝墓の埋葬原理』

7）鳥取県教育委員会 2003『上代因伯史考古編』において、戦前に調査が行われた、鳥取市中村にある中村所在横穴墓の報告がある。個人蔵資料の一部は東郷公民館において展示されたことがあり、耳環、土師器甕、須恵器杯身、高杯、直口壺、廋などが出土している。時期は田辺編年 TK43 型式に比定できる。松井潔氏にご教示いただいた。

8）中原斉 1987「第５章第１節横穴墓の構造」『大垈山横穴墓群』鳥取県教育文化財団

9）加工痕の観察方法や記録方法については山陰横穴墓研究会 1995「横穴墓築造に伴う掘削技法」『島根考古学会誌』第 12 集を参照した。

10）池上悟 2000『日本の横穴墓』雄山閣出版

11）松井潔 1996「山陰東部における後期弥生社会の展開と画期」『考古学と遺跡の保護』甘柏健先生退官記念論集
松井潔 1999「因幡・伯耆・出雲の墓制」『季刊考古学』第 67 号

12）池淵俊一 2007「山陰における方形区画墓の埋葬原理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』

13）岩垣命、北浩明は古墳の属性を在地的、伝統的、外来的、先進的な要素に分類し、鳥取平野の古墳群の動向について詳細な検討を行っている。岩垣命、北浩明 2010「第３節鳥取平野周辺古墳群における松原古墳群の位置づけ」『松原古墳群Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター

参考文献

赤木三郎、岡田昭明 1981『１/100,000 鳥取県水理地質図』中国四国農政局計画部

吾郷信一ほか編 1992『日下古墳群発掘調査報告書』日下古墳群調査団

明日の湖南を考える会 1984『葦岡長者古墳発掘調査報告書』

後川恵太郎 2005「墳丘築造方法の検討（１）」『考古学論集』第６集考古学を学ぶ会

池上悟 2004『日本横穴墓の形成と展開』雄山閣出版

梅原末治 1924「因伯二国に於ける古墳の調査」『鳥取県史蹟勝地調査報告』２冊

大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし－陶邑の須恵器－』

小口英一郎ほか編 2010『松原古墳群Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター

加川崇ほか編 2009『平成 20 年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会

亀井熙人 1964「鳥取市浜坂横穴群発見について」『郷土と科学』第 10 巻第１号

亀井熙人、佐々木謙 1972「第３節因幡の古墳群」『鳥取県史』１巻鳥取県

古代の土器研究会編 1992『古代の土器１都城の土器集成』

杉谷愛象ほか編 1984『陰田』建設省中国地方建設局倉吉工事事務所、米子市教育委員会

竹内幸夫編 1990『北谷ヒナ横穴群発掘調査報告書』江府町教育委員会

田辺昭三 1996『陶邑古窯群Ⅰ』

谷口恭子、前田均編 1991『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取市教育委員会、鳥取市遺跡調査団

谷口恭子 2000「因幡における弥生時代後期から庄内式併行期の土器について」『庄内式土器研究ＸＸⅡ』

谷口恭子編 2001『服部墳墓群』（財）鳥取市文化財団

地質調査所 1963『５万分の１地質図幅説明書鳥取北部・鳥取南部』

鳥取県教育委員会 2003『上代因伯史考古編』

1988『桂見古墳群・桂見遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会

中島康太、小玉芳敬 1998「千代川中・上流域の花崗岩地帯に分布する山麓緩斜面及び緩斜面尾根について」『鳥取地学会誌』第２

号
中原斉編 1985『里仁古墳群』鳥取県教育文化財団
中村徹ほか編 1992『東桂見遺跡 . 布勢鶴指奥墳墓群』鳥取県教育文化財団
船井武彦ほか編 1984『桂見墳墓群』鳥取市教育委員会、鳥取市遺跡調査団
前田均ほか編 1984『西桂見遺跡Ⅱ』鳥取市教育委員会、倉見古墳群発掘調査団
前田均ほか編 1993『桂見墳墓群Ⅱ』鳥取市教育福祉振興会
前田均ほか編 1998『布勢墳墓群』鳥取市教育福祉振興会
牧本哲雄 1996『西桂見遺跡鷲谷口地区・鷲谷奥地区・堤谷地区―倉見古墳群』鳥取県教育文化財団
牧本哲雄 1999「第 9 章第 1 節古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第 6 遺跡』鳥取県教育文化財団
水野敏典 2009『古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究』平成 18 ～平成 20 年度科学研究費補助金基礎研究（C）
山形顕応ほか編 1980『ヒル山砦跡熊田古墳発掘調査報告書』鳥取市教育委員会
山田真宏ほか編 1991『釣山古墳群発掘調査概報』鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団
山田真宏ほか編 1992『釣山古墳群発掘調査概報Ⅱ』鳥取市遺跡調査団
山田真宏編 1998『桂見遺跡群（その 1）』鳥取市教育福祉振興会
山田真宏編 2004『倭文所在城跡・倭文古墳群』鳥取市文化財団

第２節　松原小奥遺跡における円筒埴輪の様相

１）はじめに

松原小奥遺跡の調査では、３基の古墳周溝から古墳時代後期のものと考えられる円筒埴輪が出土した。残存状況はあまり良くなく、全体形が判明しているものはない。しかしながら、鳥取平野周辺では円筒埴輪が出土した古墳が少なく、後期に限ると今回の事例を含めても９カ所で確認されているだけである。その点から、今回の出土品は貴重なものといえる。

そこで、本文ではまず、松原小奥遺跡で出土した埴輪の特徴を列挙し、古墳時代後期の古墳から出土した円筒埴輪の特徴と比較しつつ、その位置づけを行うことにする。

２）松原小奥遺跡出土の円筒埴輪の特徴

松原小奥遺跡で出土した円筒埴輪は、墳頂部で使われていたものが、周溝が埋没する段階で土と一緒に入り込んだものである。細片化したものが多く、全体形を知りうる資料が見られない。

そこで、特徴のつかみやすい口縁部と底部、突帯を抽出して、形状や成形方法をもとに分類を行う（図 171）。また、胎土と体部の外部調整、焼成、塗彩の特徴についても触れる。

ａ）各要素の分類

〈口縁部〉

外面の調整と断面形状で４つに分けることができる。

１類　器壁はほぼ真っ直ぐに延び、端部は丸くなっている。外面には縦方向のハケ調整が端部まで見られる。15 号墳の６と 16 号墳の 17 がこれにあたる。

２類　外面がヨコナデによって仕上げられたもので、端部外面が丸くなっているもの。36 号墳の 11 がこれにあたる。

３類　１・２類に比べて外傾し、外面に成形時の指頭痕が１段見られるもの。16 号墳の 14 がこれにあたる。おそらく、指ではさんで口縁部を広げるように成形したものであろう。

４類　３類と同様に外傾して、外面の指頭痕が２段見られる。３と同様に口縁部を広げた後に、さらに端部をはさんでやや上方向に延ばすように成形を行っているようである。16 号墳 15 がこれにあたる。

〈底部〉

器壁の厚さと断面形状から３つに分けることができる。

ａ類　底端部内面がやや肥厚するような断面形状となる。15 号墳の４、５がこれにあたり、体部の厚さは４が 1.0cm、５が 1.2cm でやや薄めである。いずれも表面の劣化や剥離が著しく、調

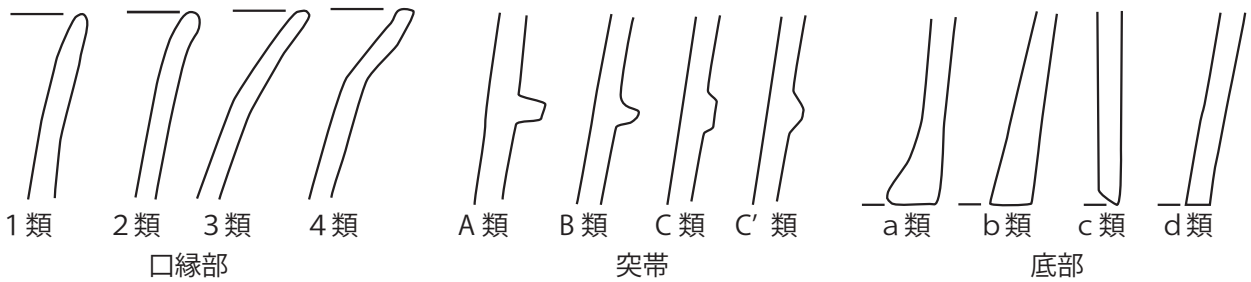


図 171　円筒埴輪属性分類模式

整については観察できなかった。５では底端部中央から体部外面に延びる接合痕跡が確認できる。

ｂ類　底端部に向かって徐々に厚くなる断面形状となる。15 号墳の３と 36 号墳の 12、36 号墳周辺の墓地造成土中から出土した 34、35 がこれにあたる。体部の厚さは 1.4 ～ 1.8cm で、ａ類に比べると厚めである。３と 12 では内面に左上がりのハケ調整がみられる。

この一群には底端面にヘラ状工具の痕跡が確認できる。おそらく、完成時に作業台からはずす際についたものとみられる。

ｃ類　体部から底端部までほぼ同じ厚さで、底端部に内傾する面取りを持つ。特徴的なのは、内面に右上から左下に向かうハケ目が確認できる（写真 14）ことで、底面側から調整を行っていることが想定される。16 号墳の 16 がこれにあたる。

〈突帯〉

突帯各面の調整の状態をもとに２つに分けた。

Ａ類　３面ともナデ調整が行われているもの。今回出土した突帯の多くはこの形態で、断面は四角くなっている。幅は体部側が端部側よりもやや広めになるが、16 号墳の 17 のように体部側がさらに広いものもあれば、36 号墳の８のような端部側とあまり幅が変わらないものもある。17 では突帯のナデ調整で体部のハケ調整が消されており、８では下面、９では上面のナデ調整によって体部が沈線状に凹む。

Ｂ類　上面にナデ調整がみられ、端面から下面にかけて明瞭なナデが見られない。36 号墳の 10 がこれにあたる。16 号墳の 18 は端部がやや平坦になるのだが、下面で明瞭なナデが見られないため、本類の資料と考える。断面形が端面から下面にかけて丸くなっている。

なお、突帯の突出度（体部から垂直に計測して得られる最大値）は両類とも 1.2cm 前後である。Ａ類で上面側の突出が顕著な６や 17 では突出度 1.5cm とやや高めで、Ｂ類では 1.2cm よりもやや低めのもの（18）もある。

〈体部の外面調整〉

資料全体の特徴として、外面調整でヨコハケによる２次調整が行われておらず、縦方向を基調としたハケ調整のみであることが挙げられる。

また、６と８では突帯接合後にタテハケ調整が行われた痕跡を確認することができた。これは突帯下面の調整時にできた体部のヨコナデ後にハケ調整が行われていること（写真 11・13）とともに、６では突帯上面にハケメが確認できた（写真 12）ことから判断した。

〈胎土と焼成〉

胎土には混和物として長石や石英と思われる白色、または半透明の砂礫粒と赤色砂礫粒が含まれている点で共通している。ただし、混和物の量や大きさによっていくつかのバリエーションがある。

４～６、17 は他に比べると大きめ（3mm 程度）の赤色砂礫粒を含んでいる。また、白色または半透明な混和物はほとんどが細砂粒だが、14 では 2mm 程度の粒が目立つ。

焼成ははすべて軟質である。大別すると３つに分けることができる。

橙 色 系　表面が橙色から黄橙色、器壁内が淡い黄橙色で多くの破片がこれにあたる。４～６、17 では白い部分がマーブル状に見える。また２のような厚めの破片では内面が外面に比べて明るめの発色をする資料もある。

写真 11　突帯貼付後のタテハケ（６突帯下側）

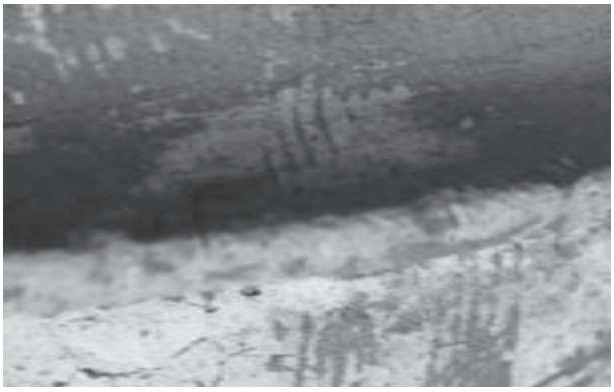


写真 12　突帯貼付後のタテハケ（６突帯上面）

写真 13　突帯貼付後のタテハケ（８突帯下側）

写真 14　底部側からのハケ調整（16）

赤褐色系　外面が赤褐色をしているもの。器壁内は黄橙色である。７～９がこれにあたる。
褐 色 系　表面、器壁内ともに褐色が強くやや暗めである。15 と 16 がこれにあたる。

焼成に関連して、黒色斑が口縁部の 14 と 15、底部の 12 と 35 で確認できた。また、未図化の資料だが 16 号墳出土の体部片で器壁内が黒色化していたものも見受けられた。

〈塗彩〉

今回の出土資料は、表面の剥離や劣化が進んでいた。その中で６と 17 では確実に赤色塗彩が認められた。７～９、11、15 についても塗彩と思われる赤色部分がが確認できるが、やや確実さに欠ける。底部には塗彩が認められない。

ｂ）各属性の組み合わせ

では、それぞれの属性がどのように組み合わされているのかをみていく。

今回出土した資料の中で比較的残存状態の良い６と 17 をみると、ともに口縁部１類－突帯 A 類－黄橙色系焼成－赤色塗彩ありの組み合わせであることが分かる。また、上から２段目（２条ある突帯の間）に円形の透かし穴があることも一致する。口径や突帯の割り付け位置、胎土も類似しているので、これらが同じ規格の下で作られたことが想定される。底部については胎土が類似する４や５があるものの、表面の劣化や剥離が著しく調整方法の確認ができない。現状では同じ 15 号墳から出土した６につく可能性があるが、断言できるものではない。

口縁部４類の 15 と底部ｃの 16 は褐色系焼成であることや、使用されたハケ状工具が一致することから、接合しないものの同一の個体とみることができる。

比較的類似した製作技法を用いている口縁３類と４類については、焼成の違いや胎土内の混和物、

口径、傾きなどで差があるため、これらを同じタイプの埴輪といえるかどうかは現段階で判断できない。また、15、16につく突帯がどのようなものかは、今回の資料では胎土や焼成などが一致するものは見つかっていないため不明である。

口縁部２類や突帯Ｂ類、底部ｂ類については、それぞれ焼成やハケ調整のあり方が異なっているため、現時点では対応関係は不明である。

このことから、松原小奥遺跡の埴輪群については少なくとも製作技法の異なる２種類の埴輪が存在していることが分かる。以下、口縁部１類－突帯Ａ類－黄橙色系焼成－赤色塗彩の組み合わせを「松原Ⅰ類」、口縁部４類－底部ｃ－褐色系焼成の組み合わせを「松原Ⅱ類」としておく。

ｃ）埴輪と古墳の対応関係

次に各古墳での埴輪の対応関係を見てみる。

15号墳では松原Ⅰ類が存在しているほか、松原Ⅰ類よりも体部の厚い２のような個体もある。ただ、体部の厚いものについては点数が少ないので、詳細は不明である。

16号墳では松原Ⅰ・Ⅱ類双方の埴輪が出土している。また突帯Ｂ類の18は黄橙色系焼成ではあるものの、松原Ⅰ類である17に比べると黄色味がかっており、別個体とみてよいと考える。

36号墳では松原Ⅰ・Ⅱ類ともに見つかっていない。口縁部に近い７は下部がやや厚くなり、突帯を境に端部側が薄くなる形状となる。口縁の傾き具合から考えると朝顔形円筒埴輪になる可能性がある。７と同じ赤褐色系焼成のものとしては８や９がある。７では突帯が外れているが、８や９では突帯Ａ類がつく。７と８では突帯下面側の体部がナデ調整でやや凹んでいる点で共通している。これらが同一個体となるかはハケ状工具に差があるので断定は難しい。突帯Ｂ類の10や口縁部２類の11は７～９とは胎土やハケ状工具に差があり、10と11でも黄橙色系焼成ながら表面の色調に差があるので、それぞれ別個体と考えてよい。

以上のように、埴輪が出土している３基で共通する埴輪は確認できない。個別の属性でみれば突帯Ａ類はすべてで確認できるので、松原小奥遺跡の埴輪を特徴付けるものとみてよいだろう。また、先に述べたように、ヨコナデによる２次調整がみられないことも全体の特徴として挙げることができる。

ｄ）埴輪の時期

本項の最後に、埴輪の形態から時期について考えてみる。

川西宏幸は近畿で出土する円筒埴輪の製作技法を元にして５期に区分し、そこから日本各地の埴輪の地域性を踏まえつつ編年を行っている。松原小奥遺跡の埴輪で特徴的なヨコハケによる２次調整が省略されるのは第５期にあたり、その時期としてTK10が上限となるとしている（註１）。この年代観については、15号墳墳丘直上から出土した１の須恵器や、近世以降の造成土に含まれる古墳時代にさかのぼる遺物（20～25）がTK10併行段階のものと考えられるので、齟齬はきたさない。

３）他の古墳から出土した古墳時代後期の円筒埴輪

これまでに鳥取平野の古墳で古墳時代後期と考えられる円筒埴輪が見つかっているのは、大熊段１号墳、２号墳、琵琶隈古墳（三浦１号墳）（註２）、釣山２号墳、布勢古墳がある。

ここではそれぞれの埴輪について、前項同様に口縁、突帯、底部を中心に特徴を見ていく。ただし、布勢古墳の資料については報告書に掲載されておらず、実物の観察ができていないため省略する。大熊段１・２号墳と琵琶隈古墳の資料についてはほぼ全点の実見することができた。釣山２号墳の資料

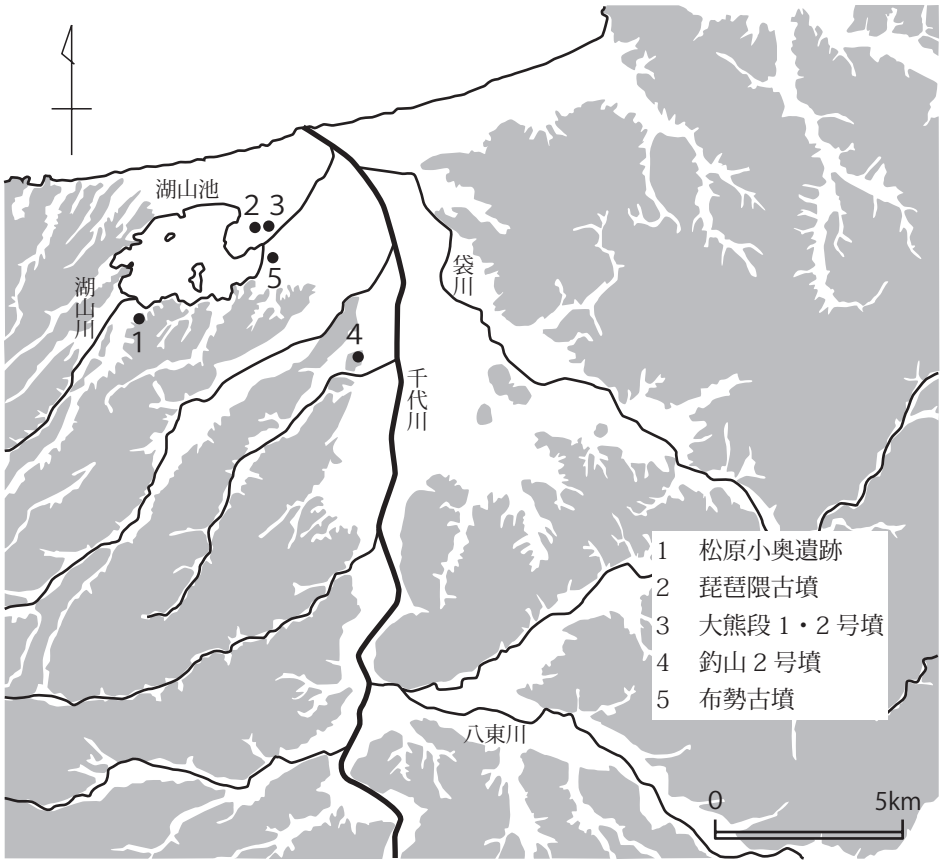


図 172　鳥取平野の古墳時代後期円筒埴輪出土古墳

については出土数が多く、報告書掲載資料を中心に実見した。実物の観察では主に形状と調整方法について行っており、各部の計測値は報告書掲載図面から行っている。

なお、底部と突帯については前項の分類を用い、松原小奥遺跡でみられないものは、必要に応じて新たに定義する。口縁部については、古墳ごとに異なっており、古墳間で共通するものがほとんど確認できなかったため、分類は行わなかった。

a）大熊段１・２号墳（註３）

湖山池北東岸の濃山台地上にある古墳で、東側に前方後円墳である１号墳、西側に円墳である２号墳がある。埴輪以外の遺物が知られていないものの、出土した埴輪はヨコハケによる２次調整が省略されているので、川西５期の資料と考えられる。

１号墳の資料は表採品であり、報告されている点数が少ない。全体形を復元することはできないが、口縁部はやや外傾し、底部はほぼ直立している。

口縁部は四角く仕上げており、横方向のナデ調整を施している。

突帯はＡ類とＢ類が確認できる。Ａ類については突出度が 0.6cm と松原のものに比べて小さく、端面は松原のものよりも広めになる。このような、突出度が 1.0cm 未満のもので３面をナデ調整で仕上げるものを「突帯Ｃ類」とする。

底部にはａ類と内面が肥厚せず四角くなるものとがある。後者は体部の厚さが底端部まで変化がなく、外端面や内端面に面取りを行うこともない。このようなものを以下「底部ｄ類」と記述する。

２号墳では、東側周溝の調査で出土したものがある。埴輪は細片化したものがほとんどであるが、底部からある程度まで接合ができる個体（報告書「Ｐ１」と「Ｑ１」）があり、これらを基本形とし

て体部径と調整を元に全体形の復元をしている。この個体は３条突帯４段の埴輪で、全体形は底部から口縁にかけて徐々に広がる逆台形となる。図 172 ではＰ１を例として掲載した。

外面の調整は、縦方向を基本とするが、やや右上がりのものもある。内面はハケ調整が見られるもの（Ｐ１）と見られないもの（Ｑ１）とがある。Ｐ１をみるとハケ目は主に左上方向であり、口縁部付近で横方向のハケ調整が見られる。また底部内面にはまばらに縦方向のナデを行っている。

口縁部は内外面にヨコナデ調整が施されている。端部内面はやや肥厚している。これは貼り付けたものではなく、端面を平らにするように成形、調整を行った際にできたものと思われる。

突帯はすべてＣ類である。ほとんどのもので突帯のヨコナデ調整によって体部のハケ目がナデ消されている。突帯下面側で体部との粘土接合が残るものがある。

底部はｄ類である。Ｐ１では底面にはヘラ状工具痕跡や棒状のものによる凹みが見られ、同様の痕跡は他の破片でも観察することができた。

赤色の塗彩が施されているものは見られない。

ｂ）琵琶隈古墳（註４）

琵琶隈古墳は大熊段１号墳、２号墳の西側にある前方後円墳で、埴輪は測量調査時に後円部頂部で採集されている。この採集された須恵器や、１号墳と２号墳の間で見つかった特殊土坑から出土した遺物は TK10 併行期のものである。

大きな特徴の１つとして、底部をのぞくほとんどの破片で、外面に赤色塗彩が施されていることが挙げられる。ただ採集品であるため、それを全体の特徴としてよいかは難しい。

底部や体部の破片はほとんど外傾しておらず、おそらくは体部が直立した円筒状で口縁部が外反する形であると考えられる。報告書では３条突帯で４段、高さ 50cm での復元が示されているが、それぞれの破片に接合関係がなく、報告書でも「正確さは期しがたい」としている。あくまでもイメージとして考えるべきであろう。

外面調整は縦方向のハケ、内面は横または左上がりのハケ調整を基本としている。

特徴的な口縁として、大きく外反して端部外面に粘土板を貼り付けて肥厚させたものがあり、その下の部分には横方向のハケ調整が施されている。

突帯はＣ類が大半であるが、Ａ類やＢ類も少量見られる。突帯の調整によって体部のハケ目が消されていることがほとんどで、体部がやや凹むものが目に付く。また端部にハケ調整が確認できたものもある。

底部はｂ類で、端部外面は横方向のナデを施しているものや、外端部と内端部を工具で面取りしているものがみられる。端面にはハケ状の工具痕跡が見られるものがある。また、底部には黒色斑が認められるものがある。

なお、琵琶隈古墳の西側には円墳の三浦２号墳がある。ここからも調査時に埴輪が出土している。図化されているのは２点あり、突帯はＣ類、底部はｄ類である。

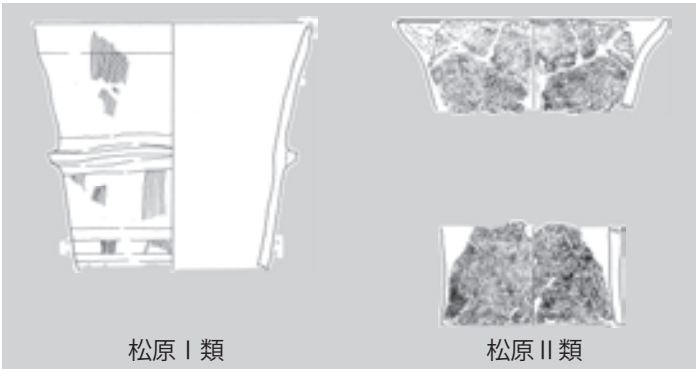
ｃ）釣山２号墳（註５）

湖山池の南東部にある釣山の尾根頂部に造られた前方後円墳である。埴輪はくびれ部の頂部に立てられていた状況が確認されている。埋葬施設から出土した土器から TK10 から TK43 併行期のものとみられる。

ここでは全体形が分かる個体があり、４条突帯で５段の円筒埴輪である。本文では便宜上「釣山Ⅰ

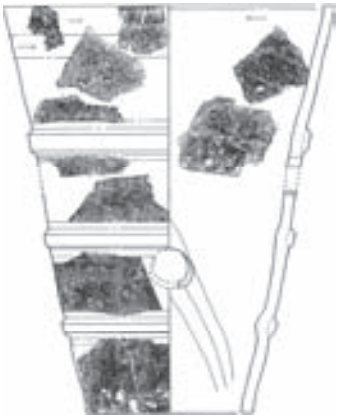
松原Ⅰ類

松原 15 号墳



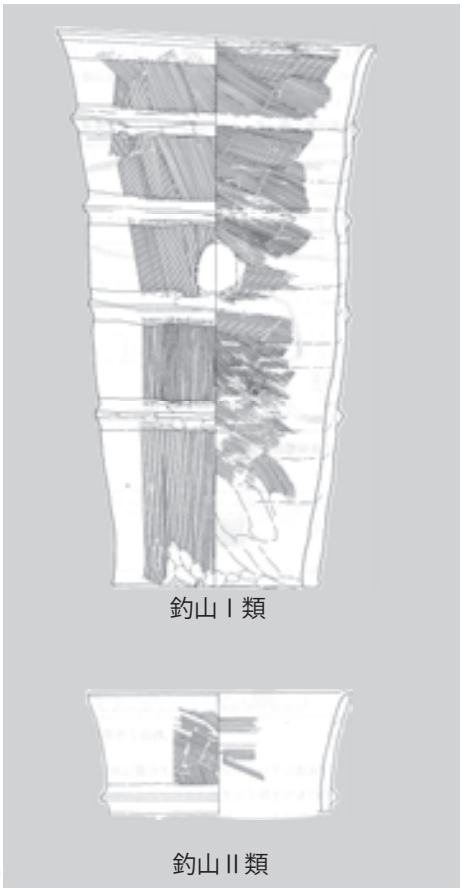
松原Ⅰ類　　松原Ⅱ類

松原 16 号墳



大熊段 2 号墳

琵琶隈古墳



釣山Ⅰ類

釣山Ⅱ類

釣山 2 号墳

図は各報告書から縮小して引用。
網掛は同一古墳からの出土品であること示す。

0　10　20cm
S=1/8

図 173　鳥取平野の古墳時代後期円筒埴輪

類」とする。全体形はあまり開かない逆台形で、口縁がやや外反する。突帯の間隔は 1 段目はやや広めで、2 段目よりも上はほぼ均等になっている。最上段の突帯から口縁までの長さも突帯の間隔とほぼ同じになっている。

外面の調整は下半分がほぼ縦方向、上半分は左上方向のハケ調整である。内面は左上方向のハケ調整を基本としており、底部付近はナデ消されている。

口縁部は端部を丸く仕上げており、内外面ともに横方向のナデを施している。突帯は C 類に近いが、端部のナデが不明瞭でほとんど面がなく、断面が三角形に近いものがほとんどである。端部に若干の

表 10　鳥取平野の古墳時代後期円筒埴輪比較

		松原Ⅰ類	松原Ⅱ類	大熊段２号墳	琵琶隈古墳	釣山２号墳	
側面形		逆台形か	円筒形か	逆台形	円筒形	逆台形	？
高さ		？	？	43cm	？	58cm	？
口縁径		29 ～ 32cm	25 ～ 27cm	35cm	30cm	32cm	27 ～ 29cm
突帯	条数	２以上	？	3	？	4	？
	形状	A	？	C	A、B、C	C´	A
底部	径	16 ～ 18cm	19cm	18 ～ 22cm	20 ～ 25cm	21cm	？
	形状	？	c	d	d	b	？
外面赤色塗彩		○	×	×	○	○	○
特記事項			口縁部に黒色斑	器壁が黒色化	底部に黒色斑	底部に黒色斑	

面を持つものも見られるので、ここではＣ類の亜流としてＣ´類とする。底部はｂ類である。器壁の厚さや底径から同類のものと思われる底部が数点報告書に掲載されている。多くはｂ類であるが、１点ａ類になる可能性があるものが含まれている。

報告書では、釣山Ⅰ類よりも口径が小さい口縁部の一群が掲載されている。ここでは「釣山Ⅱ類」とする。これには突帯Ａ類がつくが、松原小奥遺跡のものに比べて突出度は小さい。口縁部はあまり外反はしておらず、端部は丸く作られるものと、端部に面をもつものとがある。外面には左上がりのハケ調整が、内面には横方向を基調としたハケ調整が行われている。

胎土を見ていると、混和する砂粒の量に差がある２種類が確認できた。このうち砂粒の少ないものは比較的体部が厚く、砂粒の多いものでは薄めになる傾向がある。前者がⅠ類に、後者がⅡ類に対応し、２種類の埴輪が使われていた可能性がある。ただ、全ての破片で検証できておらず、その中にあって例外も見受けられる。

基本的には底部を除いて外面に赤色塗彩が施されている。また底部に黒斑が見られる個体が多く、Ⅰ類には口縁部内面にも確認することができた。

４）各古墳の埴輪との比較

では、それぞれの埴輪について、松原小奥遺跡の資料と比較してみる。各属性の比較は表 10 にまとめた。

鳥取平野において、古墳時代後期の円筒埴輪が出土した古墳は、千代川西岸の湖山池付近の一帯にほぼ限定されている（註６）。松原小奥遺跡はまさにそうした地域の中にある。

松原Ⅰ類に類似する個体として釣山２号墳の釣山Ⅱ類がある。これは口縁１類－突帯Ａ類－赤色塗彩の組み合わせで、口径も近似する。ただ、口縁部外面のハケ調整の方向や口縁端部の形状に異なる破片もある。大きくみれば同類といえるかもしれないが、先にも述べたように釣山２号墳の資料を全点確認できていないため、断言できるものではない。

松原Ⅱ類については、特徴的な底部ｃ類が他の古墳にはなく、松原小奥遺跡でしか確認できないものである。

では、松原小奥遺跡で確認できないものはどうなのだろうか。

突帯をみると突帯Ｃ類とＣ´類がそれにあたる。大熊段２号墳では突帯Ｃ類－底部ｄ類と組み合わせ、釣山２号墳の釣山Ⅰ類では突帯Ｃ´類－底部ｂ類との組み合わせが確認できる。

一方、琵琶隈古墳では３種類（Ａ・Ｂ・Ｃ）の突帯が確認されており、体部の厚さや調整に大きな

差がないために、確認されている底部とどれが組み合わせになるのかは不明である。また、複数の形態の突帯が１つの埴輪に共存することもあるので、組み合わせの提示ができない。

以上から、鳥取平野においては突帯Ａ類を持つ松原Ⅰ類、突帯Ｃ・Ｃ´類を持つ大熊段タイプと釣山Ⅰ類、そして底部ｃ類が特徴的な松原Ⅱ類の４種類の埴輪が少なくともあることが見えてくる。そして、大熊段２号墳のように１種類しかない古墳がある一方で、松原 16 号墳（松原Ⅰ類と松原Ⅱ類）のように確実に２種類が使われている古墳や、同様の可能性がある釣山２号墳（釣山Ⅰ類と釣山Ⅱ類）も存在していることが分かる。

今回の検討対象にはしていないが、ここで取り上げた古墳では形象埴輪が供伴することが多い。これを円筒埴輪との関係性をみると、１種類の埴輪で構成される大熊段２号墳では形象埴輪が出土していないのに対して、２種類が混在する松原 16 号墳や釣山２号墳では形象埴輪が供伴している。琵琶隈古墳は円筒埴輪の様相は不明だが、鶏形埴輪の頭部が見つかっている（註７）。円筒埴輪のあり方と形象埴輪の有無には何らかの関連性があるのかもしれない。

５）おわりに　～今後の課題～

以上、かなり雑駁なものとなってしまったが、松原小奥遺跡の円筒埴輪の様相を見るとともに、鳥取平野の後期の円筒埴輪についても概観してきた。最後に、今回の検討から生じた課題をいくつか挙げることで本文の結びとしたい。

１つには、黒色斑の問題がある。今回取り上げた中では、大熊段２号墳以外で黒色斑が確認できる個体がある。多くの場合は底部にみられるのだが、松原小奥遺跡と釣山２号墳の資料では口縁部に見られるものもある。また、器壁の黒色化については、松原小奥遺跡の他にも実見した大熊段２号墳と琵琶隈古墳の資料で確認できるものがある。

鳥取県内では古墳時代後期になっても各所で黒色斑が認められる埴輪が散見される。黒色斑がある個体が報告されている古墳としては湯梨浜町石脇８号墳（註８）や倉吉市クズマ遺跡第２次調査１号墳（註９）、伯耆町長者原 18 号墳（註 10）がある。このうち、石脇８号墳と長者原 18 号墳ではそれぞれ２系統の埴輪が存在しており、そのうちの１系統に黒色斑が多くみられることが指摘されている。

一方、川西宏幸は埴輪編年を行う指標の１つとして黒色斑を挙げており、近畿では無黒斑化する第４期をもって窖窯焼成に移行したとする（註 11）。

鳥取県内でみられるこのような傾向が周辺地域で確認できるのか、また窖窯焼成を含めた技術系統の関連性も含めて解明することが必要であると思われる。

また、地域内での技術系統の変化を考えるならば、今回取り上げたものよりも前の段階、あるいは近接した地域の埴輪との比較も重要である。例えば TK47 併行期と思われるもので２次調整のヨコナデが欠如する倭文６号墳（註 12）の資料をどのように位置づけるか、また外面にヨコハケがみられる八頭町久能寺狐塚古墳（註 13）や丸山遺跡（註 14）のものとの比較、検討が必要となろう。

こうした点を踏まえて、今後の資料の増加や詳細な考察による議論の深化の叩き台にしていただければ幸いである。

本文の執筆に当たり、鳥取大学の高田健一氏には大学所蔵の大熊段２号墳と三浦１号墳の資料見学

で、また鳥取市教育委員会の加川崇氏と財団法人鳥取市文化財団の谷口恭子氏には釣山２号墳の資料見学でお世話になりました。また鳥取県立博物館の東方仁史氏にこの地域の埴輪についてご教示をいただきました。文末ではありますが、記して御礼を申し上げます。

註

1）川西宏幸　1997「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第２号

2）「三浦古墳」という名称は鳥取大学が当地に移転する際に尽力した当時の学長である三浦百恵氏にちなんだものである。（『三浦遺跡』1982）一方、江戸時代の絵図では濃山台地上に「大隈」と「琵琶隈」の名が見え、大熊段１号墳と三浦１号墳に対応する（平勢隆郎・豊島吉則　1986「「濃山古墳群」とその環境」『鳥取大学教育学部研究報告　人文・社会科学』第 37 巻第１号）。高田健一氏は古墳の名称については昔からの地名によって呼称されるべきであるとし、「琵琶隈古墳」と呼称すべき提言している。本文もこの考えに基づき「琵琶隈古墳」の名称を使用する。

3）豊島吉則・平勢隆郎・久保穣二朗・原田雅弘　1989「鳥取大学構内出土の遺物」『鳥取教育学部研究報告　人文・社会科学』第 40 巻第２号

4）豊島吉則・小谷仲男編　1977『三浦古墳』鳥取大学
中村徹ほか編　1982『三浦遺跡』鳥取大学、鳥取県教育文化財団

5）山田真宏ほか編　1992『釣山古墳群発掘調査概報Ⅱ』鳥取市遺跡調査団

6）古墳に伴わないと思われるもので、古海 39 号墳の南側にあるテラスで埴輪列が確認されている。（『古海古墳群　菖蒲遺跡』鳥取市教育福祉振興会）報告書の図を見ると、供伴する須恵器は TK43 併行期のものとみられ、朝顔形埴輪とともに底部ｄ類と思われるものが出土している。

7）高田健一氏からのご教示で、筆者も実見した。

8）牧本哲雄ほか編　1998『石脇第３遺跡　石脇８・９号墳　寺戸第１遺跡　寺戸第２遺跡　石脇第１遺跡』鳥取県教育文化財団

9）岡本拓也ほか編　2000『クズマ遺跡第２次発掘調査報告書』倉吉市教育委員会

10）高橋章司編　2008『大殿狐谷遺跡　長者原 16・18 号墳』鳥取県教育文化財団

11）註１と同じ。

12）山田真宏編　2004『倭文所在城跡・倭文古墳群』鳥取市文化財団

13）註３と同じ。

14）松下利秀編　1981『丸山遺跡発掘調査報告書』船岡町教育委員会

第３節　松原小奥遺跡、松原１号横穴墓から出土した人骨について

鳥取大学医学部機能形態統御学講座形態解析学分野
井上貴央、江田真毅、藤井理絵

１）はじめに

鳥取県鳥取市松原の鳥取西道路建設予定地から、数多くの人骨を伴う近世墓が検出された。古墳時代の横穴墓も一基発見され、中から若干の人骨が検出された。本報告はそれらの古人骨に関する報告である。人骨の大部分は筆者らが現地で取り上げたが、一部のものは調査担当者に取り上げ作業を依頼した。

人骨の検討にあたっては、性別や埋葬肢位を明らかにするために、頭蓋骨と四肢骨を中心に行い、頭蓋値や手足の骨の詳細は割愛した。

２）埋葬肢位

本遺跡人骨の埋葬肢位については、門前第２遺跡の報告書で用いた次のような用語を使用した。

ａ）半仰臥屈位

体幹は仰臥位をとるが、殿部は床面についているものの、上体をやや浮かせて埋葬されていたと考えられるものである。体幹が全面にわたって棺の底面に接していないので、「半仰臥」と呼ぶ。ここでいう屈位とは、股関節と膝関節の屈曲を意味する。つまり、仰臥位で埋葬された人の膝が胸部近くに位置するように、股関節を深く曲げ、膝関節を強く屈曲した状態で埋葬されたものである（図 174）。

図 174　半仰臥屈位の模式図（側面観）

ｂ）仰臥立膝位

体幹は仰臥位をとり、股関節と膝関節をやや屈曲させた立膝の状態で埋葬されていたと考えられるものである（図 175）。

図 175　仰臥立膝位の模式図（側面観）

ｃ）半腹臥正座位

正座した状態で、体幹を前方に屈曲させて腹臥状態をとって埋葬されていたものである。腹部が直接に棺の底面に接していないので、「半腹臥」と呼ぶ。下肢は正座をした状態で埋葬されたもので、埋葬時に体幹前面がどちらの方向を向いていたかが重要で、その方向を「頭の向き」とあらわすことにする（図 176）。

図 176　半腹臥正座位の模式図（側面観）

ｄ）立膝座位

股関節や膝関節を強く屈曲した立膝状態で埋葬される肢位である。殿部は床面に付いてい

るので、骨盤の骨は元位置から大きくずれることはない。腐敗に伴い、頭部や脊柱が崩れ落ちて元位置から大きくずれるとともに、立膝状態にあった膝関節が倒れることが多い。膝関節が左右に倒れた場合には、股関節を外転させた胡座状態に見えることがある。体幹前面がどちらの方向を向いていたかが重要で、左右の大腿骨近位端や寛骨臼の位置から判定した体幹の向きが顔面の方向と一致する。この肢位は蹲位として記載されることもあるが、蹲位とは元々足を地面につけて上半身を支える姿勢であるので、立膝座位という用語のほうが的を得ている（図 177）。

図 177　立膝座位の模式図（側面観）

3）検出人骨

墓の番号順に検出された人骨の概略を紹介する。なお、墓の時期については、考古遺物等から判定されたもので、Ⅰ期は 16 世紀末～ 17 世紀、Ⅱ期は 18 世紀～ 19 世紀、Ⅲ期は明治時代以降のものである。

4墓（時期不詳）

残存する頭蓋は、側頭骨、後頭骨、上顎骨などからなるが、保存状況が悪く、細片化していて接合できない。

縫合は不明である。下顎骨は左側が残存しており、華奢である。歯は遊離歯が 14 本検出されているがかなり咬耗が進んでいて、咬耗度は Martin の 2 ～ 4 度である。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は頚椎で 2 椎分程度検出されており、前方に軽度骨棘形成が認められる。その他に胸椎の部分が交連状態で検出されているが保存状況は悪い。肋骨は左右不明な 1 本位が検出されている。

上肢骨では、左上腕骨の遠位端の細片のみ検出されている。

下肢骨では、左大腿骨頚～頚部片のみ検出されている。

本人骨の性別は女性、年齢は熟年後半～老年と考えられる。埋葬肢位は不明である。

5墓（時期不詳）

残存する頭蓋は小児骨で、前頭骨、側頭骨、頭頂骨など多数であるが、細片化していて接合はできない。

左第 1 大臼歯は萌出したばかりで、歯式は以下の通りである。

m_2　m_1	i_2　c　m_1　m_2　M_1

椎骨は、頚椎で C1 とほか 4 椎分の計 5 個、胸椎で 3 椎分、腰椎は 5 椎全て、仙骨は S1 相当が検出されている。残存している胸椎、腰椎、仙骨は未骨化である。肋骨は、右で 10 本位、左は第 1 肋骨のほか 8 本位が検出されている。

上肢帯では、左右の鎖骨の一部と右肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、右上腕骨の一部と左右の橈骨の一部が検出されており、右橈骨は未骨化である。

下肢帯の骨では、左右ともに寛骨の腸骨部分のみ残存しており、左右ともに大坐骨切痕は広く、出

産溝は認められない。この骨の特徴から小児と考えられる。下肢骨は、左右の大腿骨の一部、左の脛骨と腓骨の一部が検出されている。

歯の萌出状況から判断して、この人骨は６歳程度の小児と考えられる。

本墓の底面が骨の散布範囲よりもかなり大きい。骨は 30 × 20cm の長方形の範囲に収まっており、大人用に掘られた墓穴に小児骨を埋葬したのかもしれない。本人骨は、顔面を南に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

６墓（Ⅱ期）

頭蓋骨はほぼすべての部分がそろっているが、接合できないものが多い。

前頭部はなだらかに頭頂部に移行しており、眉弓の突出はやや著明で、項面も粗造である。乳様突起は中程度に発達している。

三主縫合は、内板・外板ともに未閉鎖である。歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の０～２度である。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、胸椎で２椎分、腰椎は５椎全て、仙骨は S1 ～ S2 相当が検出されている。肋骨は、右で第１肋骨を含む３本位、左で３本位検出されている。

上肢帯では、左の鎖骨の一部と左肩甲骨の内側縁の一部が検出されている。上肢骨は、右上腕骨の一部、左右の橈骨、尺骨の一部が検出されている。右上腕骨の三角筋粗面は発達している。

下肢帯では、右で腸骨臼を中心とした腸骨片が検出されており、左も腸骨片のみ残存している。左右ともに大坐骨切痕は狭く、出産溝は認められない。この骨の特徴から男性と考えられる。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部、右膝蓋骨が検出されている。下肢骨は全体的に頑丈である。

本人骨の性別は男性、年齢は壮年と考えられ、顔面を北東に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

７墓（時期不詳）

眉弓の突出は少ないが、前頭部はなだらかに頭頂部に移行している。

歯の咬耗はやや進んでおり、咬耗度は Martin の１～２度である。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	脱	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

頚椎は、胸椎が 10 個程度、腰椎が１個分の椎体のみ、仙骨は S1 と S2 相当が検出されている。胸椎は軽度の骨棘形成が認められる。L5 は仙骨部分と癒合し、仙骨化をきたしている重要な例である。肋骨は、右で第１肋骨を欠く５本程度、左で第１肋骨を含む９本程度が検出されている。胸骨は、胸骨柄と胸骨体の一部が検出されている。

上肢帯では、左右の鎖骨の一部、左右の肩甲骨の一部が検出されている。左右ともに肩甲骨関節窩の前方に軽度の石灰化が認められる。上肢骨は、左右の上腕骨の一部、右橈骨、右尺骨の一部が検出されている。右上腕骨の三角筋粗面はやや発達しているが、全体的に華奢である。

下肢帯では、右寛骨で恥骨部分を欠き、腸骨、坐骨の一部が欠損しているものが検出されている。大坐骨切痕は中程度で、出産溝は認められない。左は寛骨臼部分のみ検出されており、大坐骨切痕は不明、出産溝は認められない。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されている。右大

腿骨の粗線はやや発達しており、右脛骨は扁平性が認められる。

本人骨の性別は男性、年齢は熟年と考えられ、顔面を北に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

9墓（Ⅱ期）

頭蓋は、保存が悪いが、歯は残っている。乳歯が含まれており、遊離歯として検出された下顎大臼歯の歯根はまだ完成されていない。

上肢骨では上腕骨の骨体部分が、下肢骨では大腿骨の骨体部分が検出されているが、いずれも大きさが小さく、小児のものであることは明らかである。また、右寛骨の一部が検出されており、腸骨稜は未骨化である。

本人骨の年齢は、歯から推定して 10 歳程度と考えられるが、性別は特定できない。埋葬肢位は不明である。

10 墓（Ⅱ期）

残存する頭蓋は、前頭骨、左右の頭頂骨、側頭骨片などからなる。

眉弓の突出は弱いが、前頭部はなだらかに頭頂部に移行している。冠状縫合と矢状縫合は、内板・外板ともに未閉鎖である。歯式は以下の通りであるが、そのほかに 16 本の遊離歯が検出されている。咬耗度は Martin の２～３度である。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C			P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
		M_1	P_2	P_1	脱	脱	脱		P_2	M_1		

椎骨は、胸椎で２椎分の椎体片、腰椎で１椎分、仙骨の S1 相当が検出されている。

上肢帯では、左肩甲骨の一部が検出されているが、未骨化で小児骨と推定される。上肢骨は、左上腕骨の一部が２本分、左橈骨の一部と右尺骨の一部が検出されており、上腕骨の１本は小児骨と考えられる。左肩甲骨と左上腕骨１本の２つの骨は小児骨で、他は成人骨である。

下肢帯では、右で腸骨の一部が検出されており、大坐骨切痕は狭く、出産溝は認められない。この骨の特徴から男性骨と考えられる。左は寛骨臼の一部のみの残存であり、大坐骨切痕や出産溝は欠損している。下肢骨は、左右の大腿骨の一部、左右の脛骨の一部、左腓骨の一部が検出されており、左右ともに大腿骨の粗線は中程度である。

本人骨の性別は男性、年齢は壮年後半～熟年前半と考えられ、顔面を北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

11 墓（時期不詳）

頭蓋は、前頭から右側頭部を経由して後頭部に至る部分、左錐体、上顎骨の一部が残存している。上顎骨は無歯顎である。

前頭部は膨隆しており、乳様突起は小さい。残存する冠状縫合を見ると、外板は未閉鎖であるが、内板は癒合閉鎖をきたしている。歯は、遊離歯として１点検出されているのみである。この歯は上顎側切歯で、咬耗は進んでおり、咬耗度は Martin の２～３度である。

本人骨の性別は女性、年齢は熟年～老年と考えられ、顔面を西北西に向けて、半仰臥屈位で埋葬されていたものと考えられる。

14 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は、前頭骨、頭頂骨、右側頭骨、下顎骨などの骨片が検出されている。前頭骨を見ると、眉

弓は平坦なようである。歯は、上顎骨片に釘植している大臼歯と５本の遊離歯が検出されている。いずれも、咬耗はほとんど進んでいない。

上肢骨は、右の上腕骨の細片、右橈骨、右尺骨の一部が検出されており、橈骨、尺骨は細い。

下肢骨は、左右の脛骨の一部と、左右の腓骨の細片が検出されている。

埋葬者は女性で年齢は壮年ではないかと考えられるが確言できない。本人骨は､顔面を北に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

15 墓（Ⅱ期）

頭蓋は、頭頂部～顔面頭蓋を欠くが、全体に大きい印象がある。

乳様突起は小さく、項面のレリーフも弱い。人字縫合の外板はやや癒合閉鎖が進んでおり、内板では閉鎖がかなり進んでいる。歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の１～２度である。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	脱	脱	脱	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、胸椎で 10 個程度、腰椎で５椎全てあり、腰椎は全体的に小さい。仙骨は、S1 ～ S3 相当が検出されており、S1 と S2 の間は未癒合である。肋骨は、右で６本程度、左で４本程度検出されている。

上肢帯では、右の肩甲骨の一部と左の鎖骨の一部、左肩甲骨の一部が検出されている。左鎖骨は細い。上肢骨は、左右の上腕骨の一部、橈骨の一部、尺骨の一部が検出されており、右上腕骨は細くて華奢である。

下肢帯では､左右ともに寛骨臼を含む腸骨の一部が検出されている。左右ともに大坐骨切痕は狭く、出産溝は認められない。下肢骨は、左右の大腿骨の一部、右脛骨の一部、左脛骨はほぼ完形で、左右の腓骨の一部が検出されている。右大腿骨は細く、女性骨であることがうかがえる。

本人骨の性別は女性、年齢は壮年と考えられ、顔面を北に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

16 墓（Ⅱ期）

残存する頭蓋は、前頭骨、右側頭骨、上顎骨などの一部、および下顎骨の前部～右側である。

乳様突起は大きい。歯式は以下の通りであるが、そのほかに遊離歯が９本検出されている。歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の１～２度である。

脱	脱	M_1	脱	閉	閉	閉	閉	脱	脱	C

椎骨は、頚椎で C1 と C2 の一部のみが､胸椎は２～３個程度検出されている。肋骨は､右で２本位､左で２～３本位検出されている。

上肢帯では、右の肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨、尺骨の一部、右橈骨の一部が検出されており、右の上腕骨、橈骨、尺骨は大きい。

下肢帯では、左右ともに寛骨臼を中心とした部分と恥骨片が残存している。右の大坐骨切痕は中程度、左の大坐骨切痕は狭く、左右ともに出産溝は欠損している。この骨の特徴から男性骨とうかがえる。下肢骨は、左右の大腿骨の一部、右脛骨の一部、左右の腓骨の一部が検出されており、右大腿骨の粗線はやや発達しており、ここからも男性骨であることが考えられる。

本人骨の性別は男性、年齢は壮年後半～熟年前半と考えられ、顔面を北北東に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

24 墓（時期不詳）

頭蓋骨は、頭蓋後半から頭蓋底にかけての部分を欠く。前頭部はよく膨隆している。眉弓は平坦である。

冠状縫合及び矢状縫合の外板は未閉鎖で、冠状縫合の内板では癒合閉鎖がやや進んでいる。

歯の咬耗はやや進んでおり、咬耗度はMartinの２～３度である。上顎には歯槽性突出が認められる。歯槽はやや退縮している。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
脱	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、頚椎がC1 ～ C4 の４椎分、胸椎が 12 椎全て、腰椎も５椎全て、仙骨はS1 相当が検出されている。肋骨は、右で第１肋骨を含む 11 本位、左で第１肋骨の一部を含んだ８本位が検出されている。胸骨は、胸骨柄と胸骨体が検出されている。

上肢帯では、左右の鎖骨の一部と左右の肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨の一部と、左橈骨の一部、左尺骨の一部が検出されている。

下肢帯では、左右ともに腸骨の一部のみ検出されている。左の大坐骨切痕は広い～中程度、出産溝は不明である。下肢骨は、左右の大腿骨の一部、左右の脛骨の一部、左右の膝蓋骨が検出されている。左大腿骨の粗線はよく発達している。

本人骨の性別は女性、年齢は熟年と考えられ、顔面を北北東に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

25 墓（時期不詳）

頭蓋骨は、右側頭部の一部と頭蓋底の一部を欠くが、ほかはほぼ完存している。前頭部は膨隆しており、眉弓は平坦である。乳様突起は小さい。

三主縫合を見ると、冠状縫合と人字縫合の外板は未閉鎖であるが、矢状縫合の外板は一部閉鎖をきたしている。いずれの縫合も内板は未閉鎖である。歯の咬耗はやや進んでおり、咬耗度はMartinの１～２度であるが、咬耗があまり進んでいない割には吸収閉鎖をきたしている歯槽が多い。

閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	I_2	脱	脱	P_2	閉	閉	M_3
脱	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	脱	I_2	閉	閉	P_2	M_1	閉	閉

椎骨は、頚椎がC1 ～ C2 を含めて３椎分、胸椎が９椎分程度、腰椎は５椎全て、仙骨はS1 ～ 2 相当が検出されている。肋骨は、10 本位が検出されている。

上肢帯では、左の鎖骨と左右の肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨の一部と、左橈骨の一部、左右の尺骨の一部が検出されている。三角筋粗面は良く発達している。

下肢帯では、右の腸骨～寛骨臼の一部のみ検出されている。大坐骨切痕は広く、出産溝は不明である。下肢骨は左右の大腿骨の一部、左右の脛骨の一部、左右の腓骨の一部が検出されている。

本人骨の性別は女性、年齢は熟年と考えられ、顔面を南西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

26 墓（時期不詳）

頭蓋は細片化しており、頭形は不明である。縫合の状態も知ることはできない。

歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の 1 ～ 2 度である。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2		C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎体は 2 個みの検出されている。

上肢骨は、左右の上腕骨、尺骨と右橈骨の一部が検出されており、右橈骨の遠位端は大きく男性骨と考えられる。

下肢骨は、右大腿骨の一部のみ検出されている。

本人骨の性別は男性ではないかと考えられ、年齢は壮年後半～熟年前半と考えられる。

本人骨は、骨の保存状況が悪く、埋葬肢位は確定しがたいが、頭を北に向け、半腹臥正座位で埋葬されていた可能性がある。

27 墓（時期不詳）

頭蓋骨は、かなりの量の毛髪を伴って検出されている。

眉弓や眉間の突出は著しく、項面のレリーフは著明であり、外後頭隆起はよく発達している。乳様突起は中等度に発達している。

矢状縫合と人字縫合を見ると、外板では癒合閉鎖が進んでおり、内板ではほぼ完全に閉鎖をきたしている。上顎骨と下顎骨はともに無歯顎である。下顎骨の幅は広く、男性骨をうかがわせる。

閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉
閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉

椎骨は、頚椎で C1 を除く 6 椎分、胸椎はほぼ 12 個、腰椎は L2 と L3 のうち 1 個と L5 の計 2 椎分、仙骨は S1 の部分が検出されている。肋骨は、右で第 1 、第 2 肋骨を含むほぼ 12 本、左は第 1 肋骨を欠く 10 本程度が検出されている。胸骨は、胸骨柄のみ検出されている。

上肢帯では、左右ともに鎖骨の一部と肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、右の上腕骨がほぼ完形で、左上腕骨の一部、左右の橈骨の一部、左右の尺骨の一部が検出されている。右上腕骨からがっしりとした骨であることが分かる。

下肢帯では、右で腸骨の一部を欠いた大部分、左も大部分が検出されている。左右ともに大坐骨切痕は狭く、出産溝は認められない。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨、膝蓋骨が検出されている。右大腿骨、右脛骨、右腓骨はほぼ完形で残存している。

本人骨は老年男性のものと考えられ、顔面を南西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

29 墓（Ⅱ期）

頭蓋は一部歯を伴った上顎・下顎骨のみ残存している。下顎骨は重厚で男性骨をうかがわせる。

釘植歯のほかに遊離歯もあり、計 16 本の歯が検出されている。歯の咬耗はかなり進んでおり、咬耗度は Martin の 2 ～ 4 度である。歯式は以下の通りである。

		脱	P_1	C					
	M_1	脱	P_1	C	脱		脱	C	P_1	脱

本人骨の性別は男性ではないかと考えられるが確言できない。年齢は熟年後半～老年と考えられる。埋葬肢位は不明である。

30 墓（時期不詳）

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦である。乳様突起は小さい。

冠状縫合および矢状縫合の外板はほとんど閉鎖しており、これらの内板は完全に癒合閉鎖をきたしている。歯は上顎・下顎ともにない無歯顎である。歯式は以下の通りである。

閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉
閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉

椎骨は、頚椎で C3 以下の２椎分、腰椎は椎体片が２椎分のみ検出されている。肋骨は、左右の肋骨片がわずかに検出されているのみである。

上肢帯では、右の鎖骨が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨の一部、左右の橈骨の一部、左尺骨の一部が検出されている。全体的に細く、女性骨であると考えられる。

下肢帯では､左右ともに寛骨片があるにすぎない。大坐骨切痕や出産溝も欠損している。下肢骨は、左右の大腿骨の一部、左右脛骨の一部、左右腓骨の一部が検出されている。右大腿骨は粗線の発達は不良であり、内側顆後面に異常関節面が認められる。下肢骨も全体的に細く、ここからも女性骨であることがうかがえる。

本人骨の性別は女性、年齢は老年と考えられ、顔面を南西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

31 墓（時期不詳）

頭蓋骨は、小さく小児のもので、右側頭骨片、頭頂骨片、上顎骨片、下顎骨の前部～右側などからなる。

乳様突起は小さい。

顎骨に釘植している歯のほか、遊離歯として乳歯および永久歯が合計 18 本認められる。歯式は以下の通りである。

	M_1　m_2	
	M_1	

肋骨は、左右不明な肋骨片２本のみ検出されている。

歯の萌出状況から考えて、本人骨の年齢は８歳程度と考えられる。性別は不詳である。本人骨の埋葬肢位は不明である。

32 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は細片化が著しく、頭蓋を復元できない。頭頂骨や側頭骨が含まれており、頭蓋冠は比較的厚い。矢状縫合の外板は閉鎖が進んでおり、内板は癒合閉鎖をきたしている。

本人骨の性別は男性ではないかと考えられるが確言できない。年齢は熟年～老年ではないかと考えられる。埋葬肢位は不明である。

33 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は、頭頂骨片や上顎骨片、下顎骨からなるが、残存部位は少なく、細片化している。

矢状縫合の外板は未閉鎖であるが、内板は癒合閉鎖が進んでいる。

下顎は重厚である。歯式は以下の通りであるが、そのほかに３本の遊離歯がある。咬耗はかなり進行しており、咬耗度は Martin の２～４度である。

	脱	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2			
M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	

右大腿骨体のみ検出されている。検出された大腿骨は厚みがある。

本人骨の性別は男性、年齢は熟年と考えられ、顔面を北北東に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

37 墓（時期不詳）

頭蓋は変形が著しい。前頭部はよく膨隆している。下顎骨は華奢である。冠状縫合および矢状縫合の外板はほとんど癒合閉鎖をきたしており、これらの内板ではほぼ完全に閉鎖している。

歯の咬耗はやや進んでおり、咬耗度は Martin の２～３度である。歯式は以下の通りである。

										P_2	M_1	M_2	
脱	脱	脱	脱	脱	脱	脱	閉	I_2	C	脱	P_2	閉	閉

本人骨の性別は女性、年齢は熟年～老年と考えられる。顔面を北に向けて、立膝座位で埋葬されていたのではないかと考えられるが、確定できない。

40 墓（Ⅱ期）

頭蓋は、後頭部から頭蓋底を欠く。細片化しており、頭形は不明である。

眉弓はやや突出している。下顎骨は重厚である。

冠状縫合及び矢状縫合の外板は未閉鎖～やや閉鎖している、冠状縫合の内板はやや癒合閉鎖が進んでおり、矢状縫合の内板は未閉鎖である。

歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の１～２度である。左上顎犬歯に歯根嚢胞が認められる。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	脱	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、頚椎で下位２個分、胸椎は上位８個分と下位の椎体片、腰椎は１～２個分が検出されている。肋骨は、右で４本位、左で第１肋骨を含む８本位が検出されている。

上肢帯では、左右の鎖骨の一部が検出されている。上肢骨は、左上腕骨、左橈骨、左尺骨が検出されており、左尺骨はほぼ完形で残存している。

下肢帯では、左の寛骨臼片のみ残存しており、大坐骨切痕や出産溝は不明である。下肢骨は左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨、左膝蓋骨が検出されており、左大腿骨はほぼ完形で残存している。

本人骨の性別は男性、年齢は壮年と考えられ、頭を北に向けて、半腹臥正座位で埋葬されていたものと考えられる。

41 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨とともにわずかに毛髪が検出された。頭蓋骨は左側頭部の一部と頭蓋底の一部を欠くが、ほかはほぼ完存している。前頭部はなだらかに頭頂部に移行しており、眉弓や眉間の突出は著しい。上顎はほとんど無歯顎の状態である。歯式は以下の通りである。

閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	脱	P_2	
閉	閉	閉	閉	C	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉

椎骨は、頚椎で C2 を欠く６椎分、胸椎で 12 椎全て、腰椎で５椎全て、仙骨もほぼ完形で検出されている。Th12、L1、L2、L4、L5 に骨棘形成がみられる。L5 では上下で圧迫骨折が疑われる。肋

骨は、右で第１肋骨を含む 10 本程度、左で第１肋骨を含む 10 本程度が検出されている。胸骨は、胸骨柄と胸骨体が検出されており、胸骨柄と胸骨体は未癒合である。

上肢帯では、左右の鎖骨と肩甲骨の一部が検出されている。左鎖骨の胸骨端には軽度の骨増殖がみられる。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨が検出されており、左上腕骨と右橈骨はほぼ完形で残存している。上腕骨の三角筋粗面は左右ともによく発達しており、右の橈骨粗面、尺骨粗面ともによく発達していることから上肢筋が発達していたことが推測される。

下肢帯では、左右ともに腸骨の一部を欠くがほぼ完存で検出されている。左右ともに大坐骨切痕は狭く、出産溝は認められない。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨が検出されており、左脛骨はほぼ完形で残存している。右大腿骨の転子間線はよく発達しており、粗面も発達している。左脛骨の近位端では、関節炎が認められる。

本人骨は、老年男性のものと考えられ、顔面を南西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

42 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨では、右側の上顎骨と下顎骨が残っているのみである。

歯は咬耗がやや進んでおり、咬耗度は Martin の１～３度である。歯式は以下の通りである。

	M_2	M_1	P_2	P_1	C	
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	脱	

椎骨は、胸椎で Th10 ～ Th12 の３椎分の他に中位 Th3 個の合計６個、腰椎は L1 ～ L5 の間の２個が椎体片のみで検出されている。

上肢骨は、右の上腕骨遠位端の一部、橈骨、尺骨ともに近位端の一部のみ検出されている。検出された上肢骨は全体的に大きい。

下肢骨は、左右の大腿骨の一部、左右ともに脛骨の近位端の一部が検出されている。

本人骨の性別は四肢骨の特徴から男性をうかがわせるが確言できない。年齢は壮年～熟年と考えられる。顔面を北北東に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

43 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は、前頭部～頭頂部を欠くが、顔面頭蓋は比較的よく保存されている。

眉弓は平坦であるが、乳様突起は大きく、外後頭隆起もよく発達している。

三主縫合は人字縫合の一部のみ残存している。縫合の閉鎖状況は、外板・内板ともに癒合閉鎖が進んでいる。上顎の歯槽は吸収閉鎖している部分が多い。下顎は幅は広いが、全体に華奢である。歯は咬耗がかなり進み、咬耗度は Martin の１～３度である。歯式は以下の通りである。

	閉	閉	閉	閉				I_1	閉	閉	閉	P_2	閉	閉
	M_2	脱	P_2	P_1	C	脱	閉	閉	脱	C	P_1	脱	閉	脱

椎骨は、第１、２頚椎のほか２個の椎骨が検出されているのみである。体肢骨では、右の肩甲骨と右の鎖骨の一部が検出されているのみである。

本人骨の性別は、男性骨をうかがわせるものの、残存している骨からは確定しがたい。年齢は熟年～老年と考えられる。本人骨は、顔面を北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

45 墓（Ⅱ期）

残存する頭蓋は、前頭骨、側頭骨、後頭骨などからなる。

眉弓は平坦である。

冠状縫合と矢状縫合の外板は、癒合閉鎖が進んでいるが、人字縫合の外板は未閉鎖である。これらの三主縫合の内板では、いずれも癒合閉鎖をきたしている。

歯の咬耗はやや進んでおり、咬耗度は Martin の２～３度である。歯式は以下の通りであるが、そのほかに７本の遊離歯が検出されている。

				脱	脱	脱	脱								
閉	閉	M_1	P_2	P_1	C	I_2	脱	脱	脱	脱	脱	脱	閉	閉	M_3

椎骨は、腰椎で L3 ～ L5 の３個、仙骨で S1 ～ S3 相当が検出されている。肋骨は、左右不明な肋骨片があるのみである。

上肢骨は、右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。

下肢帯では、右で腸骨片のみ検出されており、大坐骨切痕は広く、出産溝は欠損している。左で寛骨臼を中心とした部分のみ残存しており、大坐骨切痕は広いが、出産溝は認められない。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されている。右大腿骨の粗線は発達が悪い。

本人骨の性別は女性、年齢は熟年と考えられ、顔面を北北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

47 墓（時期不詳）

左右不明な大腿骨体のみ検出されている。

成人骨であるが、年齢、性別、埋葬肢位は不詳である。

50 墓（時期不詳）

頭蓋骨は、前頭骨、側頭骨、上顎骨からなるが、接合できない。

乳様突起は小さい。口蓋縫合を見ると、切歯縫合は閉鎖している。

遊離歯が11本検出されており､なかにはカリエスが認められる｡咬耗は全体としてやや進んでおり、咬耗度は Martin の０～２度である。

上肢骨は、右の上腕骨の一部、左右の橈骨、尺骨の一部が検出されている。右上腕骨は細く、右橈骨、尺骨は華奢で、これから女性骨であると考えられる。

下肢帯では、右の寛骨臼片のみ残存しており、大坐骨切痕や出産溝は欠損している。下肢骨は、左右の大腿骨の一部、脛骨の一部、腓骨の一部が検出されている。右大腿骨の粗線は発達が悪い。

本人骨の性別は女性、年齢は壮年～熟年と考えられ、顔面を北北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

53 墓（時期不詳）

頭蓋骨は、左側頭骨、左右の上顎骨、破損の大きい下顎骨が残存している。上顎、下顎ともに残存している部分は無歯顎で、釘植している歯はなかったものと考えられる。

椎骨は第１頸椎、胸椎の２椎分、腰椎の２椎が検出されており、肋骨は９本程度残存している。上肢骨では、左右の上腕骨の遠位端が、下肢骨では右大腿骨の近位部が検出されているほか、寛骨臼片が残っている。

本人骨の性別は不詳であるが、年齢は老年と考えられ、顔面を北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

54 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は、頭蓋底から後頭部を欠く。左右の側頭部はあるが、接続できない。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦である。乳様突起は欠損しているが、外後頭隆起は大きいようである。残存している三主縫合を見ると、冠状縫合と矢状縫合の外板はともに未閉鎖で、冠状縫合の内板はやや癒合閉鎖をきたしているが、矢状縫合の内板は未閉鎖である。歯の咬耗はあまり進んでおらず、Martin の 1 ～ 2 度である。歯式は以下の通りである。

M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

本人骨の性別は女性、年齢は壮年と考えられ、顔面を北に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

57 墓（Ⅱ期）

椎骨は、胸椎で Th8 ～ 12 の 5 椎分、腰椎では 5 椎分全て、第 1 尾椎も検出されているが、頚椎は検出されていない。胸椎、腰椎で病的所見は認められていない。肋骨は、右で 10 本程度、左で下位 5 本程度検出されている。

上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されており、全体的に細く女性骨ではないかと考えられる。

下肢帯では、左右のほぼ完形の腸骨と、坐骨の一部が検出されている。腸骨稜は未骨化で、大坐骨切痕は大きく、出産溝は認められない。この骨の特徴からも若い女性と考えられる。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されている。

本人骨は、顔面を北に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

64 墓（Ⅱ期）

頭蓋は、眼窩上部から前頭骨および左側頭骨にかけての部分が残存しているほか、右側頭骨の錐体が検出されている。

前頭洞がかなり発達しており、そのため眉間の突出は著しい。前頭部はなだらかに頭頂部に移行しているようである。下顎は幅広いが、華奢である。

三主縫合のうち、残存している冠状縫合を見ると、内板・外板ともに癒合閉鎖をきたしているようである。歯の咬耗はやや進んでおり、咬耗度は Martin の 2 度である。歯式は以下の通りである。

閉	閉	閉	閉	脱	閉	閉	閉	閉	脱	閉	閉	閉	閉
閉	脱	脱	脱	脱	I_2	脱	閉	I_2	閉	閉	閉	閉	閉

椎骨は、頚椎が 2 椎分、胸椎が 9 椎分、腰椎が 5 椎分検出されている。肋骨は、 5 本程度検出されている。

上肢骨は、左肩甲骨片、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。

下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨が検出されている。全体的に頑丈で太い。

本人骨の性別は男性、年齢は熟年～老年と考えられ、顔面を北西に向け、立膝座位で、膝を右に倒した状態で埋葬されていたものと考えられる。

66 墓（Ⅱ期）

残存する頭蓋は、前頭骨、左右の側頭骨、後頭骨などからなるが、接合できない。

眉弓は平坦で乳様突起は小さいが、下顎骨は重厚である。

歯の咬耗はあまりすすんでおらず、咬耗度は Martin の 1 ～ 2 度である。左右上下の第 3 大臼歯は埋伏状態にあり、未萌出である。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、頚椎で 7 椎分全て、胸椎は 11 個分、腰椎は 4 個分、仙骨は S1 ～ S4 相当がほぼ完存して検出されている。下位胸椎は未骨化である。肋骨は、右で第 1 肋骨を含む 6 本位、左で 6 本位が検出されている。胸骨は、胸骨柄と胸骨体の一部が検出されており、胸骨柄と胸骨体は未癒合である。

上肢帯では、左右の鎖骨の一部と右肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されており、上腕骨近位端と橈骨遠位端は未骨化である。

下肢帯では、右寛骨はほぼ完存しており、左は腸骨の一部と坐骨の一部が検出されている。左右ともに大坐骨切痕は狭く、出産溝は認められない。この骨の特徴から男性骨であることがうかがえる。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されている。右大腿骨の大転子部と遠位端、左大腿骨遠位端、左右の脛骨の遠位端は未骨化で癒合したばかりの状態が認められる。

本人骨の性別は男性、年齢は 18 歳程度の青年と考えられ、顔面を北に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

67 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は、頭頂骨、蝶形骨、左右の側頭骨片などが検出されているが接合できない。乳様突起も破損していて性別を確定する情報を欠く。

歯の咬耗はかなり進んでおり、歯頚部付近まで咬耗が進んでいるものもある。咬耗度は Martin の 2 ～ 3 度である。歯式は以下の通りであるが、左上顎の中・側切歯は遊離歯として検出されたものである。

	閉	閉	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2					
閉	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2

右大腿骨の一部のみ検出されている。

本人骨の年齢は熟年～老年と考えられる。性別は男性をうかがわせるが確言できない。

本人骨は、顔面を北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

68 墓（時期不詳）

部位不明の骨片が 1 点検出されているのみである。成人骨であると思われる。

本人骨の性別、年齢は不詳で、埋葬肢位も不明である。

70 墓（Ⅱ期）

頭蓋は、頭頂部後部～頭蓋底を欠く。前頭縫合が残存している。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦である。乳様突起は破損しており、形状は不明である。

三主縫合は、内板・外板ともに未閉鎖である。

歯式は以下の通りであるが、ほかに遊離歯が 15 本検出されている。歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の 1 ～ 2 度である。

	M_2	M_1	P_2	P_1	C	脱	脱	脱	脱	脱	脱	脱	脱	脱
	脱	M_1	P_2	P_1	脱	脱	I_1	I_1	脱	脱	脱	P_2	M_1	

椎骨は、頚椎で C1 と C2 のほか 1 椎分の計 3 椎分、胸椎で 3 椎分、腰椎で 1 椎分のみ検出されて

いる。肋骨は、左右不明であるが２～３本位検出されている。

上肢帯では、右肩甲骨の一部のみ検出されている。上肢骨は、左の上腕骨と橈骨の一部が検出されている。

下肢帯では、右で寛骨臼を中心とした部分と恥骨の一部が検出されており、大坐骨切痕は広くみえ、出産溝は欠損している。左で寛骨臼を中心とした部分が残存しており、大坐骨切痕は広く、出産溝はあるようにみえる。この骨の特徴から女性と考えられる。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、右腓骨が検出されており、右大腿骨、脛骨は細い。

本人骨の性別は女性、年齢は壮年と考えられ、顔面を北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

72 墓（Ⅰ期）

頭蓋骨では、頭頂骨片と下顎骨の右側が残っているのみである。

下顎骨は華奢で、女性骨をうかがわせる。

下顎に釘植している歯のほか、上顎遊離歯が５本検出されている。歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の０～２度である。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	脱

下肢帯では、左右ともに未癒合の腸骨のみ残存している。左右ともに大坐骨切痕は中程度～広く、出産溝は欠損している。骨の特徴から小児と考えられるが、成人骨と混在している可能性もある。下肢骨は、右大腿骨が２本、左大腿骨、左脛骨が検出されている。このうち右大腿骨の一つは小児骨である。

本人骨の性別は女性、年齢は壮年と考えられ、埋葬肢位は不明である。

74 墓（時期不詳）

頭蓋骨は、頭蓋底を欠くが、ほぼ完存している。前頭部はなだらかに頭頂部に移行しており、眉弓はやや突出している。三主縫合の閉鎖状況を見ると、外板はやや癒合閉鎖をきたしている程度であるが、内板は癒合閉鎖をきたしている。歯槽は閉鎖しているものが多い。

歯式は以下の通りである。

				C	I_2	I_1	脱	閉	閉	閉	閉	閉	閉
閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	脱	脱	P_2	M_1	

椎骨は、頚椎で C1、C2 の２椎片、胸椎で 10 個程度、腰椎では５椎分全て検出されている。仙骨も検出されており、仙骨と第１尾椎が癒合している。肋骨は、左で２本程度検出されている。胸骨は、胸骨柄と胸骨体が検出されており、胸骨柄と胸骨体は未癒合である。

上肢骨は、左の上腕骨の一部と、左右の橈骨、尺骨の一部が検出されている。

下肢帯では、右で腸骨、坐骨、恥骨の一部が検出されている。大坐骨切痕は狭く、出産溝は認められない。左は坐骨、恥骨の一部が検出されており、右と同様大坐骨切痕は狭く、出産溝は認められない。骨の特徴から男性と考えられる。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されており、左右の大腿骨粗面は発達しており、男性骨であることがうかがえる。

本人骨の性別は男性、年齢は熟年後半～老年と考えられ、顔面を北東に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

75 墓（Ⅱ期）

右側頭部の一部を欠くが、ほぼ完形である。頭蓋は全体的に小さい。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦で、乳様突起は小さく、項面のレリーフも弱い。

三主縫合は、内板・外板ともに未閉鎖である。

歯式は以下の通りであるが、歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の０～１度である。

M_3	M_2	M_1	脱	P_1	C	脱	脱	脱	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、頚椎７個、胸椎 11 個分、腰椎５個が検出されており、仙骨は S1 ～ S3 部分の上位が残存している。肋骨は右で９本程度、左で 12 本程度、胸骨は胸骨柄と胸骨体が検出されている。

上肢帯では、左右の鎖骨と肩甲骨が検出されており、右鎖骨の肩峰端と左鎖骨の胸骨端は癒合したばかりである。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されており、右上肢骨は細く、女性骨をうかがわせる。

下肢帯では、左はほぼ完形で、右は恥骨の一部は欠くがほぼ完形で残存している。左右ともに大坐骨切痕は中程度で、出産溝を認める。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨と右膝蓋骨が検出されている。

本人骨の性別は女性、年齢は壮年と考えられ、顔面を北に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

76 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は、前頭骨、頭頂骨、錐体、下顎骨からなる。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦である。

歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の１～２度である。歯式は以下の通りである。

				P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2

本人骨の性別は女性、年齢は壮年と考えられる。本人骨の埋葬肢位は不明である。

78 墓（時期不詳）

乳様突起は中等度に発達している。

冠状縫合および矢状縫合は内板・外板ともに閉鎖が進んでおり、人字縫合はほぼ消失している。

歯は全体的に大きく、咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の０～２度である。歯式は以下の通りである。

	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	
	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	脱	脱	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	

椎骨は、頚椎で７椎全て、胸椎で 12 椎全て、腰椎で４～５椎分、仙骨は細片化して検出されている。中位胸椎には軽度骨棘が認められる。肋骨は、右で第１肋骨を含む９本位、左で第１肋骨、第 12 肋骨を含む 11 本位が検出されている。胸骨は、胸骨体が検出されている。

上肢帯では、左右の鎖骨と肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。

下肢帯では、右で腸骨の一部と坐骨を欠くが他は完存、左はほぼ完存している。左右ともに大坐骨切痕は狭く、出産溝は認められない。骨の特徴から男性であると考えられる。下肢骨は、左右の大腿

骨、脛骨、腓骨の一部が検出されている。

本人骨の性別は男性と推定される。年齢は頭蓋縫合が進んではいるが、歯の咬耗度を重視して壮年としておきたい。本人骨は、顔面を北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

81 墓（時期不詳）

頭蓋骨は、頭蓋底の一部を欠くがほぼ完存している。前頭部はなだらかに頭頂部に移行しており、眉弓や眉間の突出は著しい。乳様突起は中等度に発達している。三主縫合を見ると、内・外板ともに未閉鎖である。

歯の咬耗はやや進んでおり、咬耗度は Martin の０～３度である。歯式は以下の通りである。

脱	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、頚椎７椎全て、胸椎が Th4 を除いた 11 椎分、腰椎は５椎分検出されている。L2、L3 では軽度の黄色靱帯骨化が認められる。肋骨は、右で 10 本程度、左で 12 本検出されている。胸骨は、胸骨柄と胸骨体が検出されており、胸骨柄と胸骨体は分離している。

上肢帯では、左右の鎖骨と肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨の一部、橈骨と尺骨は左右ともにほぼ完形で検出されている。

下肢帯では、左右ともにほぼ完形で検出されており、左右ともに大坐骨切痕は狭く、出産溝は認められない。この骨の特徴から男性骨であることがうかがえる。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨が検出されている。

本人骨の性別は男性、年齢は壮年と考えられ、顔面を北北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

82 墓（Ⅱ期）

頚椎が１個、胸腰椎椎体片の他、指骨片１点のみが検出されている。

検出された骨はいずれも火葬骨で、成人骨には間違いないが性別、年齢は不明である。本人骨の埋葬肢位は不明である。

88 墓（時期不詳）

頭蓋骨は、頭頂骨片が１点検出されているのみである。遊離歯として検出された、上顎の切歯や小臼歯は、咬耗がやや進んでおり、咬耗度は Martin の０～２度である。

椎骨は、頚椎が C3 ～ C7 の間の１椎のみ、胸椎は Th1 ～ Th12 の間の２椎分が検出されている。

本人骨の性別は不詳であるが、年齢は歯の咬耗具合から判断して壮年～熟年と考えられる。本人骨の埋葬肢位は不明である。

89 墓（時期不詳）

顔面頭蓋の一部、右頭頂骨～側頭部～後頭骨の上部を欠く。頭蓋は全体的に小さい。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦で、乳様突起は小さい。

冠状縫合は、内板・外板ともに癒合閉鎖をきたしている。矢状縫合は不明であるが、人字縫合の外板は部分的に閉鎖しており、内板は未閉鎖である。歯式は以下の通りである。

閉	閉	閉	閉	P_1	C	I_2	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉

椎骨は、頚椎は C1 ～ C7 の７椎全て、胸椎は Th1 ～ Th5 の間の３椎分と Th6 ～ Th12 の７椎分

の計 10 個、腰椎は椎体のみではあるが L1 ～ L5 の 5 椎分が検出されている。仙骨は S1 と S2 の一部が検出されており、L5 と S1 は軽度の骨棘形成が認められる。肋骨は、右で第 1 肋骨と第 12 肋骨の 2 本に加え 4 本程度、左で第 1 肋骨を含めた 6 本程度、他、左右不明骨の 2 本程度が検出されている。

上肢帯では、左の鎖骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されており、全体的に細く、女性骨であることがうかがえる。

下肢帯では、左右ともに寛骨臼を中心とした部分（恥骨、坐骨、腸骨の一部）が検出されている。左右ともに大坐骨切痕、出産溝は欠損している。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部と、右膝蓋骨が検出されている。

本人骨の性別は女性、年齢は老年と考えられ、顔面を北北東に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

92 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は、頭蓋左半から頭蓋底にかけての部分を大きく欠いている。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦である。乳様突起は欠損していて発達の程度は不明である。下顎骨はがっしりしている。

三主縫合を見ると、外板は未閉鎖であるが、内板はほぼ完全に癒合閉鎖をきたしている。

上顎には軽度の歯槽性突出が認められる。歯の咬耗はやや進んでおり、左下顎第 3 大臼歯の咬合面にはカリエスが認められる。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

舌骨も検出されている。

椎骨は、頚椎が C1 ～ C5 の 5 椎分、胸椎が Th1 ～ Th6 の間の 4 個と Th7 ～ Th12 の 6 椎分の計 10 椎分、腰椎は L1 ～ L5 の 5 椎分全て、仙骨は S1 の一部が検出されている。Th1 ～ Th6 の間で検出された 4 個のうち 2 個に椎肋靱帯骨化がみられ、L4 には骨棘形成が認められる。肋骨は、右で第 1 肋骨を含めた 4 本程度、左は 3 本程度検出されており、そのうち左の 1 本に椎肋靱帯骨化が認められる。胸骨は、胸骨柄と胸骨体が検出されており、胸骨柄と胸骨体は未癒合である。

上肢帯では、左右の鎖骨と肩甲骨の一部が検出されており、左右の鎖骨は大きく、男性骨ではないかと考えられる。上肢骨は、左右の上腕骨と橈骨の一部、右尺骨の一部が検出されている。

下肢帯は、左右ともに寛骨臼を中心として残存している。大坐骨切痕は右で狭く、左で中程度、出産溝は左右ともに不明である。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨と左腓骨の一部が検出されている。右大腿骨の粗線は発達しており、これからも男性骨であることがうかがえる。

本人骨は頭蓋骨の形状から判断して男性と考えられるが確言できない。年齢は熟年と考えられる。本人骨は、顔面を北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

93 墓（時期不詳）

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦で眉間の突出も弱い。乳様突起は小さいが、項面のレリーフは著明である。

三主縫合を見ると、冠状縫合及び矢状縫合の外板はほぼ癒合閉鎖をきたしており、人字縫合の外板も癒合閉鎖が進んでいる。

歯の咬耗はかなり進んでおり、右下顎第２大臼歯の遠心面にはカリエスが認められる。

歯式は以下の通りである。

M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	脱	M_2	M_3
M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	閉	M_3

椎骨は、細片化したものも含め７椎分、胸椎では６椎分、腰椎では椎体のみの残存ではあるが５椎分検出されている。残存する椎体には特に病的所見は認められない。肋骨は、右で第２～ 10 肋骨の間の６本程度、左で第２～ 10 肋骨の間の４本程度が検出されている。胸骨は、胸骨柄の一部と胸骨体の一部が検出されている。

上肢帯では、右の鎖骨と左右の肩甲骨の一部が検出されており、右鎖骨は細い。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。

下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されている。右脛骨は扁平脛骨であるが、左脛骨の扁平は強くない。

本人骨の性別は女性、年齢は熟年後半と考えられ、顔面を北北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

95 墓（Ⅱ期）

細片化した頭蓋骨片がわずかに検出されているにすぎない。

本人骨の性別は不詳で、年齢は成人には間違いないが詳細は不詳である。

96 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は、側頭骨と下顎骨が検出されている。第１・第２乳臼歯は萌出しているが、他は未萌出である。

肋骨は右５本程度と左２本程度、左鎖骨の一部も検出されている。

歯の萌出程度から考えて、３～６歳程度の幼児の骨と考えられる。本人骨の埋葬肢位は不明である。

97 墓（時期不詳）

上肢帯では、右肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右不明ではあるが上腕骨頭１点が検出されている。成人骨であることは間違いないが、年齢、性別、埋葬肢位は不明である。

100 墓（時期不詳）

細片化していたが接合できた。左頬骨弓が欠如しているがほかはほぼ完存している。

三主縫合を見ると、冠状縫合と矢状縫合は癒合閉鎖が進んでいるが、ラムダ縫合は未閉鎖である。骨口蓋縫合では切歯縫合はほぼ消失している。横口蓋縫合は閉鎖していない。正中口蓋縫合は口蓋部後１/３が消失している。

歯式は以下の通りである。下顎の M ３は両側ともにやや転位しており、未咬耗である。

	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	
M_3	脱	M_1	P_2	P_1	C	I_2				C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、頚椎７個、胸椎 12 個、腰椎５個の全てが、仙骨の S1 ～ S3 上位部分と尾骨が残存している。肋骨は、右９本程度と左９本程度の他、左右不明の肋骨片 13 本程度検出されている。胸骨は、胸骨柄と胸骨体が検出されている。

上肢帯では、左右の鎖骨と肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。

下肢帯では、右は恥骨を欠くが他は完存、左は寛骨臼を中心とした部分が検出されている。大坐骨切痕は左右ともに中程度で、出産溝は右は不明確であるが、左ははっきりと認められる。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨、膝蓋骨が検出されている。

本人骨は熟年女性と考えられ、顔面を北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

101 墓（Ⅱ期）

【成人】

頭蓋骨は、前頭骨、頭頂骨、後頭骨、蝶形骨、左側頭骨などからなるが、接合できない。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦である。乳様突起は小さく、項面のレリーフも弱い。

三主縫合を見ると、外板は冠状縫合ではほとんど閉鎖、矢状縫合では閉鎖、人字縫合では部分的に閉鎖をきたしている。内板はすべての縫合で癒合閉鎖をきたしている。

下顎骨は左半分が残っているが、無歯顎である。

椎骨は、頚椎で C1 の一部と C2 ～ C7 の間で 4 個の計 5 椎分、胸椎で 9 個程度、腰椎は L3 を除いた 4 椎分、仙骨は S1 ～ S3 相当が検出されている。L4、L5 に骨棘形成がみられ、L5 は圧迫骨折が疑われる。肋骨は、左で 8 本程度みられるが、細片化している。胸骨は、胸骨柄の一部のみ検出されている。

上肢帯では、左鎖骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。左橈骨粗面に比べて右橈骨粗面は大きく、左右差が認められる。左尺骨の近位端には骨棘が認められる。

下肢帯では、左右ともに寛骨臼を中心とした腸骨の一部と坐骨の一部が検出されている。右の大坐骨切痕は中程度～狭く、出産溝はみられないようだが欠損している部分もあり不明である。左の大坐骨切痕は中程度で、出産溝は欠損している。骨の特徴から男性骨と推定される。下肢骨は左右の大腿骨、脛骨と左右不明な腓骨 1 点が検出されている。右大腿骨の粗面は発達している。

本人骨の性別は男性、年齢は老年と考えられ、顔面を西北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

【小児】

頭蓋骨は、前頭骨、側頭骨、後頭骨、下顎骨などからなる。一部の歯が検出されているが、歯冠はほとんど形成されておらず、生後数ヶ月の乳児と考えられる。

肋骨は、右３本と左２本が検出されている。

上肢帯では、左右の肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨と右橈骨の一部が検出されている。

下肢帯では、右の腸骨 1 点されている。下肢骨は、左大腿骨の一部が検出されている。

本人骨は生後数ヶ月の乳児で性別不詳である。埋葬肢位も不明である。

102 墓（時期不詳）

頭蓋骨は、毛髪を伴って発見された。頭頂骨後部～後頭骨上部、右側頭部、および頭蓋底の一部を欠く。全体的に歪みがあるため、後頭骨の左側は接合できない。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦である。乳様突起は小さい。

人字縫合は、一部未閉鎖であるが、冠状縫合および矢状縫合は内・外板ともに癒合閉鎖をきたしている。切歯縫合は消失しており、正中口蓋縫合と横口蓋縫合は未閉鎖である。

上顎は無歯顎で、下顎骨には一部の歯が釘植しているのみである。残存歯の咬耗はかなり進んでおり、咬耗度は Martin の３度である。

歯式は以下の通りである。

閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉
										脱	P_2	脱	

椎骨は、頚椎が C1 と C2 の２個、胸椎が６個、腰椎が３個残存しており、胸椎と腰椎には圧迫骨折が認められる。肋骨は、肋骨片が 20 点ほど検出されている。

上肢帯では、右の鎖骨のみ検出されている。上肢骨は、右の上腕骨、尺骨の一部と左右の橈骨の一部が検出されている。右の橈骨と尺骨の関節面、つまり上橈尺関節には骨増殖が認められ、肘関節炎の所見がみられる。

下肢帯では、左の寛骨臼を中心とした部分が検出されており、大坐骨切痕は欠損しているが広いようで、女性骨ではないかと考えられる。下肢骨は、左右の大腿骨と脛骨の一部と、右腓骨が検出されている。

本人骨は老年女性で、顔面を北西に向けて、半腹臥正座位で埋葬されていたものと考えられる。

105 墓（Ⅱ期）

頭蓋は、後頭骨、右側頭骨、下顎骨片などが検出されている。

乳様突起は小さい。歯は下顎の大臼歯が４本検出されている。咬耗はかなり進んでおり、咬耗度は Martin の３度である。

上肢帯では、右の肩甲骨のみ検出されている。

下肢帯では、左の寛骨臼の一部から大坐骨切痕にかけてのみ残存しており、大坐骨切痕は広い。下肢骨は、左右の大腿骨と脛骨の一部、右腓骨の一部が検出されている。

本人骨の性別は女性、年齢は熟年～老年と考えられ、頭を北西に向けて、半腹臥正座位で埋葬されていたものと考えられる。

106 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は、前頭骨、側頭骨、頭頂骨、上顎骨などからなるが、細片化しており、接合できない。頭蓋は全体的に小さい。眉弓は平坦である。

冠状縫合や矢状縫合の外板は未閉鎖であるが、内板ではやや癒合閉鎖が進んでいる。

遊離歯が 22 本程度あるが、咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の０～２度である。歯式は以下の通りである。

脱	M_1	P_2	P_1	C	I_2	脱	脱	脱

肋骨は、細片化しており左右不明ではあるが 20 本程度検出されており、なかには太いものもある。

上肢骨は、右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。

下肢帯では、左右不明の寛骨臼片が検出されている。

本人骨の性別は女性、年齢は壮年と考えられ、埋葬肢位は不明である。

112 墓（時期不詳）

左大腿骨の一部と左右脛骨の一部が検出されているのみである。本人骨の埋葬肢位は不明である。

114 墓（Ⅱ期）

椎骨は C2 ～ C7 の間の 1 個と左膝蓋骨が検出されている。本人骨の埋葬肢位は不明である。

116 墓（時期不詳）

椎骨は、頚椎片 1 個、胸椎は Th8 ～ Th12 の 5 個の他に 1 個の計 6 個、腰椎は 5 個検出されており、L4 では分離症が認められる。肋骨は、右 3 本と左 1 本が検出されている。

上肢骨は、左の尺骨のみ検出されている。

下肢骨は、左の腓骨と右の膝蓋骨が検出されている。

成人骨であることは確かであるが、性別、埋葬肢位は不明である。

117 墓（時期不詳）

頭蓋骨では、歯が 1 点検出されているのみである。この歯は上顎中切歯で、咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の 1 度である。

椎骨は、第 2 頚椎のみが検出されている。

下肢骨は、右膝蓋骨のみ検出されている。

本人骨の性別は不詳であるが、年齢は歯の咬耗度から考えて壮年ではないかと考えられる。

本人骨の埋葬肢位は不明である。

124 墓（時期不詳）

頭蓋は、前頭骨、上顎骨などからなる。

眉弓や眉間の突出は著しい。

冠状縫合の外板はかなり閉鎖が進んでおり、内板は癒合閉鎖をきたしている。上・下顎骨ともに無歯顎である。

閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉
閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉

椎骨は、下位頚椎 3 椎分、胸椎では上位胸椎 4 椎分、腰椎は 5 椎全て、仙骨は上位 2 椎分が検出されている。L1 ～ L5 まで著しい骨棘形成あり、仙骨の上面にも骨棘が認められる。L4 では分離症、L5 では圧迫骨折が認められる。肋骨は、右で 6 本程度、左で 10 本程度検出されている。胸骨は、胸骨柄と胸骨体が検出されており、胸骨柄と胸骨体は未癒合である。

上肢帯では、左右の鎖骨と左右の肩甲骨の一部が検出されている。

上肢骨は、左右の上腕骨の一部と、左橈骨、尺骨の一部が検出されている。上腕骨は全体的に太く、がっしりとしているため男性骨であると考えられる。

下肢帯では、右は寛骨臼を中心とした腸骨と坐骨が、左は寛骨臼を中心とした腸骨、坐骨、恥骨が検出されている。左右ともに大坐骨切痕は狭く、出産溝は認められない。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されており、脛骨は左右ともに扁平脛骨である。

本人骨の性別は男性、年齢は熟年後半～老年と考えられる。埋葬肢位は、西を向いて立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

125 墓（時期不詳）

頭頂部と、頭蓋底の大後頭孔を中心とした部分を欠くが、ほかはほぼ完存している。頭の三主径は，頭蓋最大長が 172mm、頭蓋最大幅が 133mm、バジオン・ブレグマ高が計測不可、頭蓋長幅指数が 77.3 で、中頭型であった。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦である。

冠状縫合は完全に癒合閉鎖している。矢状縫合とラムダ縫合は未閉鎖である。切歯縫合は消失し、横口蓋縫合の外側は閉鎖している。正中口蓋縫合口蓋骨部は消失している。

歯の咬耗はやや進んでおり、歯槽が閉鎖しているものも多い。歯式は以下の通りである。

M_2	M_1	閉	閉	脱	脱	I_1	閉	閉	C	P_1	閉	閉	M_2
閉	閉	P_2	P_1	脱	脱	閉	脱	脱	脱	脱	脱	閉	閉

椎骨は、頚椎が７椎全て、胸椎が 10 個程度、腰椎が L5 椎全て、仙骨では S1 相当が検出されている。L1 では圧迫骨折があり、L1 と L5 に骨棘形成が認められる。肋骨は、右で３本程度、左で第１肋骨を含む３本程度が検出されている。

上肢帯では、左右の鎖骨の一部と右肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。右橈骨遠位端には関節炎が認められ、左橈骨の遠位端にも軽度ではあるが関節炎が認められる。

下肢帯では、右で寛骨片が、左で恥骨を含む寛骨片が検出されている。左右ともに大坐骨切痕は広くみえ、出産溝は認められない。下肢骨は、左右の大腿骨と脛骨の一部が検出されている。

本人骨は熟年女性と考えられ、顔面を北北西に向けて、正座位で埋葬されていたものと考えられる。

128 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は前頭骨から鼻骨にかけての部分と上顎骨および下顎骨が残存している。

眉弓は平坦であるが、下顎骨はかなり頑丈である。

歯はかなり咬耗が進んでいるものが多く、Martin の０～４度である。歯式は以下の通りである。

脱	M_1	P_2	脱	C	I_2	脱	脱	脱	C	P_1	P_2	M_1	閉	閉
閉	M_1	P_2	P_1	C	閉	閉	閉	脱	脱	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

鎖骨や肩甲骨のほか、上肢骨では上腕骨の一部が検出されている。上腕骨は太くて、三角筋粗面がよく発達している。

下肢骨は、大腿骨の一部が検出されているが、概して太い。

本人骨の性別は男性と考えられ、年齢は老年と思われる。埋葬肢位は特定できない。

130 墓（Ⅱ期）

火葬人骨で、黒色～灰色を呈するものが多く低温で焼かれたことがうかがえる。

頭蓋骨のみ認められ、荼毘に付した後、選択的に頭蓋を集めて埋納したことがうかがえる。

残存する人骨で性別の特徴をあらわす骨を見ると、後頭骨の外後頭隆起はよく発達している。

残存する矢状縫合と人字縫合を見ると、外板は未閉鎖であるが、内板は癒合閉鎖をきたしている。

歯は遊離歯として６本検出されている。咬耗はやや進んでいる。

椎骨は、頚椎 C1、C2 の２椎分が検出されている。他は歯が６本と頭蓋骨のみ検出されており、四肢骨は残存していない。取り上げられた骨は火葬骨で、白～灰白色である。

本人骨の性別は男性、年齢は熟年と考えられる。

131 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は後頭骨片が数点検出されているのみである。

下肢帯の骨では、左の寛骨臼と腸骨の一部が検出されているのみで、大坐骨切痕や出産溝は不明である。下肢骨は、右大腿骨と左脛骨の一部のみ検出されている。

成人骨であることは確かであり、性別は女性をうかがわせるが確言できない。

本人骨の埋葬肢位は不明である。

132 墓（時期不詳）

頭蓋骨は、頭頂骨片、錐体を含む側頭骨片などが含まれているが、接合不能のものが多く頭形は不明である。頭蓋骨は全体的に大きい。

残存する矢状縫合や人字縫合を見ると、外板は癒合閉鎖が進んでおり、内板ではほぼ完全に癒合閉鎖をきたしている。

歯は遊離歯として７本検出されているが、咬耗はやや進んでおり、咬耗度は Martin の１～３度である。

椎骨は、頚椎で C2、C6、C7 の他 C3 ～ C5 の間の１～２椎分、胸椎で Th8 ～ Th12 の５椎分の他に Th1 ～ Th7 の間の１個程度の計８個程度、腰椎は５椎分全てが検出されている。L1、2、3 に軽度の骨棘形成がみられ、L5 では軽度の圧迫骨折が疑われる。肋骨は、右で第１、11、12 以外の４本程度、左で第１、12 以外の５本程度が細片で検出されている。

上肢帯では、左鎖骨と左肩甲骨の一部が検出されており、左鎖骨は細い。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。右上腕骨遠位端の外側に骨増殖が認められ、肘関節炎が疑われる。

下肢帯では、右で坐骨と恥骨の一部、左で腸骨の一部が検出されている。左腸骨から大坐骨切痕は狭い。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されている。左右の大腿骨粗線は非常に発達しており、ここからも男性骨であることがうかがえる。

本人骨の性別は男性であると考えられ、年齢は熟年～老年と考えられる。

本人骨は、顔面を北北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

135 墓（時期不詳）

頭蓋骨は細片化しており、接合はできない。頭頂骨、後頭骨、右側頭骨、上顎骨、下顎骨などが含まれている

咬耗はやや進んでおり、咬耗度は Martin の２～３度である。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C		
脱	M_2	M_1	P_2	P_1	脱	脱	

下肢帯では、右で寛骨臼の一部のみ検出され、大坐骨切痕は不明、出産溝も不明である。左は寛骨臼を中心とした部分のみ検出され、大坐骨切痕は狭く、出産溝は不明である。骨の特徴から女性と考えられる。下肢骨は、左右の大腿骨の一部と右脛骨の一部が検出されている。

本人骨の性別は女性、年齢は熟年と考えられる。

本人骨は、頭を北に置き、仰臥立膝位で埋葬されていたものと考えられる。

136 墓（時期不詳）

頭頂部～後頭部の一部を欠く。全体的に頭蓋は小さい。

眉弓は平坦で、乳様突起も小さい。

冠状縫合は外板では未閉鎖であり、人字縫合の外板はやや癒合閉鎖が進んでいる。三主縫合の内板は、いずれも癒合閉鎖をきたしている。

歯式は以下の通りであるが、ほかに遊離歯が１本検出されている。歯の咬耗はやや進んでおり、咬

耗度は Martin の２～３度である。また、左上顎第２大臼歯にカリエスが認められる。

M_2	脱	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	脱	C	P_1	P_2	M_1	M_2	脱
M_2	M_1	P_2	P_1	C	脱	脱	脱	脱	脱	P_1	P_2	M_1	脱	

椎骨は７椎分全て、胸椎では 10 個程度、腰椎では５椎分全て、仙骨は S1 部分が検出されている。肋骨は、右で中位肋骨３本程度、左で第２～ 10 の間の８本程度が検出されている。胸骨は、胸骨体のみ検出されている。

上肢帯は、左の鎖骨と肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されており、右上腕骨の三角筋粗面は発達している。

下肢帯では、左右ともに腸骨の大部分は欠損しているが、他はほぼ完存している。左右ともに大坐骨切痕は中程度で、出産溝は認められない。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されている。右大腿骨の粗線は中程度であるのに対し、左粗線は発達している。左右ともに脛骨は扁平脛骨である。

本人骨の性別は女性と考えられるが、四肢骨は粗面が発達しており男性骨をうかがわせる。一応女性骨としておくが、確言できない。年齢は熟年と考えられる。

本人骨は、顔面を北西に向けて、半仰臥屈位で埋葬されていたものと考えられる。

137 墓（時期不詳）

残存する頭蓋は、右側頭骨片、後頭骨片、右上顎骨、前部から右側の下顎骨などからなる。

乳様突起は大きく、項面のレリーフは粗造である。下顎骨は重厚である。

歯の咬耗はやや進んでおり、咬耗度は Martin の２～３度である。

歯式は以下の通りであるが、そのほかに３本の遊離歯が検出されている。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1						
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	脱	脱	脱	脱	C	P_1	脱	M_3

椎骨は、頚椎で C1 の一部と C2 ～ C5 までの４椎分、胸椎は１椎分、腰椎は５椎分全てが検出されている。肋骨は、左右不明な５本程度が検出されている。

上肢帯では、右鎖骨が検出されている。上肢骨は、右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。

下肢帯では、右は寛骨臼中心とした部分（腸骨と坐骨の一部）が検出されており、大坐骨切痕は狭く、出産溝は認められない。左は恥骨片と寛骨臼の一部が検出されている。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨の一部が検出されている。右大腿骨は太く、男性骨であると考えられる。

本人骨の性別は男性、年齢は壮年と考えられる。

本人骨は、顔面を北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

138 墓（Ⅱ期）

顔面頭蓋は残存しているが、脳頭蓋は細片化している。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦である。乳様突起は破損していて形状は不明である。

冠状縫合および矢状縫合の外板はかなり閉鎖が進んでいて痕跡が認められる。これらの内板では癒合閉鎖をきたしている。

歯槽が吸収閉鎖をきたしているものが多く、歯式は以下の通りである。

閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉
	閉	閉	脱	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	閉	P_1	閉	閉	閉	閉

椎骨は、頚椎７個、胸椎は椎体のみの６個程度、腰椎は４個、仙骨が検出されている。腰椎４個にはいずれも骨棘形成が認めら、L4、L5 には圧迫骨折がみられる。仙骨の上部にも骨棘が認められる。

肋骨は、左右不明の肋骨片が 30 点程度検出されている。胸骨は、胸骨体のみ検出されている。

上肢帯では、左右の肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。これらの上肢骨はきわめて細い。

下肢帯では、左右ともに寛骨臼を中心とした部分～耳状面までが検出されている、左右ともに大坐骨切痕は広く、出産溝は右で認められることから女性骨である。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部と左膝蓋骨が検出されている。下肢骨もきわめて細い。

本人骨の性別は女性で、年齢は老年と推定される。

本人骨は、顔面を北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

141 墓（時期不詳）

頭蓋骨は頭頂骨片、後頭骨片、蝶形骨片、左右の側頭骨片からなるが、接合できない。

矢状縫合を見ると、外板ではやや癒合閉鎖をきたしており、内板は閉鎖している。

胸骨、椎骨、肋骨は検出されていない。

上肢骨は、右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。

下肢帯では、右の腸骨片のみ検出されている。腸骨稜の前方付近で厚さが厚いため男性と推定される。下肢骨は、左右の大腿骨の一部が検出されている。

本人骨の性別は男性、年齢は熟年と考えられる。

本人骨の埋葬肢位は不明である。

142 墓（時期不詳）

大量の毛髪が残存していた。頭蓋は、右半分を大きく欠く。前頭縫合の遺存が認められる。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦である。乳様突起は小さい。下顎骨は比較的頑丈である。

三主縫合は、内板・外板ともに未閉鎖である。

歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の１～２度である。歯式は以下の通りであるが、左下顎犬歯は捻転している。

	I_1	脱	C	P_1	P_2	M_1	M_2
	脱	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2

椎骨は、頚椎７個、胸椎は上位２個と Th8 ～ Th12 の５個の計７椎、腰椎は５個、仙骨は S1 部分が検出されている。肋骨は、右 10 本、左８本、左右不明な肋骨片が 10 本程度検出されている。

上肢帯では、左右の鎖骨と肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨と橈骨が検出されており、左上腕骨は細く女性骨ではないかと考えられる。

下肢帯では、右は寛骨臼～腸骨の一部が、左は腸骨翼、寛骨臼～坐骨の一部が検出されており、左右ともに出産溝は欠損していて不明であるが、大坐骨切痕は広く明らかに女性骨であることがうかがえる。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されている。

本人骨の性別は女性、年齢は壮年と考えられる。

本人骨は、顔面を南西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

157 墓（Ⅱ期）

上肢骨は、左の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されており、上腕骨遠位端と尺骨近位端（肘頭の一部）は未骨化である。

下肢帯では、左で腸骨片のみ検出されている。大坐骨切痕は広く、出産溝は不明である。骨の特徴から女性の子供と推定される。下肢骨は、左右の大腿骨の一部、右脛骨の一部が検出されている。残存している右大腿骨遠位端と左大腿骨近位端は未骨化である。

本人骨の埋葬肢位は不明である。

159 墓（時期不詳）

ほぼ完形の顔面頭蓋が残存している。そのほか、左右側頭骨、後頭骨が検出されているが、接合できない。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦である。

歯の咬耗はかなり進んでおり、咬耗度は Martin の２～４度である。歯式は以下の通りであるが、そのほかに２本の遊離歯が検出されている。

閉	閉	閉	閉	C	脱	脱	脱	脱	C	閉	P_2	閉	閉	M_3
閉	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	脱	脱	C	P_1	脱	閉	閉	

椎骨は、頚椎が第２頚椎のほか４椎分が、胸椎はほぼ完存の 11 椎分、腰椎は４椎程度が検出されている。肋骨は、右で７本程度、左で５本程度検出されている。

上肢帯では、左右の鎖骨と肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されており、上肢骨は細い。

下肢帯では、右で寛骨臼を中心とした部分が、左で寛骨臼中心とした部分と恥骨が検出されている。右の大坐骨切痕は広く、左は広いように思われる。左右ともに出産溝は不明である。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部と、膝蓋骨の一部が検出されている。

本人骨の性別は女性、年齢は熟年と考えられる。

本人骨は、顔面を西北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

160 墓（時期不詳）

左頭頂部の一部と眼窩の一部を欠くが、ほぼ完形である。

前頭部はやや膨隆しており、眉弓は平坦である。乳様突起は大きく、項部のレリーフもやや著明である。

冠状縫合および矢状縫合の外板は未閉鎖であるが、内板では閉鎖が進んでいる。また、人字縫合の外板・内板ともに未閉鎖である。

上顎・下顎の第３大臼歯は埋伏状態にあり、未萌出である。歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の０～２度である。歯式は以下の通りである。

	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、C2 を除く６椎分が検出されたが、接続が困難である。胸椎では 12 椎分全て検出されている。Th5 以下の椎体骨端部は未骨化である。腰椎は５椎分全て検出されている。腰椎は全ての椎体で骨端未骨化が認められる。仙骨は、S1 ～ S5 椎体部分が検出されており、仙骨も未癒合である。肋骨は、右で第１肋骨を含む 11 本程度、左で 12 本全て検出されている。胸骨は、胸骨柄と胸骨体が

検出されており、胸骨柄と胸骨体は未癒合である。

上肢帯では、左右の鎖骨と肩甲骨が検出されている。右鎖骨の胸骨端、左鎖骨の胸骨端と肩峰端には未骨化が認められる。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されており、左右の上腕骨頭と内側上顆は未骨化である。

下肢帯では、右は腸骨の上部を欠く大部分、左はほぼ完存している。左右ともに大坐骨切痕は中程度で、出産溝は認められない。この骨の特徴から女性と考えられるが断定できない。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部と左右不明な膝蓋骨 1 点が検出されている。左右ともに大腿骨頭は未癒合～癒合したばかりで、左右脛骨の近位端、遠位端ともに未癒合である。

本人骨の性別は女性をうかがわせるが確言できない。年齢は 18 歳程度の青年と考えられる。

本人骨は、顔面を北に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

161 墓（時期不詳）

頭蓋骨は、右側頭骨の一部を欠くが、ほぼ完形である。

前頭部はやや膨隆しており、眉弓はやや突出している。乳様突起は中程度に発達しており、外後頭隆起は著しく突出している。また、下顎骨は頑丈である。

歯式は以下の通りである。

		M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、頚椎が C1、C2、C7 のほか 1 椎分が、胸椎は椎体のみのものが多いが 12 椎分、腰椎では椎体のみの L1 のほか完存の L2 ～ L5 が、仙骨はほぼ完形で検出されている。L2 ～ 4 には骨棘形成が認められる。肋骨は、右で 3 本程度、左で 10 本程度検出されている。胸骨は、胸骨柄と胸骨体が検出されている。

上肢帯では、左鎖骨の一部と左右の肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。左右の上腕骨の三角筋粗面は発達しており、男性骨であることがうかがえる。

下肢帯では、左右ともにほぼ完形で寛骨が検出されている。左右ともに大坐骨切痕は狭く、出産溝は認められず、この骨の特徴からも男性骨であると言える。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されている。

本人骨の性別は男性、年齢は熟年と考えられる。

本人骨は、顔面を北東に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

162 墓（時期不詳）

頭蓋骨はほぼ完形である。

前頭部はよく膨隆していて、眉弓は平坦で、項面のレリーフは弱い。

三主縫合の外板は未閉鎖であるが、冠状縫合の内板は閉鎖しており、矢状縫合矢人字縫合の内板でも閉鎖が進んでいる。

歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の 1 ～ 2 度である。歯式は以下に示すとおりであるが、このほかに下顎大臼歯が 1 点遊離歯として検出されている。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	脱
脱	閉	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	閉	M_3

椎骨は、頚椎で C1 ～ C5 の 5 椎分と C6 の一部、腰椎で L1 ～ L5 の 5 椎分が検出されているが、胸椎は検出されていない。仙骨は S1 ～ S3 相当分が検出されており、下部は欠損している。肋骨は、右で第 1 ～第 10 肋骨の 10 本程度、左でも同様に第 1 ～第 10 肋骨の 10 本程度が検出されている。胸骨は、胸骨柄と胸骨体が検出されており、胸骨柄と胸骨体は未癒合である。

上肢帯では、左右の鎖骨と右肩甲骨が検出されており、鎖骨は左右ともに細い。上肢骨は、左上腕骨の一部が検出されており、この骨も細い。

下肢帯では、右では腸骨から坐骨の一部が検出されている。左では腸骨の一部から坐骨の一部が検出されている。左右ともに大坐骨切痕は大きく、出産溝が認められる。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、左の腓骨の一部が検出されている。

本人骨の性別は女性、年齢は壮年と考えられる。

本人骨は、顔面を北北西に向けて、半腹仰正座位で埋葬されていたものと考えられる。

164 墓（時期不詳）

頭蓋骨は細片化しており、錐体を含む左側頭骨片、右側頭骨、上顎骨が含まれている。頭蓋は全体として小さいようである。

三主縫合を含む頭蓋骨は検出されていない。

遊離歯として 4 本検出されており、咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の 0 ～ 1 度である。

本人骨の性別は女性、年齢は壮年後半ではないかと考えられる。

本人骨の埋葬肢位は不明である。

165 墓（時期不詳）

残存する頭蓋は、前頭骨、頭頂骨、側頭骨、上顎骨などからなり、接合は不可能である。

下顎骨は全部～左側が残存しており、全体的に華奢な印象を与える。

歯は全体的に小さく、遊離歯として 22 本が検出されている。咬耗はやや進んでおり、咬耗度は Martin の 1 ～ 2 度である。

椎骨は、胸椎 1 個分のみ検出されている。肋骨は、左が 4 本と左右不明な肋骨片が 6 本検出されている。

上肢骨は、右の上腕骨のみ検出されている。

下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されており、右大腿骨は細く女性骨であると考えられる。

本人骨の性別は女性、年齢は壮年後半～熟年と考えられる。

本人骨の埋葬肢位は不明である。

166 墓（Ⅱ期）

頭蓋は、脳頭蓋の左半分と顔面頭蓋の左上部を欠く。

前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦である。乳様突起は中等度に発達しており、項面のレリーフは弱い。下顎はほぼ完形であるが、華奢である。

歯の咬耗はかなり進んでおり、咬耗度は Martin の 2 ～ 4 度である。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	脱	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	脱	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、頚椎 6 個、胸椎 9 個、腰椎 5 個、仙骨の S1 部分が検出されており、胸椎の椎体前方には

骨棘が認められる。肋骨は左右不明な肋骨片が 25 本程度検出されている。胸骨は、胸骨柄と胸骨体が検出されている。

上肢帯では、右鎖骨と左右の肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。

下肢帯では、左右ともに寛骨臼を中心とした部分が検出されており、左右の大坐骨切痕は中程度で、出産溝は右は欠損しているが左は認められない。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨の一部と左腓骨の一部が検出されており、左右の大腿骨は太い。

本人骨の性別は女性、年齢は熟年後半と考えられる。

本人骨は、顔面を北に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

168 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨では、下顎骨の右側が検出されている。下顎骨は重厚である。

下顎骨に釘植している歯はあまり咬耗が進んでおらず、咬耗度は Martin の０～１度である。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	脱	脱	脱	脱

頭蓋骨以外では右鎖骨と右大腿骨が検出されている。

本人骨の性別は男性、年齢は壮年と考えられる。埋葬肢位は不明である。

172 墓（時期不詳）

残存する頭蓋は、前頭骨、頭頂骨、後頭骨などからなるが、細片化していて接合できず、頭蓋の外形を知ることはできない。乳様突起は小さい。

矢状縫合および人字縫合は内板・外板ともに癒合閉鎖をきたしている。

歯式は以下の通りであるが、そのほかに遊離歯として９本の歯が検出されている。咬耗度は Martin の２～３度である。

閉	脱	脱	P_1	脱	脱	閉	閉	脱	脱	P_1	脱	脱	閉

椎骨は、頚椎７椎分、胸椎は部位不明の６椎分、腰椎は５椎分検出されている。腰椎では、骨棘形成がみられ、L1 ～ L4 では椎体圧迫（圧迫骨折）が認められる。また骨粗鬆症の所見を呈している。仙骨は、S1 ～ S2 の部分のみ検出されており、S1 部分の左右に骨棘形成がみられる。肋骨は、右で９本程度、左で７本程度検出されている。胸骨は、胸骨柄と胸骨体が検出されている。

上肢帯では、左右の鎖骨と左右の肩甲骨の一部が検出されている。右肩甲骨の棘上窩と棘下窩は深い。上肢骨は、左右の上腕骨と尺骨、左橈骨の一部が検出されている。上腕骨は細いが大結節は発達している。

下肢帯では、左右ともに腸骨の一部と恥骨の一部が検出されている。大坐骨切痕は左右ともに広く、出産溝は右ではっきりしないが左で認められ、女性骨であることがうかがえる。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されている。

本人骨の性別は女性、年齢は熟年～老年と考えられる。

本人骨は、顔面を北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

173 墓（Ⅱ期）

わずかに骨片が検出されているにすぎない。性別、年齢、埋葬肢位は不詳である。

177 墓（Ⅱ期）

四肢骨の長骨片が残っているのみで、変形が著しく、保存が悪い。

骨種の同定は困難であるが、成人骨であることは間違いない。

本人骨の性別、年齢は不詳で、埋葬肢位も不明である。

179 墓（Ⅱ期）

【成人】

歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、頚椎で C1 と C2 の一部、腰椎の椎体片 1 点が検出されている。肋骨は、右で 3 本程度、左で 4 本程度検出されている。

上肢帯では、左右の鎖骨と右肩甲骨の一部が検出されており、鎖骨は細く、肩甲骨は小さい。上肢骨は、左右の上腕骨の一部が検出されており、上腕骨も細い。上肢帯、上肢骨から女性骨であることがうかがえる。

下肢帯では、左の寛骨臼の周囲のみ残存しており、大坐骨切痕や出産溝は残存していないため不明である。下肢骨は、左大腿骨のみ検出されている。

本人骨は、骨の検出状況から判断して、再埋葬骨ではないかと考えられる。

【子供】

頭蓋骨片と四肢骨 2 点、肋骨は右 4 本、左 2 本が検出されている。

180 墓（Ⅱ期）

左大腿骨片のみ検出されている。

成人骨であることは確かだが、性別は特定できない。

本人骨の埋葬肢位は不明である。

181 墓（Ⅱ期）

頭蓋は、前頭骨、頭頂骨、左右の側頭骨、下顎骨などからなり、顔面頭蓋はほぼ完形である。

乳様突起は大きい。

三主縫合を見ると、外板はいずれも未閉鎖である。内板では冠状・矢状縫合は閉鎖しており、人字縫合では癒合閉鎖が進んでいる。

歯の咬耗はやや進んでおり、咬耗度は Martin の 3 ～ 4 度である。歯式は以下の通りであるが、そのほかに 3 本の遊離歯が検出されている。

				脱	閉	閉	閉	閉	閉	C	P_1	脱	閉	
脱	M_1	P_2	P_1	C	I_2	脱	I_1	I_2	C	P_1	P_2	脱	脱	

体幹の骨では、頚椎から腰椎および仙骨の一部が検出されている。腰椎では骨棘形成が著しく、変形性脊椎症の所見が認められる。左右の寛骨の一部が残存しているが、大坐骨切痕は狭く、男性骨をうかがわせる。

上肢骨では、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部、指骨が検出されているが、上腕骨の三角筋粗面は

よく発達している。

下肢骨は左右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部、趾骨が認められる。脛骨には扁平性が認められる。

本人骨の性別は男性、年齢は熟年～老年と考えられる。本人骨の埋葬肢位は不明である。

182 墓（Ⅱ期）

残存する頭蓋は、前頭骨、頭頂骨、側頭骨の一部と、顔面頭蓋からなる。

前頭部はなだらかに頭頂部に移行しており、眉弓はやや突出している。乳様突起の大きさは中等度である。

冠状縫合の外板は未閉鎖で矢状縫合の外板は一部で癒合閉鎖をきたしている。いずれの縫合も内板では、癒合閉鎖をきたしている。

歯の咬耗はやや進んでおり、咬耗度は Martin の２～３度である。歯式は以下の通りである。

閉	脱	P_2	P_1	脱	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	脱	閉
脱	脱	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	脱	脱	P_1	P_2	M_1	脱

椎骨は、頚椎が C1、C2 を含む計４個、胸椎が４個分検出されている。肋骨は、左右不明の肋骨片が６点検出されている。

上肢帯では、右鎖骨と右肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、右上腕骨のみ検出されており、この上腕骨は太く男性骨をうかがわせる。

下肢帯では、右寛骨臼片のみの残存であるため、大坐骨切痕や出産溝は不明である。下肢骨は、右の大腿骨、脛骨、腓骨が検出されており、大腿骨は太い。

本人骨の性別は男性、年齢は熟年と考えられる。本人骨の埋葬肢位は不明である。

183 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は、大きく３つに分かれており、接合できない。全体として大きい印象がある。上顎には歯槽性突出が認められる。

冠状縫合と矢状縫合の外板は、未閉鎖であるが、内板ではやや癒合閉鎖が進んでいる。

歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の０～１度である。右下顎第２大臼歯にカリエスが認められる。

歯式は以下の通りである。

	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	脱	I_2	C	P_1	P_2		

椎骨は、TH10 ～ 12 の３個のみ検出されており、肋骨窩が大きい。肋骨は、左右不明な肋骨片が６本程度検出されている。胸骨は胸骨柄のみ検出されている。

上肢骨は、左上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。

下肢骨は、右の大坐骨切痕の一部が残存しており、大坐骨切痕は中程度である。下肢骨は、右の大腿骨、脛骨、腓骨の一部と左大腿骨の一部が検出されている。全体的に男性骨の特徴を示す骨もあるが、上腕は細く、性別不明である。本人骨の埋葬肢位は不明である。

184 墓（Ⅰ期）

頭蓋骨は、顔面頭蓋のみ残存している。三主縫合は残存していない。

眉弓は平坦で、眼窩上縁は鋭である。口蓋縫合の閉鎖状況も不明である。

歯の咬耗はほとんど進んでいない。歯式は以下の通りである。

脱	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	脱

本人骨は壮年女性と考えられ、本人骨の埋葬肢位は不明である。

185 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨では、上顎切歯や上顎小臼歯などの歯が遊離歯として、10 点検出されているのみである。乳歯は含まれていないが、これらの歯は未咬耗であり歯根が未完成なので、顎骨内にあった未萌出歯であると考えられ、小児のものと考えられる。本人骨の埋葬肢位は不明である。

186 墓（時期不詳）

頭蓋骨は、頭頂部の一部と頭蓋底の一部を欠くが、ほかはほぼ完存している。頭形は短頭、低顔で、全体的に小さい。

三主縫合は内板・外板ともに未閉鎖である。左下顎第 1 ～ 3 大臼歯に咬合面カリエスが認められる。歯式は以下の通りである。

M_2	M_1	P_2	閉	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2
M_2	閉	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、ほぼ完存の頚椎 7 椎分、胸椎 12 椎分、椎体のみの腰椎 5 椎分が検出されている。Th12 で圧迫折が認められる。仙骨は S1 と S2 の半分程度が検出されている。肋骨は、右で 9 本程度、左で 12 本検出されている。

上肢帯では、左右の鎖骨と肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、左右の上腕骨、橈骨、尺骨の一部が検出されている。

下肢帯では、右の寛骨臼を中心とした部分と左の寛骨臼片が検出されている。下肢骨は、左右の大腿骨、脛骨、腓骨と右膝蓋骨が検出されている。左脛骨は扁平性が認められる。

本人骨の性別は女性であると考えられるが、確言できない。年齢は壮年と考えられる。

本人骨は、顔面を北西に向けて、立膝座位で埋葬されていたものと考えられる。

187 墓（Ⅱ期）

頭蓋は細片化が著しく接合できない。右上顎骨片、左側頭骨、後頭骨などが含まれている。

乳様突起は大きい。

三主縫合の閉鎖状況は不明である。

歯の咬耗はかなり進んでおり、咬耗度は Martin の 3 度である。右下顎第 2 ～ 3 大臼歯二カリエスが認められる。歯式は以下の通りである。

閉	閉	閉	閉	閉	脱	脱									
M_3	M_2	M_1	P_2	脱	脱	閉	閉	閉	閉	C	閉	閉	閉	閉	閉

上肢骨は、右尺骨の一部が検出されている。

下肢帯では、右の寛骨臼片のみ検出されている。大坐骨切痕や出産溝は残存していないため不明である。下肢骨は、右大腿骨の一部が検出されており、この大腿骨は太く、男性骨と考えられる。左右不明の脛骨も検出されている。

本人骨の性別は男性、年齢は熟年～老年と考えられる。本人骨の埋葬肢位は不明である。

188 墓（Ⅱ期）

墓穴の南側から頭蓋骨のみ検出されている。頭形を復元することは困難で、成人骨であることは間

違いないが、詳細な年齢、性別は不詳である。埋葬肢位も特定できない。

190 墓（Ⅱ期）

毛髪がわずかに残っている。頭蓋は、頭頂骨片および下顎骨前部などが検出されているのみである。

歯式は以下の通りであるが、ほかに遊離歯が８本検出されている。歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の０～１度である。

脱　脱　C　脱	脱　脱　C　P_1　P_2　M_1

上肢帯では、右肩甲骨の一部が検出されている。上肢骨は、右の上腕骨の一部のみの検出であるが、大きく成人骨であることは断定できる。

下肢骨は、左の大腿骨、脛骨、腓骨の一部が検出されている。

本人骨の性別は不詳である。年齢は壮年と考えられ、埋葬肢位は不明である。

193 墓（Ⅱ期）

【成人】

成人骨は下顎骨が検出されている。この歯槽はほとんど閉鎖している。遊離歯が２点検出されている。

この成人骨の性別は不詳であるが、年齢は熟年～老年ではないかと推定される。

本人骨の埋葬肢位は不明である。

193 墓（Ⅱ期）

【小児】

頭蓋骨は、前頭骨の一部、左右の側頭骨の一部、左右の上・下顎骨などからなる。

歯式は以下の通りである。

m_2　m_1	脱　m_1　m_2
m_2　m_1	i_2　脱　m_1　m_2

本人骨の年齢は２～６歳までの小児と考えられる。

本人骨の埋葬肢位は不明である。

194 墓（Ⅱ期）

頭蓋骨は、後頭骨片と３本の遊離歯のみである。

外後頭隆起はやや発達している。

残存している人字縫合を見ると、外板は未閉鎖であるが、内板は癒合閉鎖をきたしている。

歯の咬耗はあまり進んでいない。

椎骨は、頚椎で C1 ～ C6 の６椎分検出されている。肋骨は左右不明な肋骨片７本位検出されている。

上肢帯は、右鎖骨のみ検出されている。上肢骨は、右尺骨の一部のみ検出されている。

下肢骨は、右大腿骨と左大腿骨の一部、左腓骨が検出されている。四肢骨は全体的に小さく、女性骨ではないかと考えられるが、確言できない。年齢は熟年と推定される。

本人骨の埋葬肢位は不明である。

196 墓（Ⅱ期）

頭蓋は細片化していて接合できない。

右上顎中切歯は重複歯であり、左右の下顎第３大臼歯は前方転位をきたした埋伏歯である。

歯の咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度は Martin の 1 ～ 2 度である。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1 / I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

椎骨は、頚椎が C1、C2 の 2 椎分、胸椎は 8 個分が検出されている。肋骨は左右不明な肋骨片が 2 点検出されている。

下肢帯では、右の寛骨臼の一部のみ検出されている。下肢骨は、右大腿骨が検出されており、この骨は細い。

本人骨は女性骨であると考えられ、年齢は壮年後半～熟年前半と推定される。

本人骨の埋葬肢位は不明である。

201 墓（II 期）

頭蓋は小児のもので、前頭骨、側頭骨、蝶形骨、後頭骨、上顎骨、下顎骨が検出されている。

以下の歯式に示す歯のほか、乳切歯や永久歯の歯冠を含めて 16 本の歯が遊離歯として検出されている。

m_2	m_1	脱	脱	脱	脱	脱	脱	脱	脱
m_2	m_1	脱	脱	脱	脱	脱	脱	脱	m_2

椎骨は、椎骨片 10 点が検出されており、いずれも未骨化である。肋骨は、右 6 本、左 1 本、左右不明な肋骨片 6 本程度が検出されている。

上肢帯では、右鎖骨と左肩甲骨の一部が検出されており、肩甲骨は未骨化である。上肢骨は、右橈骨の一部が検出されており、この骨も未骨化である。

下肢帯では､左右不明な寛骨片が検出されている。下肢骨は左右の大腿骨の一部が検出されている。

本人骨は歯の萌出状況や永久歯の歯冠の形成状況から判断して、2 ～ 3 歳程度の幼児骨であると考えられる。性別の詳細は不明で、埋葬肢位も不明である。

221 墓（時期不詳）

肋骨は、左右不明な肋骨片 3 点程度検出されている。

下肢骨は、左右の大腿骨の一部が検出されており、左大腿骨は骨化後変形著明である。

本人骨の埋葬肢位は不明である。

169 陶器壺内出土人骨

火葬骨で、白化していて高温で焼かれたことがうかがえる。火葬骨特有の変形や収縮が顕著な骨もあるが、なかには変形の少ない骨も認められる。

検出された骨は、頭蓋骨のほかに、頚椎、胸椎、腰椎、仙骨の一部、上腕骨片、大腿骨片、寛骨片などである。

成人骨であることは確かであるが、詳細な年齢や性別は不明である。

167 陶器壺内出土人骨

骨蔵器に入っていた火葬骨で、変形・収縮が著しい。埋納されていた骨は、四肢骨はきわめて少なく、頭部を中心に回収して、骨蔵器に埋葬したものと思われる。

検出された頭部以外の骨は、3 点の頚椎のみである。頭蓋骨は、頭蓋冠のほか上顎骨、下顎骨などからなる。歯頚部で歯は折れていて歯冠が残っているものはなく、顎骨には歯根が釘植している。咬

耗の程度は不明である。

顎骨に残っていた歯の歯式は以下の通りである。

脱	脱	閉	脱	脱	脱	脱	脱	脱	脱	脱	脱				
	脱	M_1	P_2	P_1	脱	脱	脱	脱	脱	脱	脱	閉	M_1	脱	M_3

下顎骨の大きさから本人骨の性別は男性がうかがわれ、年齢は壮年～熟年と考えられる。

松原１号横穴墓

人骨は玄門から見て玄室の右手前に頭蓋骨が、玄室の右半分に四肢骨が検出された。骨の保存状況は不良であるが、頭蓋骨はかろうじてその特徴を知ることができる。四肢骨は若干動いているようで、元位置を保っていない。羨道から見て玄室の左壁は、羨道の左のラインと一致し、特異な玄室の形をしている。次の埋葬者があったときには玄室の左側をさらに削り込んで、横穴墓を完成させるという意図があったのかもしれない。

頭蓋骨は全体的に小さく、頭蓋底、下部顔面頭蓋、左頭頂部を欠く。前頭部はよく膨隆しており、眉弓は平坦である。下顎骨の前方部分も一部が検出されている。

歯は、遊離歯として検出されたが、そのうちの１本は下顎に釘植できる左第１小臼歯である。その他に、歯根を伴った切歯と、大臼歯の歯冠が検出されている。咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度はMartinの０～１度である。

下肢骨では、大腿骨と脛骨の一部が検出されている。脛骨には扁平性が認められる。これらの骨の大きさは小さく、女性骨であることをうかがわせる。本人骨の性別は女性、年齢は壮年と考えられる。

４）考察

これまで、人骨が検出された山陰地方の代表的な近世墓には、米子市陰田遺跡、安来市清水大日堂裏古墓群、大山町門前第２遺跡がある。鳥取県東部では、これまで大量の近世人骨が出土した例はなく、本遺跡は、鳥取県東部における近世人骨の形質や埋葬様式を知るうえで、貴重な資料になるものと考えられる。

本遺構の人骨は、副葬品などからⅠ期（16 世紀末～ 17 世紀）、Ⅱ期（18 世紀～ 19 世紀）、Ⅲ期（明治時代以降）に属する。時期が不詳な人骨が多いが、これは副葬品を伴っていない墓穴が多いことによる。

本遺跡から検出された人骨は、古墳時代が１体、近世土壙墓が再埋葬骨の２体を含めて合計 100 体、近世火葬人骨が４体であった。

埋葬肢位について述べると、埋葬方位が確定できたのは 52 体の墓穴の埋葬人骨である。このうち、44 体は立膝座位で埋葬されており、最も多い埋葬肢位であった。次いで、半腹臥正座位が５体と多く、詳細が不明なものの正座位としたものが１体ある。半仰臥屈位と仰臥立膝位は、それぞれ２体と１体であった。本遺跡の埋葬肢位は立膝座位が圧倒的に多く、多様な埋葬様式が認められた門前第２遺跡とは異なっている。本遺跡の墓穴は、全体的に深いものが多く、これは墓穴の土が比較的柔らかいことと関係していると思われる。このため、深い棺の埋納が可能で、したがって埋葬肢位としては立膝座位が多いのではないかと考えられる。

埋葬方位を図 178 に示した。本遺跡の北には湖山池、日本海が位置しており、山陰各地の近世墓

においても、北を向けて埋葬している例が多いことが知られている。本遺構の埋葬方位の分布を詳細に見ると、遺構の東部では北～北北東に向いて埋葬されていた人骨が多いのに対し、遺構の西部では北北西～北西に向いて埋葬されていた人骨が多かった。また、一部には南寄りに向いて埋葬されていた人骨も認められたが、それらの人骨の埋葬されていた墓穴は比較的近い位置にあり、墓道や土地の傾斜の関係であえて南寄りに向けて埋葬した可能性がある。

本遺跡から検出された人骨は、近世人骨・古墳人骨ともに病変など人類学的に特筆に値するものは検出されていない。

5）おわりに

残念ながら時間的な制約から、本遺跡の人骨については頭蓋の所見や計測など人類学的な検討・考察は充分にできなかった。しかし、大部分の人骨の取り上げや骨の検出状況の検討については筆者らが立ち会い、図面に残してあるので、人類学的な検討については今後の課題としたい。

稿を終わるにあたり、本遺跡の人骨の検討の機会を与えて頂いた鳥取県教育委員会および鳥取県教育文化財団の関係各位に御礼申し上げる。また、人骨の図面作成や人骨の取り上げにご協力頂いた美和調査事務所の中森祥氏には、遺構や遺物について数々のご教示を得た。人骨のクリーニングや原稿の整理に関しては、鳥取大学医学部形態解析学分野の岡田里美事務補佐員の協力を得た。記して御礼申し上げる。

参考文献

井上貴央 1984「陰田天坂地区の近世人骨について」『陰田』米子市教育委員会 pp.124-132

井上貴央 1998「安来市大日堂遺跡近世墓から検出された人骨の概要」『清水大日堂裏古墓発掘調査報告書』安来市教育委員会 pp.215-225

井上貴央・川久保善智・足立昭子 2007「門前第２遺跡から出土した人骨について」『門前第２遺跡Ⅱ（菖蒲田地区）』鳥取県埋蔵文化財センター pp.191-271

図 178　松原小奥遺跡近世墓の埋葬方位

第４節　松原小奥遺跡中近世墓の様相とその位置づけ

１）松原小奥遺跡中近世墓の概要

第Ⅴ章第３節で詳述したように本遺跡から 205 基の墓を検出し、その墓壙形態や出土遺物等からⅠ～Ⅲ期、および時期不明の４区分とした。また墓内から多くの人骨が出土したが、その分析については前節を参照していただくとして、まずここではその概要を時期ごと（Ⅲ期を除く）に記すことから始めよう。

ａ）Ⅰ期

６基を検出している。調査地内における分布は粗であり、傾向を見出すことはできない。いずれも墓壙形態は長方形で、長軸を尾根に直交、すなわち南北を主軸とする。長径は 1.4 ～ 1.5 ｍを主体とし、72 墓が 1.2 ｍと小型である一方、184 墓が 1.8 ｍを越す大型である。その長径－短径比は概ね３：２となっている。掘り込み面が把握できている 49・184 墓をみると、その深さは１ｍほどであったと考えられる。

出土遺物は少なく、国産陶器、および銭貨であった。このうち唐津産陶器はいずれも墓壙底面近くにあったが、49 墓の瀬戸美濃産陶器皿は墓壙中位、角礫下から出土している。銭貨は２基だけであったが、どちらも底面からの出土である。とくに 49 墓は中央部に積まれたような状況であった。一方 72 墓については人骨に混在して出土しており、その原位置は不明瞭である。

なお、埋葬姿勢を把握できるような、遺存状態のよい人骨は検出できなかった。

また、本期の墓としては 49 墓が墳丘を伴うという点で特筆する。こうした墓は湖山池周辺に散見されるが、これについては後述する。なお、49 墓は今年度調査地の中でもっとも古い。

ｂ）Ⅱ期

調査地内全体から 76 基検出している。以下、墓壙形態、埋葬体位、副葬品などの属性ごとにみていくこととする。

【墓壙形態】

墓壙形態でみると、円ないしは楕円形を呈するもの（Ａ型）24 基、方形を呈するもの（Ｂ型）27 基、長方形を呈するもの（Ｃ型）10 基に分けることができる。また不明は 15 基であった。

Ａ型のうち円形（20 基）は概ね径 0.8 ～ 1.1 ｍ、深さ 0.8 ～ 1.3 ｍを測るものが主体となり、10・１－ｂ・ｃ区、２ｄ・ｅ区において列状に造墓される傾向が見出せる。

Ｂ型ではすべてが径 1.0 ｍ前後に収まる。深さは、もともとの掘り込み面が明らかなものが少ないため定かではないが、1.0 ～ 1.5 ｍ前後のものが大半で、もっとも深いもの（190 墓）で２ｍ以上ある。

Ｃ型では長径－短径比が５：４とあまり差がないものが７基と主体で、差の大きなもの（概ね４：３）は３基となる。そこで前者をＣⅡ型、後者をＣⅠ型とする。長径はいずれも１ｍ前後を測り、大きな差異は見出せない。主軸方向では、南北方向が５例と主であり、やや軸が振れる北東－南西方向が２例、東西方向３例となっている。なお、東西方向の３例はいずれもＣⅡ型である。

【埋葬体位】

人骨の残っていたものは 55 基あり、このうち埋葬体位が判明しているもの（23 基）の大半は立膝座位（21 基）で、残る２基は半腹臥正座位であった。これらの顔の向きをみると北を中心とし、北東から北西の間に向けるものが 22 基あり、なかでも北西側が 10 例とやや多い。また１例のみ南西を向くもの（41 墓）があった。このほかは体位不明であるが、この中には火葬骨１基を含む。

【出土遺物等】

ここではそれぞれの出土遺物について比較してみよう。

陶磁器・鉄釘などを除く出土遺物があった墓は 29 基（38.1％、76 基中）である。種類別でみると、銭貨 10 基、煙管９基、鋏３基、鎌２基、毛抜２基、火打金２基、櫛４基などとなっている。このうち複数種類が出土しているのは 12 基で、その組み合わせをみると、煙管と銭貨が３基、煙管と火打金が２基などとなる。なお、櫛は単独では出土せず、いずれかとともに出土していることが特徴と言えよう。これらの品は、銭貨を除くと、概ね頭蓋骨を取り上げたその下から出土してきている。この出土状況から、頭陀袋に入れ首から提げたり、骨盤周辺に置かれたものと考えられる。被葬者にもたせた副葬品とすることができよう。

また副葬品ではないが、墓壙内からまとまって出土する釘についてもみてみよう。Ａ型では、半数以上の 13 基で出土していない。さらに１～４本とごくわずかしかない墓が７基となっている。最多は 17 本であったが、これは甕棺を埋葬している 16 墓であった。甕内からも出土しているが、そこに規則性は見出せなかったため、墓を埋める土に混入したものと判断した。こうしてみると円形の墓には釘がほとんどない、すなわち埋葬施設に釘が使用されなかったことが窺える。江戸の事例などをみると、この円形墓壙に対応する棺桶として円形の桶（早桶）が使われており、本遺跡においても同様な埋葬施設であったと考えられよう。

一方、Ｂ型では釘が出土しなかった墓はわずかに３基で、１～４本と少ないものも５基のみであった。大半は 10 本以上が出土しており、最多は 41 墓の 63 本である。Ｃ型では５基から釘が出土している。このうち５本と少ないものが１基あるが、13 ～ 16 本３基のほか、41 本と多量に出土する墓が１基ある。このようにＢ・Ｃ型については、釘を使った棺桶が採用されているといえよう。

なお、墓壙内で比較的多くみられたものに灰白色系土壌がある。本期ではこの土壌分析を行ったものが６基あるが、いずれも稲藁を起源とする土壌であるという結果が得られた。類似する土を検出した墓がさらに６基あるが、おそらくこれらについても同様ではないかと考えている。この土はＢ・Ｃ型墓壙内から検出しており、Ａ型にはないことを特徴とする。

ｃ）時期不明

Ⅱ期同様、調査地内全体にあり、93 基ともっとも多い。墓壙形態と埋葬体位を中心とし以下にみていく。

【墓壙形態】

墓壙形態でみると、方形（Ｂ型）54 基、長方形（Ｃ型）27 基、台形１基に分けることができる。また不明は 11 基であった。

Ｂ型では径 0.8 ～ 1.1 ｍが大半を占め、0.5 ～ 0.7 ｍと小型のものが６基ある。深さはⅡ期同様、本来の掘り込み面が不明なため判然としないが、検出した深さで１ｍ前後が主体となる。

Ｃ型ではＣⅠ型が 10 基、ＣⅡ型 14 基、不明が３基であった。主軸方向は南北が 14、北西－南東、および北東－南西方向がそれぞれ３基（計６基）、東西が７基あった。その組み合わせをみると、ＣⅠ型では南北が４、北東－南西３、北西－南東１、東西２基である。またＣⅡ型については、南北が主ではあるが、東西方向のものも４基と一定量あることが窺える。

【埋葬体位】

人骨の残っていたものは 44 基あり、このうち埋葬体位が判明しているもの（31 基）の大半は立

膝座位（24 基）で、半腹臥正座位４基、半仰臥屈位２、仰臥立膝位１基であった。顔向きは、北から北西が 19 例と主体となっているが、南西が４基とやや多かったほか、南を向く唯一の例（５墓）もあった。

ｄ）松原古墳群の墓

ここで、本調査地と南側の谷を隔てた、平成 20 年度の松原古墳群調査で検出された墓についても触れておく。松原小奥遺跡に面する北側丘陵斜面に平坦部をつくり出し、そこに７基の土坑、および五輪塔､宝篋印塔を含む集石がつくられている。土坑群は平坦部南側の斜面に近い場所で､地形に沿って列状に配される。このうち土坑７は出土した土師器皿から 12 ｃ後半（中世前期Ⅲ期、註１）に比定できそうである｡焼けた人頭大ほどの礫が底面および壁面をコ字状に巡っており､ここで火葬を行った荼毘墓と考えられる。周辺の土坑では火葬骨片が出土した土坑２があるが、その深さは 0.2 ｍに満たない。こうした浅い土坑は火葬墓である可能性が非常に高いことを、かつて湖山池周辺の火葬墓を分析した結果から指摘したことがある（註２）。よって、残る土坑もそれとほぼ同規模のものであることから、一連の火葬墓群と考えてよいであろう。

一方、五輪塔（一石五輪含む)、宝篋印塔などを含む集石５は平坦部北東側にある。そこに含まれるもののうち火輪をみると、法量と形態から 13 ～ 14 ｃと 16 ～ 17 ｃに比定できる２種類がみられ（註３)、時期的に火葬墓群に近しいものと松原小奥遺跡Ⅰ期に比定できるものがあることがわかる。仮に前者が土坑群と関連したとして、後者に伴う墓壙はみられない。調査報告書では近世以降の廃棄とされる（註４）が、石造物の由来については調査地外周辺に求めるしかないのであろう。

ｅ）松原小奥遺跡における属性比較

上記のように、本遺跡では時期比定できる墓は全体の半数ほどであった。そこでⅠ・Ⅱ期の資料を基本にしながら、できる限り時期不明のものを位置づけていくこととする。

【墓壙形態】

まず各時期に共通のＣ型をみてみよう。Ⅰ期の長径－短径比率は３：２であった。これに対し、Ⅱ期では５：４と長短比にあまり差がみられないものがある一方、Ⅰ期に類するタイプもみられる。時期不明では、ＣⅠ型 10 基、Ⅱ型は 14 基となっている。

Ⅰ期における主軸の方向は尾根と直交する南北方向である。Ⅱ期のＣⅠでは 194・234 墓が、時期不明では 135・148・202・221 の４基が同様であることから、これらはⅠ期に遡る可能性が考えられよう。

一方、Ⅱ期において東西方向を主軸とするものはＣⅡ型のみであった。このことからＣⅡ型で東西方向を主軸とする長方形墓壙が、Ⅱ期から現れたとすることができよう。時期不明では 31 墓など４基あり、これらもⅡ期に比定することができるかもしれない。ただし、ＣⅠ型でも東西方向の事例が２基あり、その位置づけについては、今後の調査成果を待たねばならない。

【埋葬体位と被葬者】

Ⅰ期では埋葬体位が明らかなものがない。墓壙形態別に埋葬体位がわかる比率をみると、Ａ型では 33.3%（８／ 24 基)、Ｂ型 56.3%（Ⅱ期 15 ／ 27、不明 25 ／ 54 基)、Ｃ型では 16.3%（Ⅰ期０／６、Ⅱ期１／ 10、不明６／ 27 基）と、Ｃ型の遺存状況が非常に悪く、Ｂ型がよいことが窺える。

またⅡ期および時期不明をみると、圧倒的に立膝座位が多くを占める。その掘方はＡ・Ｂ型がみられるが、両型とも径が 1.0 ｍほどを測るものがほとんどであった。Ａ・Ｂのどちらが採用されるかは、

そこに納められる棺桶の種類の違いであることは先述したとおりであり、埋葬体位とは関係がないと考えられる。なおＣ型でも座葬は４例あるが、いずれもＣⅡ型である。このことから同型がＢ型に近い形態であるといえよう。

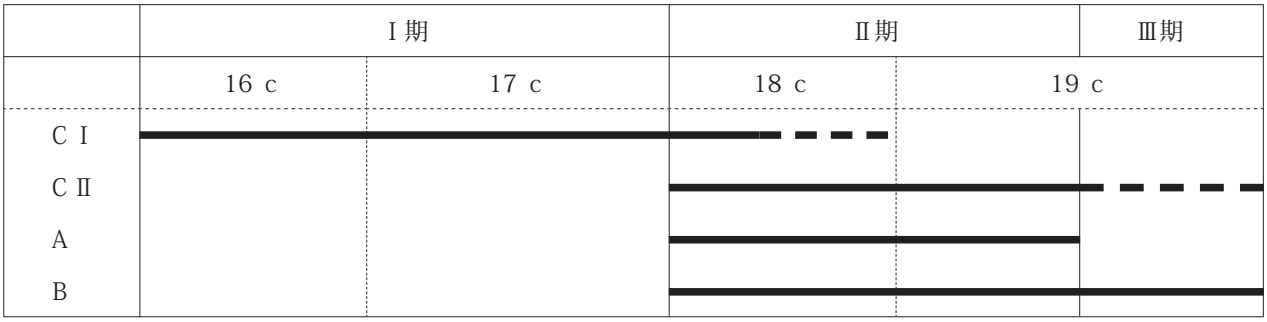
今回の調査で性別が判明している（推定も含む）のは、65 例である。このうち男女比は男性 27、女性 38 例と女性が多い。こうしたなかで、円形墓壙の被葬者をみると、性別がわかっている 13 基のうち男性が９例と多数を占めていることは、ひとつの特徴として抽出できるのかもしれない。

ｆ）松原古墳群、松原小奥遺跡における墓の展開

松原地区ではまず松原古墳群が展開した丘陵先端近くに 12 ｃ後半～ 13 ｃの墓（火葬墓群）が築かれた。その後しばらくヒアタスがあり、16 ｃ後葉に松原小奥遺跡において墳丘を伴う 49 墓ができたことを起点とし、以後連綿と現代まで、土葬を主体とする墓地が形成されてきたということになろう。

ここで中世末以降、墓壙形態を中心にその変遷をまとめる。Ⅰ期には尾根に直交し、南北方向に主軸をとるＣⅠ型の墓壙がつくられる。このタイプは続くⅡ期にも若干みられるが、Ｃ型では径の長短比が小さくなるＣⅡ型が主流になっていく。そしてⅡ期になると、方形、円形墓壙が出現し、それぞれ主流となり、前者はそのままⅢ期以降も継続する。こうしたＣ型からＡ・Ｂ型、そしてＢ型のみへという流れは、先にみた墓内の埋葬体位の判明する率の高低とも符合しており、時間的な変遷を表していると考えられる。

表 11　松原小奥遺跡中近世墓墓壙変遷



２）周辺における中近世墓の様相

本遺跡周辺における当該期の調査事例は、とくに中世においてまとまっているといえよう。

ａ）中世

ここで取り上げる遺跡は概ね中世後期に属する。そのなかで一部中世前期のものもみられるので、最初に若干触れておきたい。

①中世前期の墓

里仁第１号集石遺構は里仁 33 号墳の南東墳丘裾に位置する（註５）。南北方向を長軸とし、長径 0.9 m、短径 0.6 m、深さ 0.35 mほどを測る。拳から人頭大以上の角礫が墓壙内に落ち込み、底面北側からは土師器皿、杯がまとまって出土している。因幡における当該期の土器編年が確立されていないため明らかにし得ないが、伯耆編年と比較して、その形態からⅣ期（12 ｃ後葉～ 13 ｃ）に位置づけられると考える（註６）。またその墓壙形態からみて、火葬ではなく、遺体は頭を北に向けた側臥屈肢葬であったであろう。

②中世後期の墓

近世前期の『大幅絵図』は湖山池周辺を描く当時の絵図であるが、それによれば因幡守護所天神山城の周辺丘陵上には墓地があったことが記されている。これが描写された当時の状況を示すものなのか、あるいはそれ以前の様子なのかが問題となるが、この丘陵に当たると思われる箇所でいくつか発掘調査が行われ、そこで戦国期の墓がまとまって見つかった。そのため、大幅絵図が描かれた当時まで造墓されていたか、あるいは墓であったことが伝わっていたと考えられる。

調査によって確認されたのは、北から三浦遺跡（註７）、大熊段遺跡（註８）、布勢墳墓群（註９）、布勢鶴指奥墳墓群（註 10）、桂見墳墓群（註 11）、西桂見遺跡（註 12）である。併せて 200 基ほどの墓があるが、出土した土器、陶磁器からみて、主体は 15 ｃ後半～ 16 ｃ前半、まさに天神山城が機能していた時期に並行すると考えられる。そして出土遺物から、少なくとも近世へは継続していない。

これらの墓壙形態をみると、隅丸を含む長方形を呈するもので占められ、長径 0.9 ～ 1.3 ｍ、短径 0.6 ～ 0.9 ｍを測る。墓の葬法には土葬、火葬があるが、平面的には両者に差異はない。違うのは深さである。土葬では 0.7 ～ 0.8 ｍほどが多いのに対し、火葬では 0.1 ～ 0.2 ｍと浅いものが主となる（註 13）。なお、この土葬の墓壙法量は松原小奥遺跡でみたＣⅠ型に属する。

湖山池周辺でもっとも中世墓の検出事例が多いのは、布勢墳墓群、布勢鶴指奥墳墓群であるが、両遺跡は同一丘陵上に連続するため、同一墓群として扱うことができよう。ここでは併せて 129 基の中世墓がみつかっており、この内訳は土葬墓 78、火葬墓 50、不明１基である。この墳墓群の展開する丘陵先端に、11 基の墳墓がある。また周辺の各遺跡でも墳墓、あるいは墓壙周囲に周溝を巡らせるものが検出されている。以下、松原小奥遺跡との関係から、これらについて検討することとする。

③湖山池周辺における中世墳墓の検討

湖山池周辺における中世墳墓は布勢墳墓群７基、桂見墳墓群５基、徳尾遺跡１基の計 13 基、周溝をもつものが、布勢墳墓群４基、西桂見遺跡５基、大熊段遺跡２基の計 11 基知られている。

まず墳丘のあるものをみていこう。墳丘を盛土するものと地山を削り出すものとがある。前者は布勢、桂見両墳墓群の 12 基で、後者は徳尾１号墓の１例のみである。墳丘形態は平面円ないし楕円形状を呈するものが主体であり、方形と判断できるものは布勢墳墓群 10 号墓、および徳尾１号墓であった。規模は概ね３～４ｍを測り、布勢墳墓群９号墓のみ径８ｍと突出する。墓壙はいずれも墳丘頂部から１基が掘り込まれる。ただし、その葬法には土葬と火葬のいずれもがあり、土葬は７基、火葬は６基と差異は見出せない。

周溝をもつ 11 基は、いずれも方形を呈す。規模は周溝外周で計測すると４～５ｍほどと墳丘をもつ墓よりは一回り大きいが、周溝内周の径では３～４ｍほどと同規模になる。

これら墳墓がつくられた位置であるが、桂見墳墓群、西桂見遺跡では低い丘陵の頂部、大熊段遺跡では丘陵西南端に近いところにある。桂見墳墓群、西桂見遺跡では弥生～古墳時代の墳丘墓および古墳上につくられているが、大熊段は丘陵中央に前方後円墳があり、そこを避けるかのように丘陵縁辺部にある。布勢墳墓群ではＹ字に広がる丘陵部の両先端部、およびその付け根部分につくられている。同墳墓群では墳丘と周溝の両者があるが、丘陵先端部には墳丘をもつものが展開し、周溝をもつものは４号墓が丘陵先端にある以外、１～３号墓は付け根部分で一列に連なる。両者で立地が異なっていることが窺えよう。また、１号墓は墳丘をもつ 10 号墓と切り合うが、その前後関係は把握されてい

表 12　湖山池周辺中世墳墓、周溝墓一覧

墳丘タイプ	墳丘形状	規模 (m)	造　出	墓壙位置	埋葬施設	周溝タイプ	墳丘形状	規模 (m)	埋葬施設
【松原小奥遺跡】						【布勢墳墓群】			
49 墓・80 墳丘	円？	6 ？	盛土	盛土上	土葬墓	1 号墓	方	5.1	火葬（荼毘）墓
【布勢墳墓群】						2 号墓	方	4.3	土葬墓
5 号墓	楕円	3.3 × 2.7	盛土	盛土下	火葬墓	3 号墓	方	4.9	火葬（荼毘）墓
6 号墓	円	3.0 × 2.8	盛土	盛土下	土葬墓	4 号墓	方	5	流失？
7 号墓	円	4.4 × 4.6	盛土	盛土下	土葬墓	【西桂見遺跡】			
8 号墓	円	2.8	盛土	盛土下	火葬（荼毘）墓	SK11・SD16	方	4.5	土葬墓
9 号墓	円	8	盛土	盛土下	土葬墓	SK14・SD17	方？	3.9	土葬墓（円形）
10 号墓	方	3.2 ＋α	盛土	盛土下	土葬墓	SK16・SD18	方	5.5	土葬墓
11 号墓	円	3.1	盛土	盛土下	土葬墓	SK11〈C 地区〉	方	3.5	土葬墓
【桂見墳墓群】						SK12〈C 地区〉	方	3.3 × 3.5	土葬墓
SK201	円	3.5	盛土	盛土下	火葬墓	【大熊段遺跡】			
SK202	円	3.1 × 3.4	盛土	盛土下	火葬墓	1 号墓	方	3.8	火葬（荼毘）墓
SK203	円	3.5	盛土	盛土下	火葬（荼毘）墓	2 号墓	方	4.5	土葬墓
SK204	円	3.7	盛土	盛土下	火葬（荼毘）墓				
SK206	円？	3	盛土	盛土下	土葬墓				
【徳尾遺跡】									
1 号墓	方	5 × 4.3	地山削出	地山上面	土葬墓				

ない。そのため、築造順序は不明である。

上記の墳墓のうち、出土遺物から大熊段遺跡が 15 ｃ後葉～ 16 ｃ前葉に位置づけられる他、布勢墳墓群、桂見墳墓群の事例も、16 ｃ前半に収まるものと考えられる。

このように湖山池周辺の各事例は 16 ｃ前半までのものであるのに対し、松原小奥遺跡 80 墳丘は 49 墓出土の瀬戸美濃焼折縁皿が大窯３期に比定されることから 16 ｃ後葉と考えられ、この地域においてもっとも後出する例といえよう。墳丘形態は円形であり、概ね他の事例と同じ傾向であるが、規模が６ｍほどになると想定しており、他よりも一回り大きい。また、つくられた位置は丘陵の縁辺部であり、大熊段遺跡と類する。丘陵中央部には小規模な古墳群が展開していたが、大熊段遺跡同様その古墳群を避けたものなのか、あるいはその古墳群上にも別の墳墓がつくられていたのかは判然としない。さらに他の事例が複数基あるのに対し、松原小奥遺跡では１基のみであった。遺跡内からは 16 ｃ後半に位置づけられる陶磁器が若干ながら出土しており、他にも 80 墳丘と同様な施設がつくられていた可能性もあったであろう。

以上、湖山池周辺でも特徴的にみられる墳墓について概観した。これには墳丘をもつものと周溝をもつものの２者があるが、この両者が同時期に造墓されるのか、あるいは時期的な前後関係があるのか、また、このどちらかを採用することについてどのような違いがあるのかなど、今後検討をしていかなければならない課題が残った。

b）近世

近世以降の墓の調査例は湖山池周辺にはなく、千代川東岸に位置する古市遺跡だけである。ここでは 250 基もの墓が調査されているが、遺構、遺物に関する詳細な記載がない他、人骨についても分析がなされていないため、不明な事項が多い（註 14）。ただし、副葬品についてはいくつか検討したものがあり（註 15）、今回はその成果を併せここに改めて紹介することにする。

①古市遺跡の様相

古市遺跡は千代川東岸、支流である袋川と大路川に挟まれた合流地点に位置する。弥生時代中期以降遺構が確認されているが、奈良～平安時代には奈良三彩壺が出土するなど官衙的な様相を示す。その後断絶し、江戸時代まで活動の痕跡はない。

当該地には近世以降現代までの墓地があり、その発掘調査が行われた。また土坑や溝があり、多くの肥前系あるいは在地産と考えられる陶磁器が出土している。このうち肥前系陶磁はⅢ期（17 c 後葉）以降が主体となっており、概ね墓も同時期と考えられる。以下、松原小奥遺跡との比較をするため、墓壙形態と副葬品についてみていくこととする。

【墓壙形態】

全体の平面図をみると、方形を呈する墓壙が圧倒的に占め、円または楕円形を呈するものは 24 基である。この円形墓壙に納められた棺は 22 基が甕ないし壺で、 1 基のみ木製棺桶の可能性、残る 1 基は不明であった。そこで、棺桶についてみてみると木製と陶器製があり、前者が 148 基とほぼ 6 割を占め、後者は 84 基、不明 18 基となっている。このうち木製では方形を呈するものが 74 基と多数を占める。以下、長方形 15 基、六角形 6 基、丸が 2 基で、不明が 51 基ある。ただしこの不明は他墓壙との切り合い関係によって形状が判然としないものであるが、平面図をみる限り大半が方形になると考えられる。

一方、陶器製は甕を使用したもので、このうち越前焼が 45 基と多数を占め、ついで地元牛ノ戸焼 23 基、肥前系陶器 6 基、不明 3 基となり、地元産よりも越前焼が圧倒的に多いことが注目されよう。

【副葬品】

副葬品と考えられるものが出土した墓壙は 36 基あるが、このうち明らかに近代以降に比定できる墓が 16 基あるため、近世に属すものは 20 基にすぎない。これらの内訳は磁器小杯等、煙管各 4 例、簪 3 例、銭貨、櫛各 5 例などであり、鋏や鎌などの刃物類や毛抜等は出土していない。またこうした副葬品をもつ被葬者は木棺に入れられるものが大半で、甕棺は 5 例しかなかった。

②各要素における比較

【墓壙形態と葬法】

古市遺跡では方形墓壙－方形棺桶という組み合わせが主体であるが、出土遺物から近代以降もこの葬法が採用されているものと考えられる。このことは本報告では触れていないが、松原小奥Ⅲ期の状況とも符合している。一方で、古市遺跡では円形墓壙が少なく、しかもそこに納められる棺桶には早桶ではなく、甕棺で占められるという点は松原小奥遺跡の状況と異なる。

また、古市遺跡で特徴的なものに、遺体を甕あるいは壺に納める葬法がある。同遺跡では 84 例と全体の 33.6％（250 基中）と非常に高い割合である。松原小奥遺跡で明らかに甕棺（常滑産）と判断したものは 2 例あり、さらに越前焼の中型甕が 2 例あった。小型の火葬骨壺を含めたとしても 10 例に満たない。松原小奥遺跡でⅢ期を含む全体の検出墓壙数は 205 基と、古市遺跡と大差がないに

もかかわらず、甕棺の差は何を表わすのであろうか。

古市遺跡は鳥取城下にも近い場所にある一方、松原地区は農村集落として近世以降他所から移動し、新たに展開したと伝えられる（註 16）。こうした立地的な要素が、反映している可能性が考えられよう。なお、松原からもほど近い湖山池南東岸にある岩本第２遺跡で、割られた状態の越前焼甕が土坑内から出土している。周辺から関連する遺構等はみられないが、出土状況から埋葬に関連するものとされている（註 17）。松原小奥遺跡 38 墓と同様な出土状況と考えられることから、報告書どおりの判断でよいであろう。甕は口縁端部が肥厚し、外面に一条の細い沈線が巡ることから、木村編年Ⅶ－１期に相当する。

このように古市遺跡と松原周辺部とでは検出件数に大きな差があるが、甕棺葬という同様な葬法の広がりを確認することができた。一方、伯耆に目を向けると、近世以降の甕棺墓は今のところ出土していない。民俗事例でも知られておらず、葬法における大きな違いの要因や地域的な境界など、今後検討していかなければならない課題である。

また、この甕に関しては、地元産のものではなく主に越前焼が用いられていることも注目される。現在のところ県中部から西には近世越前焼の出土例はなく、その流通は因幡までと考えられる。松原小奥遺跡ではこれに常滑産のものもあり、こうした地域外からもたらされた大型品の流通が、甕棺採用へとつながったのであろうか。

【副葬品】

副葬品のあった墓は、松原小奥遺跡では 33 基（17.8％、185 基中）、古市遺跡では 20 基（近代以降は含まず）と、全体墓壙数からすると両遺跡とも非常に少ない。一方伯耆では、多数の近世墓が検出された大山町門前第２遺跡をみてみると、132 基のうち 77 例（58.3％）から副葬品が出土している（註 18）。これらには複数のものが一緒に出土する例も多い。とくに伯耆から出雲にかけては、死出の旅立ちに必要な道具として共通するセット（トラベルセット）として、煙管、銭貨、刃物（鋏、鎌）などがある（註 19）が、こうしたセットをもつものが古市、松原小奥両遺跡ではみられなかった。このことも、両地域における大きな差と認識できよう。

３）まとめ

以上、松原小奥遺跡および周辺における中世以降の墓に関する様相をみてきた。これまで中世墓に関しては周辺でもまとまった調査例があったが、それに後続する事例として、貴重な成果となった。

墓壙形態については中世後期以降、平面長方形のものが近世前期まで継続し、中期（松原小奥Ⅱ期）以降方形や円形へと変化、方形が以後現代まで続く。そこに納められる棺では、方形の木製棺桶が主体となるが、中期にはいわゆる早桶と呼ばれる円形のものもみられた。

さらに因幡で特徴的なものとして、甕棺の存在が挙げられる。この在り方が都市部に近接する古市遺跡とそこから離れた松原小奥遺跡とで違ったことから、その立地が葬法の差に反映されている可能性を考えた。また、甕棺葬が因幡でのみ確認され、伯耆にはみられないという地域差も見出せた。そしてこの地域差は副葬品の多寡にも顕著に表れており、今後両地域における葬法の違いについて、より検討していく必要性も課題として残った。

註

1）中森　祥 2005「中世前期の遺物について」『門前上屋敷遺跡』鳥取県教育文化財団

2）中森　祥 2001「中世の火葬墓について―鳥取市湖山池周辺を中心に―」『出土銭貨研究』

3）中森　祥 2004「五輪塔はどこに立てられたのか―山陰地方における発掘調査からみたその様相―」『伯耆文化研究』第６号

4）小口英一郎ほか編 2010『松原古墳群Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター

5）中原　斉編 1985『里仁古墳群』鳥取県教育文化財団

6）註１に同じ

7）中村　徹ほか編 1982『三浦遺跡』鳥取大学、鳥取県教育文化財団

8）田中精夫ほか編 1986『大熊段遺跡』鳥取県教育文化財団

9）前田　均ほか編 1998『布勢墳墓群』鳥取市教育福祉振興会

10）中村　徹ほか編 1992『東桂見遺跡、布勢鶴指奥墳墓群』鳥取県教育文化財団

11）平川　誠ほか編 1984『桂見墳墓群』鳥取市教育委員会、鳥取市遺跡調査団

12）前田　均ほか編 1984『西桂見遺跡Ⅱ』鳥取市教育委員会、倉見古墳群発掘調査団

牧本哲雄ほか編 1996『西桂見遺跡、倉見古墳群』鳥取県教育文化財団

13）註２に同じ

14）藤本隆之ほか編 1999『古市遺跡Ⅱ』鳥取市教育福祉振興会

15）中森　祥 2003「鳥取市古市遺跡出土の六道銭」『城下町の六道銭』出土銭貨研究会第 10 回研究大会資料集

中森　祥 2008「トラベル・セットの成立－山陰における近世墓の副葬品から－」『出土銭貨研究』第２号

16）木村　礎 2000「住む場所を変えた村の人たち」『ものがたり日本列島に生きた人たち』10 景観　岩波書店

17）前田　均ほか編 1999『防己尾城跡・岩本第２遺跡』鳥取市教育福祉振興会

18）北　浩明・中森　祥ほか編 2007『門前第２遺跡Ⅱ（菖蒲田地区）』鳥取県埋蔵文化財センター

19）註 15　中森 2008

表 13　松原小奥遺跡中近世墓属性

墓No.	墓坑形態	人骨			棺内灰白色土	土器・陶磁器類	銅・鉄製品	銭　貨		その他	鉄釘	時期	備考
		埋葬形態	性別	年齢		遺物種類（時期等）	遺物種類	枚数	種類	遺物種類	本数		
〈Ⅰ期〉													
49	長方	×	×	×		瀬戸美濃折縁皿（大窯４後）		6	銅銭６点接着（祥符通寶１、不明５）			16ｃ末～17ｃ初	
72	長方	?	F	壮年		肥前系陶器皿（平戸系唐津Ⅲ期）		2	古寛永２		7	17ｃ後半	
73	長方	×	×	×		唐津皿（胎土目）、青花Ｃ群椀						17ｃ前葉	
184	長方	?	F	壮年		唐津皿（砂目）、埴輪					4	17ｃ後半	
225	長方	×	×	×									60・69・186 に切られる。
230	長方	×	×	×									111・179 に切られる。
〈Ⅱ期〉													
6	円	座	M	壮年						漆?			
9	楕円	?	?	10 歳程度		埴輪					4		16 を切る。
10	方	座	M	壮～熟			煙管（古泉Ⅴ期）、火打金、金属製留具（２点）				14	18ｃ後半	5・8 に切られる。
14	方	座	F	壮年?				3	３点接着（古寛永２、不明１）	漆器	3	17ｃ中葉以降	
15	円	座	F	壮年			毛抜				1		10 に切られる。
16	円	座	M	壮～熟		大甕（常滑）、埴輪	青銅製品（仏具?）				17	18ｃ	9 に切られる。
21	方	×	×	×									190 に切られる。
22	長方	×	×	×		肥前系青磁皿（波佐見Ⅳ期）						18ｃ以降	土坑?
29	円	?	M?	熟～老			鉄、金属製品（蝶番?）				3		
32	方	?	M?	熟～老				5	３点接着（古寛永、新寛永、不明各1）、新寛永1、文銭1		12	18ｃ中葉以降	
33	方	座	M	熟年		肥前系青磁皿（波佐見Ⅳ期）					6	17ｃ後半以降	
34	?	×	×	×									33 に切られる。
35	円	×	×	×									
38	?	×	×	×		甕（越前）							
39	?	×	×	×									35 に切られる。
40	円	正	M	壮年		須恵器				珠?	9		
41	方	座	M	老年	●	肥前系陶胎染付椀（Ⅳ期）					63	18ｃ以降	陶器椀は遺構上面で出土
42	円	座	M	壮～熟			鉄、鎌、鉄刃部?			櫛（鉄に接着）	2		
43	方	座	M	熟～老	●		煙管（古泉Ⅴ期）				49	18ｃ後半	
45	円	座	F	熟年		須恵器	かんざし?、毛抜?、金具			地輪	3		
48	円	×	×	×									
51	長方	○	×								16		66 に切られる。
54	方	座	F	壮年		陶器椀片（京焼風・Ⅳ期）					65	18ｃ以降	
57	方	座	F	青年?		大甕（常滑）、陶器壺（在地）、肥前系青磁皿（Ⅳ期）、青花皿（漳州窯）					2	18ｃ	
61	方	×	×	×			金属製品	4	銅銭２点接着（和紙でくるまれる、新寛永1、不明1）、新寛永、文銭各1		42	18ｃ中葉以降	
64	方	座	M	熟～老	●	陶器鉢					52	近世	
66	方	座	M	青年	○?		鏡			櫛	14		
67	円	座	M?	熟～老							14		
70	方	座	F	壮年	○?			6	新寛永1、銅銭４点接着（新寛永2、不明2）、新寛永1点	櫛	21	18ｃ中葉以降	
71	方?	×	×	×									70 に切られる
75	方	座	F	壮年							41		105 に切られる。
76	方	?	F	壮年	○		かんざし				29		
82	方?	火葬	?	成人		小型壺（越前）、土師器杯							
92	方	座	M?	熟年			金属製品（金具?）、煙管（古泉Ⅴ期）	6	銅銭５点接着（古寛永１、不明４、鉄付着）新寛永１		16	18ｃ後半	141 に切られる。
95	楕円	?	?	成人		甕（越前）						18ｃ後半	
96	長方	?	?	幼児		土製品（犬）							
98	方	×	×	×									57・94 に切られる。
101	長方	座	M	老年			煙管（古泉Ⅴ期）、金属製品、金具	2	古寛永１（鉄付着）、新寛永１	ビン	15		
		?	?	乳児									
105	方	正	F	熟～老	●		煙管（雁首、古泉Ⅴ期布にくるまれる）	6	銅銭６点（布にくるまれる）		21		
106	方	?	F	壮年							1		75・76 に切られる。
114	方	?	?	?	○			3	銅銭1点（布付着、不明）、銅銭2点（和紙?付着、不明2）		12		
126	方?	×	×	×									96 に切られる。
128	円	?	M	老年		土器					1		
130	円	?	M	熟年		小型壺（越前）							
131	円	?	F?	成人							15		16 に切られる。
138	方	座	F	老年	●						45		130 に切られる
140	円	×	×	×									
147	楕円	×	×	×									
157	方?	?	F	少年		陶器小杯（肥前系?、Ⅳ期以降）					7		179 に切られる。
166	方	座	F	老年			煙管（古泉Ⅴ期）				14	18ｃ後半	
168	円	?	M	壮年									
171	長方?	×	×	×			鉄鎌						147 に切られる。
173	方?	?	?	?			煙管雁首（古泉Ⅳ期）					18ｃ前半	156・180 に切られる。180 墓 1499 と接合
174	長方	×	×	×									227 に切られる。
177	円	?	?	?							4		

178	方？	×	×	×									177 に切られる。墓？
179	長方？	再？	F	成人		肥前系磁器小杯２（Ⅱ－２期、Ⅳ～Ⅴ期）	青銅製容器、足袋金具３				10	18 c	
		？	？	幼児									
180	方	？	？	？			煙管雁首（古泉Ⅳ期）				4	18 c 前半	228 に切られ、173 を切る。
181	方	？	M	熟～老	○		鉄				21		
182	方	？	M	熟年				1	銅銭１点（新寛永）			18 c 後半	
183	円	？	？	？									
185	円	？	？	小児									
187	長方	？	M	熟～老	●		火打金、煙管（古泉Ⅳ期）、銅製品（仏具？）、鉄製品				13	18 c 前半	86 に切られる。
188	方	？	？	？							1		186・181 に切られる。
190	方	？	？	壮年		肥前系青磁皿（波佐見Ⅳ期）		6	銅銭６点（新寛永３、不明３、頭蓋骨に付着）	櫛	15	18 c 後半	櫛は頭蓋骨と銭に挟まれて付着
193	方？	？	？	熟～老		陶胎染付椀						18 c 以降	
194	長方	？	F？	熟年							41		
196	長方	？	F	壮～熟	○								51・66 に切られる。
199	楕円	×	×	×									146 に切られる。
201	長方	？	？	幼児		磁器椀（金色塗料付き）				漆	5	19 c 前半	
226	円	×	×	×									194 に切られる。
227	円	×	×	×									174 を切る
229	方？	×	×	×									57 に切られる。
232	方？	×	×	×									233・126 に切られる。
233	方？	×	×	×									96・126 に切られる。
234	長方	×	×	×									96 に切られる。

墓№	墓坑形態	人骨			棺内灰白色土	土器・陶磁器類	銅・鉄製品	銭貨		その他	鉄釘	時期	備考
		埋葬形態	性別	年齢		遺物種類（時期等）	遺物種類	枚数	種類	遺物種類	本数		
〈時期不明〉													
4	方	？	F	熟～老	○？	形象埴輪			銭貨（図にあるが、調査中紛失）		22		
5	方	座	？	小児							1		
7	方	座	M	熟年							7		
8	長方	×	×	×									
11	長方	屈	F	熟～老							44		
12	方？	×	×	×									
18	方	×	×	×									
24	方	座	F	熟年						漆器蓋（黒）・身（赤）	30		
25	方	座	F	熟年						櫛	11		近世？
26	長方	正	M	熟～老			青銅製容器（数珠？入）			漆器、漆膜	10		
27	方	座	M	老年	○						7		
30	方	座	F	老年							47		
31	長方	？	？	小児		須恵器	煙管吸口？				26		30 に切られる。
37	方	座	F	熟～老							44		
46	長方	×	×	×									
47	長方	？	？	？			金属製品				5		
50	長方	座	F	壮～熟	○？						27		
53	方	座	？	老年							8		
55	方	×	×	×							24		56 に切られる。
56	方	×	×	×							1		
60	方	×	×	×									
62	方	×	×	×							2		58 に切られる。
63	方	×	×	×							6		
68	方	？	？	？							59		94 に切られる。
74	長方	座	M	熟～老	○						6		81 に切られる。
78	方	座	M？	壮？							75		20 に切られる。
81	方	座	M	壮年	○						61		
84	方	×	×	×									83・85 に切られる。
86	方	×	×	×									
88	長方	？	？	壮～熟				1	銅銭１点（皇宋通寶）		13		97 を切る。釘判断では近世
89	方	座	F	老年	●						60		26 に切られる。
93	方	座	F	熟年	○						30		
94	方	×	×	×							1		
97	方	？	？	？							18		
99	方	×	×	×									
100	方	座	F	熟年	●						6		
102	方	正	F	老年	○						6		101 を切る。
107	方？	×	×	×									59・110 に切られる。
112	長方	？	？	？	●						4		
116	方	？	？	成人	○						9		115 に切られる。
117	長方	？	？	壮年									
124	方	座	M	熟～老	○						15		
125	方	正	F	熟年	○						5		
127	長方	×	×	×							1		
132	方	座	M	熟～老	●						31		
134	長方	×	×	×							9		133 に切られる。
135	長方	仰臥	F	熟年			鉄製品（金具）３				21		
136	方	屈	F？	熟年	●						31		
137	方	座	M	壮年							5		136 に切られる。
141	方	？	M	熟年							4		
142	方	座	F	壮年	●						21		124 に切られる。
143	台形	×	×	×							3		69 に切られる。
145	長方	×	×	×									
146	方	×	×	×									
148	長方	×	×	×									
154	方	×	×	×		埴輪					20		

155	方?	×	×	×									44・224 に切られる。
156	長方	×	×	×									
158	方	×	×	×									
159	長方	座	F	熟年	●						13		108 に切られる。
160	方	座	F ?	青年	●					木質（棺材？）	44		
161	方	座	M	熟年	○	陶器壺 （瀬戸美濃系？）					35		162 に切られる。
162	方	正	F	壮年	○						1		
163	方?	×	×	×									145 に切られる。墓かどうか不明。
164	長方	?	F	壮年							20		
165	方	?	F	壮～熟	●	埴輪					12		
169	長方	×	×	×									
170	長方	×	×	×									169 に切られる。
172	方	座	F	熟～老	○						58		
186	方	座	F ?	壮年							23		58 に切られる。
197	方	×	×	×									
198	方	×	×	×									127 に切られる。
202	長方	×	×	×									226 に切られる？
204	長方	×	×	×									
205	長方	×	×	×									
207	方	×	×	×									
208	方	×	×	×									
209	方	×	×	×									
212	方	×	×	×									
213	方?	×	×	×									
214	方	×	×	×									墓？
215	方	×	×	×									墓？
221	長方	?	?	?						かんざし	6		89 に切られる。
222	方?	×	×	×									11 に切られる。
223	方?	×	×	×									44・77 に切られる。
224	方?	×	×	×									84・25 に切られる。
228	方	×	×	×									
231	方?	×	×	×									111 に切られる。
235	方?	×	×	×									63・236 に切られる。
236	長方	×	×	×									
237	長方?	×	×	×									238 に切られる？
238	方	×	×	×									
240	長方	×	×	×									

埋葬形態　　：座＝立膝座位、正＝半腹臥正座位、屈＝半仰臥屈位、仰臥＝仰臥立膝位
性別　　：F＝女性、M＝男性
棺内灰白色土：●＝有（古環境研究所による分析資料）、○＝有（分析未実施）

第Ⅶ章　結　語

平成 21 年度 4 月から始まった松原古墳群、松原小奥遺跡の発掘調査は、想定以上の内容によって、12 月末までかかってしまった。ひとつは松原古墳群における横穴墓の検出。そしてもうひとつが松原小奥遺跡のおびただしい中世末以降の墓である。

古墳の調査に関しては、平成 20 年度鳥取県埋蔵文化財センターにより実施された調査と合わせ、湖山池南西部において初めてまとまった成果となった。とくに今年度の調査により、古墳時代前期～終末期にかけて連綿と古墳が展開したことが判明した。

前期のものは湖山池へ向かう南北方向の主尾根高所から連続し、そこから派生する支尾根には中期後半以降低所へ向かって連続的に造墓される。ただし、松原小奥遺跡のある丘陵とその南側の丘陵とでは、古墳築造原理に若干の違いを見せる。つまり後者は尾根頂部に列状に展開しながら、斜面部において集塊状をなす。そして際立った違いが、埴輪の有無である。

松原小奥遺跡の古墳群に関しては、後世の撹乱等でその痕跡をほとんど留めていない中、辛うじて部分的に周溝を検出した。埴輪はそうした周溝内から出土しており、旧情を知ることはできないが、因幡における少ない調査事例の中で貴重なものとして、今後の検討課題を提示できたと考える。

また全く想定していなかった横穴墓の調査は、因幡では浜坂横穴群以来となるもので、詳細なデータを取りながら行った今回の事例は非常に貴重なものと言えよう。遺存状況が良かったため、横穴の掘削技法に関する検討も行うことができた。このことは、調査研究の進んでいる伯耆から出雲にかけての諸例と比較することによって、因幡における横穴墓の位置づけをしていくことができよう。

こうした古墳のとくに選地をみるとき、築造者たちの地質に関する知識、土木技術に対する造詣の深さを感じさせられた。

205 基もの中世末以降現代までの墓の調査は、ひとつの遺跡における当該期の墓の検出量において、鳥取市古市遺跡に次ぐものである。諸事情により近代以降については報告していないが、184 基（Ⅲ期を含まない）の調査により、中世末から近世にかけての墓制の変遷が明らかになるとともに、古市遺跡と合わせ、因幡地域における特徴も抽出することができた。

また、15 世紀後半～ 16 世紀前半にかけて、湖山池周辺に特徴的にみられる墳丘（周溝によって区画される墓を含む）についても、新たな資料を提供することとなった。すなわち、松原小奥遺跡で検出した 49 墓、80 墳丘が、それまでのものよりも新しい 16 世紀後葉段階のものであること、また規模も平均より一回大きいことである。周辺事例においてこのタイプの墓が単独では存在していないこと、本墓が丘陵南側縁辺部にあったため後世の削平を免れた可能性、そして、調査地内から同時期の貿易陶磁器がわずかながら出土していることから、もともとは本遺跡内においても複数基あった可能性を指摘した。

17 世紀代の墓に続いて、18 世紀以降一気に造墓活動が盛んになり、最後は足の踏み場もないほど密に墓を検出することとなった。そして、この墓の中に埋葬された多くの人骨について、取り上げから各属性分析まで、鳥取大学医学部井上貴央教授と同部機能形態統御学講座の方々に大変お世話になった。これまで因幡における当該期の人骨に関する研究が無かっただけに、非常に貴重な成果になったと考える。

今回分析の対象となった人々は、ほぼ当時の松原集落で生活されていたと思うが、近世においてその集落域が移動したという伝承のあることを、鳥取市歴史博物館伊藤康晴氏からご教示いただいた。現在ある集落への移動は 17 世紀後半頃に行われたことが国絵図の分析でわかるという（註 1 ）。集落移動の理由として、人口増加と新田開発地に近い場所ということがあったようだが、墓地はそのままにされたということになろうか。ここでは墓地と集落の関係にまで検討が及んでおらず、今後の課題としたい。

いずれにしても、古墳時代、および中世以降にこの松原の地で活動した多くの人々の墓を調査したことになる。そこに開発の手が伸びるという故に、その深い眠りを覚まさせてしまった。
せめて彼らに新たな活躍の場を提供すべく、ひとつの形として本報告書を編んだ。

調査担当者の力量不足により、不十分な点は多々あると思うが、本書を活用し、ご教示いただきたいと願う。

最後になったが、現地調査から報告書作成まで、実に多くの方々のご支援をいただいた。そうした方々のご芳名を記さないが、深甚の謝意をささげるものである。

註

1）伊藤康晴 2009「江戸時代の集落は移動する―松原村の集落移動と国絵図利用―」『鳥取地域史通信』155 号

写　真　図　版

1　調査前調査地全景（西から）

2　調査前調査地全景（南西から）

図版２

１　南北尾根　第３面全景（北から）

２　東西尾根　第３面全景（西から）

1　11 号墳調査前状況（南から）

2　26 号墳調査前状況（南東から）

図版４

1　第３面　11 号墳周辺部検出状況（南東から）

2　65 土坑遺物出土状況（北東から）

3　64 ピット、65 土坑出土被熱粘土塊

1　33 号墳検出状況（南西から）

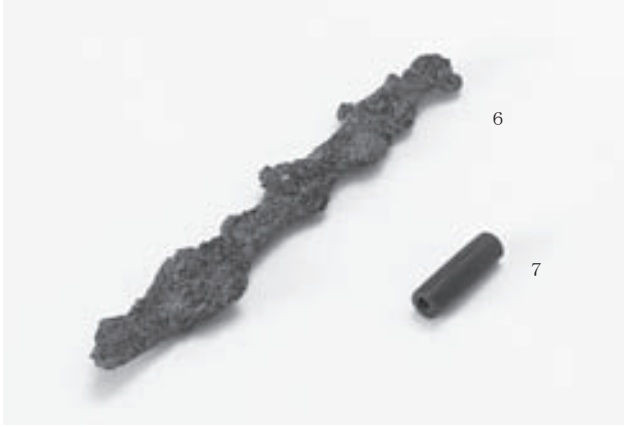
2　33 号墳南側周溝断面（南西から）

図版６

1　33 号墳埋葬施設 1 検出状況（北西から）

2　33 号墳埋葬施設 1 断面（西から）

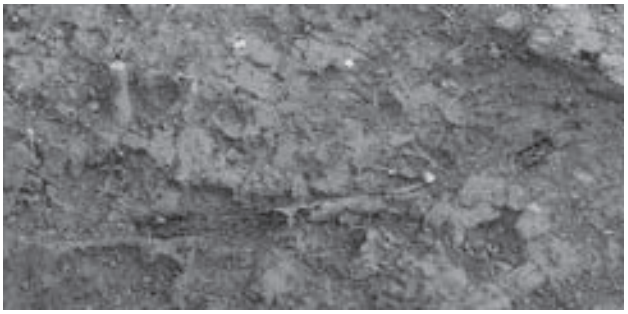
3　33 号墳埋葬施設 1 完掘状況（西から）



4　33 号墳埋葬施設 1 出土遺物

1　33 号墳埋葬施設 2 検出状況（南西から）

2　33 号墳埋葬施設 2 断面（南西から）



3　ガラス製小玉出土状況（北西から）

4　33 号墳埋葬施設 2 完掘状況（南西から）

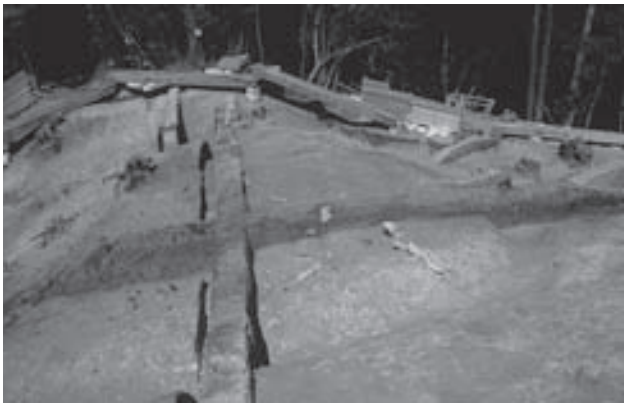
5　33 号墳埋葬施設 2 出土遺物

図版８

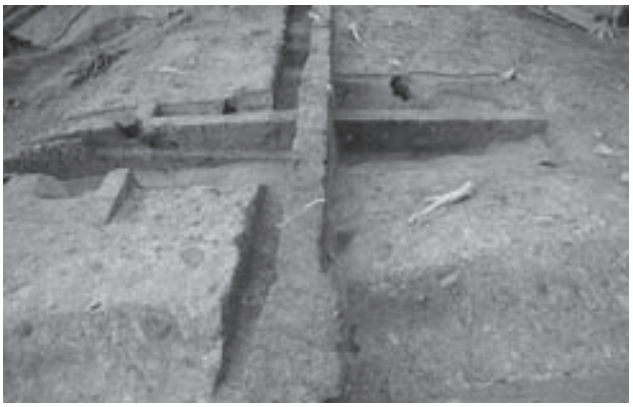
1　34 号墳検出状況（南東から）

2　34 号墳埋葬施設検出状況（南西から）

1　34 号墳周溝断面（南西から）



2　34 号墳墳丘断面（南東から）



3　34 号墳埋葬施設断面（南東から）

4　34 号墳埋葬施設断面（南西から）

5　34 号墳埋葬施設検出状況（南東から）

6　34 号墳埋葬施設遺物出土状況（南西から）

7　34 号墳埋葬施設完掘状況（南西から）

8　34 号墳埋葬施設出土遺物

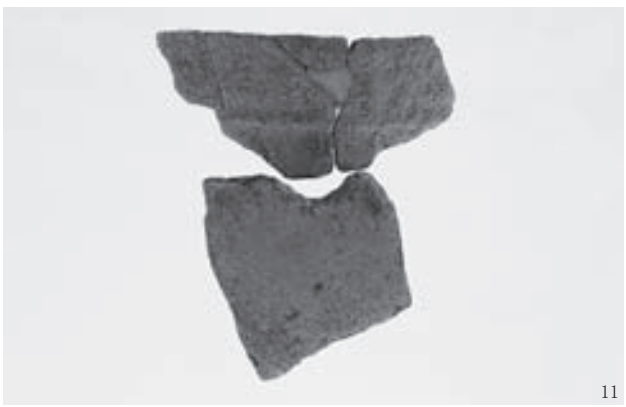
図版 10

1　35 号墳検出状況（南東から）

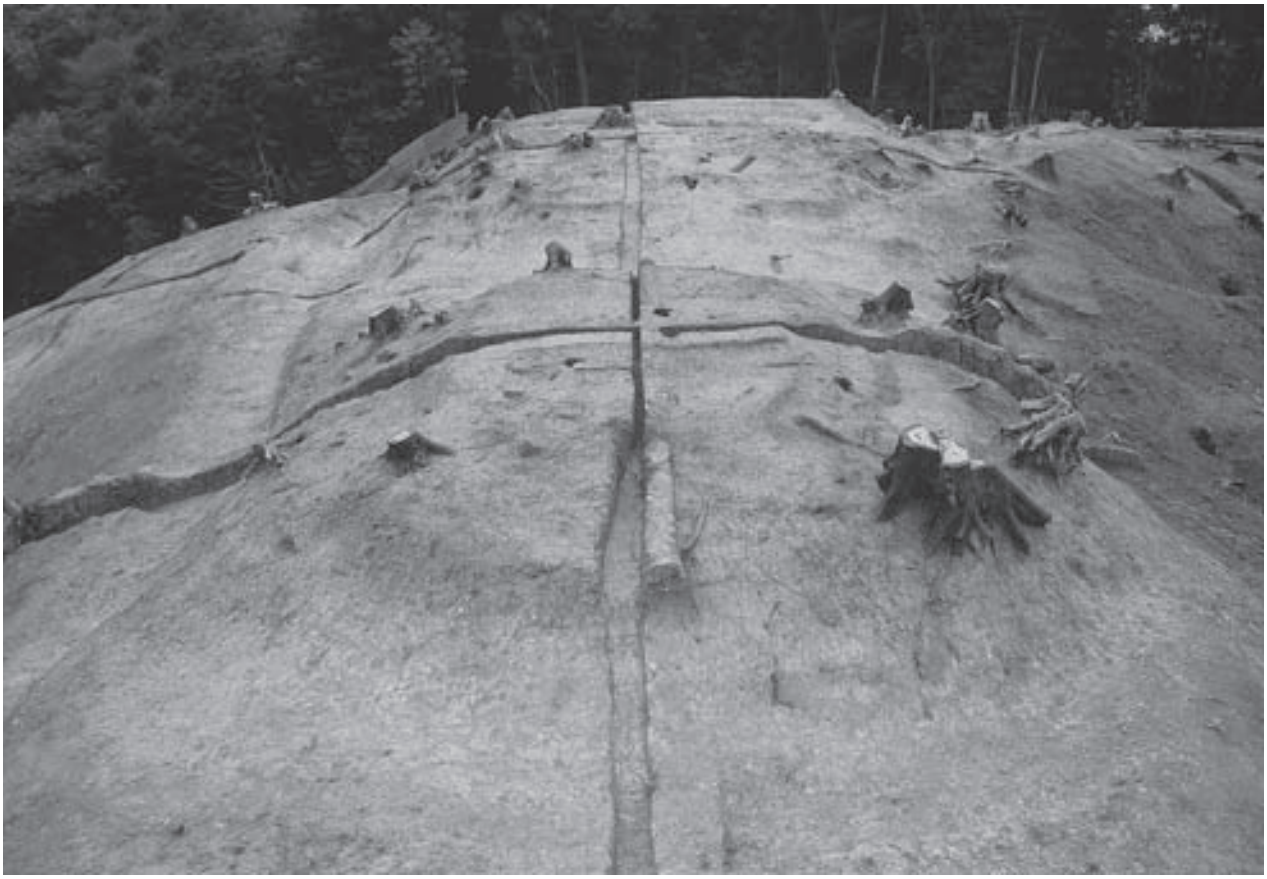
2　35 号墳周溝断面（南西から）

3　35 号墳墳丘断面（南西から）

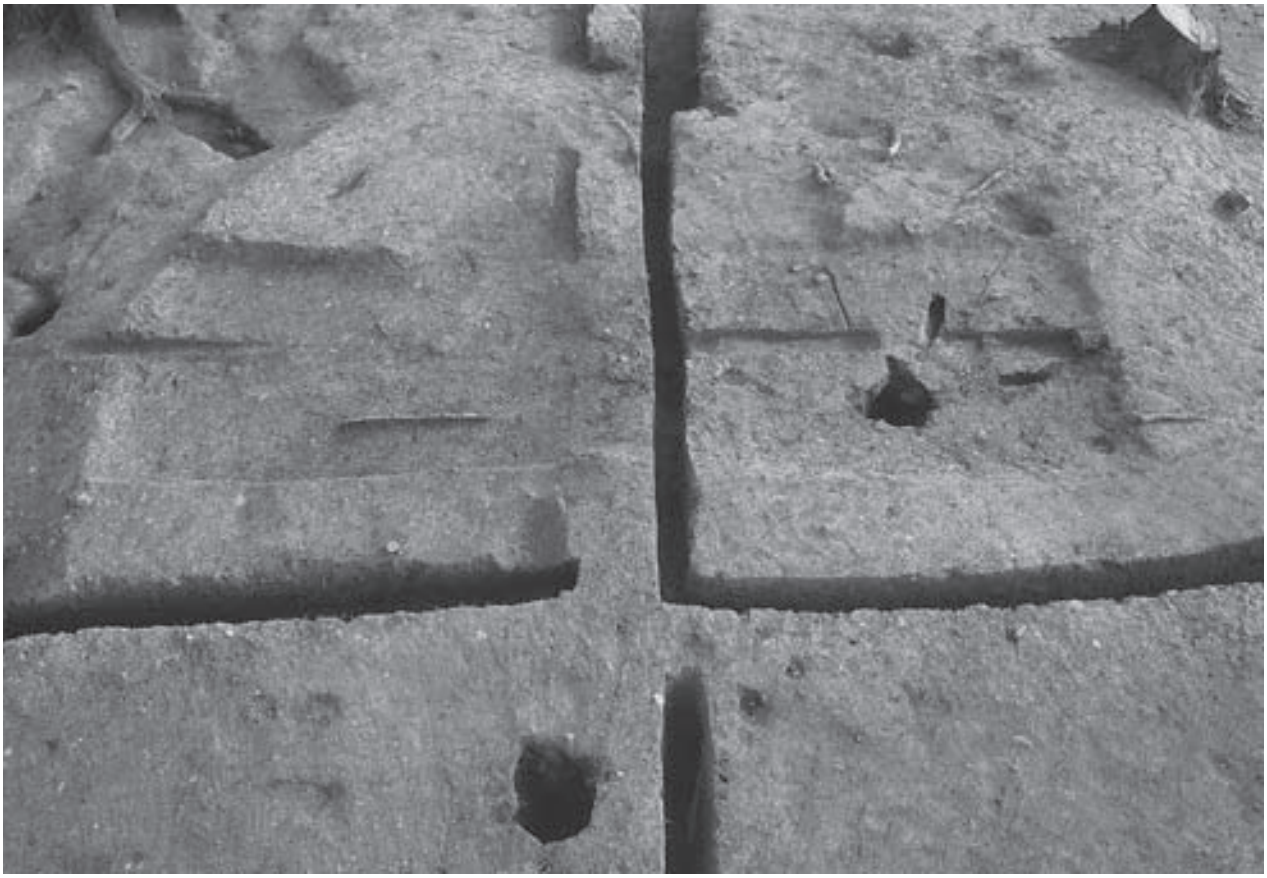
4　35 号墳遺物出土状況（北東から）



5　35 号墳出土遺物

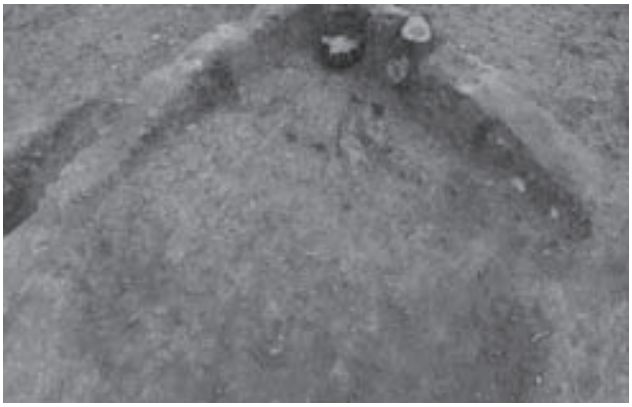


1　11 号墳検出状況（南から）



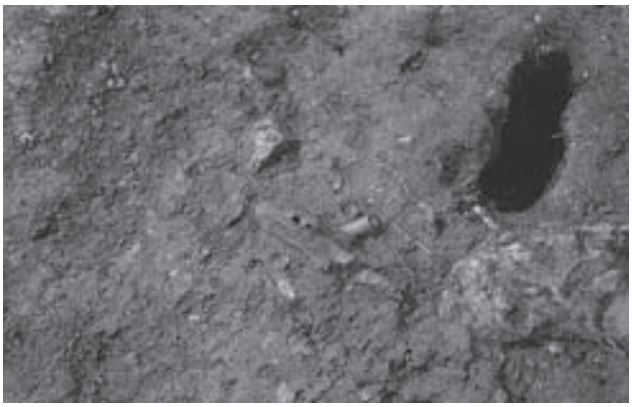
2　11 号墳埋葬施設検出状況（北から）

図版 12



1　11 号墳二次墳丘調査状況（南西から）

2　11 号墳埋葬施設鉄鏃出土状況（南西から）



3　11 号墳埋葬施設鉄鏃出土状況（南東から）

4　11 号墳墳丘断面（南東から）

5　11 号墳一次墳丘調査状況（南東から）

6　11 号墳埋葬施設断面（南西から）

7　11 号墳一次墳丘調査状況（南東から）

8　11 号墳墳丘盛土完掘状況（南東から）

1　11 号墳埋葬施設土器検出状況（南西から）

2　11 号墳埋葬施設土器出土状況（南東から）

3　11 号墳埋葬施設鉄剣出土状況（南西から）

4　11 号墳埋葬施設鉄剣出土状況（南東から）

5　11 号墳埋葬施設出土遺物

図版 14

1　26 号墳検出状況（南東から）

2　26 号墳埋葬施設検出状況（南西から）

1　26 号墳周溝検出状況（南東から）

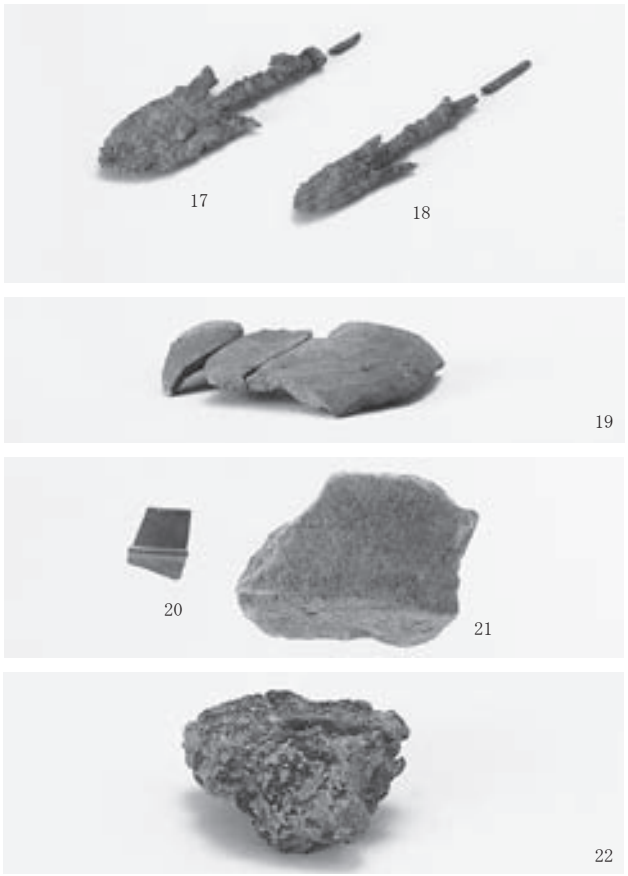
2　26 号墳一次墳丘盛土調査状況（南から）

3　26 号墳一次墳丘盛土調査状況（南から）

4　26 号墳埋葬施設断面（南から）

5　26 号墳埋葬施設土器出土状況（南西から）

6　26 号墳完掘状況（北東から）



7　26 号墳埋葬施設、表土、1-1 層出土遺物

図版 16

1　38 号墳周溝検出状況
（北から）

2　38 号墳周溝断面
（南東から）

3　38 号墳完掘状況
（北から）

1　南西斜面全景（南西から）

2　1 号横穴墓検出状況（南西から）

図版 18

1　1 号横穴墓前庭部断面 c（南西から）

2　1 号横穴墓前庭部断面 d（南西から）

3　1 号横穴墓閉塞石検出状況（南西から）

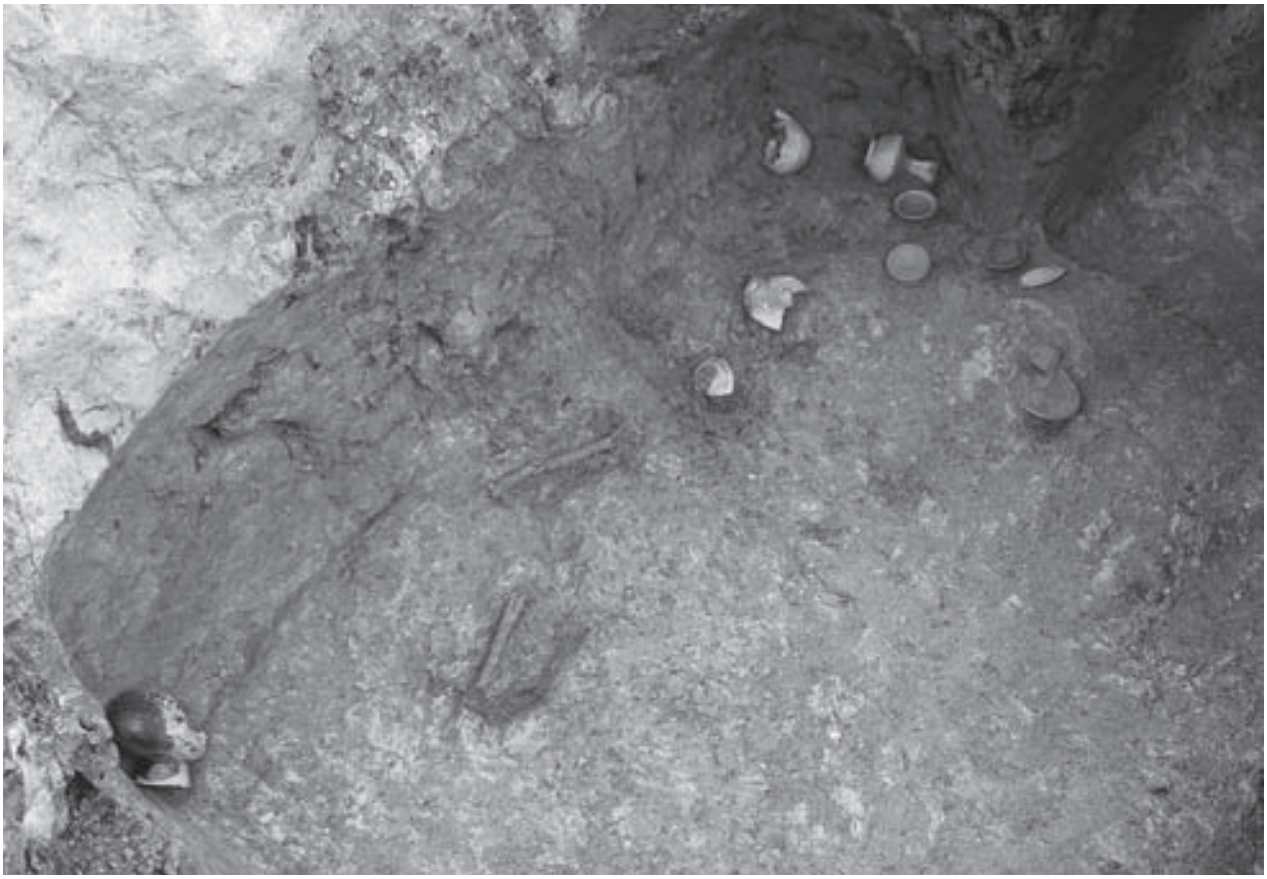
4　1 号横穴墓閉塞石検出状況（南西から）

5　1 号横穴墓羨門検出状況（南西から）

6　1 号横穴墓羨門の溝断面（南西から）

7　1 号横穴墓玄室断面（北から）

8　1 号横穴墓玄室断面（南西から）



1　1号横穴墓玄室内遺物出土状況（北から）

2　1号横穴墓玄室内遺物出土状況（北西から）

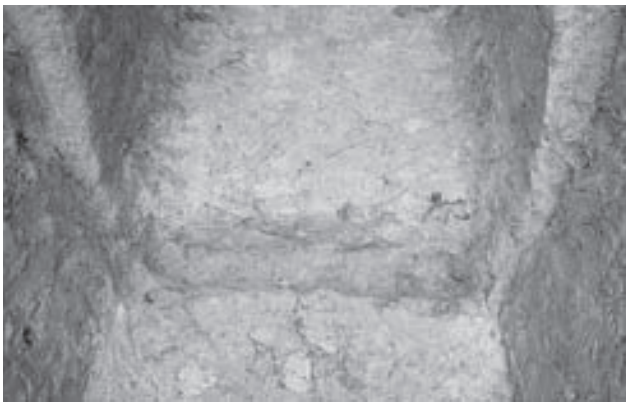
3　1号横穴墓玄室内遺物出土状況（西から）

4　1号横穴墓玄室内遺物出土状況（北西から）

5　1号横穴墓玄室内遺物出土状況（南西から）

図版 20

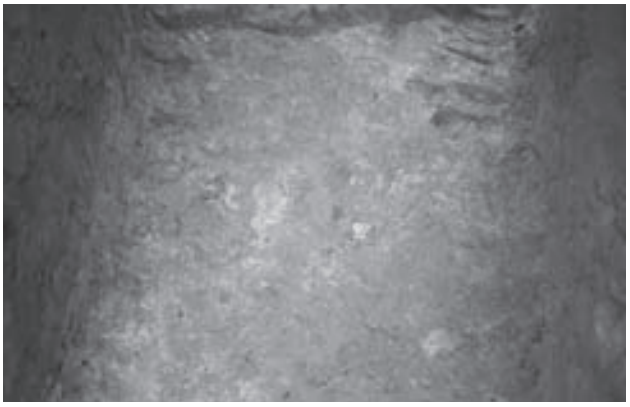
1　1 号横穴墓羨門検出状況（南西から）



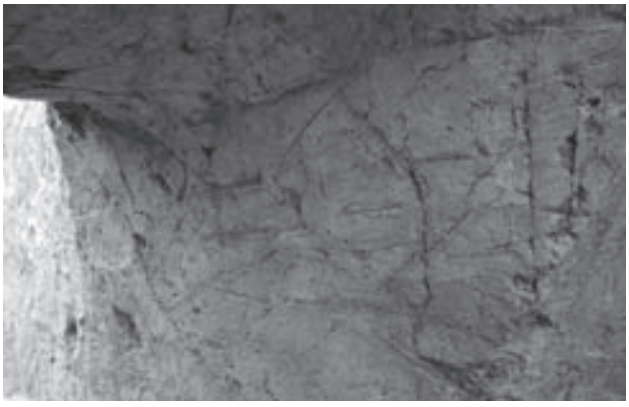
2　1 号横穴墓羨門検出状況（南西から）

3　1 号横穴墓羨門検出状況（南西から）

4　1 号横穴墓羨門検出状況（南東から）

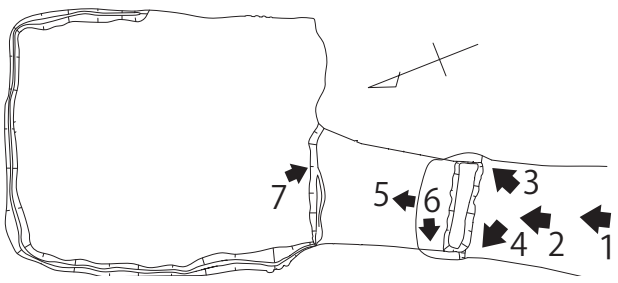


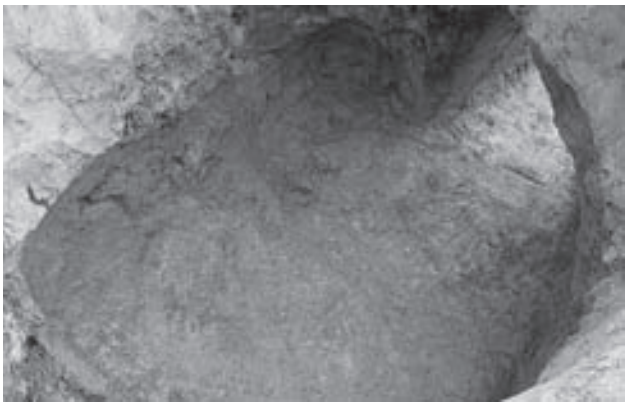
5　1 号横穴墓羨道底面検出状況（南西から）



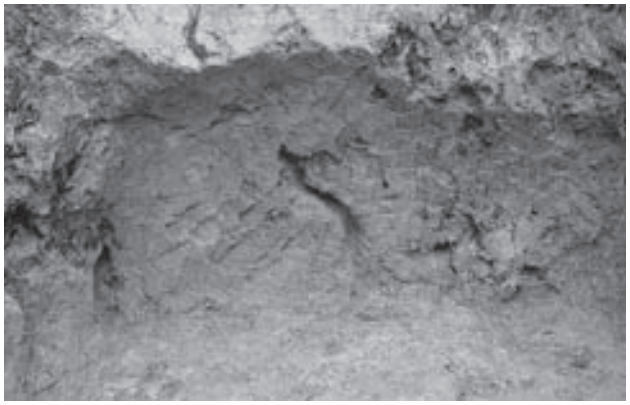
6　1 号横穴墓羨道右壁検出状況（東から）

7　1 号横穴墓羨道左壁検出状況（北から）





1　1 号横穴墓玄室検出状況（北から）

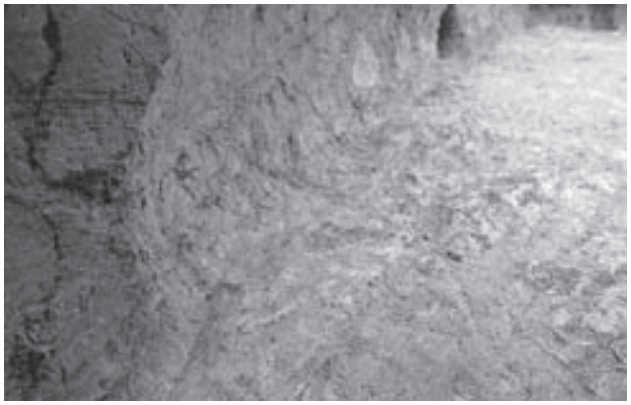


2　1 号横穴墓左壁北東側検出状況（北西から）

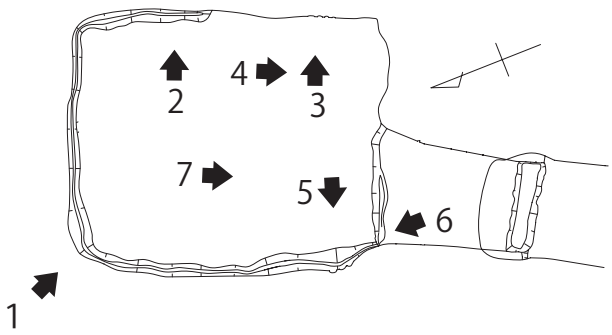
3　1 号横穴墓左壁南東側検出状況（北西から）

4　1 号横穴墓左袖検出状況（北東から）

5　1 号横穴墓右壁南西側検出状況（南東から）



6　1 号横穴墓周壁溝検出状況（南から）



7　1 号横穴墓玄門検出状況（北東から）

図版 22

23

26

24

27

28

29

25

1 号横穴墓出土遺物

1　99 墳丘検出状況
（南東から）

2　100 平坦部検出状況
（北東から）

3　100 平坦部断面（南西から）

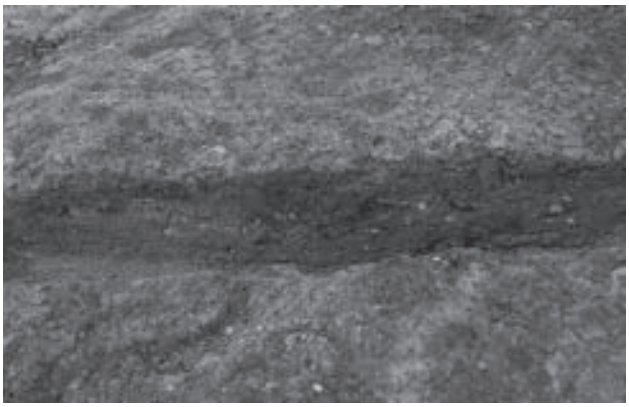
4　99 墳丘出土遺物

図版 24

1　南北尾根　第 2-1 面検出状況（南から）

2　第 1-2 面　17 平坦部検出状況（南西から）

3　7 土坑検出状況（南西から）



4　7 土坑断面（南東から）

5　13 土坑検出状況（南から）

6　13 土坑断面（北東から）

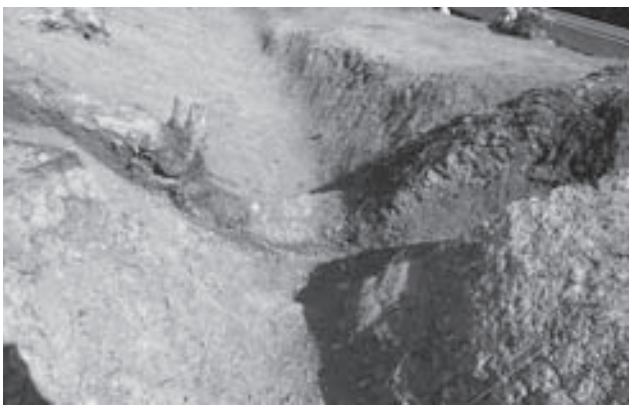
7　10 トレンチ断面（南から）

8　12 トレンチ断面（西から）

1　南北尾根　第 1-1 面全景（南から）

2　1 道検出状況（北西から）

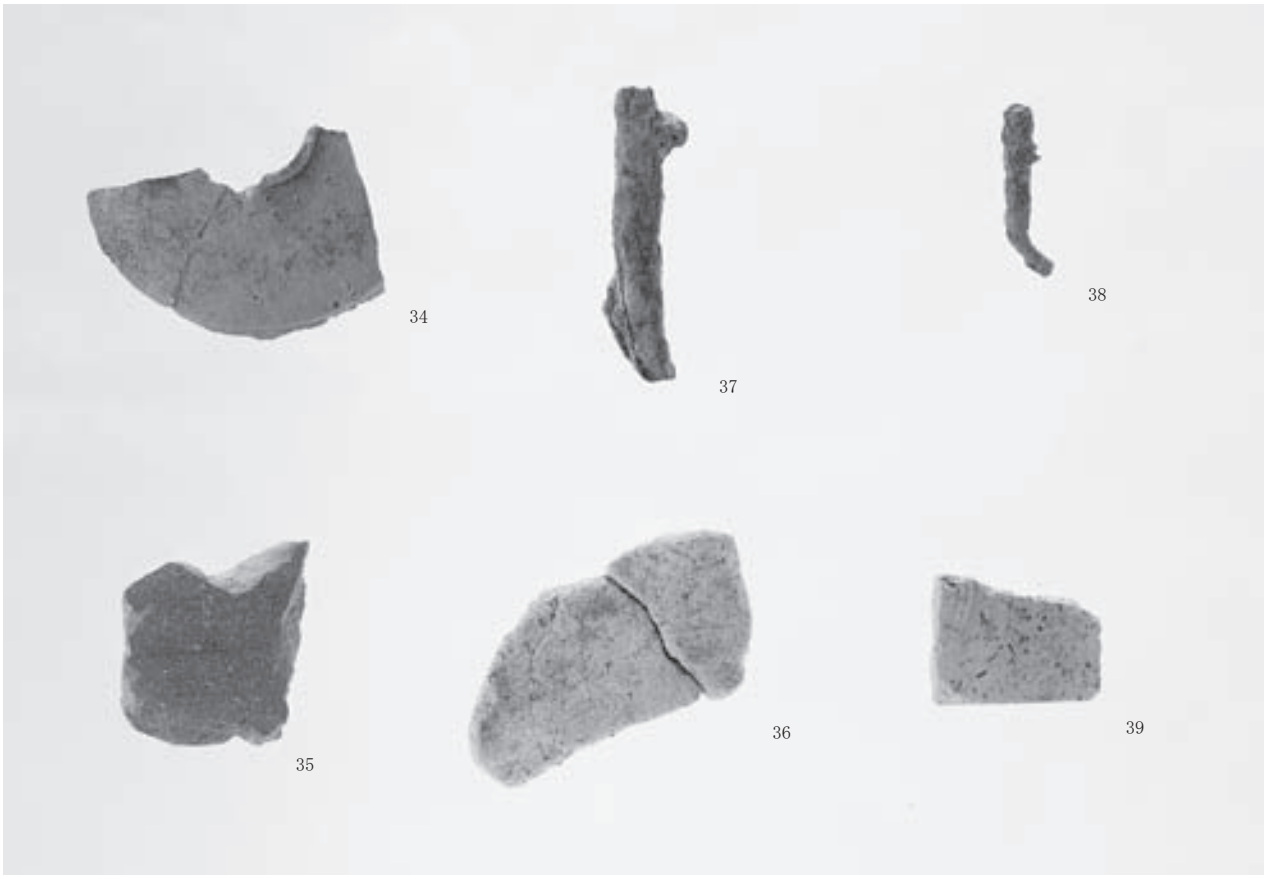
3　2 道検出状況（北から）



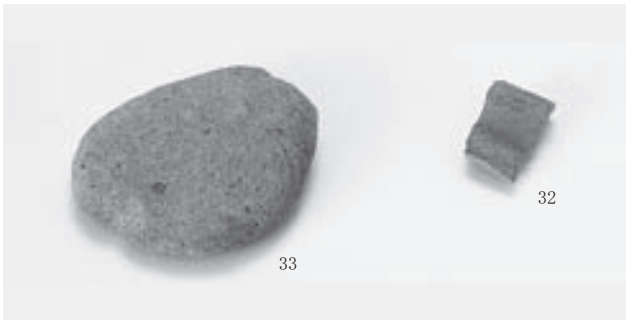
4　1 道断面（南東から）

5　2 道断面（南東から）

図版 26



1　1-1・2 層出土遺物



2　2-1 層出土遺物

3　表土出土遺物

1　調査前調査地全景（南から）

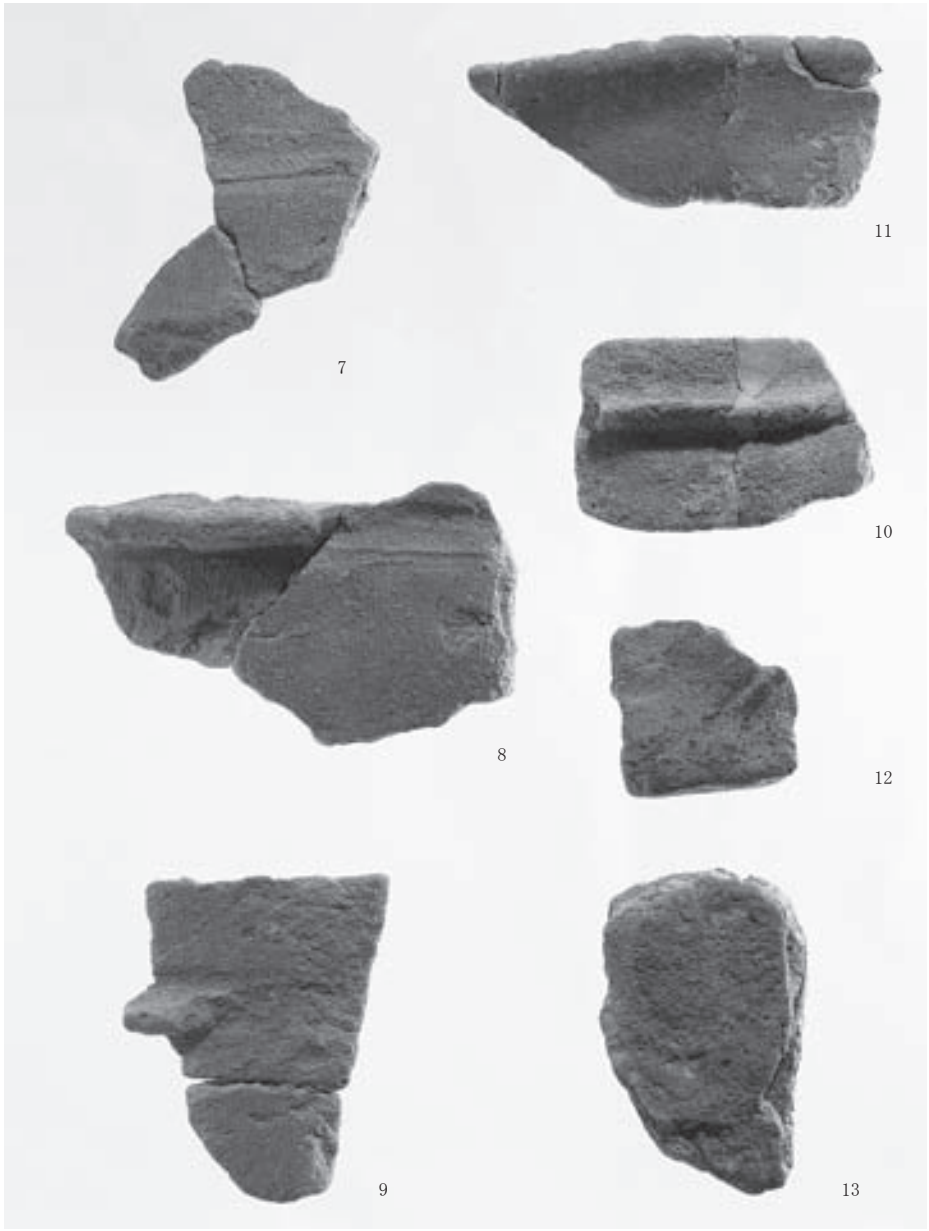
2　調査後調査地全景（西から）

図版 28

1　15 号墳全景（南西から）

2　15 号墳墳丘　南北断面（西から）

1　36 号墳周溝内遺物
出土状況（南から）



2　36 号墳出土遺物

図版 30

1　37 号墳完掘状況（東から）

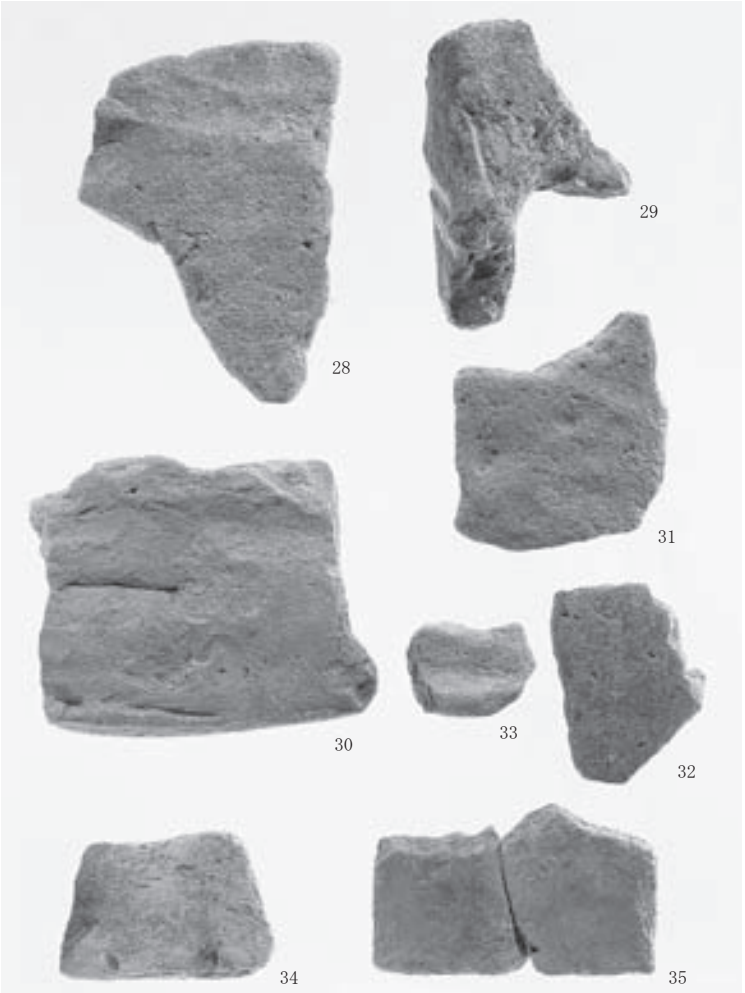
2　16 号墳北側周溝内遺物
出土状況（東から）

3　16 号墳東側周溝内遺物
出土状況（西から）

1　16 号墳　出土遺物

2　遺構外出土遺物（須恵器、土師器）

3　遺構外出土遺物（石器）



4　遺構外出土遺物（埴輪、土製品）

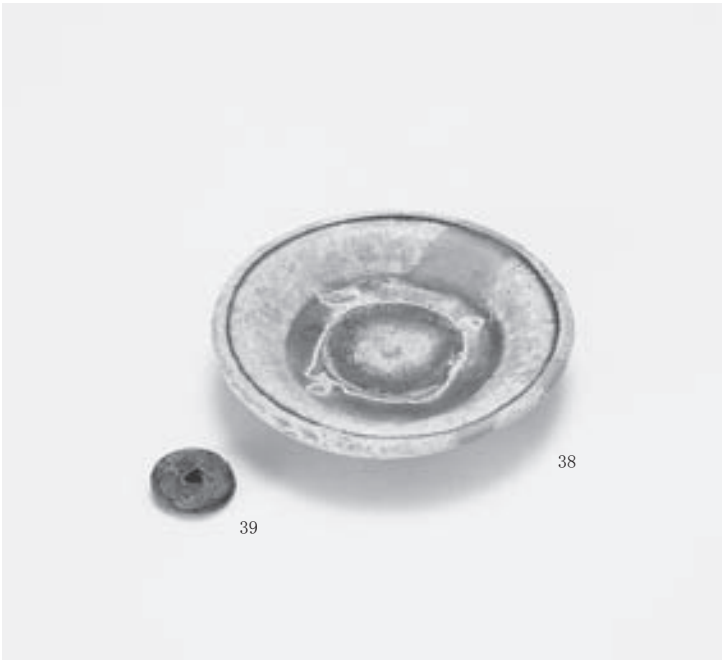
図版 32

1　80 墳丘上層検出状況（西から）

2　80 墳丘および 49 墓検出状況（北西から）

1　49 墓礫出土状況
（南東から）

2　49 墓銭貨出土状況
（南から）



3　49 墓出土遺物

図版 34

1　72 墓遺物出土状況（南から）

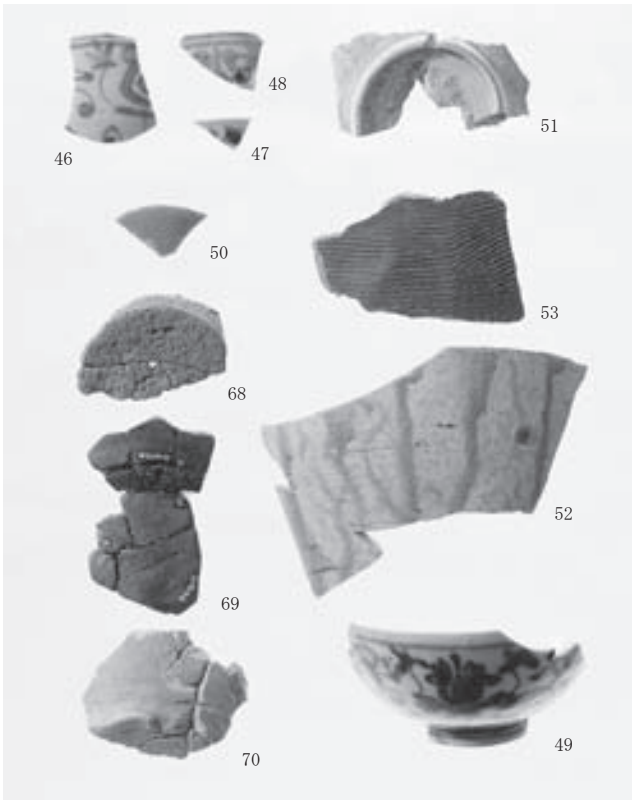
3　73 墓遺物出土状況（南から）

2　72 墓出土遺物

4　73 墓出土遺物

5　184 墓出土遺物

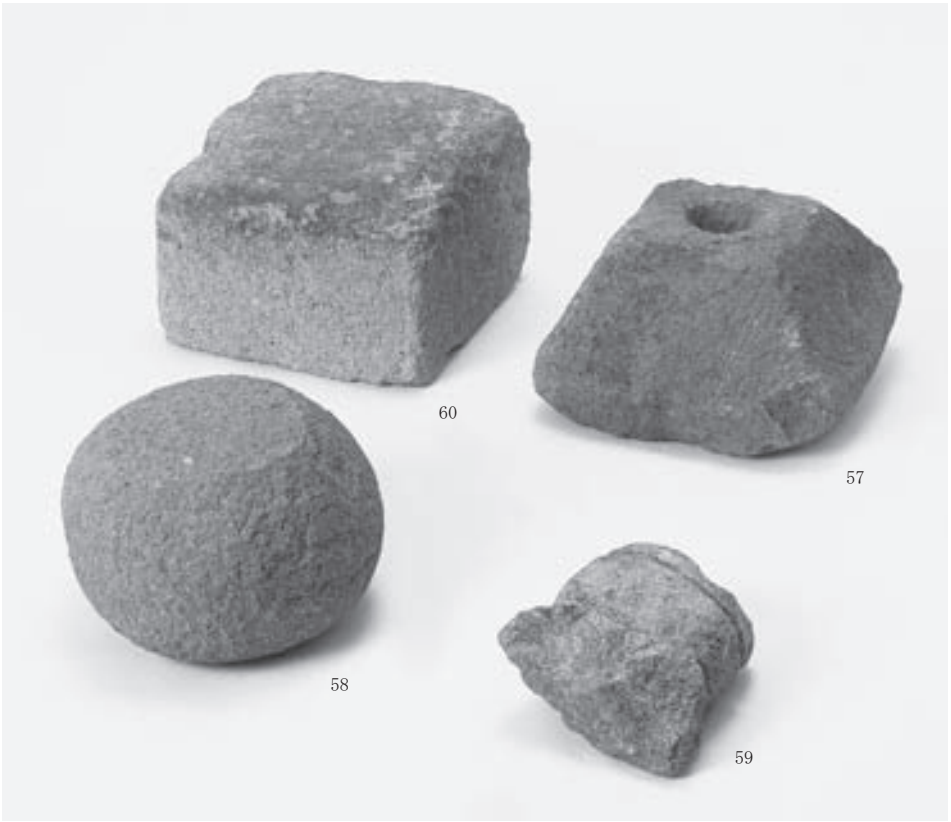
6　184 墓遺物出土状況（南から）



1　Ⅰ期遺構外出土遺物（中世土器、陶磁器）

2　Ⅰ期遺構外出土遺物（銭貨）

3　Ⅰ期遺構外出土遺物（近世陶磁器）



4　Ⅰ期遺構外出土遺物（石造物）

図版 36

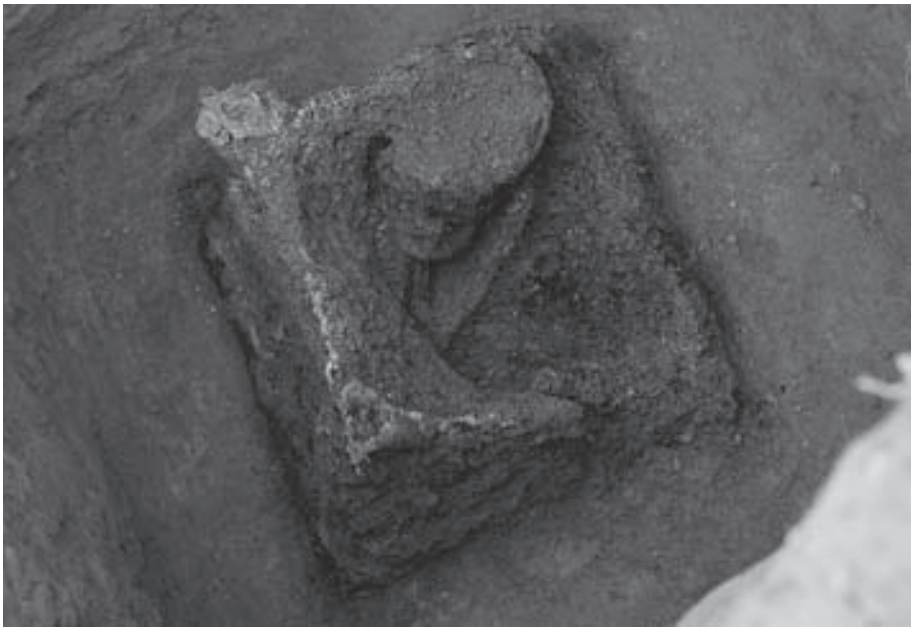
1　14 墓人骨等出土状況（南から）

2　16 墓甕内人骨等出土状況（南から）

3　16 墓甕内遺物出土状況（南から）

4　14・16・40・43・45 墓出土遺物

5　16 墓出土甕



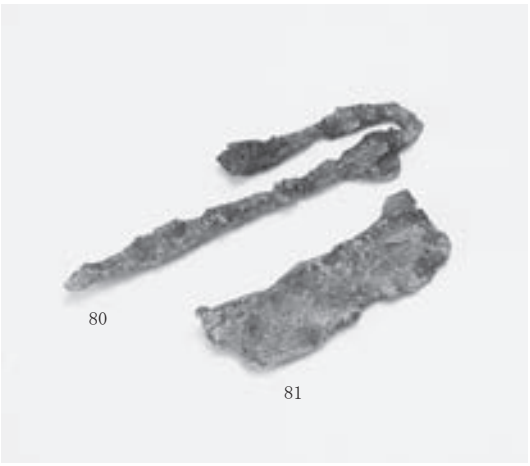
1　43 墓人骨等出土状況（西から）

2　45 墓人骨等出土状況（南から）

3　166 墓人骨等出土状況（南から）

図版 38

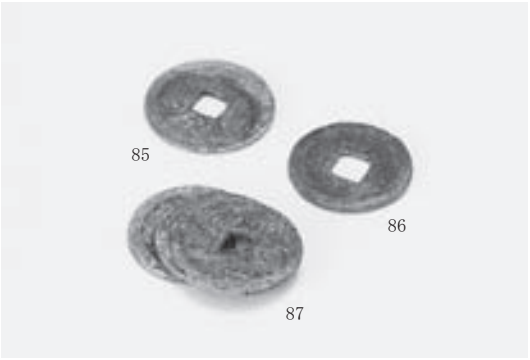
1　42 墓人骨等出土状況（北から）



2　42 墓出土遺物

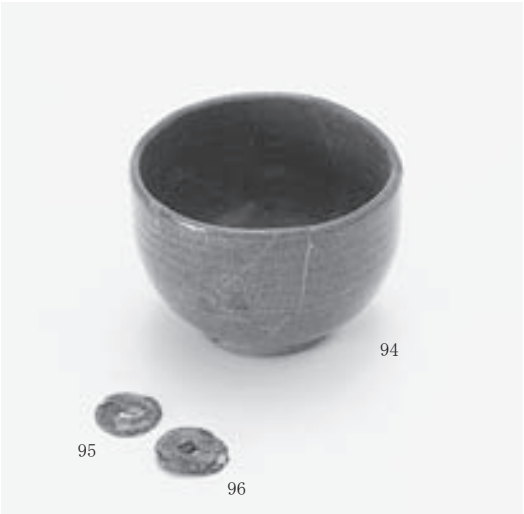
4　32 墓人骨等出土状況（東から）

3　29 墓出土遺物



5　32 墓出土遺物

6　41 墓人骨等出土状況（東から）



7　41・114 墓出土遺物

1　190 墓人骨等出土状況（北から）

2　190 墓出土遺物

3　38 墓出土甕

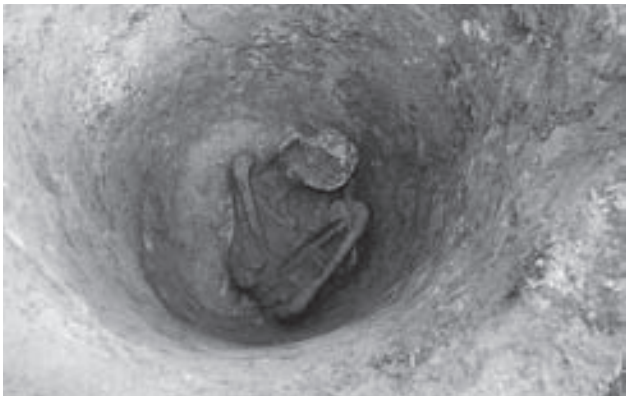
4　38 墓甕出土状況（西から）

図版 40

1　10 墓人骨等出土状況（北から）

2　10 墓出土遺物

3　180 墓出土遺物



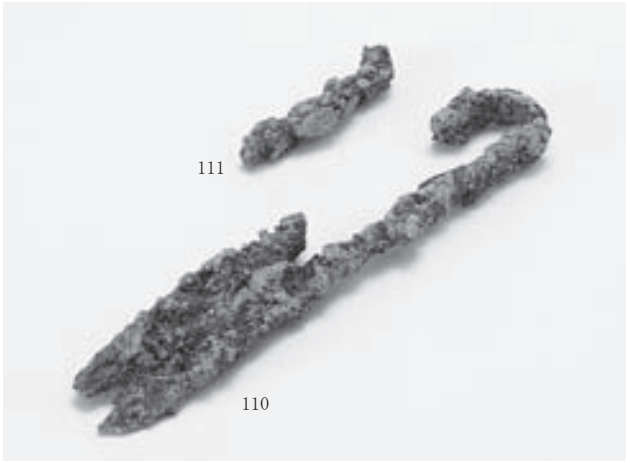
4　15 墓人骨等出土状況（北から）

5　15 墓出土遺物

6　101 墓人骨等出土状況（南から）

7　101 墓出土遺物

2　76・105 墓出土遺物



3　181 墓出土遺物

5　92 墓出土遺物

7　187 墓出土遺物

1　105 墓人骨等出土状況（東から）

4　92 墓人骨等出土状況（西から）

6　187 墓人骨等出土状況（北から）

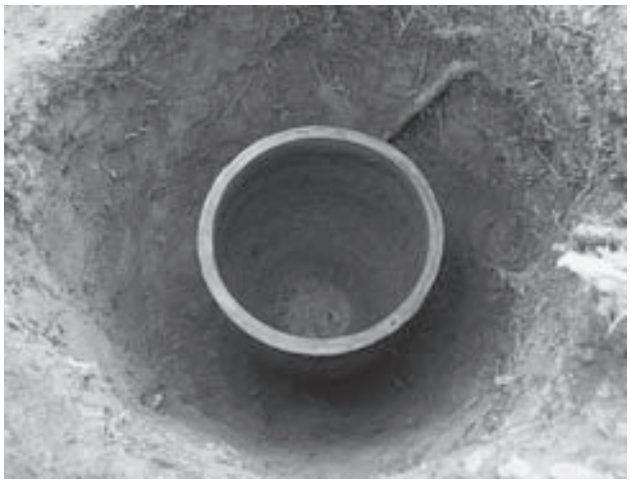
図版 42

1　82・130 墓出土遺物

3　95 墓出土遺物

5　57 墓出土遺物

2　82 墓遺物出土状況（南から）



4　95 墓遺物出土状況（南から）

6　57 墓甕出土状況（北から）

7　57 墓甕内人骨等出土状況（北から）

1　96 墓人骨等出土状況（南西から）

2　96 墓出土遺物

3　179 墓人骨等出土状況（北西から）

4　179 墓出土遺物

5　201 墓人骨等出土状況（北から）

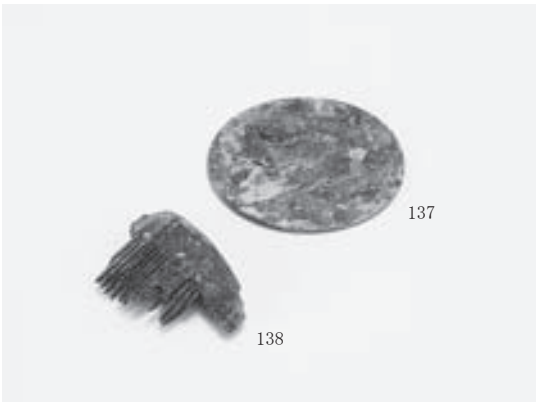
6　157・201 墓出土遺物

図版 44

1　66 墓人骨等出土状況（西から）

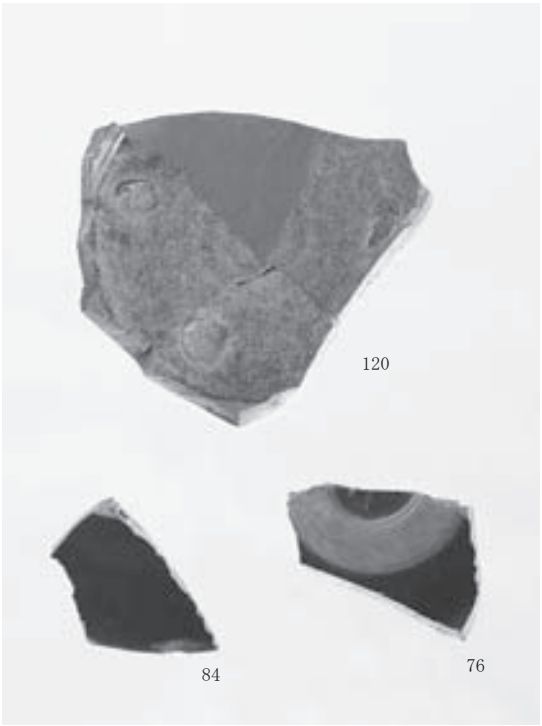
3　70 墓人骨等出土状況（東から）

5　61・70 墓出土遺物



2　66 墓出土遺物

4　171・182 墓出土遺物



6　遺構内出土遺物

1　II 期遺構外出土遺物（甕）

2　II 期遺構外出土遺物（瓦）

3　II 期遺構外出土遺物（土器、陶磁器）

図版 46

1　24 墓人骨等出土状況（南から）

2　26 墓人骨等出土状況（北西から）

3　26・221 墓出土遺物

4　135 墓出土遺物

1　25 墓出土遺物

2　47 墓出土遺物

3　160 ～ 162・177 墓
人骨等出土状況
（北から）

図版 48

1　調査地東部墓検出状況
（西から）

2　平坦部１完掘状況
（西から）

3　１・２ｆ区礫検出状況
（西から）

1　調査地西部墓完掘状況（東から）

2　1ｄ区墓完掘状況（東から）

3　1ｅ区墓完掘状況（東から）

図版 50

1　松原小奥遺跡完掘状況（西から）

2　調査後調査地全景（南から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	まつばらこふんぐん　まつばらこおくいせき
書名	松原古墳群Ⅱ　松原小奥遺跡
副書名	一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅲ
シリーズ名	鳥取県文化財調査報告書
シリーズ番号	20
編著者名	中森　祥、田中　正利、後川　恵太郎、井上　貴央、江田　真毅、藤井　理恵
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団調査室
所在地	〒680-1133　鳥取県鳥取市源太 12 番地　TEL（0857）51-7552
発行年月日	西暦 2010 年（平成 22 年）９月 13 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
まつばらこふんぐん 松原古墳群	とっとりけんとっとりしまつばら 鳥取県鳥取市松原 こおく 小奥 527-1、533-1 た 田ノモ 557、561	31201	1-0113 1-0128 1-0444 〜 1-0446 1-0449 1-0480	35° 29’ 34”	134° 08’ 19”	20090609 〜 20091225	2820 ㎡	国道９号 （鳥取西道路） 道路改築工事
まつばらこおく 松原小奥遺跡	とっとりけんとっとりしまつばら 鳥取県鳥取市松原 こおく 小奥 538、539	31201	1-0117 1-0118 1-0447 1-0448 1-0450	35° 29’ 35”	134° 08’ 10”	20090609 〜 20091106	1100 ㎡	国道９号 （鳥取西道路） 道路改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松原古墳群	古墳	古墳時代前期〜終末 中世以降	古墳　6基 横穴墓　1基 道　14条 平坦部　3基	土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓、石器、ガラス小玉	
松原小奥遺跡	古墳 古墓	古墳時代後期 中世末〜現代	円墳　4基 古墓　176基 土坑　8基 道　4条	土師器、須恵器、埴輪、陶磁器、青銅製品、鉄製品、ガラス製品	

要約

松原古墳群においては、古墳時代前期〜終末期にかけて同一丘陵上における墓制の変遷を確認することができた。とくに南西斜面における横穴墓の調査は、因幡における貴重な事例となった。また、北側の谷を隔てた別丘陵上（松原小奥遺跡）では、埋葬施設などは確認できなかったが、周溝内から埴輪がまとまって出土した。同時期に併存していたにもかかわらず、丘陵によって埴輪の有無があり、葬制の違いが抽出できたことも大きな成果と言えよう。

また、中世末以降現代に至る 200 基ほどの墓を検出した。因幡地域において希少な調査事例であり、かつ、副葬品の少なさや、墓壙形態の一様性、棺内に稲藁を入れる習俗など、伯耆との葬制の違いが見られるなど、これまでにない成果があった。

鳥取県文化財調査報告書　20
一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県鳥取市

松原古墳群Ⅱ
松原小奥遺跡

発　行　2010年９月13日
編　集　財団法人　鳥取県教育文化財団
発行者　鳥取県教育委員会
〒680-8570　鳥取市東町１丁目271番地
電話（0857）26-7525
印　刷　勝美印刷株式会社